新 宮 城 下 町 遺 跡

－新宮市文化複合施設建設に伴う発掘調査報告書－

２０２１年３月

新宮市教育委員会
公益財団法人　和歌山県文化財センター

新宮城下町遺跡

－新宮市文化複合施設建設に伴う発掘調査報告書－

２０２１年３月

新宮市教育委員会
公益財団法人　和歌山県文化財センター

調査地遠景（東上空から）

遺構 201 近世の石垣（北東から）

遺構 634 竪穴建物（北東から）

遺構 760 焼失した地下式倉庫（北から）

遺構 300 石積みの地下式倉庫（北から）

古瀬戸集合写真（室町時代）

中国製四耳壺（鎌倉時代）

縄文土器（中・後期）

序

新宮市は、和歌山県・三重県・奈良県の県境が接する紀伊半島南端近くにあります。山・川・海の豊かな自然に恵まれた地で、巨岩や川、樹木などの自然物を対象とした信仰がなされ、熊野三山を中心とした霊場が形成されています。中世には上皇などによる熊野詣が行われるなど、熊野信仰は隆盛を極めました。市内には、熊野信仰に関係する文化財が豊富に残されており、熊野速玉大社の境内地などは、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されています。

新宮城下町遺跡は、熊野川の河口部の川沿いに位置しています。この場所は、熊野速玉大社とも近く、阿須賀神社へと向かう参詣道沿いに位置することから要衝の地でもありました。

新宮市では、文化複合施設の建設に伴い、数次にわたり発掘調査を実施しました。調査では、縄文時代から近代にかけての遺構や遺物が見つかっており、新宮の歴史を今に伝えてくれています。なかでも中世の遺構は、地下式倉庫などが数多く見つかっており、その内容から当地には湊があったと考えております。また、日本各地の陶磁器や中国製の磁器などが出土しており、太平洋沿岸の物流の拠点であったことがうかがえます。

本書は、実施した発掘調査のうち、第２次発掘調査の成果を主としてとりまとめたものです。本書が、熊野信仰を中心に発展した新宮の歴史を知る上でその一助となり、今後のさらなる調査研究などに活用されることを祈念いたします。

最後となりましたが、発掘調査と本書の作成にあたり、ご指導とご協力を賜りました関係各位の皆様方に心から感謝を申し上げます。

令和３年３月

新宮市教育委員会

教育長　速　水　盛　康

例　言

１．本書は、新宮市下本町に所在する新宮城下町遺跡の発掘調査報告書である。

２．調査は、新宮市文化複合施設建設に伴うもので、平成 27 ～ 28 年度に第１次、平成 30 年度に第２次発掘調査を実施し、平成 28 年度～令和２年度にかけ出土遺物等整理業務を実施した。

３．発掘調査及び出土遺物等整理は、新宮市の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、公益財団法人和歌山県文化財センター（以下、「当センター」とする）が実施した。

４．発掘調査・出土遺物等整理の調査組織は下記の通りである。

≪新宮市教育委員会文化振興課≫

	【平成 27・28 年度】	【平成 29 年度】	【平成 30 年度】	【令和元・２年度】
教育長	楠本　秀一	楠本　秀一	楠本　秀一（12 月まで） 速水　盛康（12 月から）	速水　盛康
教育部長	片山　道弘	片山　道弘	片山　道弘	平見　仁郎
課長	畑尻　賢三	須﨑　誠久	福本　良英	福本　良英
文化財係長	南　由起	南　由起	南　由起	南　由起
文化財係主任		小林　高太	小林　高太	小林　高太
文化財係主事	小林　高太			

≪公益財団法人和歌山県文化財センター≫

	【平成 27 年度】	【平成 28 年度】	【平成 29 年度】	【平成 30 年度】	【令和元・２年度】
事務局長	米田　良博	南　正人	南　正人	井上　挙宏	井上　挙宏
事務局次長					立花　佳樹（令和２年度）
埋蔵文化財課長	土井　孝之	土井　孝之	藤井　幸司	丹野　拓	丹野　拓
発掘調査担当	川崎　雅史	川崎　雅史		村田　弘	
出土遺物等整理担当			佐伯　和也		村田　弘

５．本書の執筆･編集は村田がおこなった。ただし、第１章環境については、新宮市教育委員会･小林の協力を得た。また第６章のまとめについては、両者が協議･検討の上、村田が執筆した。

６．発掘調査及び出土遺物等整理で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は、当センターが、出土遺物は新宮市教育委員会が保管している。

７．発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、下記の方々から有益なご教示を得た。
伊藤裕偉（三重県教育委員会）　鋤柄俊夫（同志社大学教授）　中村貞次（元紀伊風土記の丘館長）
藤澤良祐（愛知学院大学教授）　綿貫友子（神戸大学教授）　黒崎　直（富山大学名誉教授）
北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所名誉所長）　時枝　務（立正大学教授）
鈴木久男（京都産業大学教授）　松尾信裕（元大阪城天守閣館長）
阪本敏行（和歌山地方史研究会会員）　山本殖生（新宮市文化財保護審議会委員）
坂本亮太（和歌山県立博物館）
（順不同、敬称略）

凡　例

１．発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006．４）に準拠して行った。

２．調査ならびに本書で使用した座標値は、平面直角座標系（世界測地系）第Ⅵ系のもので、値はｍ単位を使用し、図面に示した北方位は座標北、標高は東京湾標準潮位（T.P.+）の数値である。

３．土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」（2010 年版）に準じ、土質は調査担当者の任意の判断で行っている。

４．調査区名・遺構番号は、基本的に発掘調査時のものを踏襲する。遺構番号は１からの通し番号を記して表示している。又、第１次発掘調査及び確認調査で検出した遺構については遺構 1-28（第１次調査－遺構番号）、遺構 1-1-28（確認調査（１）－１トレンチ－遺構番号）である。

５．遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。

６．調査で使用した調査コードは、第１次発掘調査 15-43・007.043（2015 年度－新宮市・新宮城跡、新宮城下町遺跡）、第２次発掘調査 17-43・043（2017 年度－新宮市・新宮城下町遺跡）で、記録資料はこのコードを用いて管理している。

７．本報告書では、唐津焼、備前焼、常滑焼などの国産陶器については「焼」を省略し、唐津、備前、常滑等と標記している。

８．中世の国産陶器のうち備前については間壁編年、常滑については中野編年、瀬戸については藤澤編年にそれぞれ準拠して記載している。

本文目次

巻頭図版
序１・序２・例言・凡例
第１章　環境 …… 1
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 2
１．原始時代（縄文時代～古墳時代） …… 2
２．中世（鎌倉時代～室町時代） …… 3
３．近世（江戸時代） …… 4
第２章　経緯と経過 …… 5
第１節　調査の経緯 …… 5
第２節　発掘調査 …… 6
第３節　出土遺物等資料の整理 …… 6
１．出土遺物の応急整理 …… 6
２．出土遺物等整理業務 …… 7
３．金属製品の保存処理及び炭化材の樹種同定等 …… 7
第４節　調査委員会等 …… 8
第５節　普及活動 …… 9
１．現地説明会 …… 9
２．現地公開等 …… 9
第３章　既往の調査 …… 10
第４章　調査方法 …… 15
第１節　基準点・水準点測量 …… 15
第２節　地区割り …… 15
第３節　写真撮影・実測 …… 16
第４節　航空写真撮影・３次元写真測量及びモデル作成 …… 16
第５節　基本層位と遺構面 …… 17
第５章　調査の成果 …… 18
第１節　調査概要 …… 18
第２節　第１遺構面の遺構と遺物 …… 18
第３節　第２遺構面の遺構と遺物 …… 46
１．竪穴建物 …… 52
２．大型土坑 …… 98
３．石垣及び階段 …… 117
４．掘立柱建物 …… 123
５．その他の遺構 …… 126
第４節　第３遺構面の遺構と遺物 …… 147

第６章　まとめ …… 152
第１節　遺跡全体としての消長 …… 152
第２節　新宮城下町遺跡における中世の時期区分 …… 153
第３節　遺跡内における中世遺物の時期別分布状況 …… 155
第４節　主要遺構の時期及び特性 …… 156
第５節　遺構からみた中世全体の変遷 …… 159
第６節　中世遺物の全体的傾向 …… 163
第７節　中世遺物の時期的傾向 …… 163
第８節　近隣の中世遺跡との比較 …… 166
第９節　新宮城下町遺跡と新宮域の歴史的事象 …… 170
遺物観察表（土器類）…… 176
遺物観察表（瓦）…… 200
遺物観察表（石器・石製品）…… 200
遺物観察表（金属製品・銭貨）…… 201
付章 …… 202
第１節　新宮城下町遺跡出土の炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定 …… 202
第２節　和歌山県新宮城下町遺跡出土金属製品成分分析調査 …… 207

挿図目次

図１　周辺の地形分類図（中世の地形で想定復元） …… 1
図２　周辺の遺跡 …… 2
図３　確認調査トレンチ位置図 …… 10
図４　第１次・第２次発掘調査及び確認調査（１）・（２）位置図 …… 12
図５　立会調査等位置図 …… 14
図６　新宮(丹鶴)城既往の発掘調査位置図 …… 14
図７　地区割り図 …… 15
図８　基本層序 …… 17
図９　幕末の絵図に書き入れた調査区 …… 18
図10　第１遺構面　遺構平面図 …… 19・20
図11　調査区南壁土層断面図 …… 21
図12　近世の包含層出土遺物 …… 22
図13　遺構199・201・202出土遺物 …… 24
図14　遺構199（竹矢町通り） …… 25・26
図15　遺構201・202 …… 27・28
図16　遺構39・27・166・41・5・134 …… 30
図17　遺構86・195・183・50・176 …… 32
図18　遺構148・84・82・76・40 …… 34
図19　遺構42・35・197 …… 36
図20　遺構８・57・47・37・確1-1-22・59・68 …… 38
図21　遺構640 …… 39
図22　遺構1-76・1-81・1-287・1-55・1-63・1-65 …… 40
図23　遺構52 …… 41
図24　遺構５・50・76・35・40・197・47・21・98・89・120・155・８・179・25出土遺物 …… 42
図25　遺構1-86・1-57・1-470・1-97・1-62・1-287 出土遺物 …… 43
図26　遺構205 …… 43
図27　遺構5000 …… 44
図28　第２遺構面　遺構平面図 …… 47・48
図29　中世の包含層出土遺物（１） …… 49
図30　中世の包含層出土遺物（２） …… 50
図31　中世の包含層出土遺物（３） …… 52
図32　遺構300及び建替変遷概略図 …… 53
図33　遺構300 …… 54
図34　遺構3140 …… 54
図35　遺構300・3140出土遺物 …… 55

図36　遺構414 …… 57
図37　遺構415 …… 58
図38　遺構414・415・1994出土遺物 …… 59
図39　遺構416 …… 60
図40　遺構592 …… 61
図41　遺構416・592・600・690出土遺物…… 62
図42　遺構600 …… 63
図43　遺構690 …… 64
図44　遺構760 …… 65
図45　遺構760出土遺物 …… 66
図46　遺構1200・1324 …… 67
図47　遺構1620 …… 69
図48　遺構1200・1324・1620出土遺物 …… 70
図49　遺構1-62 …… 71
図50　遺構1-62・1621出土遺物 …… 71
図51　遺構1621 …… 72
図52　遺構1700 …… 73
図53　遺構1700出土遺物 …… 73
図54　遺構4001及び建替変遷概略図 …… 74
図55　遺構4001 …… 75
図56　遺構4001出土遺物 …… 76
図57　遺構4003及び建替変遷概略図 …… 78
図58　遺構4003 …… 79
図59　遺構4004 …… 81
図60　遺構4009 …… 82
図61　遺構4005 …… 83
図62　遺構4003・4004・4009・4005出土遺物 …… 84
図63　遺構4031 …… 86
図64　遺構4031出土遺物（１） …… 88
図65　遺構4031出土遺物（２） …… 89
図66　遺構4027 …… 90
図67　遺構4027出土遺物 …… 92
図68　遺構4028 …… 93
図69　遺構4028出土遺物 …… 94
図70　遺構4019 …… 95
図71　遺構4019・4035出土遺物…… 96
図72　遺構4035 …… 97
図73　遺構3100 …… 97
図74　遺構1-801 …… 98
図75　遺構1-802 …… 98
図76　遺構1-801出土遺物 …… 99
図77　遺構1-802出土遺物 …… 100
図78　遺構1-855 …… 100
図79　遺構1-817 …… 101
図80　遺構1-1004 …… 101
図81　遺構1-817・1-1004・1-855出土遺物 …… 102
図82　遺構1300…… 103
図83　遺構1487…… 103
図84　遺構1339…… 104
図85　遺構730 …… 104
図86　遺構1300・1487・1339・730出土遺物 …… 105
図87　遺構994 …… 105
図88　遺構1729 …… 106
図89　遺構899 …… 106
図90　遺構994・899出土遺物 …… 107
図91　遺構900 …… 107
図92　遺構715 …… 108
図93　遺構1768 …… 108
図94　遺構900・715・1768出土遺物 …… 109
図95　遺構427 …… 109
図96　遺構661 …… 110
図97　遺構654 …… 110
図98　遺構427・661・654出土遺物 …… 111
図99　遺構863 …… 112
図100　遺構867 …… 112
図101　遺構688 …… 113
図102　遺構570 …… 113
図103　遺構863・867・688・570出土遺物 …… 114
図104　遺構12 …… 115
図105　遺構12出土遺物 …… 116
図106　遺構4034・4002・4030出土遺物 …… 118
図107　遺構4000・4002・4007・4034・4030 …… 119・120
図108　遺構4000出土遺物 …… 121
図109　遺構4007 …… 122
図110　掘立柱建物１ …… 124
図111　掘立柱建物２ …… 125
図112　掘立柱建物１・２出土遺物 …… 125
図113　掘立柱建物３ …… 125
図114　遺構675 …… 126
図115　遺構675・438出土遺物 …… 127
図116　遺構438 …… 127
図117　遺構1-54 …… 128
図118　遺構1600 …… 128
図119　遺構34 …… 129
図120　遺構1460 …… 129
図121　遺構1-54・34・1600・1460出土遺物 …… 129

図122　遺構1455 …… 130
図123　遺構465 …… 130
図124　遺構1455・465出土遺物 …… 131
図125　遺構85 …… 132
図126　遺構85出土遺物 …… 132
図127　遺構1330・172・691・87 …… 133
図128　遺構1330・691出土遺物 …… 134
図129　遺構172・87出土遺物 …… 135
図130　遺構10 …… 136
図131　遺構659 …… 136
図132　遺構3075 …… 136
図133　遺構10・659出土遺物 …… 137
図134　遺構3075出土遺物 …… 138
図135　遺構634 …… 139
図136　遺構1942 …… 140
図137　遺構1942出土遺物 …… 140
図138　その他遺構の出土遺物1（１）…… 142
図139　その他遺構の出土遺物1（２）…… 143
図140　その他遺構の出土遺物1（３）…… 144
図141　その他遺構の出土遺物2（１）…… 144
図142　その他遺構の出土遺物2（２）…… 145
図143　その他遺構の出土遺物2（３）…… 146
図144　第３遺構面遺構平面図 …… 147
図145　縄文時代包含層出土遺物 …… 148
図146　遺構1-J001・1-J002・1-J006・1-J005・1-J015 … 149
図147　遺構1-J009 …… 150
図148　遺構1-J018 …… 150
図149　遺構1-J001・1-J002・1-J003・1-J006・1-J009・
3001・429出土遺物 …… 150
図150　12・13世紀の白磁分布状況 …… 155
図151　13世紀の瓦器分布状況 …… 155
図152　14・15世紀の青磁分布状況 …… 155
図153　15世紀の白磁分布状況 …… 155
図154　時期別主要遺構配置図 …… 161・162

図版目次

巻頭図版１　１．調査地遠景（東上空から）
巻頭図版２　１．遺構201近世の石垣（北東から）
２．遺構634竪穴建物（北東から）
巻頭図版３　１．遺構760焼失した地下式倉庫（北から）
２．遺構300石積みの地下式倉庫（北から）
巻頭図版４　１．古瀬戸集合写真（室町時代）
２．中国製耳四壺（鎌倉時代）
３．縄文土器（中・後期）
図版１　１．調査区遠景（東から）
２．調査区遠景（南から）
３．第１遺構面全景（上空から）
図版２　１．第１遺構面全景（東から）
２．第１遺構面全景（南東から）
３．第１遺構面全景（北東から）
図版３　１．第１遺構面南側全景（東から）
２．第１遺構面調査区北西部（南東から）
３．第１遺構面北西部（東から）
図版４　１．遺構199（竹矢町通）北側検出状況（上空から）
２．遺構199（竹矢町通）南側検出状況（南から）
３．遺構199（竹矢町通）南側検出状況（東から）
図版５　１．遺構199（竹矢町通）横断面（南から）
２．遺構199（竹矢町通）と石垣（南から）
３．遺構199（竹矢町通）初期路面（北から）
図版６　１．遺構201（屋敷境の石垣）全景（北東から）
２．遺構201（屋敷境の石垣）細部（北東から）
３．遺構201 段割部①（北東から）
４．遺構201 段割部②（北西から）
図版７　１．遺構202 瓦列検出状況（北から）
２．遺構39 完掘状況（西から）
３．遺構27 完掘状況（東から）
図版８　１．遺構166 完掘状況（東から）
２．遺構41 断面（西から）
３．遺構５ 断面（東から）
図版９　１．遺構134 断面（西から）
２．遺構183 断面（南から）
３．遺構176 検出状況（西から）
図版 10　１．遺構82 断面（西から）
２．遺構42 断面（北西から）
３．遺構52 全景（上空から）
図版 11　１．遺構5000 全景（南から）
２．遺構5000 昇降部（南から）
３．遺構5000 レンガ敷き状況　（北西から）
図版 12　１．遺構205 全景（東から）
２．遺構205 全景（北から）
３．遺構205 断割状況（西から）

図版 13　1．①区第２遺構面全景(上空から)
2．①区第２遺構面中央部(上空から)
3．①区第２遺構面北東部(上空から)
図版 14　1．①区第２遺構面北西部(上空から)
2．①区第２遺構面南東部(上空から)
3．①区第２遺構面南西部(上空から)
図版 15　1．②区第２遺構面全景(西から)
2．②区第２遺構面西半部(東から)
図版 16　1．遺構300 Ａ・Ｂ・Ｃ室全景(南から)
2．遺構300 Ａ室貼壁・貼床状況(南から)
3．遺構300 Ａ室西壁(東から)
図版 17　1．遺構300 Ａ室東壁(西から)
2．遺構300 Ｃ室完掘状況(南から)
3．遺構300 Ｃ室内　遺構 3140 銭出土状況(南から)
図版 18　1．遺構414 全景(北西から)
2．遺構414 石積状況(北東から)
3．遺構416 石列状況(南から)
図版 19　1．遺構690 全景(南から)
2．遺構760 焼土面検出状況(北から)
3．遺構760 炭化材検出状況(北から)
図版 20　1．遺構600 全景(東から)
2．遺構1200・1324 全景(南西から)
3．遺構1620 全景(北から)
図版 21　1．遺構１-62 全景(南東から)
2．遺構1700 全景(南西から)
3．遺構1700 北側石積状況(南から)
図版 22　1．遺構4001 全景(西から)
2．遺構4001 Ａ・Ｂ室(南から)
3．遺構4001 西壁石積状況(東から)
図版 23　1．遺構4001 Ａ室北壁石積状況(南から)
2．遺構4001 Ａ・Ｂ室全景(南から)
3．遺構4001 Ａ・Ｂ室全景(北から)
図版 24　1．遺構4003 全景(西から)
2．遺構4003 全景(南西から)
3．遺構4003 Ａ室南側石積状況(北から)
図版 25　1．遺構4003 Ａ室北・東壁石積状況(西から)
2．遺構4004 Ａ室全景(南東から)
3．遺構4004 Ａ室東壁石積状況(西から)
図版 26　1．遺構4009 Ａ室北・B室全景(北から)
2．遺構4009 Ａ室床面検出状況(南から)
3．遺構4005 Ａ室全景(南から)
図版 27　1．遺構4005 床面検出状況(南から)
2．遺構4031 炭化材検出状況(南から)
3．遺構4031 土器出土状況(南から)
図版 28　1．遺構4031 完掘状況(南から)
2．遺構4027 全景(北から)
3．遺構4027 Ｂ室石積状況(北から)
図版 29　1．遺構4028 全景(北から)
2．遺構4028 昇降部石積状況(北から)
3．遺構4019 全景(南から)
図版 30　1．遺構4035 全景(西から)
2．遺構3100 全景(南から)
3．遺構3100 断面全景(北西から)
図版 31　1．遺構1339 (北から)
2．遺構994 断面(北から)
3．遺構1729 断面(北から)
図版 32　1．遺構900 断面(北から)
2．遺構715 断面(南から)
3．遺構1768 断面(南から)
図版 33　1．遺構427 断面(東から)
2．遺構661 断面(北から)
3．遺構654 断面(東から)
図版 34　1．遺構863 断面(北から)
2．遺構867 断面(西から)
3．遺構570 断面(東から)
図版 35　1．遺構4034 (北西から)
2．遺構4002 (北から)
3．遺構4030 (北から)
図版 36　1．遺構4000 (北西から)
2．遺構4000 (北から)
3．遺構4000 (南から)
図版 37　1．掘立柱建物１(北から)
2．掘立柱建物１北辺部(北から)
3．掘立柱建物１東側柱穴(北から)
4．掘立柱建物１西側柱穴(北から)
図版 38　1．掘立柱建物２ (南から)
2．掘立柱建物３ (北から)
3．遺構1034 (掘立柱建物３内)
礎石検出状況 (北から)
4．遺物1777 (掘立柱建物３内)
礎石検出状況 (南から)
図版 39　1．遺構438 セクション断面(西から)
2．遺構1-54 (南東から)
3．遺構85 土器出土状況(北から)
図版 40　1．遺構3075 土器出土状況(東から)
2．遺構634 焼土・炭検出状況(南東から)
3．遺構634 全景(南東から)
図版 41　1．第３遺構面縄文遺構全景(南から)
2．遺構 1-J001 (北から)
3．遺構 1-J006 (南西から)
図版 42～66　出土遺物

表目次

表１　発掘調査・出土遺物等整理業務工程表 …… 5
表２　新宮城下町遺跡消長概念表 …… 152
表３　大型土坑一覧表 …… 156
表４　時期別該当数 …… 157
表５　タイプ別該当数 …… 157
表６　竪穴建物（地下式倉庫）一覧表 …… 158
表７　竪穴建物（地下式倉庫）タイプ別消長概念図 …… 159
表８　中世遺物組成表 …… 163
表９　大型土坑における瀬戸の比率 …… 164
表10　地下式倉庫における瀬戸の比率 …… 164
表11　主要陶器及び輸入陶磁器の時期別比率 …… 165
表12　新宮城下町遺跡出土遺物編年表 …… 167･168
表13　藤倉城跡・川関遺跡日常雑器変遷表 …… 169

写真目次

写真１　神倉山銅鐸 …… 2
写真２　瀬戸瓶子（速玉大社蔵） …… 3
写真３　阿須賀神社御正体 …… 3
写真４　速玉大社境内 …… 3
写真５　新宮城水ノ手 …… 4
写真６　紀伊国新宮城之図（国立公文書館蔵） …… 4
写真７　発掘作業風景 …… 6
写真８　②区校舎基礎コンクリート撤去作業風景 …… 6
写真９　応急整理・洗浄作業 …… 6
写真10　復元作業 …… 7
写真11　遺物実測作業 …… 7
写真12　拓本作業 …… 7
写真13　組版作業 …… 7
写真14　調査委員会　指導風景① …… 8
写真15　調査委員会　指導風景② …… 8
写真16　調査委員会　指導風景③ …… 8
写真17　新宮市文化財保護委員会　視察風景 …… 8
写真18　第１回現地説明会 …… 9
写真19　第２回現地説明会 …… 9
写真20　遺構実測作業 …… 16
写真21　ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影風景 … 16
写真22　東壁入口部の閉塞状況 …… 45

第１章　環　　境

第１節　地理的環境

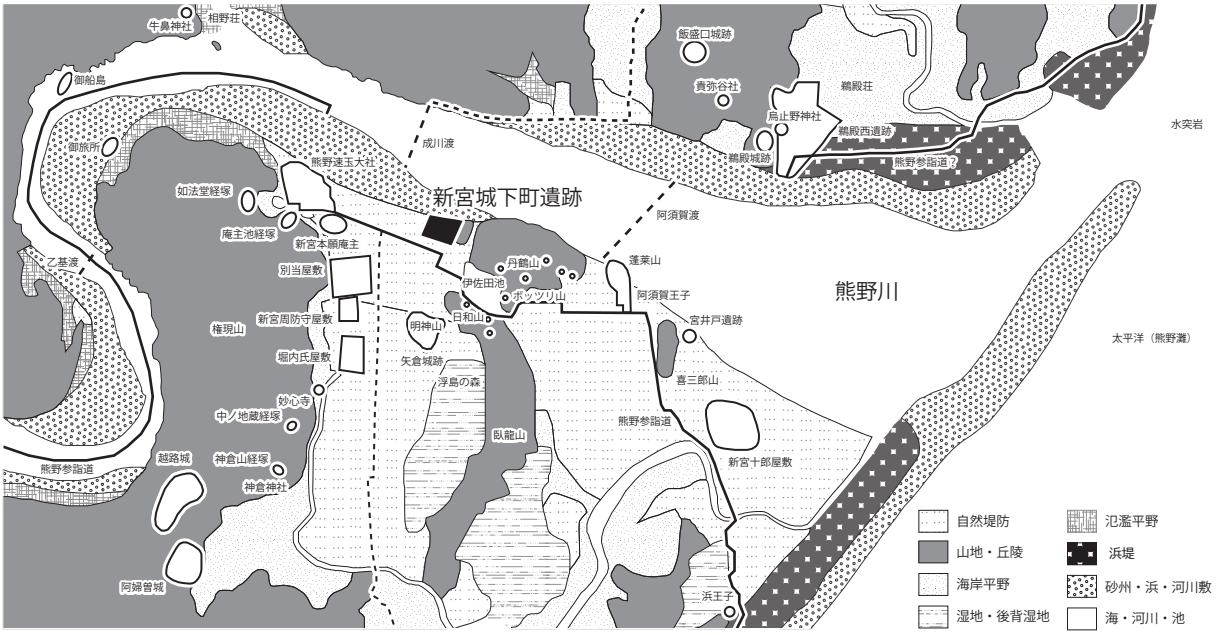
新宮市は紀伊半島の最南端近くに位置し、和歌山県の南東端に所在している。面積は約 255 k㎡で、市域は南東で太平洋に臨み、南で東牟婁郡那智勝浦町・古座川町、西で田辺市、北で奈良県十津川村、北東では熊野川を挟んで三重県熊野市・紀宝町に接している。

新宮城下町遺跡は、その新宮市の熊野川河口部に近い右岸に位置している。熊野川は紀伊半島の山懐大峯山系に源を発し、奈良県、三重県、和歌山県の三県をめぐって太平洋に注いでいる。河口付近に大きな沖積地を形成せず、山間部を抜けてそのまま海に注ぎ、新宮市街地はこの河口部付近のわずかな平地に形成されている。新宮市街地の地形を全体的にみれば、北側が高く、南側に向かって低くなっている。

新宮城下町遺跡は、河口から 1.2㎞ほど遡上した位置にあり、熊野川が形成した自然堤防上に立地し、付近の標高は約９ｍを測る。

遺跡のすぐ東側には、江戸時代に新宮城が築かれた丹鶴山があり、かつてはこの丹鶴山の南には日和山、臥龍山という低丘陵が横たわり、市街地を東西に分けていた。市街地の西方には千穂ヶ峰を主峰とする権現山がそびえており、その北東隅に熊野速玉大社、南東端に神倉神社が鎮座している。

現在の市街地の大部分は、今から約 6000 年以前の縄文海進時には入り江となっており、前述した丹鶴山や阿須賀神社の所在する蓬莱山さらに明神山・日和山などが島状に点在していたものと思われる。その後、熊野川が現在の流れになって以降は、熊野川河口から南西方向へ王子ヶ浜にわたって浜堤が発達し、川の右岸には自然堤防が発達したことから、その内側が後背湿地となった。市街地の中心部に残る国指定天然記念物「浮島の森」はその名残と言えよう。



＊新宮市提供資料に加筆

図１　周辺の地形分類図（中世の地形を想定復元）

第２節　歴史的環境

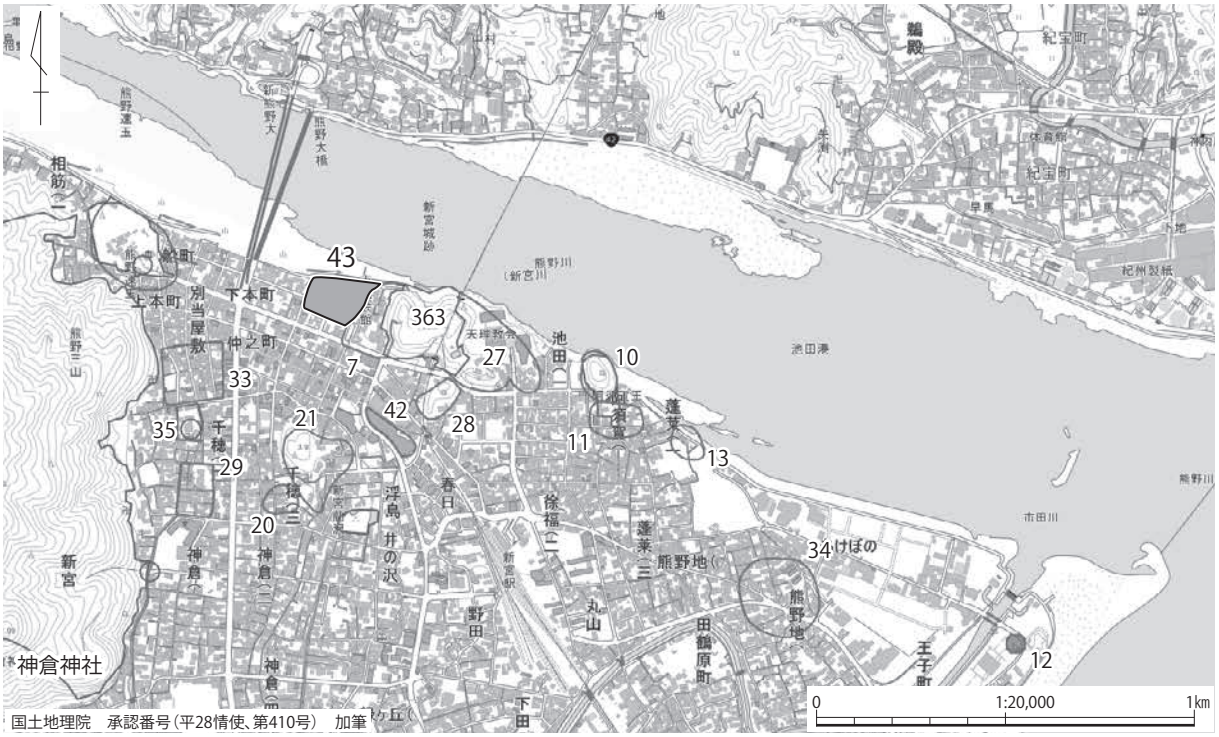
１．原始時代（縄文時代～古墳時代）

縄文時代から古墳時代にかけての遺跡の大部分は、熊野川右岸に沿う自然堤防上の微高地に立地している。縄文時代の遺跡としては、速玉大社境内遺跡が知られる。古くは昭和 33 年の神宝館の建設工事に際して、縄文時代中期の土器が出土している。以後境内各所で行われた工事や植林などに際して、縄文時代中期から晩期に至る時期の土器や打製石斧や石鏃などの出土が確認されている。このうち中期の土器については、東日本に分布の中心をもつものが何点か確認されている。また、権現山北北西端に位置する速玉大社御旅所遺跡においても昭和 35 年に縄文土器の小片が採取されている。これらの遺跡ではいままでのところ遺物の確認のみにとどまっており、遺構については検出されていない。

弥生時代・古墳時代の遺跡としては、阿須賀神社遺跡が挙げられる。昭和 28 年以降、5 次にわたり発掘調査が行われ竪穴建物や掘立柱建物の遺構が検出され、これらに伴う弥生時代後期から古墳時代にかけての土器や石器が出土している。また、祭祀に関係すると思われるミニチュア土器や滑石製臼玉などが出土しており、蓬莱山信仰の起源を窺うことができる。この近くの宮井戸や日和山周辺でも弥生土器が採集されている。

そのほか昭和 31 年には、神倉神社境内のゴトビキ岩の陰から銅鐸の破片が出土している。この銅鐸については近畿式 6 区袈裟襷文であり、制作時期は弥生時代後期と推定されている。

写真１　神倉山銅鐸



国土地理院　承認番号（平28情使、第410号）　加筆

43　新宮城下町遺跡　　2　速玉大社境内遺跡　　7　新宮城跡　　10　蓬莱山祭祀遺跡　　11　阿須賀神社遺跡
12　徳本上人の碑　　13　宮井戸遺跡　　20　新宮遺跡　　21　矢倉城跡　　27　新宮Ⅱ遺跡
28　ボッツリ山遺跡　　29　堀内氏屋敷跡　　33　別当屋敷跡　　34　新宮十郎屋敷跡　　35　新宮周防守屋敷跡
42　日和山遺跡　　363　新宮城跡附水野家墓所

図２　周辺の遺跡

２．中　世（鎌倉時代～室町時代）

平安時代後期から鎌倉時代にかけて、熊野三山への参詣（熊野詣）は上皇・貴族により隆盛を極める。それに伴い市内には熊野信仰に関係する遺跡が数多く残されており、権現山では多くの経塚が確認されている。妙法堂経塚からは、平安時代末期の陶製外容器のほか金銅製経筒、室町時代の礫石経などが出土している。庵主池経塚からは平安時代末期から鎌倉時代にかけての金銅製懸仏、南北朝期の銅製納札、室町時代の土製地蔵菩薩像などが出土している。

阿須賀神社背後の蓬莱山には200点以上にのぼる平安時代末期から室町時代にかけての御正体が発見されている。本尊は熊野十二所権現の本地仏が表現されており、その半数近くは阿須賀神社の本地仏大威徳明王である。このような遺跡からも熊野に対する篤い信仰の様子が窺われる。

写真２　瀬戸瓶子（速玉大社蔵）

新宮城下町遺跡のある丹鶴山一帯は、熊野三山の一つである熊野速玉大社から阿須賀神社（阿須賀王子跡）への参詣道沿いに位置し、古くからの要衝の地にあたる。近世の編纂書である「熊野年代記」によれば、付近には平安時代後半頃に熊野別当が別邸を築き、平安時代末期頃には別当屋敷が移されたともある。その頃に丹鶴山（丹鶴城）の名称の由来にもなっている「丹鶴姫（鳥居禅尼）」が東仙寺を建てたとの記録も残り、同じ頃に丹鶴山南麓には香林寺（宗応寺）があったとされている。また、丹鶴山周辺からは、工事に伴い瀬戸や常滑といった東海地方の陶器類が多数出土しており、中世墓地に伴う遺物と考えられている。

写真３　阿須賀神社御正体

場所を移した現在の東仙寺や香林寺に伝わる五輪塔や宝篋印塔などの供養塔もこれらの墓地に係るものと思われる。

鎌倉時代を過ぎると、熊野別当の勢力が衰退するが、熊野三山の上位の役僧である宮崎氏が東仙寺を修復し、新宮の二ノ丸である現在の正明保育園付近を居館としたとある。

戦国時代になると堀内氏が台頭し、戦国時代末には丹鶴山に城を築き、麓に城下町形成を行ったとの説もある。また、市街地には新宮十郎屋敷跡（熊野地付近）や新宮周防守屋敷跡（本廣寺付近）、堀内氏屋敷跡（全龍寺付近）等といった中世に新宮を中心に活躍した有力者達の屋敷跡の推定地が遺跡とされており、この時期の新宮の町並みを考える手掛かりとなっている。

写真４　速玉大社境内

３．近　世（江戸時代）

江戸時代には新宮城が築かれ、周辺が城下町として整備された。江戸時代に描かれた絵図が残されており、当時の新宮城や城下町の様子を知ることができ、城下町は江戸時代初期には幕末に近い町割りとなっていたことを窺うことができる。

新宮城については、関ヶ原の戦い後、紀州藩主となった浅野幸長の重臣であった浅野忠吉が慶長６年（1601）に新宮城の築城を開始した。元和元年（1615）に一国一城令により廃城となるが、元和４年（1618）に再び築城が認められる。しかし元和５年（1619）に幸長が広島に転封になるのに伴い、忠吉は備後三原城へ移る。その後紀州藩主には徳川頼宣がなり、新宮城には付家老である水野重仲が入り築城を続け、寛永10年（1633）頃に完成したとされる。

写真５　新宮城水ノ手

丹鶴山上部に天守台、本丸、出丸、鐘ノ丸、松ノ丸を配置しており、天守台からは太平洋を一望できる。新宮城下町遺跡に面した西側山麓には、二ノ丸と大手門が、熊野川沿いの北側山麓には水ノ手郭が築かれている。水ノ手郭においては、発掘調査により炭納屋が19棟建てられていたことが確認されている。城東側の池田には材木問屋、炭問屋が置かれ、熊野川流域から木材、木炭が集積された。これらは、廻船業者により江戸や大阪に運ばれ売買されていた。また、全国から米や塩、衣類といった日用品等も廻船により新宮へと運ばれ、さらに熊野川上流・中流に船運で送られていたと推測される。丹鶴山周辺を中心とした熊野川河口部は、熊野川舟運と海上輸送の中継点、流通拠点であり、新宮城下のみならず、山間部の人々の生活も支えていた。

写真６　紀伊国新宮城之図（国立公文書館蔵）

第２章　経緯と経過

第１節　調査の経緯

新宮市は、新宮城跡西側に位置する旧丹鶴小学校・幼稚園の敷地に文化複合施設を建設することになり、開発に先立って試掘調査が実施されることとなった。建設予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である新宮城跡の範囲から少し外れるものの、近世に描かれた絵図から武家屋敷であったことがわかっている箇所である。このことから、記録保存目的の発掘調査の要否及び記録保存を要する範囲を判断するための試掘調査が必要となった。

この試掘調査（旧丹鶴小学校グランド試掘調査）は平成 27 年夏に実施され、上面で江戸時代の遺構が確認されるとともに下層においても中世の遺構が広く展開することが明らかになり、全面的な本調査が必要と判断された。また、この試掘調査の結果を受けて、開発予定地付近が「新宮城下町遺跡」として新規に認定されることになった。

新宮市は旧丹鶴小学校の運動場を中心とした区域に文化複合施設を建設することとし、このための記録保存として第１次発掘調査が平成 28 年２月から同年６月にかけて実施された。その結果、想定されていた以上に遺構の残りがよく、かつ重要な遺構が認められたことから、和歌山県教育委員会（以下、「県教育委員会」とする）と協議し、施設設計の見直しにより遺跡の現状保存を検討することとなった。

このため新宮市は敷地内全体の遺構の有無や残存状況の把握を目的とした確認調査（新宮城下町遺跡確認調査 (1)、(2)、(3)）を平成 28 年９月から翌 29 年 11 月の間に数次に分けて実施した。その結果、敷地内の西側、とりわけ旧丹鶴小学校の校舎が建てられていた箇所は、校舎の基礎等によってかなり撹乱を受けていることが判明した。

この調査結果を受け、新宮市は県教育委員会と協議を行い、新たな建設予定地として校舎跡地を含む敷地の西側を施設の建設箇所とした。これを受け、記録保存のための発掘調査を実施したのが第２次発掘調査に該当する。調査期間は平成 30 年４月から翌 31 年３月であった。

なお概述した第１次調査並びに確認調査等については、次章の既往の調査の中で詳述する。

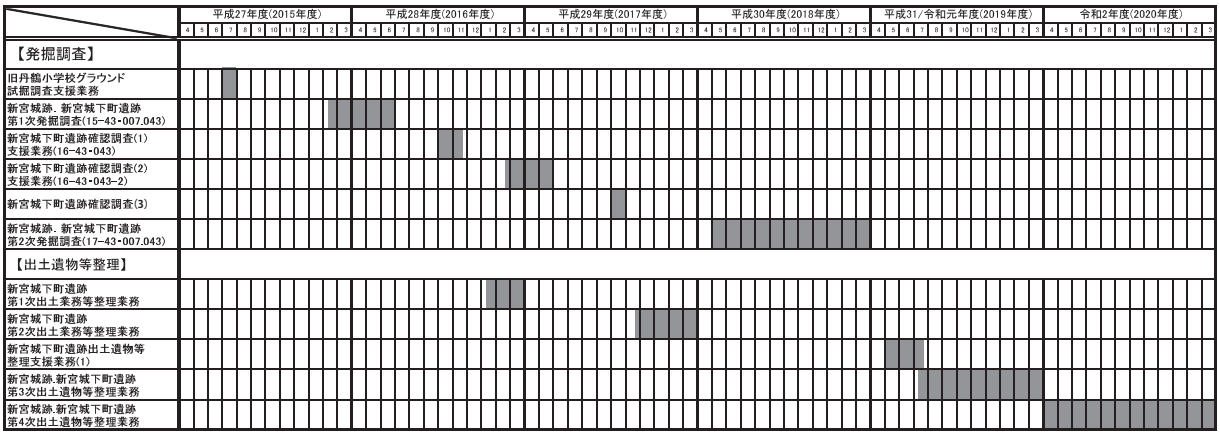


表１　発掘調査・出土遺物等整理業務工程表

第２節　発掘調査

本調査は「新宮市文化複合施設建設に伴う新宮城下町遺跡第２次発掘調査業務」として新宮市より委託を受けて実施した。調査面積は3,461㎡で、業務期間は平成30年３月６日から平成31年３月31日である。このうち発掘調査は工事請負方式で大富建設株式会社に委託し、４月25日から翌年３月28日まで約11ヶ月にわたって県教育委員会の指導を受けて実施した。また、発掘調査に伴う航空写真撮影と写真測量及び基準点測量は株式会社共和に業務委託した。重要遺構である地下式倉庫や昇降施設である石段については、新宮市との協議の結果３次元写真測量に付すこととなり、その業務を株式会社ＮＡＣ総建に委託し実施した。さらに重要遺構のうち焼失した地下式倉庫については建物の構造を知る上で貴重な遺構であり、将来的な活用をはかるためにも遺構の立体剝ぎ取りをすることになり、この作業については株式会社スタジオ三十三に業務委託して実施している。

写真７　発掘作業風景

写真８　②区校舎基礎コンクリート撤去作業風景

調査区は60ｍ弱の方形に近い形状であるが、このうち北辺と西辺部はＬ字状に鉄筋３階建ての校舎が存在していた場所で、すでに校舎は撤去されていたが基礎部が残された状態であった。このため調査においては、先行して運動場部分に着手し、併行して基礎のコンクリート撤去を行った後、この部分の調査を行っている。なお、調査区の北側は熊野川に向かってなだらかに下っていく箇所に当たっており、江戸時代の屋敷区画も一段低くなっていた。調査では先行して実施した南側の高い部分を①区、北側の低い部分を②区と仮称している。

第３節　出土遺物等資料の整理

１．出土遺物の応急整理

調査で出土した遺物については、時期決定を行い調査方法の判断資料とするため、調査現場の監督員詰所において洗浄作業を実施した。作業は土器類・瓦類・石製品について行い、金属製品については応急的にハケなどにより付着した土を落とすに留めた。出土遺物量は収納コンテナにして202箱、このうち応急整理の段階で洗浄作業が終わったのは78箱であった。

写真９　応急整理・洗浄作業

２．出土遺物等整理業務

報告書作成に伴う出土遺物等整理業務は令和２年度及び３年度の２ヵ年に渡って実施した。対象遺物は第２次調査で出土した 202 箱と１次調査のうち記録保存対象 20 箱の合計 222 箱である。整理業務の初年度は遺物の洗浄・注記・登録・接合等の基礎的な作業を実施し、翌年度に遺物の実測・トレース・復元、遺構のトレース等の作業を行い、これらを元に組版して図版原稿を作成した。

現場で撮影した遺構写真等については、データの現像作業及び台帳作成作業を行い、報告書に掲載する遺物写真の撮影を行った後、主要な遺構写真とともに組版を行い、写真図版を作成した。また、遺物観察表を作成するとともに、一連の作業を踏まえて報告書本文の執筆を行い、令和３年３月に本書を刊行するに至った。

写真 10　復元作業

３．金属製品の保存処理及び炭化材の樹種同定等

金属製品については、全体に砂礫が錆とともに付着しており、形状は残っていたものの表面は錆化して腐食が進んでいる状況であった。このため金属製品のうち重要度が高く、処理の緊急性を要するもの 32 点について保存処理を行った。

保存処理は株式会社吉田生物研究所に委託し、基本的に形状を損なわないようクリーニングを行い、銅製品については BTA 処理で安定化を行い、鉄製品については脱塩処理で防錆処理を施した。

写真 11　遺物実測作業

また接合可能な破片は樹脂で接合し、樹脂部

写真 12　拓本作業

写真 13　組版作業

分には補彩をし、さらに外気を遮る目的で樹脂コーティングを施し、将来的な展示に耐えるようにした。

樹種同定及び年代測定については、一般社団法人　文化財科学研究センターに委託し、焼失したと考えられる地下式倉庫 760 及び地下式倉庫 4031 の炭化部材を用いて実施した。樹種同定については、試料を洗浄し異物を取り除いた後、木材の横断面、放射断面、接線断面の基本的三断面を作成し、落射顕微鏡による観察を行い、解剖学的形質及び現生標本との対比によって樹種の同定を行った。

年代測定は、放射性炭素年代測定法に拠る。酸－アルカリ－酸処理により試料から不純物を科学的に取り除き、超純粋で中性になるまで希釈し、乾燥させた。その後試料を燃焼させ二酸化炭素を発生させ、これを精製した後、加速器をベースとした専用装置で 14C の計数・濃度などを測定した。これらの成果については、別章で詳述する。

第４節　調査委員会等

現地での調査期間中、重要と思われる遺構や時期・産地等の判断をしかねる遺物についての知見を得るため、当該分野の専門家に現地指導を依頼し、適宜ご教示、指導を得た。

具体的には、近世の屋敷境を成す石垣について平成 30 年 7 月 23 日に石川県金沢城研究所名誉所長の北垣聰一郎氏の指導を得た。

また、地下式倉庫群等の川湊に係る遺構の評価について平成 30 年 12 月 14 日に神戸大学大学院経済研究科教授の綿貫友子、平成 30 年 12 月 17 日に富山大学名誉教授の黒崎直の二氏に調査現地にお越しいただき指導を得た。さらに上記の遺構も含めて、出土した遺物全般について平成 31 年 3 月 14 日に同志社大学文化情報学部教授の鋤柄俊夫氏にご指導いただいた。

そのほか新宮市の文化財保護委員会を平成 30 年 12 月 14 日に現地おいて開催し、遺構の状況や出土した遺物などを見ていただく機会をもった。

写真 14　調査委員会　指導風景①

写真 15　調査委員会　指導風景②

写真 16　調査委員会　指導風景③

写真 17　新宮市文化財保護委員会視察風景

第５節　普及活動

１．現地説明会

普及活動の一環として、発掘調査で得られた数々の成果を地元はじめ多くの方々に広く知っていただくために、上面遺構（主に近世）の掘削が終了した平成30年８月４日（土）に第１回目、下面遺構（主に中世）の掘削がほぼ終了した平成30年12月15日（土）に第２回目の現地説明会を開催した。当日は、遺構以外にも出土した遺物の展示コーナーを設け、各時代、各地域からもたらされた土器などを公開した。参加者は地元の住民のほか近隣市町村、県外からも多数を数え、第１回目が約130名、第２回目が約130名であった。

写真18　第１回現地説明会

写真19　第２回現地説明会

２．現地公開等

調査がほぼ完了した平成31年３月２日（土）に現地公開として、主に調査区北側で検出された地下式倉庫及び出土遺物を対象に行った。この参加者は約100名である。

そのほか平成30年12月15日（土）に「新宮城下町遺跡　子ども遺跡探検」と銘打って、小中学生を対象とした催し物を行い、発掘調査現地の見学だけではなく、出土遺物に直接触れる体験も行った。この催事への参加者は保護者を含めて約50名であった。

なお上記現地説明会も含めて、これらの催しは新宮市教育委員会と共催で行った。

第３章　既往の調査

新宮城下町遺跡については、概述してきたように新宮市が文化複合施設を建設するにあたって確認調査を実施した結果、新たに認定された遺跡である。この確認調査をはじめ第２次発掘調査に至るまでに２回の確認調査と当初の建設予定地を対象とした第１次発掘調査が実施されている。また、周辺では道路工事等に伴う立会調査も実施されている。そのほか東側に隣接する国史跡の新宮城跡においてもこれまで数次にわたる発掘調査が実施されてきた。以下、これらの調査の概要を記すことにしたい。

【旧丹鶴小学校グランド試掘調査】

平成 27 年７月から８月にかけて新宮市が実施し、当センターが支援業務として行ったもので、新宮城下町遺跡としての認定の端緒となった試掘調査に該当する。図３に示したように小学校のグランド部分を中心に 11 箇所のトレンチを設定し調査を行った。

個々のトレンチの成果は省くが、この試掘調査の結果、グランド部においては、遺構面が２面存在することが判明した。このうち上層は江戸時代後期以降の遺構面で、武家屋敷地の境となる石積み遺構のほか幅５ｍの硬化した面をもつ道路跡と思われる遺構などを検出した。そのほかこの試掘調査では、グランドの西側は旧校舎が建っていたため撹乱が多く遺構の残りが悪い状況だが、東側では遺構の残りが良い状況が想定されるとの見解を得ている。

なお、この 11 トレンチのうち１～３トレンチは後述する第１次調査の範囲に、４～８トレンチについては第２次発掘調査の範囲におさまっている。

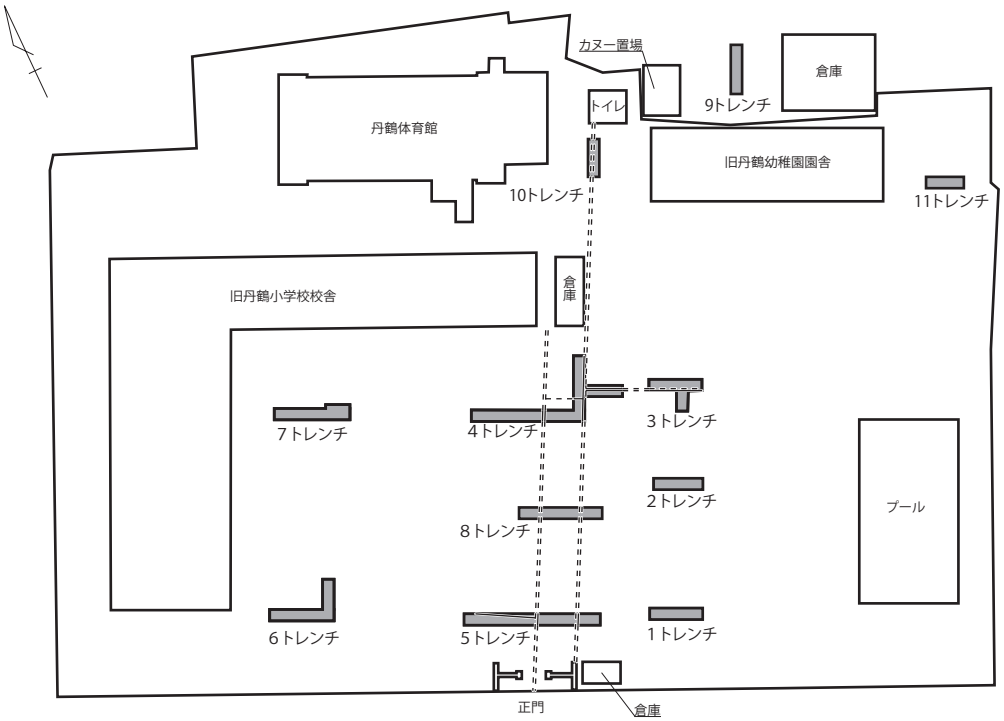


図３　確認調査トレンチ位置図

【新宮城跡、新宮城下町遺跡第１次発掘調査】

新宮市文化複合施設建設に伴う発掘調査であり、新宮市から委託を受けて当センターが平成28年２月から同年６月まで1,171㎡を対象として実施した。幕末頃に描かれたとされる城下町絵図では、「河原町通り」と呼ばれる道を挟んで、４軒の武家屋敷地にかかる地区に相当する場所と考えられる。この調査では、第１遺構面で江戸時代の道路や石垣などを検出した。このうち道路遺構は幅5.2ｍを測り、路面には１～５㎝大の円礫を敷いて叩き締められていた。道路面は掘割状に屋敷地より0.6ｍほど低く構築されており、構築当初は西側のみに幅0.3ｍ、深さ0.3ｍほどの石組みの側溝を構築していた。この道路は絵図に描かれた「河原町通り」に該当するもので、城下町の基本軸となる熊野速玉大社と阿須賀神社を結ぶ道路と直交し、北は熊野川の河原に下る道路である。この道については、出土遺物から何度か嵩上げされつつ、昭和21年まで位置を変えずに機能していたことが判明した。

屋敷地を区画する石垣についても、ほぼ絵図から想定されていた箇所で検出された。とりわけ調査区北側で検出された東西方向の石垣は、熊野川沿いで採れる花崗斑岩の大きな石を用いて構築されたもので、現存高1.3ｍを測る大規模なもので、その積み方から江戸時代初期に遡ることが考えられるものであった。

そのほか近世の遺構としては、屋敷地入口の階段、礎石列などのほか埋桶や塵芥穴の可能性のある土坑などを検出したが、全体に後世の撹乱や削平が著しく、具体的な建物の復元や屋敷内の構造を明らかにするには至らなかった。

第２遺構面では古墳時代初めから室町時代にかけての多数の遺構が重複して検出された。とりわけ鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物が多く、この時期の遺構としては掘立柱建物や大形土坑、石組みの地下式倉庫などがある。このうち掘立柱建物は、ほぼ同じ位置で何度か建替えられていた模様で、４棟確認し、そのうち最大規模のものは桁行６間×梁行４間と当時としては大規模なものであった。

大型土坑は、径1.0～2.0ｍ深さ1.5ｍ～2.5ｍの規模を持つもので、総数26基が検出されている。とりわけ調査区の西側で検出された大型土坑はほぼ南北に列を成して一群を形成しているように見受けられた。出土遺物には山茶碗が多く、13世紀～14世紀代に帰属する遺構の可能性が考えられた。

地下式倉庫は、石積みの有無や昇降口と思われる本体に取り付く突出部を伴うものさらに底面に根太を受ける石が並ぶものなどいくつかのタイプが見られるが、この調査では可能性のあるものを含めれば６基が見つかっている。こうした地下式倉庫の多さ、さらには調査区が熊野川の河口に近く、付近に湊が想定できることから湊に係る施設の可能性があると指摘した。

この調査においては、第３遺構面として縄文時代の遺構面が存在することが明らかになった。調査されたのはごく一部であるが、縄文時代中期を中心とする土器片が含まれる不正形な土坑をいくつか検出した。新宮市においては、これまで速玉大社境内遺跡などで遺物は確認されてきたが、縄文時代の遺構が確認されたのは初めてのことであった。

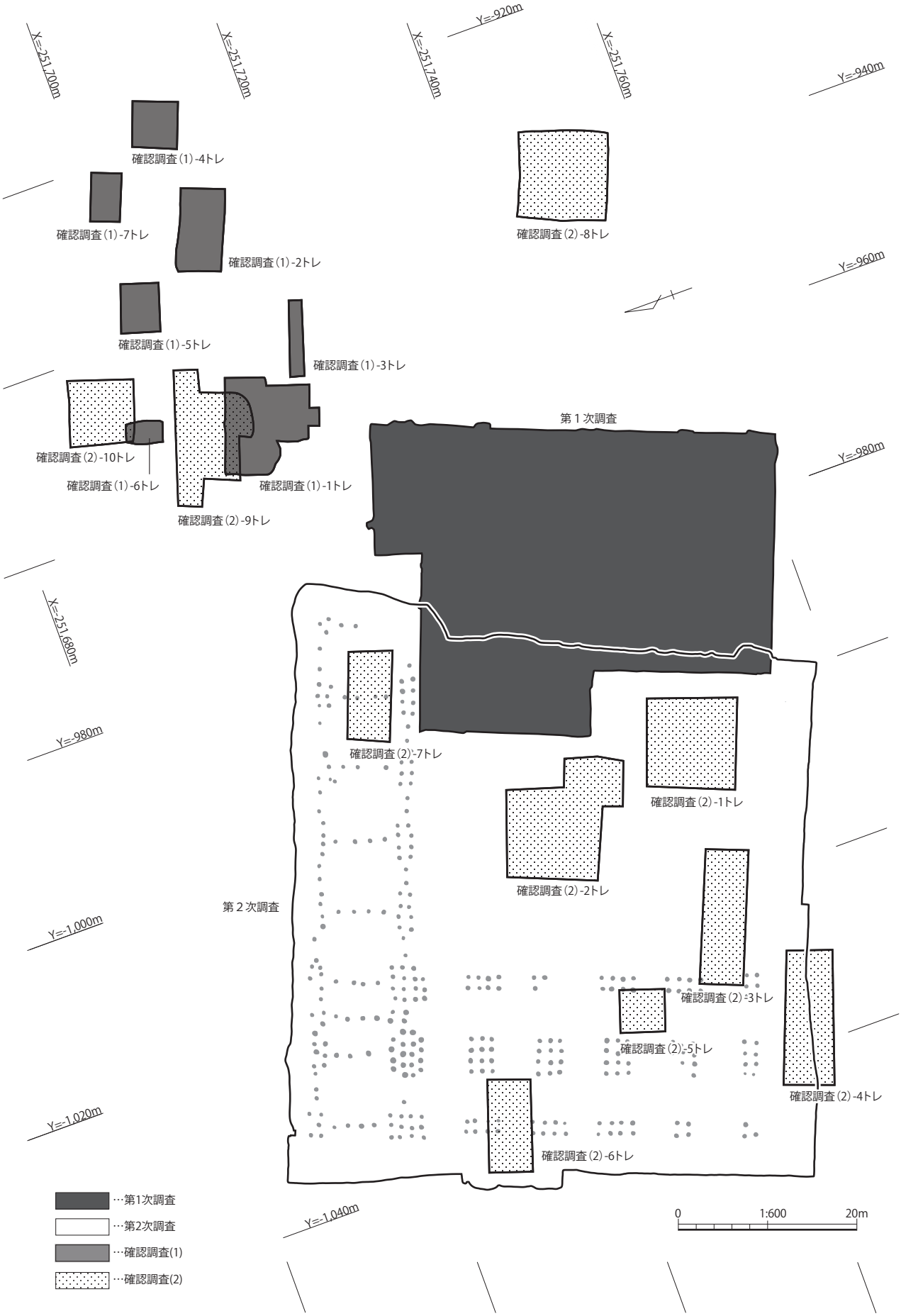


図４　第1次・第2次発掘調査及び確認調査（1）・（2）位置図

【新宮城下町遺跡確認調査（１）】

先に述べた第１次調査は新宮市の文化複合施設建設予定地の発掘調査であったが、江戸時代初めの大規模な石垣が検出され、さらにその下層には中世の湊に係る可能性もある地下式倉庫など重要な遺構が遺されていることが判明した。このため新宮市と県教育委員会が協議を重ねた結果、埋蔵文化財保護の観点から当該地への建設を断念するに至り、旧丹鶴小学校敷地内において新たな建設場所を探すことになった。このための調査が確認調査（１）である。新宮市より委託を受けた当センターが支援業務として実施した。現地での調査期間は平成 28 年 10 月～ 11 月で、図４に示したように敷地の東北部を中心に７箇所の調査区を設けて調査にあたった。

この付近は、熊野川により近く、自然堤防が河原に向かって緩やかに下っていく地形と考えられる場所であり、確認調査の結果も後世の盛土が厚く、また川の氾濫によると思われる堆積土も確認されている。遺構面としては江戸時代の遺構面と中世（室町時代）の遺構面が確認された。

江戸時代の遺構としては、新宮城下町の屋敷地に係ると思われる石垣や石列、集石遺構などが検出されたが、全体に削平が著しいこともあって残存状態は良くない状況であった。中世の遺構面は３面確認されたが、いずれも室町時代のものであり、第１次発掘調査などで確認されている鎌倉時代以前の遺構についてはまったく確認されなかった。このことは当該地が熊野川に向かって下る地形にあり、生活の場としては適さず、室町時代以降に居住域として造成されたものと考えられた。なお、室町時代の遺構としては、壁や底面が被熱した鍛冶炉と考えられる土坑があり、焼土面が各所で確認されていることや鉄滓や坩堝が出土していることからも、この付近に鍛冶や鋳造を行う工房の存在が想定される状況であった。

【新宮城下町遺跡確認調査（２）】

上記の確認調査（１）の結果から、敷地内の東北部においても中世の遺構が確認され、湊に係る鋳造施設が想定されるなど、その重要性が認知された。このため新宮市は、当該地での建設を断念し、再度敷地内において新たな候補地を探すこととなった。当該調査は、このための確認調査であり、図４に示した 10 箇所の調査トレンチを設けて実施した。期間は、平成 29 年２月から同年５月までで、新宮市の指示を受け、当センターが支援業務として行った。

このうち１～６トレンチは第１次発掘調査区の東側にあたる部分で、ここでは基本的に第１次発掘調査と同じで近世・中世のほか一部において縄文時代の遺構面が確認された。７トレンチはホール棟建設予定地の北端にあたる箇所であるが、熊野川に向かって下りはじめる場所であることから、遺構面は一段低く、近世と中世の遺構面のみで、それ以前の遺構面は確認できなかった。また、この場所は丹鶴小学校の校舎跡にもあたっていたことから撹乱が著しいことが想定される状況であった。なお、９・10 トレンチは施設建設予定地に該当する箇所であったが、遺構面がかなり深いものの近世・中世の遺構が検出され、周囲にも広がって存在する可能性の高いことが確認された。８トレンチは、遺跡の性格を詳細に把握するため敷地の東側に設定したトレンチであるが、プールの基礎で第１面は撹乱を受けていたが第２遺構面の残りはよく、中世の地下式倉庫や掘立柱の柱穴などがかなりの密度で検出された。

なお、このうち１～７トレンチは第２次発掘調査の範囲に含まれており、その成果及び出土した遺物などについても本報告書で報告する。

【その他立会調査など】

新宮城下町遺跡並びに東側に隣接する新宮城跡については、上記の文化複合施設建設に伴う確認調査や本調査のほか、電気・ガスのケーブル等の埋設工事に伴って新宮市教育委員会・県教育委員会が確認調査や立会調査を実施している。それらの地点は図５に示すとおりである。個々の成果については省略するが、旧丹鶴小学校の敷地より東側、丹鶴山の裾部まで鎌倉から室町時代の遺構・遺物が確認されており、第１次及び第２次発掘調査で確認された状況がさらに東側に及んでいることが判明している。

図５　立会調査等位置図

また、新宮城跡については、都市公園整備に伴う本格的な発掘調査が実施されており、平成７年度に出丸、同８年度に松ノ丸の一部と石階段、同９年度に大手道、同10年度には水ノ手郭の残部の調査がなされている。これらの調査では、浅野期及び水野期の築城に係る遺物はもとより、量的には少ないが、それ以前の鎌倉～室町時代の瓦、山茶碗、青磁などの輸入陶磁器が出土している。

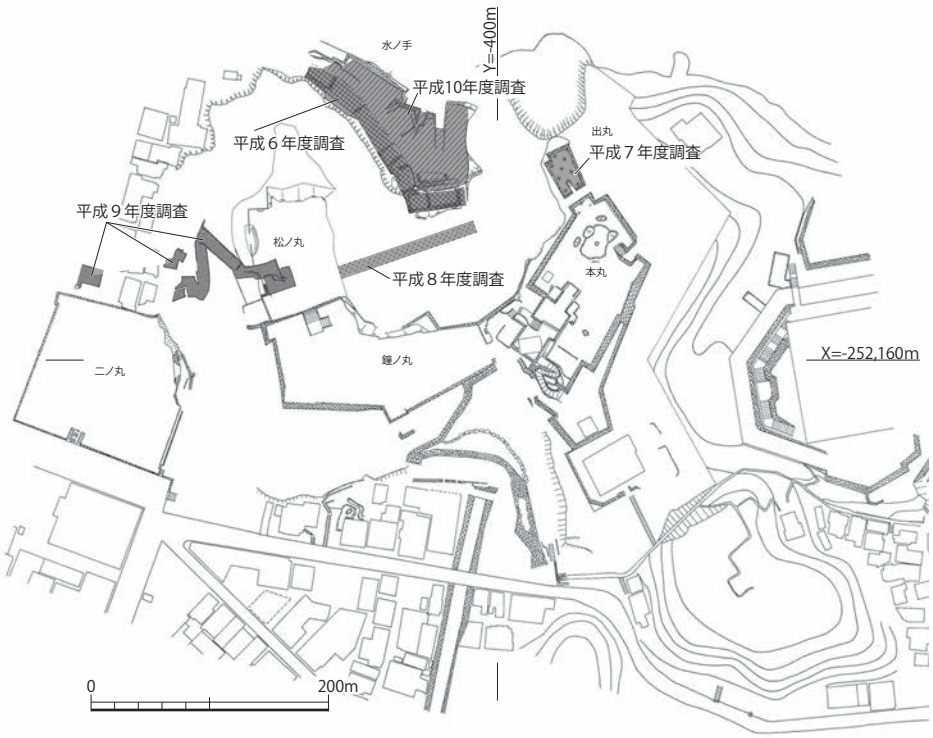


図６　新宮(丹鶴)城既往の発掘調査位置図

第４章　調　査　方　法

第１節　基準点・水準点測量

基準点は、世界測地系を座標値とする３級基準点と４級基準点を設置した。３級基準点は、国土地理院設置の電子基準点「鵜殿」「那智勝浦２」「那智勝浦３」を既知点として、ＧＰＳ観測において公共測量作業規程に準じて調査区に隣接する箇所に設置した。４級基準点は、新設した３級基準点を既知点として、結合多角方式及び単路線方式によりＴＳ観測において公共測量作業規程に準じて調査区に隣接する３箇所に設置した。また、これとは別に３級の引照点を２箇所設けている。

３級水準点の標高の基準は、直近の一等水準点「Ｉ□交 4810」「Ｉ□ 042-213」の最新の成果(T.P. 表示）を既知点として今回新設した３級基準点･４級基準点までの路線において観測を行った。

第２節　地区割り

調査区の地区割りは国土座標第Ⅵ系（世界測地系）を使用し、新宮城跡、新宮城下町遺跡の範囲を網羅する北東（Ｘ＝-250.0km、Ｙ＝-0.0km）に基点を設け、その点から南西に大区画・小区画を設けて区割りを行っている。

大区画は基点をＡ１地点と定めて､西方向へ 100 ｍごとにＢ､Ｃ､Ｄ･･･､南西方向に２､３､４･･･という軸を設定した１辺 100 ｍ四方の区画で、北東隅の地区名を用いてＡ１、Ｃ３などと呼称する。次に、この大区画の北東隅をａ１地点として、そこから４ｍ毎に西方向にｂ～ｙ、南方向に２～ 25 とそれぞれの方向に 25 分割し、一辺４ｍの正方形区画を小区画とする。小区画は北東隅の地区名からａ１区～ｙ 25 区と呼称する。地区名は大区画－小区画（Ａ1－ａ１区など）で表す。今回の調査区は大区画でＪ 17・Ｋ 17・Ｊ 18・Ｋ 18 の四つの区画にまたがっている。

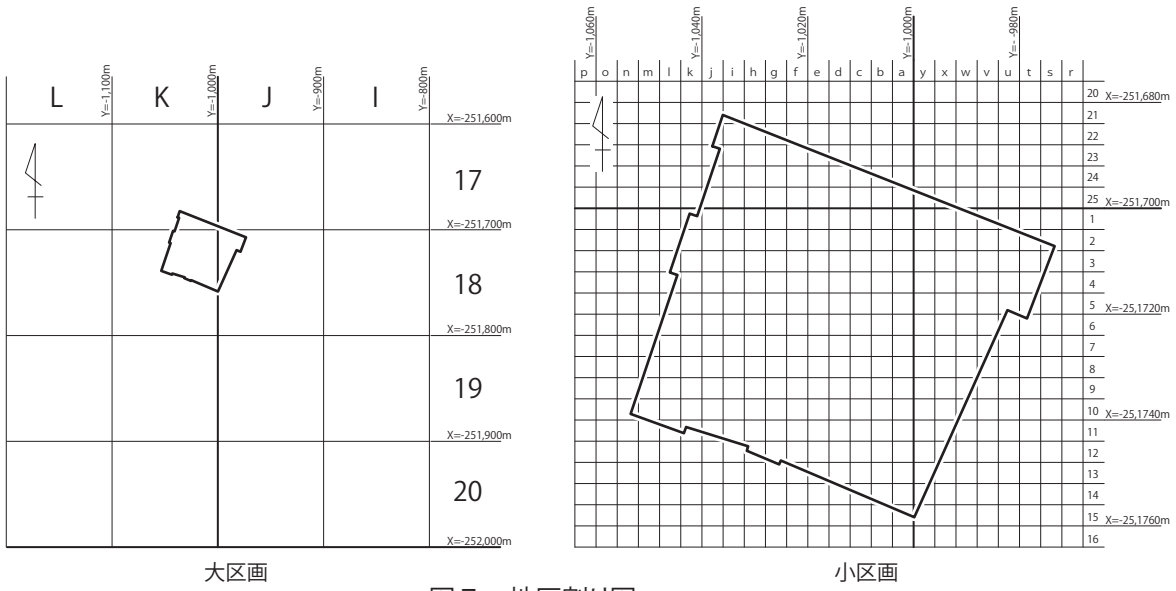


図７　地区割り図

第３節　写真撮影・実測

写真撮影は、全景のほかに、検出した遺構のうち大型土坑や地下式倉庫など主要な遺構の個別写真、遺構断面、調査区壁面などについて行っている。写真は、フルサイズデジタルカメラ並びに中判デジタルカメラを使用し、撮影に際しては、色の正確さを期すためにグレーチャート又はカラーチャートを写しこみ、ファイル形式はＲＡＷ形式とＪＰＥＧ形式で撮影した。そのほかメモ記録用として35㎜サイズデジタルカメラを使用した。また、全景写真は撮影用足場を組んで撮影したのをはじめ、次項に記した航空写真撮影を行った。

平面実測図は、航空写真測量から図化（Ｓ＝１/50）している。このほか遺構配置図（Ｓ＝１/100）、調査区壁面土層図（Ｓ＝１/20）、主要な遺構平面図・断面図（Ｓ＝１/10・１/20）などがあり、A2版方眼紙に手書きにより作成している。なお、方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均潮位（Ｔ．Ｐ．）からのプラス値を使用した。

写真 20　遺構実測作業

第４節　航空写真撮影・３次元写真測量及びモデル作成

航空写真は株式会社共和に委託し、発掘調査で検出された遺構をラジコンヘリコプターにより、調査区①の上面、下面及び調査区②の下面のそれぞれにおいて都合３回実施した。各撮影では垂直全体写真、垂直部分写真のほか周辺部も含めた斜め写真を撮っている。成果品はデジタルモザイク写真、カラーリバーサル（６×６判）で納入されている。

３次元写真測量及びモデル作成については株式会社ＮＡＣ総建に委託した。本発掘調査で検出された中で重要と思われる地下式倉庫群を対象に実施したもので、16箇所を対象に３次元モデルを作成した。また、このうち８箇所において写真測量し、それぞれ平面図・立面図を作成した。成果品は３次元計測データ、平面・立面図出力図、３次元オルソフォトデータのほか閲覧ソフトであるデータビューアソフトが納品されている。

写真 21　ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影風景

第５節　基本層序と遺構面

調査区付近の基本層序は、５層に大別できる。第１層は小学校のグランドの造成土で、このうち第1-1層はグランド厚く敷き均した山土で、第1-2層は排水のためのバラス層である。第２層は近世以降、昭和21年の昭和南海地震による大震災までの整地土である。第３層は中世の包含層で、場所によっては細分が可能である。第４層は縄文時代の包含層であるが、場所によってはこの包含層の堆積が認められない。傾向としては、調査区東側に偏して存在する。第５層は無遺物層で、ほとんど土分を含まない砂層となる。さらにその下層は熊野川の氾濫に伴う径２～３㎝大の礫層である。

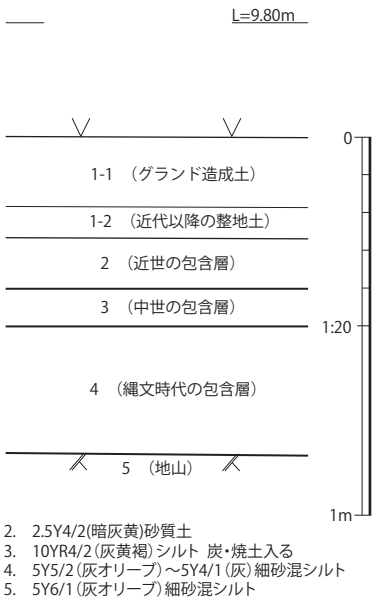


図８　基本層序

遺構面は、第３層上面が第１遺構面で江戸時代の遺構を、第４層上面が第２遺構面で弥生時代後期から室町時代の遺構を、さらに第５層上面が第３遺構面で縄文時代の遺構を検出した。

以上は、小学校のグランド部であった場所をモデルとした基本層序であるが、調査区西側の鉄筋３階建ての校舎が建てられていた部分については、校舎の建設時に第４層の大半までが削り取られていた。また、調査区の北側はもともと熊野川に向かって下っていく自然地形であり、昭和21年以降に大規模な盛土を行って、現在の地表面まで嵩上げされている。

第５章　調 査 の 成 果

第１節　調査概要

調査区は旧丹鶴小学校のグランド部を含む南側を①区、北側の熊野川に向かって下っていく一段低い箇所を②区として調査にあたった。なお、工程としては、調査区の北辺及び西辺に井桁状に組まれた校舎のコンクリート基礎が遺存していたため、グランド部の調査を先行させ、これと併行して基礎撤去作業を行った後、この部分の調査を行った。

検出した遺構には、近世、中世（鎌倉～室町時代）、古墳時代、弥生時代、縄文時代のものがある。古代の遺構および遺物は見つかっていない。

以下、調査区を分けず、時代ごとに説明をおこなう。なお、遺構の番号はその種別に拘わらず検出した順に１から通し番号を付している。また、概述してきたように、本報告書には第１次発掘調査の西側部及び確認調査（１）も含まれることから、この場合、遺構番号の重複を避けるため第１次発掘調査については（１－遺構番号)、確認調査については遺構番号を付した上で（確１－○トレ－遺構番号）という記載をしている。

第２節　第１遺構面の遺構と遺物

第１遺構面は、グランドの整地土及び２層としている近世の包含層を取り除いた標高 9.10 m 前後で検出した。主に江戸時代の遺構面であり、江戸時代を通して城下町形成時とほぼ同じ面が

図９　幕末の絵図に書き入れた調査区

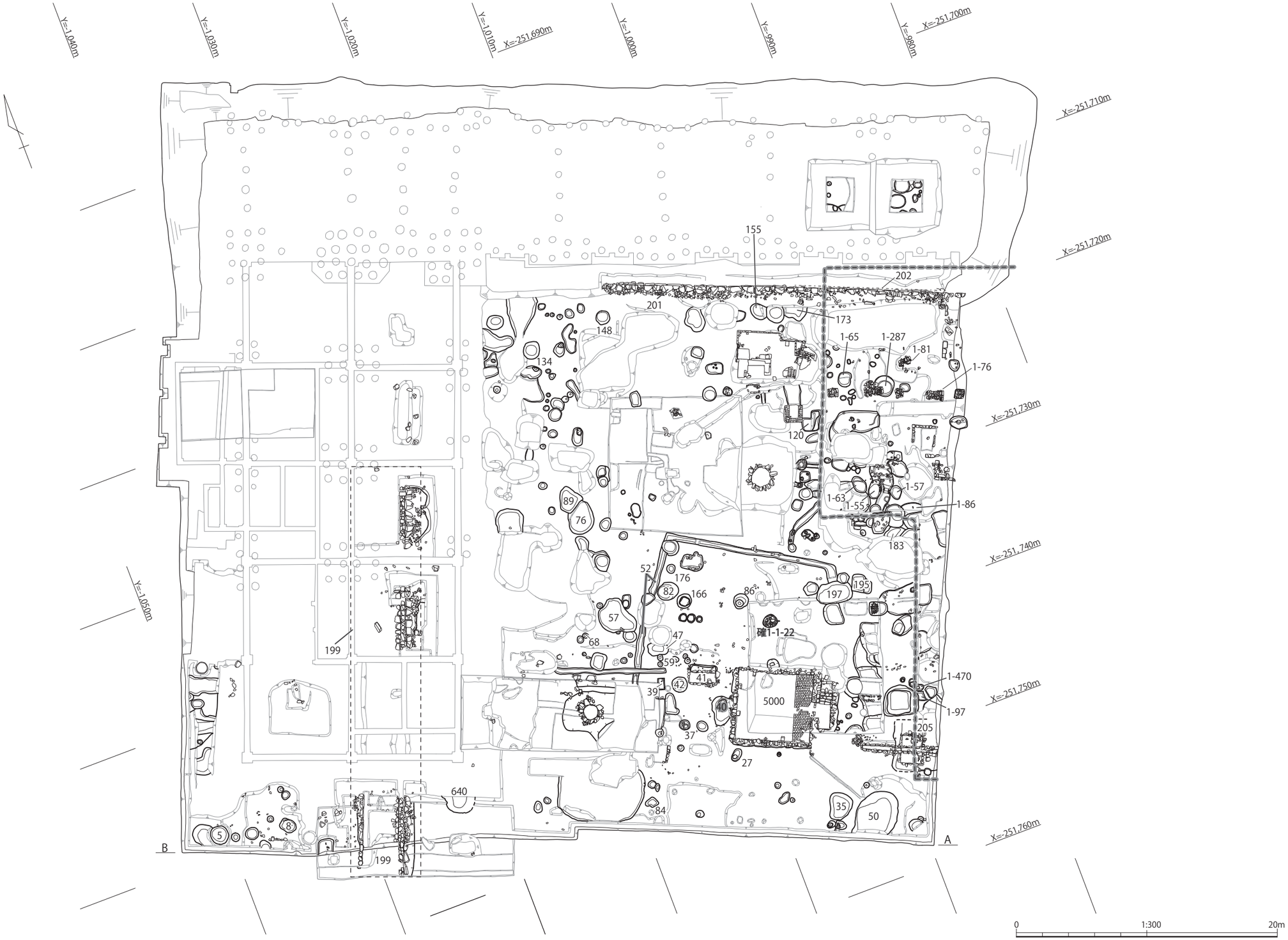
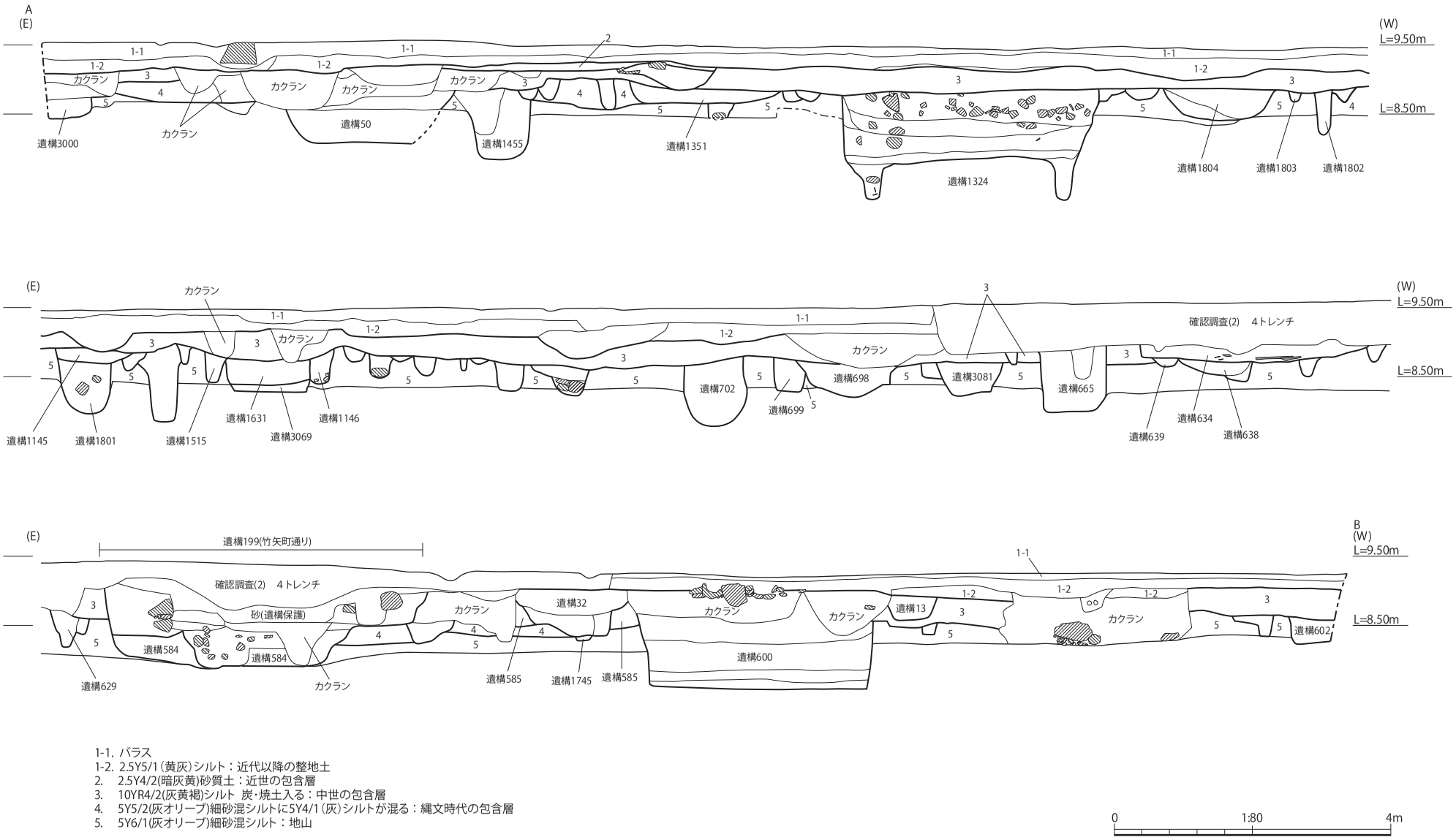


図10　第1遺構面　遺構平面図



1-1. バラス
1-2. 2.5Y5/1（黄灰）シルト：近代以降の整地土
2. 2.5Y4/2(暗灰黄)砂質土：近世の包含層
3. 10YR4/2(灰黄褐)シルト 炭・焼土入る：中世の包含層
4. 5Y5/2(灰オリーブ)細砂混シルトに5Y4/1（灰）シルトが混る：縄文時代の包含層
5. 5Y6/1(灰オリーブ)細砂混シルト：地山

0　1:80　4m

図 11　調査区南壁土層断面図

踏襲されており、和歌山城下町などのような顕著な整地による嵩上げは認められない。場所的には、新宮城跡の大手に面した場所であり、大身の武家屋敷地に相当する箇所である。幕末に描かれたという絵図では、図９に示したように河原町通りの東側から竹矢町通りの西側に及ぶ。竹矢町通りの東側の屋敷地は大きく、３軒、西側の屋敷地はやや小ぶりで５軒、合計８軒の屋敷地にまたがっているものと判断される。

幕末から近代以降にかけても同じ面で生活が営まれており、大規模な整地による嵩上げは認められない。このため同じ面で近代以降の遺構も検出されている。おおきく改変されるのは昭和21年12月（1946年）の南海地震による大火災後のことである。調査ではこの火災による大量の焼土が検出されている。またこの時期にかかる石積みの地下式倉庫も検出された。近世のものではないが、第２遺構面で後述する地下式倉庫との関連で、この遺構についても記載することとする。なお、調査区の北辺及び東辺側は昭和40年代に建てられた小学校の鉄筋校舎跡地にあたっており、井桁状に組まれた基礎により大きく撹乱を受け、第１遺構面についてはほぼ遺存していない状況であった。以下、個々の遺構、遺物について詳述する。

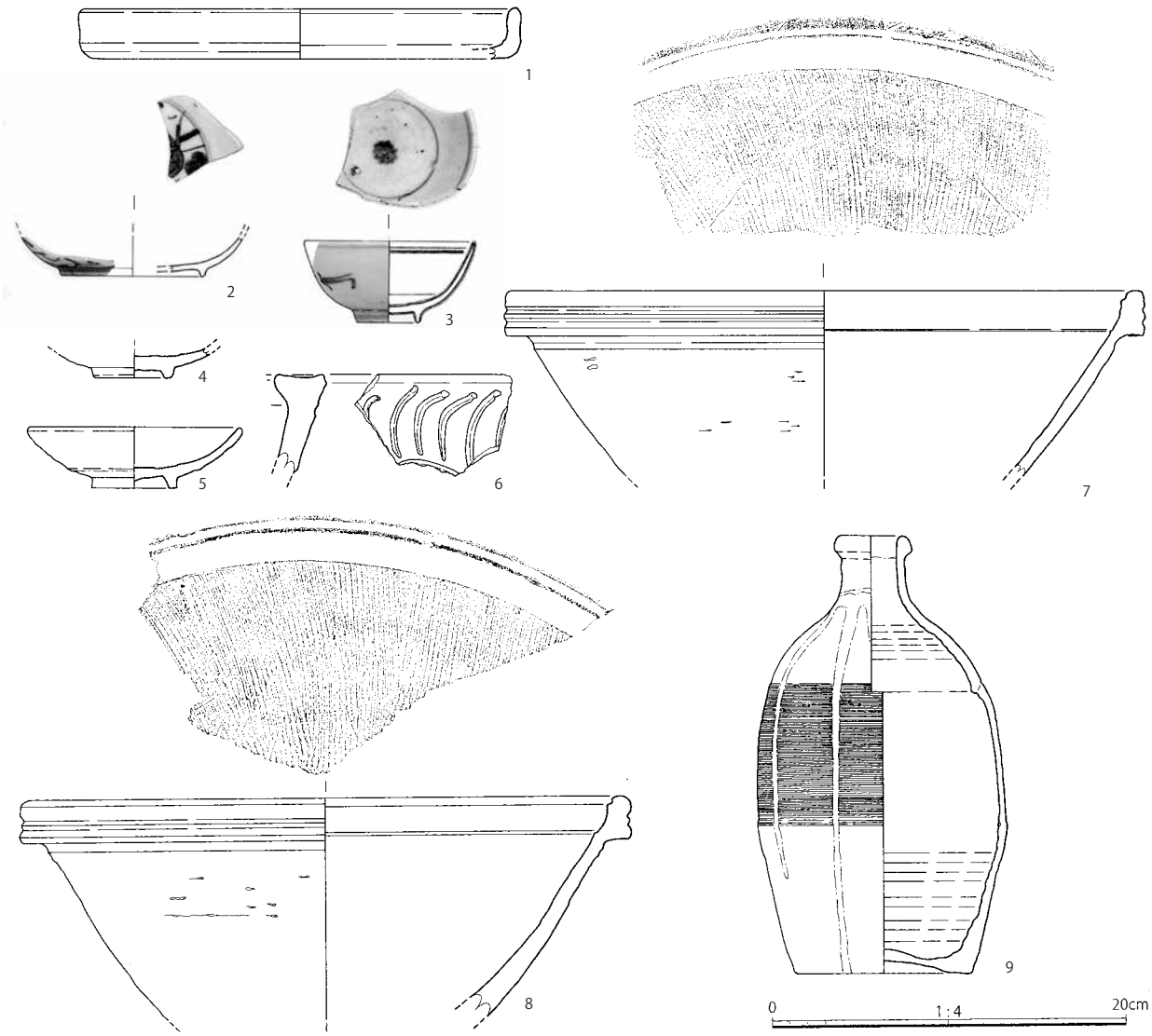


図12　近世の包含層出土遺物

包含層出土の遺物

包含層としているのは、図 11 の南壁土層図に示した 2 層が該当する。層位的には前述の丹鶴小学校のグラント造成土の下で、3 層としている中世の包含層の上に堆積する。ただし、調査区全域に均一に認められるものではなく、昭和 21 年の震災直後の火災整理などによりかなり削られたり撹乱を受けていた様相が看取できた。このため時期的な斉一性は認められず、近代以降の遺物の混入や、逆に山茶碗などの中世に帰属する遺物も多く出土している。

こうしたなかで、近世の遺物としては図12に図示したように伊万里の碗・皿(2・3)、唐津の皿(4・5)、瀬戸の水鉢(6)などのほか擂鉢(7・8)などがある。この擂鉢については、同一タイプであり、底部を欠いているため断定できないが堺擂鉢の可能性が高いものと考えている。また(9)の徳利については丹波の製品と考えている。概ね浅野期に帰属する17世紀初めから江戸時代を通しての遺物といえよう。

遺構 199（図 13・14　図版 4・5）

確認調査（2）の 4 トレンチで検出されていた道路遺構及びこれに伴う石垣である。本調査においては北側の延長上 2 箇所において側溝を伴う東側の石垣を確認することができた。確認された総延長は約 30 mである。この道路遺構は、南北方向に走り、江戸時代に描かれた絵図から、城下町を区画する通りで「竹矢町通り」と呼ばれていたことが窺われる。道路遺構は、何度か改修を加え嵩上げされており、最終の改修段階で東側に石積み・石敷きの側溝が構築されている。側溝の幅は 0.4 m、深さ 0.4 mで、石材は 0.2 ～ 0.4 mの花崗斑岩である。側溝内の埋土には先に述べた南海大震災の火災に起因すると考えられる焼土が多量に入っていたことからも、道路遺構と側溝は昭和 21 年まで機能し、それ以後は使われなくなったと判断される。最終段階の道路幅は 3.0 mで、道路面には 2 ～ 5㎝ 大の円礫が叩き締められていた。当初の道路面は、屋敷地より 0.6 m低く掘割状に構築されている。幅 3.0 mで、道路面は 5 ～ 10㎝ 台の円礫で叩き締められていた。道路に面する東側の石垣の石の積み方や石材に自然面が多く残る状況から、城下町当初の道路面と判断できる。なお、第 1 次発掘調査で確認された「河原町通り」とこの「竹矢町通り」の間隔は、約 43 mである。

道路面に密着した形で出土遺物は確認されていないが、前述したように最終段階の側溝から近代の遺物が出土している。また、この道路面を横断するように設けたトレンチの中から京焼系と思われる丸碗 (10) のほか唐津の碗 (11) や伊万里の碗 (12) などが出土している。

遺構 201（図 13・15　図版 6）

武家屋敷地の境を成す石垣である。この石垣についても第 1 次調査時確認されていたもので、本調査ではその西側への延長部を検出することができた。図 9 に拠れば、小田部家とその西側の宮部家との境を成す東西方向の石垣である。両家は 1.0 ～ 1.3 m比高差をもって造成されており、その高さ保つための石垣と言える。本来は、「河原町通り」から「竹矢町通り」までの間、43 m ほどに設けられていたと考えられるが、西側の 13 mほどは校舎の建設時に破壊されたと思われ

確認することはできなかった。

確認規模で延長31ｍ、もっとも残りのよい部分で高さ1.3ｍを測る。石の種類は熊野川沿いで採れる花崗斑岩といわれているやや赤みを帯びた薄茶色の石である。基本的には横積みで、基底部に大きな石を用いている。箇所によって石の大きさに差異が認められることなどから何度か修復をされてきた様子が窺われる。もっとも当初の原型を留めると考えられるのは、検出された石垣の中央部付近で、図示したように横1.0ｍ以上、高さ0.8ｍ前後の大振りの石が据え置かれている。このような石の大きさ、積み方などを総合的に判断すれば、浅野時代も含めて、江戸時代はじめの城下町の形成時に築造され、その後度々の改修はあるものの原位置を保ったまま幕末まで機能していた可能性が高いものと考えられる。

なお、この石垣についてはその重要性に鑑み、移築保存されることになった。その取り外し、撤去に際して一部断ち割り及び掘形部の遺物を採取している。その結果、掘形の大きさは、確認された天端の石尻から0.4ｍ足らずと大きな石を用いている割にその控えは少ない状況であった。また裏込めに用いられている土は灰黄褐色のシルト質の土で、その中に花崗斑岩の５～20㎝大の加工片を意識的に混ぜ入れているが、その量は少なく、通常の裏込めにみられる小礫などを充填するような造作は認められなかった。

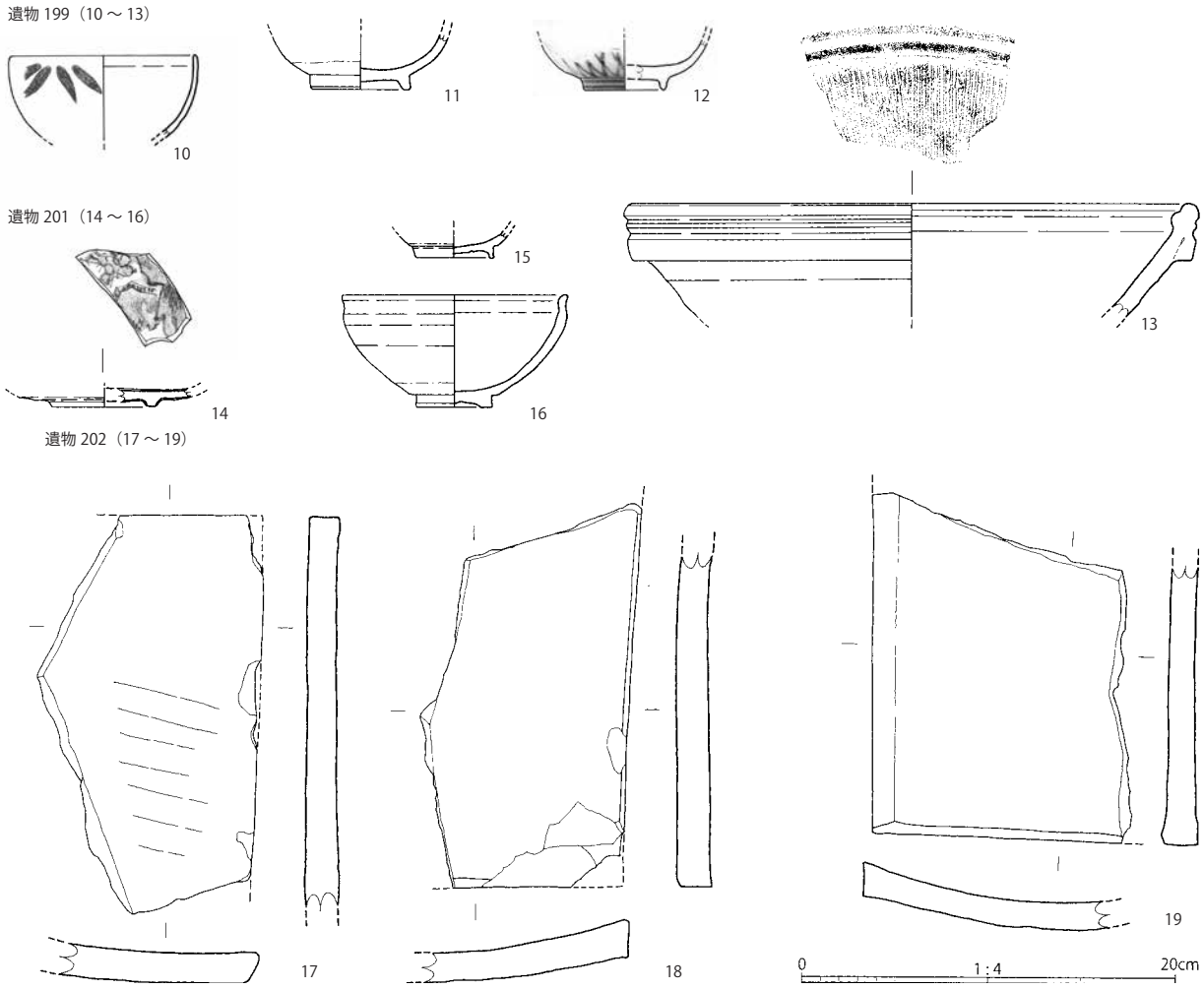
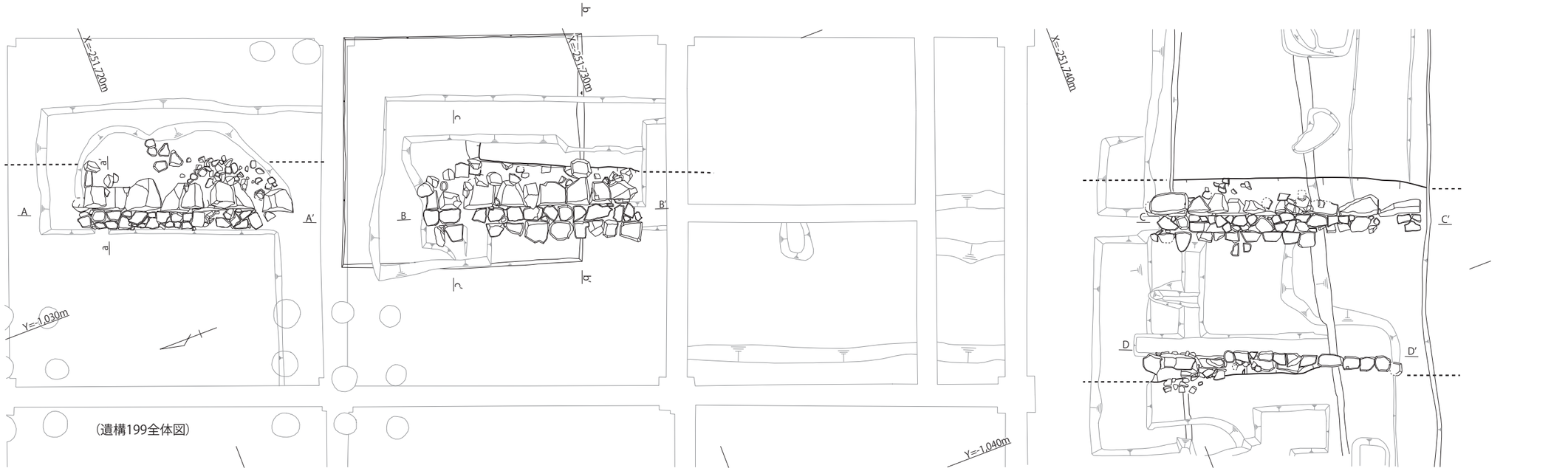


図13　遺構199・201・202出土遺物



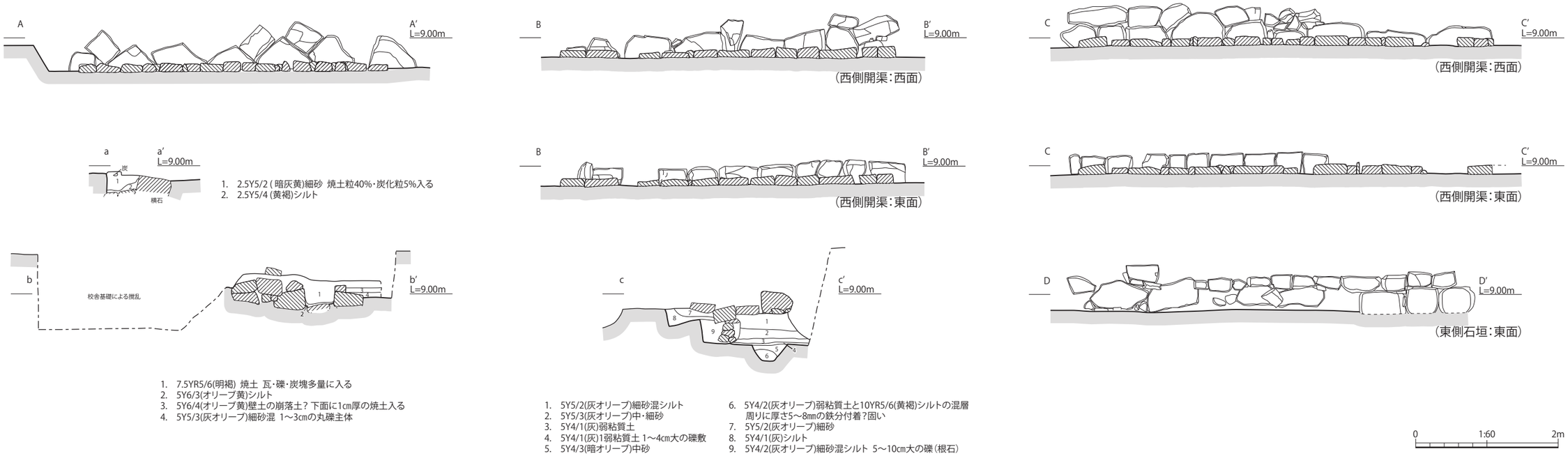
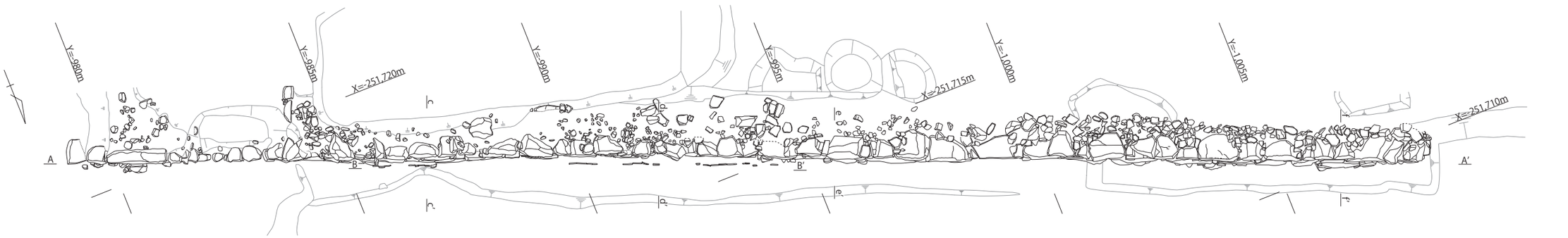
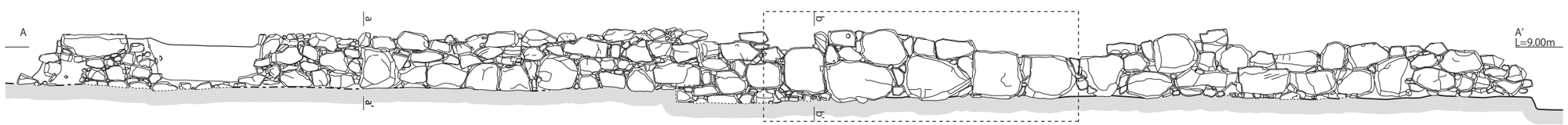


図 14　遺構 199（竹矢町通り）

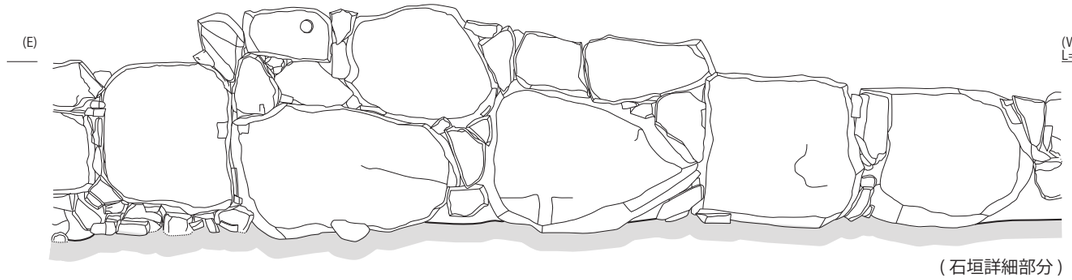




（断割部①）　（断割部②）　（石垣詳細部範囲）

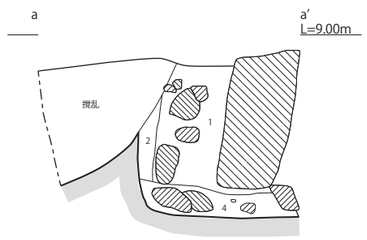
0　1:100　4m

0　1:80　2m

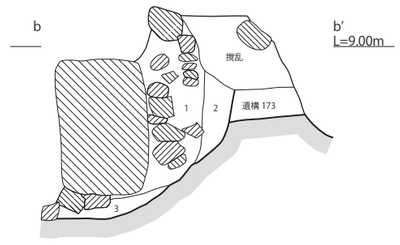


（石垣詳細部分）

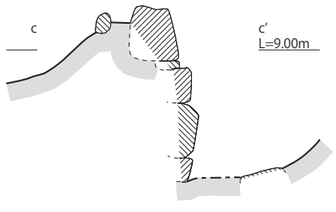
断割部①断面図



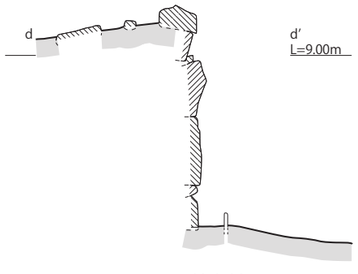
断割部②断面図



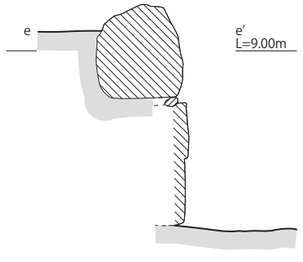
1. 10YR4/2(灰黄褐)シルト 5～30㎝大の礫多量に入る
2. 10YR4/3(にぶい黄褐)砂質土
3. 10YR3/3(暗褐)砂質土 焼土粒・炭化粒微量入る
4. 5Y4/3（暗オリーブ）細砂混シルト　5～20㎝大の礫中量入る



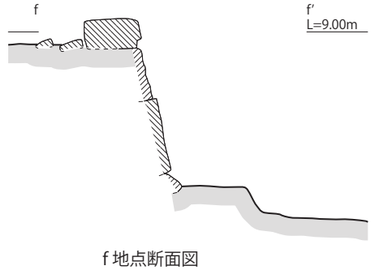
c 地点断面図



d 地点断面図



e 地点断面図



f 地点断面図

0　1:40　1m

図15　遺構201・202

出土遺物は極めて少なく、裏込めの中から明代末期の漳州窯の製品と思われる粗雑な染付皿(14)、断ち割りｂ－ｂ’から志野の皿(15)のほか瀬戸の天目茶碗(16)など、近世初頭の遺物を確認しており、これらは築造時期を示す可能性が高い。ただし、修復されたと思われる箇所や撹乱を受けている可能性が考えられる箇所においては、19世紀まで下る遺物が認められた。

遺構202（図13・15　図版7-1）

前述の石垣201の基底部から北側に20cmほど離れた場所で、この石垣に平行して検出された瓦列である。幅20cm前後、厚さ3cmほどの瓦を地中に立てかけ並べたもので、ところどころ欠損している箇所があるが、延長10ｍほどを検出した。その上端の高さは標高8.1ｍに揃えられていたと考えられる。この高さは石垣の基底部より10cmほど高い。用途については、判然としないが石垣の延長すべてに施されているわけではなく、長さが限られていることから、この北側に築かれていた建物などに対する石垣の上から流れてくる水除けの可能性を考えている。

用いられていた個々の瓦(17～19)は厚さ1.6cm前後と比較的薄く、幅はもっとも残りのよいものでも15cm足らず、長さは20cmほどで、転用されたものと考えている。埋め込まれた造作も簡便なものであることからも一時的な施設であったものと判断している。

遺構39（図16　図版7-2）

0.9ｍ×0.5ｍの長方形を呈する遺構である。底部と四周に高さ10cmほどの炭化した側板が確認できたことから、木箱が埋設されていたものと判断できる。この中には硬化した焼け土がぎっしりと詰まっていた。出土遺物がなく、時期を断定できないが、この焼土が昭和21年の震災に拠るものである可能性も考えられる。

遺構27（図16　図版7-3）

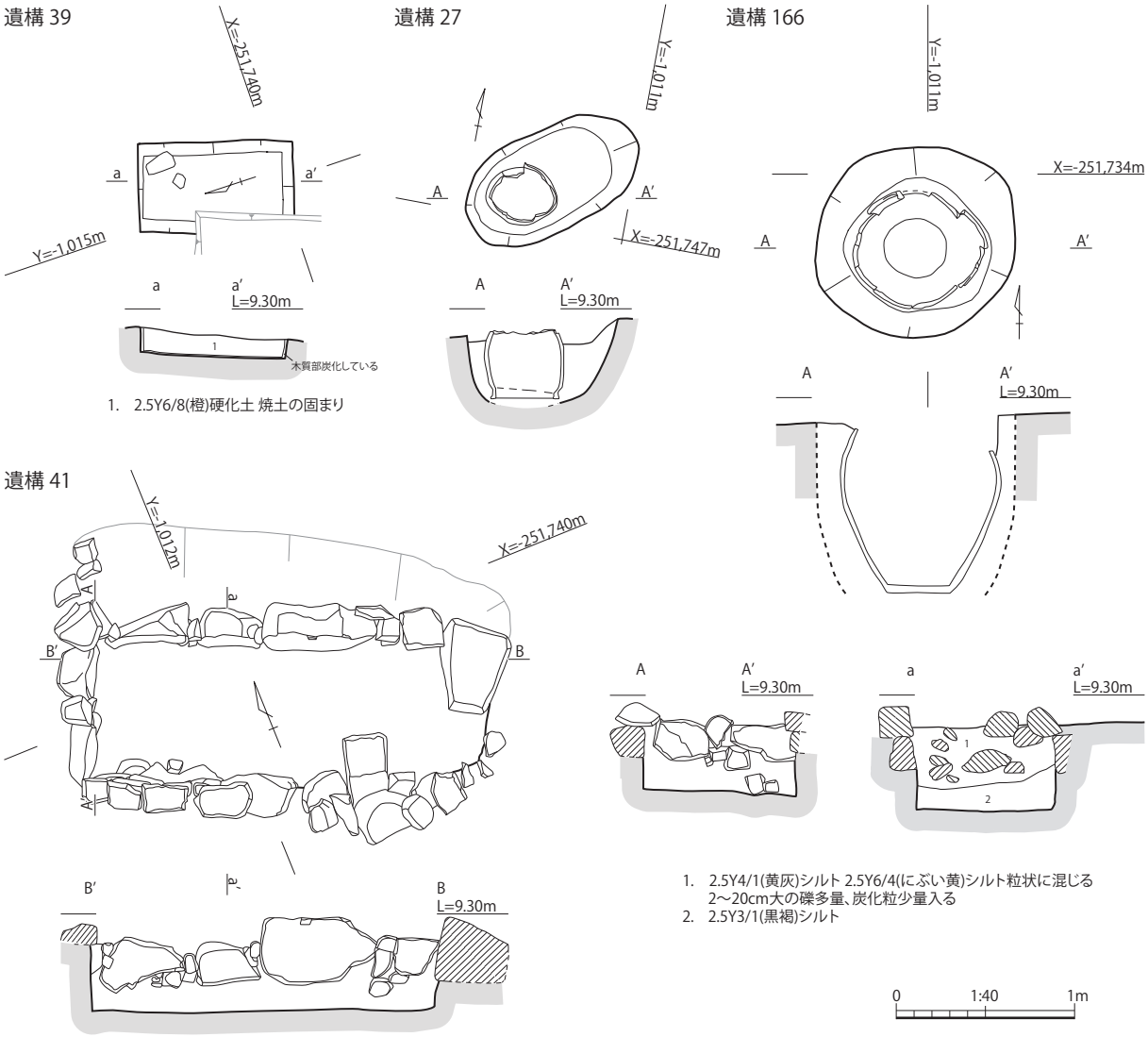
長径1.0ｍ、短径0.5ｍの土坑の片側に大甕が逆位で埋設されていた遺構である。当初水琴窟の可能性も考えたが、底部に砂利などを敷いた痕跡は認められなかった。埋設されていた甕は口縁端部がＴ字状に水平に開くタイプで、体部全体が茶褐色を呈する。おそらく四国の大谷焼の可能性が高いものと考えている。

遺構166（図16　図版8-1）

高さ0.8ｍ、胴部最大幅0.6ｍほどの備前の大甕を埋設した遺構である。一部口縁部が残っており、外部端面に凹線の入るもので、16世紀後半段階の備前焼と考えられる。検出した遺構面から中世のものとは考えがたく、また内部に尿酸の痕跡も認められたことなどから便漕として近世に再利用されていたものと判断した。

遺構41（図16　図版8-2）

2.2ｍ×1.2ｍほどの長方形を呈した石組みの遺構である。深さは0.5ｍほどで、基本的には0.3～0.6ｍ大の石を横置きにして一段ないし二段で構築している。ただし、上部が削平されている可能性もあり、本来的にはもう少し深い遺構であったかもしれない。埋土は上層が黄灰色のシルトに2～20cm大の礫が入るが、下層は黒褐色シルトで礫は含まれていない。小破片であるが江戸時代中頃以降の磁器や施釉陶器が出土している。



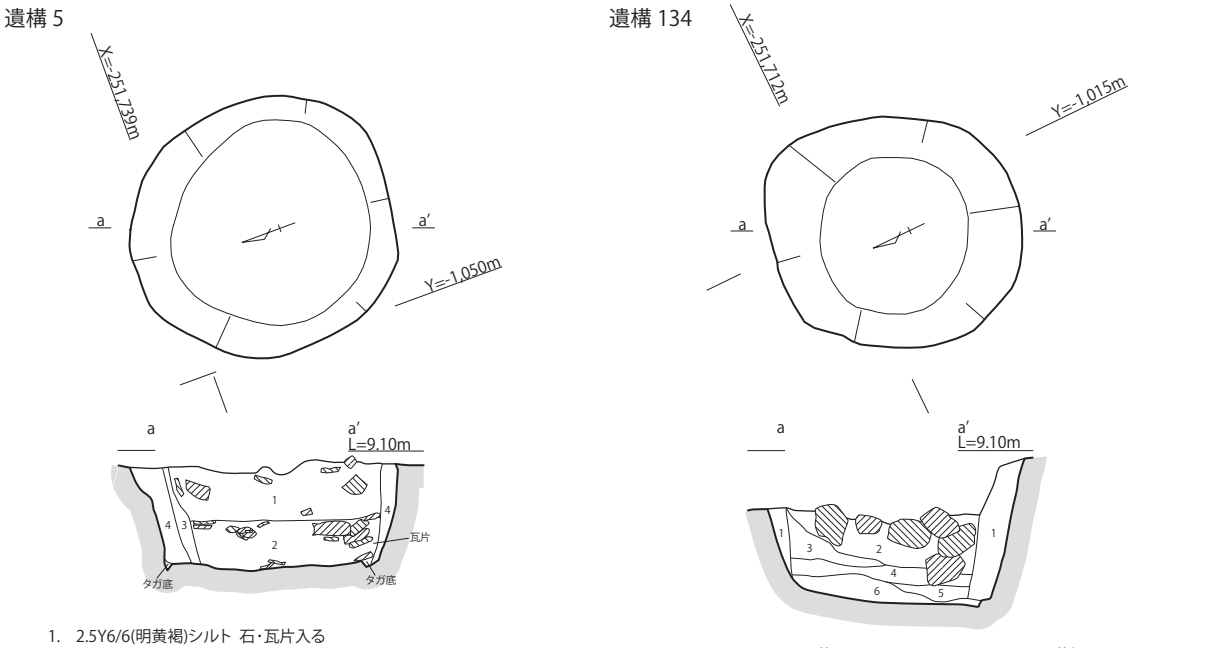


図16 遺構39・27・166・41・5・134

遺構5（図16・24　図版8-3）

径1.4ｍほどの円形の土坑である。底部に結い桶のタガの痕跡が認められたことから埋桶であったことが判明した。埋土は明黄褐色シルトで、5～20cm大の石に混じって瓦片が数多く入れられていた。出土遺物としては瀬戸の水鉢や同じく瀬戸の馬の目皿などが出土している。このうち(20)は肥前系磁器の皿である。口径14cm、器高3.5cmを測る。全体にやや青みを帯びた白色を呈している。体部に文様は施されていないが、内面底部に二条の圏線が巡らされ、その中に吉祥文と思われる宝珠が描かれている。

また口縁端部は錆釉が施されており、この部分のみやや淡い茶色を呈する。なお、高台は蛇の目状になっており、畳み付けを含む高台部の釉は削り取られている。

(21)は瀬戸の磁器碗で、高台が高く、口縁部にかけて斜め上方に立ち上がるタイプ、俗に広東碗と称されるものである。体部と高台部の境に一条の圏線が巡らされ、体部外面には簡略化された笹状の文様が施されていた。

(22)は瀬戸の灰釉の水甕である。復元径で28.5cmを測る。器高については小片のため不明であるが、おそらく20cmほどになるものと思われる。江戸時代中期、18世紀後半以降に生産されているものであり、この製品についてもおそらく19世紀前後のものと判断している。(23)は瀬戸の馬の目皿である。釉は全体にくすんだ灰色を呈し、全体に貫入が認められる。内面体部に渦巻き状の文様を施す。体部下半から高台にかけては露胎である。この製品についても19世紀前後に位置づけられよう。

以上の出土遺物から、この遺構の廃絶時期については19世紀前半頃と判断した。

遺構134（図16　図版9-1）

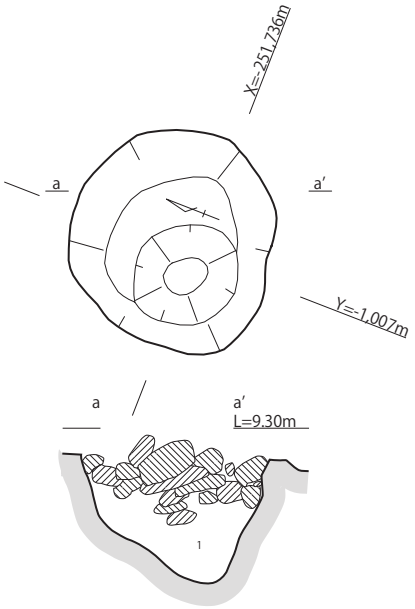
径1.2ｍほどの円形の土坑である。この遺構についてもその形状から埋桶であったものと考えている。埋土の下層は黄褐色の砂で埋められていたが、上層はにぶい黄色のシルトで、20cm前後の石が投げ込まれた状態で入っていた。出土遺物は図示していないが、古墳時代の土師器のほか中世の常滑や瀬戸などが一定量混在して入っているのを確認している。ただしそれ以上に近世の施釉陶器や磁器片が多く認められたことから、この遺構の廃絶時期については、概ね江戸時代後期、19世紀に入ってからのものと判断している。

遺構86（図17）

長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍほどの楕円形状の土坑で、深さは0.7ｍを測る。上部に10～20cm大の礫が集中して埋められていた。当初、礎石建物に伴う礎石を据えるための根石の可能性を考えた。ただ、掘形が土坑状に深く掘られていることや周辺にこれに対応する同じような遺構を見出せなかったことから、土坑を埋めるに際して単に石を投げ込んだ可能性が高いものと判断した。

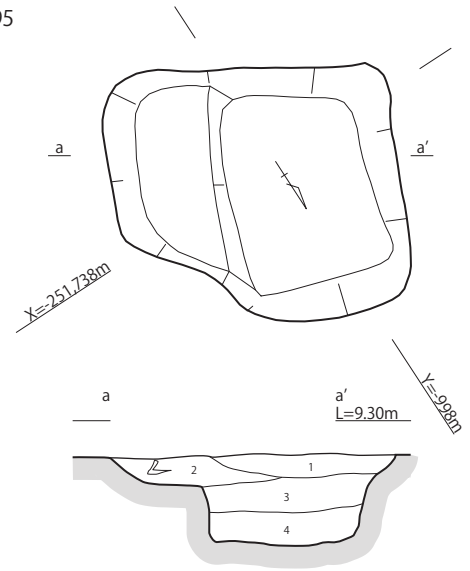
出土遺物は図示していないが、この遺構においても中世の常滑や瀬戸、さらには古墳時代と思われる土師器片などが相当量出土している。ただこうした古い時期の遺物に混じって近世後期の施釉陶器が一定量出土していることから、廃絶された時期については江戸時代中頃以降と判断している。

遺構 86



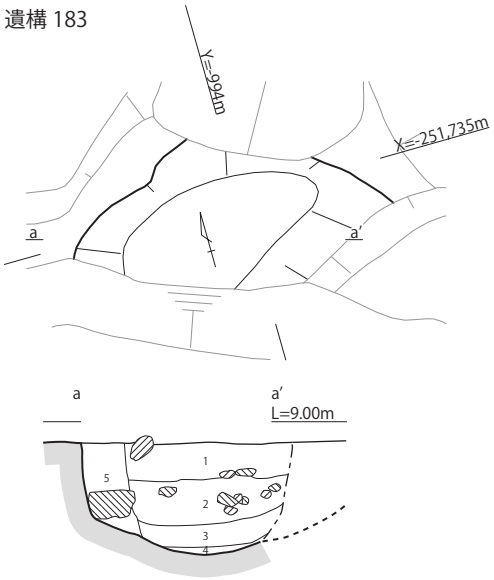
1. 2.5Y5/2(にぶい暗灰黄)シルト ブロック状に黄色土混じる

遺構 195



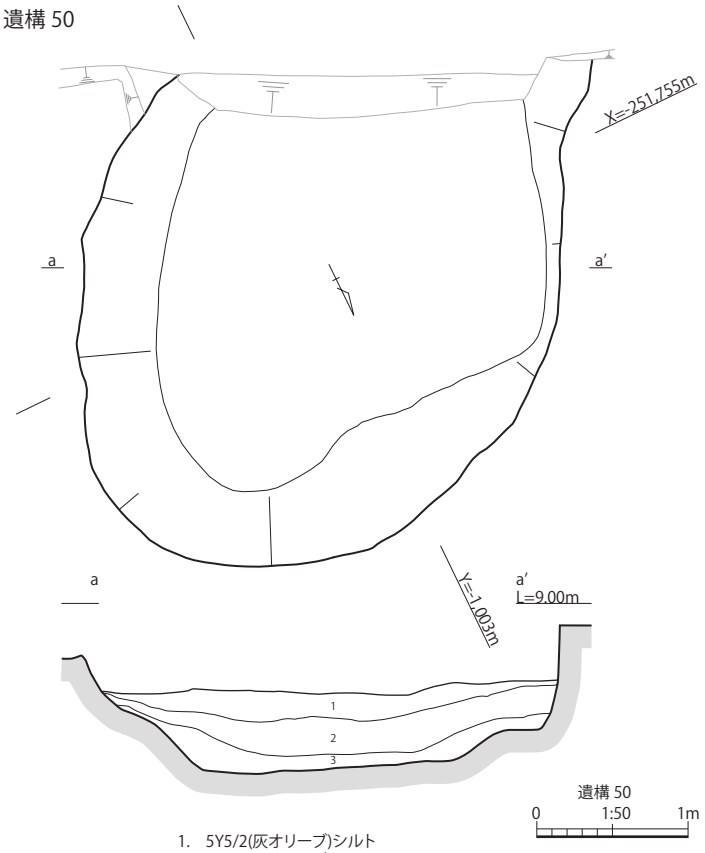
1. 2.5Y5/3(灰褐)シルト 5Y6/2(灰オリーブ)シルト ブロック状に混じる
2. 2.5Y5/3(黄褐)シルト
3. 2.5Y4/3(オリーブ褐)シルト
4. 2.5Y4/2(暗灰黄)シルト

遺構 183



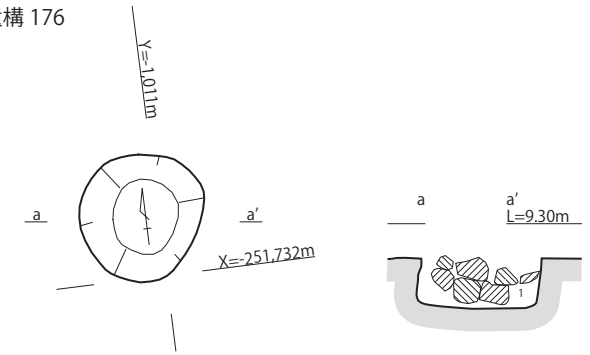
1. 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト 炭入る
2. 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト φ5cm前後の石入る
3. 2.5Y6/3(にぶい黄)シルト
4. 2.5Y7/4(浅黄)砂 3層の土か
5. 2.5Y7/3(浅黄)シルト

遺構 50



1. 5Y5/2(灰オリーブ)シルト
2. 5Y4/2(灰オリーブ)シルト
3. 5Y4/1(灰オリーブ)シルト やや粘質

遺構 176



1. 2.5Y4/2(暗灰黄)シルト 5〜15cm大の礫が主体

0 1:40 1m

図17 遺構86・195・183・50・176

遺構 195（図 17）

一辺 1.5 mほどで、北西隅がやや歪な方形の土坑である。深さは 0.5 mを測る。ただ、土層断面を観察した結果、検出面で二つの遺構が切りあった状況であり、さらにこの二つの遺構の下にもうひとつ遺構があるように見受けられる。実際に出土遺物を見ると、江戸時代の遺物に混じって弥生土器を含む中世の常滑や瀬戸、さらには山茶碗など出土していることを確認している。このことから、近世の遺構としては、土層図で示した１及び２が相当し、３・４については、下層遺構の可能性が高いものと考えている。

遺構 183（図 17　図版 9-2）

南側を近代の撹乱により削り取られているが、本来的には 1.3 m× 0.6 mほどの楕円形を呈した土坑であったと思われる。深さは 0.6 mほどを測る。埋土の上層は暗灰黄色シルトを基調とする土であるが、上層には少量の炭片が含まれていた。

遺構 50（図 17・24）

調査区南東隅で検出したもので、南側が調査区外に延びるため全容は不明だが、確認規模で長軸 3.3 m以上、短軸で 3.0 mほどの不正形な土坑である。埋土は灰オリーブ色のシルトがレンズ状に堆積しており、下層はやや粘質を帯びる。

出土遺物は多く、大部分が山茶碗や常滑の甕、土師器皿など中世に帰属するものであるが、これらに混じって近世初めの皿（24・25）や塩壺の出土を確認している。このうち（24）は唐津の皿と思われる。全体に黄色味を帯びた薄い枇杷色を呈しており、畳み付け及び外面底部は露胎で赤茶けた色を呈する。胎土は薄い黄色を呈し、ややぱさついた感じで全体に焼成が甘い。時期的には 17 世紀を前後する時期のものと考えている。（25）も唐津の皿である。口径 11㎝ 足らず、器高 3㎝ ほどとやや小振りの製品である。高台部付近まで釉薬が施されており、露胎の高台部は赤褐色を呈している。前述の皿なども含めて概ね 17 世紀初め、江戸時代の初めと考えられる製品であり、当該遺跡においては浅野期に帰属する可能性の高い遺構である。

遺構 176（図 17　図版 9-3）

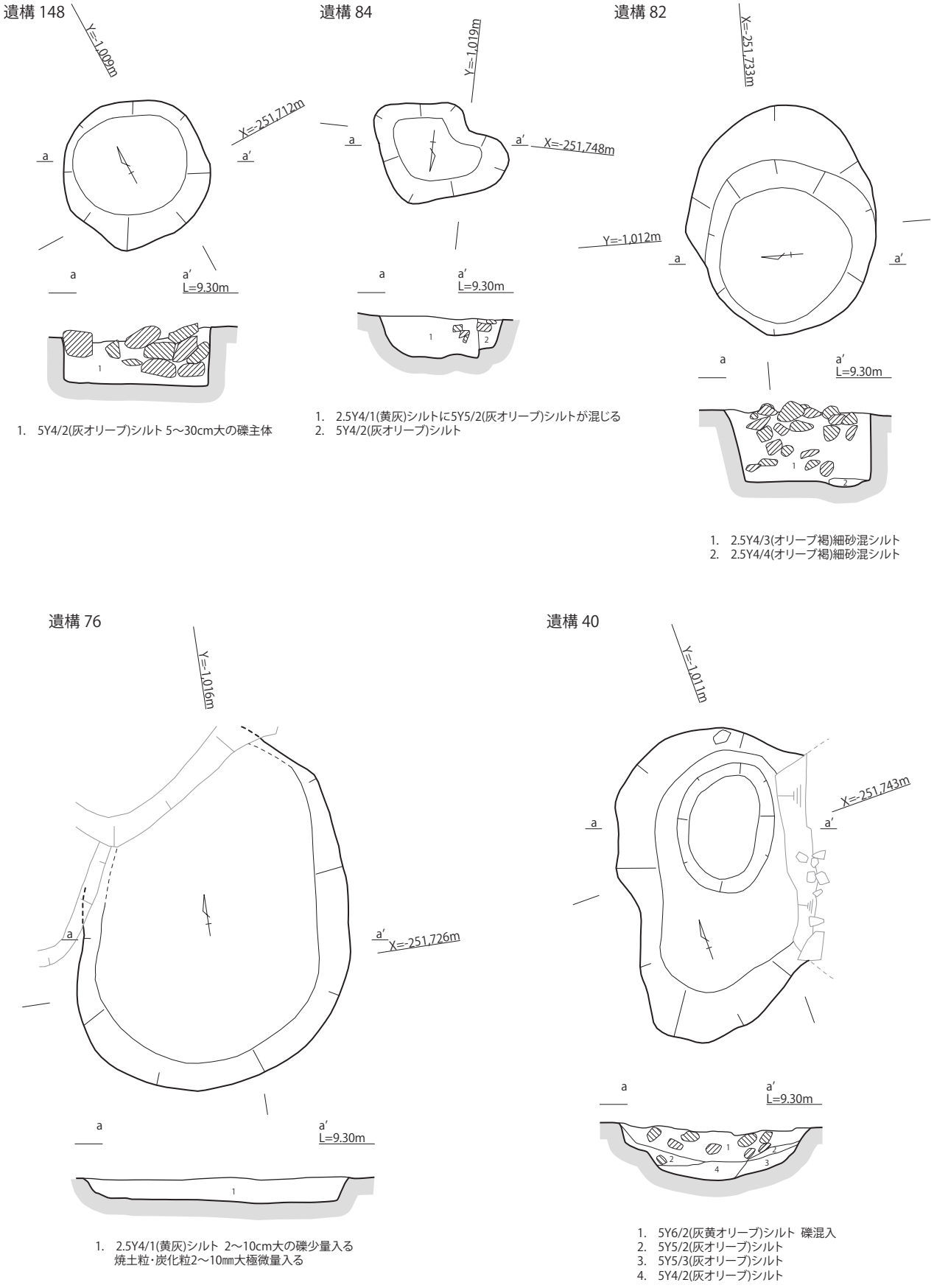
径 0.6 m、深さ 0.2 mほどの土坑で、中には 5 ～ 15㎝ 大の礫がぎっしりと詰まっている状況であった。おそらく建物の礎石を据えつける根石であったものと考えている。出土遺物としては近世の伊万里焼の碗と思われる磁器片を確認している。

遺構 148（図 18）

径 1.1 m、深さ 0.4 mほどの円形の土坑で、ほぼ垂直に掘られていた。中には 5 ～ 30㎝ 大の礫が詰め込まれていた。埋土は単層で、灰オリーブ色のシルトである。この土坑についても礎石建物に伴う根石であった可能性が高いものと考えている。遺物が出土しておらず時期については不明である。

遺構 76（図 18・24）

北西隅を他の遺構によって切られているが、本来的には 2.5 m× 2.0 mほどの楕円形を呈する遺構である。深さは 0.1 mと浅く、埋土も単層で黄灰色シルトに小礫や焼土・炭が混じった土である。遺物は中世に帰属する土師器の鍋や山茶碗などが多くみられるが、これらに混じって近世



1. 5Y4/2(灰オリーブ)シルト 5～30cm大の礫主体

1. 2.5Y4/1(黄灰)シルトに5Y5/2(灰オリーブ)シルトが混じる
2. 5Y4/2(灰オリーブ)シルト

1. 2.5Y4/3(オリーブ褐)細砂混シルト
2. 2.5Y4/4(オリーブ褐)細砂混シルト

1. 2.5Y4/1(黄灰)シルト 2～10cm大の礫少量入る
焼土粒・炭化粒2～10㎜大極微量入る

1. 5Y6/2(灰黄オリーブ)シルト 礫混入
2. 5Y5/2(灰オリーブ)シルト
3. 5Y5/3(灰オリーブ)シルト
4. 5Y4/2(灰オリーブ)シルト

図18　遺構148・84・82・76・40

0　1:40　1m

の施釉陶器が認められた。このうち（26）は唐津の皿である。体部下半の露胎部を除けば全体に灰オリーブ色を呈する。体部は丸く立ち上がった後やや外反気味に開く。同じく（27）も唐津の皿である。釉は全体にややくすんだ灰色を呈しており、簡略化した文様が施されている。体部下半部は露胎で、薄い茶色を呈する。外底部に墨書と思われる痕跡が認められたが、判読には至っていない。また、内面底部４箇所に胎土目痕が認められる。これらの唐津の皿はいずれも17世紀でも初めに位置づけられる遺物と考えられることから、この遺構についても浅野期に係る遺構の可能性が高いものと判断している。

遺構 84（図 18）

１ｍ前後の不正形な土坑で、深さ 0.3 ｍを測る。断面土層の観察から、二つの遺構を一緒に掘ってしまった可能性が高い。出土遺物がなく、時期については不明である。

遺構 40（図 18・24）

東側が撹乱を受けているため、全容については不明であるが、2.2 ｍ× 1.4 ｍほどの楕円形に近い形状で深さは 0.35 ｍを測る。上部に集中して 10㎝ 前後の礫が入れられていた。

出土遺物としては唐津の皿や伊万里の碗などが出土している。このうち（30）は伊万里の蓋と考えられるもので、体部外面にはいくつかの圏線を巡らせ、その間に粗略で図案化された芝垣文様が描かれている。素地の発色は全体にややくすんだ白色を呈している。（31）も同じく伊万里の碗で、高台部に二条の、口縁端部近くに一条の圏線を巡らせ、その間の外面体部には粗略な草花文様が描かれている。（32）は銅縁釉を蛇の目状に剥ぎ取った皿である。図案的には唐津の製品と思われるが、胎土が灰白色を呈することや焼成が極めて堅密であることから瀬戸の製品の可能性が高い。概ね江戸時代中期から後期にかけてのものと考えている。

遺構 82（図 18　図版 10-1）

径 1.2 ｍ、深さ 0.5 ｍほどの円形の土坑である。埋土は５～ 20㎝ 大の礫を含むオリーブ褐色の細かな砂混じりのシルトで一気に埋められた様相が看られる。痕跡は認められなかったが壁面がほぼ垂直に立ち上がっていることから埋桶が埋設されていた可能性が高いものと考えている。遺物としては、桟瓦片や伊万里の染付碗などが出土している。

遺構 42（図 19　図版 10-2）

径 1.1 ｍ、深さ 0.6 ｍほどの円形の土坑である。底部付近に５～ 10㎝ 大の礫の堆積が認められたが、埋土としてはオリーブ色のシルトで一気に埋められた様相を呈していた。この土坑についてもその形状から埋桶であった可能性を考えている。砥石のほか江戸時代後期に帰属する伊万里の染付碗などが出土している。

遺構 35（図 19・24）

2.0 × 1.7 ｍほどの不正形な土坑で、深さは 0.4 ｍを測る。最上層は焼土混じりのにぶい黄橙色のシルトで、最下層には黒褐色の炭層が薄く堆積していた。遺物としては、江戸時代中・後期に帰属する施釉陶器などが出土しているが、中世の山茶碗や常滑など古い遺物も混在して出土している。このうち（28）は中国製の染付碗で、丸く内湾気味に立ち上がった体部には、やや紺色がかった呉須により果実らしい文様が描かれている。漳州窯の製品の可能性が高いと考えている。

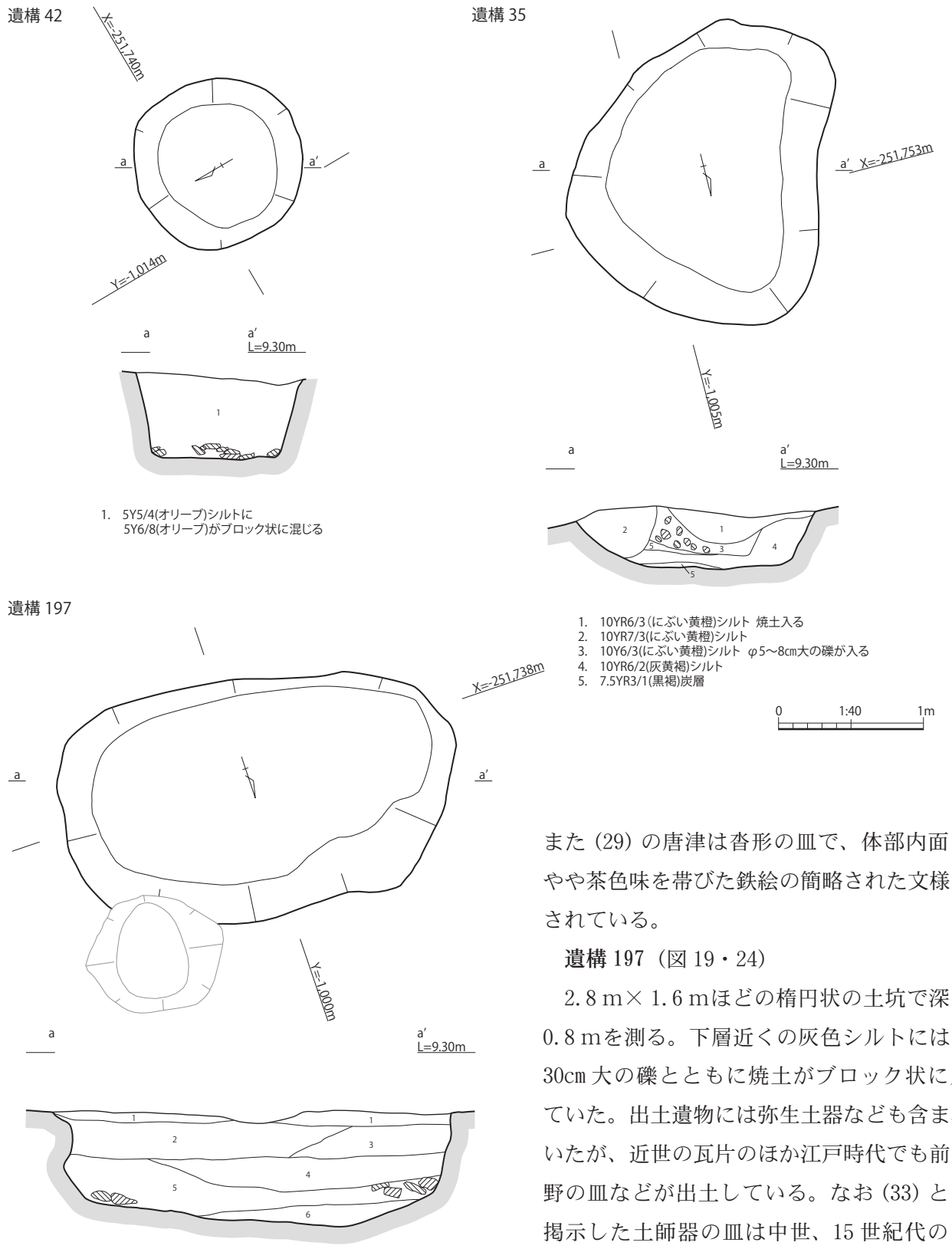


図19　遺構42・35・197

また（29）の唐津は沓形の皿で、体部内面にはやや茶色味を帯びた鉄絵の簡略された文様が施されている。

遺構 197（図 19・24）

2.8 m× 1.6 mほどの楕円状の土坑で深さは 0.8 mを測る。下層近くの灰色シルトには 5 〜 30㎝ 大の礫とともに焼土がブロック状に入っていた。出土遺物には弥生土器なども含まれていたが、近世の瓦片のほか江戸時代でも前半志野の皿などが出土している。なお（33）として掲示した土師器の皿は中世、15 世紀代のものである。

遺構 8（図 20・24）

長径 1.3 m、短径 1.0 mほどの楕円形を呈した土坑である。深さは 0.2 mほどと浅く、黄灰

色砂質シルトで漆喰が少量混じっていた。出土遺物としては江戸時代後期以降の磁器や施釉陶器片などが出土している。このうち（48）として図示したものは瓦質の甕である。口縁の上端部は水平で外側に肥厚している。推定口径は50cmほどであり、かなり大きな甕と考えられる。

遺構57（図20）

長径2.5m、短径2.0mほどの不正形な楕円状を呈した土坑である。深さは最も深いところで0.4mほどである。埋土は3層に分層でき、いずれも灰色を呈したシルトであるが、各層とも5～30cm大の礫のほかかなりの量の鉄滓が混じっていた。このことから、この遺構については鍛冶に係る可能性も考えられよう。なお、出土遺物としては常滑の甕や中国製の白磁や青磁などがあるものの近世の遺物が確認できておらず、一面で検出しているものの中世の遺構の可能性もあるものと思われる。

遺構47（図20・24）

一部撹乱を受けていることから、全容については判然としないが、長径1.6m、短径1.0mほどの楕円状を呈した土坑であったと思われる。深さは0.7mを測る。上層はにぶい褐色シルトで、焼土が混じっていた。出土遺物には中世の山茶碗や瀬戸の皿片などのほか近世初めの志野の皿（34・35）もあるが、江戸時代中頃の施釉陶器や磁器の碗などが認められた。

遺構37（図20）

径0.8mほどの円形を呈した土坑で、南側に偏した形で底部を欠いた甕が埋置されていた。この甕については、口縁部が欠損しており、産地及び年代については不明である。内部は灰オリーブ色の汚れた土で埋まっていた。出土している磁器碗からすれば、江戸時代後期以降の可能性が高い遺構である。

遺構 確1-1-22（図20）

径1mほどの円形の土坑で、上層には20cm前後の石がぎっしりと詰まっており、中に50cm×30cmほどの平らな石が水平を保って置かれていた。深さは0.7mほどで下層にはやや粘質の土が認められた。これらのことから礎石建物に伴う遺構と判断しているが整然とした並びは確認できなかった。

遺構59（図20）

径0.4mほどのピット状の遺構である。深さは0.4mほどで、埋土はオリーブ褐色のシルトにぶい黄色のシルトが粒状に混じっていた。出土遺物には中国製の青磁のほか常滑、瀬戸など中世の遺物が多く、近世の遺物は確認できていない。この遺構については、中世の可能性もある。

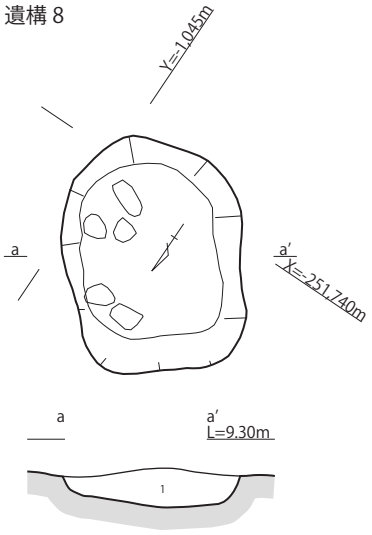
遺構68（図20）

径0.4mほどのピット状の遺構である。深さは0.2mほどで、埋土は暗灰黄色のシルトである。出土遺物がまったくなく、時期については不明である。

遺構640（図21）

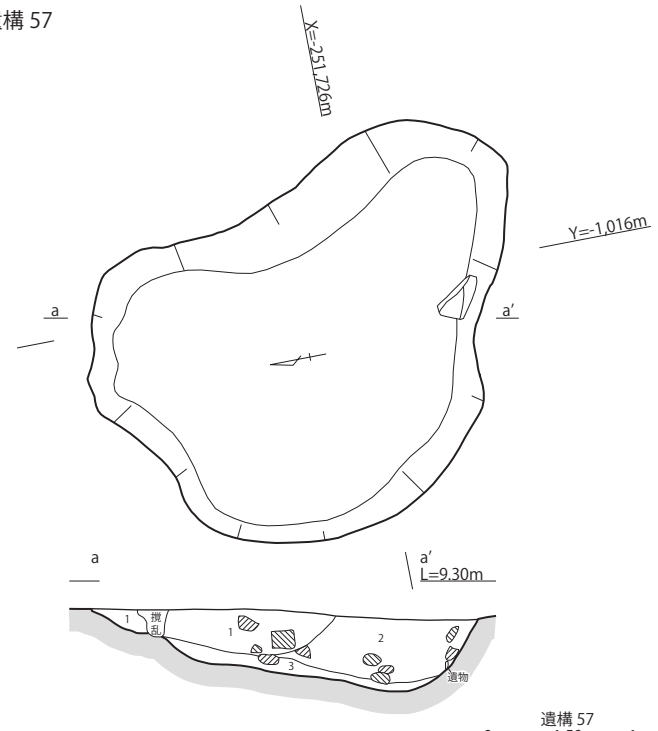
調査区南西側で検出した比較的大きな土坑である。北側及び南東部が撹乱を受けているため、全容については不明であるが長径1.8m以上、短径1.8mを測る楕円形状を呈するものと思われる。土層断面の観察の結果、遺構のほぼ中央に礎石と思われる40cm大の平らな石が据えられて

遺構 8



1. 2.5Y4/1(黄灰)砂質シルトに2.5Y5/3(黄褐)が混じる
漆喰土入る 瓦・礫少量入る

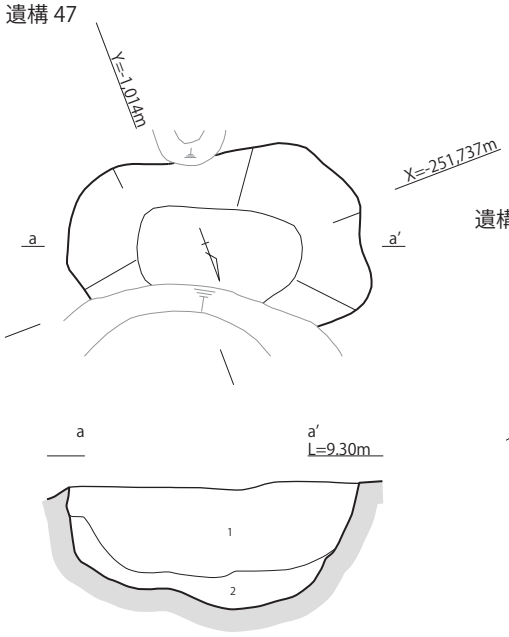
遺構 57



1. 5Y5/1(灰)シルト 5～20cm大の礫少量入る 金属少量入る
2. 5Y4/1(灰)シルト 2～30cm大の礫多量入る 金属少量入る
3. 5Y4/1(灰)シルトに5Y6/3(オリーブ黄)細砂混シルトが混じる

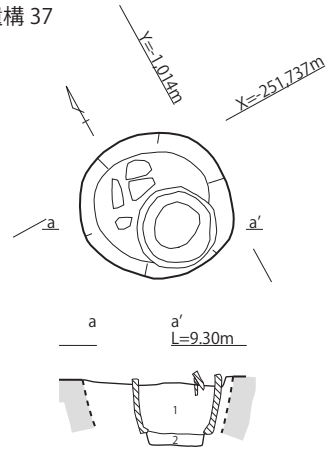
遺構 57
0 1:50 1m

遺構 47



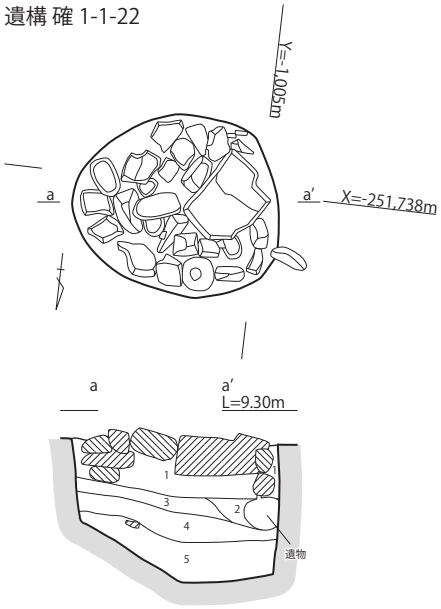
1. 7.5YR5/3(にぶい褐)シルト 焼土入る
2. 7.5YR4/1(褐灰)シルト

遺構 37



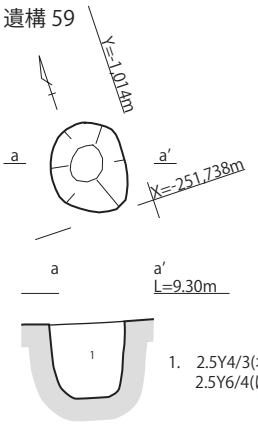
1. 5Y5/3(灰オリーブ)シルト 汚れた土
2. 5Y5/2(灰オリーブ)シルト

遺構 確 1-1-22



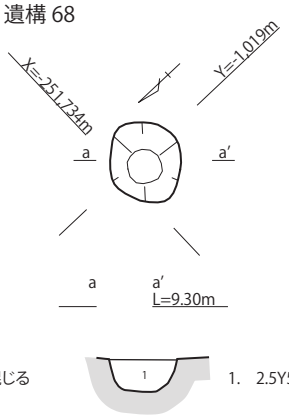
1. 2.5Y4/3(オリーブ褐)シルト 15～25cm大の礫が主体
2. 2.5Y3/3(暗オリーブ褐)弱粘質土
3. 2.5Y4/2(暗灰黄)シルト
4. 2.5Y5/4(黄褐)弱粘質土に2.5Y4/2(暗灰黄)シルト混じる
5. 2.5Y3/3(暗オリーブ褐)弱粘質土

遺構 59



1. 2.5Y4/3(オリーブ褐)シルトに
2.5Y6/4(にぶい黄)シルトが粒状に混じる

遺構 68



1. 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト

0 1:40 1m

図20 遺構８・57・47・37・確1-1-22・59・68

おり、この掘形と思われる堆積が認められた。このことから大きな遺構が埋まった後、後世にこの礎石状の石を据えている可能性が高い。ただし、最下層においても近世の瓦片などが出土しており、全体として近世の遺構と判断できる。

遺構 1-76（図 22）

幅 0.8 m、長さ 1.4 mほどの幅で 10cm ～ 30cm 大の石を敷き詰めた遺構である。石は一段で、掘形の深さは 0.1 mほどと浅い。埋土はにぶい暗灰色の砂質土で、明黄褐色シルトがブロック状に入っていた。比較的平らに敷かれていることから、通路などの一部であった可能性があろう。出土遺物はまったく確認されていない。

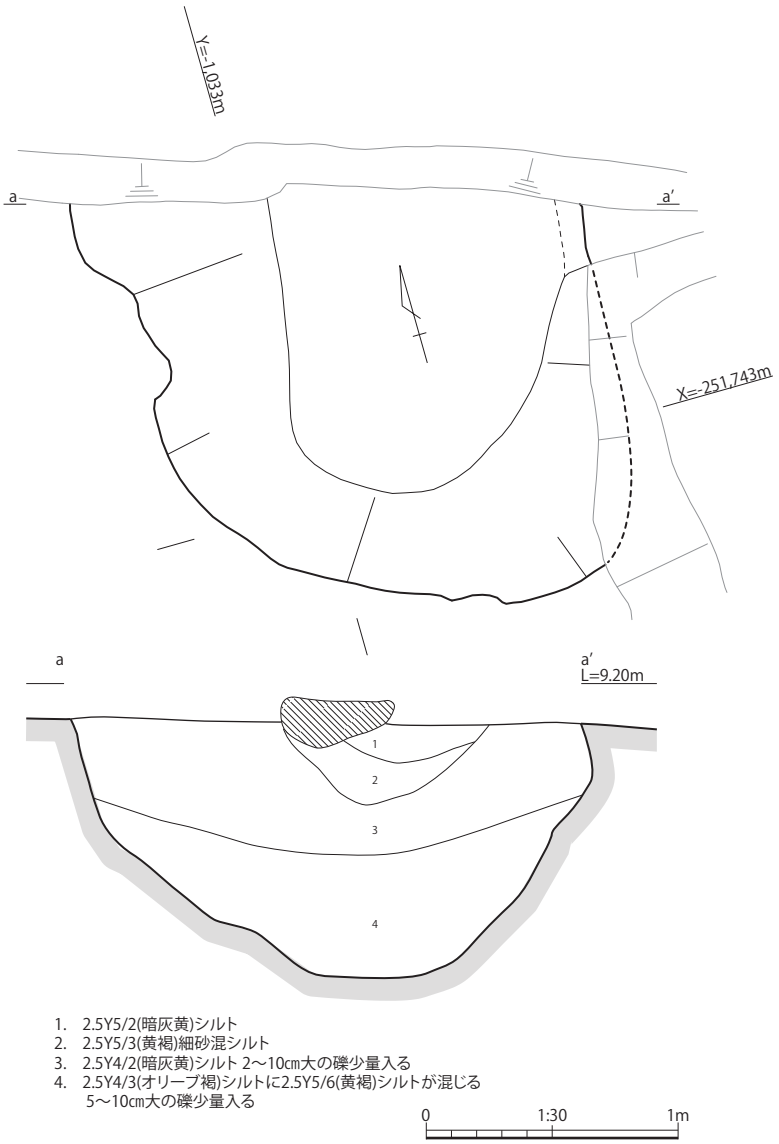


図21　遺構640

遺構 1-81（図 22）

1.0 m× 0.6 mほどの楕円形状で、5cm ～ 30cm 大の石を用いた集石遺構である。当初、建物に伴う礎石を据えるための根石と考えたが、掘形の深さは 0.8 mほどと深いこと、また底部まで石が入っていることなどからその可能性は低いものと判断している。なお、この遺構からも遺物は出土していない。

遺構 1-55（図 22）

1.5 m× 1.0 mほどの楕円形状を呈する土坑で、深さは 0.25 mを測る。埋土は灰色ないし灰オリーブ色のシルトであった。出土遺物は多く、縄文土器 1 点を含む古墳時代の須恵器や中世の山茶碗など古い時代のものが多く出土しているが、これらに混じって江戸時代中期の瀬戸の鉢を確認している。

遺構 1-63（図 22）

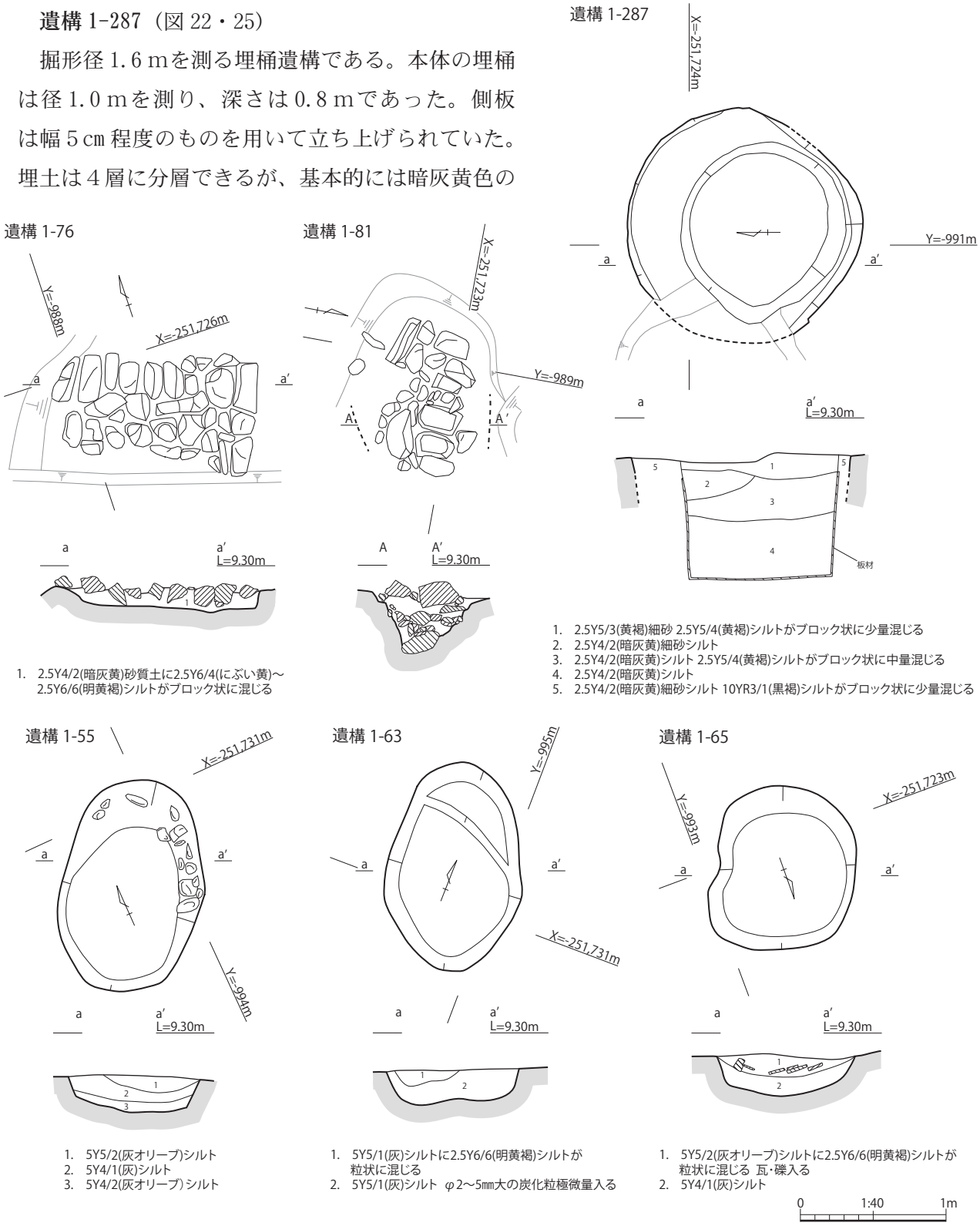
1.5 m× 1.0 mほどの楕円形状を呈する土坑で、深さは約 0.20 mを測る。埋土には細かな炭化粒がごく微量であるが認められた。遺物としては、山茶碗や常滑の甕など中世に帰属する時期のものばかりであったが、検出面から近世の遺構と判断した。

遺構 1-65（図 22）

やや歪であるが、1.1 m× 1.0 mほどの円形状を呈する土坑で、深さは約 0.25 mを測る。上層の灰オリーブ色のシルトには礫のほか桟瓦片が多く含まれていた。そのほか出土遺物としては瀬戸の灰釉水鉢のほか備前の擂鉢などがある。

遺構 1-287（図 22・25）

掘形径 1.6 mを測る埋桶遺構である。本体の埋桶は径 1.0 mを測り、深さは 0.8 mであった。側板は幅 5 ㎝ 程度のものを用いて立ち上げられていた。埋土は４層に分層できるが、基本的には暗灰黄色の



1. 2.5Y4/2(暗灰黄)砂質土に2.5Y6/4(にぶい黄)～2.5Y6/6(明黄褐)シルトがブロック状に混じる

1. 2.5Y5/3(黄褐)細砂 2.5Y5/4(黄褐)シルトがブロック状に少量混じる
2. 2.5Y4/2(暗灰黄)細砂シルト
3. 2.5Y4/2(暗灰黄)シルト 2.5Y5/4(黄褐)シルトがブロック状に中量混じる
4. 2.5Y4/2(暗灰黄)シルト
5. 2.5Y4/2(暗灰黄)細砂シルト 10YR3/1(黒褐)シルトがブロック状に少量混じる

1. 5Y5/2(灰オリーブ)シルト
2. 5Y4/1(灰)シルト
3. 5Y4/2(灰オリーブ) シルト

1. 5Y5/1(灰)シルトに2.5Y6/6(明黄褐)シルトが粒状に混じる
2. 5Y5/1(灰)シルト φ2～5㎜大の炭化粒極微量入る

1. 5Y5/2(灰オリーブ)シルトに2.5Y6/6(明黄褐)シルトが粒状に混じる 瓦･礫入る
2. 5Y4/1(灰)シルト

図22　遺構1-76･1-81･1-287･1-55･1-63･1-65

シルトもしくは細砂である。出土遺物としては、伊万里の染付碗のほか瀬戸の灰釉徳利、(56)として図示した釘などが出土している。

遺構 52（図 23　図版 10-3）

調査区の南東側で検出した溝である。東南東から西北西方向に長さ 13 mに渡って検出した。その両端でほぼ直角に屈曲していることから、建物などを囲繞する溝と考えられるものである。溝幅は 0.4 m前後、深さは浅い箇所で 0.2 m、深い箇所で 0.3 mを測る。出土遺物は少ないが江戸時代中・後期に帰属すると思われる磁器碗や施釉陶器片を確認している。

なお、仮に建物に伴う溝とすると、その建物の軸線は N-30°-E である。この向きはこの辺りの町割りの基準と考えられる河原町通りの軸線と合致するものではなく、約 10 度東に偏している。

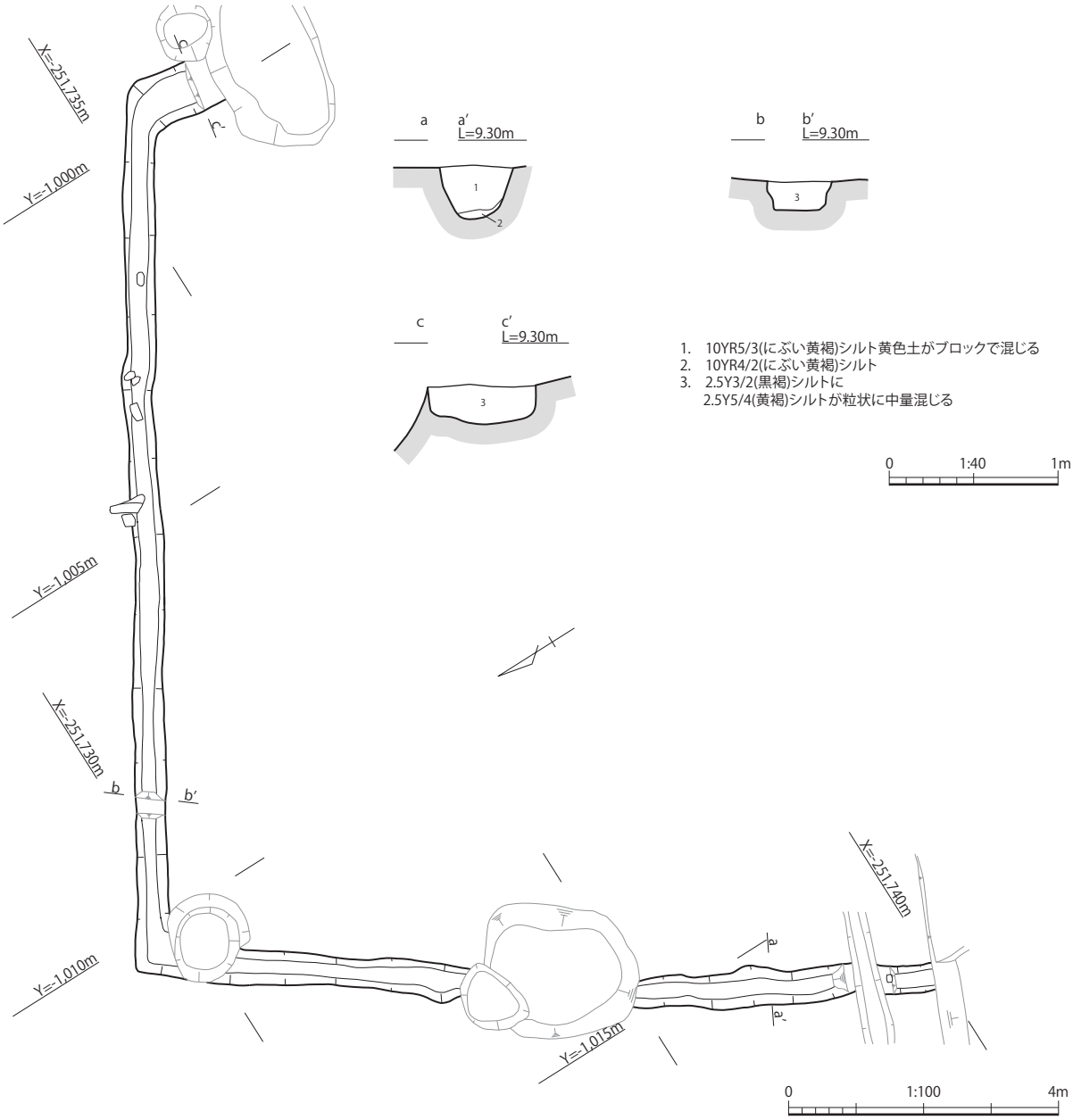


図23　遺構52

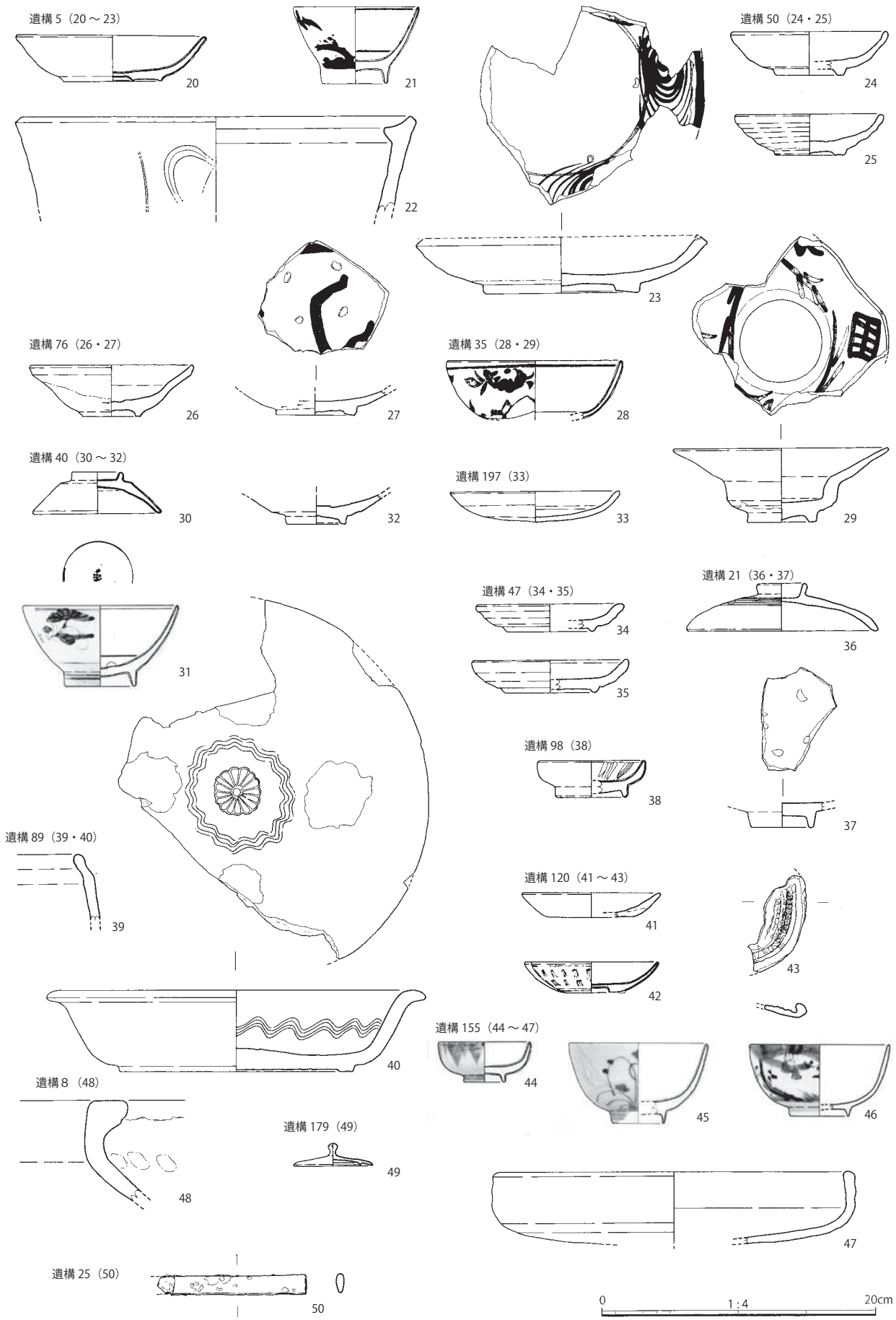


図 24　遺構 5・50・76・35・40・197・47・21・98・89・120・155・8・179・25 出土遺物

その他の特殊な遺構

その他の特殊な遺構としては、石積みの地下式倉庫がある。これらの遺構は石の積み具合や埋土から出土する遺物からも明かに新しいもので、近代以降に帰属するものである。ただ、後述する中世の地下式倉庫との関連が窺われることから、あえてここで遺構図も含めて詳細な説明を掲載しておくこととする。

遺構 205（近代の地下式倉庫）（図 26　図版 12）

調査区の東端で検出された石積みの地下式倉庫である。検出当初、近世のものと考えたが、掘り進める中で、最下層から昭和前半頃の遺物を確認した。このこ

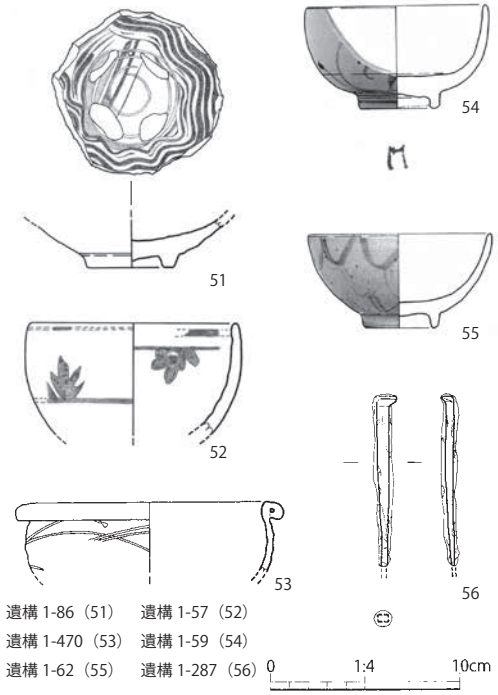


図 25　遺構 1-86・1-57・1-470・1-97・1-62・1-287 出土遺物

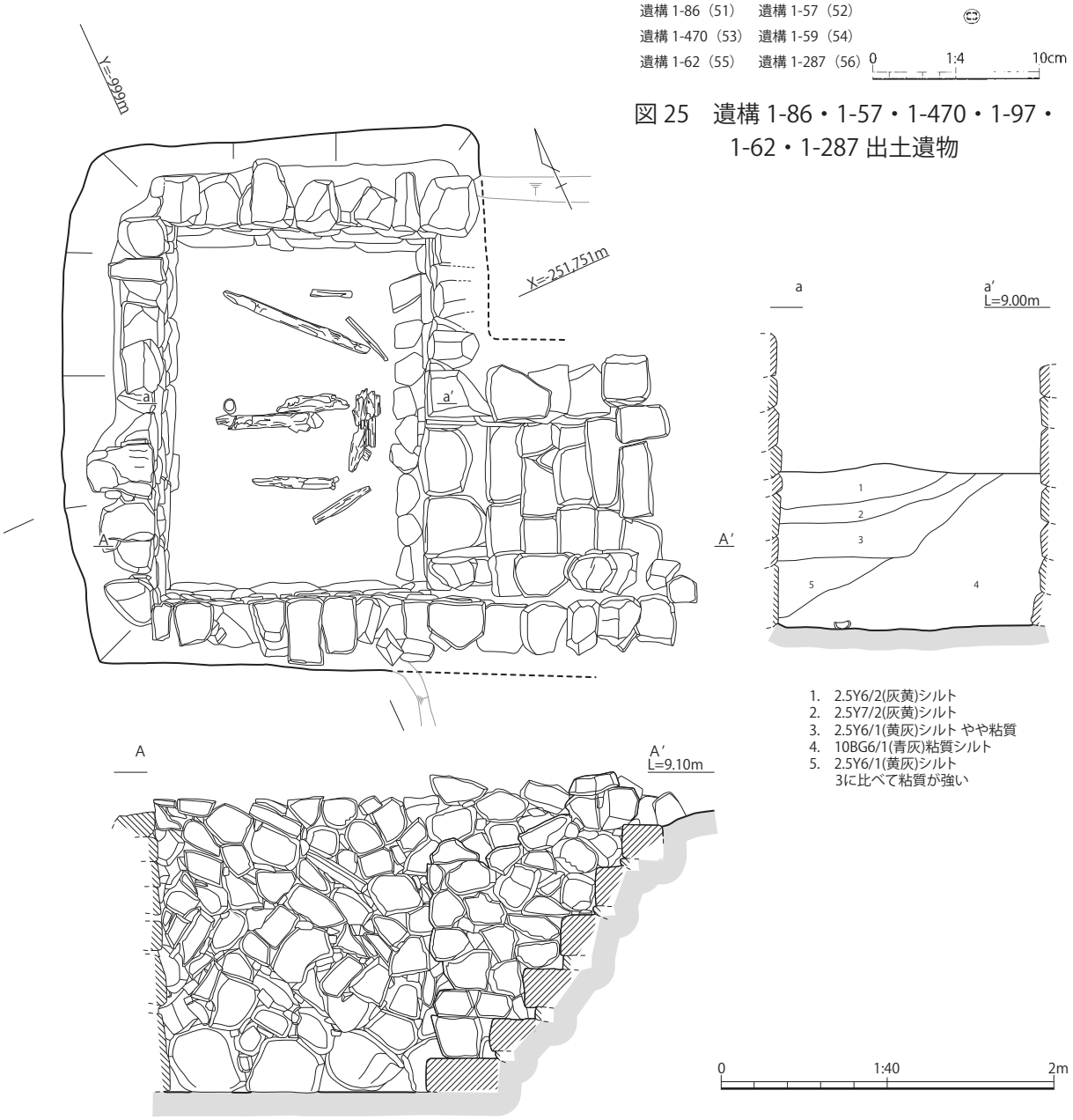


図26　遺構205

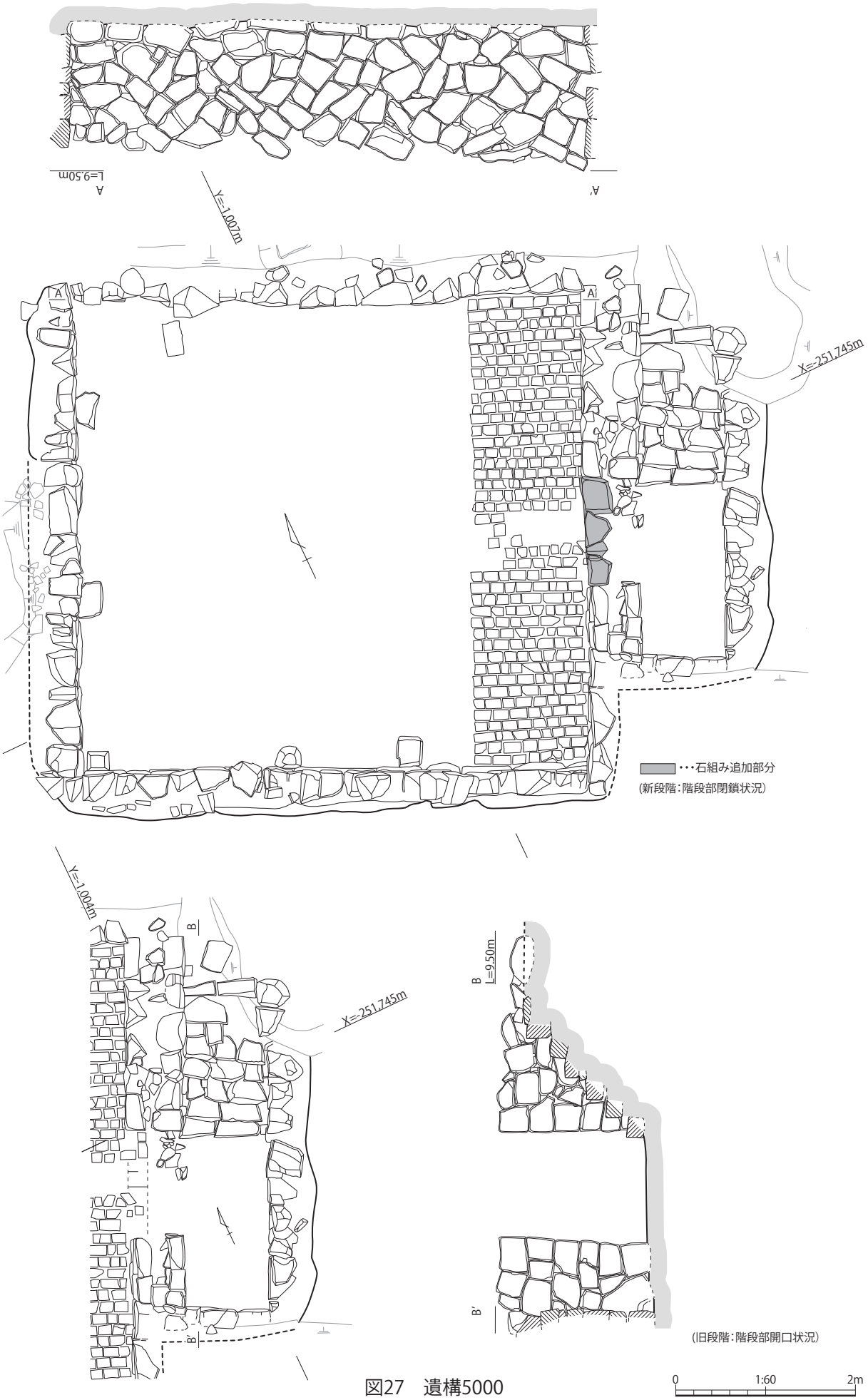

A
A'
L=9.50m
Y=-1.007m
X=-251.745m
・・・石組み追加部分
(新段階：階段部閉鎖状況)
Y=-1.004m
B
B'
L=9.50m
(旧段階：階段部開口状況)
0
1:60
2m

図27　遺構5000

とからこの倉庫については近代以降の所産と判断した。

本体の平面プランは 2.2 m× 1.6 mの長方形で、深さは 1.7 mを測る。この東辺の南側に幅 1.1 m、長さ 1.2 mの石段になった昇降口が設けられている。用いられている石は 20 ～ 30㎝大のものが主で、落とし込み技法によって積まれているが、最下層の石は 50㎝前後の比較的大きな石が用いられていた。

この遺構は、後述する中世の石積みの地下式倉庫に重複するかたちで作られており、このことから底部の石については中世のものを転用している可能性も考えられよう。なお、埋土に後述する遺構 5000 に見られるような昭和 21 年の震災に伴う焼土類はまったく含まれていなかった。このことからこの遺構については、昭和 21 年までに廃絶されていたものと考えている。

遺構 5000（近代の地下式倉庫）（図 27　図版 11）

調査区のほぼ中央、確認調査（２）の４トレンチで過半を検出していたものである。第２次発掘調査時に残りの部分を発掘し、全容を解明することができた。それによれば平面プランは東西 5.6 m、南北 5.3 mとほぼ方形であるが、若干東西方向が長くなっていた。深さは 1.6 mを測る。この方形の東辺側に地下室部分とは独立した長方形の入口部（昇降口）を設けていた。入口部は幅 0.9 m、長さ 3.8 mで、北から南に下る石段を築いている。この入口部から地下室の本体部への出入りには、東壁に空いた幅 1.2 mの間口より出入りする構造となっていた。

地下室の壁の石積みは基本的に 40 ～ 50㎝大の花崗斑岩を使い、落とし込み技法を用いて築かれているが、この東壁に空けられた入口の両サイドだけは切石積みで丁寧に仕上げられていた。なお、ある時期この壁面の入口が閉塞され地下室が独立した形となっている。当初、違う場所に新たに入口を設けたものと考えたが、いずれの壁面にもそうした痕跡は認められなかった。このことからおそらく梯子などで直接昇降していたものと判断される。地下室の平面は平らで、東側の壁面に沿って 1.2 mの幅で煉瓦が敷かれていた。煉瓦は基本的に打ち欠いたものを使用しており、東西方向の目地が揃うように規則正しく配されている。煉瓦の寸法は 230 ㎜× 110㎜ × 62㎜で、五弁花と思われる径 2㎝ほどの刻印が認められるものを確認している。また、西側及び南側の壁面沿いには上部が平坦な切石が据えられており、これらは礎石と考えられる。地下室の上部構造は、入口部の埋土に多量の壁土が入っていたことからも土蔵であった可能性が高い。昭和前半代の地図などでは、現地には醤油工場があったことが窺え、地下室は醤油工場の倉庫であったと可能性が考えられる。

なお、この地下室の埋土には昭和 21 年の昭和南海地震に起因すると思われる焼けた瓦や焼土などがぎっしりと埋まっていた。このことから火災からの復興に際して、震災後時間を経ずにこの空間に大量の焼土や灰塵を一括投棄したものと判断できる。

写真 22　東壁入口部の閉塞状況

第３節　第２遺構面の遺構と遺物

第２遺構面は第１遺構面から概ね 0.3 mほど下がった標高 8.8 m前後である。ただし、熊野川に近い調査区の北側では一段低くなっており、標高 7.2 m前後であった。この面で検出される遺構の時期は弥生時代、古墳時代など古いものから鎌倉時代初めから室町時代後期の中世のものまでときわめて時期幅が広い。ただし前述した北側の一段低い場所では、弥生・古墳時代はもとより鎌倉時代の遺構・遺物とも検出されておらず、中世でも後半、室町時代に入ってからのものである。このことから中世後半段階までは、自然堤防上の高い部分に遺跡が展開しており、その後川側に向かって範囲を広げていった様が窺われる。

遺構としては、掘立柱建物、大型土坑、湊に係る貯蔵施設と思われる地下式倉庫などがある。なお、地下式倉庫の名称は、用途としての認識であり、遺構としては本来的には「竪穴建物」と認識すべきものと考えており、以下の記述では竪穴建物として取り扱う。

包含層出土の遺物（図 29 ～ 31　図版 42）

包含層の遺物量はきわめて多く、また時期的にも弥生時代、古墳時代、鎌倉～室町時代と重層して出土している。詳細な検討は第５節で述べるが、大まかな傾向を概説しておけば弥生時代では、前・中期に帰属するものは極めて少なく、後期、それも後期後半段階のもが多い。また古墳時代では、弥生時代から続く前期及び中期の遺物は一定量認められるが、後期のものを欠いている様相が認められる。

中世については、鎌倉時代はじめから室町時代を通して増減はあるもののほぼ認められ、全体量としては、中世に帰属するものが圧倒的に多い状況であった。

以下、図示したものについて概説する。(57) は須恵器の坏蓋で、口径 14cm ほど、天上部はやや丸みを帯びはじめておりⅡ型式の後半段階に帰属する時期のものと思われる。(58 ～ 60) は志野の丸皿、(61 ～ 64) は唐津の碗・皿類である。志野については、いずれも登窯第１段階に帰属するものと思われ、唐津についても胎土目痕が認められるなど 16 世紀末から 17 世紀の初めまでに収まる一群と考えている。第１遺構面の遺構の掘り残しの可能性もあるが、一定量包含層から出土していることを報告しておく。

山茶碗の皿のうち (67) は尾張第５型式に該当する製品で、(68) については渥美の第５型式の可能性が高いものと考えている。このうち (68) の外底部には墨書が認められたが判読に至っていない。土師質の鍋 (69 ～ 73) にはさまざまなタイプが認められる。内側に屈曲した口縁部下に突帯の巡るもの (70) については、16 世紀段階の南伊勢の羽釜形のものの可能性が高い。また口縁部が「く」の字上に大きく外反し、端部を上方につまみ上げている (72・73) についても南伊勢の製品で、中世後半期のものである。(71) の鍋は器壁が厚く、焼成もしっかりした製品である。口縁部が受け口状に開いていることから讃岐もしくは備後あたりの製品の可能性を考えている。

(74 ～ 76) は瓦質の製品で、このうち (75) は口径 12cm、器高 5cm 足らずの小振りな製品で、体部中央に円形浮文を貼り巡らせ、その上下にスタンプによる精緻な文様が施されている。大きさや作りの丁寧さから仏具として用いられた容器の可能性が高いと考えている。

図28　第2遺構面　遺構平面図

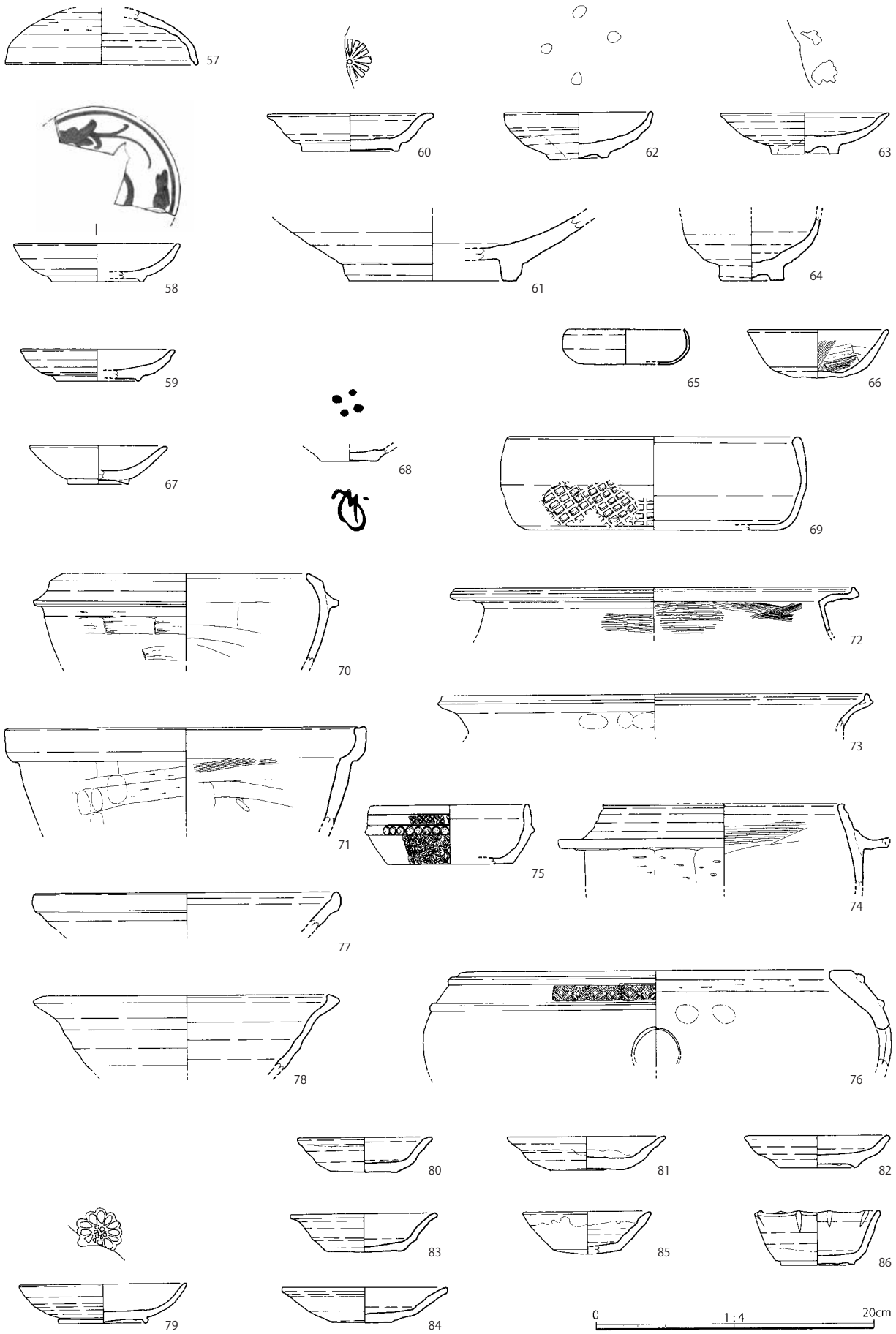


図 29　中世の包含層出土遺物（1）

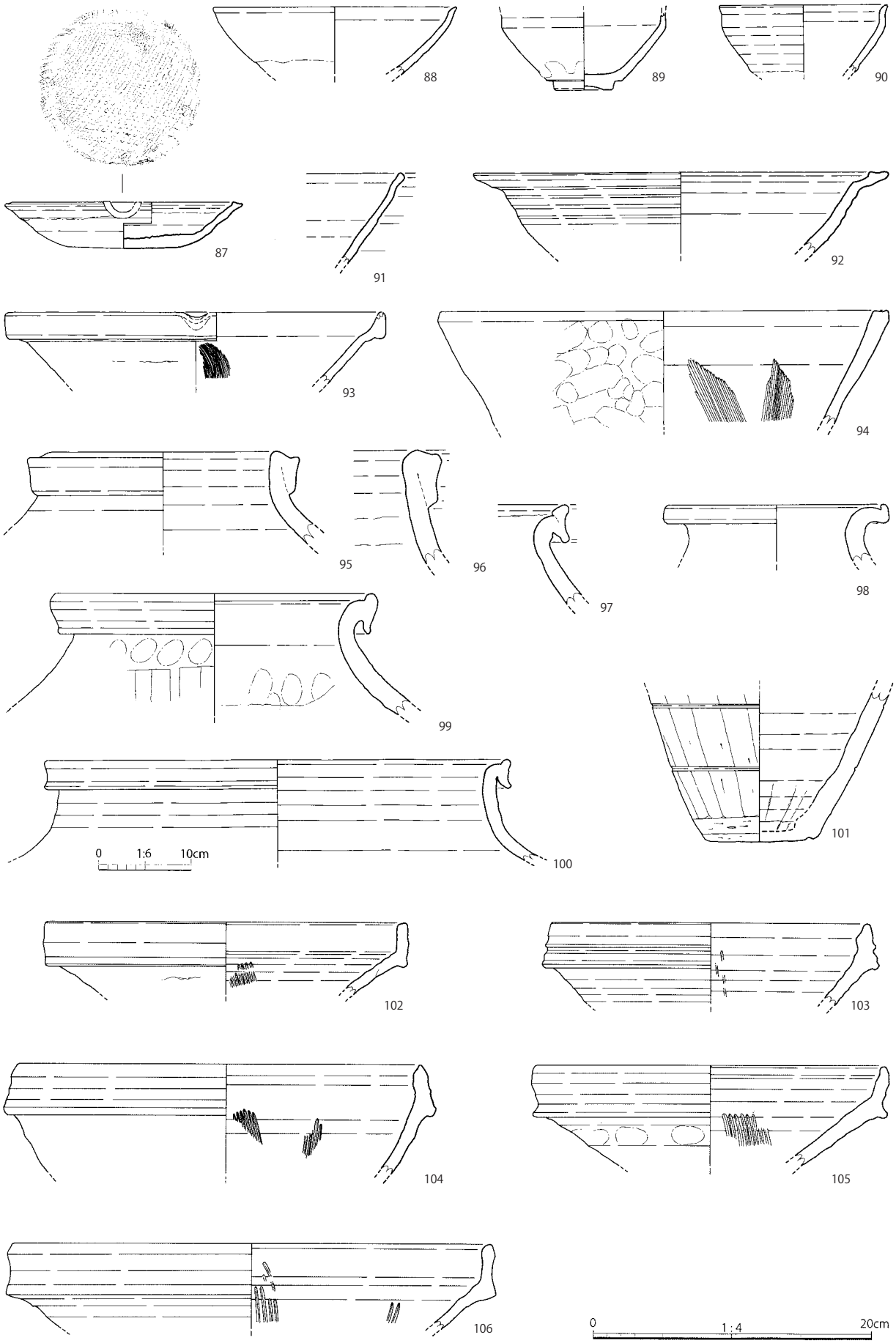


図 30　中世の包含層出土遺物（2）

(77・78) は東播系の須恵質のこね鉢で、口縁部の形態から 13 世紀前半代くらいの製品であろう。瀬戸の皿には、低い高台を伴う (79・82) や平らな底面からやや外反気味に立ち上がるタイプ (83・84) などが認められる。(86) は鉄釉を体部下半まで施した輪花の小鉢、(87) は片口のある卸皿である。そのほか瀬戸の製品としては平碗 (88) や天目茶碗 (89・90) や折縁の深皿 (92) などさまざまな器形が認められる。瀬戸の型式区分で言えば概ね古瀬戸後Ⅱないし Ⅲ期、14 世紀末から 15 世紀前半段階に帰属する時期のものが大半であるが、前述した卸皿 (87) や折縁深皿 (92) などは古瀬戸後Ⅰ期、14 世紀前半～中頃くらいと一時期古い可能性があろう。

壺・甕としては常滑の製品 (95 ～ 100) が多い。口縁部の形態からみれば、外反した口縁部の端部が上方に立ち上がり「L」字になる 13 世紀中頃のもの (98) から、「N」字状の口縁がひしゃげてくっつく 15 世紀に入るタイプのもの (95・96) のほか、その中間形態のもの (97・99) がある。

(101) の壷については口縁部を欠いているため判然としないが、体部下半に二条の沈線が巡ることや体部の色調及び胎土などから 13 世紀はじめの渥美の可能性が高いものと考えている。

擂鉢では備前の製品 (102 ～ 106) が多い。口縁部に凹線の入らない備前Ⅳ期の後半段階 (15 世紀初め) のタイプ (106) から 16 世紀代の凹線の入るもの (103) ものまで時期幅がある。なお (94) として提示した擂鉢は瓦質であるが、焼成が堅密で一見須恵質に見える。口縁上端部はナデ調整によりかすかに窪んでいるがほぼ水平に整えられている。内面のすり目は一単位 2cm 強で目は細く浅い。あまり類例を見ないものであり、時期・産地とも不明であるが基本的には瓦質のこね鉢であることから 14 世紀後半から 15 世紀でも前半に帰属する時期のものと推定している。

備前の甕 (108 ～ 110) も口縁部の形態から時期幅が認められる。端部が宝珠形に近い丸みをもつもの (108) は備前Ⅲ期、14 世紀代と考えられるが、凹線が入らないものの扁平となっているタイプ (109) などはⅣ期、15 世紀代のものといえる。中国製の磁器では、無紋の青磁 (112) のほか白磁 (114 ～ 117) がある。このうち (114) の白磁皿は口縁端部が外反するもので 16 世紀中ごろから後半に盛行するタイプの皿である。逆に (115・116) の皿は、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾気味に立ち上がるもので、一時期古く 15 世紀代のものと考えられる。このうち (116) の底部外面には朱漆で 5mm ほどの丸い点が 2 個記号のように描かれていた。(117) は割り高台の皿で、体部下半から高台にかけて露胎となっており、軟質の白磁である。これについても 15 世紀代の製品である。(118) は中国製の染付けの皿であるが、焼成が甘く内底部の釉を重ね焼のために輪状に削り取っており全体に粗雑なつくりである。おそらく明末期の漳州窯の製品と思われる。

石製品としては滑石製の石鍋 (119) がある。口縁端部は水平で、口縁部下に断面台形状の突帯が巡るタイプのものである。比較的丁寧なつくりで、体部には縦方向の細かな削り痕が残る。

金属製品では刃渡り 24cm を測る小刀もしくは包丁と思われるもの (120) がある。両刃で、厚さは 0.8cm ほどとかなり厚く重厚なつくりとなっていることから鉈などの機能を果たした可能性もあろう。一応中世のものと考え掲示しているが、出土地点付近は撹乱が多かったことや、錆による腐食が少なく遺存状況がよいことなどから、撹乱からの出土も疑われる製品であることを付言しておきたい。 (121) は銅製で飾り金具の一種と考えているが、具体的な用途・部位につい

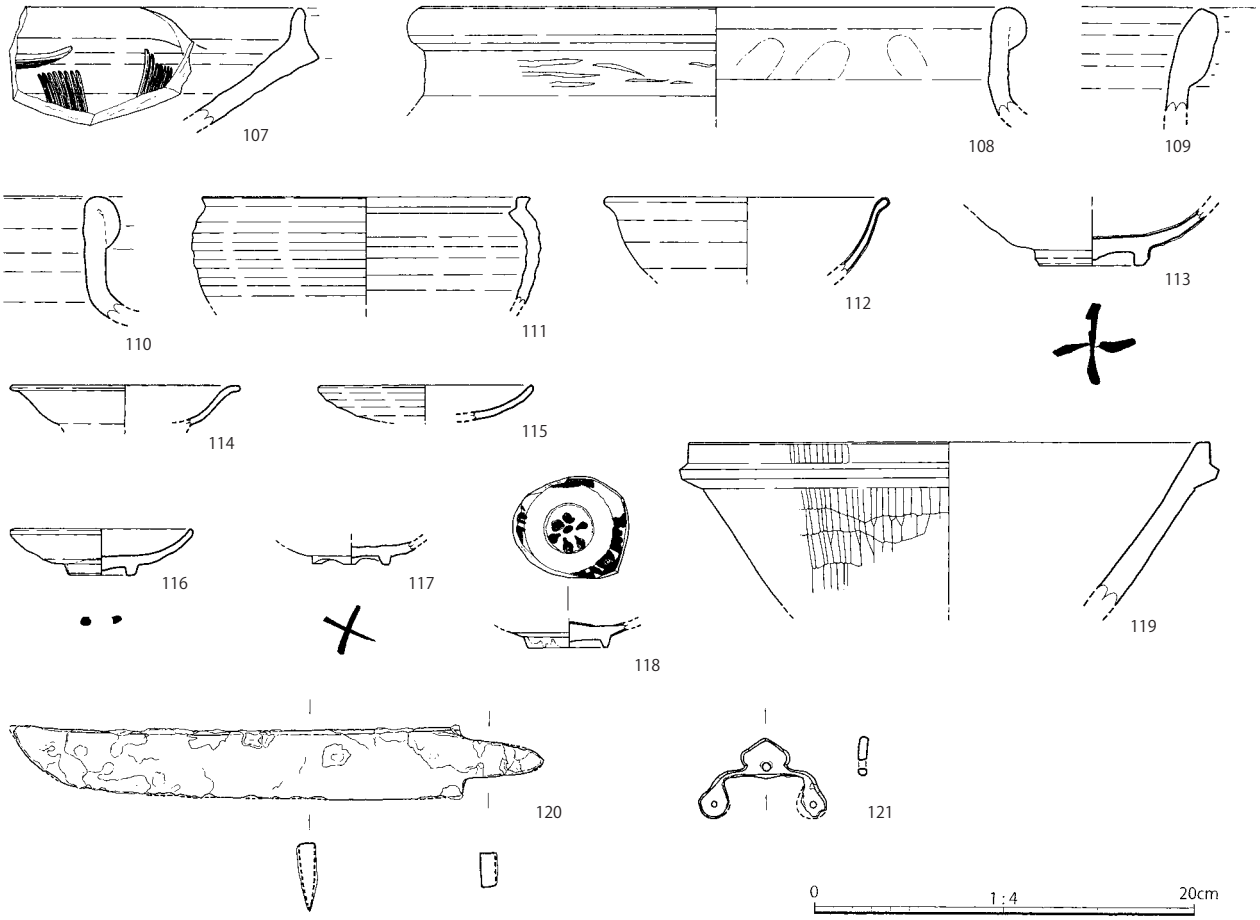


図 31　中世の包含層出土遺物（3）

ては不明である。

1．竪穴建物

遺構 300（石積みの地下式倉庫）（図 32 ～ 35　図版 16・17）

石積みの地下式倉庫で、北側部が近代の井戸により破壊されているため、全容は不明である。少なくとも 2 度の造り替えをおこなっており、その変遷については、図 32 内に提示したがⅠ期は南辺の西よりに昇降口と思われる小さな部屋が取り付く。この昇降口の規模は東西 1.3 m、南北 1.5 m、深さ 0.6 mを測る。倉庫本体の規模は東西 2.5 m、南北 2.0 m以上で深さは 0.9 mを測る。使われている石は熊野川流域で産する花崗斑岩で、0.2 ～ 0.8 mほどの石を横積みにしている。ついでⅡ期は規模を縮小して東辺の南寄りに昇降口を取り付けたものになる。この昇降口は石段になっていた。この期の昇降口は東西 1.0 m、南北 0.9 mを測る。倉庫本体部は東西 1.9 mと規模を縮小させている。

最終Ⅲ期段階のものは、本体部の西辺の北寄りに昇降口が取り付くもので、過半が撹乱を受けており詳細は不明であるが規模的には前段階のものと大差ないものと思われる。なお各期とも石積みであり、なおかつその石面を覆うように黄色の粘土質の土が厚さ 2 ～ 3cm ほどの厚さで塗布されていた。また、倉庫本体部の床面も同じ土で貼られていた。

なお、Ⅰ期の昇降部の床面を少し掘り下げ精査した結果、南辺部の両サイドで径 25cm、深さ

20㎝ほどの柱穴を検出した。このことから昇降部にも上屋が架けられていたことが推察される。また、この床面で長軸 1.0 m、短軸 0.6 m、深さ 0.15 mほどの不正形で皿状の土坑が検出された。この土坑を遺構 3140 として掘り進めた結果、底面付近で 10 枚の中国銭が出土した。銭貨の出土

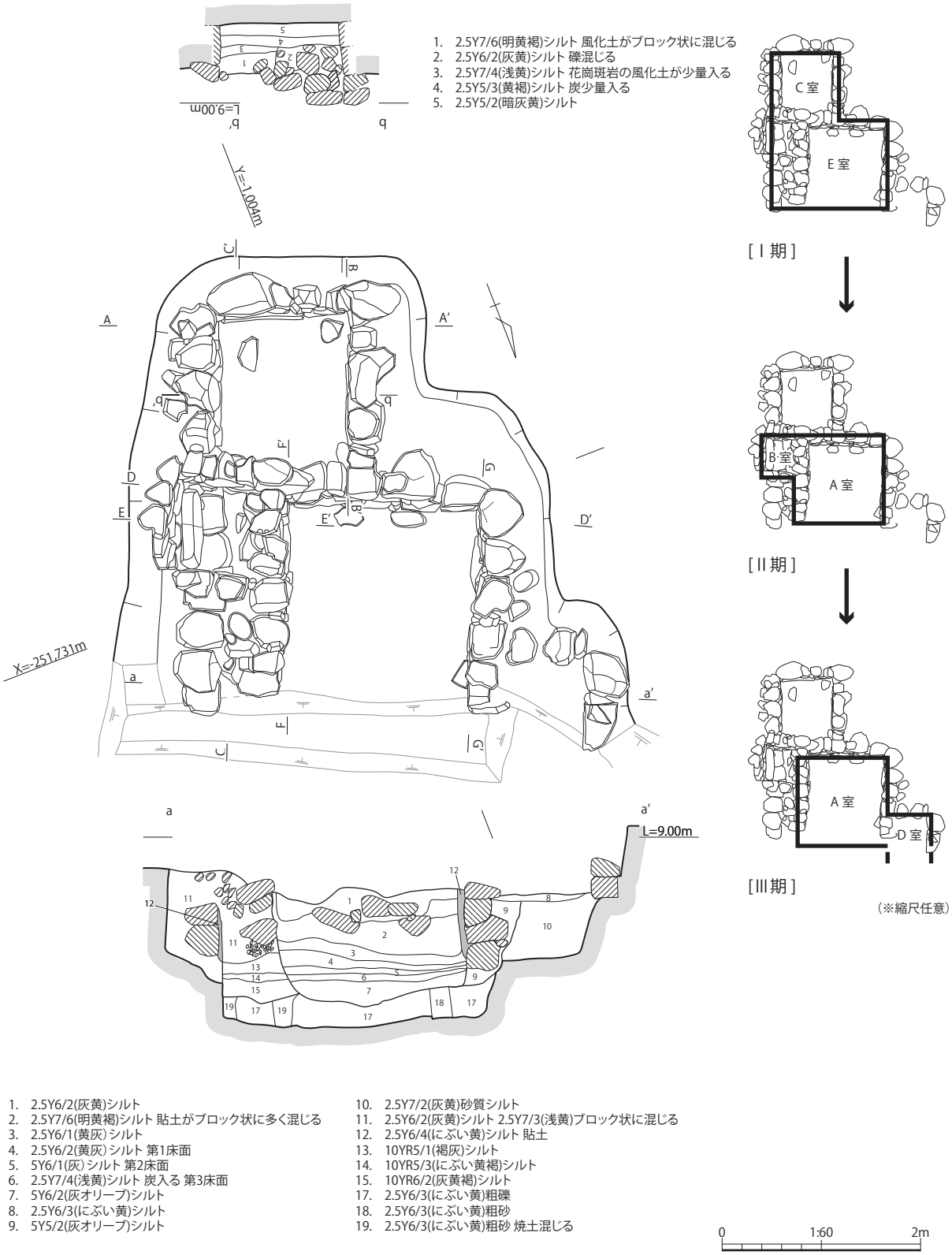


図32　遺構300及び建替変遷概略図

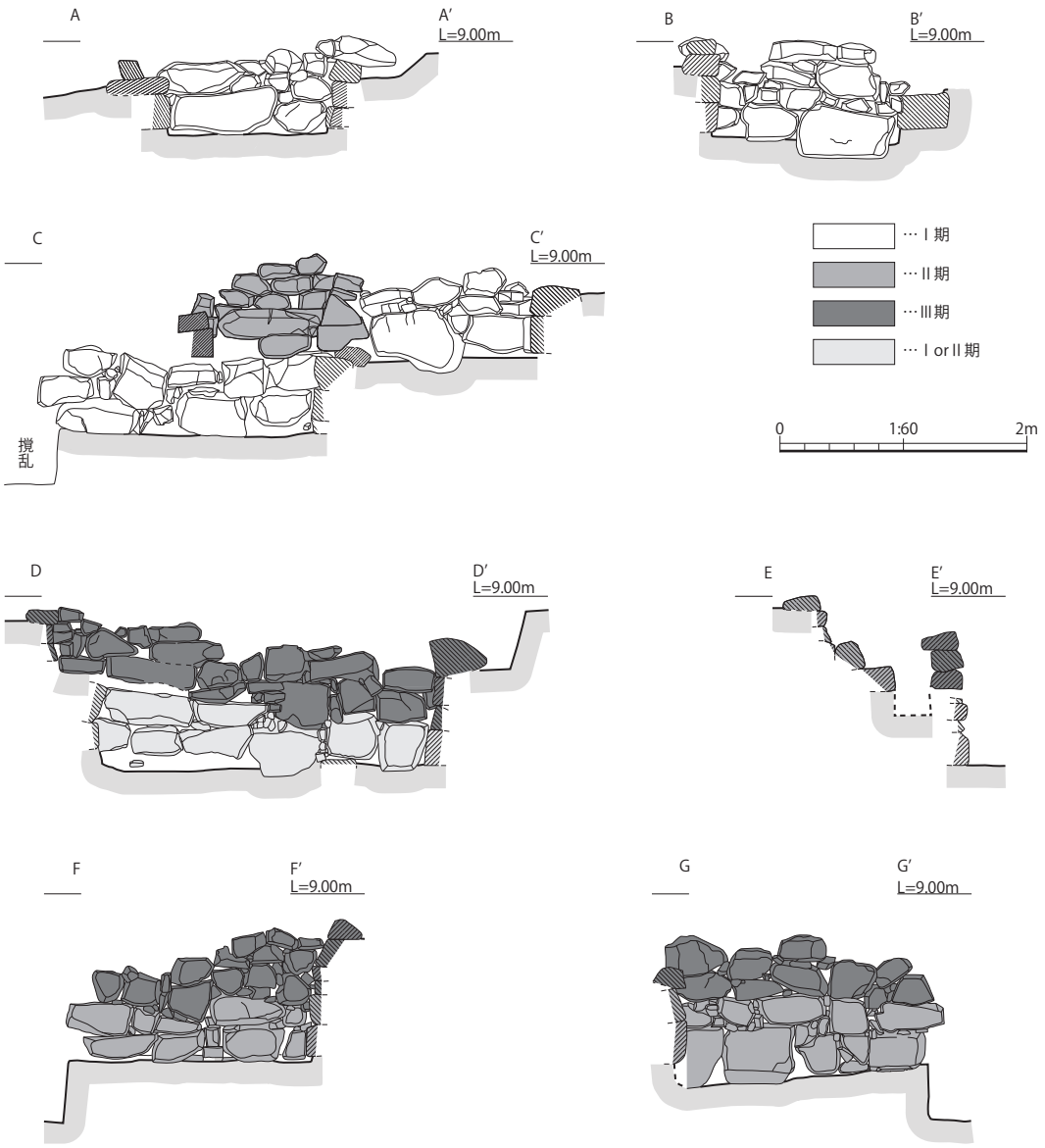


図33　遺構300

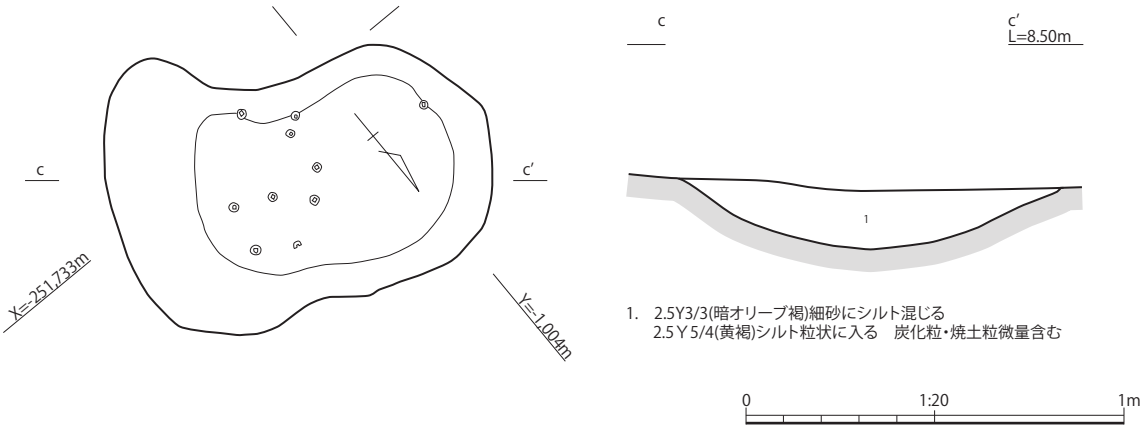


図34　遺 構3140

状況は整然とした配置を示すものではないが、この地下式倉庫の築造にあたって埋納した地鎮遺構の可能性が高いものと考えている。出土した銭貨の種類は唐代の開元通寶（132）や宋代の元豊通寶（137）、明代の洪武通寶（131）など何種類かが確認できるが、確認できたなかでもっとも新しいものは15世紀初めの永楽通寶（129）である。このことからこの遺構300としている地下式倉庫については少なくとも15世紀初め以降の築造と判断できよう。

出土遺物としては、A室から土師器の皿や青磁の碗が出土している。このうち土師器の皿（122）は器壁がきわめて薄く、体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾気味に立ち上がるもので、南伊勢の15世紀後半段階の土師器皿と考えている。（123）の青磁は畳付け部のみ露胎で、釉は淡い草緑色を呈し、外面底部に朱漆による三角形状の記号のようなものが描かれていた。C室から出土している天目茶碗（124）は中国製である。A室とE室の境付近で出土した青磁の碗（125）は体部に片切彫によるやや雑な蓮弁が施されている。また青磁の盤（126）は畳付けも含めて全面に釉が施されている。いずれも14世紀代と一時期古い様相を呈している。E室の床面から出土した白磁の皿（127）は体部下半が露胎となるもので、口径9cmほどの小振りの皿である。15世紀代の製品であろう。常滑の甕（128）は口径43cmを測る大甕になるもので、「N」字状の口縁部は、ひしゃげているものであり、15世紀中頃を前後する時期のものと考えられる。これらの遺物から本遺構の廃絶時期については、15世紀後半段階と判断している。

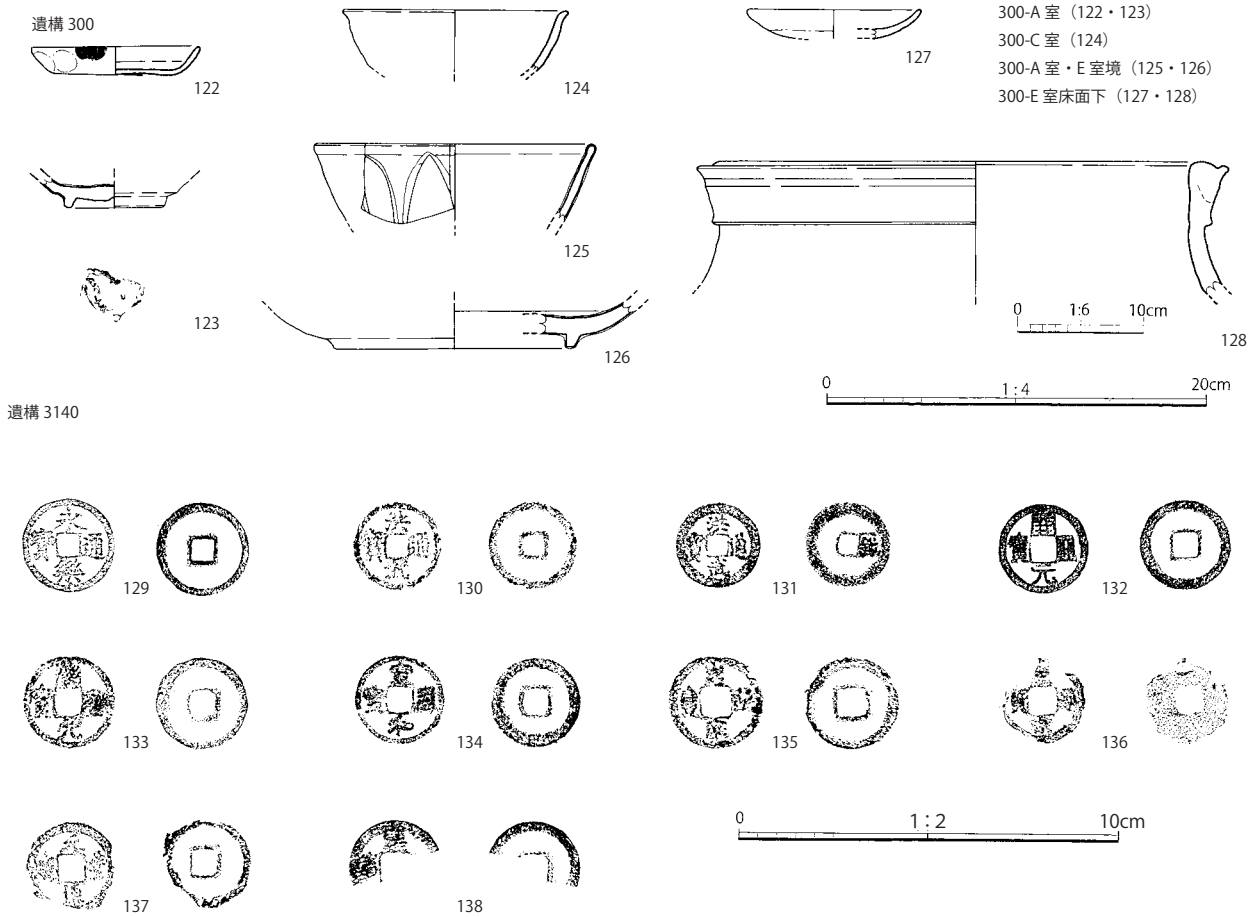


図35　遺構300・3140出土遺物

遺構 414（石積の地下式倉庫 ）（図 36・38　図版 18-1･2）

石積みの地下式倉庫で、石積みは西辺と北辺の一部を欠いているが、本来は四周していたものと思われる。検出した掘形から平面プランは一辺 3.3 mの正方形であった可能性が高い。石積みは最下段に 0.7 m前後の比較的大振りな石を用い、それより上の積みについては 0.5 m前後の少し小振りの石を横積みにしている傾向が窺われる。検出した石積みの高さは 0.9 m前後で、基本的には 3 段積みであるが、検出面から床面までの高さが 1.0 mあることから、もう一段積まれていた可能性が高いものと思われる。

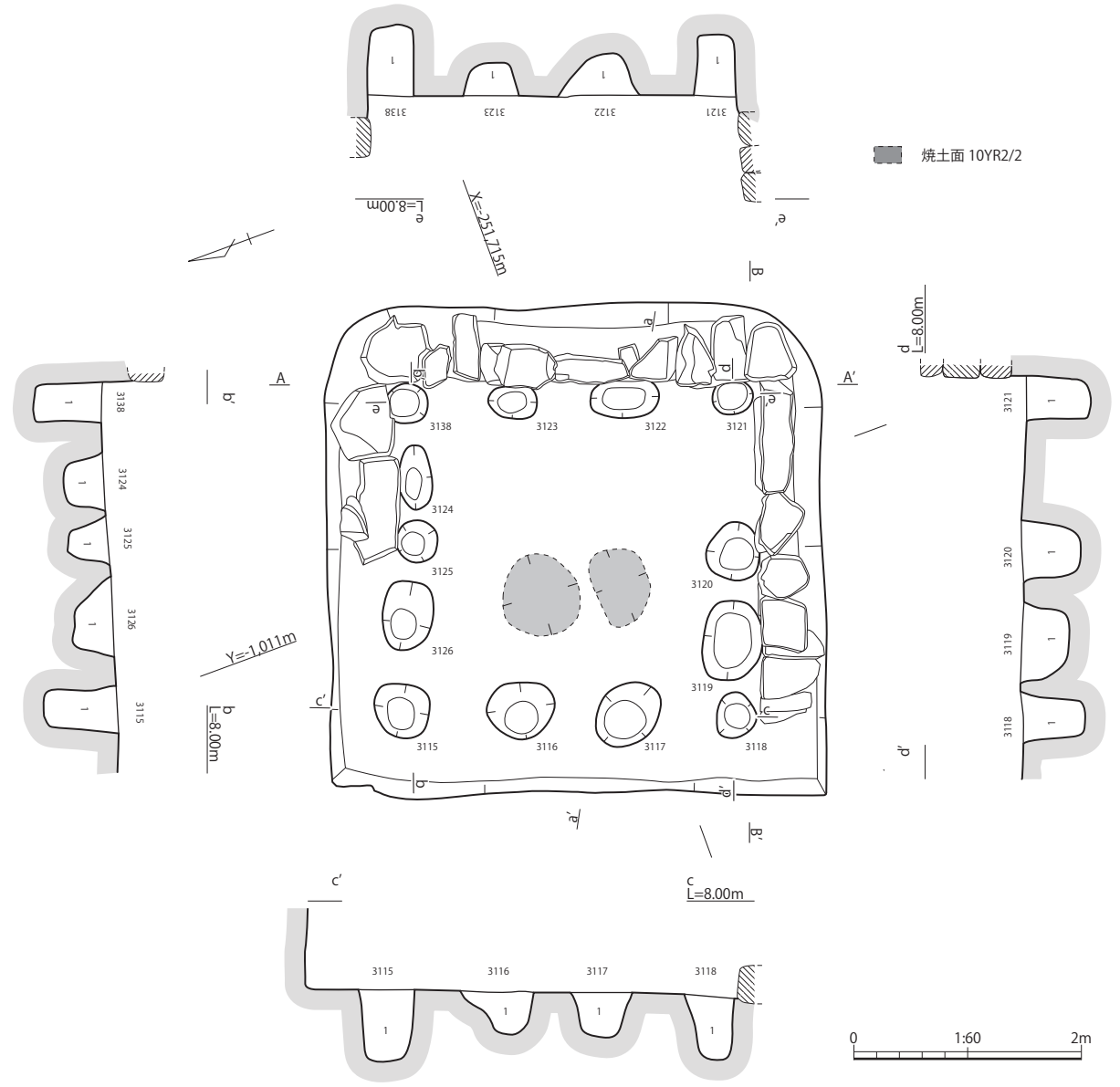
床面では石積みに沿って、四周で径 0.5 m前後の柱穴と思われる遺構を検出している。 4 隅の柱穴はいずれも深さ 0.6 mほど、その他は 0.3 ～ 0.5 mとやや浅くなっている。いずれも上部構造を支える柱跡と考えているが、その構造については不明である。また、床面中央部には 0.6 m前後の円形状の焼けた面を 2 箇所検出した。なお、この地下式倉庫については付属する昇降口は検出されていない。

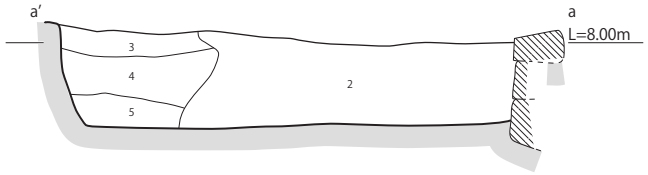
出土遺物としては土師器の鍋や常滑・備前の甕、中国製の青磁皿・碗、白磁の皿などがある。このうち土師器の鍋 (139) は口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部を上方に摘み上げている。外面口縁部下半に細かなハケ目痕が認められる。南伊勢の土鍋であり、時期的には 15 世紀中頃から後半に帰属するものと思われる。備前の甕 (143) は口縁部が丸みを保ちながらもやや扁平になっており、14 世紀後半段階の可能性が高い。一方、常滑の甕 (144) は口径 50㎝ほどの大甕になるものと思われ、口縁部はひしゃげた「N」字状を呈しており 15 世紀中頃から後半段階のものである可能性が高い。(140) の青磁皿は、体部下半から高台部は露胎、また内底面の釉を蛇の目状に削り取っている。(141) の青磁は体部を欠いているが、おそらく線描による幅広の蓮弁が施されている可能性が高く、14 世紀後半段階のものになると思われる。(145) は、この遺構の掘形 (裏込め) から出土遺物である。口径 31㎝ほどの瀬戸の大皿である。底部を欠いているが、おそらく三足の付くタイプと思われ、古瀬戸後Ⅱ期に該当する時期 (14 世紀末から 15 世紀前半) と考えている。こうした出土遺物の状況から、この 414 地下式倉庫は 14 世紀の終わりないし 15 世紀の初めに造られ、15 世紀の後半までに廃絶されていたものと判断している。

遺構 415（地下式倉庫）（図 37・38）

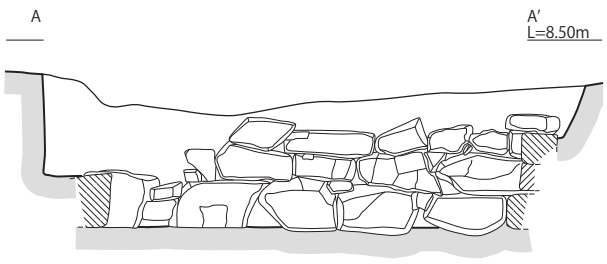
大部分が近現代の施設による撹乱を受けており、全容について不明であるが 4 m× 5 mほどの長方形を呈する地下式倉庫であったと考えている。深さは 1.0 mを測る。石積みについてはまったく検出されておらず、石積みを伴わないタイプと判断される。床面で 10 基を越える柱穴と思われる遺構を検出しているが、このうち 4 隅に相当すると考えられる遺構 1086・1089・1991・1998 の 4 基が主柱になるものと考えている。

この遺構からの出土遺物には土師器の皿、瀬戸の皿・鉢のほか常滑の甕・擂鉢のほか備前の鉢、中国製の白磁皿などがある。土師器皿のうち (146) は器壁が薄く、口縁部は直立気味に内湾して立ち上がるもので、南伊勢の製品である。時期的には 15 世紀を前後する時期のものと考えている。(147 ～ 149) の土師器の皿は、底部がやや厚く、口縁部が斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収めている。いずれも浅い黄橙色を呈し焼成は堅密である。(150) の瀬戸の皿は、断面三角形





1. 2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂混シルト
   2.5Y5/4（黄褐）シルト(貼床、貼壁の土) 粒状に少量入る
2. 5Y4/2（灰オリーブ）細砂混シルト
   10YR5/4（にぶい黄褐）シルト(壁貼土?)粒状に入る
3. 2.5Y4/3（オリーブ褐）シルト
   10YR5/4（にぶい黄褐）シルト粒状に入る
4. 2.5Y4/2（暗灰黄）細砂混シルトに2.5Y5/4（黄褐）シルトが混じる
5. 2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂混シルト



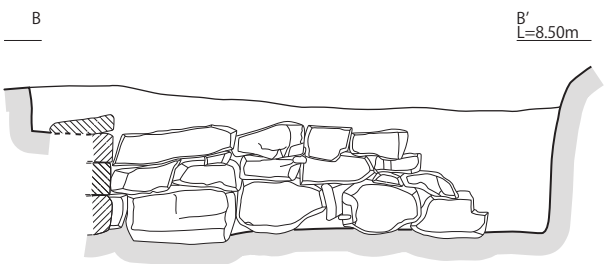


図36　遺構414

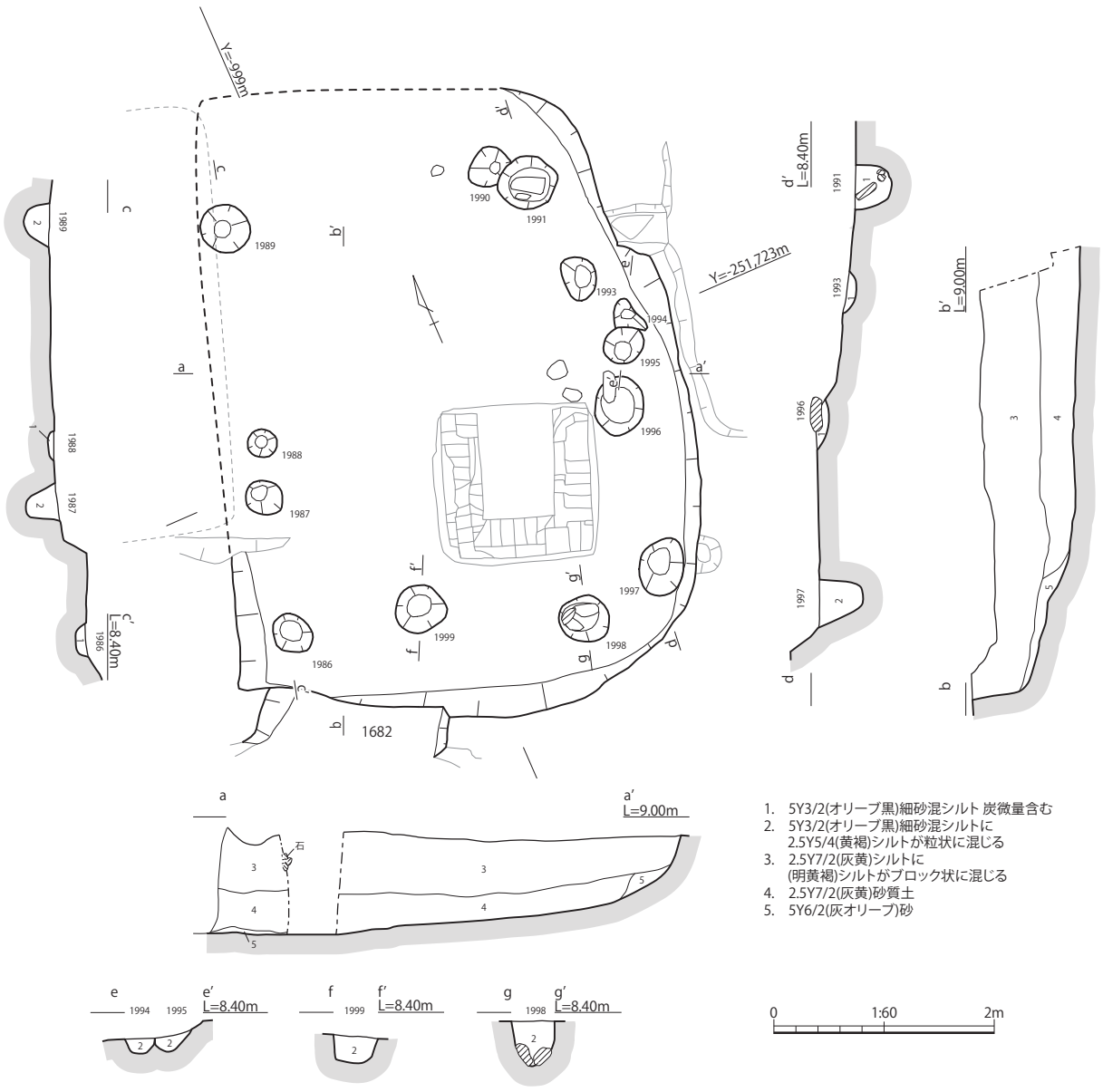


図37　遺構415

の低い高台が付き、大窯期まで下る可能性があろう。（151）の皿は縁釉の小皿で釉垂れが目立つ。後Ⅰ期、14 世紀中頃に帰属するものである。（152）の柄付片口は斜め上方に長さ 5cm ほどの柄が付くもので、古瀬戸後Ⅱ期のものである。折縁深皿（154・155）はいずれも口縁部のみの出土であるため、全容は不明であるがおそらく三足の付くタイプと思われ、口縁端部の形態から古瀬戸後Ⅱ期に帰属するものであろう。（156）の常滑の甕は「N」字状の口縁部をもつもので、14 世紀末から 15 世紀にかけてのものと考えられよう。（157）及び（159）の擂鉢は全体に灰褐色を呈し、内面には幅 2.2cm、9 本を一単位とするすり目が施されている。口縁端部は斜め水平で、わずかに上下に拡張されている。口縁部下に重ね焼きの痕跡が認められる。口縁部の形態からすれば備前Ⅲ期の新段階、14 世紀後半に帰属するものと思われる。当該遺跡におけるその他の備前の製品を見るとほとんどⅣ期以降であることから、おそらく問う遺跡で確認できる備前の製品としてはもっとも古いものと言えよう。

(158) の白磁皿は口縁端部の釉を削り取っており、いわゆる口禿げと言われている皿である。時期的に他の出土遺物などより一時期古く 13 世紀代のものである。なお、(160) として掲示した土師器の皿はこの遺構内のピット 1994 からの出土であり、体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がるタイプで 15 世紀代のものと考えている。

遺構 416（地下式倉庫）（図 39・41　図版 18-3）

前述の 415 竪穴建物の西側で重なるようにして検出した竪穴建物である。この竪穴建物についても北東部が近現代の撹乱により大きく削り取られており、全容については不明である。検出できた南東部辺や底面の柱穴の位置から 2.8 m× 4.0 mほどの長方形を呈した平面プランであった

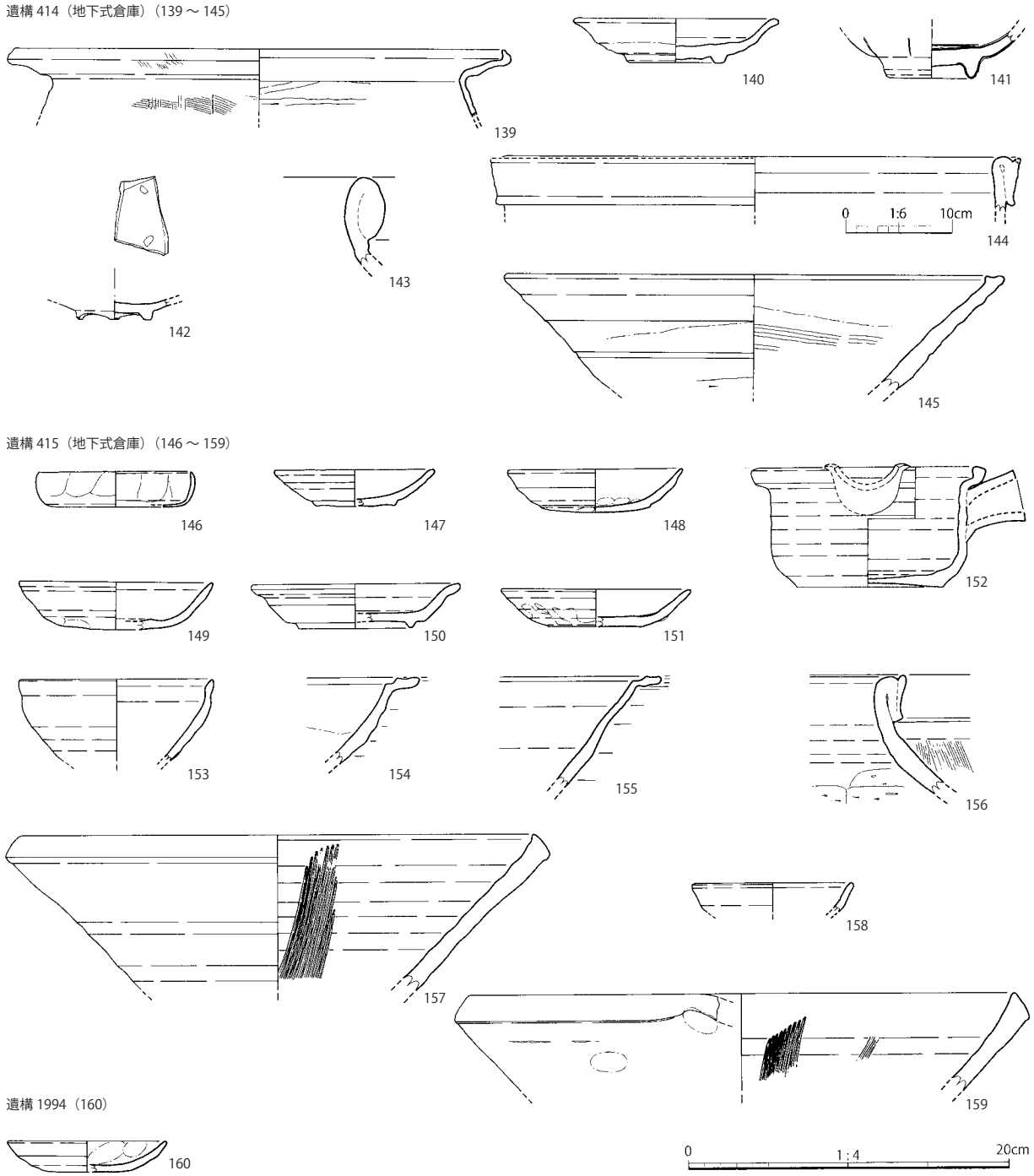


図 38　遺構 414・415・1994 出土遺物

と推察される。深さは1.0ｍほどである。南側の床面直上に10㎝～20㎝大のやや扁平な石が列を成すように並べられているが、これらの石列は床板を張る際の転ばし根太を受けるためのものと考えられる。埋土は暗灰黄色のシルトで一気に埋められており、その下層に焼土の混じる暗灰黄色シルトを確認している。

出土遺物のうち土師器の皿（161）は全体に灰白色を呈し、体部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がる。体部内面のハケ調整の痕跡が顕著に残っている。（162）の天目茶碗は中国製で

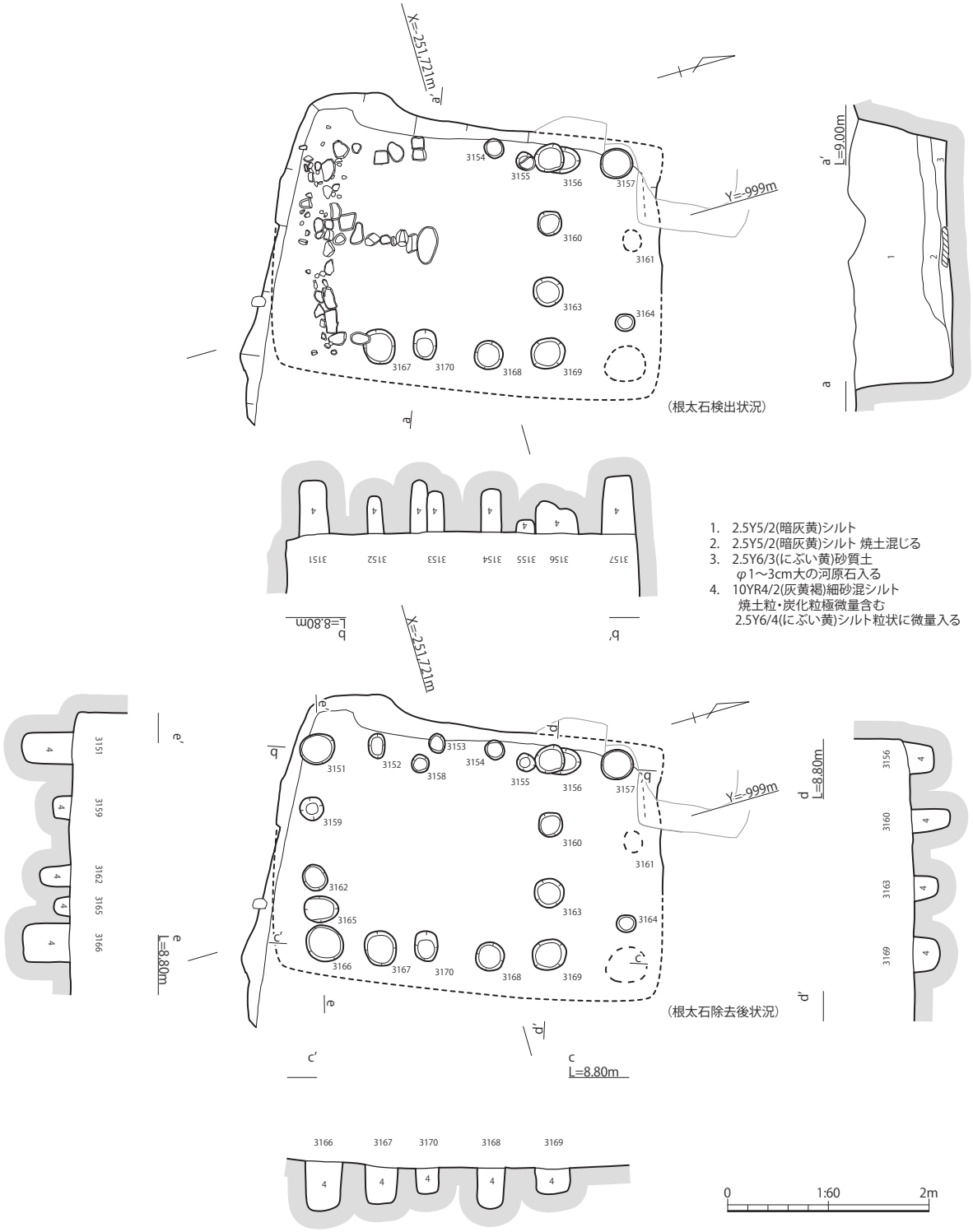


図39　遺構416

高台部をを欠いており詳細は不明であるが、体部下半は露胎で口縁端部は外反するタイプで、時期的にはおそらく15世紀前後の製品と思われる。瀬戸の折縁深皿（163）は、古瀬戸後Ⅰ期に帰属する14世紀中頃～後半にかけてのものである。

（164）も瀬戸の製品で合子の蓋になるものと思われる。外面のみにぶい黄橙色の釉が施されているが、施文は見当たらない。また、頂部の摘みもないタイプであり詳細な時期は不明だが古瀬戸後期段階に収まるものであろう。

（165）の青磁の皿はやや暗い草緑を呈し、外底面は露胎、内面底部の中心付近も釉を削り取っている。やや腰の張ったプロポーションで端部に丸みを持たせ外反する。14世紀後半から15世紀でも初め頃のものと判断している。（166）は常滑の片口鉢で、口縁端部が上下に拡張される時期のものであり、15世紀中頃から後半にかけてのものと思われる。（167）は備前の擂鉢の可能性が高い。仮に備前であれば14世紀代に収まる製品と思われる。（168）の備前の甕は、口縁部がさほど扁平にならず丸みを帯びており、14世紀末から15世紀でも前半までに収まるタイプと考えられる。（169）は青白磁の梅瓶と称される壺で、体部には全面に櫛描きによる渦花文が施されている。威信材的な器であり、寺社や高位の武家屋敷地からの出土例が多いことが知られている。時期的には13世紀後半段階のものである。

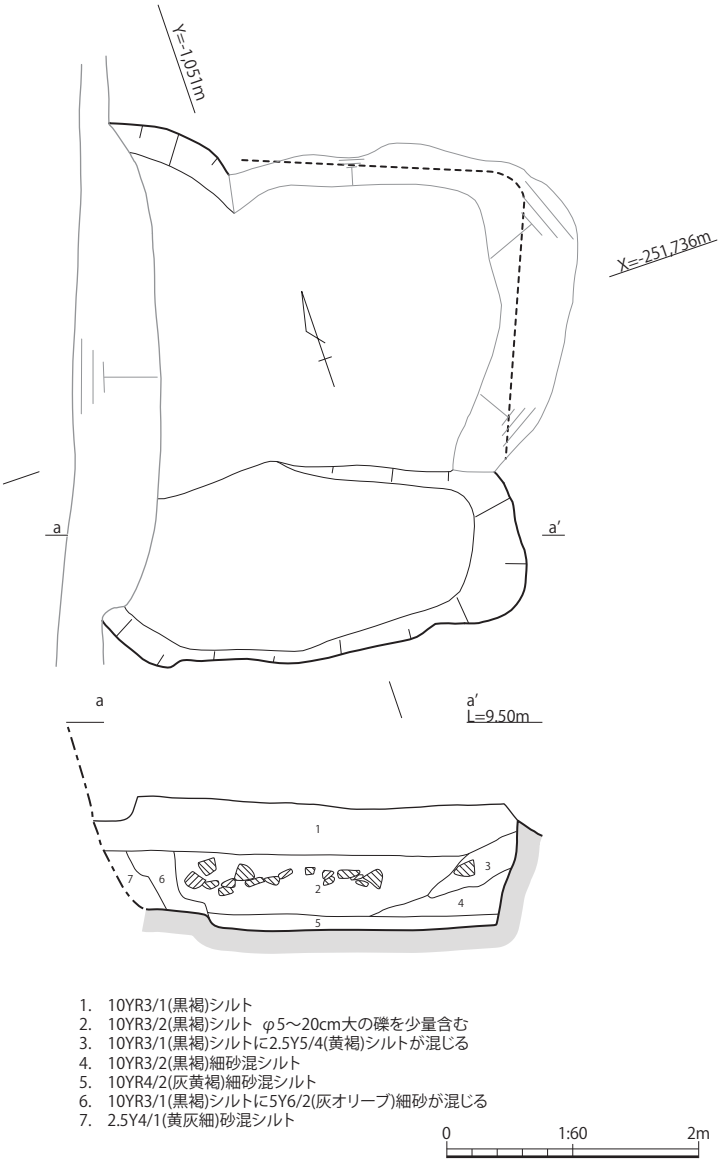


図40　遺構592

以上の出土遺物からみれば、梅瓶などは伝世品と考えられ、この遺構の廃絶時期としては、常滑の片口鉢（166）などが示す15世紀前半から中頃と考えられよう。その意味では、前述の地下式倉庫415とさほど時期差を感じさせないと言えよう。

遺構592（地下式倉庫）（図40・41）

調査区の南西隅で検出したもので、北東コーナー部が近世の土坑により大きく削平を受けている。また、調査区の西側に延びており全容については不明と言わざるを得ない。わずかに遺る南辺の形状や1.0ｍほどの深さを有し、底面も比較的平らなことを根拠に3ｍ×4ｍほどの地下

式倉庫の可能性が高いものと判断した。埋土は黒褐色のシルトが基調で、中層にはこれに５～20㎝大の礫が多く混じっていた。出土遺物は多くないが、15世紀代と思われる土師器皿（170）や常滑の片口鉢（173）、さらに一時期古い中国製の白磁碗（174）に混じって、16世紀末から17世紀でもごく初めと考えられる志野の皿（171・172）が出土している。前述したようにこの遺構については近世の遺構により大きく撹乱を受けていたことから遺物の混入も考えられる。

遺構600（地下式倉庫）（図41・42　図版20-1）

この遺構についても調査区の南西隅近くで検出したもので、南側が調査区の外側に延びているため全容は不明である。確認規模で東西3.4ｍ、南北2.5ｍ以上、深さ約1.0ｍを測る。底面の北東隅と北西隅に径0.3ｍ、深さ0.7ｍでやや外側に向かって斜めに掘られた柱穴と思われる遺構を確認している。倉庫の埋土はきれいな平行堆積で、上層の２層には焼土や炭粒が微量含まれていた。出土遺物が少なく、廃絶時期を断定しがたい状況である。図示した（176）は山茶碗で、断面三角形の高台が貼り付けられている。尾張の第Ⅳ型式、12世紀後半の製品と考えている。一方（177）は全体に濃い黄色の釉薬が駆けられた軟質の陶器である。断面三角形を呈した高台が丁寧に貼り付けられている。体部下半のみの出土であるため、全体の形は不明だが、おそらく口径20㎝ほどの皿になるものと思われる。全体の発色や胎土などから黄瀬戸の可能性が高いものと考えており、仮にそうであるなら16世紀末から17世紀はじめの製品である。

遺構690（地下式倉庫）（図41・43　図版19-1）

平面プラン３ｍ×４ｍの長方形を呈する地下式倉庫で、深さは検出面から0.3ｍを測る。全体

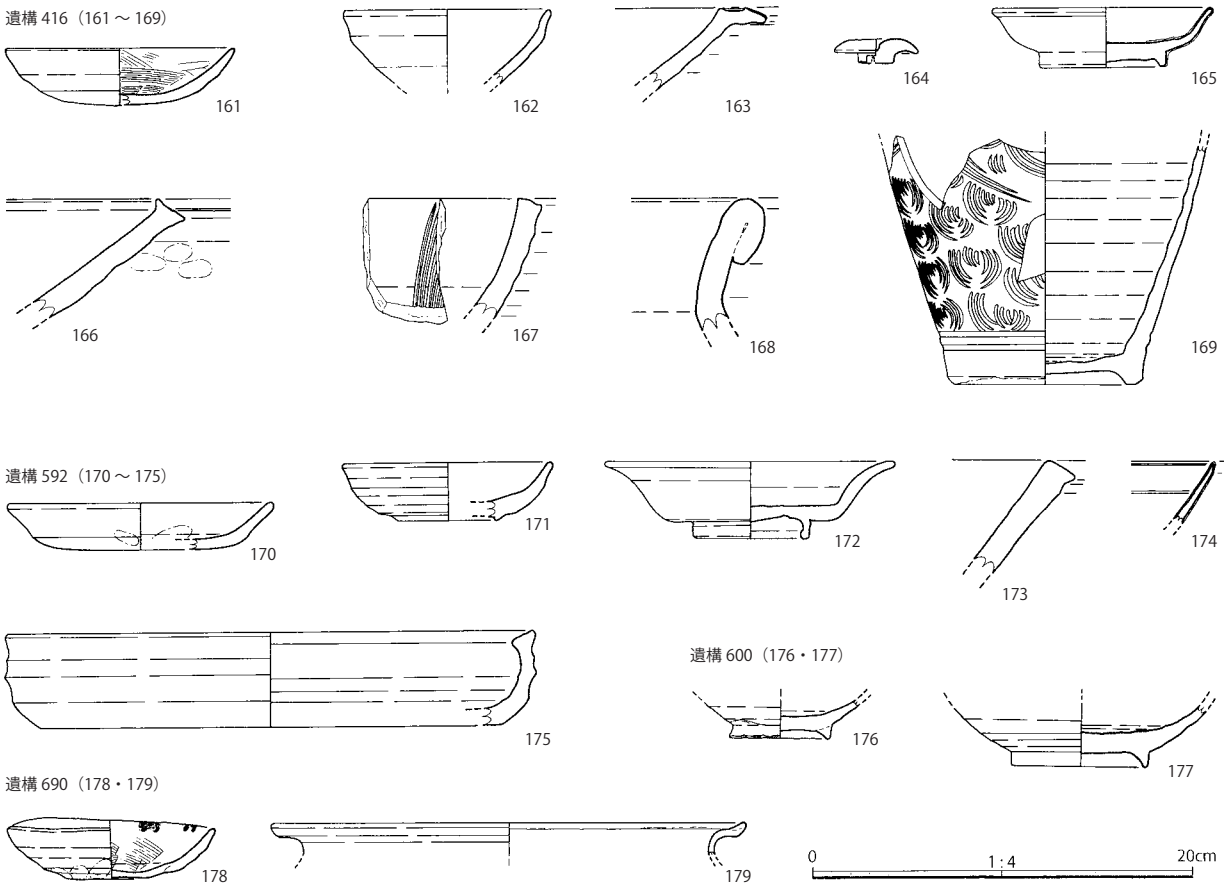


図41　遺構416・592・600・690出土遺物

に後世の削平を受けたもようで、他の類例からすればもう少し深く 1.0 mほどはあったものと推定している。４隅に上屋を支える柱が立てられていたもようで、径 0.2 ～ 0.3 mほど、深さ 0.7 m前後の柱穴が検出されている。この柱穴についてもやや斜め外側方向に掘られていた。またこの床面には弥生時代の竪穴建物の壁溝のように幅 10cm、深さ 10cm 足らずの溝が四周に設けられていた。この遺構についても出土遺物が少なく、廃絶時期を考える資料は少ない。(178) の土師器の皿は口径 11cm、器高 3cm を測るもので、体部から口縁部にかけて丸く立ち上がる。内面は比較的丁寧なナデ調整を施しているが、体部下半から底部にかけては粗いオサエのみの調整である。(179) は口径 22cm ほどの土鍋である。口縁端部を内側に折り曲げるように押さえ込んでいる。15 世紀前半段階の南伊勢の製品と考えている。

遺構 760（地下式倉庫）（図 44・45　図版 19-2･3）

長辺 4.6 m、短辺 3.1 mの長方形を呈する地下式倉庫である。深さは 1.35 mを測る。火災により焼失したと思われる倉庫で、床面を中心に炭化した建築部材の一部や赤く焼けた壁土などが多量に検出されている。

四隅のうち３箇所で径 12cm、長さ 15cm ほどの炭化した杭状の材がのこっているのを確認した。確認できなかった北東隅にも本来は同じような材が立てられていたと判断される。この杭とほぼ垂直に掘り込まれた壁面の間には横板が挟み込まれていたようで、最下段だけではあるが、幅

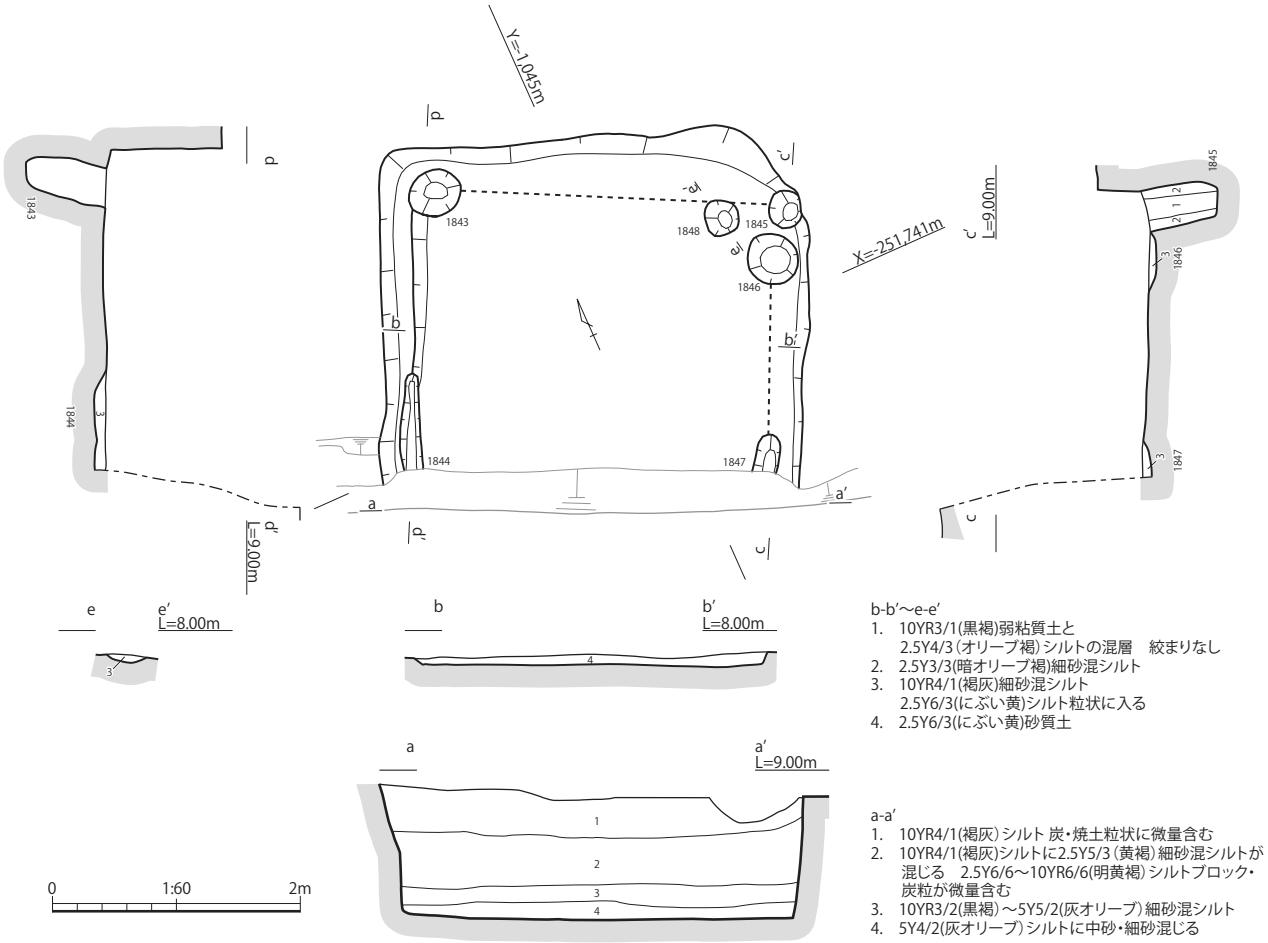
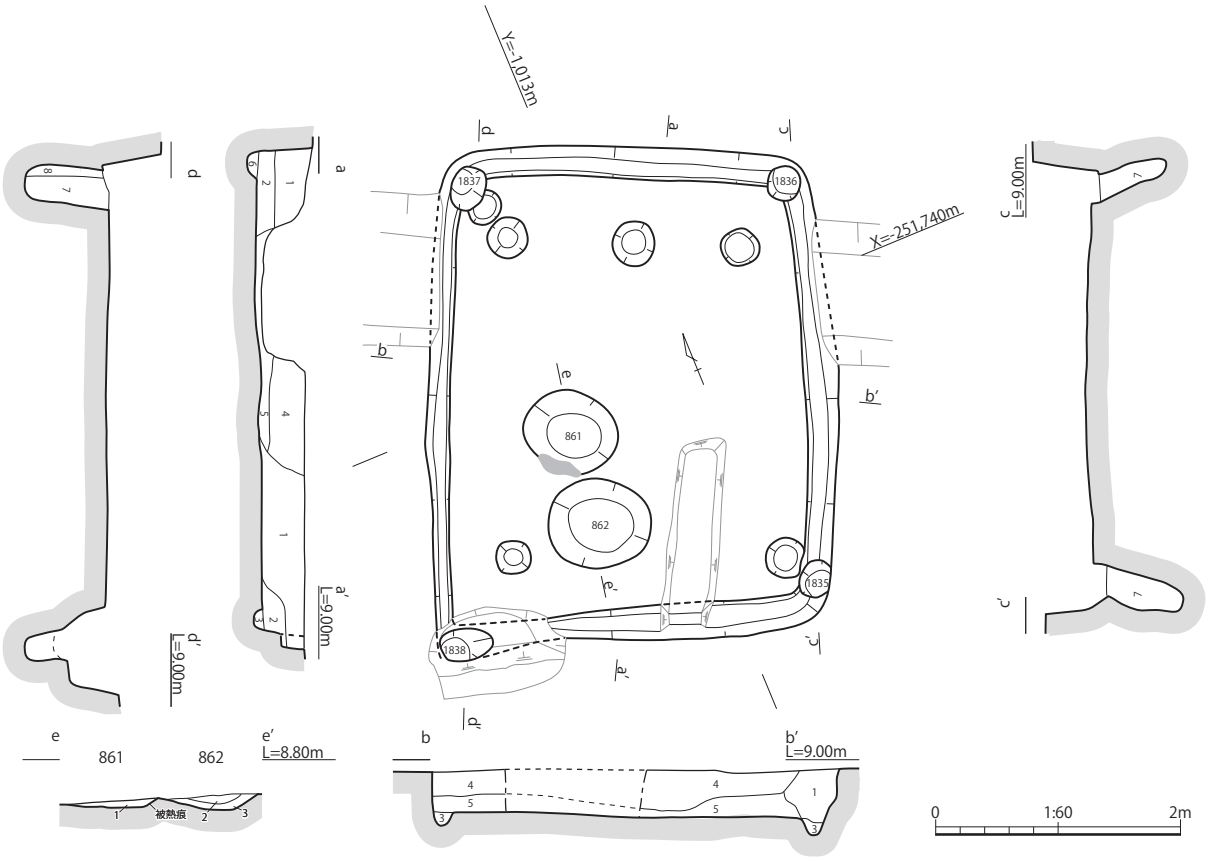


図42　遺構600

10cm、厚さ１cmほどの横板が、ほぼ四周する形で遺存していた。長辺側では、間が長く両サイド杭だけでは支えきれないためか、ちょうどその中間に幅15cm、厚さ２cm前後の角板が補強のために打ち込まれているのを確認した。

焼土は床面をほぼ覆いつくすような形で検出された。ところどころに壁土であったと思われる赤変したブロック状の土塊の堆積が認められた。堆積の厚さは平均すれば５cmほどで、この焼土を除去して床面を確認した。

図44に掲示したように、床にはほぼ原位置を保った状態と思われる炭化した床の部材が遺存していた。その状況から推察すれば、長軸に直交するように65cmの等間隔で転ばし根太を据え置き、これに架け渡す形で幅20cmほどの床板を張っていたものと考えられる。なお、床面の下には防湿を考慮してのことか厚さ５cmほどにわたって２～５cm大の礫が敷き詰められていた。また、この地下式倉庫では、付随する昇降口及びその痕跡すらまったく検出することができなかった。このことからおそらく昇り降りには梯子などを使っていたものと判断している。なお、遺存していた建築部材の一部について樹種同定を試みた結果、スギ材であったことが判明している。埋土は、火災後に周囲の土を寄せ集め、投げ込んだような複雑な堆積をしており、この中には土器片が多く含まれていた。



1. 2.5Y6/3(にぶい黄)砂質土
2. 2.5Y6/3(にぶい黄)シルト 炭混じる
3. 2.5Y6/4(にぶい黄)シルト

1. 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト
2. 2.5Y6/2(灰黄)シルト
3. 2.5Y7/3(灰黄)シルト
4. 2.5Y6/1(黄灰)シルト
5. 10YR5/1(褐灰)シルト
6. 2.5Y6/2(灰黄)砂質土
7. 10YR5/1(褐灰)シルトと2.5Y4/3(オリーブ褐)細砂にシルト混じる
8. 2.5Y4/4(オリーブ褐)細砂にシルト混じる

図43　遺構690

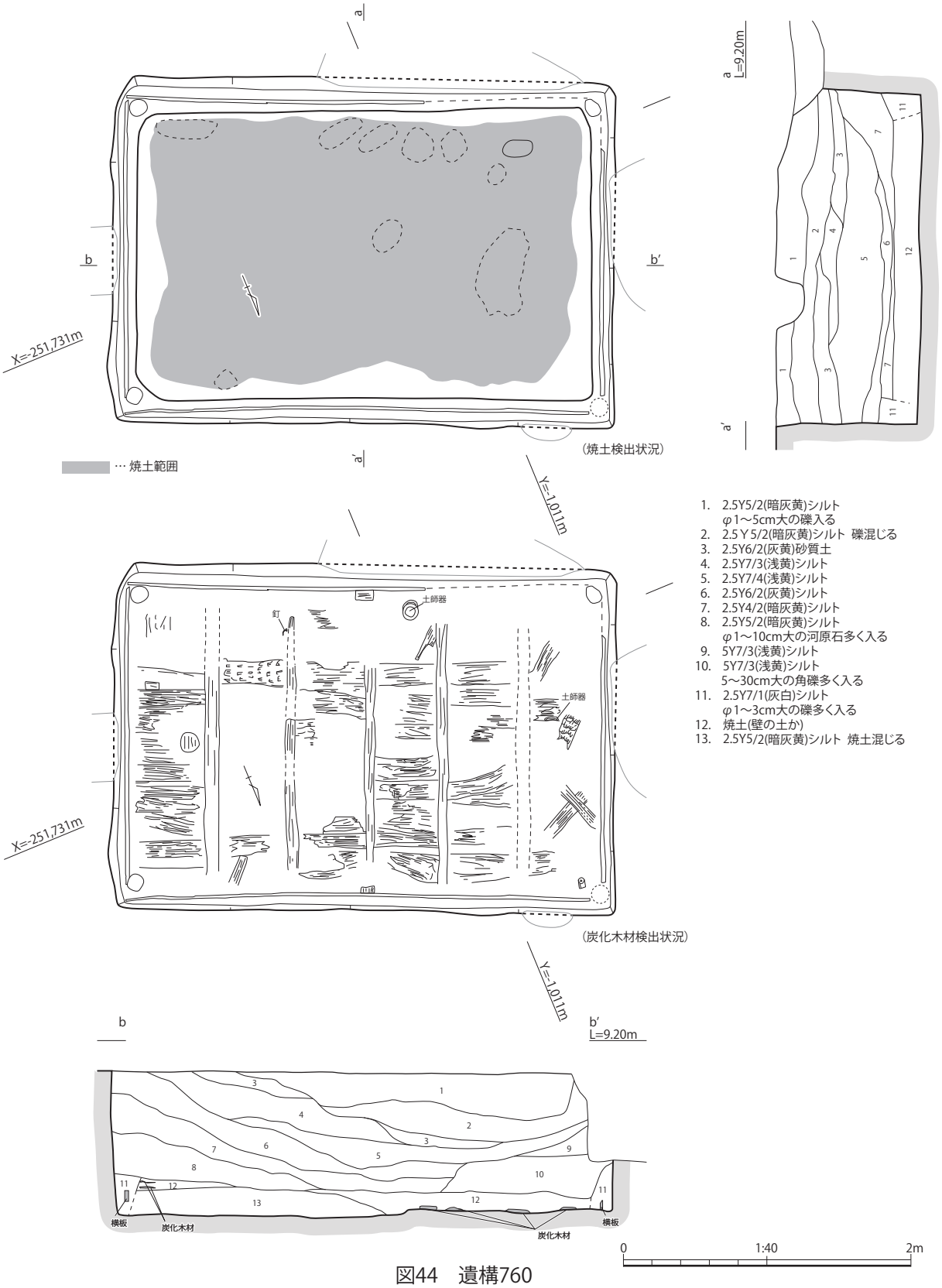


図44　遺構760

出土遺物は多く、土師器の皿、常滑の壷・甕などのほか石製品としては硯、鉄製品では釘が多数出土している。このうち土師器の皿では、口径が小さく底部が比較的平らで、体部から口縁部にかけて斜め上方に立ち上がるタイプ（180・181）のほか（183・184）などのように内湾気味に

丸く立ち上がり、内面にハケ目の痕跡を残すものや、(185・188) のように比較的口径が大きく、口縁部が強いヨコナデにより外反するものがある。おそらく時期差によるものと思われ、(180・181) などが古く、13 世紀代になる可能性もあろう。その他のものについては、概ね 14 世紀代に

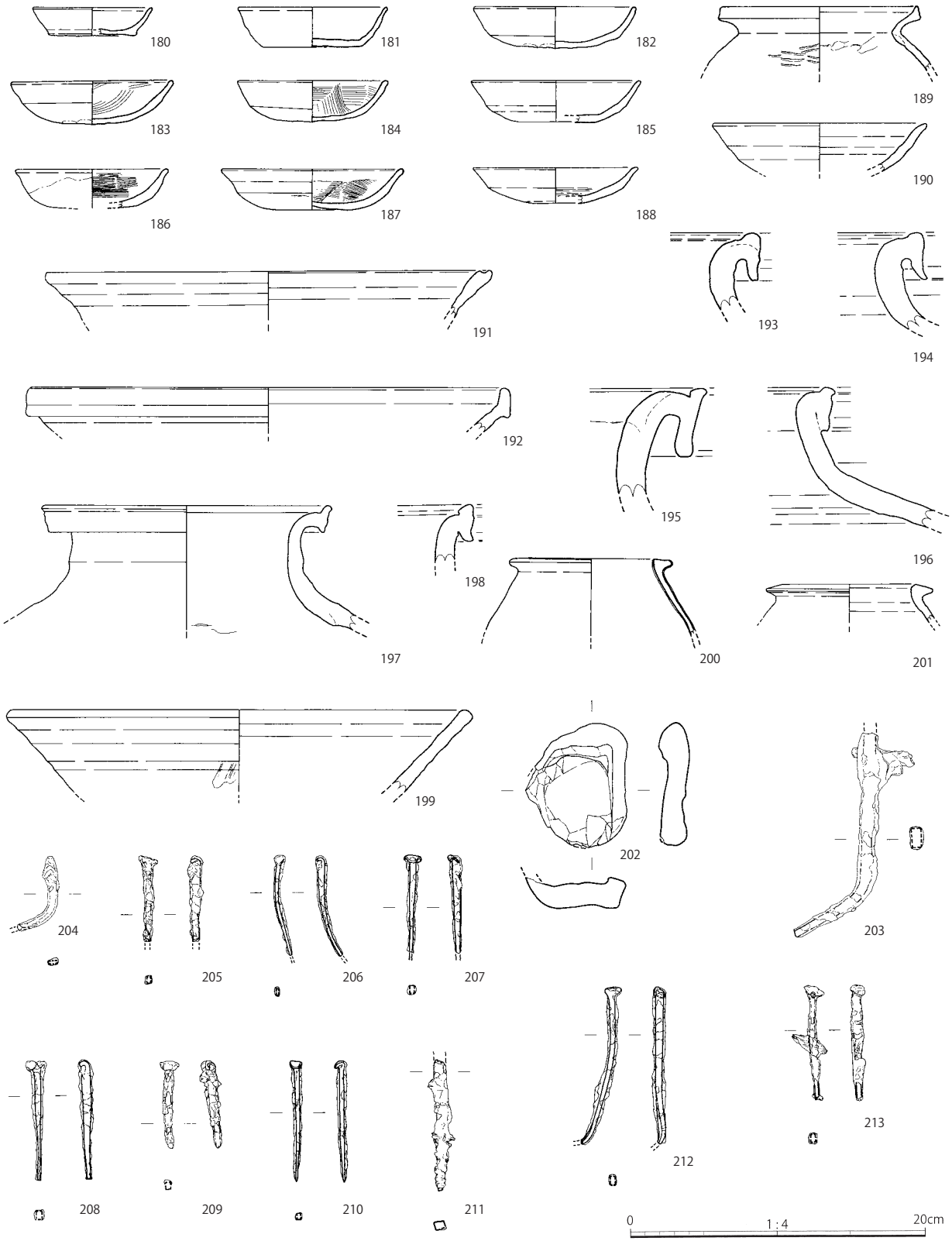


図 45　遺構 760 出土遺物

収まる一群と考えている。

(189) は焼成が堅密で、「く」の字状に外反した口縁の端部が上方に摘み上げられ、端面が平滑に仕上げられている。当初、中世に帰属する土器かと思っていたが、頸部下にかすかにタタキの痕跡をとどめることから弥生土器と判断した。おそらく後期後半段階の甕に該当するものと思われる。(190) は山茶碗で、口縁部のみの出土であるが渥美の第 5 型式くらいであろうか。

鉢類 (191・192・199) には瀬戸や東播系のほか常滑の製品がある。このうち (191) は灰白色を呈し、推定口径 30cm ほどの鉢で、口縁上端部に凹線状の窪みが廻る。尾張第 7 型式か。(192) は東播系のこね鉢。(199) は口縁部がほぼ真直ぐに立ち上がり、端部を丸く収めている。おそらく常滑の製品で高台の付く片口鉢 I 類に分類されるタイプと考えている。これらの鉢については、中世でも前半に帰属する時期のものであろう。

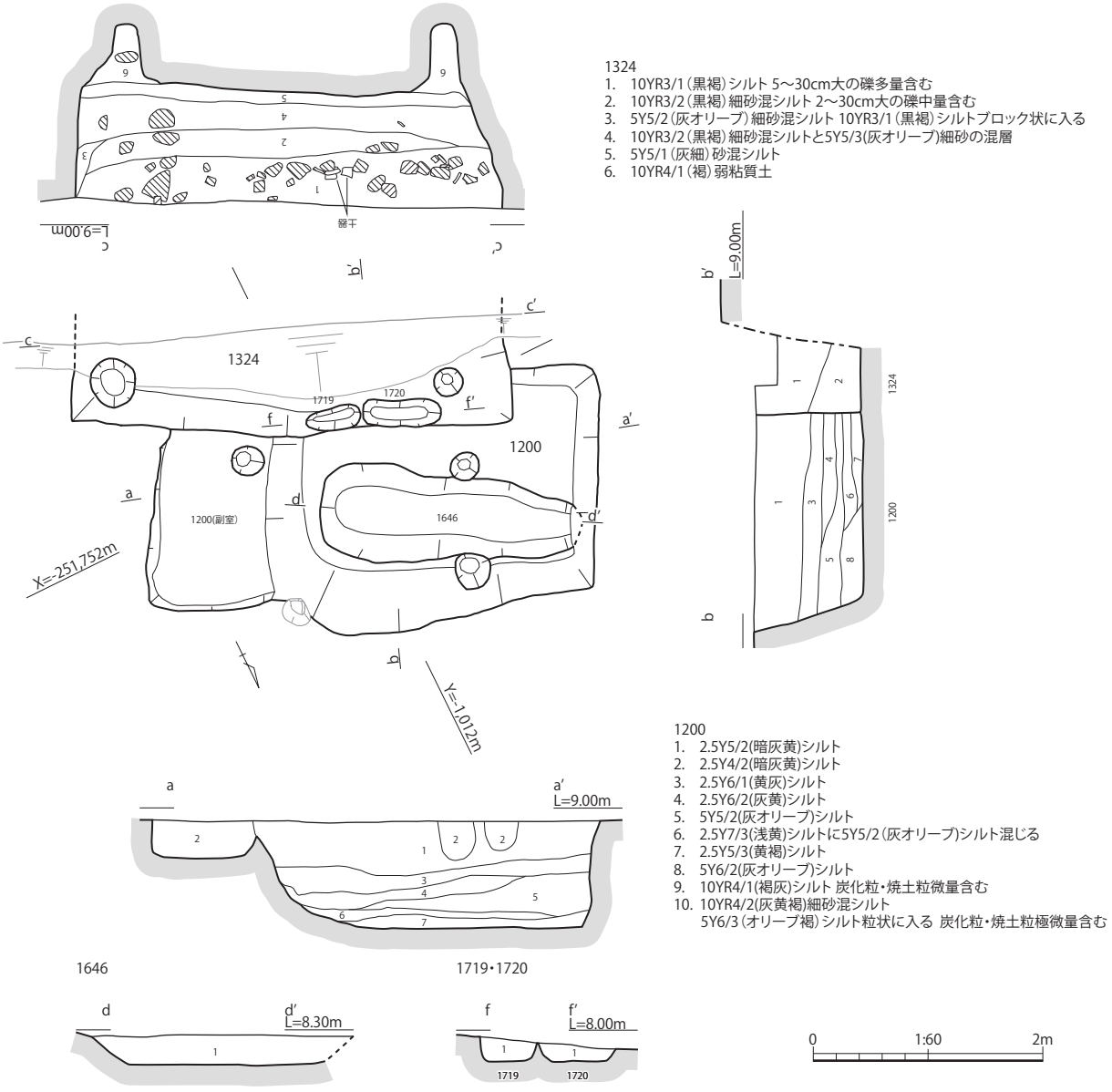


図46　遺構1200・1324

壷・甕類（195 ～ 198）はすべて常滑であるが、口縁部の形態から逆Ｌ字状に立ち上がった端部がかすかに垂下するもの（197）、Ｎ字状の口縁部が頸部に密着しはじめる（196）やその中間形態をなすもの（195）などがあり、概ね 13 世紀の中頃から 14 世紀後半までの時期幅が認められる。（200・201）は中国製の褐釉の壷と考えられるもので、水平ないしやや下方に拡張された口縁端部は釉を削り取っており露胎。それ以外は黒味を帯びた褐色の釉薬が施されているが、２次焼成を受けた痕跡が認められた。なおこの２点については、別個に掲載したが同一個体の可能性もあろう。（202）は黒っぽい自然石を打ち欠いて作られた硯である。欠損しているため全体の大きさは不明であるが、それほど大きいものではなく、幅４㎝、長さ７㎝ほどの比較的小さなものであったと思われる。鉄製品の釘（203 ～ 213）は、錆が著しく詳細については不明であるが、大きさから 15㎝ほど、12㎝ほど、9㎝ほどの三種類が認められる。これらの釘については、前述した床の部材などの固定に用いられていたものと考えられるが、（203）については、扁平であり舟釘の可能性もある。

この竪穴建物 760 から出土している遺物全般を概括すれば、前述した鉢類や中国製の壷など 13 世紀代に帰属するものが多く含まれ、わずかに（196）として掲示した常滑の甕が若干新しくなる可能性があるが、その他については 14 世紀代前半に収まる遺物が多い。また他の地下式倉庫から出土する古瀬戸の碗皿類や鉢などが見受けられないことも大きな特徴として指摘できるものと思われる。

遺構 1200（地下式倉庫）（図 46・48　図版 20-2）

調査区の南端で検出した地下式倉庫で、倉庫本体部は東西 2.7 m、南北 2.0 m、深さ 1.0 m弱を測る。これまで見てきた地下式倉庫に比べると小規模なものである。この東側に 1.0 m× 1.5 m以上の深さ 0.3 mほどの昇降口と思われる施設が取り付いている。また、石組みについては当初からなかったものと思われる。後述する遺構 1324 に切られていることから、それよりは一時期古いものである。

出土遺物には土師器の皿や鍋のほか山茶碗や常滑の鉢、白磁の碗・皿がある。土師器の皿（214 ～ 218）のうち（215）は口径に比して器高がやや高く、体部から口縁にかけて外反気味に立ち上がるタイプであるが、その他のものは内湾気味に立ち上がり、体部内面のハケ調整が顕著に残るとともに外面体部下半の指押さえも顕著である。（222）の鍋は口縁部を「く」の字状に屈曲させ、端部を内側に折り曲げ扁平にしている。南伊勢のものであり、その形態から 14 世紀後半までのものと思われる。（223）は瓦質のこね鉢である。内面には細かなすり目が施されている。内外面とも灰色を呈し、焼成は堅密である。山茶碗は皿（219）と碗（220・221）が認められた。このうち（219）は渥美第５型式、他の２点は尾張第５型式、13 世紀前後のものである。この遺構にも古瀬戸の製品は認められず、廃絶時期は前述の遺構 760 とほぼ同じ頃の可能性が高い。

遺構 1324（地下式倉庫）（図 46・48　図版 20-2）

調査区南辺でわずかに地下式倉庫の北端部を検出したものである。このため全容については不明であるが、東西の幅は 3.8 m、深さ 1.0 mを測る。北東及び北西隅で深さ 0.5 ～ 0.6 mの柱穴を検出している。この柱穴については、外側に広がるものではなく、ほぼ垂直に掘られていた。

埋土はほぼ平行堆積の状況を呈し、最上層の黒褐色シルト層には５～30㎝大の礫が多量に含まれていた。出土遺物は少ない状況であったが、古瀬戸の製品などが出土している。このうち（226）は瀬戸の燭台で、台部の下半を欠いているが、推定復元で器高27㎝ほどのものになると思われる。県内での出土は極めて少ない製品である。（227）の皿は口径９㎝ほどで、口縁部から内底面まで灰釉が掛けられている。（228）の天目茶碗についても瀬戸の製品で、全体に茶褐色を呈し、体部下半は化粧土もなく露胎となっている。以上の瀬戸の製品について言えば、古瀬戸の後Ⅰ期で14世紀代で収まる可能性が高いと思われる。

遺構1620（地下式倉庫）（図47・48　図版20-3）

地下式倉庫と思われる遺構であるが、遺構の北西部及び南西部が近世の遺構によって大きく撹乱を受けており、規模については推定復元で東西３ｍ弱、南北3.5ｍほどになるものと思われる。深さは1.5ｍを測る。床面の北西隅を除く３箇所のコーナー部で柱穴と思われる遺構を検出したが、深さはそれぞれ40㎝前後であった。

埋土はかなり数多くの異なった土により複雑な堆積状況を呈していたが、すべての層に微量の

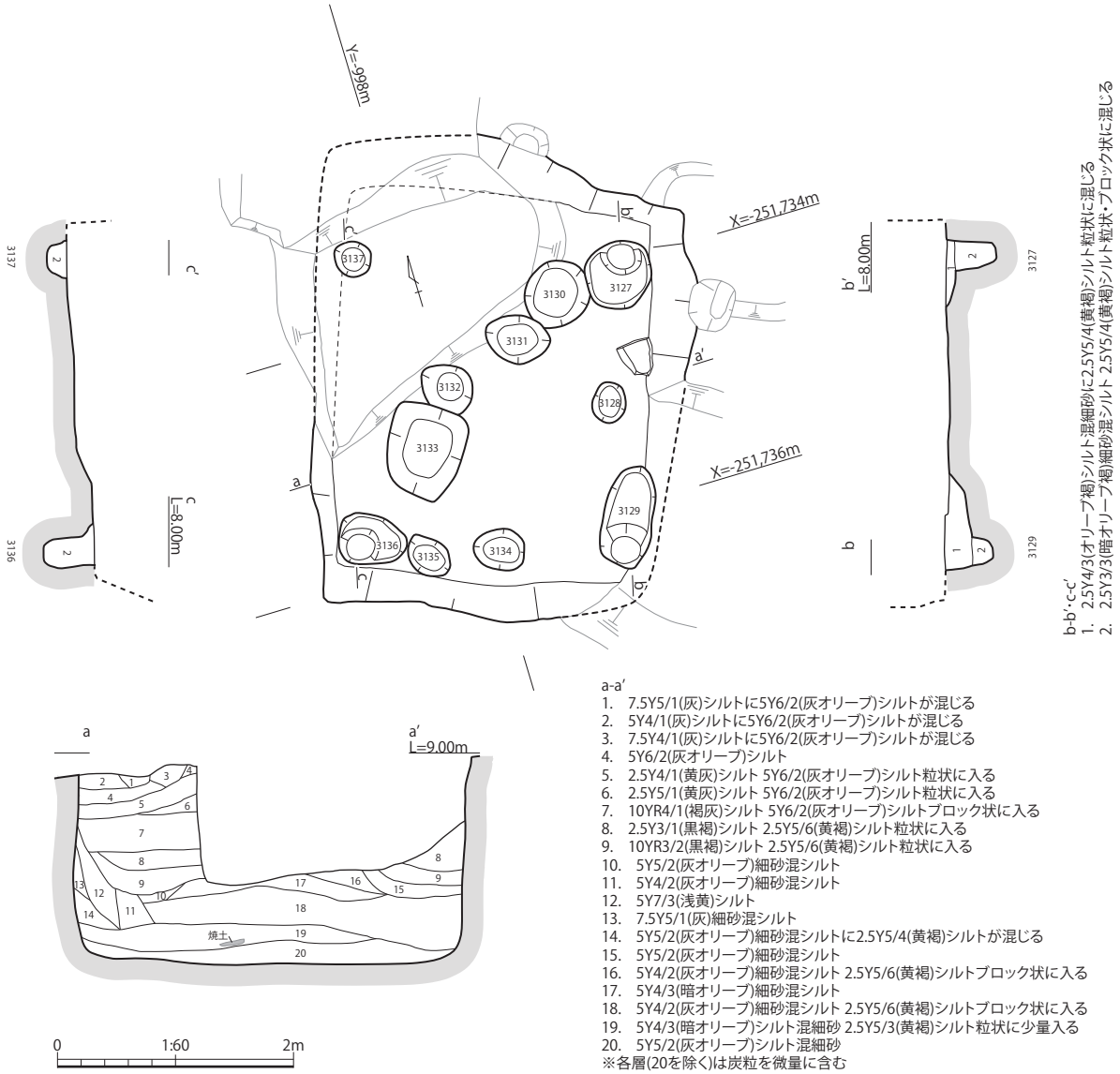


図47　遺構1620

炭粒が含まれていた。この遺構についても撹乱が著しく、出土遺物は少ない。(229) は中国製の白磁で四耳壷の壺である。(230) も中国製の白磁で、体部下半から内底部にかけては露胎となっている。口縁部を欠いているが、おそらく外反気味に立ち上がるタイプと思われ、15 世紀前後の製品である可能性が高い。(231) の常滑の甕は、口径 45cm ほどの大甕になるもので、口縁部の形態から中野 10 型式、14 世紀後半～ 15 世紀はじめにかけてのものと思われる。

遺構 1-62（地下式倉庫）（図 49・50　図版 21-1）

第 1 次発掘調査の西端で検出された遺構である。西辺及び南西部は近代の撹乱により大きく削平を受けているため全容については不明であるが、検出された北辺及び東辺から東西 2.3 m、南北 2.6 mほどの長方形を呈する形状に復元される。深さは検出面から 0.4 mほどを測る。南西隅を除く 3 箇所において、それぞれ柱穴を検出しており深さは浅いもので 0.3 m、深いものでは 0.5 mほどであった。

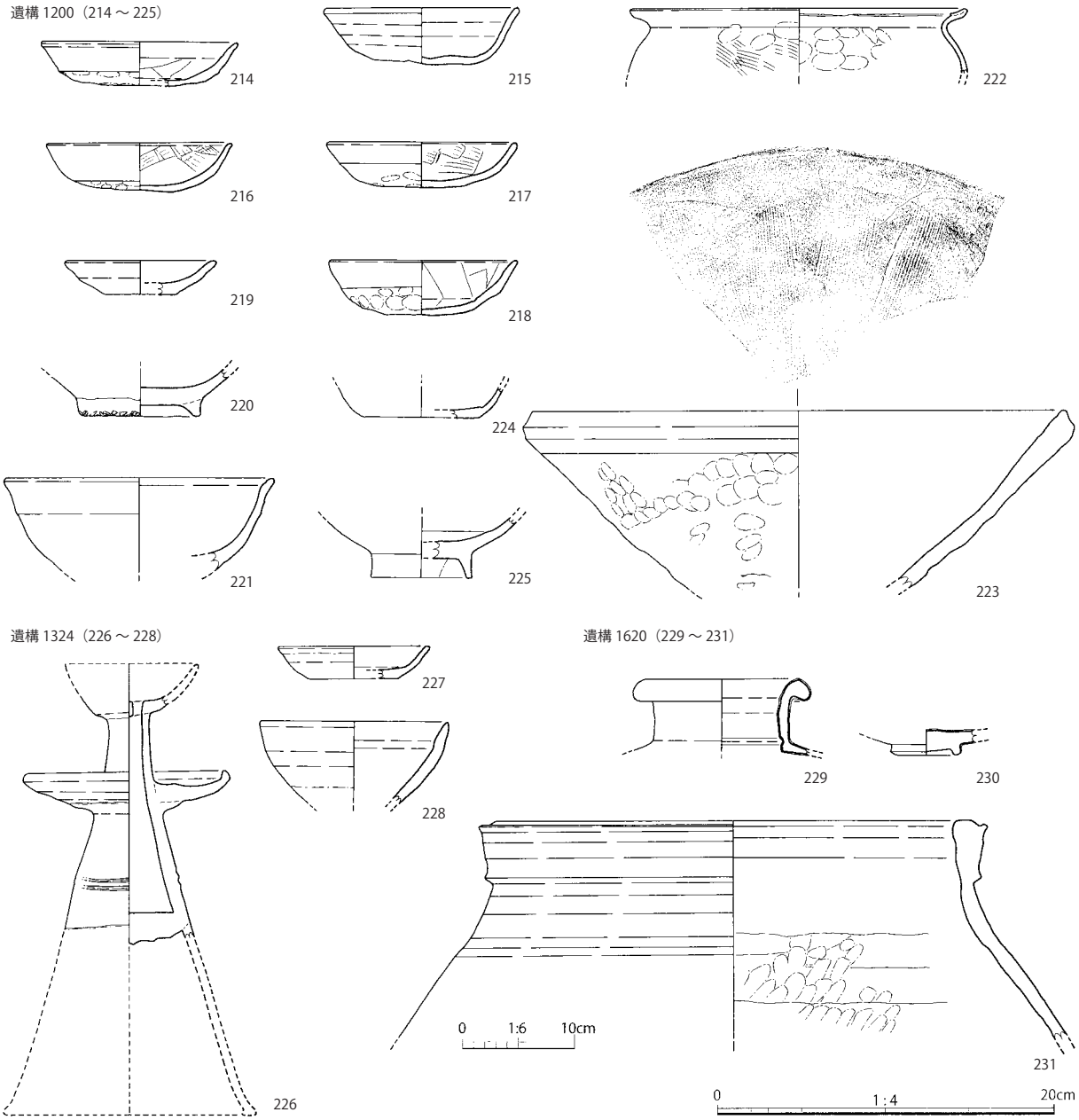


図 48　遺構 1200・1324・1620 出土遺物

出土遺物としては撹乱の影響もあってか古墳時代の須恵器や近世の施釉陶器など各時期のものが混在して出土している。なかでもこの遺構からは（232 ～ 237）として図示したような銅製の金属製品が多く出土している。いずれも飾り金具の部品になるものと考えているが、その詳細な用途については不明である。

遺構 1621（地下式倉庫）（図 50・51）

第 1 次発掘調査の段階で遺構 297 として掘った遺構のつづきであり、今回の調査ではその残りの西側 1/4 ほどを検出したものである。本報告書では遺構 1621 として扱う。東西 3.6 m、南北 3.5 mを測るほぼ正方形を呈し、深さは検出面から 0.3 mほどを測る。平面の形状、規模などから地下式倉庫の可能性が高いものと判断したが、底面の 4 隅に柱穴の痕跡は認められなかったことや深さも 0.3 mほどと比較的浅いものであり、積極的に地下式倉庫とする根拠は薄弱と言わざるを得ない。埋土は暗灰黄色シルト及び灰黄色シルトで炭粒や焼土などはまったく認められない。

出土遺物としては、細片ではあるが土師器の皿、瓦器碗、山茶碗のほか常滑の甕が出土している。瓦器や山茶碗など中世前半の遺物が多いが、瀬戸の褐釉の皿など室町期の遺物も含まれている。このうち（238）

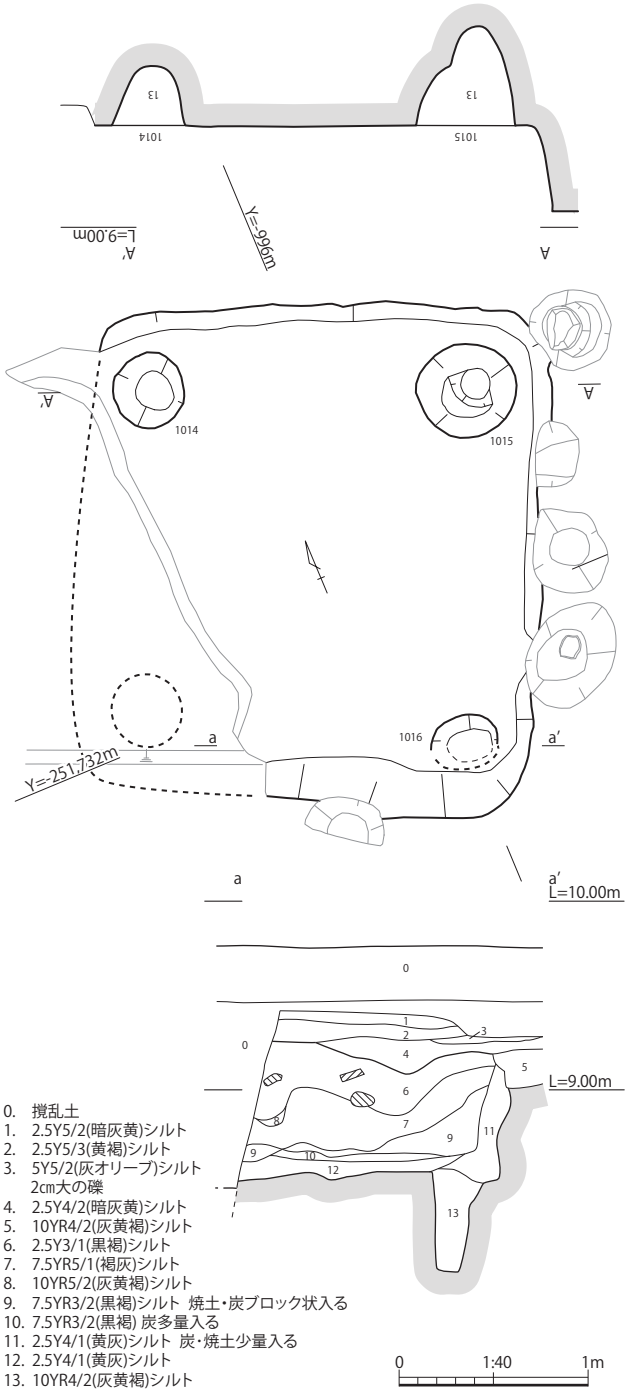


図49　遺構1-62

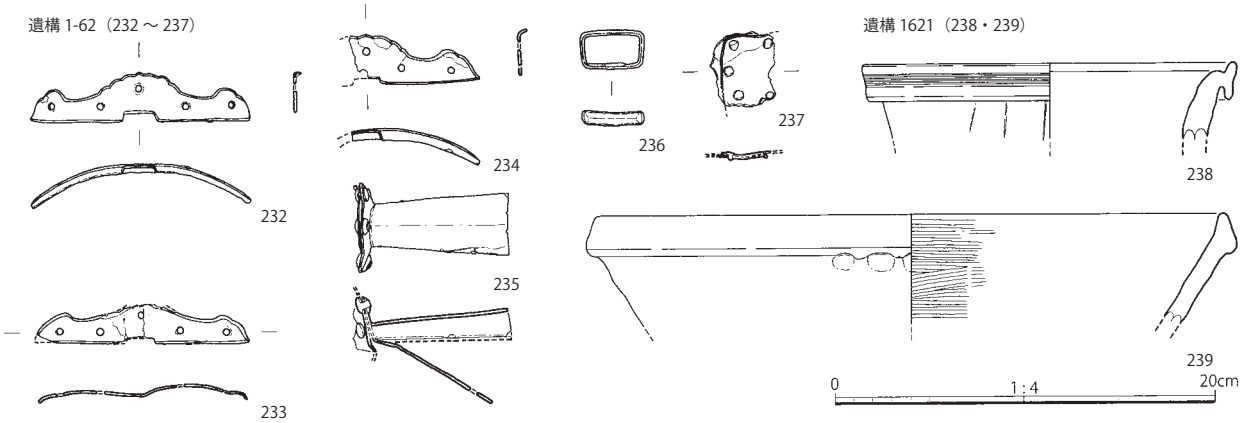


図 50　遺構 1 -62・1621 出土遺物

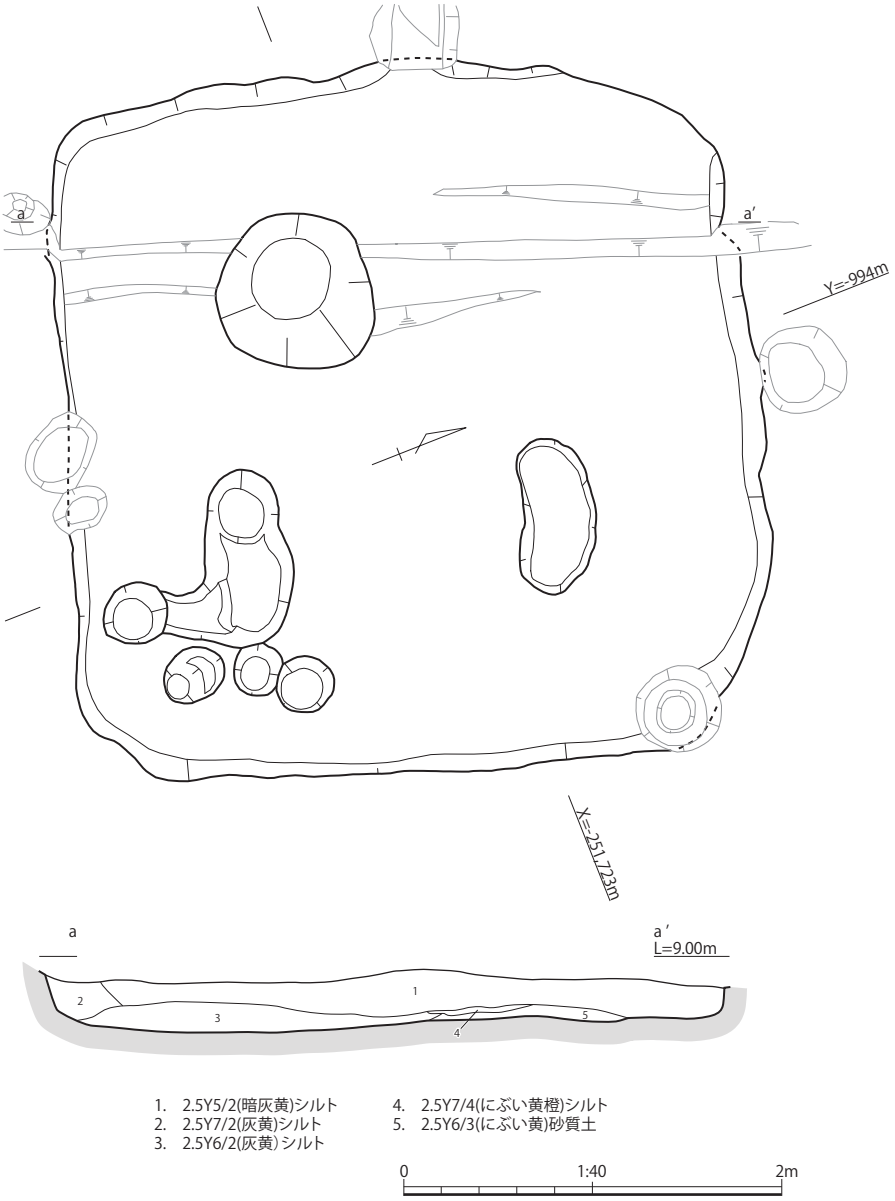


図51　遺構1621

は常滑の甕で口縁端部は上下の拡張が著しく、時期的には13世紀中頃～後半にかけてのものと判断している。(239)は瓦質のこね鉢である。外面口縁部下は粗い指オサエの後ナデ調整、内面には横方向の粗いハケ目が顕著に残っている。口縁部の面取りなどが比較的しっかりしており、14世紀代に帰属する時期のものと考えている。

遺構1700（地下式倉庫）（図52・53 図版21-2・3）

調査区の南東隅近くで検出した石組みの地下式倉庫である。前述した遺構205（近代の地下式倉庫）によってかなり破壊されていた。南北４m、東西２mほどの平面規模を有し、深さは1.1ｍを測る。西辺部の石積みを検出することができなかったが、後世遺構205を造るに当たって、抜き取り、再利用した可能性も考えられよう。用いられている石は熊野川上流域で産出される花崗斑岩で、30～50㎝大の石を横積みにしている。

出土遺物は少ないが、山茶碗の碗（240）のほか中国製の染付碗や皿（241～243）や唐津の皿（244）などがある。染付製品は、いずれも焼成が甘く素地も白濁色を呈しており、（241）の碗などは内底部の釉薬を蛇の目状に削り取っているなど廉価な粗雑品の感がある。おそらく明末期の製品であろう。また唐津の皿については、内底部に胎土目の痕跡が残るもので16世紀末段階の可能性が高い。以上のことから、この遺構については、他の地下式倉庫に比べて廃絶時期がかなり新しくなる可能性があろう。ただし、前述したように近代の地下式倉庫205によって撹乱されていることから混入した遺物である可能性も留保しておきたい。

遺構4001（地下式倉庫）（図54～56　図版22・23）

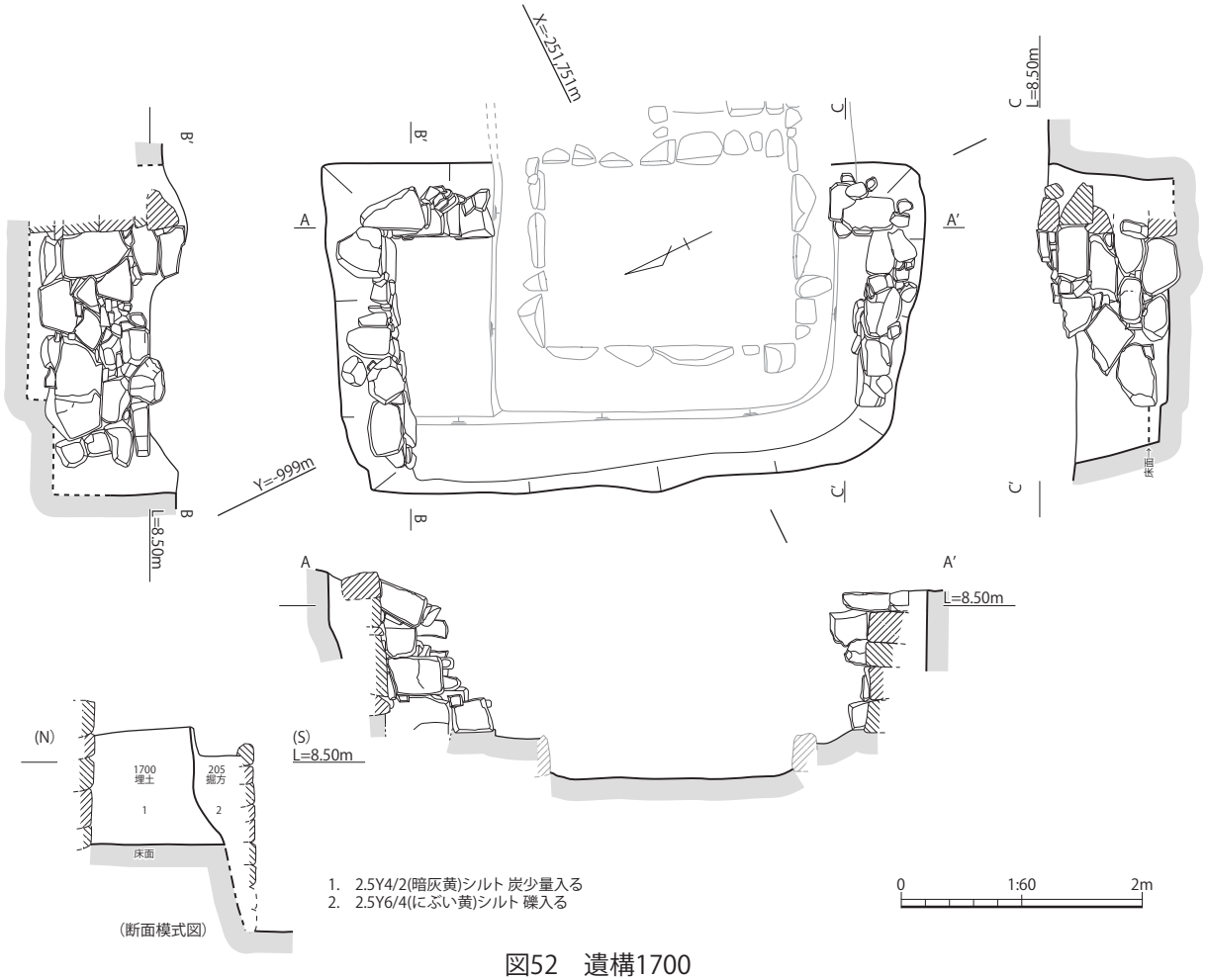


図52　遺構1700

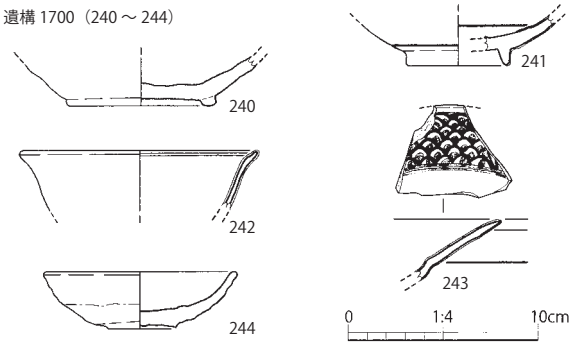
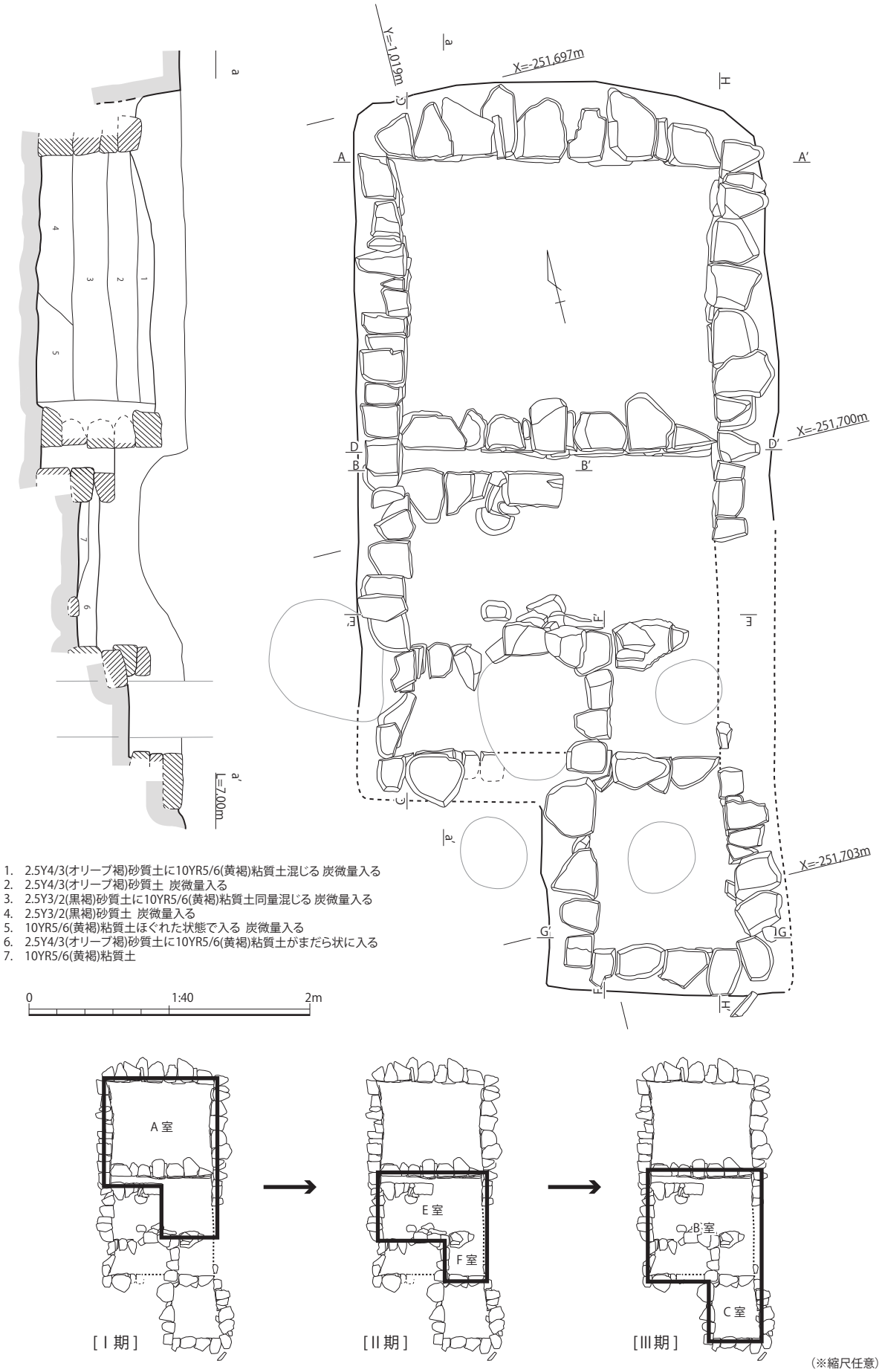


図 53　遺構 1700 出土遺物

調査区の北辺側、熊野川に近く、地形的には一段下がった場所で検出した石組みの地下式倉庫である。平面プランは複雑な形を呈しているが、これは何度かの造り替えによる結果であり、基本的には方形の倉庫本体に一回り小さな昇降口と思われる施設が取り付く構造と考えられるもので、この遺構 4001 では、少なくとも３時期の造り替えによる変遷が想定される。以下、各期について詳述する。

Ⅰ期と考えられるものは、一番北側に造られたもので、本体部の大きさは一辺 2.2 mのほぼ正方形を呈する。昇降口はこの南辺の東側に取り付くもので、造り替え時にかなり撹乱を受けているが、わずかに残っていた南辺と思われる石の積みから一辺 1.1 mの方形であったものと推定できる。深さは本体部で検出面から 1.0 mを測る。昇降口の深さは 0.5 mであった。用いられている石は花崗斑岩で、幅 30㎝、高さ 15㎝ 前後の石を横積みにし６～７段で構築している。Ⅱ期はⅠ期の南側に新たに石を積み上げ、これを北辺とし、南辺は前述のⅠ期の昇降口の南辺を利用したものと思われる。



1. 2.5Y4/3(オリーブ褐)砂質土に10YR5/6(黄褐)粘質土混じる 炭微量入る
2. 2.5Y4/3(オリーブ褐)砂質土 炭微量入る
3. 2.5Y3/2(黒褐)砂質土に10YR5/6(黄褐)粘質土同量混じる 炭微量入る
4. 2.5Y3/2(黒褐)砂質土 炭微量入る
5. 10YR5/6(黄褐)粘質土ほぐれた状態で入る 炭微量入る
6. 2.5Y4/3(オリーブ褐)砂質土に10YR5/6(黄褐)粘質土がまだら状に入る
7. 10YR5/6(黄褐)粘質土

0 1:40 2m

図54　遺構4001及び建替変遷概略図

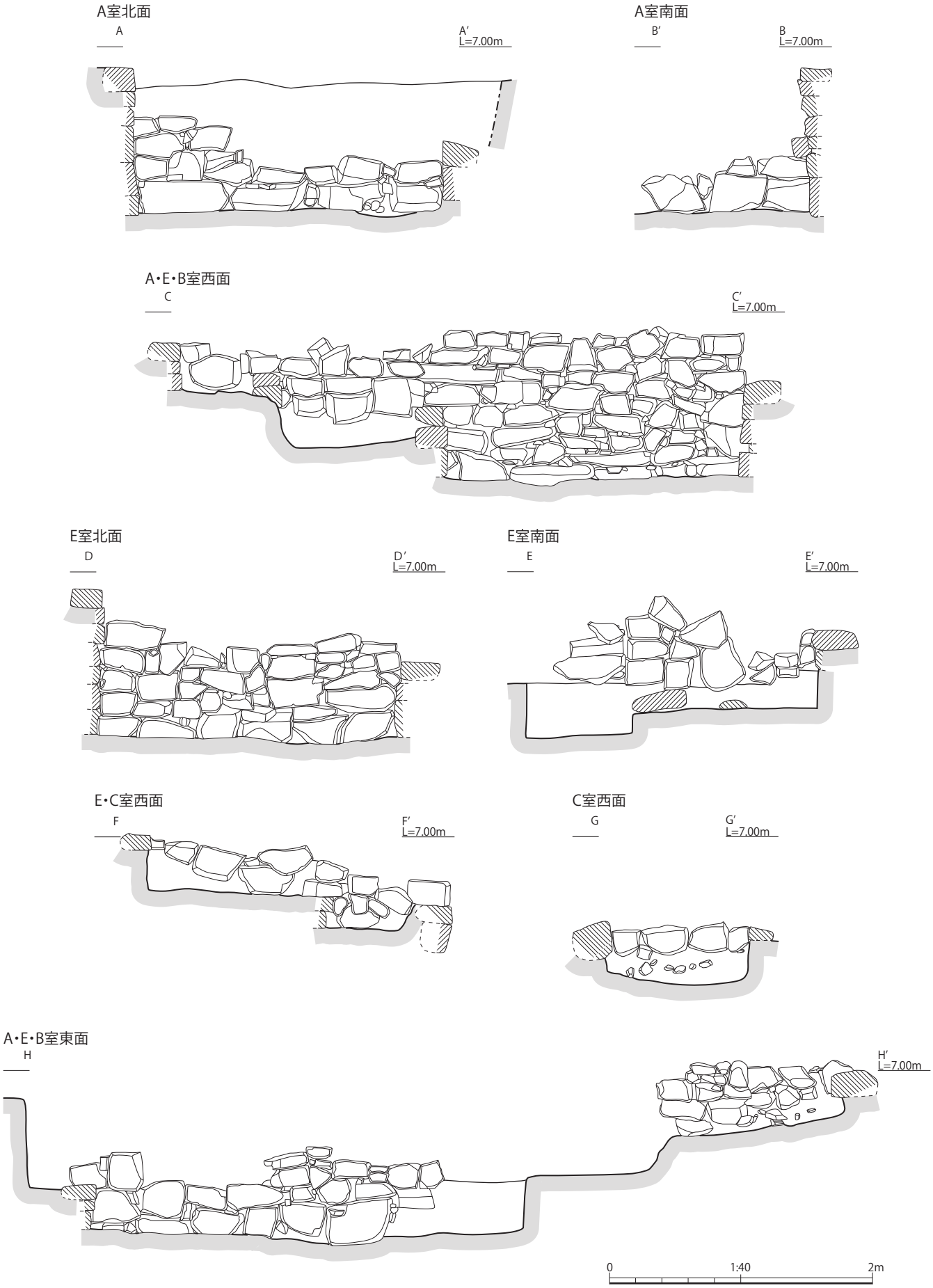

A室北面
A
A′
L=7.00m
A室南面
B′
B
L=7.00m
A・E・B室西面
C
C′
L=7.00m
E室北面
D
D′
L=7.00m
E室南面
E
E′
L=7.00m
E・C室西面
F
F′
L=7.00m
C室西面
G
G′
L=7.00m
A・E・B室東面
H
H′
L=7.00m
0
1:40
2m

図55　遺構4001

本体部の規模は東西 2.2 m、南北 1.2 mほどに規模を縮小して造られたものと判断している。深さは 0.9 mを測る。これに伴う昇降口は、やはり南辺の東側に取り付くもので、南北 0.9 m、東西 0.8 mのやや長方形を呈し、深さは 0.7 mほどであった。

Ⅲ期は前述したⅡ期の北辺を利用し南側に拡張したもので、Ⅰ期と同様一辺 2.2 mの方形プランとなっている。深さは 0.9 mを測る。この本体部に対しても昇降口は南辺の東側に取り付けていた。深さは南側で 0.5 m、北側で 0.3 mと平坦でなく、本体部に向かってややスロープ状に下っていたものと判断している。

出土遺物については、基本、前述した各期の本体部及び昇降部ごとに取り上げている。A室から出土している鍋 (245) は、外反した口縁部の内側に稜をもつもので、推定口径 35cm ほどである。おそらく南伊勢の製品で、15 世紀を前後する時期のものと考えている。(246) は瀬戸の折縁深皿で、15 世紀中頃、古瀬戸後Ⅳ期に帰属する時期のものと判断している。(247) は中国製の青磁香炉で、口径 6.5cm、器高 5 cm とやや小振りのものである。露胎の平高台であるが、装飾として小さな三足が付けられている。内面体部下半から底部は露胎である。(248) は銅製品の笄と思われ

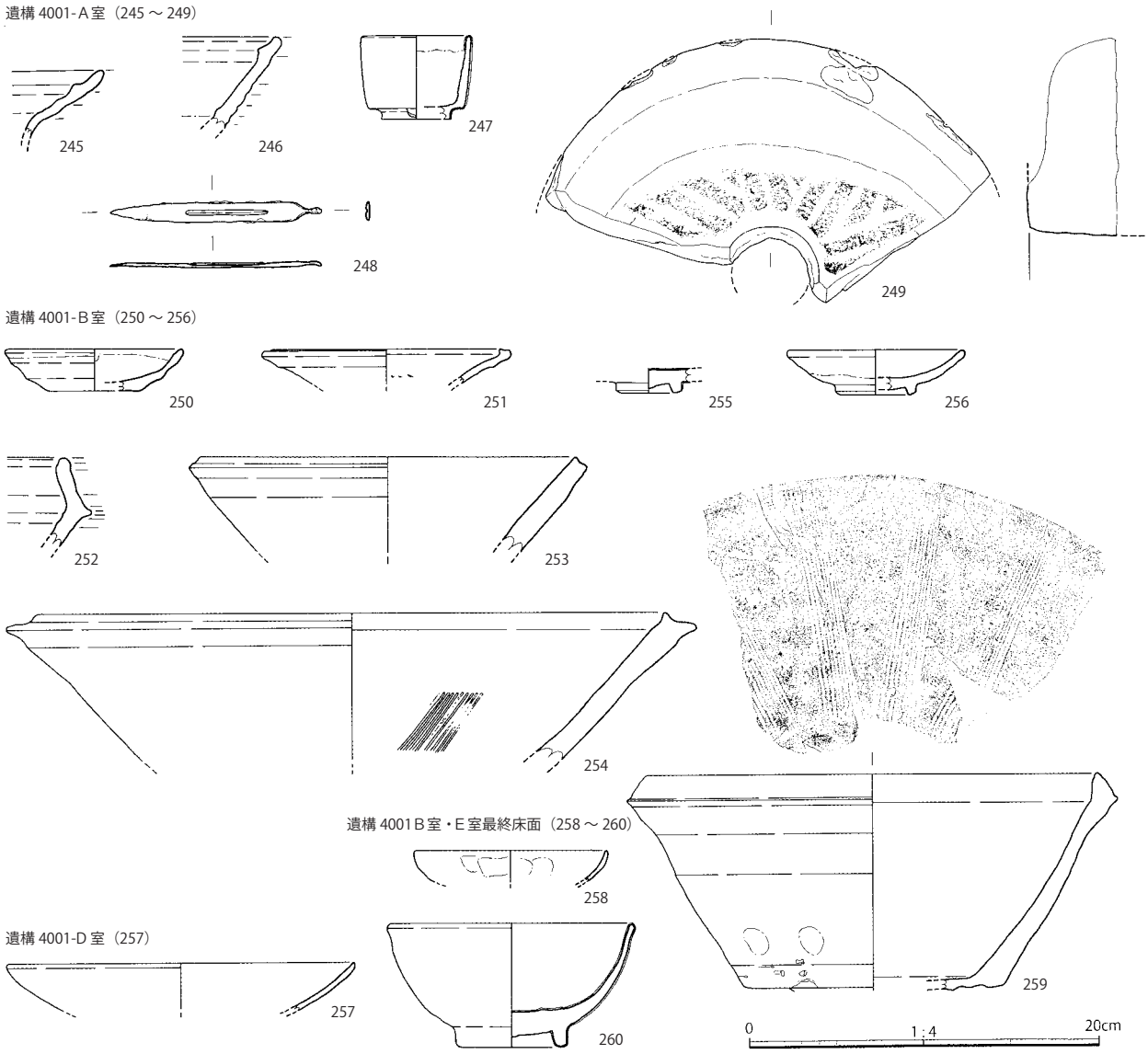


図 56　遺構 4001 出土遺物

る。長さは12cm、幅1cmほどで、後部は耳かきの用途をなすためか小さなスプーン状になっている。(249) は砂岩製の挽き臼で下臼に当たるものであるが、臼面の溝は中心部のみしか残っていないため分割数などは不明である。推定復元で径30cm前後の大きさになるものと思われる。

Ｂ室からは瀬戸の皿や常滑の鉢などが出土している。このうち瀬戸の皿 (250) は、口縁の縁だけに施釉した、いわゆる縁釉の皿といわれるタイプのもので、体部の形態から古瀬戸の後Ⅲ期、15世紀の前半に帰属するものであろう。(251) も瀬戸の製品で、口縁部の形態から卸し皿になるものと考えている。時期的には前述の皿より一時期古い古瀬戸の後Ⅱ期と思われる。(252) は備前の擂鉢である。口縁端部は上下に大きく拡張されているものの凹線は入っておらず、時期的には15世紀中頃から後半のものであろうか。(253・254) はともに常滑の片口鉢である。口縁部の形態から (253) については14世紀の後半、(254) は端部が拡張しはじめており15世紀の中頃のものと判断される。中国製の白磁 (255・256) のうち (256) は体部下半が露胎、焼成がやや軟質のもので、15世紀代に入る皿である。

Ｄ室からは口径20cmを測る土師器の大皿 (257) が出土している。器壁が比較的薄く、内面のナデ調整が丁寧で平滑に仕上げられている。類例をあまり見ないものであり、特殊な土師器皿の可能性があろう。Ｂ・Ｅ室の床面直上から出土している土師器の皿 (258) は器壁が薄く、丸く立ち上がるタイプであり、15世紀代の南伊勢のものであろう。(259) 備前の擂鉢であり、口縁端部の拡張が顕著ではなく、14世紀末か15世紀でも前半に帰属する可能性が高い。(260) の中国製の青磁碗は全体に淡い草緑色を呈し、外底部の内面のみ釉を削り取っている。

以上述べてきた遺物を見る限り、造り替えがなされている割には、それほどの時期差が認められない状況であり、逆に言えば極めて短期間に造り替えがなされた状況が窺われると言えよう。最終の廃絶時期については概ね15世紀の後半と判断している。

遺構4003（地下式倉庫）（図57・58・62　図版24・25-1）

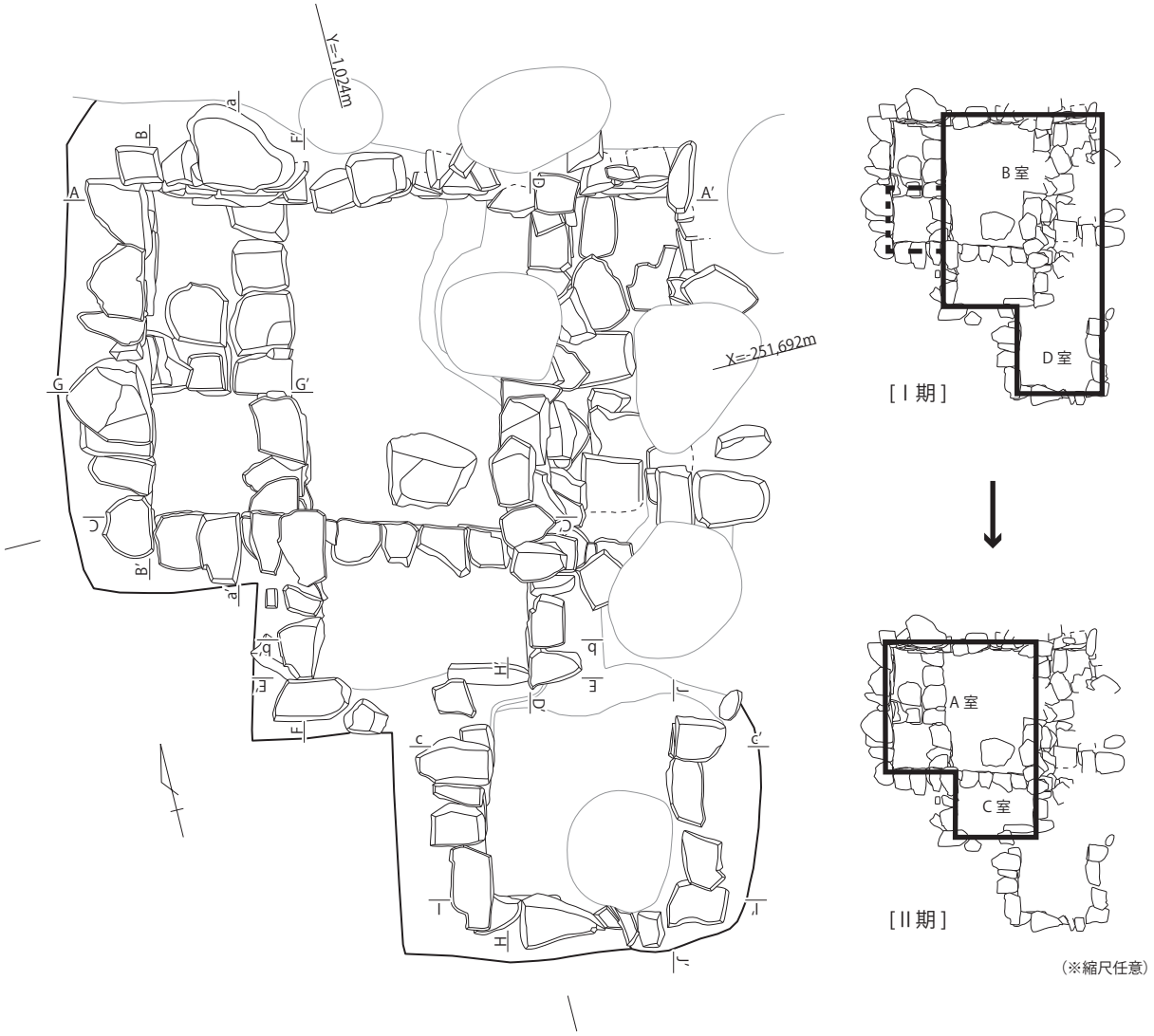
前述の遺構4001の北東10ｍほど、調査区の北辺端部で検出した石組みの地下式倉庫である。この遺構についても一件複雑な平面形をなしているが、二時期にわたる造り替えによるものと判断している。なお、この遺構も含めてこの周辺は、校舎建設に伴う基礎杭（径60cmほどのパイル）がかなりの密度で地中深く打ち込まれており、これによる撹乱や遺構の変形が著しい状況であった。

Ⅰ期としているものは倉庫本体部の大きさが東西2.1ｍ、南北2.6ｍほどの長方形を呈したもので、深さは1.2ｍを測る。昇降口はこの南辺の東側に設けられていた。大きさは東西（幅）1.1ｍ、南北0.7ｍ、深さは0.8ｍほどを測る。

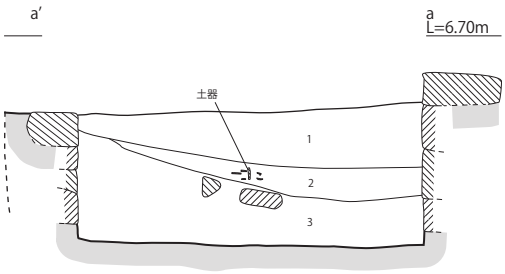
Ⅱ期はⅠ期の北辺部の一部を利用し、新たに西辺と東辺、さらに南辺も積んでおり、東西2.2ｍ、南北1.8ｍほどに規模を縮小して造られている。深さは確認規模で0.8ｍを測る。

用いられている石材の大部分は熊野川の上流部で産出される花崗斑岩と呼ばれるやや肌理が粗く脆い石である。大きさは概ね20～40cmほどで、これらの石を横積みにして築かれている。

積まれた石の表面や床面には黄褐色の貼り土の痕跡が認められた。また床面の一部で焼け締まった面も確認している。なお、この昇降口から本体部へ降りた箇所に0.4ｍ×0.5ｍほどの平

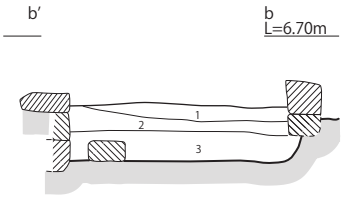


A室断面土層



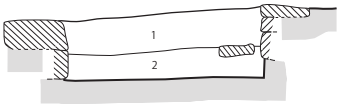
1. 2.5Y5/2(暗灰黄)弱粘質土 焼土粒・炭化粒微量入る
2. 2.5Y5/3(黄褐)シルト 2～10cm大の礫中量入る
3. 2.5Y4/3(オリーブ褐)シルトに10YR5/6(黄褐)壁土ブロック状に入る
5～30㎝大の礫中量入る 最下面：焼締面あり

C室断面土層



1. 10YR5/6(黄褐)シルトに10YR4/2(灰黄褐)シルトが混じる
炭化粒・焼土粒微量入る
2. 10YR5/6(黄褐)シルトに2.5Y5/3(黄褐)シルトが混じる
炭化粒・焼土粒微量入る
3. 10YR5/6(黄褐)シルトに2.5Y4/3(オリーブ褐)シルトが混じる
炭化粒・焼土粒微量入る

D室断面土層



1. 2.5Y4/3(オリーブ褐)シルトに10YR5/6(黄褐)シルトがまだら状に混じる
炭化粒・焼土層微量入る 2～20cm大の礫多量入る
2. 2.5Y4/2(暗灰黄)シルトに10YR5/6(黄褐)シルトがブロック状に混じる
炭化粒・焼土層微量入る 2～20cm大の礫多量入る

0 1:40 2m

図57　遺構4003及び建替変遷概略図

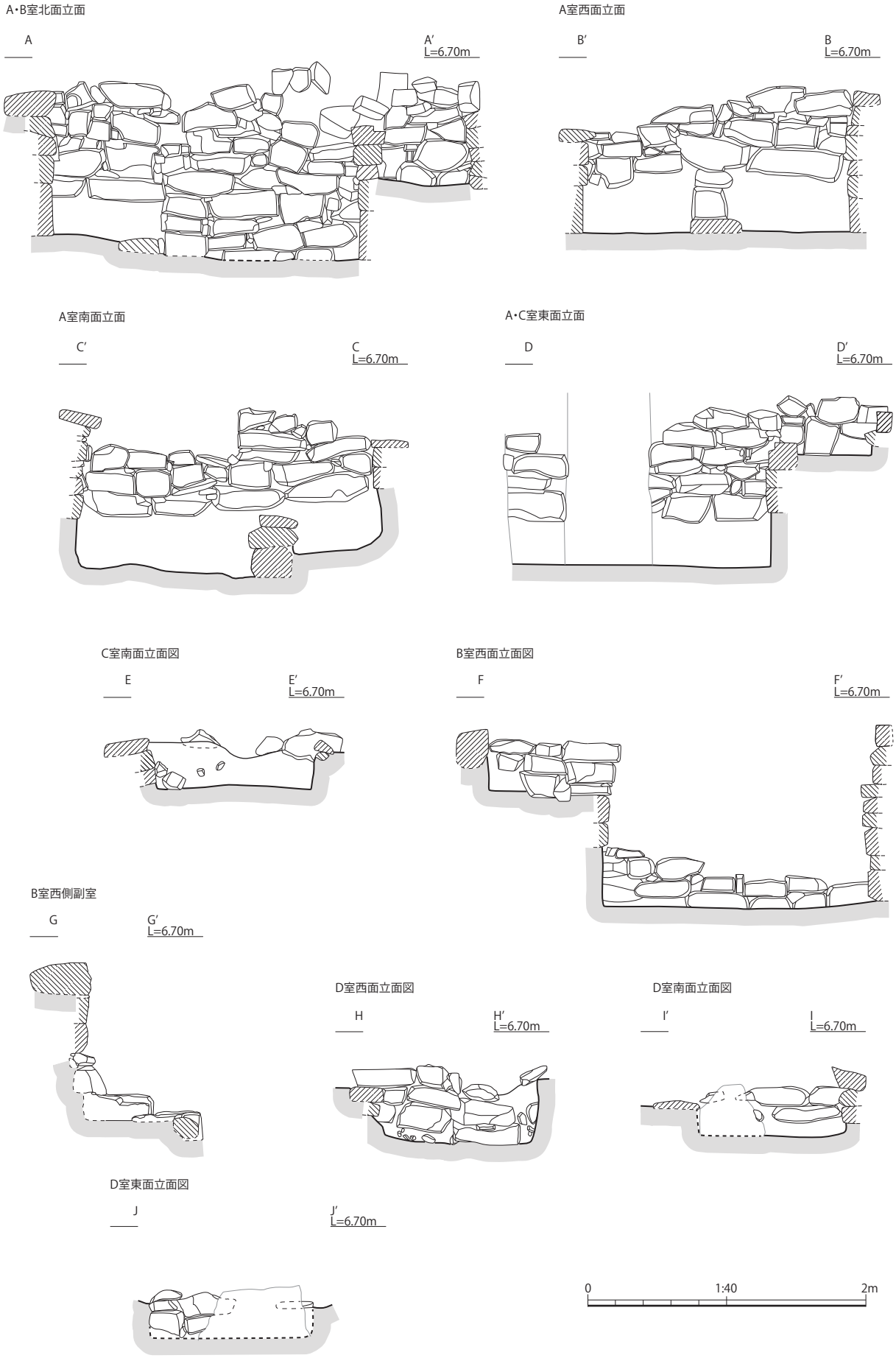

A・B室北面立面
A
A′
L=6.70m
A室西面立面
B′
B
L=6.70m
A室南面立面
C′
C
L=6.70m
A・C室東面立面
D
D′
L=6.70m
C室南面立面図
E
E′
L=6.70m
B室西面立面図
F
F′
L=6.70m
B室西側副室
G
G′
L=6.70m
D室西面立面図
H
H′
L=6.70m
D室南面立面図
I′
I
L=6.70m
D室東面立面図
J
J′
L=6.70m
0
1:40
2m

図58　遺構4003

坦な石が据えられていたが、これは踏み台として設置されていたものと理解している。また、この遺構については、これ以外にも石の並びが検出されており、もう一時期異なる平面プランを持った地下式倉庫の存在も考えられる状況であったが、撹乱等により明確にするには至らなかった。

出土遺物には土師器の皿・鍋、常滑の鉢、中国製の青磁碗などがある。このうち土師器の皿(261)は丸く立ち上がり、口縁部が横ナデによりわずかに外反する。鍋では口縁部が内傾し体部に中位から底部にかけて粗いタタキを施す播磨の鍋(262)と「く」の字状に外反した口縁部の上端を上方に摘み上げている南伊勢の鍋(263)がある。いずれも中世後半、15世紀後半のものと考えている。(264)は焼き締めの壷で、色調などから備前の可能性を考えているが、口縁部の形態があまり類例をみないものと言えよう。(265)は備前の擂鉢で、口縁端部が上下に肥厚しておらず、14世紀末ないし15世紀でもごく初めの頃の製品と考えられる。中国製の青磁碗(266)は底部外面が露胎で赤褐色を呈する。内底部から体部にかけて片切り彫りによる草花文が施されている。龍泉窯系の製品で、時期的には14世紀代に収まるものと思われる。

A室から出土している土師器の皿(267)は器壁が薄く、体部から口縁部にかけて丸く立ち上がる。口径は推定であるが11cmほどとやや大きい。南伊勢の製品と考えられる。(268)も南伊勢の製品と考えられるもので、土師器の鍋である。(269)は播磨の鍋、(270)の擂鉢は焼が甘く、茶褐色を呈する。瀬戸の擂鉢であり、時期的には古瀬戸後Ⅳ期の新しい時期、もしくは大窯1に入る可能性もあろう。(271)は中国製の青磁の碗。外底部のみ釉が削り取られている。D室からは中国製の白磁の碗(272)が出土している。15世紀代の白磁と思われるが、軟質ではなく非常に堅密に焼成されている。

以上の遺構4003からの出土遺物をみると15世紀中頃から後半のものが主体だが、廃絶時期については(270)の瀬戸の擂鉢を根拠に15世紀後半から末と判断される。また鍋については、この時期播磨産のものと南伊勢の製品が共存していることが着目される。

遺構4004(地下式倉庫)(図59・62　図版25-2・3)

前述の遺構4003のすぐ西隣で検出した石積みの地下式倉庫である。大部分が調査区の北側外に延びていっており、全容については不明と言わざるを得ない。この石積みの地下式倉庫も石が複雑な並びをしていることから、当初造り替えがあったものと判断して掘り進めたが、石の並びの軸線が異なっていることや、他の造り替えの例のように共有する辺を持たないことから、まったく別の地下式倉庫を重なって検出した可能性がある。その場合図示した4004-A室としたものは、東西1.0m、南北1.7m、深さ0.8mを測るもので、深さ的にはこれまでみてきた石積みの地下式倉庫の本体部と比べても違和感のない深さであるが、平面規模が本体とするには躊躇せざるを得ない。結論的に言えば、この部分は昇降口に相当し、本体部は調査区北側の外に続いていっているものと判断した。

一方、4004-B室としたものは、東西2.2m、南北1.5m以上の規模を有するもので、昇降口とするにはやや大きい。また、南面の石の積みが1～3段、深さ30cmほどときわめて浅い状況であった。さらに西側は河原石を用いて積まれており、その積みも不安定な状況を呈していた。以上のことから、この4004-B室とした遺構については、地下式倉庫の一部と考えてはいるが、

その詳細については判然としない。出土遺物は少ないが、土師器の鍋や青磁の碗が出土している。このうち（273）としたものは、南伊勢の製品で、口縁端部を上方に摘み上げているもので 15 世紀後半段階のものと思われる。同じく土師器の鍋である（274）は口縁部が受け口状に開くもので、全体に器壁が 0.8㎝ほどと厚く、体部外面上位には横方向の削り痕が残る。類例の少ないタイプであり、産地については不明だが、播磨ないし讃岐周辺を想定している。（275）は瀬戸の端反皿である。高台部の形状や鋭い削り出しから登窯第 4 期に帰属するものと判断したが、17 世紀後半まで下るものであり混入の可能性もあろう。この 1 点を除けば、概ね 15 世紀後半段階までのものであり、本遺構の廃絶時期もその可能性が高いものと判断している。

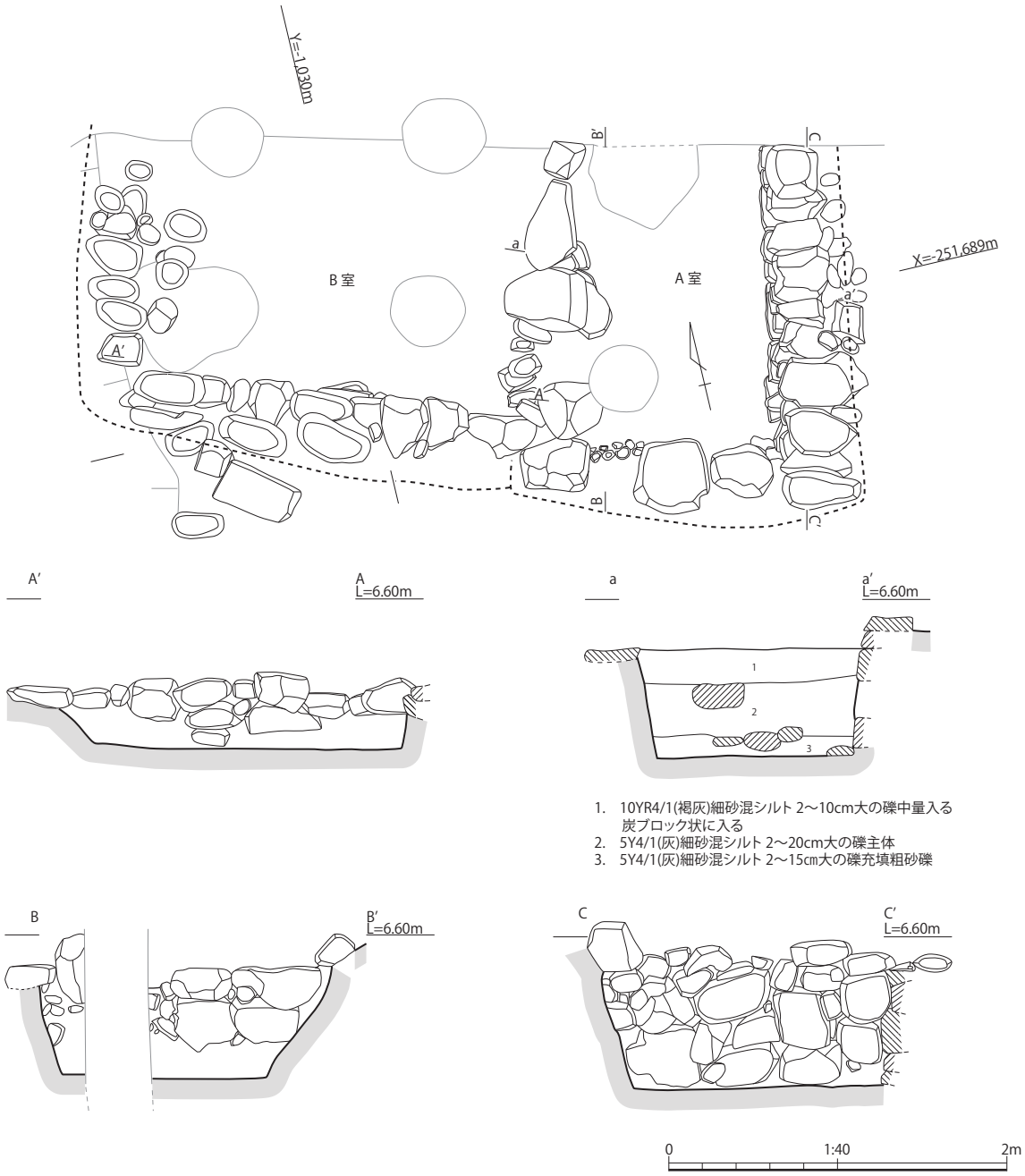


図 59　遺構 4004

遺構 4009（地下式倉庫）（図 60・62　図版 26-1・2）

調査区の北西端で検出した遺構である。大部分が調査区外に延びている模様で、全体については確認できていない。また、当初ひとつの地下式倉庫と考え、掘り進めていったが、断面で確認した結果、石積みを伴わない重複した２基の地下式倉庫であったものと判断した。

このうち 4009- Ｂ室としたものは、確認規模で東西 1.6ｍ以上、南北 1.4ｍ以上を測る。深さは上部が撹乱により大きく削平を受けているためわずかに床面を確認したにとどまる。この床面については、２面確認しており、ともに黄褐色シルトでそれぞれその上面の層には焼土や炭化粒の堆積が認められた。

この 4009- Ｂ室を切って造られたのが 4009- Ａ室で、確認規模で東西 1.6ｍ以上、南北 1.4ｍ以上を測る。この遺構については３面の床面を確認しており、最も最下層のもので深さ 0.4ｍを測る。

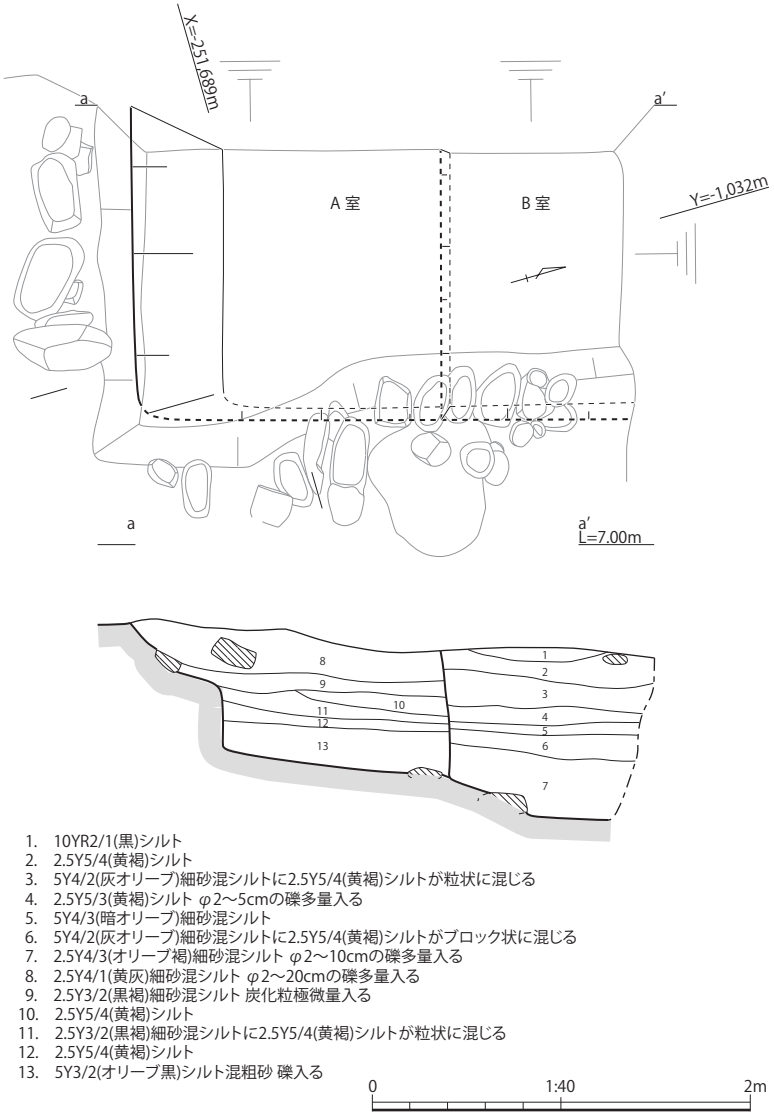


図60　遺構4009

以上の２基を含め調査区の北西部で検出した地下式倉庫の新旧については、切り合い関係等から 4009- Ｂ室 → 4009- Ａ室 → 4004- Ｂ室 → 4004- Ａ室という変遷を辿ったものと想定している。

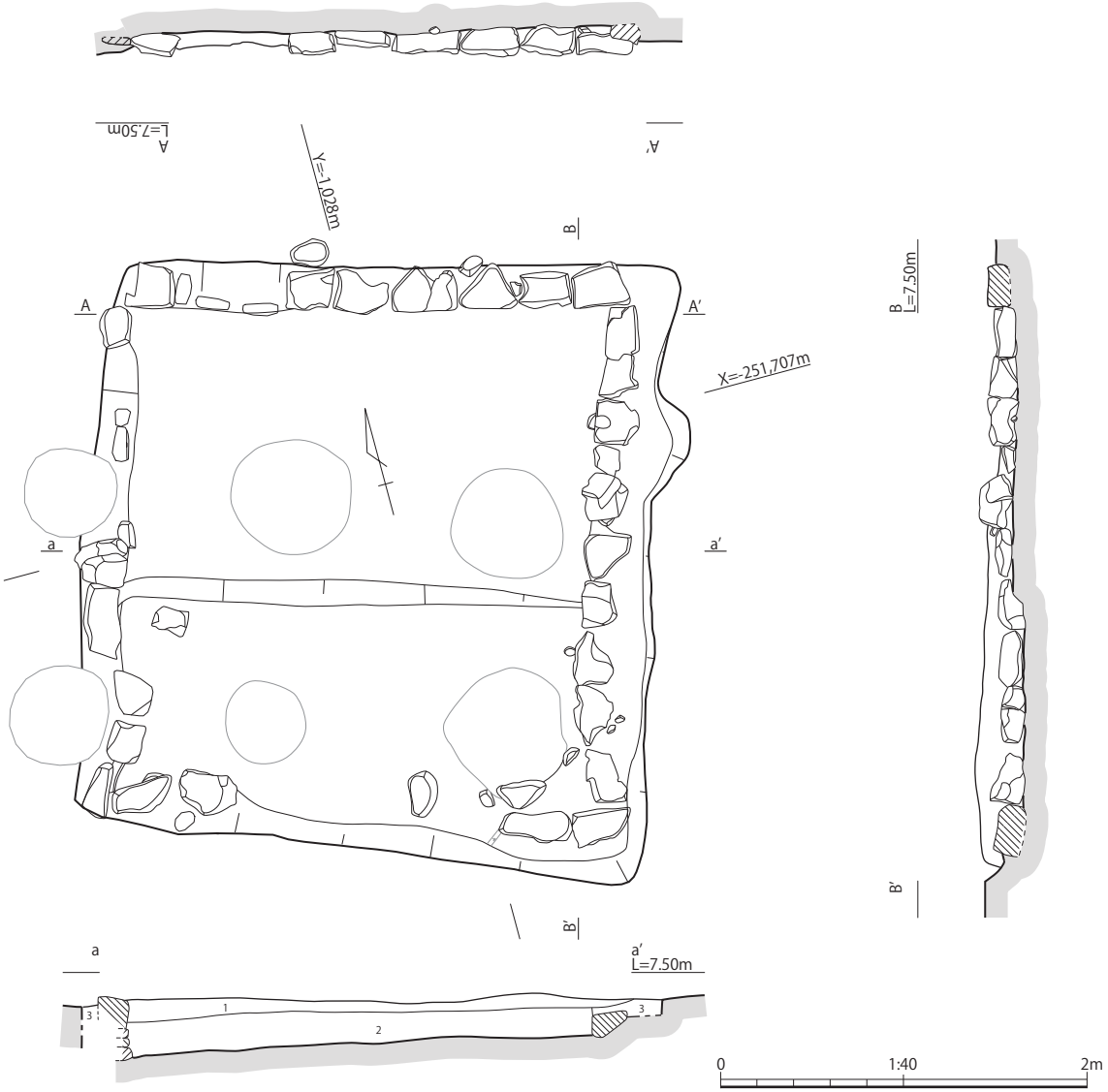
出土遺物には土師器の皿や鍋、瀬戸の碗・皿がある。Ａ室から出土している土器のうち土師器（276）は口径 10㎝ほどで器壁は薄く、体部から口縁部にかけて内湾気味に丸く立ち上がる。14 世紀後半段階の南伊勢の製品と考えられる。（278）の鍋も南伊勢の製品であり、口縁端部の形状からすれば 14 世紀代の可能性があろう。（279）は瀬戸の縁釉の皿で、口縁部付近にのみ淡い草緑色の釉が施されている。（280）は瀬戸の卸し皿で口縁部から外面体部中位まで釉が施されている。（282）は瀬戸の袴腰形の香炉である。口径に比して器高が低くやや扁平な形状になっている。これらの瀬戸の製品について言えば、古瀬戸の後Ⅱ期からⅢ期にかけて、概ね 14 世紀末から 15

世紀の前半代と考えられるものである。

Ｂ室から出土している土師器の鍋（283・284）はともに南伊勢の製品である。口縁端部の摘み上げが見られないことから、14 世紀代に収まる可能性もあろう。瀬戸の折縁深皿（285）の口縁部がほぼ水平に引き出され、凹線状の窪みが生じていることから古瀬戸後Ⅱ期に帰属するタイプと思われる。常滑の甕（287）は「Ｎ」字状の口縁部が、体部に密着しない段階であることから 14 世紀中頃までの製品と判断される。以上見てきた出土遺物から判断すればこの遺構の廃絶時期については 15 世紀前半～中頃と言えよう。

遺構 4005（地下式倉庫）（図 61・62　図版 26-3・27-1）

南北 2.9 m、東西 2.6 mを測る石積みの地下式倉庫である。本来的には深さ 0.8 mほどはあったものと推定されるが、大きく削平を受け深さ 15cm ほど、わずかに基底部の一段のみが遺存していたにすぎなかった。おそらく昇降口を伴うタイプと考えられ、その場合、他の類例から南辺の東側寄りに設置されていた可能性が高いものと推定している。



1. 2.5Y3/3(暗オリーブ褐)シルト10YR5/6(黄褐)壁土混じる 炭化粒・焼土粒微量入る
   下面10YR5/6(黄褐)シルト 貼床
2. 2.5Y4/3(オリーブ褐)細砂混シルトに2.5Y5/6(黄褐)シルトがまだら状に混じる
3. 5Y4/2(灰オリーブ)シルト 中砂～細砂混シルト

図 61　遺構 4005

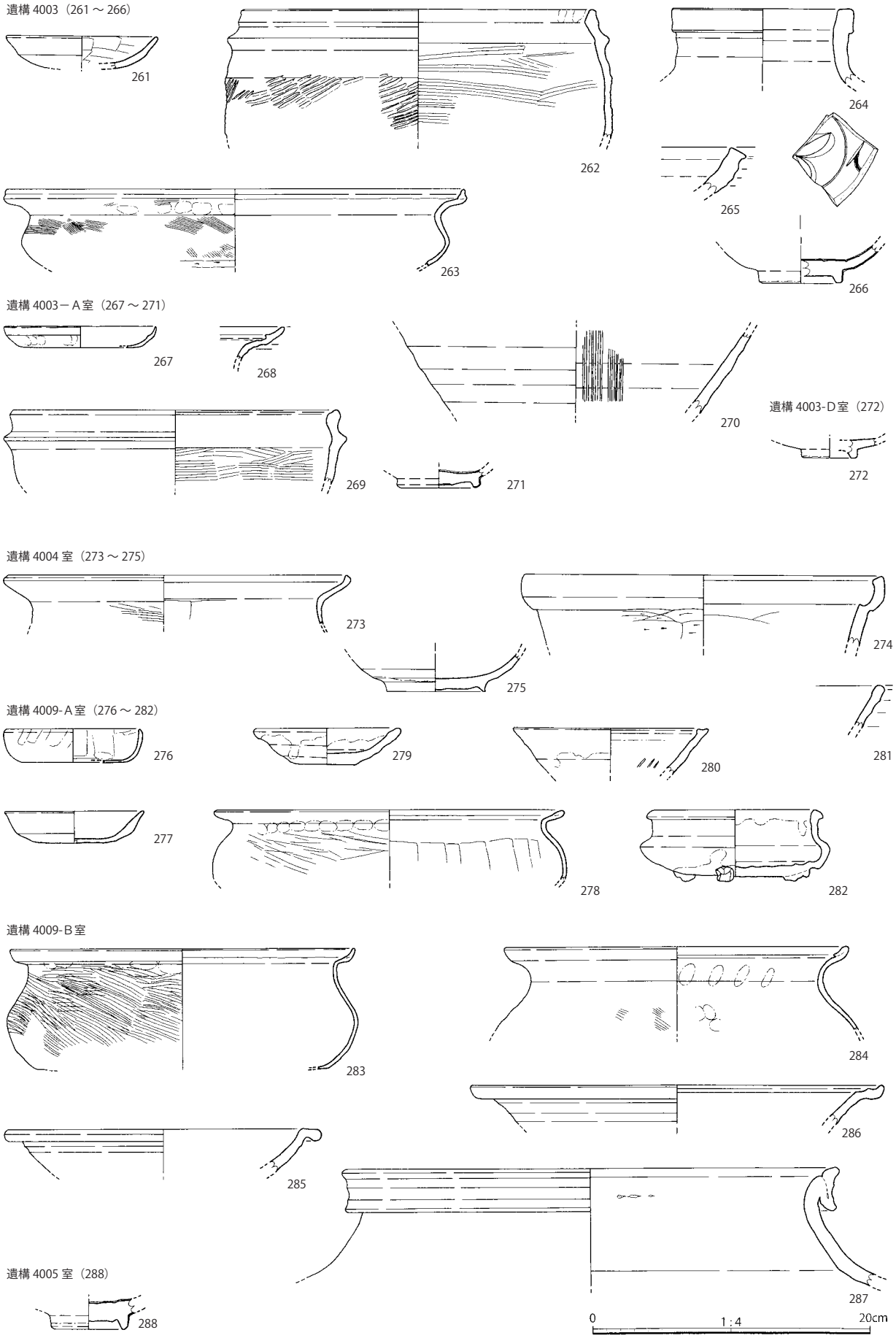


図 62　遺構 4003・4004・4009・4005 出土遺物

出土遺物は極めて少なく、掲示できたのは（288）の中国製の青磁碗のみであった。高台畳付部と内底面は露胎で赤茶色を呈している。体部を欠いているため詳細については不明であるが、おそらく15世紀代の龍泉窯系の青磁であろう。

遺構4031（地下式倉庫）（図63～65　図版27-2,3・28-1）

南北2.2ｍ、東西2.8ｍを測る長方形状の地下式倉庫である。側面の一部に床から立ち上がる板材を確認しており、石積みを伴うものではなく、前述した遺構760と同様に四周の壁は板材で囲われていた可能性が高い。この地下式倉庫についても焼失した可能性が高く、床面近くにブロック状の焼土や炭の混じった土の堆積があり、これらを取り除いた床面直上には焼けて炭化した建築部材と思われる柱や板材が散乱した形で見つかっている。このうちの一部をサンプルとして取り上げ、樹種同定を行った結果、コウヤマキであることが判明した。

この詳細については、別項で記すが、コウヤマキは肌目が緻密で強靭、耐朽・保存性も高く、とくに耐湿性に優れた材である。また、針葉樹の中では最も加工が容易な材で、古代以来、船舶材に用いられてきたことが知られている。こうしたことから本遺構である地下式倉庫の建築部材としては適材であったと言えよう。

この遺構内には校舎建設に伴う基礎杭が3本打ち込まれており、これによる撹乱や変形が著しく、詳細な構造については明かにすることができなかった。

出土遺物は多く、土師器の皿・鍋のほか瀬戸の碗・皿などをはじめ中国製の青磁のほか石臼などがある。上層からの出土遺物（289～292）のうち（289）の土師器の鍋は全体に器壁が薄く、体部上位から底部付近まで粗いハケ調整、底部は横方向の粗い削りの痕跡が明瞭に残る。南伊勢の鍋である。口縁端部は上方に摘み上げずに水平に収めていることから、やや古く14世紀代の製品の可能性が高い。（290）は備前の壺で、頸部はほぼ直立し口縁端部は丸みを帯びている。（291）の擂鉢は全体に赤味を帯びた色調で、胎土には長石が多く含まれており、信楽の可能性が高い。（292）は瀬戸の大皿で、卸し目の付くタイプであろうか。口縁部形態から古瀬戸後Ⅱ期からⅢ期にかけて、15世紀を前後する時期のものであろう。

中層から出土している土師器の皿（293～295）はいずれも南伊勢の製品と考えられるもので、とくに（293・294）は器壁がきわめて薄い。（295）は口径25cmほどの大皿で、体部から口縁部にかけて外反し、丁寧なナデ調整により平滑に仕上げられている。類例が少なく、特異なものと言えよう。これらの土師器皿については、概ね15世紀後半段階に位置づけられるものと考えている。

土師器の鍋（296～299）はいずれも口縁部下から体部中位付近までハケ調整、体部下半から底部にかけては横方向の削り調整を施している。口縁端部を上方に摘み上げているもの（297）や内側に折り曲げ扁平に仕上げているもの（298・299）がある。おそらく時期差と考えられ、前者は15世紀代、後者は14世紀後半段階のものと思われる。同じく土師器の製品である（300）は、こうした鍋類とは様相を異にした形状を呈する。頸部はやや内傾し、口縁部直下に幅の狭い凸帯が巡らされている。張り出し気味の肩部から丸みを帯びつつ底部に至り、底部は平底に近い形状をなしており、いわゆる茶釜形の釜に該当するものであろう。体部下半近くまでハケ調整、底部付近は横方向のケズリ調整が施されている点では、前述した鍋類と大きな違いは認められない。こ

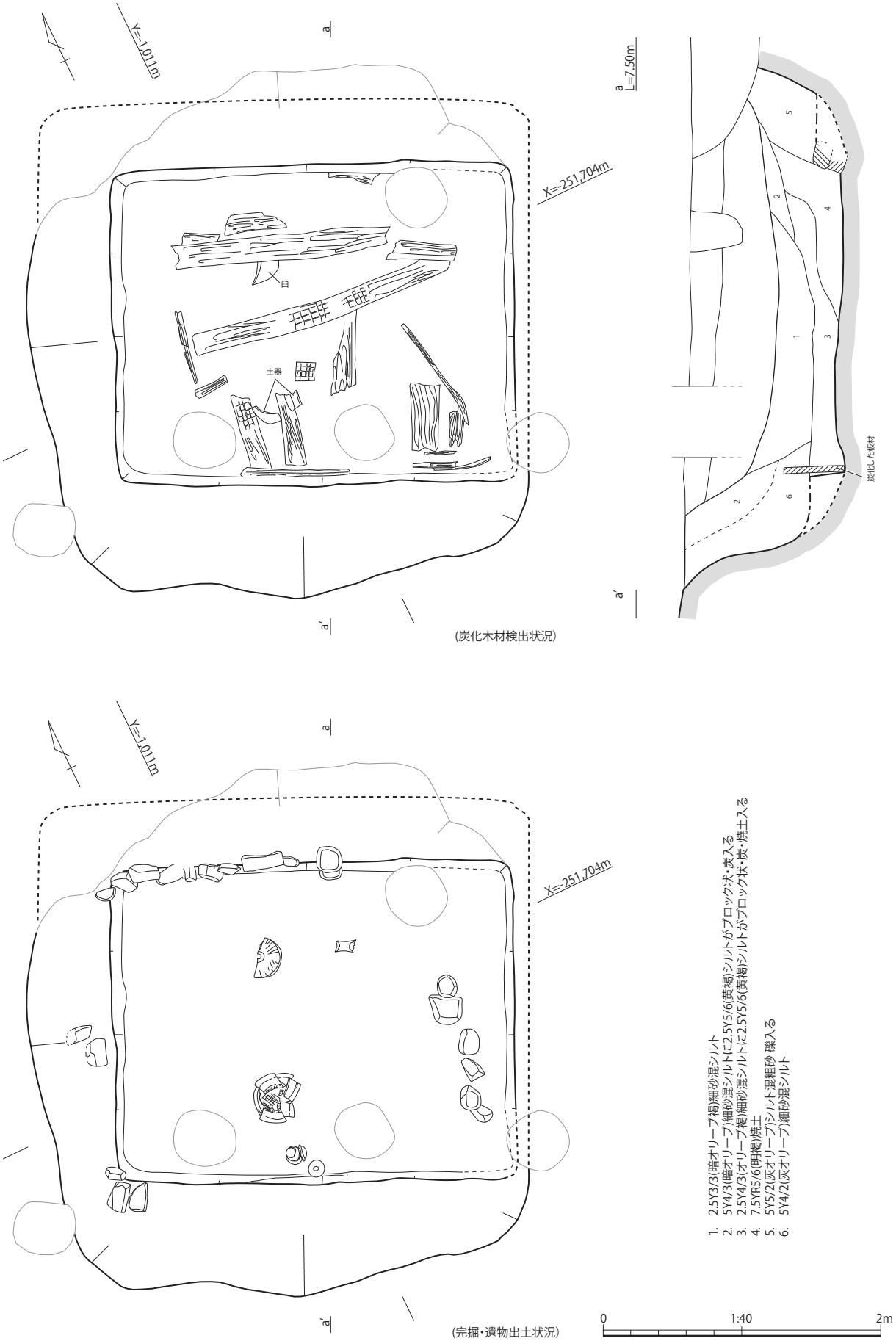

Y=-1,011m
X=-251,704m
a
a'
L=7.50m
臼
土器
炭化した板材
1
2
3
4
5
6
(炭化木材検出状況)
(完掘・遺物出土状況)
1. 2.5Y3/3(暗オリーブ褐)細砂混シルト
2. 5Y4/3(暗オリーブ)細砂混シルトに2.5Y5/6(黄褐)シルトがブロック状・炭入る
3. 2.5Y4/3(オリーブ褐)細砂混シルトに2.5Y5/6(黄褐)シルトがブロック状・炭・焼土入る
4. 7.5YR5/6(明褐)焼土
5. 5Y5/2(灰オリーブ)シルト混粗砂 礫入る
6. 5Y4/2(灰オリーブ)細砂混シルト
0
1:40
2m

図63　遺構4031

の製品についても南伊勢のものと考えており、時期的には15世紀中頃から後半にかけてのものと思われる。

(301) は瓦質の製品で、底部付近に一条の凸帯が巡らされている。底部付近の破片であるため全体像は不明であるが、おそらく粗略な三足が付く深鉢類に該当するものであろう。時期的には15世紀代のものと判断している。(302・303) はともに瀬戸の折縁深皿で、口縁端部の形状からいずれも古瀬戸後Ⅱ期に該当する15世紀を前後する時期のものである。

(304) は瀬戸の直縁大皿で、復元口径30cmを超える大振りの皿である。内外面とも体部の中位まで淡い黄緑色の釉が施されている。(305) は瀬戸の平碗で、外面体部下半は露胎となっており、削り出された高台は低い。時期的には古瀬戸後Ⅲ期、15世紀前半の製品である。

常滑の壺 (306) は、口縁端部が上下に拡張した形状となっており中野6型式でも古い段階、13世紀中頃から後半と一時期古い様相を呈している。

中国製の青磁碗 (307) は、畳み付け及び外底面は露胎。それ以外には淡い草緑色の釉が施されている。また、内底面には吉祥文であろうか簡略化された図案とともに「吉」の字がスタンプにより刻印されている。底部のみの出土であり、詳細は不明であるが、15世紀代の製品であろう。

下層からは、前述した (304) と同じ瀬戸の直縁大皿や中国製の白磁小坏や青磁の盤などが出土している。このうち白磁小坏 (309) は八角形を呈するもので、外面体部下半から底部は露胎。焼成が甘く、軟質の白磁である。15世紀前半から中頃にかけて普遍的に見られるタイプである。また、青磁盤 (310) は内面体部に丸鑿状の施文具で粗雑な蓮弁が施されている。14世紀中頃から後半にかけてのものと思われる。

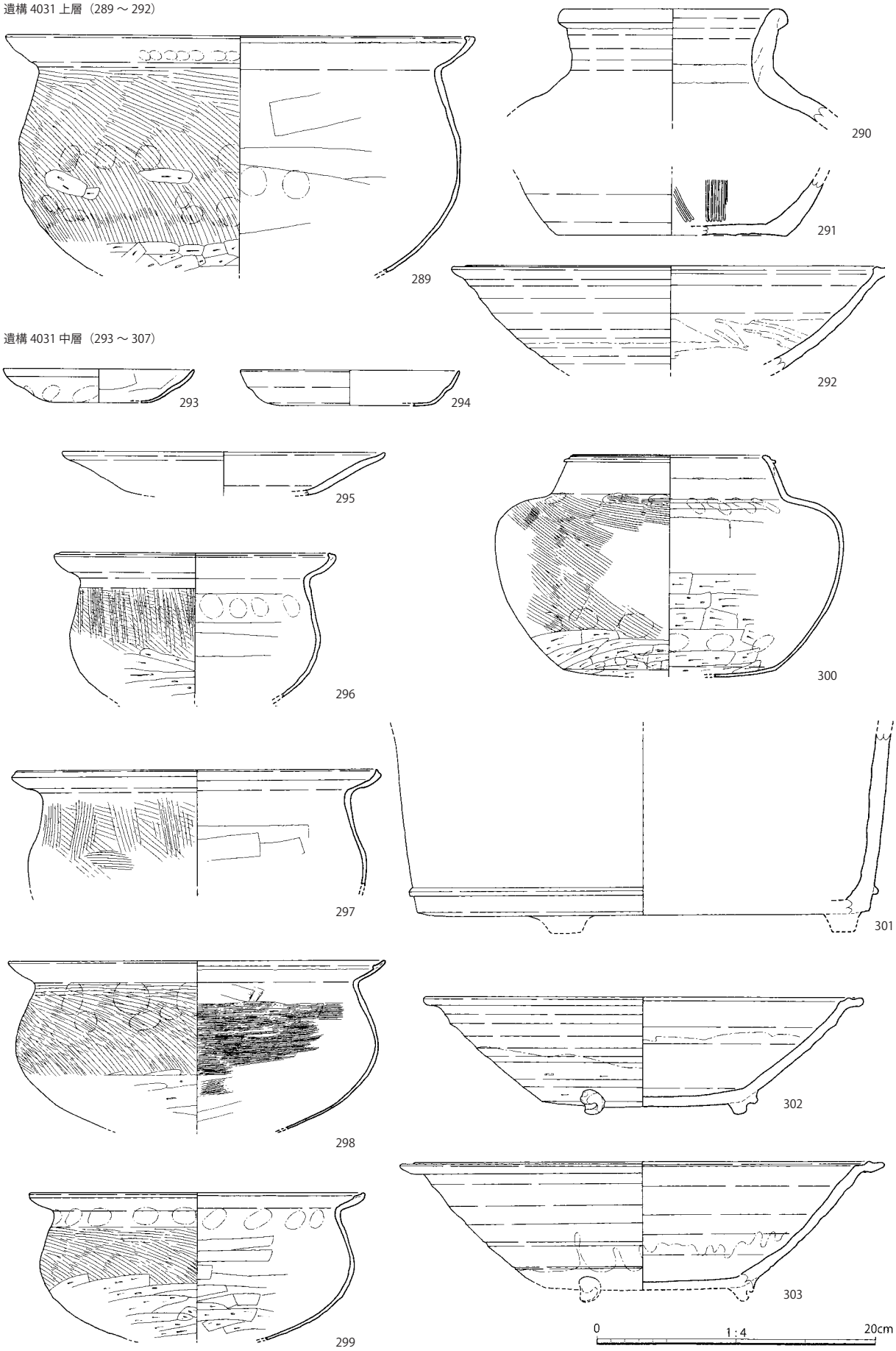
最下層（床面直上）からは土師器の鍋や瀬戸の皿、花瓶のほか石臼が出土している。このうち土師器の鍋 (311) は口縁部が受け口状に開くもので、全体に器壁が厚く口縁部付近では0.8cmを測るほどである。体部下半から底部にかけて格子状のタタキが密に施されている。類例の少ないもので、産地を同定するのに迷うところであるが、阿波ないし讃岐といった四国方面の可能性を考えている。

(312) は瀬戸の天目茶碗であるが、高台部の形状からⅡ類に分類されているものであり、斜め外方に開いた体部から口縁部は直立気味に立ち上がっている。こうした形状から古瀬戸後Ⅲ期に該当する15世紀前半の製品と判断している。(313 ～ 315) 瀬戸の縁釉小皿や小鉢 (316) については古瀬戸の後Ⅲ期のものである。(317) も瀬戸の製品で、やや扁平な丸みを帯びた体部から口縁部が大きく外反するように立ち上がるもので、全体に茶褐色を呈し文様は施されていない。花瓶Ⅲ類に該当するものであり、時期的には古瀬戸後Ⅲ期、15世紀前半のものと思われる。

石臼は2点出土している。ともに半分を欠いており、人為的に粉砕された可能性も考えられる状況であった。このうち (318) は下臼ですり目の分割は8画である。(319) は上臼ですり目の分割は同じく8画である。

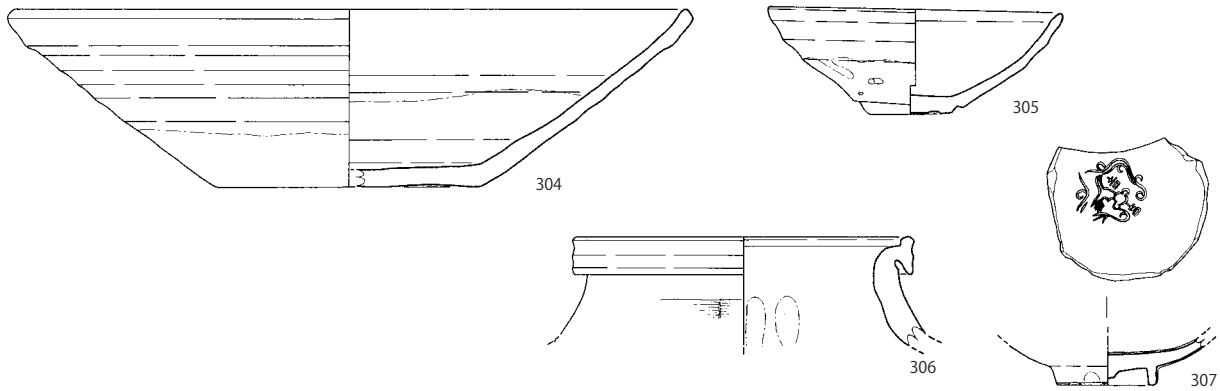
以上、上層から最下層までの出土遺物を各層毎に叙述してきたが、層ごとの時期差はほとんど認められない状況である。全体に概括すれば、(306) の常滑の壺や青磁の盤 (310) のように、明かに14世紀代の遺物も散見するが、古瀬戸Ⅱ期～Ⅲ期に帰属する瀬戸の製品が圧倒的に多い。

遺構 4031 上層（289 ～ 292）

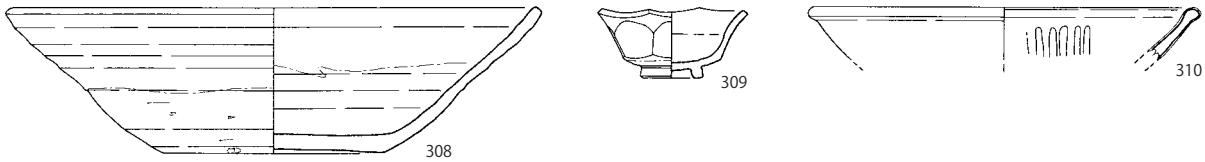


遺構 4031 中層（293 ～ 307）

図 64　遺構 4031 出土遺物（1）



遺構 4031 下層（308 ～ 310）



遺構 4031 最下層（床面直上）（311 ～ 319）

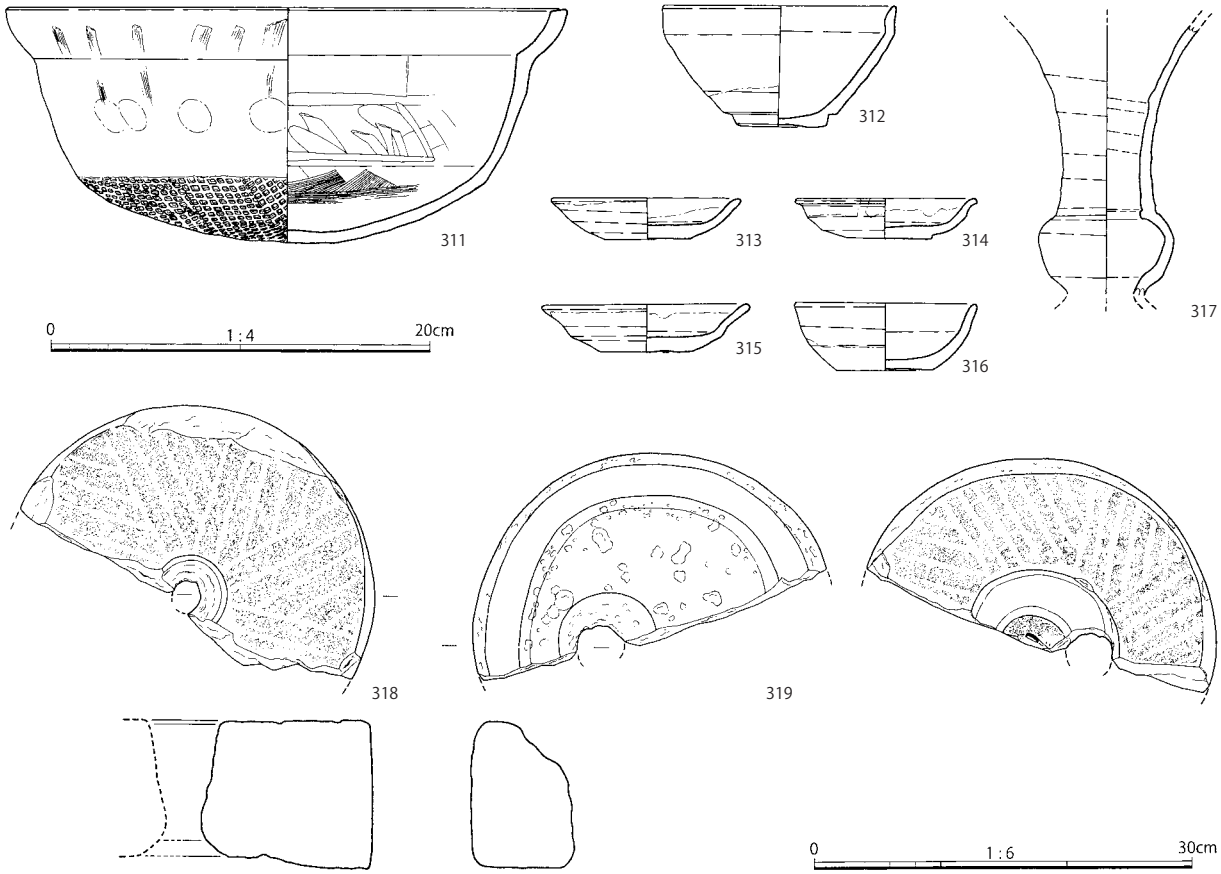


図 65　遺構 4031 の出土遺物（2）

こうした中で新しい要素としては南伊勢の土師器（293・294）などが15世紀中頃にかかるものと思われる。こうしたことを前提として、当該遺構の廃絶時期については、概ね15世紀中頃と判断した。

遺構4027（地下式倉庫）（図66・67　図版28-2,3）

前述の遺構4031の北側で検出した石積みの地下式倉庫である。本体部の規模は一辺2.5ｍほどのほぼ正方形を呈する。検出面から床面までの深さは残りのよい部分で約0.8ｍを測る。石積

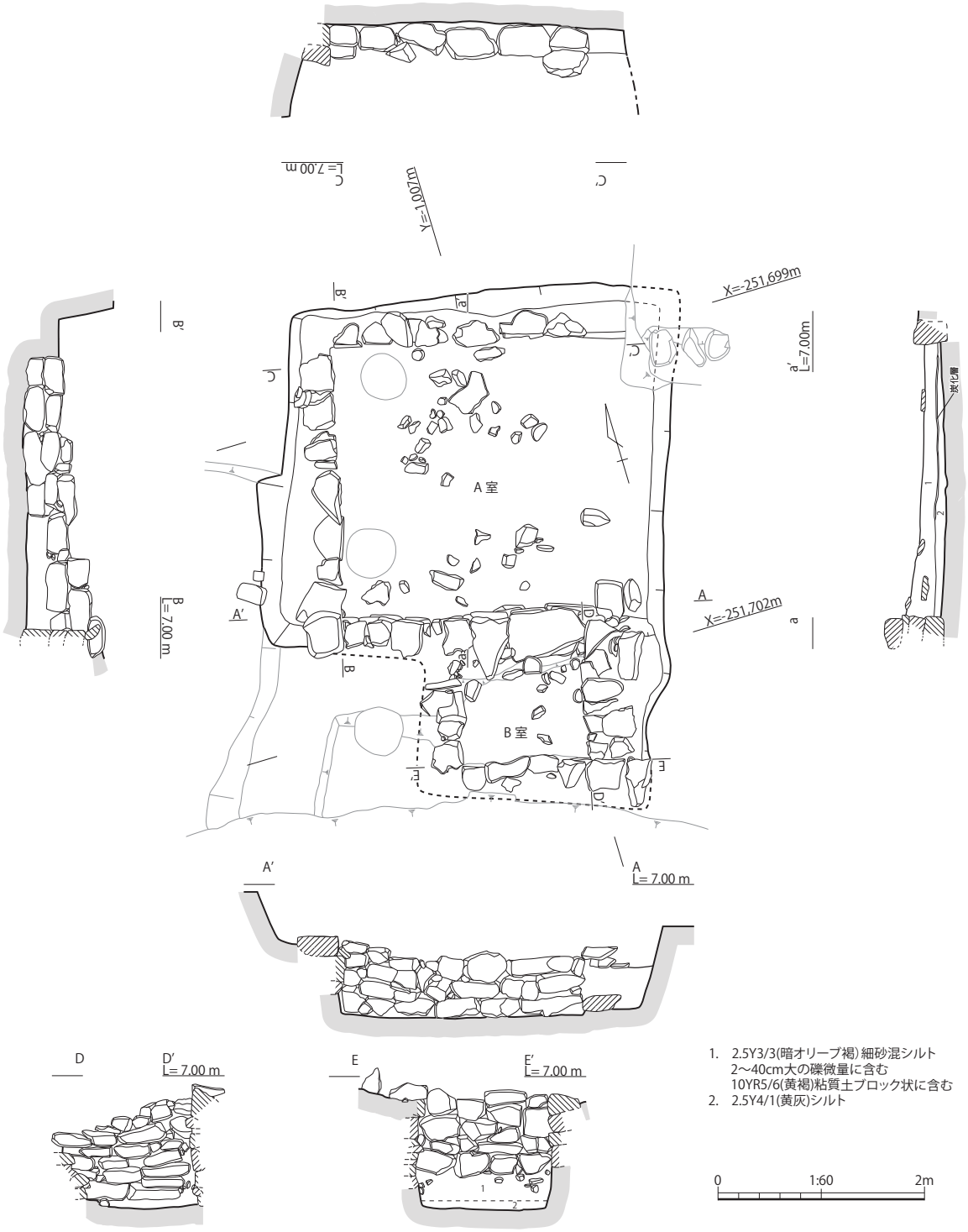


図66　遺構4027

みの残りのよい南壁で見ると、30㎝～40㎝大の石を用いて横積みにし、３段ないし４段積み上げている。北壁や東壁は残りが悪く、基底部に近い１～２段しか残っていない。また西壁にいたっては後世に抜き取られたようでまったく遺存していなかった。床面直上の一部に薄い炭層が堆積しているのを確認した。また、床面は明黄褐色のやや粘質を帯びた土が貼られているのも確認している。

昇降口と思われる施設は、南壁の東寄りに造られており、東西1.2ｍ、南北1.4ｍ、深さ0.4ｍほどを測る。この床面にも本体と同様に明黄褐色のやや粘質を帯びた土が貼られているのを確認している。なおこの遺構については造り替えを確認しておらず、本体部と昇降口は一体、同時期に機能していたと考えられるが、出土した遺物については本体部（Ａ室）と昇降口（Ｂ室）とに分離して掲示している。

出土遺物としては、土師器の皿、瀬戸の碗・皿類をはじめ常滑の甕や中国製の青磁、白磁などがある。このうち⑶20は瀬戸の縁釉小皿で体部下半がわずかに凹み、口縁部はかすかに外側に開いている。こうした形状から古瀬戸後Ⅲ期に該当するものと考えている。⑶21の天目茶碗は体部下半を欠いているため詳細は不明であるが、口縁端部が直立気味に立ち上がっていることから後Ⅱ期、15世紀前後に比定されよう。焼成が堅密で磁器質の感がある。⑶24の瀬戸の折縁深皿はおそらく三足の付くものであろうが底部を欠いている。口縁端部の形状から後Ⅰ期ぐらいに該当するものであろう。⑶22は口縁部のみに錆釉がかかる皿である。端部の形状から卸し皿の可能性が高い。⑶23の折縁中皿は器高が高く、全体に厚手であり、口縁端部の形状はやや古い様相を呈しており、古瀬戸中Ⅰ期、14世紀前後に帰属する可能性がある。

⑶25は常滑の片口鉢で全体に赤味を帯びた茶色を呈している。口縁端部の肥厚はさほど進んでおらず、中野８型式、14世紀後半から15世紀でもはじめの段階と考えている。(326)は中国製の青磁の碗である。底部内面の釉を削り取っており、やや粗雑な製品と言える。

Ｂ室から出土している土師器皿（327～335）のうち⑶28～330）は器壁が非常に薄く、内湾気味に丸く立ち上がるもので南伊勢の土師器皿である。一方、⑶31～335）の土師器皿は口径12㎝ほどで内面にハケ目調整が顕著に残り、全体として色調は白っぽい。これらの土師器皿の時期については概ね15世紀前半から中頃にかけてのものと判断している。ただし⑶27）の土師器小皿は底部が厚く、体部は直立気味に立ち上がるもので、一時期古い様相が認められる。

⑶37）の土師器鍋は口縁端部が上方に摘み上げる15世紀代の南伊勢の製品である。瀬戸の製品としては平碗⑶38）や直縁大皿（340）、折縁深皿（341）などがある。(342)は脚底部のみの出土であるため全体の器形が判然としないが、燭台底部の可能性が高い。これらの瀬戸製品のうち(341)は中Ⅰ期と古く、(339)は後Ⅳ期と新しい。その他は後Ⅱ期に該当する。(343・344)はともに国産の焼き締め陶器の鉢である。接合しなかったことや微妙に色調が異なることから、別個体として掲示したが、同一個体の可能性がある。口縁端部はほぼ水平に断ち切っており、特徴的なのはすり目が同心円状に横方向に施されている。類例を知らず、産地及び時期については不明と言わざるを得ない。

常滑の甕（345・346）はともに「Ｎ」字状の口縁部が頸部にくっつきややひしゃげた形状

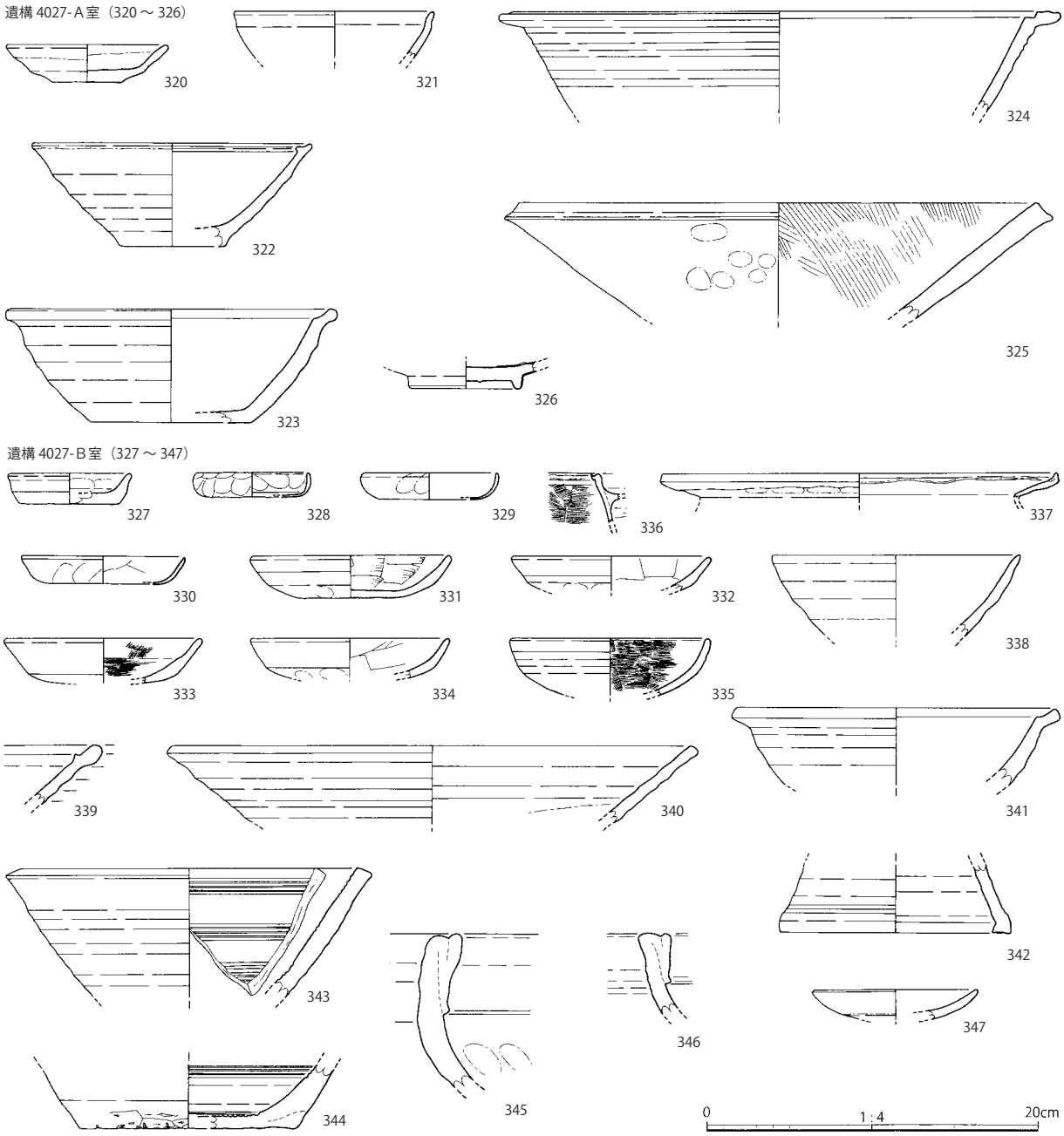


図 67　遺構 4027 出土遺物

となっていることから 15 世紀の中頃に近い時期が想定される。(347) の中国製白磁皿は体部下半が露胎。15 世紀前半代に頻出するタイプである。

遺構 4028（地下式倉庫）（図 68・69　図版 29-1, 2）

前述の遺構 4027 の東側４mほどのところで検出した石積みの地下式倉庫である。倉庫の本体部の北側は調査区外に延びていっており、全容について不明であるが、確認規模で東西 2.5 m、南北 2.6 m以上を測る。石積みはもっとも残りのよい南辺部でも３段、床面から 50cm ほどの高さであるが、検出面からの深さは 1.5 mほどとかなり深い。東辺及び西辺の石積みは大部分が欠損しており基底部の一部が元位置を保った状態で確認された。

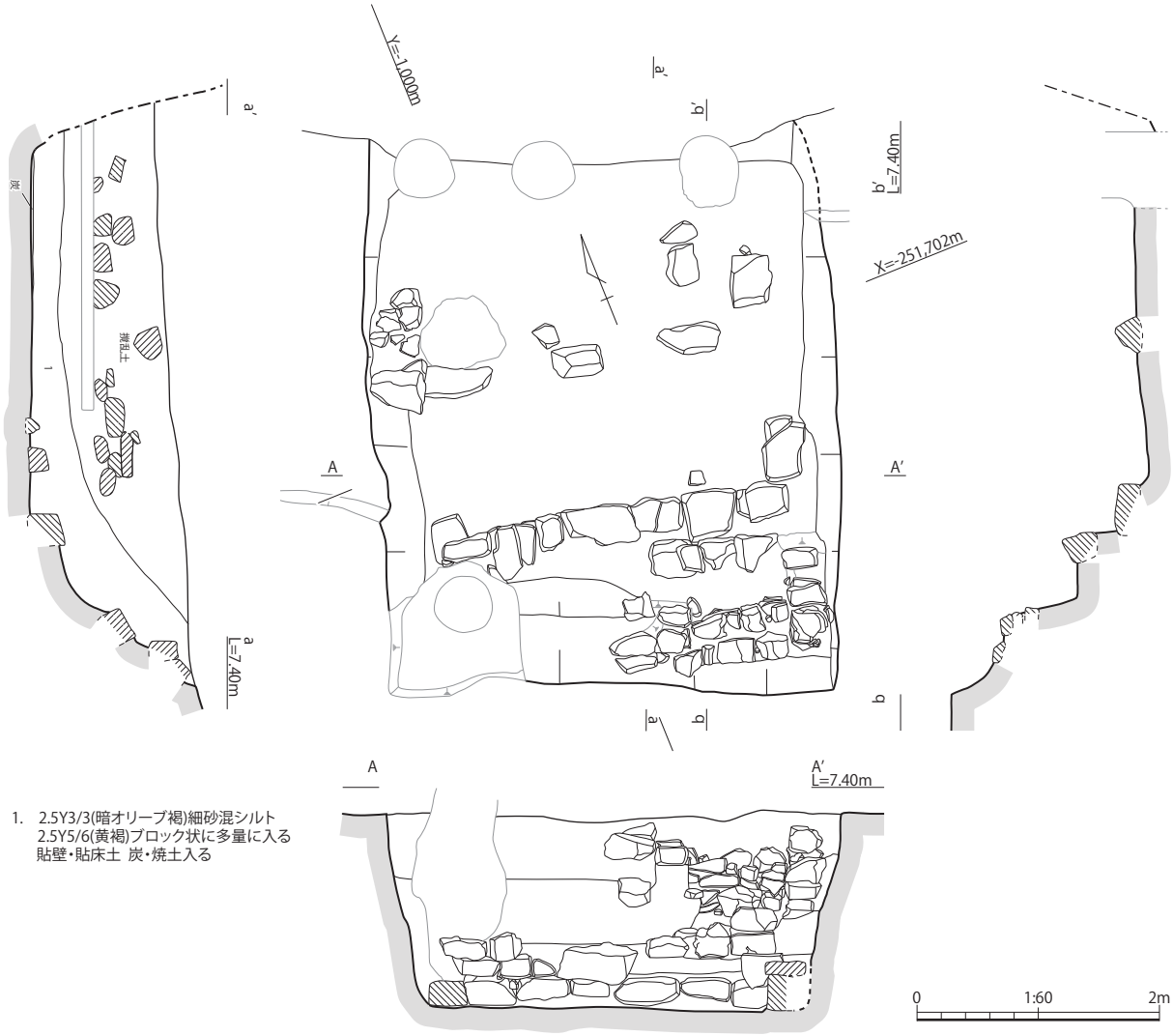


図 68　遺構 4028

床面で礎石と思われる石が３個置かれているのを確認した。位置的には南辺に平行して 1.2 m 北側に寄った箇所である。石は 50㎝ 前後の比較的上面が平坦なもので、ほぼ等間隔で置かれていた。この石の具体的な用途は不明であるが、本体部を間仕切る構造物の礎石であった可能性も考えられよう。

昇降口は南辺の東寄りに設けられており、東西 1.1 m、南北 1.3 mほどを測る。規模的には他の類例と同じであるが、この昇降口については東西方向に二列の石を並べ階段を造り出していた。遺構の埋土をみると、大部分は上から切り込まれたコンクリート片を含む撹乱土であるが、下層は暗オリーブ褐色の細砂混じりのシルト層で、このなかに貼壁の土と思われる黄褐色の土がブロックで多量に含まれていた。また、その最下層の一部には薄く炭層・焼土が堆積しているのを確認している。

出土遺物としては土師器の皿・鍋、瀬戸の皿、備前の擂鉢のほか中国製の青磁皿や白磁皿などがある。このうち土師器の皿（348・349）はともに口径 9 ㎝ ほどで、底部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がり、体部外面の指オサエが顕著に残っている。土師器の鍋は屈曲した口縁部

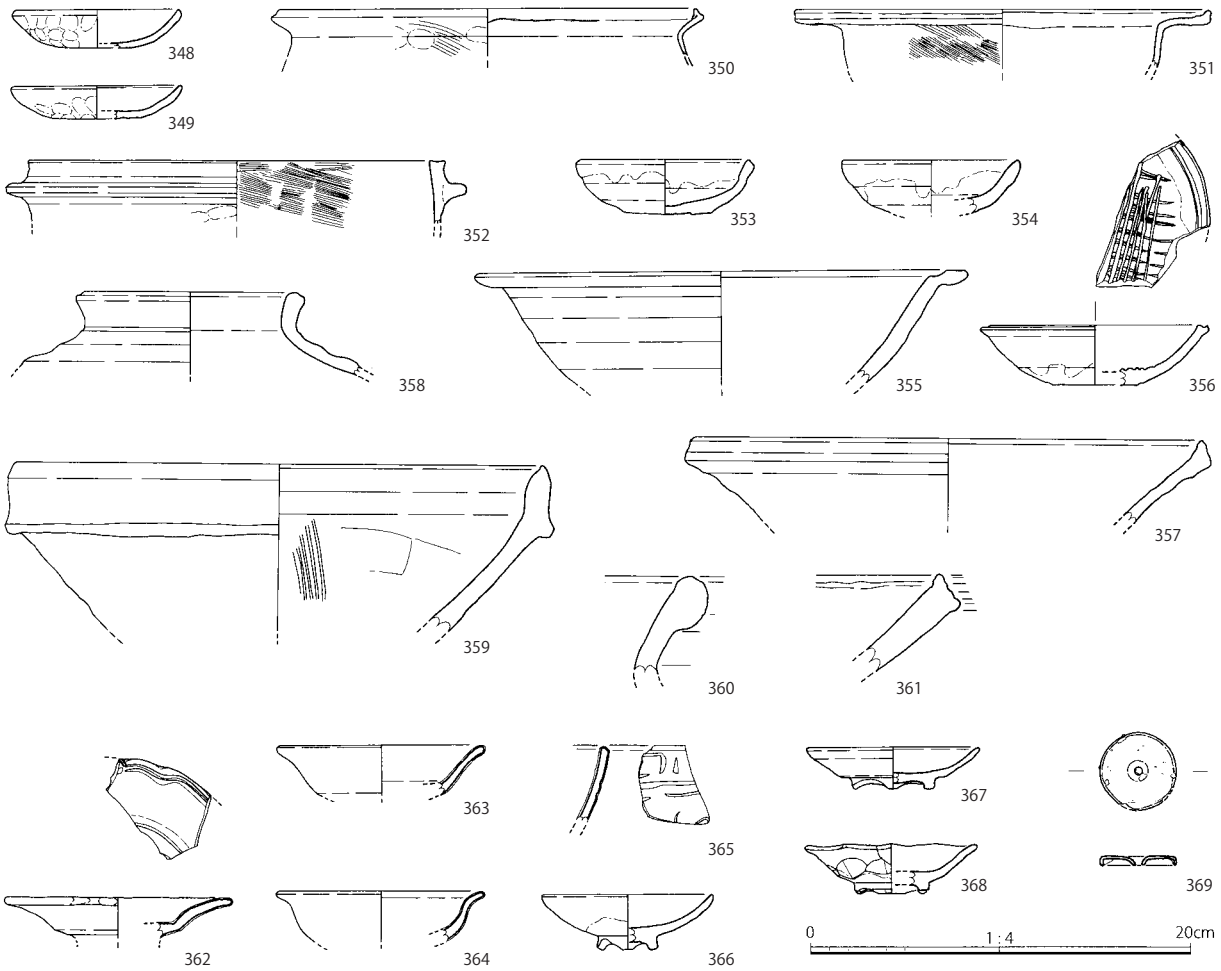


図 69　遺構 4028 出土遺物

の端部が上方に摘み上げられるタイプのもの（350・351）と口縁部下に長さ 1 ㎝ほどの鍔がつく羽釜タイプのもの（352）がみられる。この羽釜タイプのものは、焼成がきわめて堅密で、瓦質に近い。前者は南伊勢のもので、時期的には 15 世紀代のものである。後者については、類似のものが南伊勢に見られるが 16 世紀まで下るものである。共伴する遺物から 16 世紀代のものとするには躊躇され、むしろ 15 世紀代の阿波周辺の製品の可能性が高いものと考えている。

瀬戸の縁釉の皿（353・354）はともに口径 10㎝ 足らずと小振りであり、口縁部にかけて丸く立ち上がる。古瀬戸後Ⅳ期でも比較的新しい様相を見せていることから 15 世紀中頃から後半にかけての時期のものであろう。折縁の深皿（355）や卸皿（356）については、古瀬戸後Ⅰ期、14 世紀後半に帰属するものと思われる。

国産陶器の壺（358）は全体に灰色を呈し、肩部に暗緑色の自然釉がかかる。産地・時期については不明である。（359）は備前の擂鉢で、口縁部の形状から 15 世紀後半から末にかけてのものであろう。おなじく備前の製品である甕（360）は 15 世紀中頃の可能性が高い。（357）は錆釉の施された瀬戸の擂鉢である。口縁部の形状からすれば古瀬戸の後Ⅳ期の新段階、15 世紀でも中頃から後半にかけてのものである。常滑の片口鉢（361）は、口縁端部が上下に拡張はじめており、15 世紀中頃から後半段階のものであろう。

中国製の青磁のうち（362）の稜花の皿は15世紀後半代、（365）の碗は外面口縁部に形骸化した粗略な雷文帯を施したもので、14世紀後半から15世紀にかけてのものであろう。白磁の皿・坏（366～368）はいずれも割り高台で、やや濁りを帯びた白色を呈する軟質の白磁である。これらは15世紀前半から中頃の製品である。（369）の金属製品は銅製で、径4cmを測り中央に4mmほどの孔がある。用途については飾り金具の可能性が高いものと考えている。

以上の出土遺物を概括すれば、14世紀代のものも多く含まれるが、15世紀前半～中頃にかけてのものが主体となっている。ただ、備前の擂鉢や古瀬戸後Ⅳ期の新段階に帰属する可能性のある（357）の瀬戸擂鉢の存在を考えれば、この遺構の廃絶時期については15世紀後半から末になるものと判断している。

遺構4019（地下式倉庫）（図70・71　図版29-3）

前述の遺構4027の北東端で検出した遺構である。当初、東西方向に並ぶ3石を検出しただけであったが、地下式倉庫になる遺構の可能性が考えられたため、調査区の北壁を可能な限り北側に掘り進めた結果、南北方向に並ぶ石列もわずかながら確認することができた。大部分が調査区外に延びていくことや校舎建設に伴う基礎杭による撹乱が著しく、全体像を把握するには程遠い状況であったが、確認規模では東西2.2m、南北2m以上になるものと推定される。なお、切り合い関係から、前述した遺構4027より新しいものと判断される。

出土遺物には土師器皿や鍋のほか瀬戸の皿、常滑の甕などがある。このうち土師器の小皿（370・371）は底面が平らで、体部は斜め上方に立ち上がり、丁寧なナデ調整が施されている。そのほかの土師器皿（372～375）は口径12cm前後を測り、体部から口縁部にかけては丸みを帯びて立ち上がる。全体に白っぽい色調を呈している。（376）は山茶碗の片口鉢。尾張の製品であり、13世紀後半段階のものと考えられる。（377）は瀬戸の折縁深皿になるものと思われる。（378）の瀬戸小鉢は、外面体部下半から高台部にかけて露胎となっている。これら瀬戸の2点については、前者が古瀬戸中Ⅳ期、後者は古瀬戸後Ⅲ

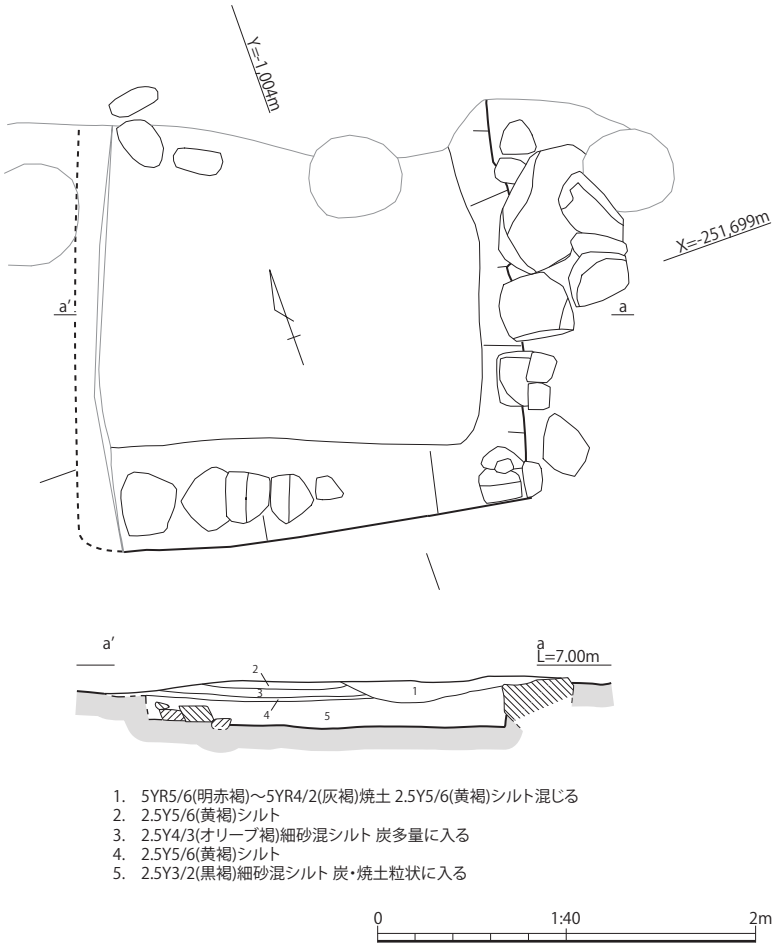


図70　遺構4019

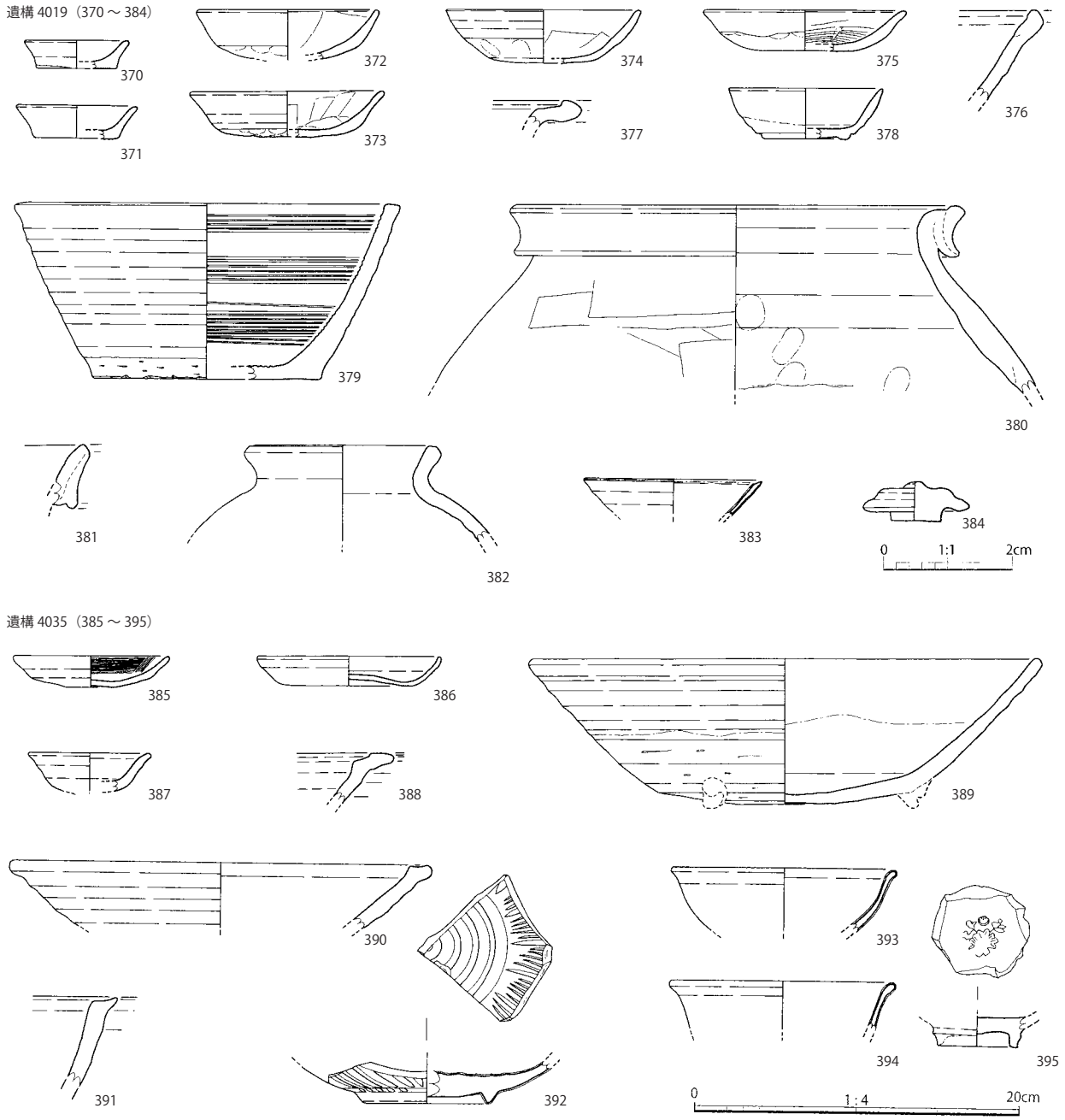


図 71　遺構 4019・4035 の出土遺物

期に帰属する。

(379) の擂鉢状の焼き締め陶器は全体に茶色を呈したもので、内面体部に横方向のすり目状の沈線が 3 帯巡らされている。前述した遺構 4027 から出土している (343) と同じものであろう。(380・381) はともに常滑の甕である。口縁部の形態から 15 世紀中頃から後半にかけての時期のものである。(383) は白磁の皿で、口縁部の釉薬が削り取られた、いわゆる口禿の皿と称されているものである。(384) も中国製の白磁で、合子もしくは小壷の蓋でと考えられよう。この 2 点について言えば、共伴して出土している遺物より古く、13 世紀代に帰属するものと言えよう。

以上の出土遺物から見れば、この遺構の廃絶時期は 15 世紀中頃以降、後半に近い時期を想定している。

遺構 4035（地下式倉庫）（図 71・72　図版 30-1）

調査区北東端で検出した地下式倉庫である。東側が調査区の外へと延びるため、全容については不明であるが、東西 3.5 m、南北 4.0 m以上と比較的大きい部類に入るものと思われる。深さは検出面から 0.9 m ほどで、上層は撹乱土によって埋まっているが、5 ～ 30㎝ 大の礫を多く含む暗オリーブ色の細かな砂混じりのシルト質の土であった。この中には微量の炭・焼土が含まれていた。

出土遺物としては土師器皿のほか瀬戸の鉢、青磁の盤・碗などがある。土師器の皿のうち（386）は器壁が薄く、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるもので、南伊勢の製品である。（387）の瀬戸の小鉢は、口縁部がわずかに外反する。古瀬戸後Ⅲ期に帰属する時期のものであろう。そのほか瀬戸の製品としては、折縁深皿（388・390）や直縁の大皿（389）、などがある。これらは古瀬戸中Ⅰ期から古瀬戸後Ⅲ期と時期幅が認められる。

常滑の片口鉢（391）は、口縁端部が外方向に引き出されており、15 世紀中頃の形状をしめすものと思われる。（392 ～ 395）はすべて中国製の青磁である。このうち（392）は大振りの盤である。体部内外面に丸鑿状工具による蓮弁文が施されている。おそらく口縁部が折縁となるもので、14 世紀代に帰属するものであろう。その他の青磁碗は 15 世紀に入ってからのものである。

遺構 3100（地下式倉庫）（図 73　図版 30-2, 3）

調査区の西端にかかる状態で検出された遺構である。埋土や形状などから地下式倉

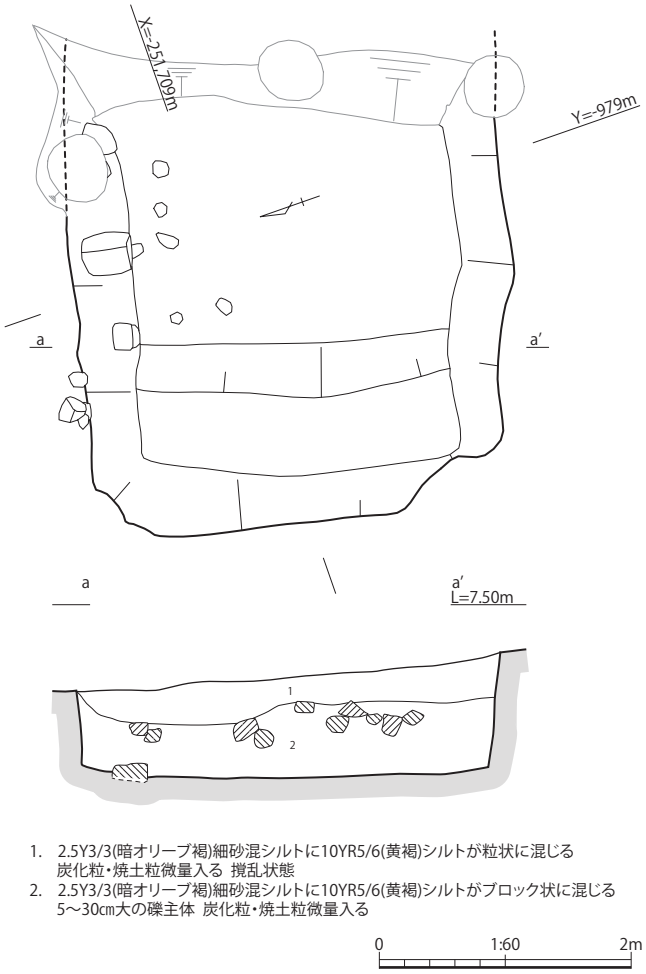


図72　遺構4035

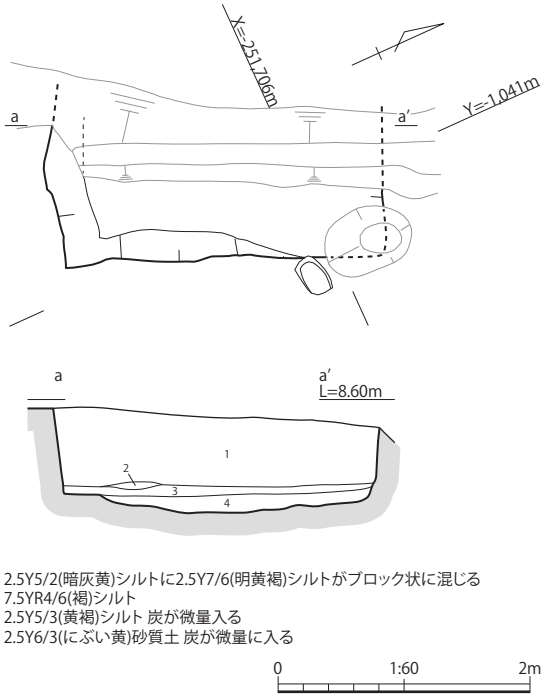


図73　遺構3100

庫になるものと判断したが、大部分が調査区外に延びることや北東隅が後世の撹乱による破壊を受けているため全体像は判然としがたい。おそらく南北 2.5 mほどになるものと思われる。埋土には微量の焼土や炭粒が含まれていた。

出土遺物がほとんどなく、わずかに 15 世紀代と思われる瀬戸の折縁深皿や土師器皿の小片のみであった。

2．大型土坑

1 次調査も含めて今回の調査では、径 1.0 m前後、深さ 1.5 mを越えるような土坑を多く検出した。これらの土坑については、当初井戸である可能性も考えたが、現段階ではその用途について判然としない状況である。一般的な土坑に比べて深さが異常に深く、概して真直ぐ掘られているなど特性が認められる。このためここでは「大型土坑」なる仮称を用いた。その概念としては、径 0.8 m以上、深さ 1.5 m以上を測るものを対称にしている。ただし、深さについては、近世以

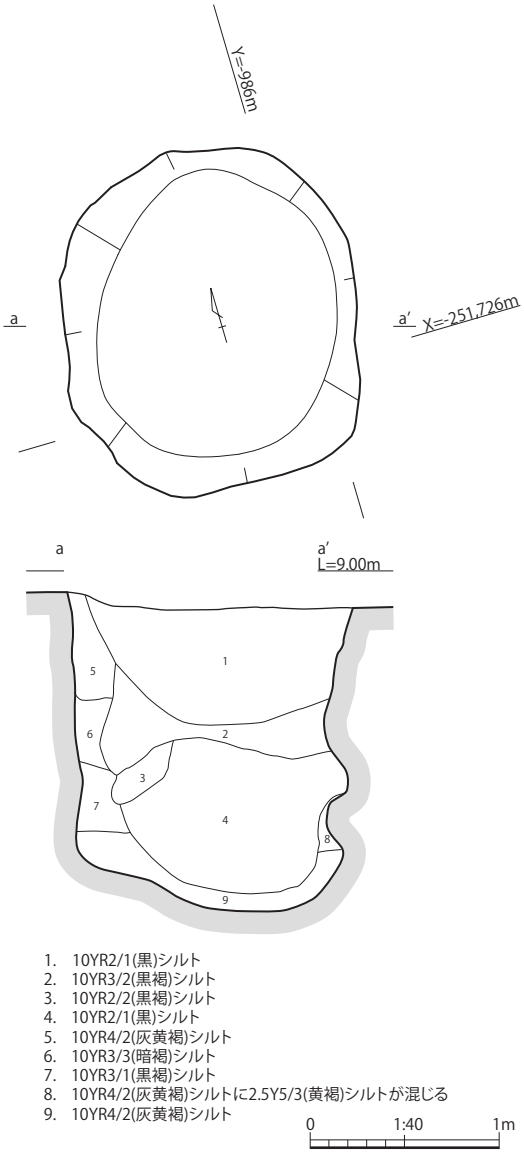


図 74　遺構 1-801

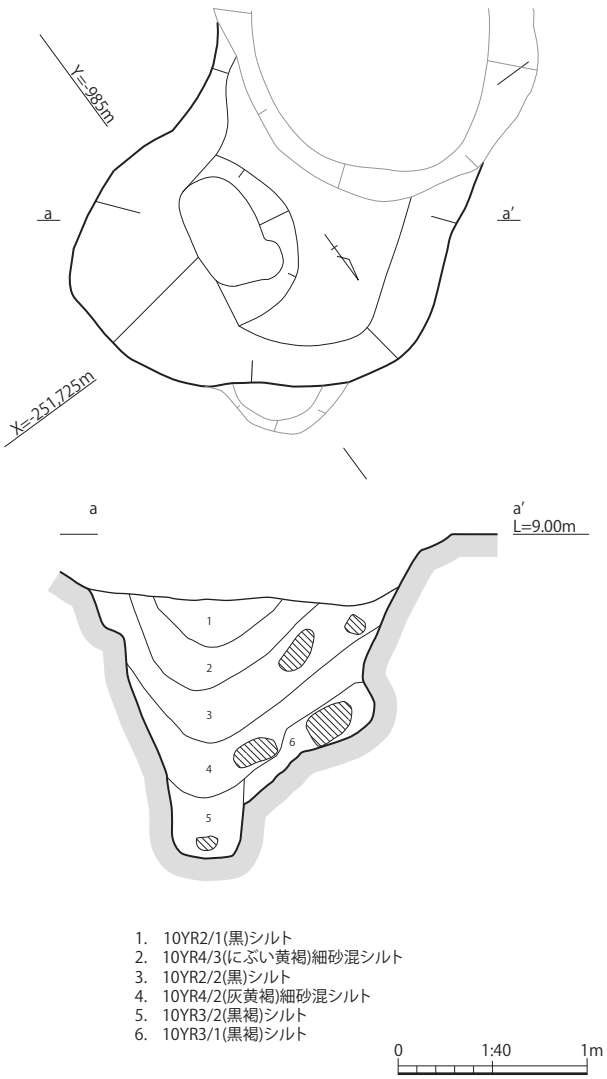


図 75　遺構 1-802

降に大きく削平されたものもあり、これらを考慮して当初の遺構面からの深さに換算している。

遺構 1-801（大型土坑）（図 74・76）

１次調査で検出されたもので、位置的には２次発掘調査の東辺端に相当する個所である。長径 1.8 m、短径 1.5 mを測る。深さは 1.6 mほどで、ほぼ垂直に掘られている。埋土は９層に分けているが、基本的には黒味の強いシルト層によって埋められていた。

出土遺物には土師器の皿・鍋、山茶碗や常滑の壺・甕のほか白磁の四耳壺などがある。このうち上層から出土している土師器の皿（396）は碗形に丸く立ち上がるもので、内面にハケ目調整の痕跡が顕著に残る。（397）の土師器は 1cm ほどの鍔のつく羽釜形の鍋で、産地としては南伊勢の可能性が高く、14 世紀後半ぐらいに帰属するものであろう。（398）も南伊勢の鍋で、口縁端部を内側に折り曲げている。山茶碗（399 ～ 403）は碗のほか皿（401）や鉢（403）がある。このうち胎土等から渥美の製品と考えるものは（400・403）、尾張は（401・402）該当する。なお（401）は第４型式であるが、その他は第 5 型式で、12 世紀後半から 13 世紀前半に収まるものと思われる。

（404）の壺は口縁端部を外側に曲げるようにして丸く収めている。頸部より下を欠いているため詳細については不明と言わざるを得ないが、12 世紀代の渥美の壺の可能性がある。（405）は尾張の片口鉢で、口縁端部上面に沈線状の凹みが巡っている。第 7 型式に帰属する 13 世紀中頃の製品である。常滑の甕（406）の口縁端部は上下に拡張した段階のものであり、13 世紀後半から 14 世紀はじめにかけてのものと思われる。（407）は中国製の白磁の四耳壺の口縁部である。

中層から出土している土師器の皿（408）は、全体に明るい橙色を呈し、底部が平坦で体部は丁寧なナデが施され、斜め上方に立ち上がっている。特徴的な土師器皿であるが、本遺跡ではあまり類例を見ないタイプである。下層から出土している土師器皿（410）は、上層出土の土師器皿と

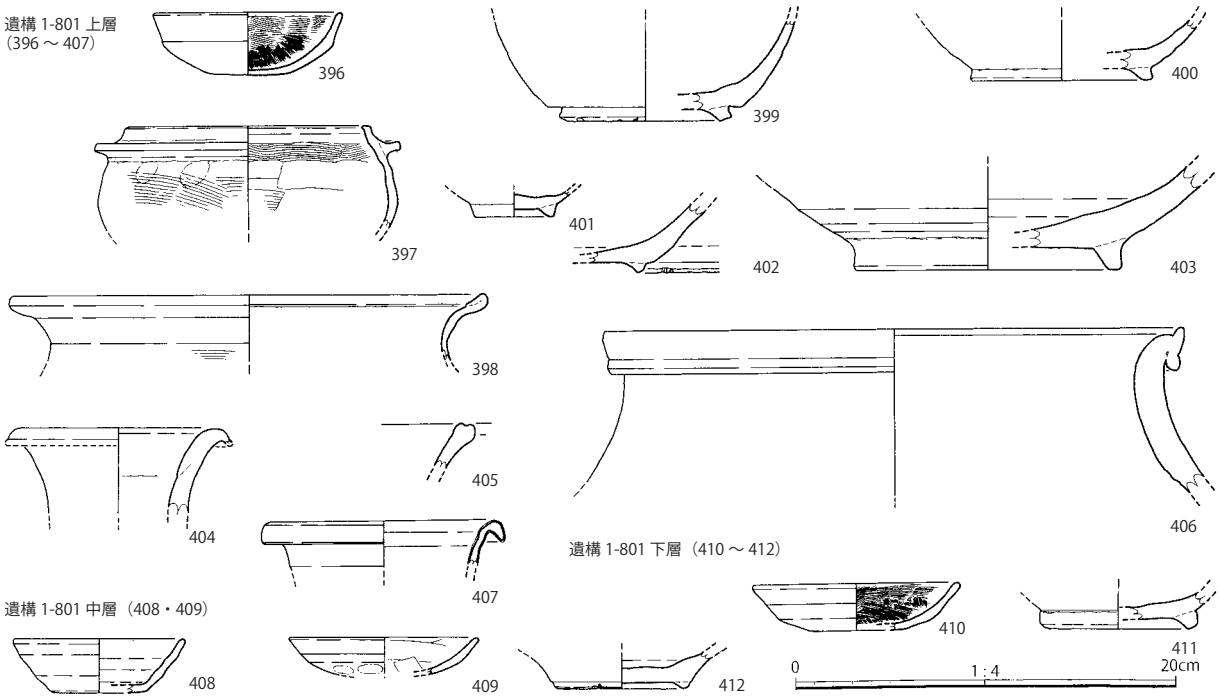


図 76　遺構 1 -801 出土遺物

同じく口縁部のヨコナデが強い点や内面にハケ目調整の痕跡を残すなどの技法上の類似点が認められる。また、山茶碗（411）は渥美５型式の片口鉢、（412）は胎土などから東濃の山茶碗の可能性がある。いずれにしても上層出土のものとさほどの時期差は認められない。

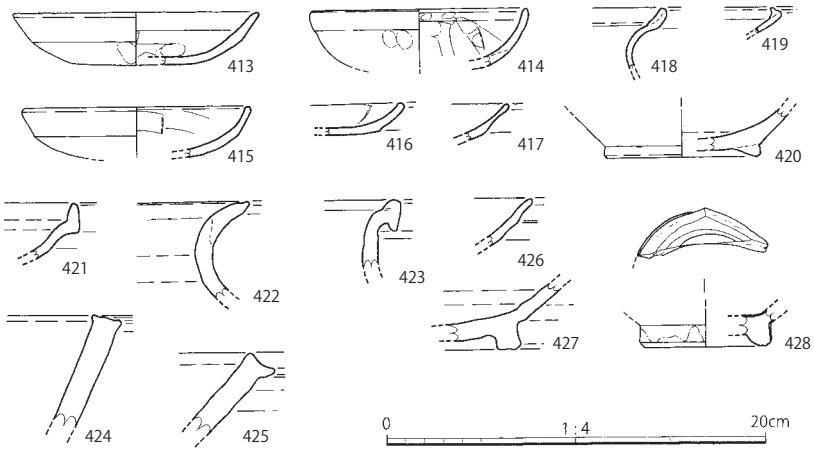


図 77　遺構 1 -802 の出土遺物

以上記した遺物の概要のように、本遺構には伝製品とも考えられる白磁の四耳壺や山茶碗など 13 世紀前半に帰属するものも多く認められるが、（406）の常滑のように 14 世紀近くまで下るものも認められる。したがってこの遺構の廃絶時期については 13 世紀の後半ないし 14 世紀はじめに求められるものと判断している。

遺構 1-802（大型土坑）（図 75・77）

前述の遺構 1-801 によって南西部を切られていたもので、平面プランは長径 1.7 m以上、短径 1.6 m ほどを測る。深さは 1.4 m、ただし後世の削平を考慮すれば 1.7 m以上になるものと思われる。断面三角形状に斜めに掘られており、最深部のみ径 0.4 m 深さ 0.4 mほど胴長に掘られていた。埋土は基本的にレンズ状に堆積しており、黒～灰黄褐色のシルトで埋まり、この中には 20㎝ 前後の礫が混じっていた。

出土遺物としては、土師器の皿・鍋、山茶碗、常滑の甕・鉢などがある。時期的には 12 後半頃の製品から 15 世紀に入るものまであり、かなりの時期幅が認められるといえよう。このうち 12 世紀後半から 13 世紀に帰属するものとしては､山茶碗（420）、東播系のこね鉢（421）や常滑の甕（422）などがある。一方、常滑の片口鉢（424・425）などは比較的は新しく、14 世紀後半から 15 世紀はじめ頃のものと思われる。

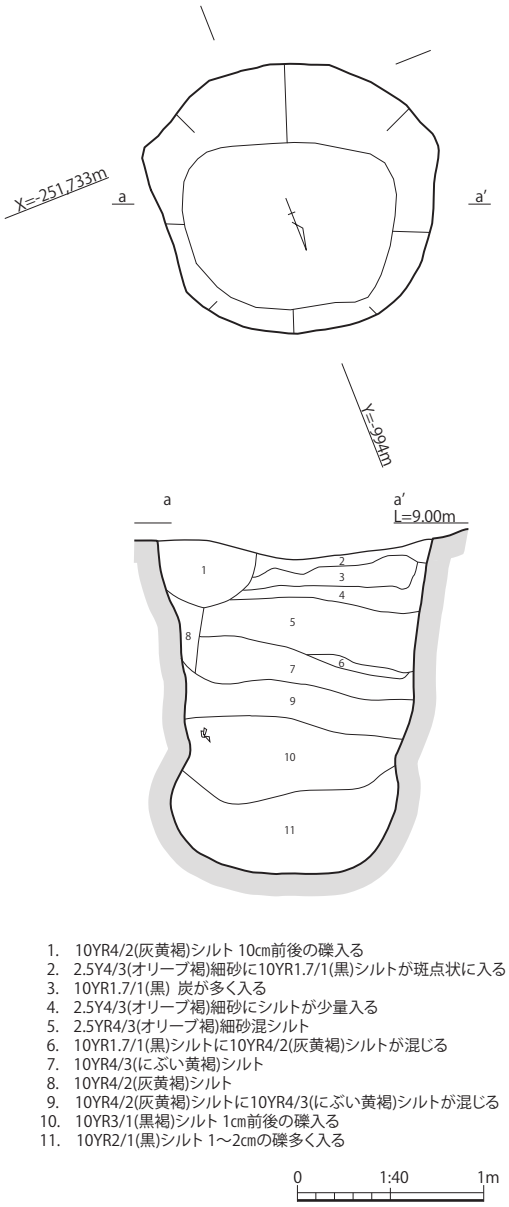


図 78　遺構 1-855

このような出土遺物の状況から、廃絶時期については15世紀初め頃に求めざるを得ない状況であるが、先に述べたように14世紀はじめ頃とし、この遺構を切っている前述の遺構1-801との新旧関係に矛盾が生じることになる。したがってこの遺構については、掘りまちがいないし遺物が混入している可能性も留保しておきたい。

遺構1-855（大型土坑）（図78・81）

径1.4ｍほどの円形を呈し、深さは1.7ｍを測る。１層としている埋土については、断面観察から後世に掘られた遺構の可能性が高いが、その他の埋土はほぼ平行堆積している状況であった。全体に細砂にシルト質の土が混じる状況であるが、下層では１～２㎝大の礫が多く入っていた。出土遺物は少ない。

上層から出土している常滑の甕（434）は口縁端部が上下に拡張し出した時期のもので、13世紀中頃から後半にかけてのものと思われる。下層から出土している土師器の皿（435）の底部は糸切りで、全体に明るい橙色を呈し、器壁が厚い。時期的には12世紀後半から13世紀の前半のものである。山茶碗のうち（436・438）は渥美の第５型式、（437）は尾張第６型式に該当する。いずれも13世紀中頃のまでに収まるものであろう。こうしたことからこの遺構の廃絶時期につい

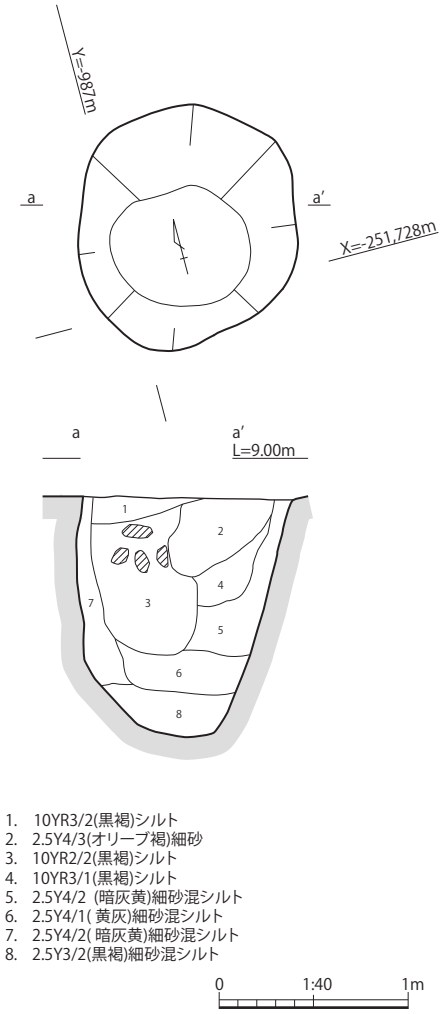


図79　遺構1-817

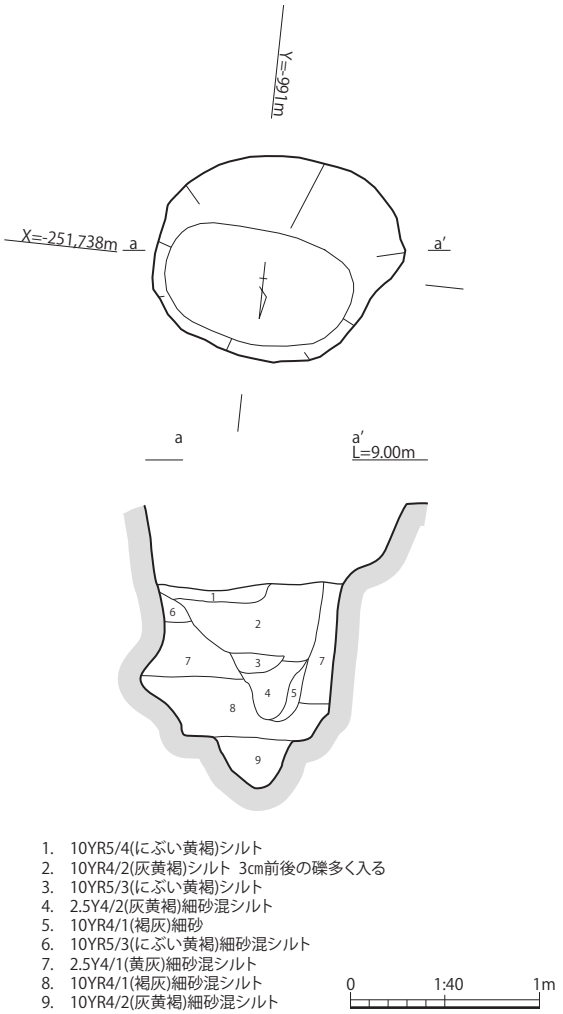


図80　遺構1-1004

ては13世紀中頃から後半にかけての時期と判断した。

遺構1-817（大型土坑）（図79・81）

平面は径1.2ｍ前後の円形に近い形で、深さは1.25ｍを測る。土層断面の観察から、埋土下層は平行堆積の状況であったが、上層は一旦埋まった後、再度掘削されたような状況を呈していた。出土遺物のうち（429）の土師器の皿は口径12cmで、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。土師器の鍋（430）は、口縁端部は内側に直角に折れ曲がる。外面口縁部下に剥離痕が認められることから、長さ1cmほどの鍔がつくタイプのものと考えられる。形状的には紀ノ川流域で15世紀代に散見するものに酷似しているが、他の共伴する土器などを考慮すれば、西摂津ないし讃岐辺りの中世の古い段階のものの可能性があろう。山茶碗（431）は、高台はやや低いもののしっかりと張り出しており、渥美第5型式、13世紀前半に収まる時期のものと思われる。なお畳付け部に籾殻痕が認められた。

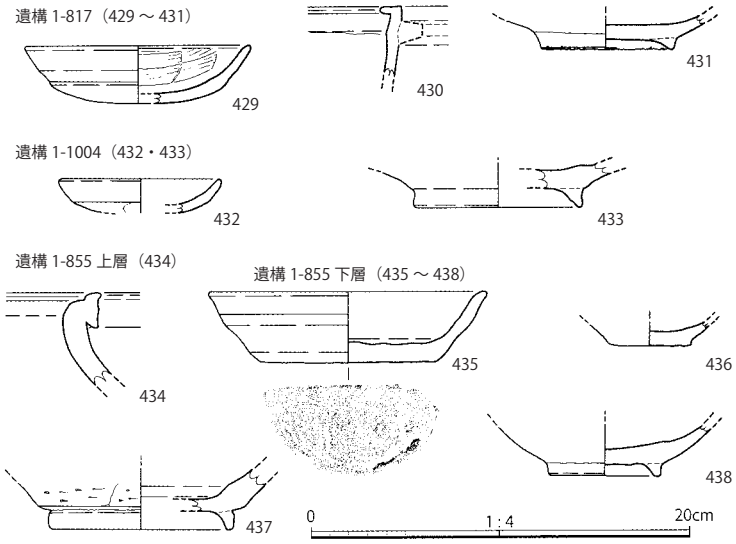


図81　遺構1-817・1-1004・1-855出土遺物

遺構1-1004（大型土坑）（図80・81）

長径1.5ｍ、短径1.2ｍの楕円状を呈し、上部を近世以降の撹乱により削り取られているが、本来的には1.5ｍほどの深さがあったものと推定される。この遺構についても断面土層の観察の結果、一度埋まった後、再度掘削されている状況が看取された。出土遺物は少なく、土師器の皿（432）や山茶碗（433）がある。土師器皿は口径8.7cmとやや小さく、器高も2cmほどと低いものである。このことからこの土師器皿については、13世紀でも後半、14世紀に入る可能性も考えられる。山茶碗はしっかりとした高台が付くもので、渥美第Ⅳ型式、12世紀代に収まるものである。遺物が少ないため、この遺構の廃絶時期については明瞭にし難いが、土師器皿の年代を根拠に13世紀末ないし14世紀初めと考えた。

遺構1300（大型土坑）（図82・86）

上端と東側が撹乱を受けており、全容については判然としないが、径2.0ｍほどの円形であったと思われる。深さは削平された部分を加味すれば1.3ｍほどである。埋土は灰白色を基調としたシルト質の土で、最上部のみ砂質土であった。

出土遺物には土師器の皿や山茶碗、中国製の磁器がある。このうち土師器皿（440）は口径13.2cm、器高3.5cmと大振りのもので、内面にはハケ目調整の跡が残る。時期的には13世紀前半代に帰属するものであろう。

山茶碗（441～444）のうち（443）の碗は口縁部がシャープでわずかに外反しており尾張第3な

いし４型式の可能性が高く、12 世紀前後の古い段階のものである。その他については胎土などから渥美の第５型式に帰属する製品と考えている。

白磁の碗（445）は、口縁端部を水平に外側に張り出すもので、比較的高い高台を有するタイプの碗であり、12 中頃から後半段階のものである。青磁の香炉（446）は体部外面に片切り彫りによる蓮弁を暈刻しており、13 世紀でもはじめ頃の製品と考えている。以上のような出土遺物からこの遺構の廃絶時期については 13 世紀前半と判断した。

遺構 1487（大型土坑）（図 83・86）

北半部が撹乱を受けており、推定で径 2.2 mほどの規模と考えられる。深さは 1.7 mを測る。出土している遺物のうち土師器の皿（447・448）は前述の皿（440）に比べると法量は減じているが、口径 12cm ほどは有しており、ヨコナデなどの調整技法からも 13 世紀前半に収まる土師器皿と考えている。（450）の青磁は同安窯の皿で、内底面に櫛描き状の文様が入る。これらの出土遺物から、この遺構についても 13 世紀前半には廃絶したものと判

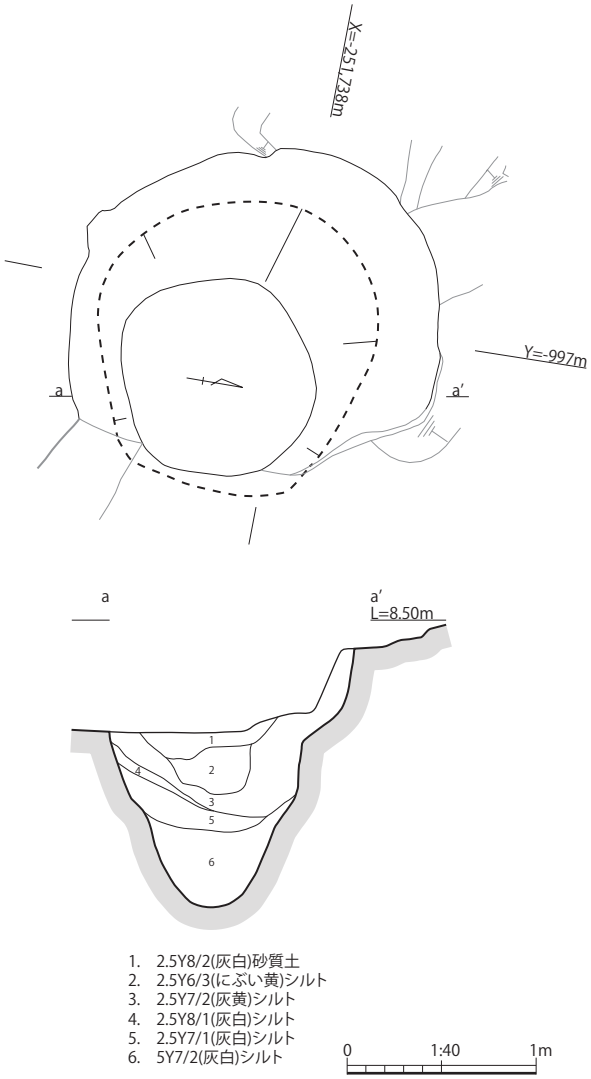


図 82　遺構 1300

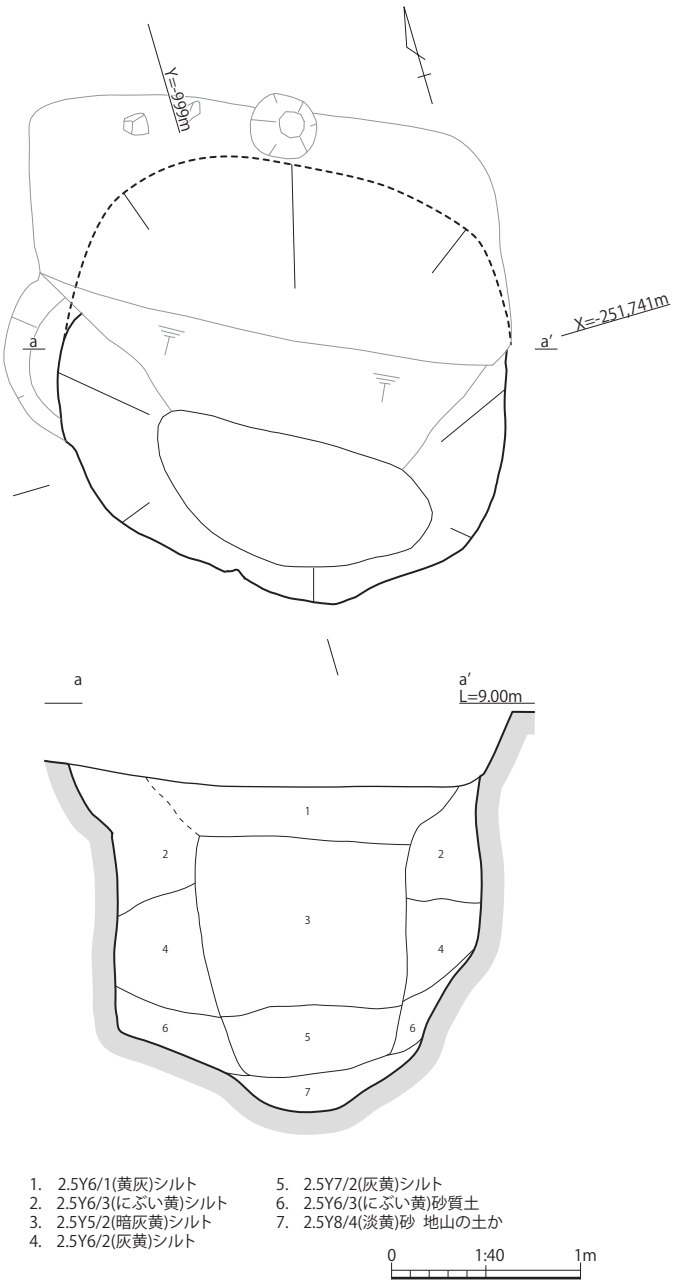


図 83　遺構 1487

断した。

遺構 1339（大型土坑）（図 84・86　図版 31-1）

平面プランは長径 1.9 m、短径 1.3 mのやや歪な形をしている。ほぼ垂直に掘られており、深さ 1.9 mまで掘削した段階で、崩落の危険があったことから掘削を断念した。したがって本来の深さはもう少しあったと言える。中層に 10 ～ 30cm 大の礫が多く入れられていた。出土遺物には瓦器碗や山茶碗、白磁の皿などがある。瓦器碗（451）は、全体に外側に開く形状で、体部内面にやや間隔の空いた線状の暗文、内底面には粗雑な輪花文の暗文が施されていた。高台はやや退化した断面三角形の形状を呈する。時期的には 13 世紀前半に帰属するものであろう。山茶碗（452 ～ 455）はいずれも渥美の可能性が高く、時期的には第 5 ないし 6 型式に相当する時期と思われる。したがってこれらの山茶碗については、概ね 13 世紀の前半から中頃の時期のものと言えよう。

（456）の白磁の皿は、やや幅広の高台で、底部から口縁部にかけて開き気味に立ち上がる。口縁端部は外側に折り曲げられ、上端部に凹線状のくぼみが巡る。全体に淡い黄色を呈し、やや軟質である。朝鮮製の白磁である可能性が高いものである。

このような出土遺物から、この遺構に関しては 13 世紀中頃に廃絶したものと判断した。

遺構 730（大型土坑）

（図 85・86）

長径 1.3 m、短径 1.1 mのやや楕円形を呈する。ほぼ垂直に掘られており、深さ 2.1 mを測

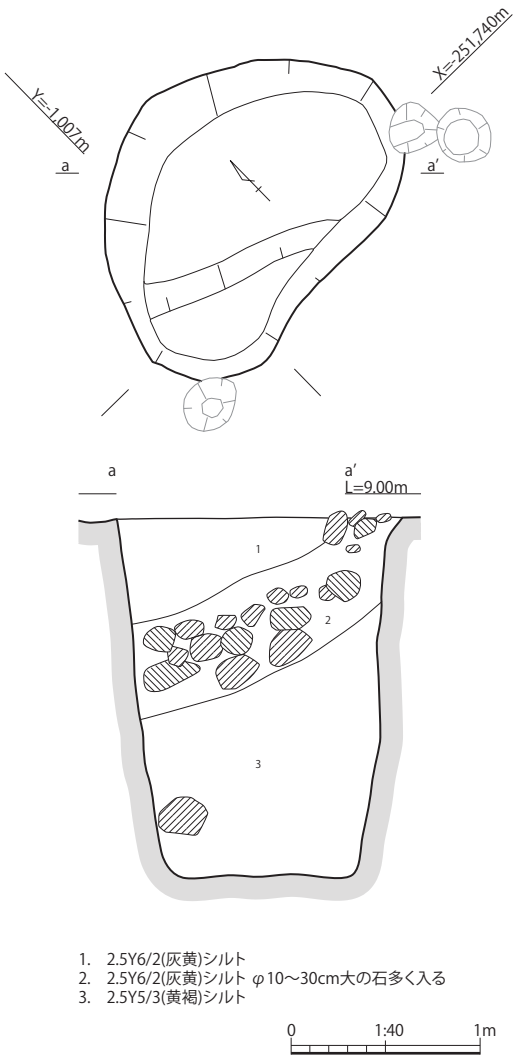


図 84　遺構 1339

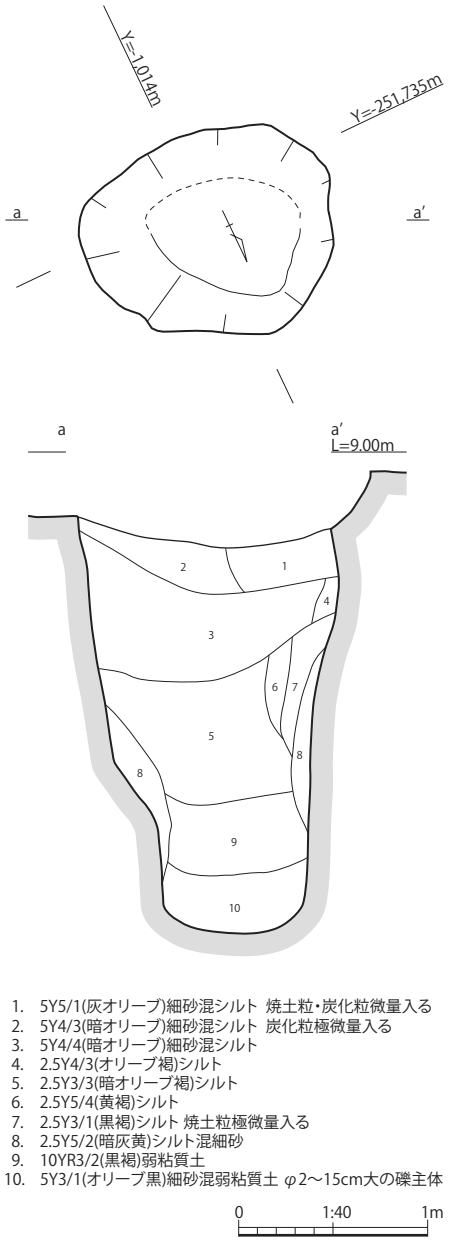


図 85　遺構 730

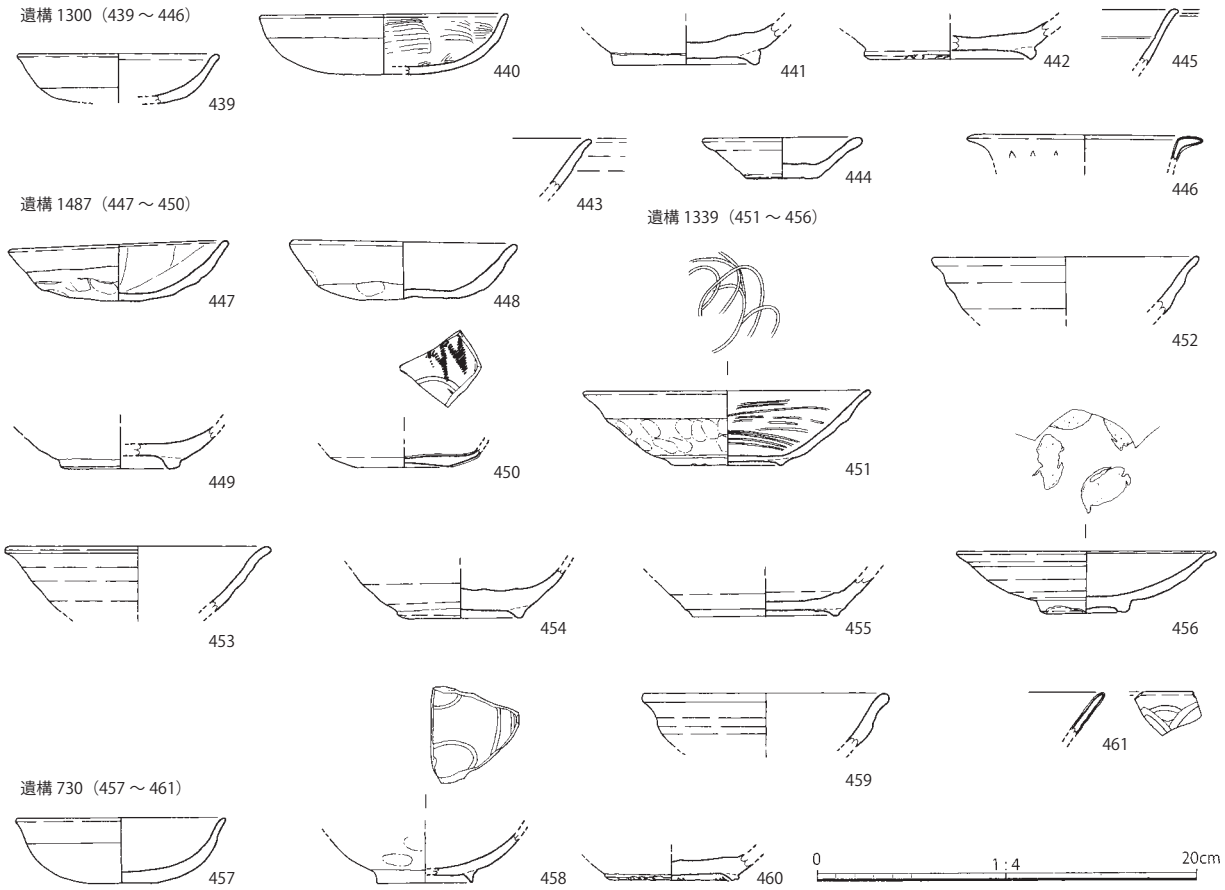


図 86　遺構 1300・1487・1339・730 出土遺物

る。全体に上層の埋土は灰～暗オリーブ色の細かな砂の混じったシルトで、この中に微量の焼土粒や炭化粒が入っていた。一方、下層の埋土は全体に黒褐色を呈した粘質土であった。

出土遺物には土師器皿、瓦器碗や山茶碗などがある。このうち土師器の皿（457）は口径に比して器高が 3.5cm とやや高い。全体に碗状に丸く立ち上がり、口縁部をヨコナデによりわずかに外反させている。（458）の瓦器碗は小破片であるが、体部内面の線状及び内底部の輪花状の暗文が看取されることから、13 世紀前半段階のものと判断した。山茶碗（459）は、渥美第 5 型式、12 世紀後半から 13 世紀にかけてのものである。（460）は底部には籾殻痕が残る。やや退化した高台であるが、渥美第 6 型式までに収まるタイプであり、13 世紀前半代に帰属するものと言えよう。　青磁の碗（461）は龍泉窯系の青磁で、体部外面にはしっかりとした蓮弁文様が施されている。

このような出土遺物から、この遺構の廃絶時期については

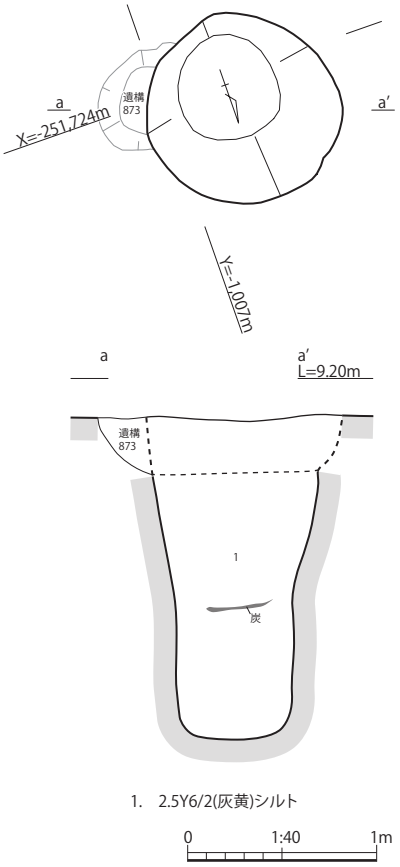


図 87　遺構 994

13 世紀前半と判断している。

遺構 994（大型土坑）（図 87・90　図版 31-2）

遺構 873 によって上部が切られており、平面プランについては推定であるが、径 1.05 mの円形状であったと思われる。ほぼ真直ぐに掘られており、深さは 1.7 mを測る。埋土は単層で灰黄色のシルトによって埋められていた。

出土遺物には山茶碗を主体に土師器の皿、青磁、白磁などがある。このうち土師器の皿（462）は口径 15cm と大きく、内面にハケ目調整痕が残るもので 13 世紀でも前半までの製品と考えられる。山茶碗（463 ～ 467）は渥美の製品である。時期的にはいずれも第 5 型式、12 世紀後半から 13 世紀初め頃と考えられる。青磁のうち（468）は同安窯の皿で、13 世紀でも初めに近い製品と考えている。他の碗（469・470）については底部のみの出土であり、判然としないが 13 世紀でも初めないし前半に収まるものと考えている。白磁の 2 点（471・472）はいずれも口縁端部が水平に外側に拡張されるもので、12 後半から 13 世紀でも初めに位置づけられる一群である。

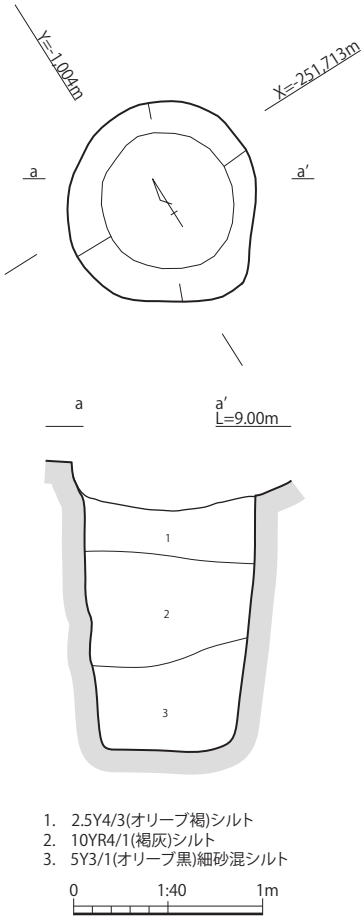


図 88　遺構 1729

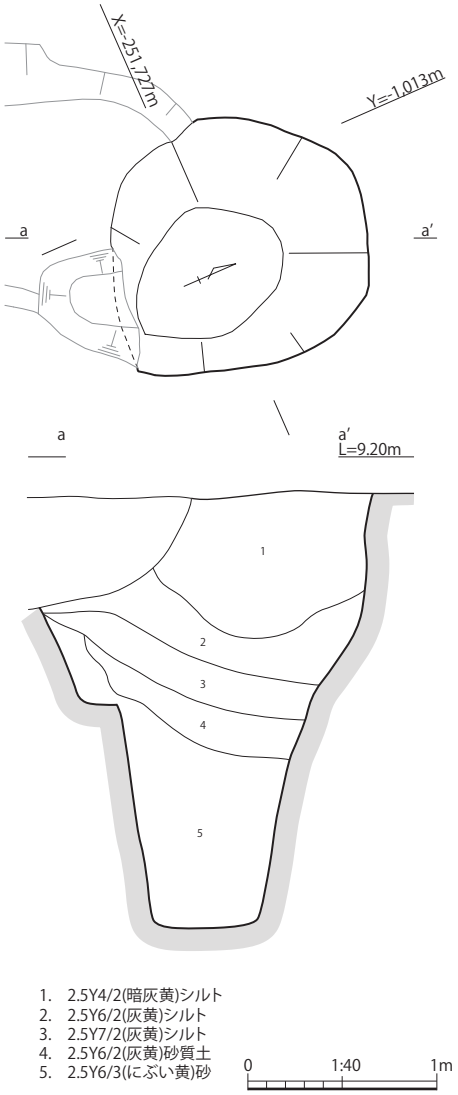


図 89　遺構 899

こうした出土遺物の状況からこの遺構の廃絶時期については、13 世紀の初め、遅くとも前半には埋まっていたものと判断した。

遺構 1729（大型土坑）（図 88　図版 31-3）

径 1.0 mほどの円形を呈し、深さは 1.25 mを測る。埋土は平行堆積しており、上層はオリーブ褐色のシルトで中層は褐灰色のシルト、下層はオリーブ黒色の細砂にシルトが混じっていた。出土遺物は細片で図示しえなかったが、12 世紀代と考えられる古手の白磁片のほか古瀬戸後Ⅱ期ないしⅢ期に帰属すると思われる瀬戸の皿が出土している。このことを考慮すれば廃絶時期は

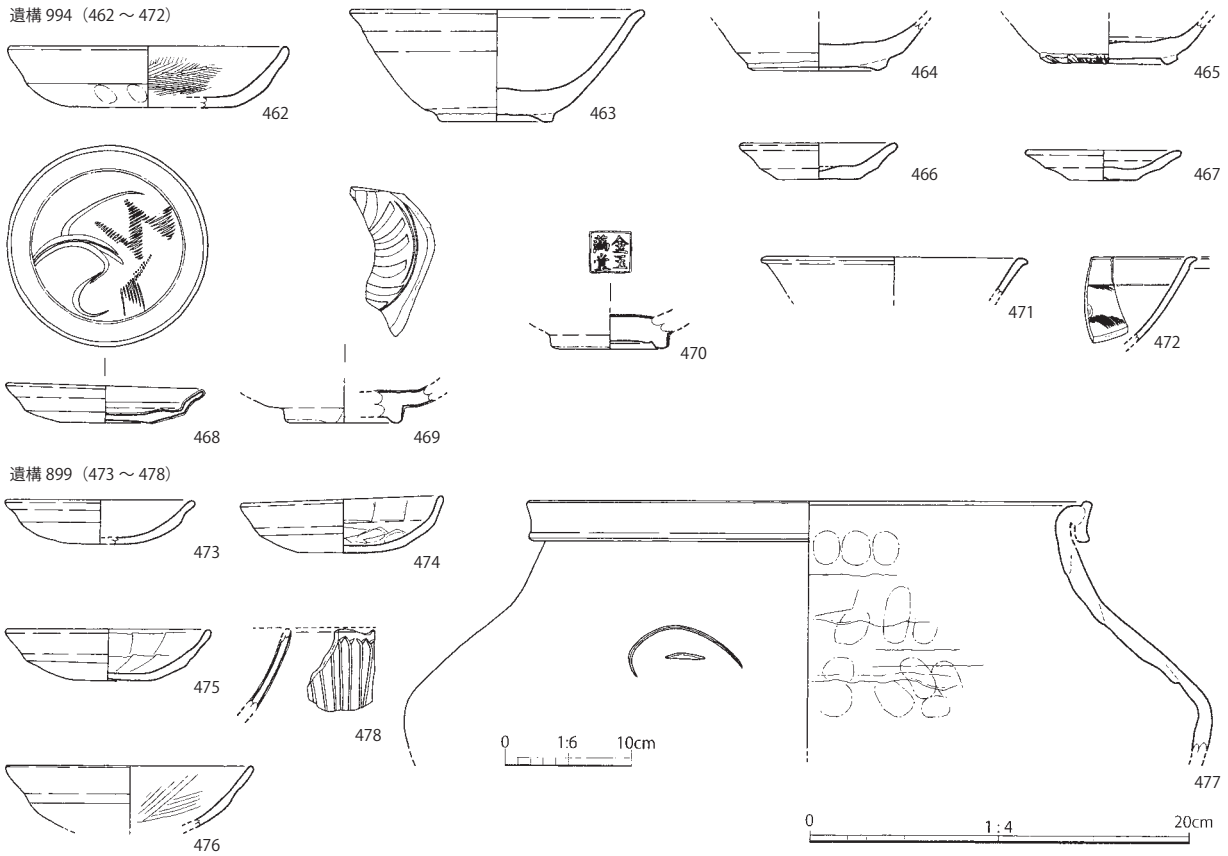


図 90　遺構 994・899 出土遺物

15 世紀前半まで下る可能性があろう。

遺構 899（大型土坑）（図 89・90）

遺構 898 により南西部を切られているが、平面プランは径 1.3 mほどの円形で、深さは 2.25 mとかなり深い。埋土は上層が灰黄色シルトで、下層はにぶい黄色砂によって埋まっていた。出土遺物には土師器の皿のほか常滑の甕、青磁碗などがある。土師器の皿（474・475）は口径 12cm ほどで 13 世紀前半代と考えている土師器の皿より法量をかなり減じており、14 世紀に入ってからのものと思われる。（477）の常滑の甕は口縁部の形態から 13 世紀後半から 14 世紀初めにかけてのものであろう。（478）の青磁の碗は体部外面に鎬蓮弁を施したものであるが、蓮弁の幅は狭く粗雑な感があり、15 世紀代まで下る可能性があろう。

こうしたことから、この遺構の廃絶時期については判断に迷うところであるが、この遺構からは瀬戸の 15 世紀代の製品がまったく出土していないことを考

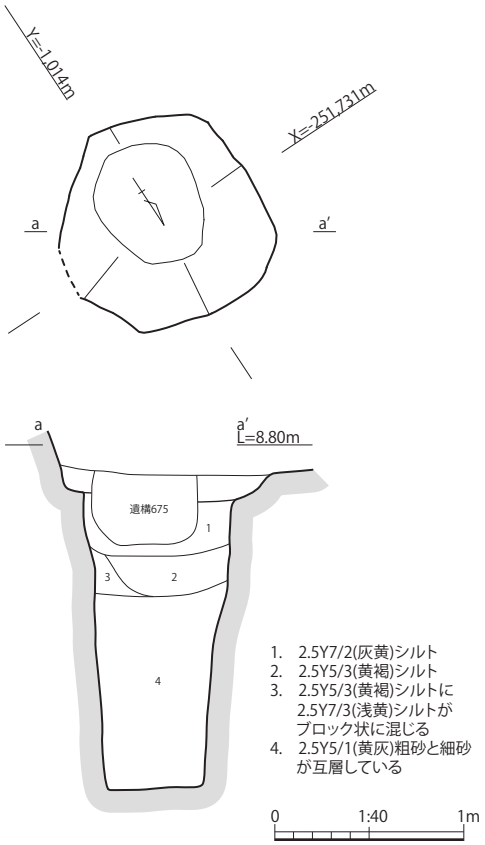


図 91　遺構 900

慮すれば、新しい青磁碗については混入の可能性を考え、全体遺物の年代感から廃絶は14世紀前半くらいを考えておきたい。

遺構900（大型土坑）（図91・94　図版32-1）

径1.15ｍほどの円形を呈する。上部を近世以降の撹乱により削平され、さらに中世の遺構（遺構675）が上から切り込んでいるが、ほぼ垂直に掘られており、深さは推定1.9ｍを測る。埋土は平行堆積で、上層には灰黄色ないし黄褐色のシルト、下層には黄灰色の粗砂と細砂が互層で堆積していた。出土遺物には土師器の鍋や山茶碗がある。このうち（479）の土師器の鍋は、「く」の字状に屈曲した口縁の端部を内側に折り曲げたもので、全体に器壁が厚い。12世紀代の伊勢の鍋の可能性を考えている。（480）は土師器の鍋もしくは鉢と考えられるもので、口縁端部の形態が15世紀代の常滑の鉢に似ているが、焼成の甘い土師器で内外面ともに煤の付着が認められる。一方、（481）の鍋は同じく南伊勢の製品であるが、口縁端部の上方への摘み上げが顕著であり、全体に扁平な形状を呈する。このことから16世紀前半まで下る可能性が高い製品である。山茶碗（482）は口縁部のみのため全体は不明であるが、器壁も薄くわずかに外反しており、渥美第４型式、12世紀中頃から後半のものと思われる。

遺物の量が限られており、なおかつ時期幅が大きいことから、時期決定に迷う遺構であるが（481）の鍋を根拠に16世紀代まで下るものと判断した。

遺構715（大型土坑）（図92・94図版32-2）

径1.3ｍほどのやや歪な円形を呈する。ほぼ垂直に掘られており、危険であるため掘削を途中で断念したが、深さは1.7ｍ以上を測る。埋土は平行堆積しており、上層は褐灰色のシルト、下層は同色の砂質シルトであった。出土遺物の内（483）の土師器の皿は、底部が平坦で板目圧痕が残る。底部から口縁部にかけ比較的丁寧な横ナデにより斜め上方に開き気味に立ち上がっている。15世紀を前後する時期の土師器皿と考えている。（484）は土師器の小型鉢。（485）は羽釜形の鍋で、体部外面には横方向のやや粗いハケ目の調整が残る。（486）の鍋は口縁端部を内側に折り曲げるタイプのもので、外面体部上位はハケ目、下半から底部にかけては削り調整が施され

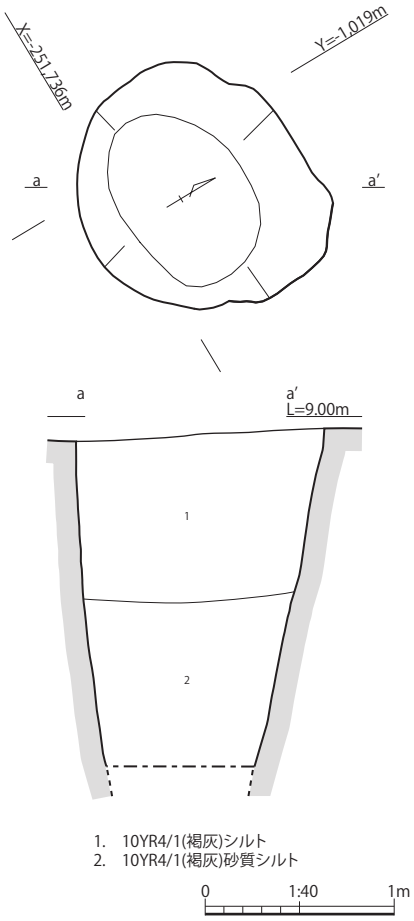


図92　遺構715

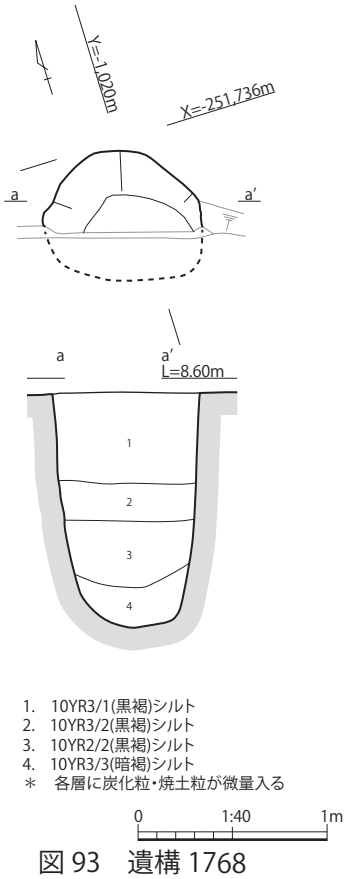


図93　遺構1768

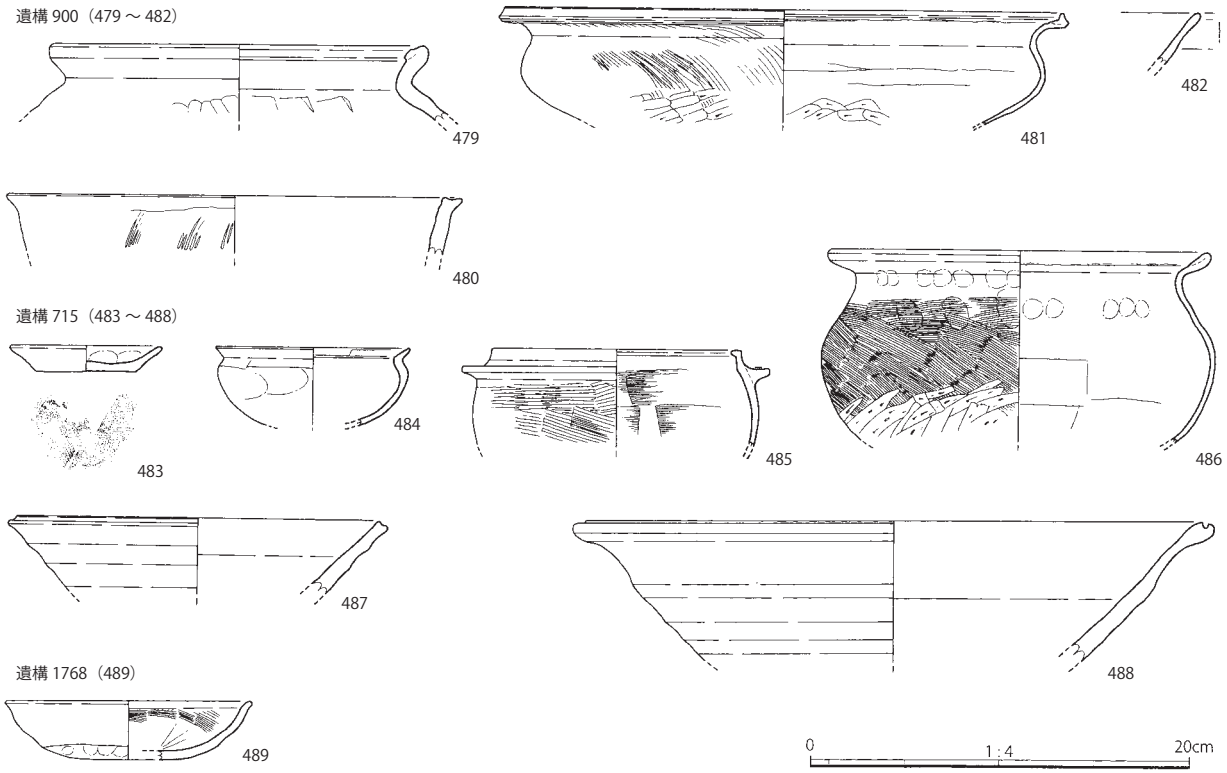


図 94　遺構 900・715・1768 出土遺物

ている。以上の 3 点については、いずれも南伊勢の製品と考えている。(487) は常滑の片口鉢である。中野 7 型式、14 世紀前半から中頃の時期のものと考えている。 (488) は山茶碗の片口鉢と思われるもので、全体に灰白色を呈し、口縁端部上端に鋭い沈線状の凹みが巡っている。尾張第 7 型式、13 世紀後半に帰属するものであろうか。こうした出土遺物から廃絶時期に関しては、14 世紀後半ないし 15 世紀初めと想定している。

遺構 1768（大型土坑）（図 93・94 図版 32-3）

南半分を近代の撹乱により大きく削られており、全体の形状は不明であるが、径 0.9 ほどの円形であったものと推定している。深さは 1.25 m を測る。埋土は平行堆積しており、全体に黒褐色ないし暗褐色のシルトで各層とも炭化粒や焼土粒が微量に入っていた。この遺構からの出土遺物はきわめて少なく、土師器皿 (489) のみである。口径 13.5㎝ と比較的大きく、体部内面にハケ目痕が残る。法量及び技法から 13 世紀後半段階の可

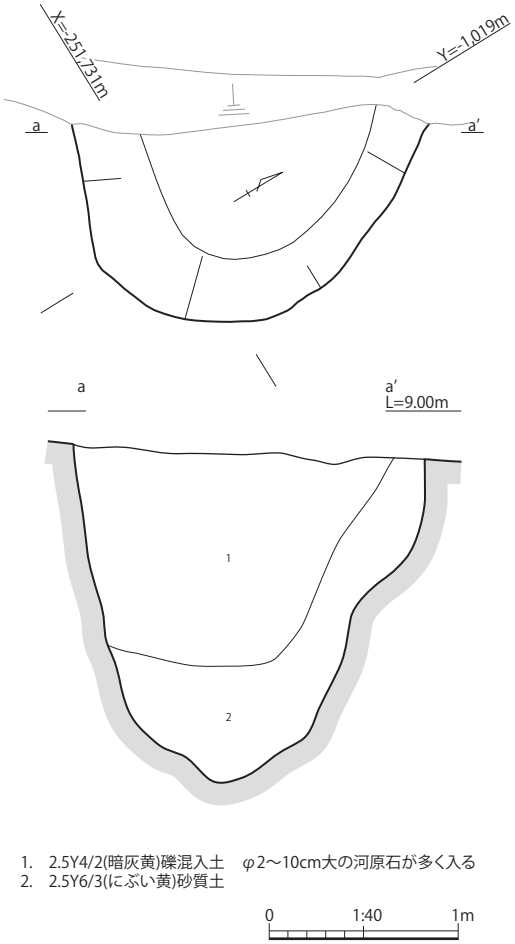


図 95　遺構 427

能性を考えている。

遺構 427（大型土坑）（図 95・98　図版 33-1）

西半分が撹乱により大きく削り取られており、全体の形状は不明であるが、おそらく 1.9 mほどの円形もしくは楕円形を呈するものと思われる。深さは 1.8 mを測る。埋土は、上層が径 2 ～ 10cm 大の礫を多く含む暗灰黄色土、下層はにぶい黄色の砂質土であった。出土遺物には土師器皿や鍋、山茶碗のほか常滑の甕、中国製の青磁などがある。このうち土師器の皿（491 ～ 493）は、口径 11cm ほどで、全体に丸みを帯びて立ち上がり、口縁部のヨコナデが強い。体部下半から底部にかけては粗い指オサエの痕跡がのこる。こうした調整技法や法量などから、この土師器皿について 14 世紀後半から 15 世紀にかけてのものと考えている。（490）も土師器の皿であるが、全体に肌色を呈し高台を有する。この手の高台を有する土師器皿は、数は少ないが紀ノ川流域では 15 世紀前後に先祖返りしたように現れる。胎土に赤色酸化粒が含まれることからも、紀ノ川流域からの搬入品である可能性が高い。

土師器の鍋（494 ～ 496）は、いずれも南伊勢の製品で、時期的には 14 世紀後半に帰属する。（497）の山茶碗は、器壁が薄く、口縁部の形状はやや外反する。渥美第 5 型式、13 世紀を前後す

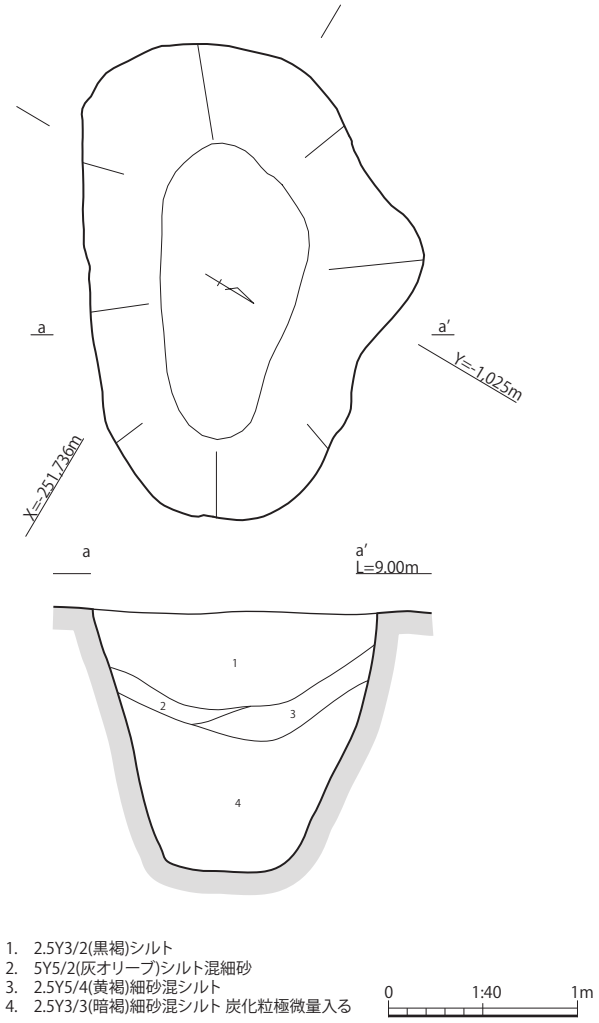


図 96　遺構 661

図 97　遺構 654

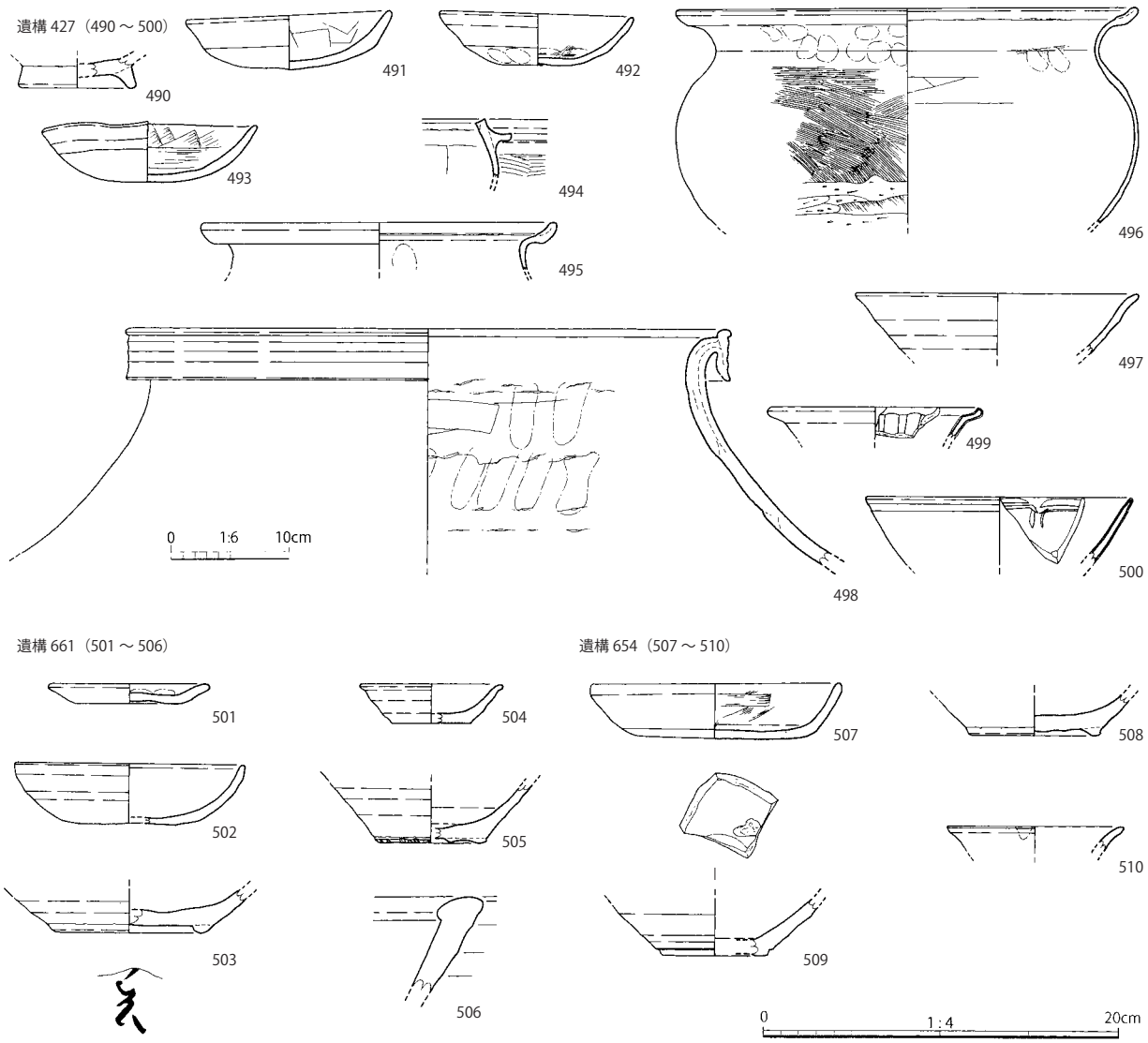


図 98　遺構 427・661・654 の出土遺物

る段階と考えており、他の遺物の比べると一時期古い。(498) の常滑の甕は、口縁部の形態から 13 世紀後半段階のものであろう。青磁の盤 (499) や碗 (500) についてもその施文などから龍泉窯の 14 世紀代の製品と考えて大過ないものと思われる。以上の出土遺物から、この遺構の廃絶時期については 14 世紀後半から 15 世紀でも初めのころと判断した。

遺構 661（大型土坑）（図 96・98　図版 33-2）

長径 2.5 m、短径 1.65 m歪な楕円形を呈するもので、深さは 1.35 mを測る。出土遺物には土師器皿や山茶碗、瓦質土器がある。(501) は土師器の中皿で、器高 1cm ほどと扁平なものである。大皿 (502) は口径 13cm。いずれも 13 世紀代に位置づけされる土師器皿と考えている。山茶碗のうち碗 (503) と皿 (504) は渥美の第 5 型式、(505) は尾張第 5 型式で、高台部には籾殻の痕跡が残っている。これらの山茶碗は 13 世紀前後の時期のものである。(506) は瓦質の製品で、口縁部のみの出土であるため全容について不明であるが、13 世紀代の京都辺りの火舎の可能性が高いと考えている。以上の出土遺物から、この遺構の廃絶時期は 13 世紀前半から中頃と判断した。

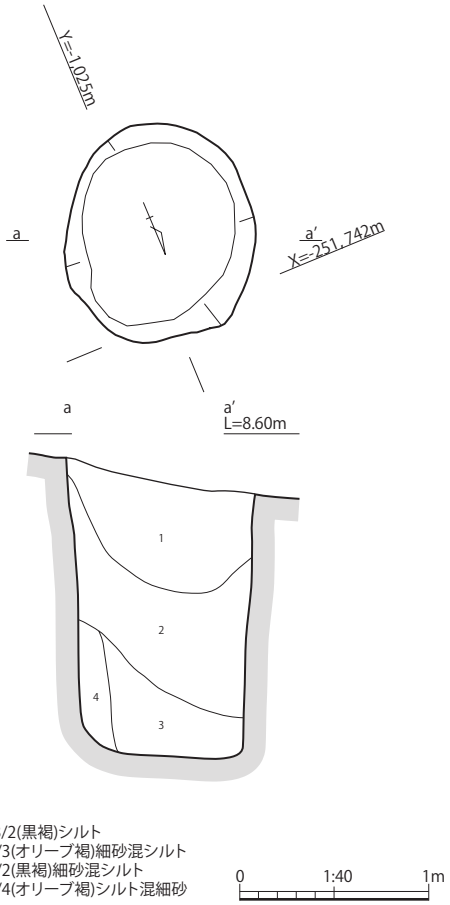
遺構 654（大型土坑）（図 97・98　図版 33-3）

長軸 1.9 m、短軸 1.6 mの歪な形状を呈し、深さは 2.5 mを測る。埋土は 2 層で、上層は黄灰色シルト、下層は暗黄灰色シルトであった。出土遺物には土師器皿や山茶碗、瀬戸、中国製白磁などがある。このうち土師器皿（507）は底部が平らで、体部は内湾気味に斜め上方に立ち上がる。口径は 14cm と比較的大振りな皿で、13 世紀前半代のものと思われる。（508）の山茶碗は、渥美第 5 型式に相当するもので、比較的高台部がしっかりとしており 12 世紀後半段階まで上がる可能性がある。（509）は底部のみの出土であるが、瀬戸の製品で器形的には平碗になるものと思われ、高台部の形態から古瀬戸後Ⅱ期、15 世紀前後のものである。

出土遺物に時期幅があるため廃絶時期については判断に迷うところがあるが、ここでは瀬戸の平碗を根拠に 15 世紀前半としておきたい。

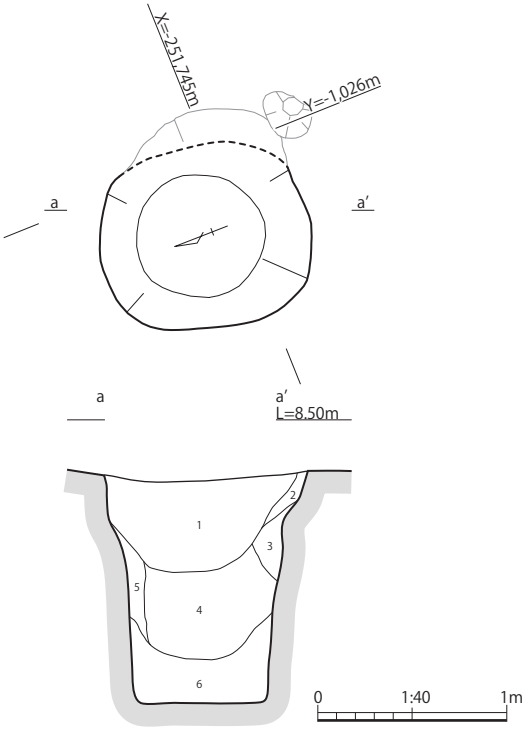
遺構 863（大型土坑）（図 99・103　図版 34-1）

長径 1.15 m、短径 1.0 mのやや楕円状を呈し、深さは 1.5 mを測る。ほぼ真直ぐ掘られており、埋土は基本的には 3 層で、上層は黒褐色のシルトであるが、中・下層は細かな砂にシルトが混じる状況であった。出土遺物には土師器皿や山茶碗がある。このうち土師器皿（511・512）は口径の違いはあるものの、いずれも底部が平坦で器高が低い。また口縁部のヨコナデや底部の未調整など技法的にも共通部分が多い。このことから両者は同時期の大皿・小皿のセット関係を成す土師器皿の可能性が高く、時期的には 13 世紀前半から中頃にかけてのものと考えている。山茶碗



1. 10YR3/2(黒褐)シルト
2. 2.5Y4/3(オリーブ褐)細砂混シルト
3. 2.5Y3/2(黒褐)細砂混シルト
4. 2.5Y4/4(オリーブ褐)シルト混細砂

図 99　遺構 863



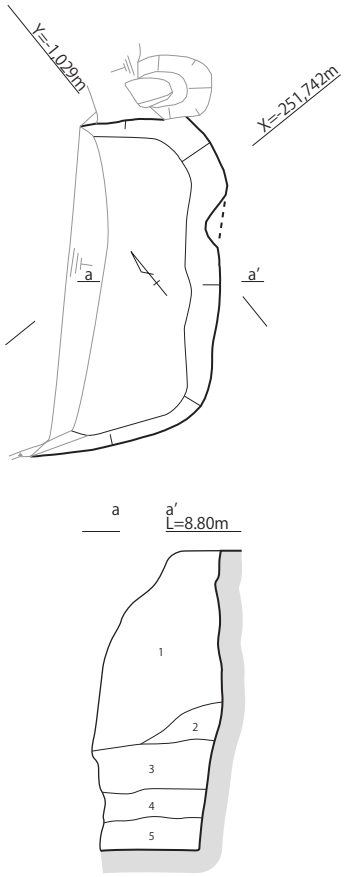
1. 10YR2/2(黒褐)シルト に5Y6/2(灰オリーブ)シルトが粒状に多量に混じる炭微量に含む
2. 10YR5/2(灰黄褐)シルト 焼土混じる
3. 5Y6/3(オリーブ黄)シルト
4. 10YR3/2(黒褐)シルト
5. 5Y6/3(オリーブ黄)シルトに10YR3/2(黒褐)シルトが混じる
6. 2.5Y4/2(暗灰黄)細砂混シルト

図 100　遺構 867

のうち（513）は渥美、（514）は尾張で、いずれも第５型式、13 世紀前後に該当するものと思われる。以上の出土遺物からこの遺構の廃絶時期については 13 世紀前半と判断した。

遺構 867（大型土坑）（図 100・103　図版 34-2）

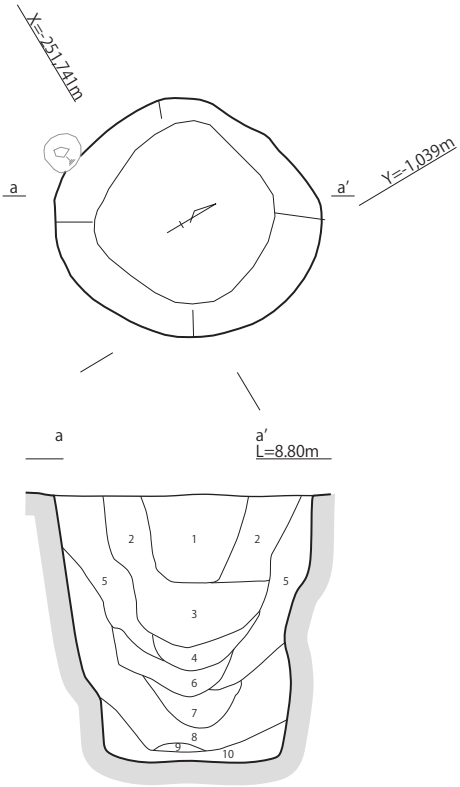
東側の一部が他の土坑により切られているが、長軸 1.15 m、短軸 1.0 mほどのほぼ円形に近い形状で、深さは 1.2 mを測る。出土遺物には土師器皿や山茶碗、瓦質土器などがある。土師器の皿（515）は、口径 15㎝、器高 3.5㎝と大きい。外面体部にロクロ成形による引き上げ痕が顕著で、底部は糸切りの上に置き台と思われる板状の圧痕が残る。古代末、12 世紀後半段階まで上がる土師器皿の可能性がある。（516）の高台を有する土師器皿も、高台が高く、張り出しが「ハ」の字状にしっかりとしており、前述した 15 世紀代の高台を有する土師器皿（490）とは異なり、古代の系譜を引くものと判断している。山茶碗（517 ～ 520）はいずれも渥美の第５型式で、13 世紀前後に比定できる一群である。（521）は瓦質のミニチュアの羽釜である。口径 5㎝、器高 6㎝、体部に脚の剥離痕があることから、本来は三足が付いていたものである。口縁部に狭い３条の沈線を巡らせ、全体に丁寧なナデ調整で仕上げられているなど精巧なつくりである。これについて



1. 2.5Y6/2(灰黄)シルト
2. 2.5Y7/3(浅黄)砂質土
3. 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト
4. 2.5Y7/2(灰黄)シルト
5. 2.5Y7/2(灰黄)シルト礫混入る　φ1～3cm大の礫多く入る

0　1:40　1m

図 101　遺構 688



1. 10YR4/1(褐灰)シルト 炭化粒微量入る
2. 2.5Y4/1(黄灰)シルトに2.5Y6/4(にぶい黄)シルトが粒状に混じる 炭化粒極微量入る
3. 2.5Y5/1(黄灰)弱粘質土に2.5Y6/4(にぶい黄)シルトがブロック状に混じる 炭塊上に入る
4. 2.5Y5/2(暗灰黄)弱粘質土
5. 2.5Y6/4(にぶい黄)シルトに2.5Y4/1(黄灰)シルトが ブロック状に混じる
6. 5Y5/2(灰オリーブ)細砂混シルト
7. 10YR3/3(暗褐)シルト混中砂
8. 5Y4/2(灰)オリーブ中砂～細砂
9. 2.5Y6/3(にぶい黄)シルト
10. 10YR3/4(暗褐)シルト混中砂～細砂

0　1:40　1m

図 102　遺構 570

も 13 世紀までの製品と言えよう。こうした出土遺物から、本遺構の廃絶時期について 12 世紀後半～末を考えており、確認されている中世の遺構の中では最も古く位置づけられるひとつである。

遺構 688（大型土坑）（図 101・103）

撹乱によって南西側を大きく削り取られており、全体の規模は不明であるが残存規模で一辺 1.8 mを測る。深さは 1.6 mで、埋土はほぼ平行堆積であった。出土遺物は少ない。(522) は国産陶器の壺である。小破片であるため、時期については不明であるが、胎土に石英粒を比較的多く含むことから信楽の可能性がある。(523) は山茶碗で、高台については、異なる土を用いて貼り付けているらしく、体部が灰白色であるのに対して黒味を帯びた灰色を呈している。尾張第Ⅲ型式、12 世紀前後と古いものである。(524) は片口鉢で、内面はかなり摩滅していた。高台部の形状から渥美第Ⅳ型式、12 世紀後半から 13 世紀はじめにかけてのものであろう。出土遺物が少なく、廃絶時期については明瞭にしがたいが、山茶碗を根拠に 13 世紀前後と判断した。

遺構 570（大型土坑）（図 102・103　図版 34-3）

長径 1.4 m、短径 1.25 mの楕円状を呈し、深さは 1.4 mを測る。埋土は、断面土層観察の結果、図示したように何度か掘削されたかのような複雑な堆積を成していた。出土遺物には土師器皿や山茶碗、常滑の鉢などがある。このうち土師器小皿 (525) は底部が糸切りであり、13 世紀前半までのものである。また大皿 (526) の口径は 12.5cm と比較的大きく、これについてもほぼ同時

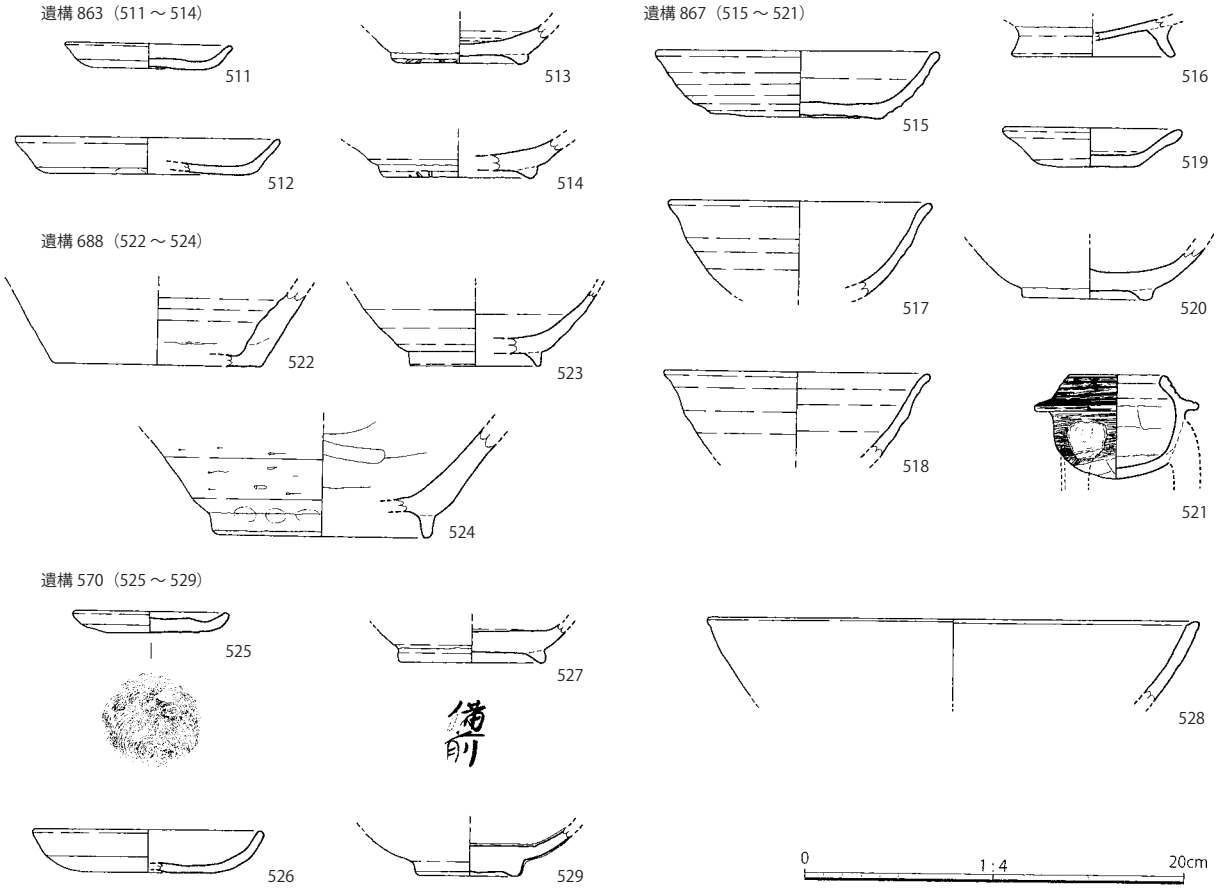


図 103　遺構 863・867・688・570 出土遺物

期と考えている。(527) の山茶碗は渥美の製品であり第４型式､12 世紀後半のものである。なお、この山茶碗の外底部には「備前」と墨書されているのを確認している。(528) 常滑の鉢で、茶褐色を呈し焼成は堅密である。口縁端部の形態から中野５型式、13 世紀前半段階のものと考えられる。(529) は中国製の青磁碗。全体に灰オリーブ色を呈し、釉は高台畳付け部まで及んでいる。時期については、底部のみのため判然とし難いが、13 世紀代に収まる龍泉窯系の製品と考えている。これらの出土遺物から、この遺構の廃絶時期は 13 世紀前半から中頃にかけてと判断している。

遺構 12（大型土坑）（図 104・105）

調査区の南西端近くで検出したもので、径 1.3 mほどのほぼ円形状を呈し、深さは 1.8 mを測る。上下層ともシルト質の土の中に礫が含まれ、とくに上層には５～ 30㎝ 大の礫が大量に入っていた。

出土遺物は多く、土師器皿や山茶碗を主に常滑の壺・甕、中国製の青磁、白磁などがある。土師器の皿 (530 ～ 538) は、底部糸切りのものとそうでないものがある。前者は底部から口縁部にかけて斜め上方に立ち上がるが、後者はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部のヨコナデが顕著である。また、色調的には糸切りのものが総じて橙色が強く、他のものは淡い黄色を呈する。いずれも大皿では口径 16㎝ を越えるもので、小皿は口径 9㎝ ほどである。糸切りのものについては、12 世紀から 13 世紀前半にかけて紀ノ川流域で見られるものと違和感がなく、彼の地からの搬入品の可能性もあろう。(539) は南伊勢の鍋である。山茶碗のうち皿 (544 ～ 546) については、いずれも渥美第５型式、碗では (541) が渥美第５型式、(543) は尾張の第５型式に帰属する。また鉢では高台がしっかりと張り出した (542) が尾張の第４型式、(547・548) はやや新しく渥美第５型式に該当するものと考えている。これらの山茶碗については第４・５型式に収まるもので、概ね 12 世紀後半から 13 世紀初めのものと言える。

(549) は渥美の短頸壺である。器高に比して胴部径が大きく、13 世紀前後のものと考えられよう。また (550・551) も渥美の製品で、いずれも口縁部を大きく外反させ端部を丸く収めた甕である。これらについては、12 後半から 13 世紀でもごく初めの製品と考えている。(552) は常滑の甕で、口縁端部上面に沈線状のかすかな凹線が巡らされている。中野第３型式、12 世紀後半のものである。

(553) の青磁碗は内外面に細い櫛描状の文様が施

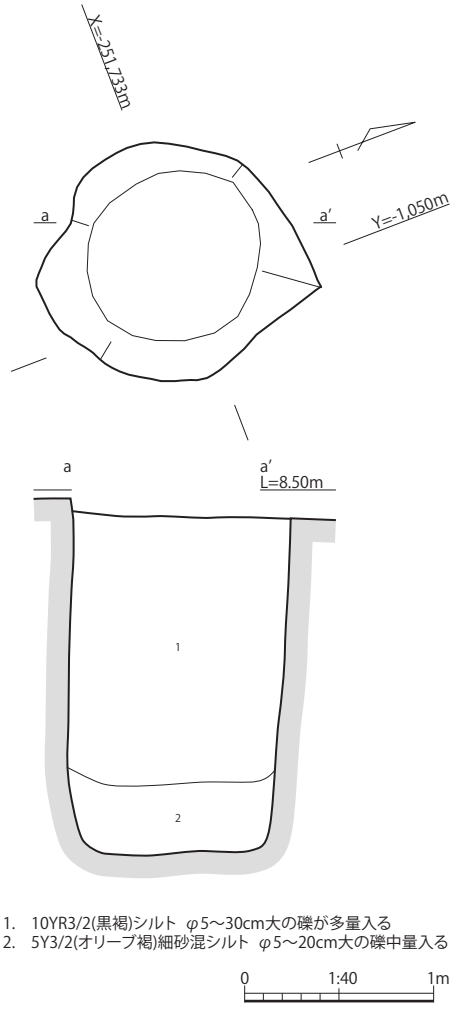


図 104　遺構 12

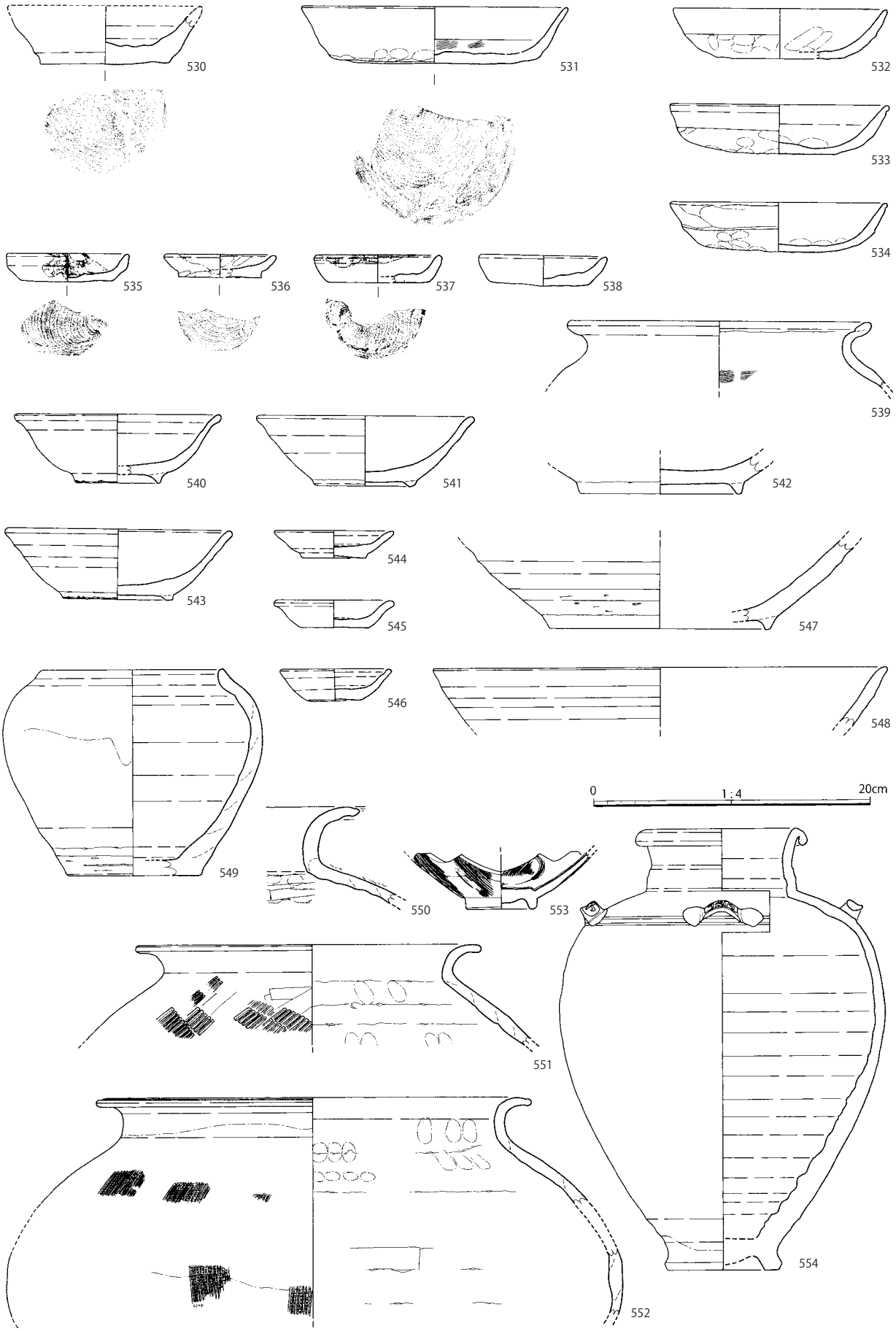


図 105　遺構 12 出土遺物

されている。同安窯系の青磁と考えられ、時期的には12世紀中頃から後半にかけてのものであろう。

白磁の四耳壺（554）は、器高32cmほどでなだらかな卵形の胴部に太い角高台がつく。この高台端部外面は削りにより面取りが施されているが、その幅は狭い。口縁端部は丸く折り曲げている。こうした形態的特長などから12世紀代の製品と判断した。

以上の出土遺物は比較的一括性が高いものと考えられ、時期幅があるとしても12世紀後半から13世紀ごく初めにかけてのものと考えている。このようなことからこの遺構の廃絶時期は、13世紀はじめと判断した。

３．石垣及び階段

調査区北端近くで、東西方向に延びる石列を何箇所かにおいて検出した。これらを結ぶと一直線になることから、ある時期の境界線として機能していた石垣の可能性が高いものと判断している。この境界の石垣を壊して、前述の竪穴遺構（地下式倉庫）がいくつか造られていることから、ある時期に敷地を北側の川に向かって拡大させたことが窺える。この拡張時期及び後世の撹乱等により本来あった石垣は大半が破壊され､その残決がわずかに跡をとどめる程度であった。また、境界であったこの石垣を壊して川側に降りていく石積みの階段も検出されている。

以下、ここではこの石垣及び階段などの遺構について詳述する。

遺構4034（石垣の一部）（図106・107　図版35-1）

延長６ｍに渡って検出された石列である。石の大きさは20～60cm大と大きさにばらつきがある。この部分は校舎建設に伴う基礎杭が集中して打たれていることもあって撹乱が著しい。もっとも残りのよい箇所でも二段の石積みしか確認できていない。出土遺物としては、常滑の壺や瓦などがある。このうち常滑の壺（555）は、広口の壺となるものと思われ、口縁端部が上下に拡張されていることから13世紀後半に帰属するものであろう。（556）は中国製の白磁の皿で、体部下半から高台にかけては露胎となっている。高台は割り高台で底部内面に墨書による四角形状の記号のようなものが描かれていた。15世紀前半代に多くみられるタイプの皿と言える。（557）は平瓦で、厚さ2cmほど、凸面に格子状の叩き目が残る。時期的には古代末の可能性が高い。

遺構4002（石垣の一部）（図106・107　図版35-2）

延長７ｍにわたって検出した石垣である。最も残りのよい箇所で高さ50cm、石積みにして３段が確認された。基底部には50cm前後の比較的大きな石を用い、そのうえにはやや小振りな10～30cmほどの石を積み上げている傾向が認められた。

この石垣の直上から出土した遺物としては、瀬戸の合子の蓋や常滑の甕、備前の擂鉢などがある。このうち合子の蓋（558）はつまみの付くもので、おそらく古瀬戸中Ⅰ期からⅡ期にかけてのものと考えられ、14世紀でも前半代に帰属するものである。常滑の甕（559）は口縁部の形態から14世紀前半代に比定されよう。一方備前の擂鉢（560）は口縁端部が上下に肥厚する前の段階であり、備前Ⅲ期、14世紀代と考えられる。（561）は常滑の片口鉢で、体部上半に斜め方向のへ

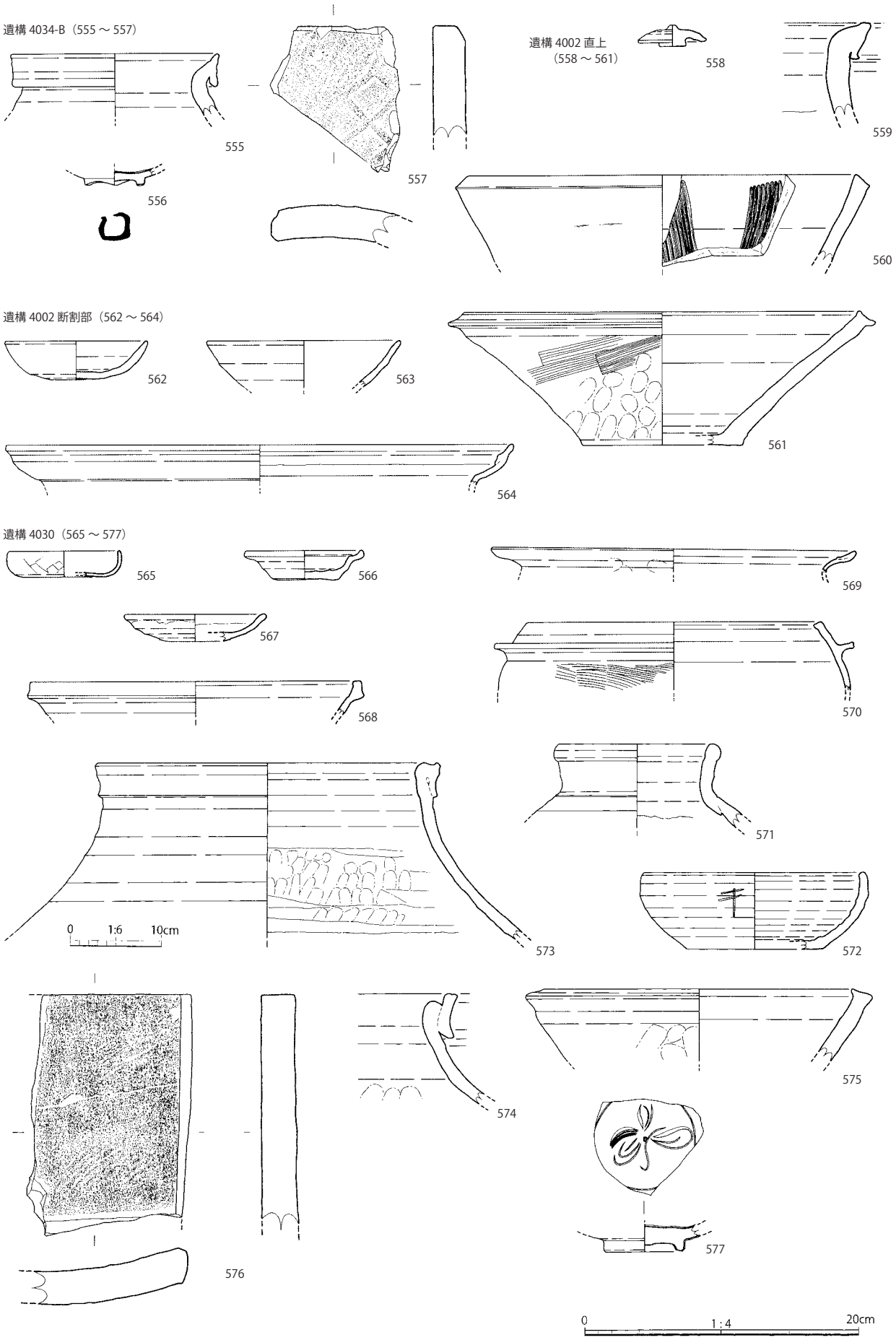
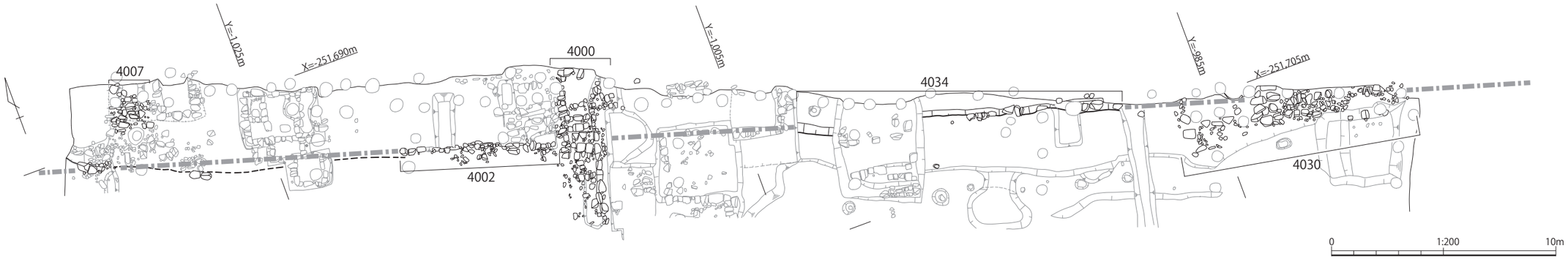
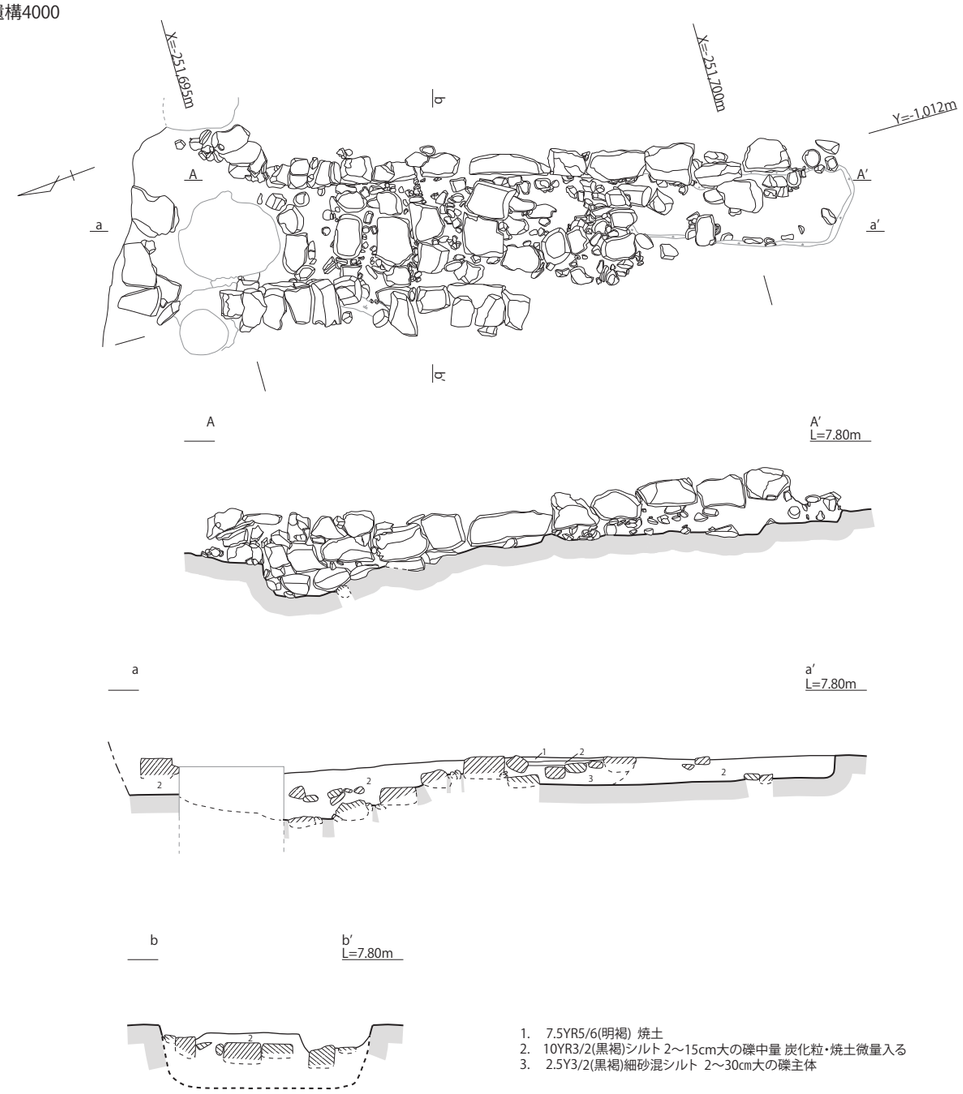


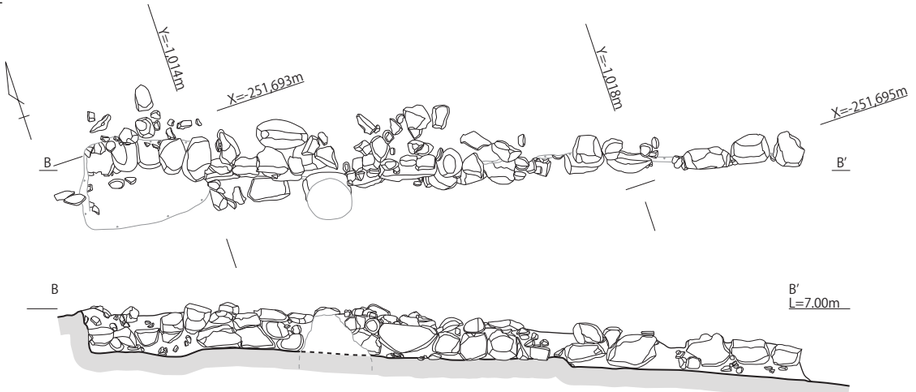
図 106　遺構 4034・4002・4030 出土遺物



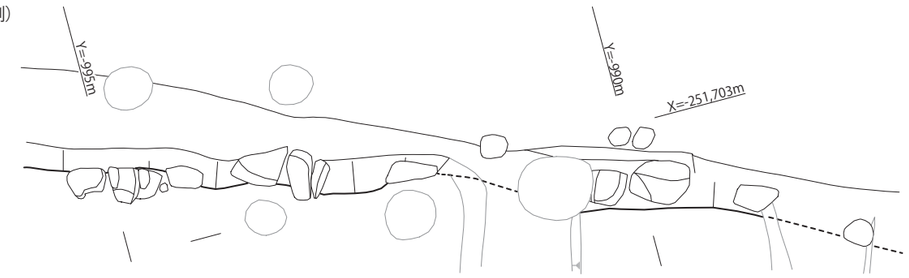
遺構4000



遺構4002



遺構4034(東側)



遺構4030

図107　遺 構4000・4002・4007・4034・4030

0　1:60　2m

ラ削り、体部下半から底部にかけて指オサエの痕跡が顕著に残る。口縁端部の肥厚形態から15世紀後半段階のものと判断した。

この石垣を断ち割って裏込め等を確認したが、その中から土師器皿や瀬戸の碗、常滑の鉢などが出土している。土師器の皿（562）は、口径11cmほどで体部は内湾気味に丸く立ちあがる。口縁部のヨコナデは丁寧であるが、底部は未処理である。（563）の瀬戸の平碗は、口縁部がわずかに外反しており、古瀬戸後Ⅱ期に帰属するものである。（564）は南伊勢の鍋で、15世紀を前後する時期のものと考えられよう。

遺構4030（石垣の一部）（図106・107　図版35-3）

前述した遺構4034の西側で検出した遺構で、延長7m、幅1m前後にわたって10～60cm大の石が散乱した状況で検出された。これらは本来石列の一部であったものが崩されたものと判断している。これらの石の直上及び石の間から出土した遺物として土師器の皿や鍋、瀬戸の皿や擂鉢、常滑の甕などがある。土師器の皿（565）は、器壁が薄く、口縁部が大きく内湾して立ち上がるもので、南伊勢の15世紀中頃を前後する時期のものと思われる。瀬戸の折縁小皿（566）や縁釉小皿（567）はともに古瀬戸後Ⅲ期、15世紀の前半代に収まる製品と言えよう。これに対して（568）の擂鉢は錆釉を施したもので、その口縁部の形態などからも大窯Ⅰのものと思われ、15世紀末まで下る一時期新しい可能性がある。

（570）は、長さ1cmほどの鍔の付く羽釜形の南伊勢の鍋である。口縁部及び鍔の部分には丁寧なヨコナデ、体部には横方向の粗いハケ目調整の痕跡が残る。時期的には15世紀にかかる頃のものと判断している。備前の製品のうち（571）の壺は、口縁端部がやや丸みを帯びており備前Ⅳ期、14世紀代に収まるものと思われるが、（572）の鉢については備前Ⅴ期、16世紀まで下る可能性があろう。常滑の甕（573・574）についは前者が15世紀後半、後者は14世紀後半の製品と考えている。（575）の鉢は、色調的には備前に酷似し、口縁部の形態もⅣ期後半段階に似ているが、体部の指オサエを根拠に常滑と判断したものである。常滑とすれば15世紀前半の製品と考えられよう。（577）は龍泉窯系の青磁の碗で、内底部には細い線描の花文様が印刻されている。（576）の瓦は厚さ2cm強で、全体に灰白色を呈する。凹面はナデを施し平滑にされているが、かすかに細かな布目痕が残っていた。

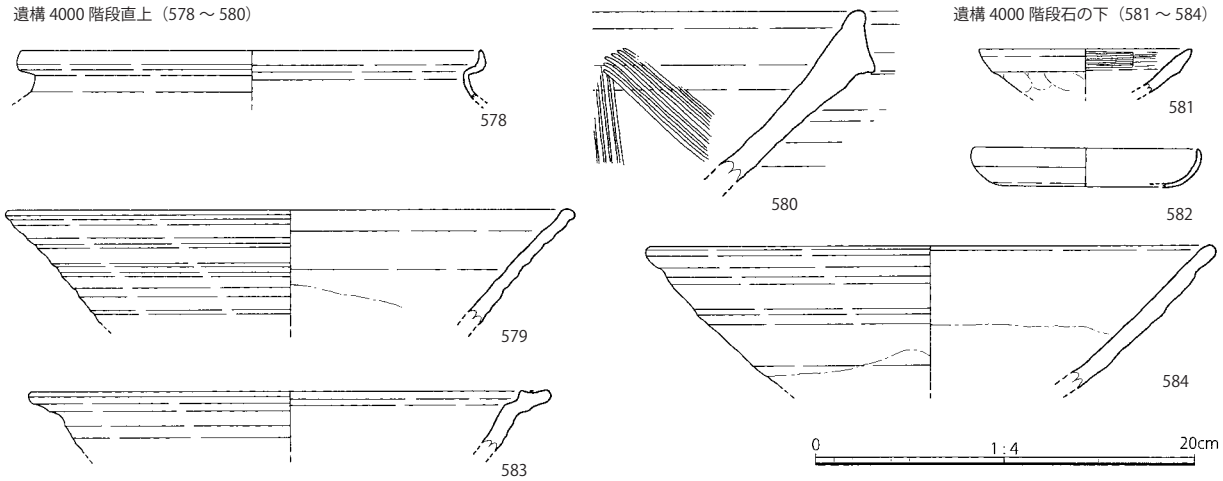


図108　遺構4000出土遺物

この遺構の遺物を概括すれば、遺構自体が壊され散乱していたと言う状況のせいか 15 世紀前半段階のものが多いが、14 世紀代から 16 世紀にかかる可能性の遺物も散見され、時期幅がかなり認められると言えよう。

以上述べてきた遺構 4034・4002・4030 については、既述したようにほぼ一直線に並ぶことから、これらのは境界線となっていた石垣の一部分であったものと認識している。この石垣が築かれた年代は出土している遺物の大まかな年代観及び前述したこの石垣を切って造られている竪穴建物（地下式倉庫）などの関係等から 15 世紀前半までは機能していたものの、15 世紀の中頃には壊されていた可能性が高いものと判断している。なお、この石垣は東西に延びるものであるが、その方位は 15 度北に偏している。

遺構 4000（階段）（図 107・108　図版 36）

前述の境界と考えている石垣を切って造られている階段（通路）である。両側に側壁となる石積みを伴っており、通路幅は 1 mで延長 5 mにわたって検出した。側石の大きさは 30 ～ 90cm ほどで、横積みにして用いられている。階段の石積みは 5 段分確認しており、用いられている石の大きさは 20 ～ 40cm であった。階段の傾斜度は 20 度ほどで緩やかなものである。北側が撹乱を受けていた為どれほど下がっていくか不明であるが、地形的には川側に向かってかなり下がっていくことが想定され、少なくとも数mは続いていたものと考えられる。

出土遺物としては、土師器皿や瀬戸の皿、備前の擂鉢などがある。このうち直上の覆土からの出土としては南伊勢の鍋、瀬戸の皿やの備前の擂鉢がある。南伊勢の鍋 (578) は頸部を「く」の字状に折り曲げた後、端部を上方に摘み上げている。器壁が 1mm ほどと極めて薄いことも特徴である。瀬戸の皿 (579) は口径 30cm ほどと大きく、口縁部が丸く収められていることから器形的には直縁大皿と呼ばれるものであろう。古瀬戸後Ⅲ期のものと考えている。備前の擂鉢 (580) は、内面及び外面口縁部下まで暗赤褐色であるが、外面の体部がにぶい赤褐色を呈しており、重ね焼きの痕跡が認められる。口縁部の形態は、上下に拡張しており備前Ⅳ期に該当するものであろう。これらの製品は、いずれも 15 世紀中頃から後半にかけてのものと言えよう。

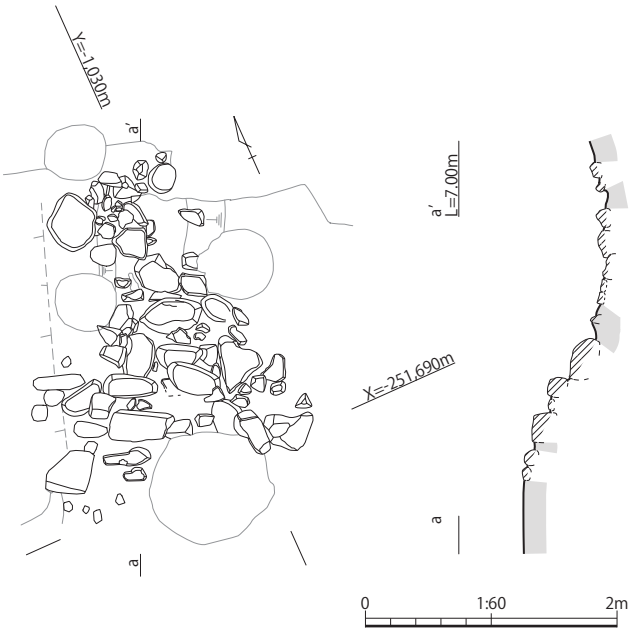


図109　遺構4007

石段の下から出土している土師器皿 (581・582) のうち後者は南伊勢のもので、口径 12cm で器壁が薄く、体部が丸く内湾して立ち上がる。時代的には 15 世紀を前後する時期のものと考えている。(583) は瀬戸の折縁深皿で、古瀬戸後Ⅱ期、15 世紀前後、同じく瀬戸の直縁大皿 (584) については古

瀬戸後Ⅰ期に該当する時期のもので14世紀後半段階のものである。

遺構4007（階段か）　（図107・109）

前述の遺構4000の東側20ｍほど、境界と考えている石垣ラインより北側のところで幅1.5ｍ、長さ２ｍほどの範囲にわたって10～40㎝大の石が散乱した状況で検出された。

かすかに並んでいる状況も窺えたことから、これについても階段を伴う通路の一部であった可能性が高いものと判断した。

なお、この遺構については、出土遺物がなく、時期については不明である。

４．掘立柱建物

今回の調査区のうち南側、自然堤防上にあたる箇所においては、掘立柱建物の柱穴と思われる径20㎝、深さ20㎝前後の遺構が無数に検出されている。おそらく何時期かにわたり建替えられた痕跡を示すものと思われるが、具体的な建物を復元できたのは３棟にとどまる。以下、これらについて詳述する。

掘立柱建物１　（図110・112　図版37）

遺構の南東部が撹乱により大きく破壊されているが、東西２間、南北３間の規模を有する建物である。建物の北西隅と南西隅の柱穴の距離（南北長）は7.3ｍであることから、尺換算で24尺に相当する。この間を３等分しており、柱間は８尺（約2.42ｍ）である。このことは東西についても同じで、16尺を２等分して８尺間の２間となっている。これらの柱穴は径40～50㎝大で、深さは検出面から50㎝前後を測り、いずれの柱穴にも20㎝ほどの平らな石が据え置かれていた。こうした建物は、規模的にも間尺的にも一般的なものであるが、本例の場合、特筆すべき状況としてその柱と柱の間にさらに５本の柱を設置していることである。もっとも残りの良かった北東側で確認すると、主柱と主柱の間に径30㎝前後、深さ20㎝ほどの、主柱穴に比べるとやや小振りな穴を掘り、その底面に平らな10～20㎝大の石を設置していた。こうした特異な造りから、この建物については、一般的な住居ではなく特別な用途に供した建物の可能性が高いと考えている。

出土遺物は、いくつかの柱穴で確認しているが、絶対量が少なく細片である。弥生土器や古墳時代の土師器など古いものに混じって中世の土師器皿（585）や山茶碗底部（586）、土師器の鍋（587）を確認している。このうち土師器の皿については、小破片のため時期を限定するには困難であるが体部の厚さや傾きなどから13世紀中頃のものと想定される。また土師器の鍋は南伊勢の製品で、時期的にはほぼ同時期の可能性が高い。なお、建物の方位は東に11度偏している。

掘立柱建物２　（図111・112　図版38-1･3）

調査区のほぼ中央で検出した２間×２間規模の建物である。柱間は2.1ｍ（7尺）を測る。柱穴は径30㎝前後、深さは検出面から浅いもので20㎝、深いものでも30㎝ほどであった。そのうちのいくつかには、柱を据えたと思われる平らな石が置かれていた。出土遺物は少ないが、柱穴のひとつ（遺構946）から13世紀後半～末にかけてと思われる常滑の壺（588）が出土している。

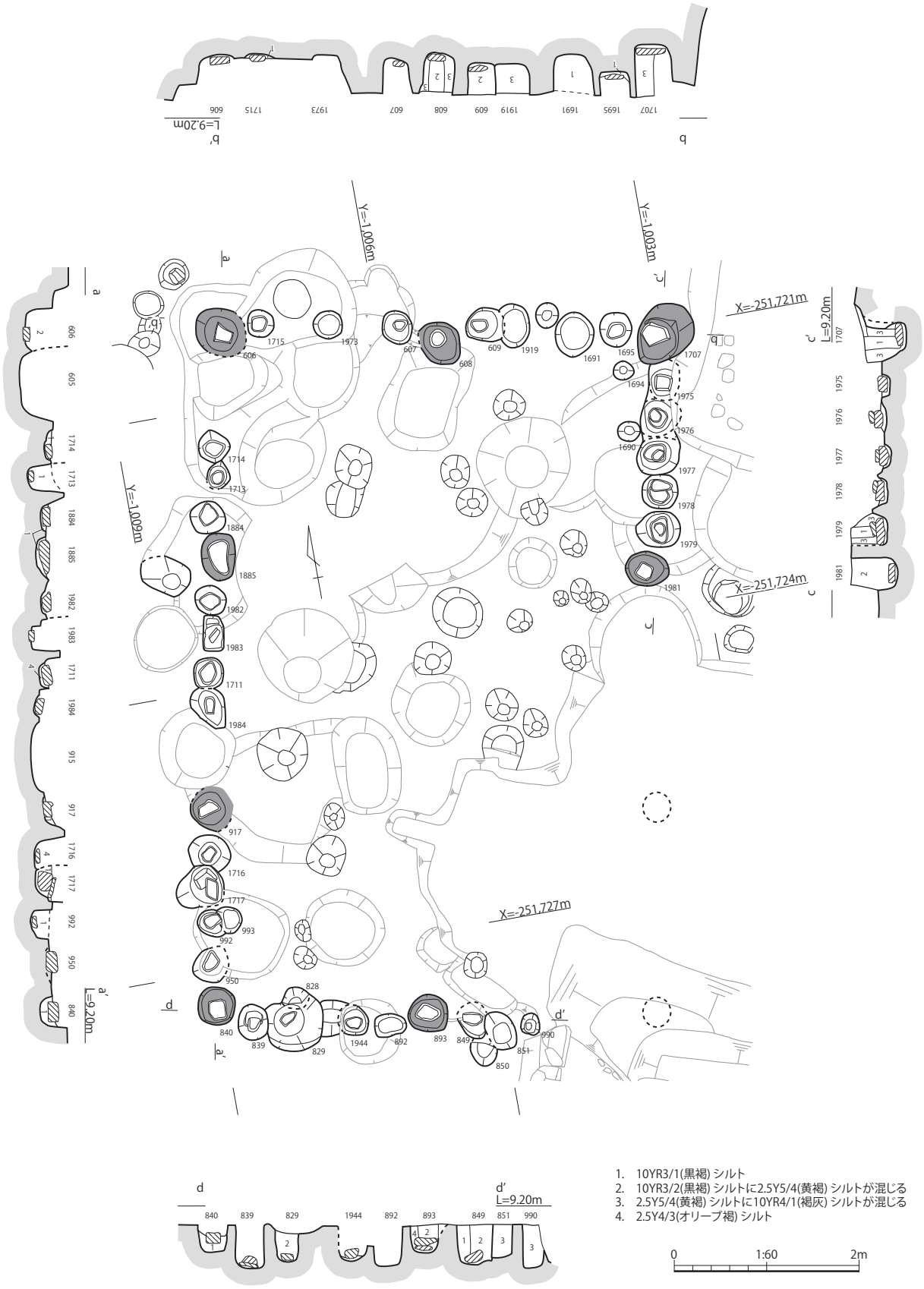

X=-251,727m
X=-251,724m
X=-251,721m
Y=-1,009m
Y=-1,006m
Y=-1,003m
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
L=9.20m
L=9.20m
L=9.20m
1. 10YR3/1(黒褐) シルト
2. 10YR3/2(黒褐) シルトに2.5Y5/4(黄褐) シルトが混じる
3. 2.5Y5/4(黄褐) シルトに10YR4/1(褐灰) シルトが混じる
4. 2.5Y4/3(オリーブ褐) シルト
0
1:60
2m

図110　掘立柱建物 1

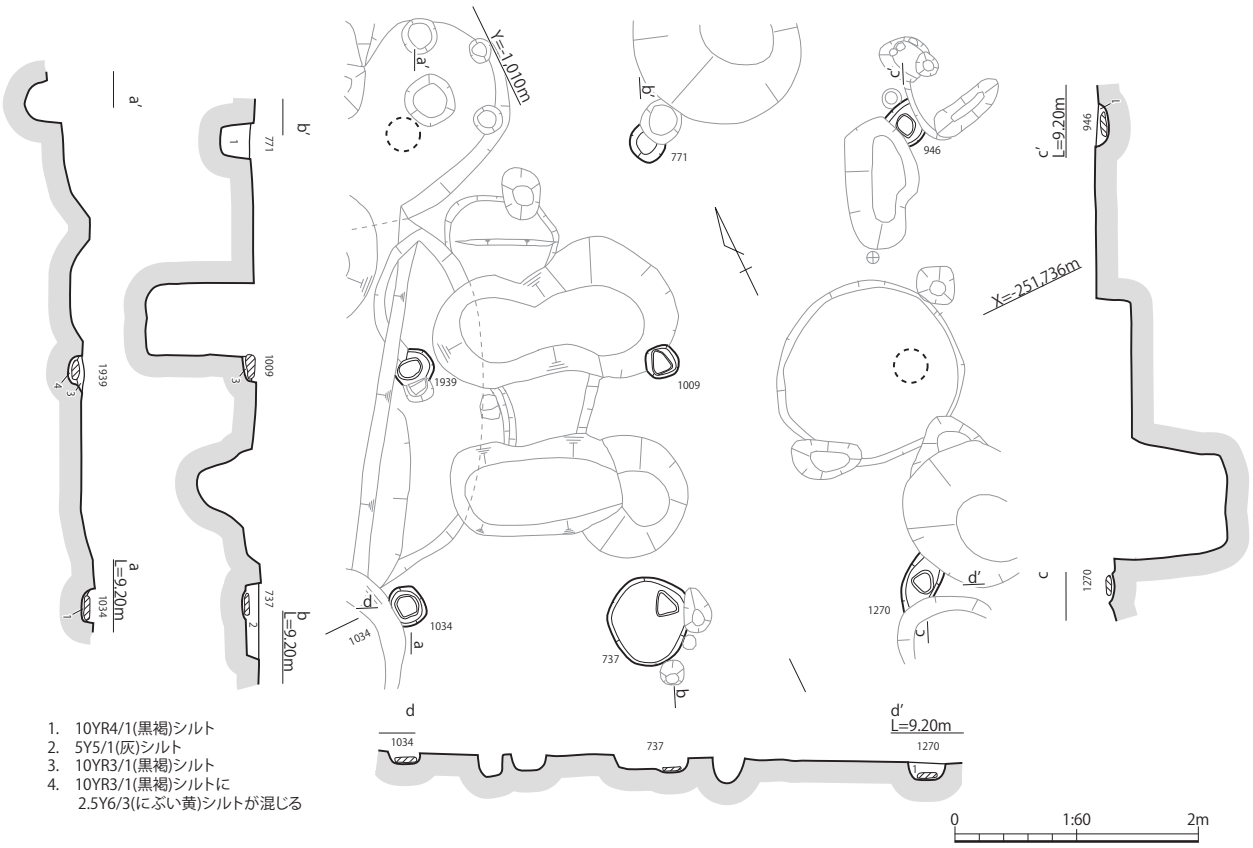


図111　掘立柱建物２

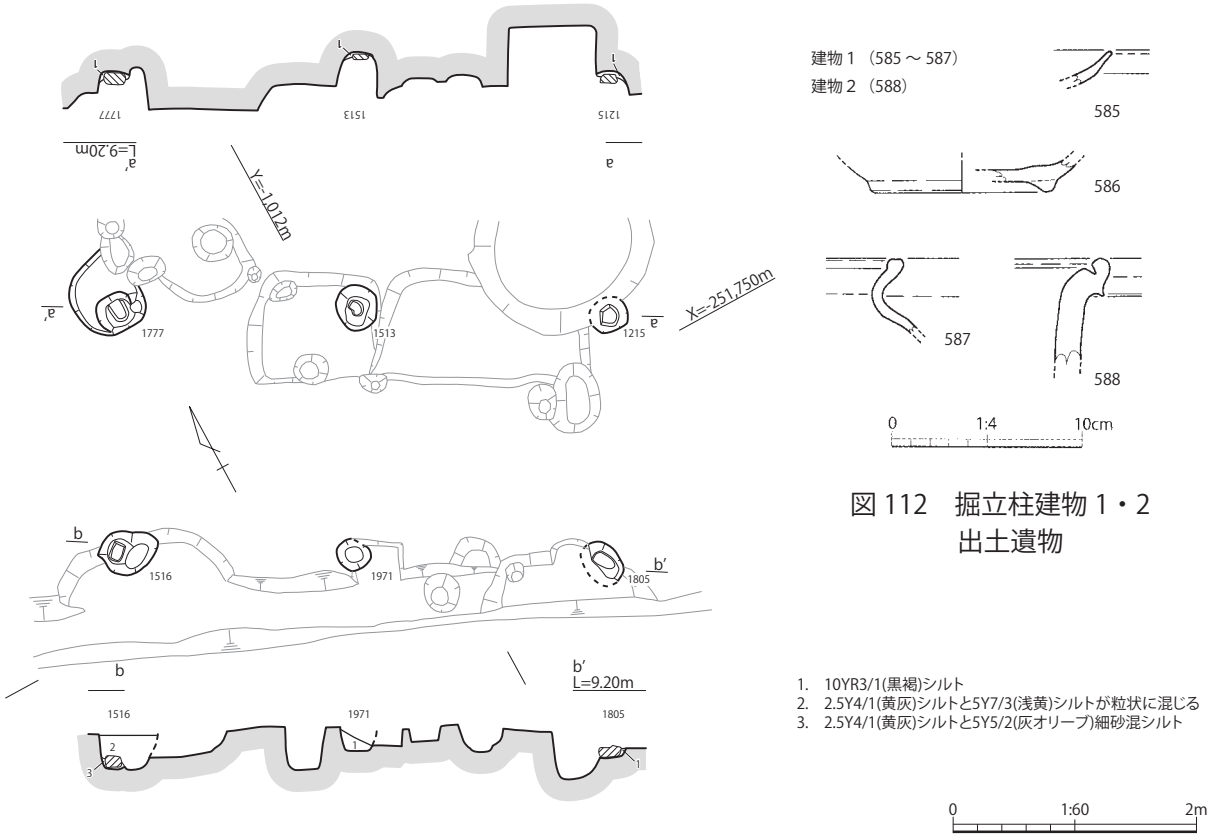


図 112　掘立柱建物１・２
出土遺物

図113　掘立柱建物３

なお、この建物の方位は東に23度偏しており、この建物の北側で検出されている竪穴建物（遺構700）や南側で検出されている竪穴建物（遺構690）とほぼ同じ方位であることから、これらとセットを成す可能性も考えられよう。

掘立柱建物３　（図113　図版38-2･4）

調査区南壁際で検出した建物である。検出規模では１間×１間であるが、調査区外の南側にあと１間分は延びている可能性が高い。柱穴は径30～40cmで、深さ30～40cmを測る。これらの柱穴の底部にも20cm大の平らな石が据えられていた。出土遺物がきわめて少なく、わずかに土師器皿の細片を確認したにとどまる。このため中世の建物であることは確実であろうが、その詳細な時期については不明である。この建物の方位は、東に28度偏している。

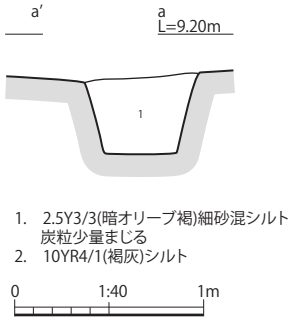
５．その他の遺構

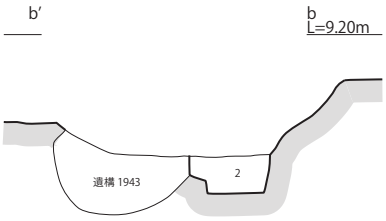
その他の遺構として溝、土坑などを記述する。また個別遺構図を掲載していないが平面図（図28）に図示した土坑等の遺構から出土している遺物についても掲載した。なお、径20cmほどの群集する柱穴等については、個別図のみならず平面図にも明記していないが、一定量の遺物が出土している。このためこれらについては資料として遺物のみ一括して掲示した。

遺構675（図114・115）

調査区のほぼ中央で検出した南北方向の溝状遺構である。幅0.6～0.9ｍ、深さは0.6ｍ前後である。延長14.5ｍにわたって検出しているが、途中多くの遺構によって分断された形での検出である。

埋土は南北２箇所で確認した。いずれも単層であるが、色調、土質は異なっており、北側では暗オリーブ褐色で





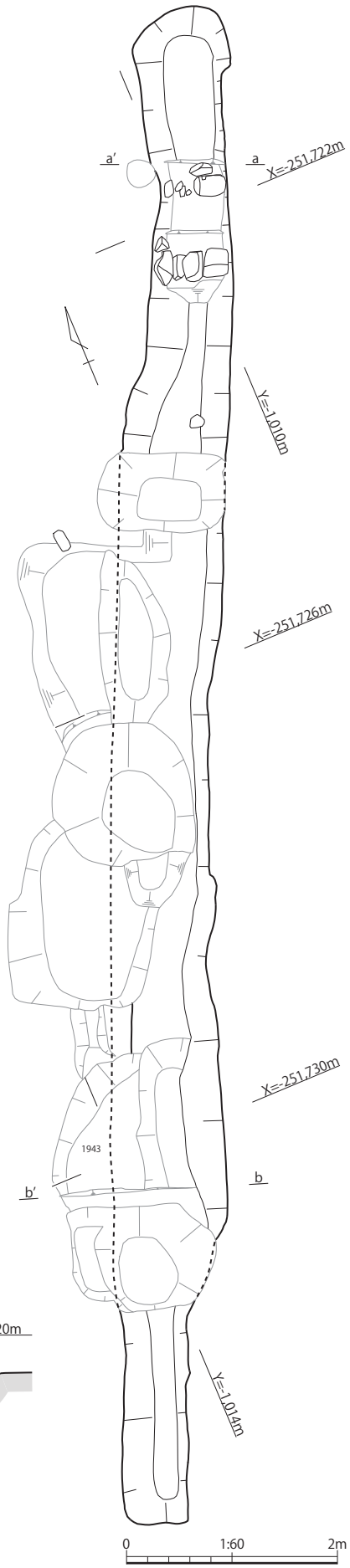


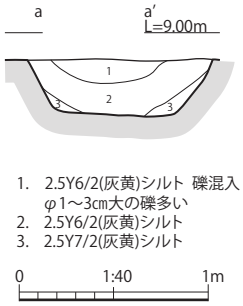
図114　遺構675

シルト混じりの細かな砂であったが、南側では褐灰色のシルトであった。

出土遺物は極めて少なく、多くの遺構が切り合っていることから混入の可能性も考えられる。土師器の皿は口径８㎝ほどの小皿（589）と口径13.5㎝ほどの大皿（590）がある。法量から見れば、14世紀以降のものと考えられるが、詳細な時期については不明である。土師器の鍋（591）は口縁部が内側に折れ曲がるもので、南伊勢の13世紀後半段階から14世紀にかけての製品と考えられる。山茶碗（592）は底部のみの出土であるが、高台部は低く、ややひしゃげた形状を成しており、渥美の第６型式、13世紀中頃にかけてのものと考えている。石鍋（594）は滑石製で、頸部に縦方向の丁寧な削り痕が認められるが、やや退化し始めた鍔の形状等から13世紀後半段階のものと考えている。

遺構438（図115・116　図版39-1）

調査区の南側で検出した東西方向の溝状遺構である。幅１ｍ前後、深さは0.4ｍほどを測る。延長12.5ｍにわたって検出した。埋土はレンズ状に堆積しており、上層には１～３㎝大の礫を多く含む灰黄色土が、中・下層には灰黄色土が



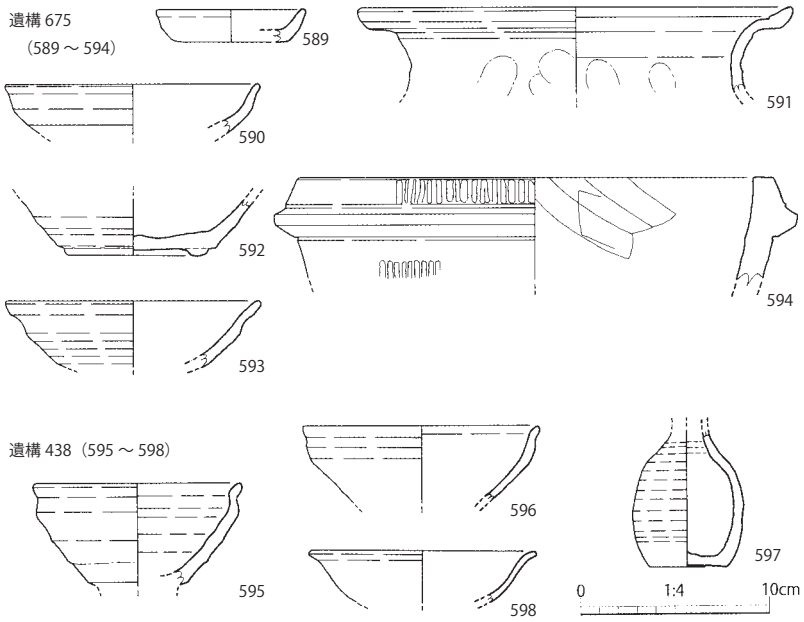


図115　遺構675・438出土遺物

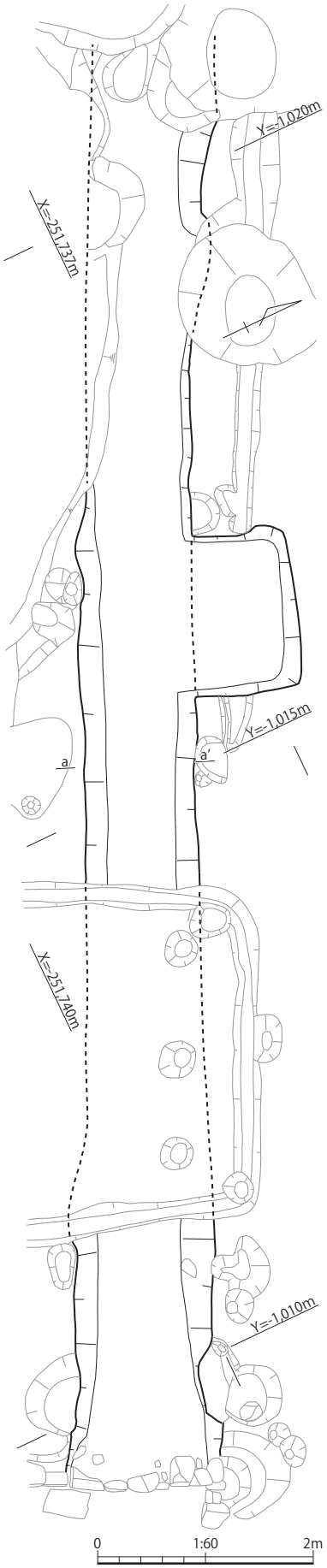


図116　遺構438

堆積していた。

出土遺物には瀬戸の天目茶碗や備前の壺、中国製の白磁皿などがある。天目茶碗のうち（595）は大窯１、（596）は大窯４、前者は16世紀前後、後者は16世紀でも末近い時期のものである。中国製の白磁皿（598）は、口縁端部が大きく外反するもので、16世紀中頃～後半に盛行するタイプのものである。

この溝及び前述の溝（遺構675）についても、屋敷地等の施設を区画する溝であった可能性が高いものと考えている。また、溝幅もかなり似通っており、その方向も両者は直交する関係にある。このことから同時期に存在していた可能性も考えているが、出土遺物から見ると遺構675は14世紀代、遺構438は16世紀代まで下る。いずれにしても今回の調査で明瞭な溝状遺構というのは、この２条だけであり、他の遺構の配置を考える上でも重要な遺構と言えるであろう。

遺構1-54（図117・121　図版39-2）

長径1.7ｍ、短径1.5ｍほどの楕円状の土坑で、深さは1.5ｍを測る。上部60㎝ほどが石積みになっており、下段に大振りの石を据え、その上に小振りの石を横積みにしている。形状から井戸の可能性が高いものと考えている。出土遺物としては瀬戸の縁釉小皿（599）がある。古瀬戸後期Ⅲ期ないしⅣ期の古段階に帰属するタイプと思われる。

遺構1600（図118・121）

一辺1.2ｍほどの方形を呈する土坑で、深さは0.7ｍを測る。埋土は単層で暗灰黄色のシルトで、

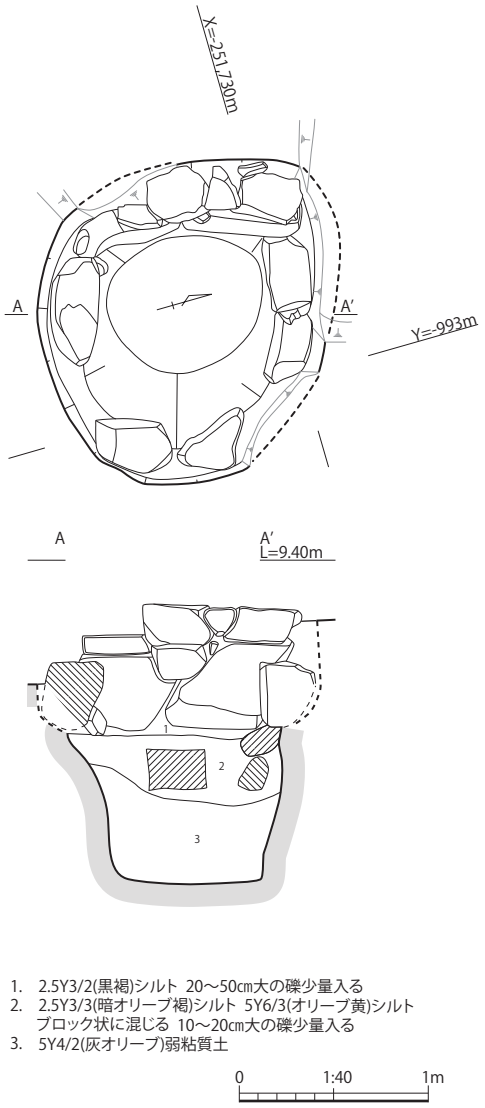


図117　遺構1-54

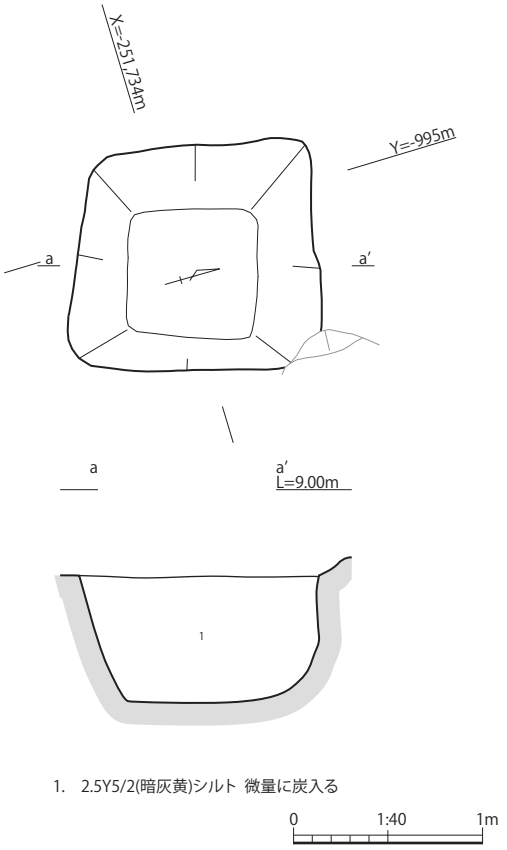


図118　遺構1600

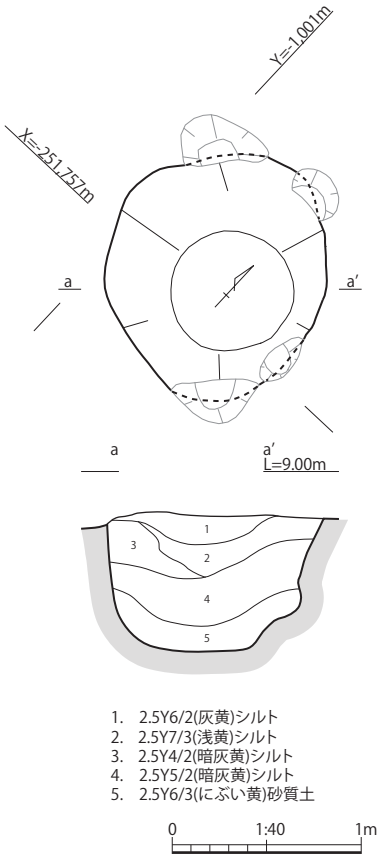


図 119　遺構 34

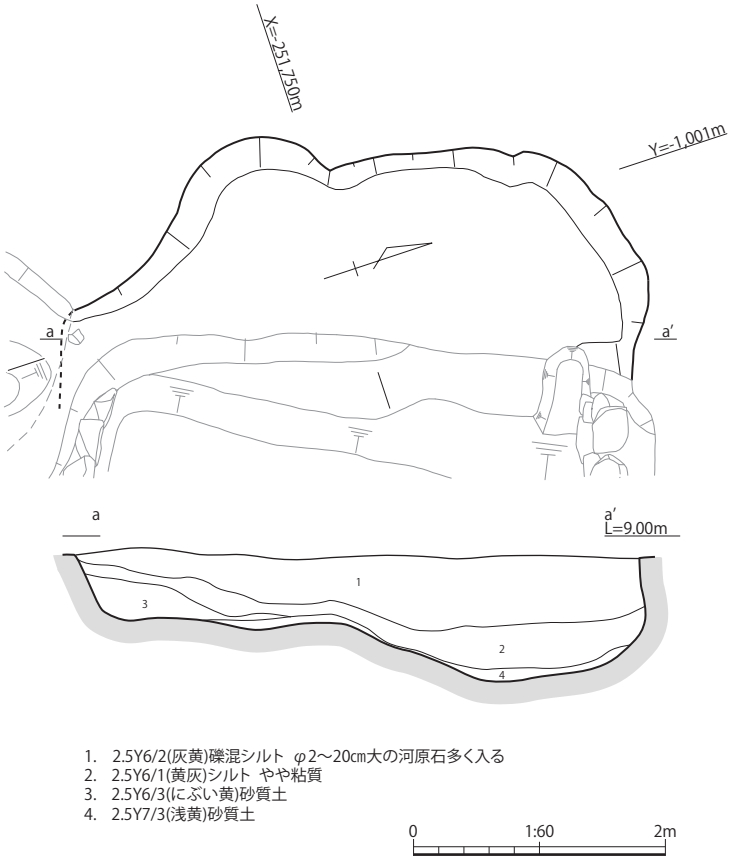


図 120　遺構 1460

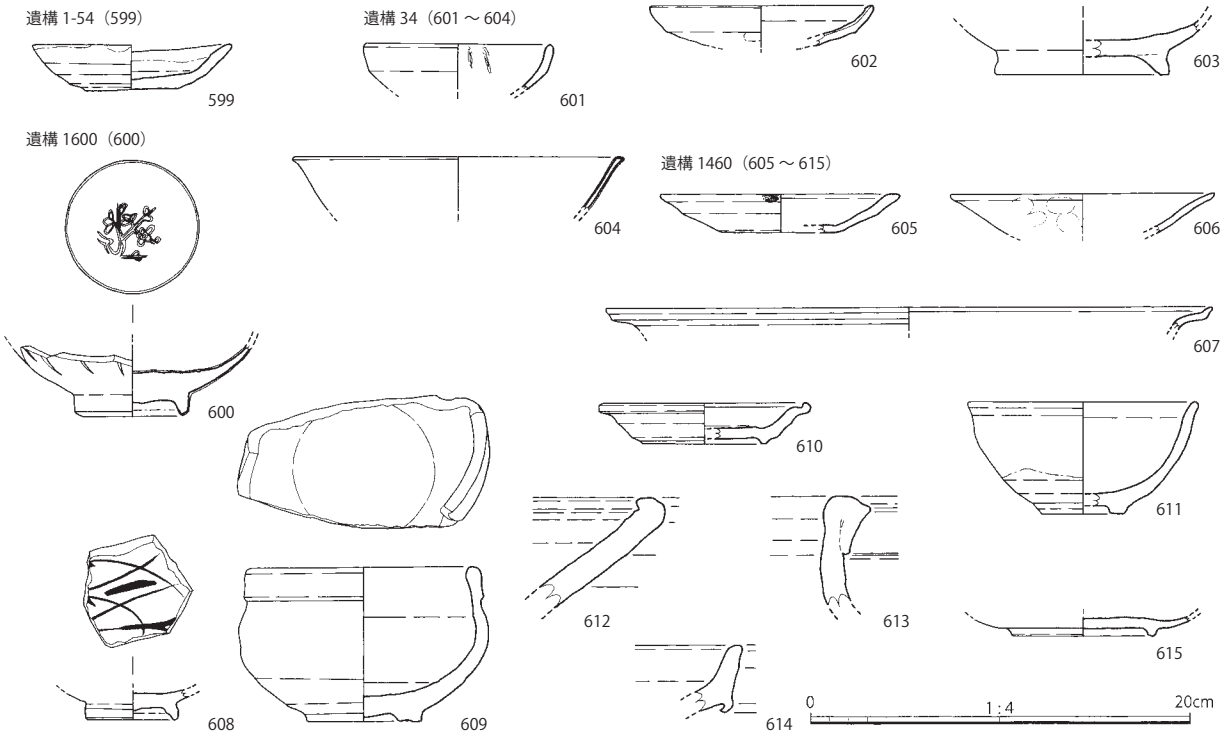


図 121　遺構 1-54・34・1600・1460 出土遺物

微量に炭が混じっていた。出土遺物は少なく、内底面に印刻による花文、外面体部にはおそらく線描の蓮華文をあしらった中国製の青磁碗（600）が出土している。

遺構 34（図 119・121）

径 0.6 mほどの円形を呈した土坑で、深さは 0.7 mを測る。埋土はほぼレンズ状に堆積しており、最下層はにぶい黄色の砂質土であるが、それより上は灰黄色、浅黄色ないし暗灰黄色のシルトであった。

出土遺物には土師器の皿（601・602）や山茶碗（603）や中国製の白磁碗（604）がある。土師器の皿については、15 世紀を前後する時期のものと思われるが、山茶碗や白磁の碗などは一時期古く 13 世紀前半代に帰属するものである。

遺構 1460（図 120・121）

東側半分が撹乱を受けているため、全体の形状・規模については不明であるが、長軸 4.5 m、短軸 1.5 m以上で、歪な形状である。深さは最深部で 1 mほどと規模の割には浅い。上層には 2 ～ 20㎝ 大の河原石が多く入っていた。出土遺物は多く、土師器の皿や鍋のほか瀬戸の皿・碗、常滑の甕や備前の擂鉢などがある。このうち土師器の皿（605・606）はいずれも体部が大きく外反する京都系の土師器皿で、概ね 15 世紀代に位置づけられる。また土師器の鍋（607）は、南伊勢のもので、口縁端部を上方に摘み上げており 15 世紀中頃～後半に帰属するものと考えられる。こうした 15 世紀代の遺物に混じって、大窯 3 ～ 4 と思われる瀬戸の折縁皿（610）や唐津の碗（608・609・611）など 16 世紀代の遺物も混在している。撹乱からの混入の可能性もあるが、この遺構そのものが上層で見逃した近世はじめのものであることも留保しておきたい。

遺構 1455（図 122・124）

南側の一部が撹乱を受けているが、長径 1.2 m以上、短径 1 mほどの楕円状の土坑で、深さは 1 m ほどを測る。下部はほぼ垂直に掘られており、埋土は複雑な

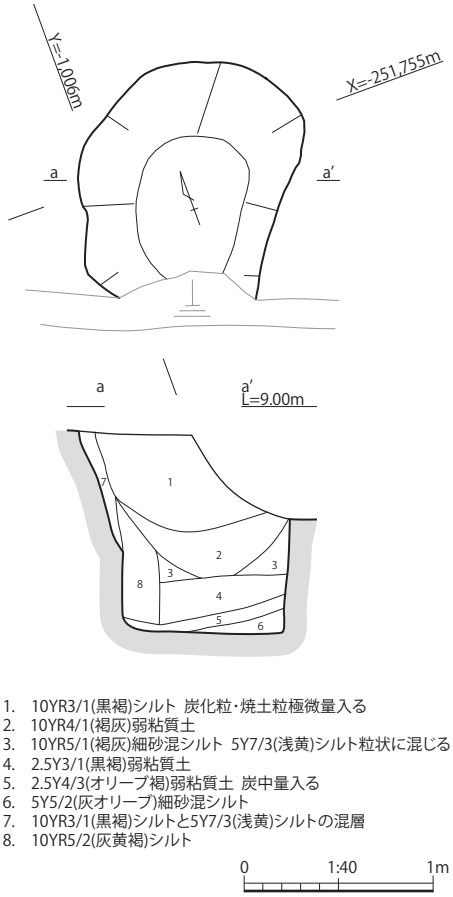


図 122　遺構 1455

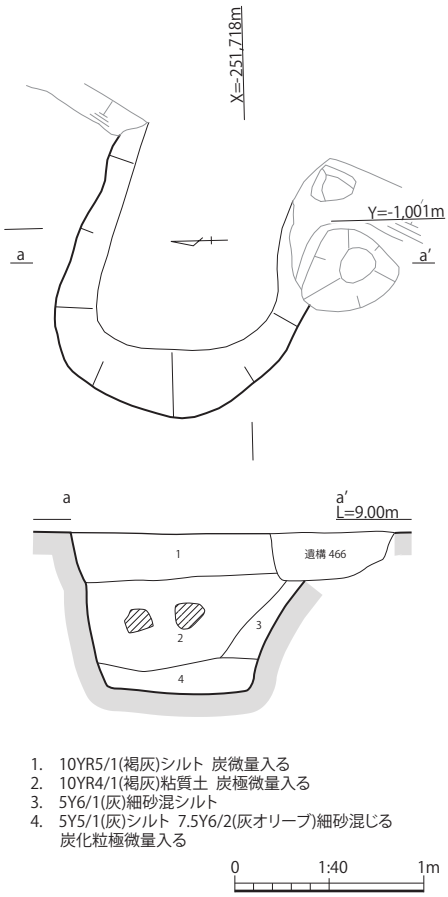


図 123　遺構 465

堆積状況を呈していた。埋土は全体に黒褐色ないし褐灰色の黒っぽい土で、最上層には炭化粒や焼土粒が極微量混じっていた。

出土遺物の内、土師器の皿（616 ～ 621）はいずれも口径 11cm、器高 3 cm を測るもので、全体に白っぽい色調を呈している。形態的には、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部のヨコナデにより端部はわずかに外反する。こうした法量や形態などから 15 世紀中頃から後半にかけてのものと考えている。なおこのうちのひとつ（621）の土師器皿には内底面の中心部に径 1 cm ほどの円形文が焼成前に刻されていた。その意図なり用途については不明である。（622）は南伊勢の鍋。（623）及び（624）は瓦質の擂鉢で、体部外面には指オサエの痕跡が顕著に残る。口縁端部は丁寧なヨコナデによりかすかに凹んでいる。（625）は東播系の須恵質のこね鉢、（626）は 15 世紀後半に見られる中国製の稜花の青磁皿である。

遺構 465（図 123・124）

東側の大半が撹乱を受けており、全容については不明であるが、長径 1.5 m以上、短径 1.1 m

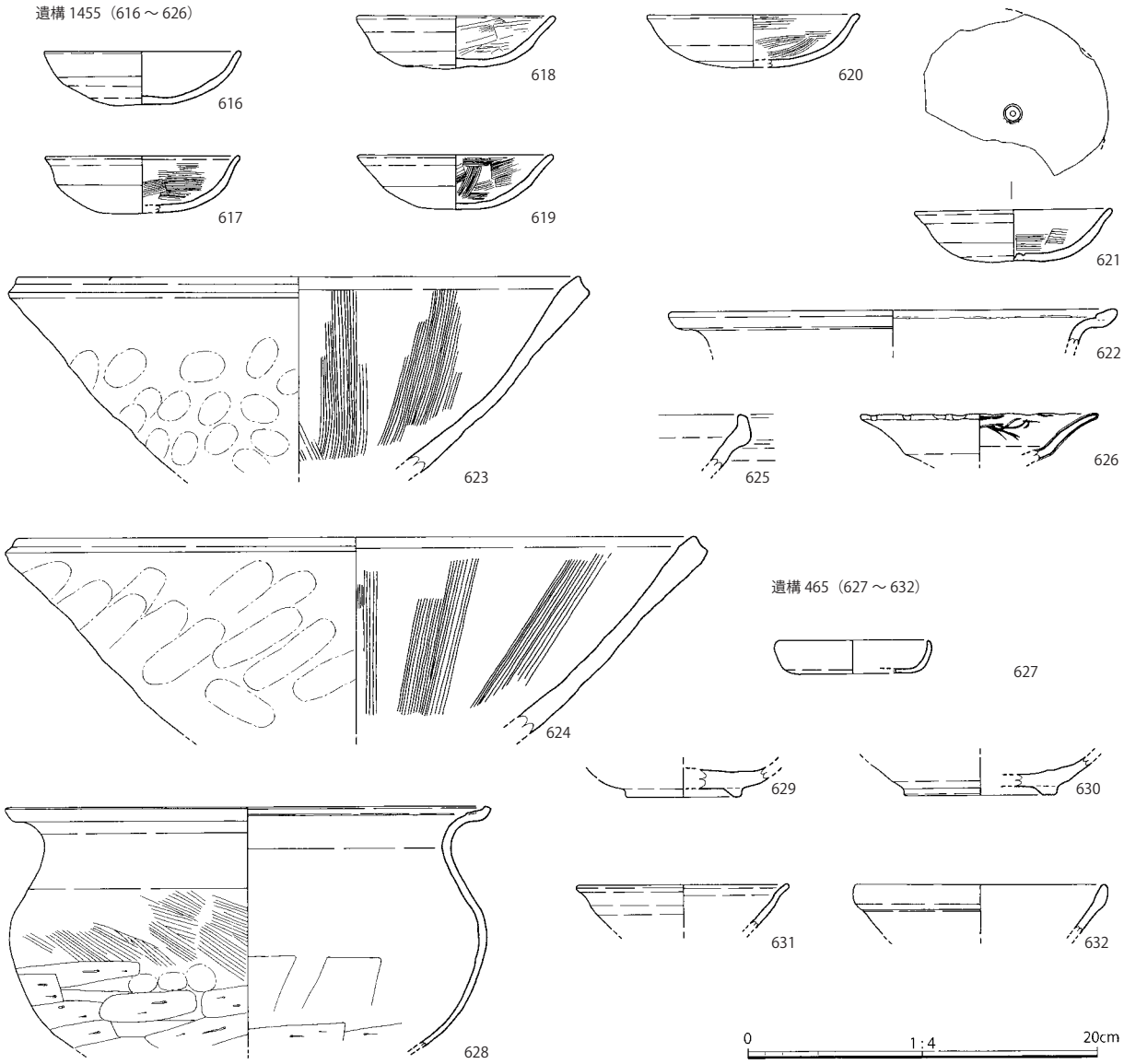


図 124　遺構 1455・465 出土遺物

の楕円状の土坑になるものと思われる。深さは0.8ｍほどで、埋土には微量の炭が混じっていた。出土遺物の内（627）の土師器皿は、器壁が薄く内湾気味に丸く立ちあがる南伊勢のものである。山茶碗（629・630）はいずれも渥美第５型式に帰属する時期のものと思われる。中国製の白磁のうち（631）の皿は口縁端部の釉薬を削り取るいわゆる口禿の皿と称されるものである。また（632）の碗は口縁部が玉縁状をなすもので、12世紀前後に盛行するタイプの碗である。

遺構85（図125・126　図版39-3）

調査区の東南、前述した掘立柱建物３の北東に隣接する箇所で検出した土坑である。長径1.2ｍ、短径0.7ｍほどの楕円状を呈しており、深さは10㎝ほどときわめて浅い。埋土は２層に分かれ、上層は暗灰黄色のシルトにオリーブ黄色やにぶい黄色の土がブロック状ないし粒状に混じる。下層は暗灰黄色のシルトに２～5㎜大の焼土・炭化粒が微量入っていた。

土坑の北側に偏して、ほぼ完形の土師器皿11枚が並べられるように置かれていたことを確認している。土師器皿の残存状態などからも廃棄されたものとは考え難く、この土坑については、地鎮であったものと判断している。

出土した土師器皿（633～643）は斉一性が高く、いずれも口径は12㎝、器高2㎝で、口径に比して器高が低いのが特徴と言える。全体に浅い黄橙色を呈しており、焼成も堅密である。また外底部は未調整であるが、内面や口縁部には丁寧なナデ調整が施されている。共伴する土器が無いため、時期を同定し難いが法量などから概ね15世紀中頃～後半にかけてのものと考えている。

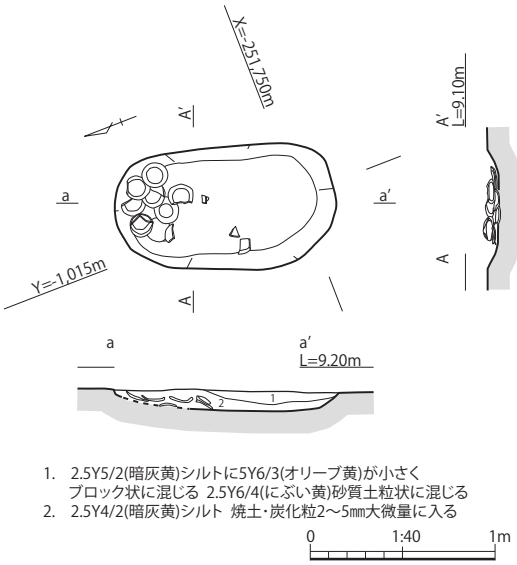


図125　遺構85

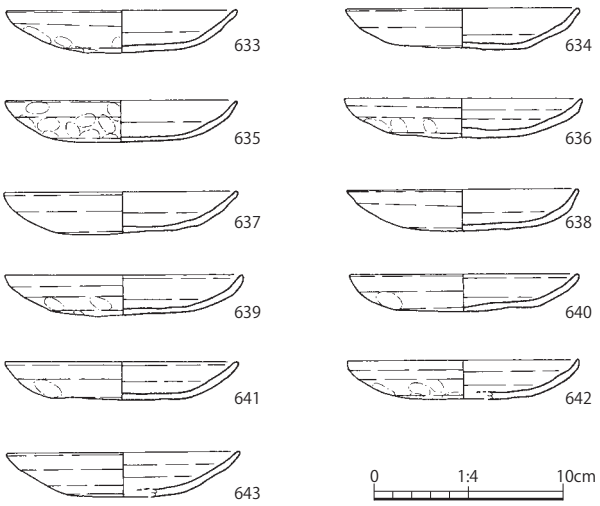


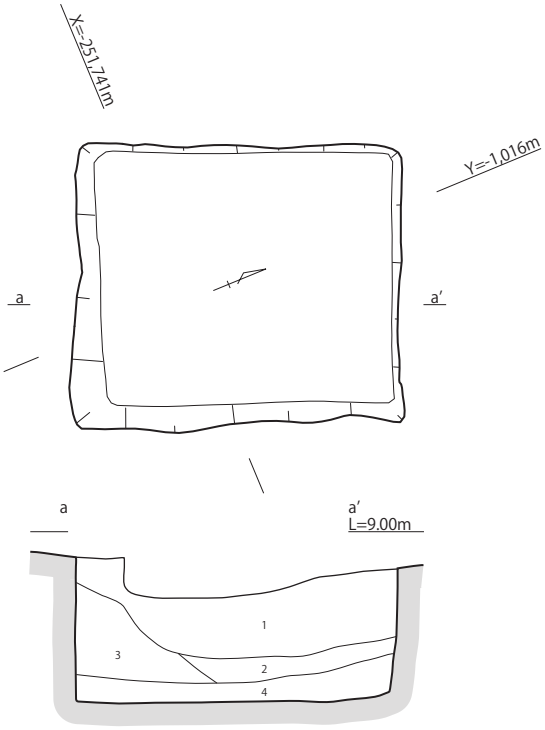
図126　遺構85出土遺物

遺構1330（図127・128）

調査区の南東側、前述した竪穴建物（半地下式倉庫）690の南西辺に接する形で検出された遺構である。長辺1.7ｍ、短辺1.5ｍの長方形を呈し、ほぼ垂直に掘られており深さは0.8ｍほどを測る。上層の褐灰色シルトには微量の炭化粒が混じっていた。

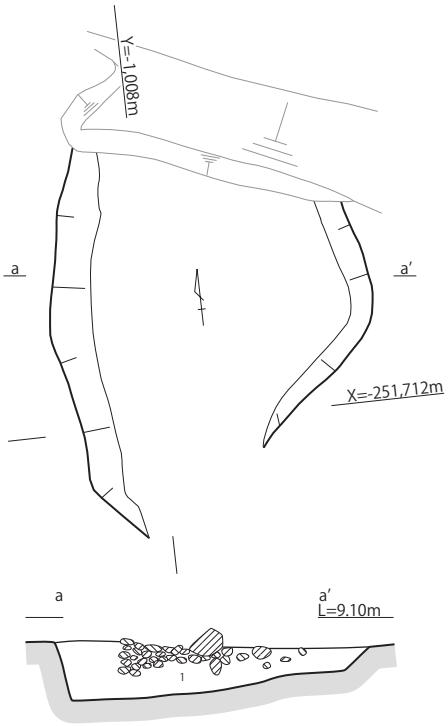
出土遺物には土師器の皿や鍋のほか常滑の壺、中国製の青磁碗などがある。このうち土師器の皿（644）は全体に器壁が薄く、体部は内湾気味に立ち上がるもので15世紀後半段階の南伊勢の

遺構 1330



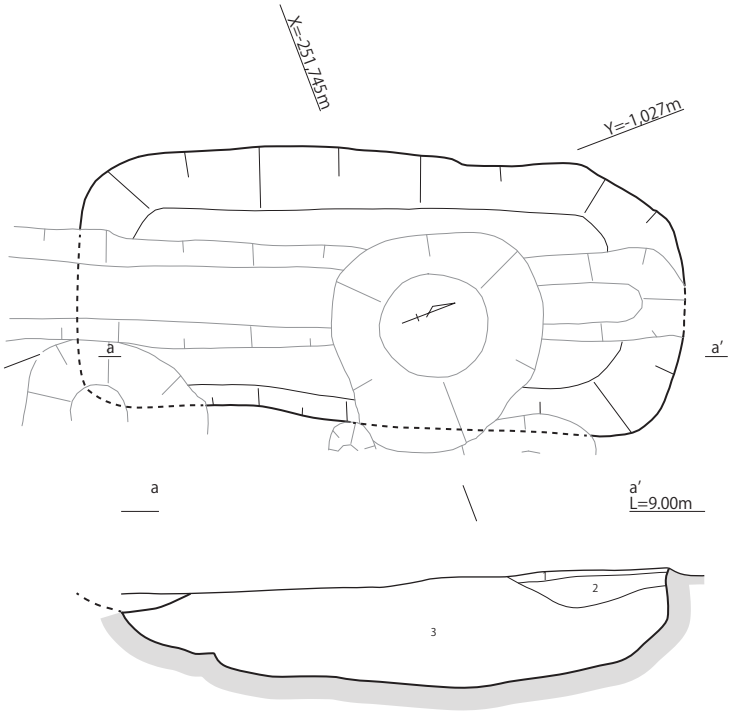
1. 10YR4/1(褐灰)シルト 炭化粒微量入る
2. 5Y4/1(灰)細砂混シルトに 5Y6/2(灰オリーブ)シルトが粒状に入る
3. 5Y4/2(灰オリーブ)細砂混シルトに5Y6/2(灰オリーブ)シルトが粒状に入る
4. 5Y3/2(オリーブ褐)細砂混シルトに 5Y6/2(灰オリーブ)シルトが粒状に入る

遺構 172



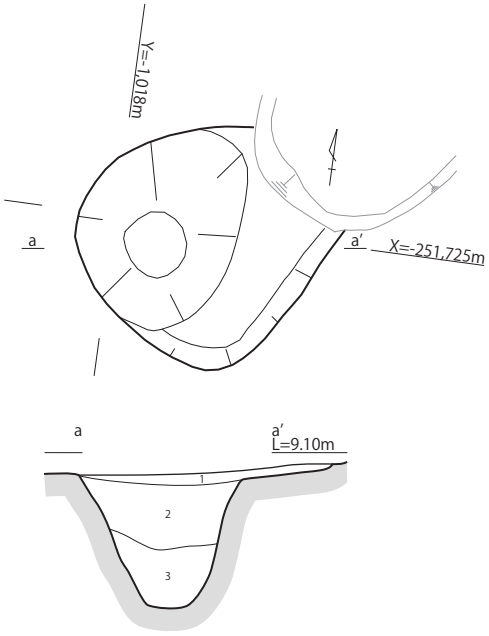
1. 2.5Y5/3(黄褐)細砂

遺構 691



1. 10YR4/1(褐灰)シルト
2. 2.5Y4/4(オリーブ褐)細砂混シルト
3. 10YR3/1(黒褐)シルト

遺構 87



1. 2.5Y3/2(黒褐)シルト 炭化粒微量入る
2. 2.5Y4/1(黄灰)シルト
3. 2.5Y4/2(暗灰黄)細砂混シルト

0 1:40 1m

図127　遺構1330・172・691・87

製品である可能性が高い。また（645）の鍋も同じく南伊勢のもので、時期的にもほぼ同じ時期と考えられる。常滑の甕（646）や壺（647）なども中野10型式に帰属する15世紀後半段階のものと考えられよう。（649）の青磁碗は内面底部に印花を施しているが、この部分の釉を剥ぎ取っており粗雑な作りとなっている。

遺構691（図127・128）

調査区南端近くで検出した遺構で、長径3.2ｍ、短径1.4ｍほどの長楕円形を呈する土坑である。深さは最深部で0.6ｍを測る。埋土の主体は黒褐色のシルトで、遺物もこの土の中から出土している。

出土遺物のうち（651）は15世紀代の播磨の土師器の鍋で、体部には斜め方向の粗いタタキが施されている。外面全体に煤の付着が認められた。山茶碗（652～654）はいずれも渥美の第5型式、13世紀を前後する時期のものである。瀬戸の折縁皿（655）は稜花になっており、口縁端部の形状から古瀬戸Ⅲ期に帰属する時期のものであろう。（656）は中国製の白磁で、体部がするどく屈曲して立ち上がり、かすかに外反する坏になるものと思われる。釉調は全体にうすい青みを帯びている。

遺構172（図127・129）

北側が撹乱を受けていることや、南側も途切れていることから全体の形状は判然としないが、長径2.5ｍ、短径1.7ほどの土坑であったものと思われる。深さは最深部でも30cmほどと浅く、黄褐色の細砂に1～10cm大の礫が多く入っていた。出土遺物の内（657）は口縁部のみの出土であるため全体の形状は不明だが、南伊勢の茶釜形の釜になる可能性が高い。全体にうすい橙色を

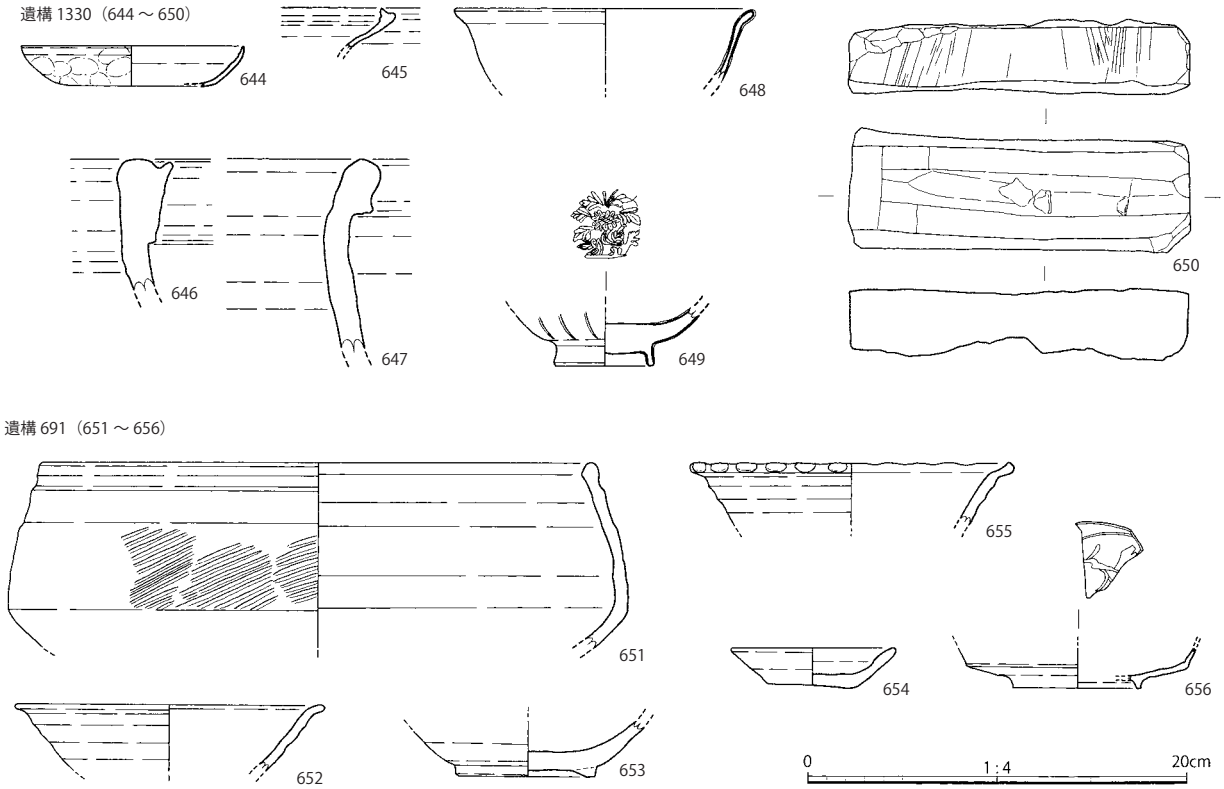


図128　遺構1330・691出土遺物

呈し、焼成は堅密である。（658・659）も南伊勢の製品で16世紀前半から中頃にかけての土師器の鍋である。（660）は土師器の焙烙で、体部中位から底部にかけて斜格子状のタタキが施されている。瀬戸の稜花皿（661）及び丸皿（662）はいずれも大窯2に帰属するタイプであり、概ね16世紀前半から中頃にかけてのものである。（663）は備前の擂鉢で、口縁部は上下に大きく拡張しているが、まだ凹線が入るには至っておらず、備前Ⅳ期に収まる時期のものである。中国製磁器のうち（666）は碁笥底の染付皿で体部下半には蕉葉文が描かれている。15世紀の後半～16世紀中頃にかけて盛行するタイプの皿である。15世紀代の遺構が多い中で、出土遺物からも本遺構については確実に16世紀中頃近くまで機能していたものと判断される。

遺構87（図127・129）

調査区のほぼ中央で検出した遺構で、長径1.0ｍ、短径0.8ｍほどのやや不正形な楕円状を呈し、深さは0.7ｍを測る。出土遺物のうち常滑の広口壺（667）は中野6b、13世紀後半～末の時期の製品と思われる。また（668）の中国製の白磁の碗についても口禿タイプで、この時期までに収まるものである。遺物が少なく断定はできかねるが、この遺構については鎌倉時代に帰属する可能性が高いと考えている。

遺構10（図130・133）

調査区の西南隅、前述の大型土坑としている遺構12の上で検出した遺構である。大部分が撹乱を受けていることや調査区外に延びているため全容は不明である。推定規模で長径3ｍ以上、短径2.8ｍほどと比較的大きなものであるが、深さは30㎝足らずと浅い。出土遺物には土師器の鍋がある。このうち（669）は体部が内傾気味に立ち上がり、口縁部下に凹線状の浅いくぼみが巡る。体部下半を欠いているが、通例体部下半から底部に粗いタタキ目が施される播磨地方の製品である可能性が高い。煤の付着が顕著で、かなり使い込まれていた様相が窺える。一方、（670）の土師器の鍋は、「く」の字状に屈曲した口縁部の端部を上方に摘み上げていることや器壁が薄いことなどから、南伊勢の15世紀代の製品と考えられる。ひとつの土坑でこの時期の播磨と南

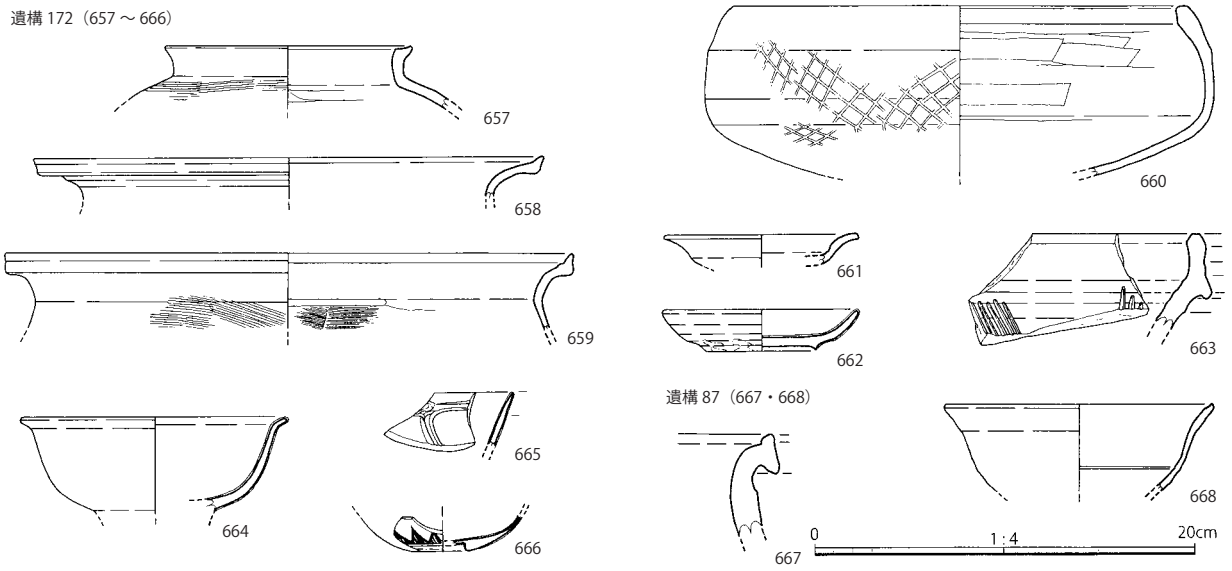


図129　遺構172・87出土遺物

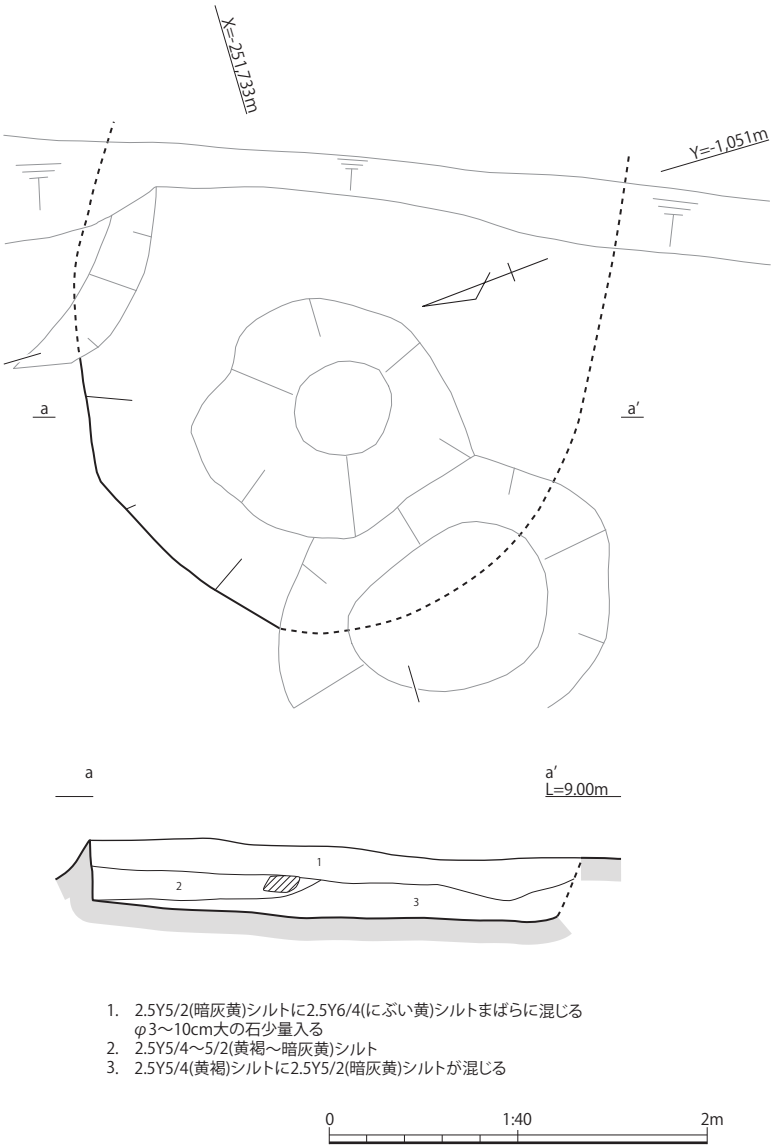


図 130　遺構 10

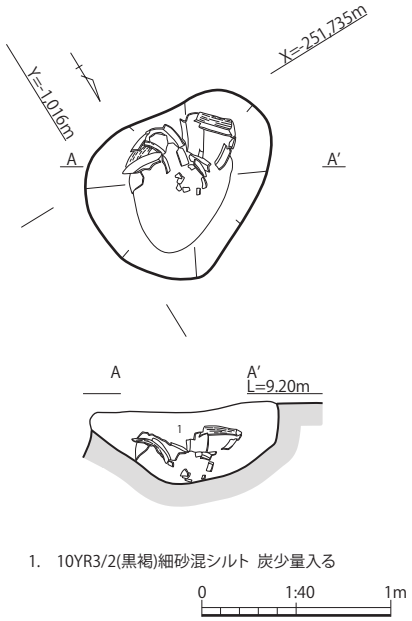


図 131　遺構 659

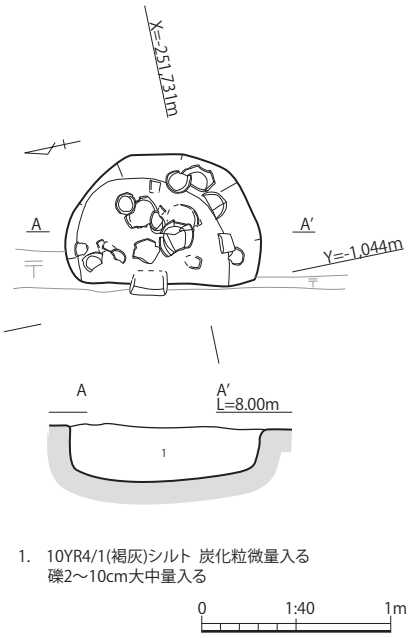


図 132　遺構 3075

伊勢の土器が共伴することは当該遺跡においては何例かが確認されており、当時の流通を考える上で貴重な資料と言える。

遺構 659（図 131・133）

長径 1.1 m、短径 0.8 mのやや不正形な土坑で、もっとも深い箇所で 35cm の深さを測る。埋土は単層で、黒褐色の細かな砂にシルトと少量の炭が入っていた。この土坑からは 3 個体の土師器の鍋（671 ～ 673）が出土している。いずれも 15 世紀代と考えられる同一タイプの南伊勢の鍋であり、体部上半に細かな斜め方向のハケ目調整、下半部はヘラ削りが施されている。出土状況を図示しているが、大振りの破片であり、3 個体がまとまって出土していることから埋納された可能性も考えられよう。

遺構 3075（図 132・134　図版 40-1）

調査区の北東隅近くで検出した土坑である。本来は径 1 mほどの円形であったと思われるが、

西半分が撹乱によって削られており半円状をなしている。深さは30cmほどと浅いが、この場所は校舎の建設時に１mほどは削平を受けた箇所に相当しており、深さについても本来は１m以上あったものと推定される。形状からして概述してきた大型土坑と呼ぶべき土坑であった可能性が高い。埋土は単層で、褐灰色のシルトに炭化粒が微量混じっていた。また、２～10cm大の礫が中量入っていたのを確認している。

出土遺物は多く、土師器の皿や山茶碗、渥美の甕など比較的中世でも前期に帰属する古い遺物が多いのが特徴である。

土師器の皿は直径15～16cm(5寸)ほどの大皿と直径９cm(3寸)ほどの小皿に大別でき、さらに底部が糸切りのものと未調整のもの、また数は少ないがロクロ成形のものも出土している。このうち(674～676)の小皿はいずれも淡い黄橙色を呈し、口縁部はヨコナデ、体部下半部から底部にかけて指オサエが残る。これに対して(677)の小皿はにぶい橙色を呈し、底部は糸切りとなっている。後述する(678)の大皿とセット関係を成すものと思われる。

大皿のうち(678)及び(686)はにぶい橙色を呈し、底部が糸切りであることと全体に器壁が厚いことが特徴である。時期的には12後半段階～13世紀でもごく初めに位置づけられるものと考えられる。(679)の皿は灰白色を呈し、口径に比して器高が５cmほどと高い。またこの皿についてはロクロ成形によりつくられている。また(680・681)の大皿についてもロクロ成形であり、底部にはかすかな糸切り痕とともに乾燥時に敷かれていた思われる藁状の跡も認められる。(684・685)などの手づくねの土師器皿は、口縁部にヨコナデを施し、体部内面には斜め横方向のハケ目調整の痕跡が認められた。

以上の土師器の皿については、技法的な違いから何種類かの系統なり産地の異なりが認められるが、法量などからいずれも中世の古い段階、13世紀前半までに収まる一群と考えている。

瓦器碗(687)は１点出土している。断面三角形を呈する高台は、退化が進み低い形状である。

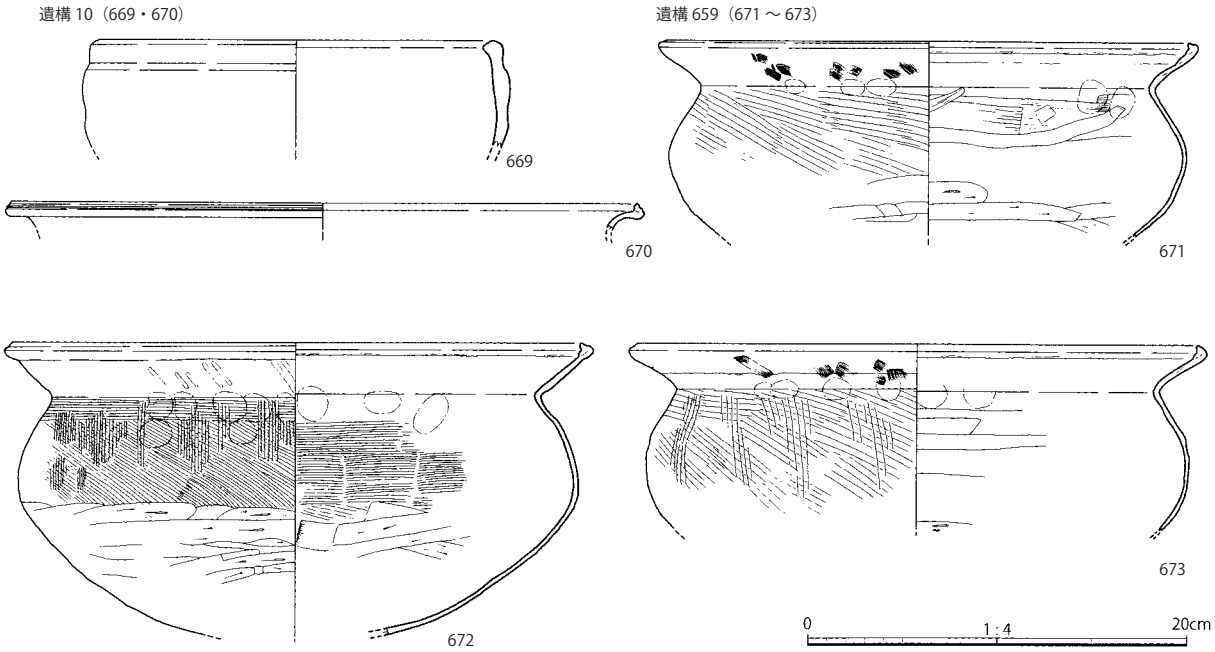


図133　遺構10・659の出土遺物

体部内面に施された暗文は粗く、内面底部の輪花状の暗文も簡略された雑なものである。こうした特長から 13 世紀前半段階の紀伊型の瓦器碗の可能性が高い。

山茶碗については、渥美産のものと尾張産のものを確認している。このうち（688 ～ 691）については、渥美の製品で第 5 型式に帰属するものである。（692）については、同じく渥美の製品であるが､高台部が高くしっかりと張り出していることから第 4 型式まで遡る可能性が高い。（693）は口縁部のみの破片であるが、口縁部がわずかに外反しており尾張第 5 型式に帰属する時期のものと思われる。なお（695）は片口の鉢になるもので、尾張の第 4 型式に帰属する時期のものである。（696）は渥美の甕の口縁部である。全体に灰色を呈し、口縁端部がわずかに凹む。（697）は常滑の甕もしくは広口壺と思われる。いずれも 12 世紀後半段階のものであろう。中国製の磁器のうち（698・699）は青磁の碗。（700）は白磁の碗である。

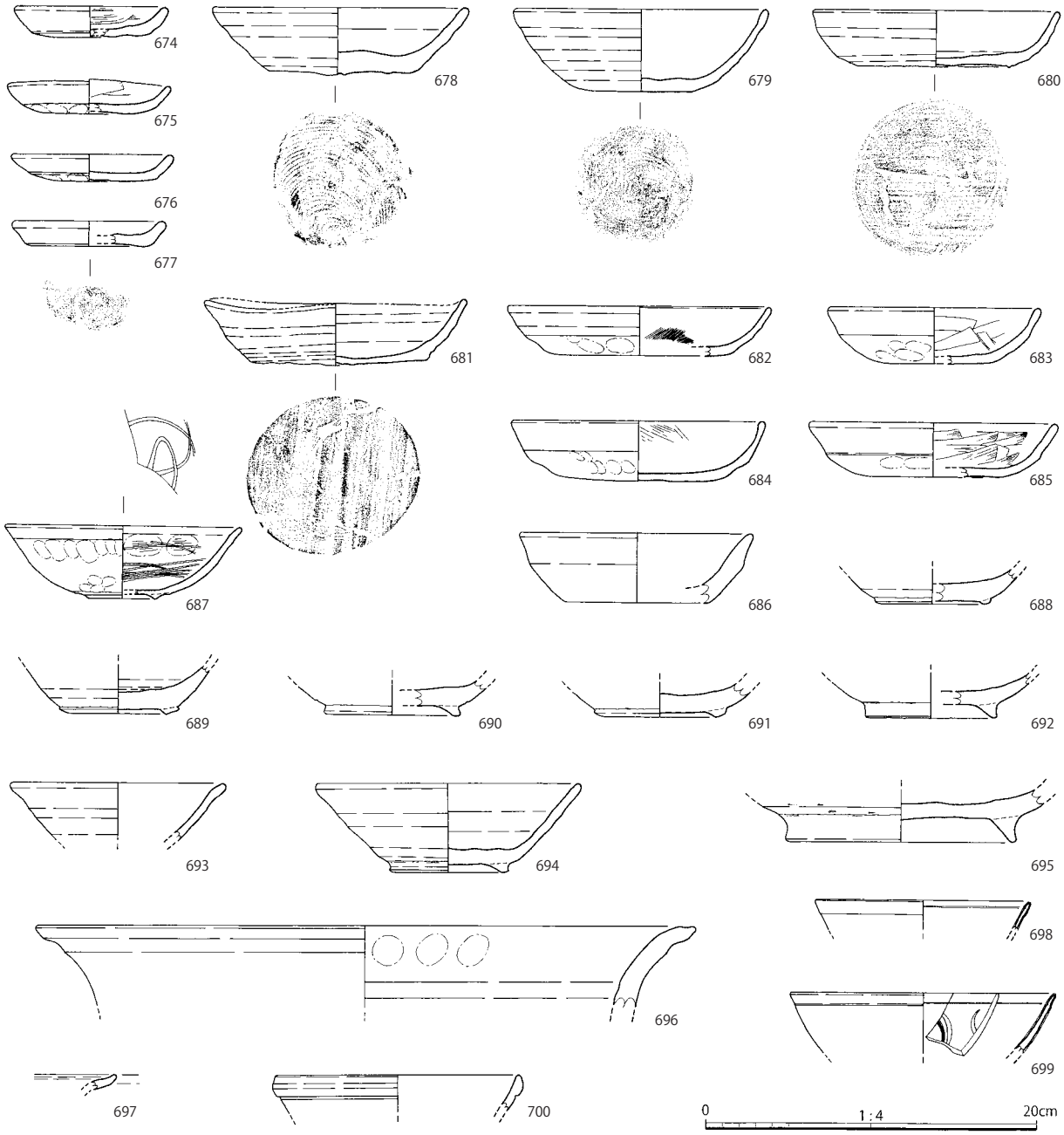


図 134　遺構 3075 出土遺物

本遺構出土のこれらの遺物については、12 世紀後半～ 13 世紀でも初め頃に比定できる一群と考えられ、概述した遺構 12(大型土坑) の一群とともに当該遺跡の中世の遺構のなかでは最も古い時期に位置づけられるものである。

遺構 634（竪穴建物）（図 135　図版 40-2･3）

調査区南側縁辺で検出した遺構である。北東部が近世の遺構により撹乱を受けており、また南

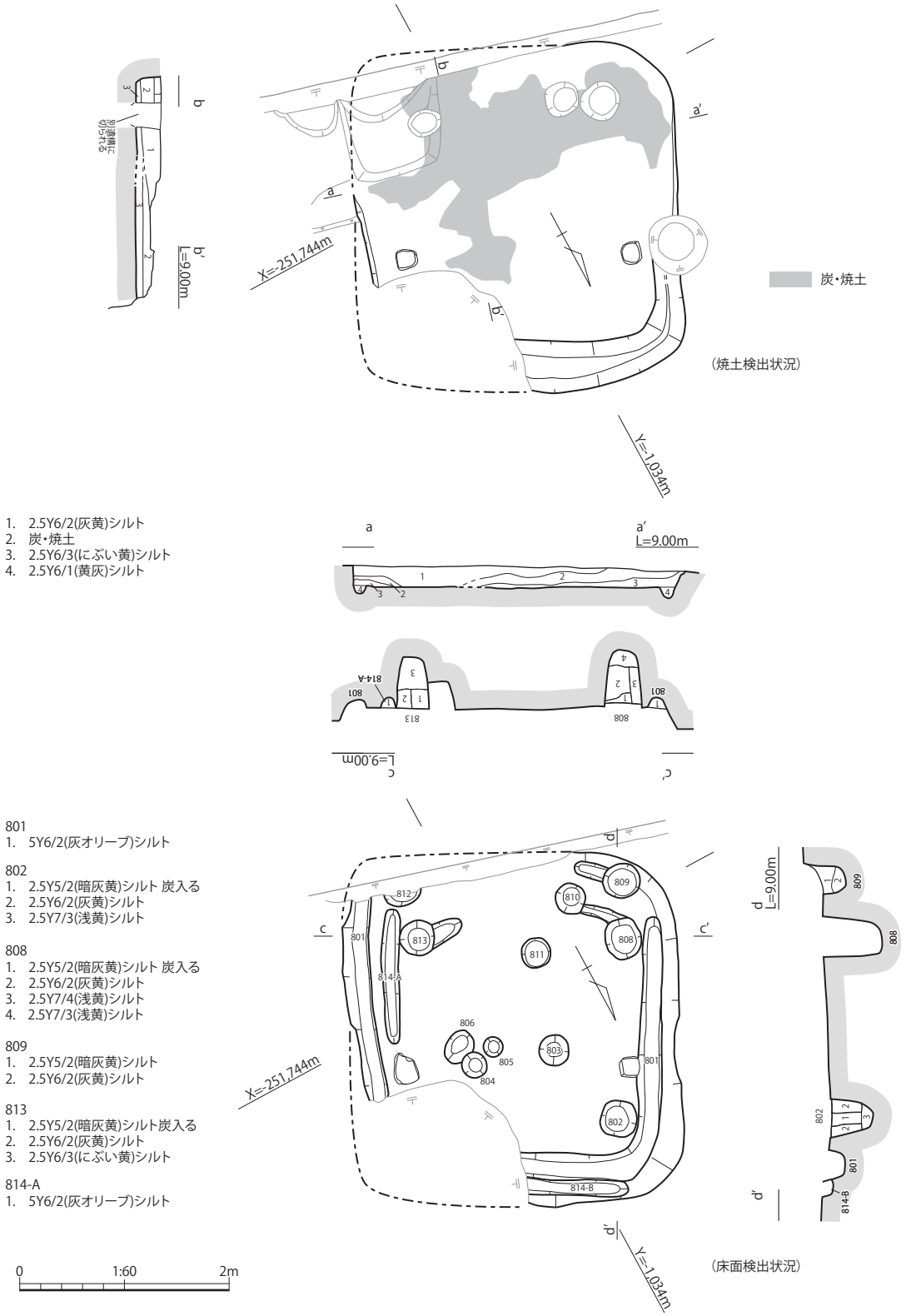


図135　遺構634

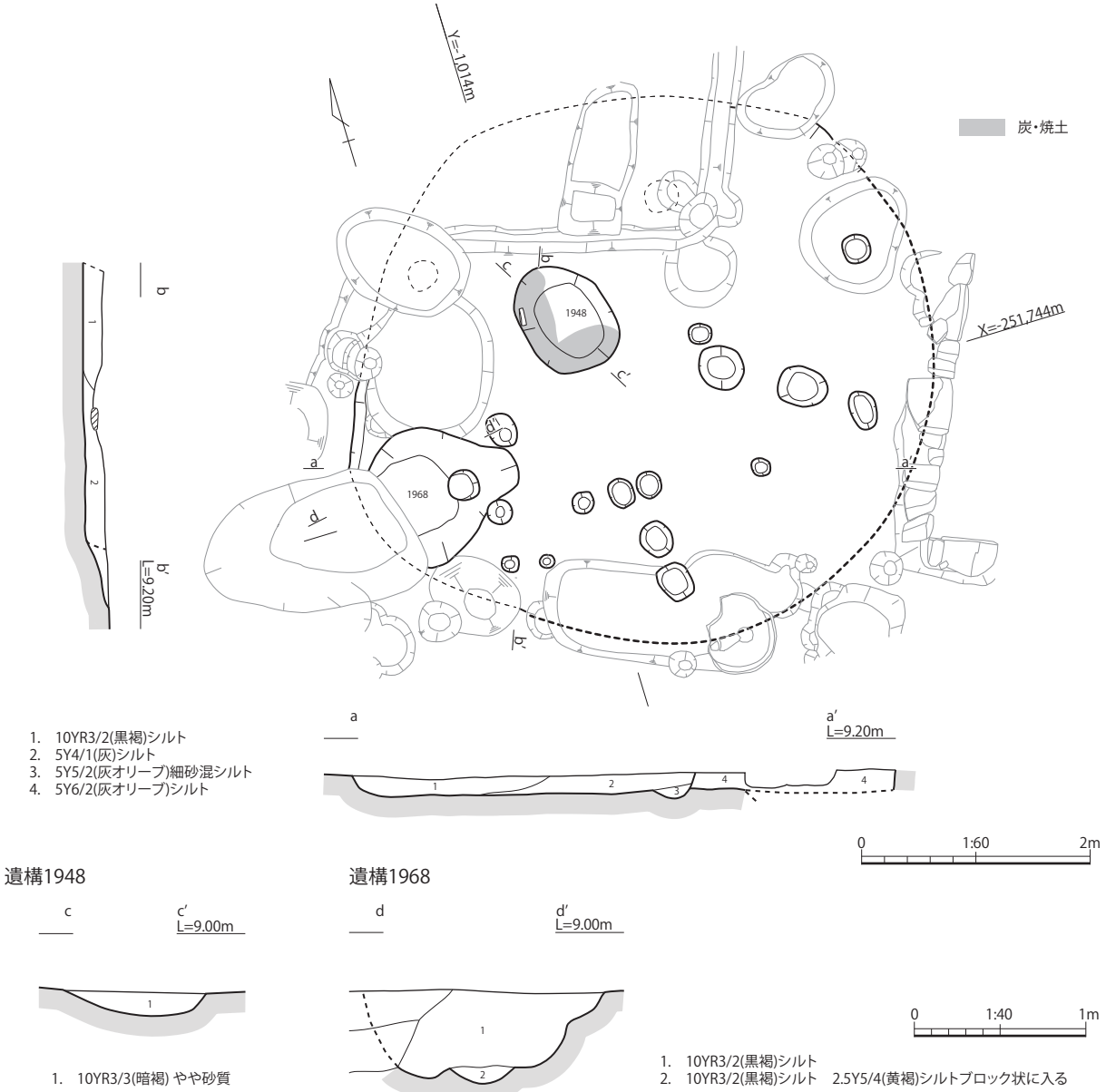


図136 遺構1942

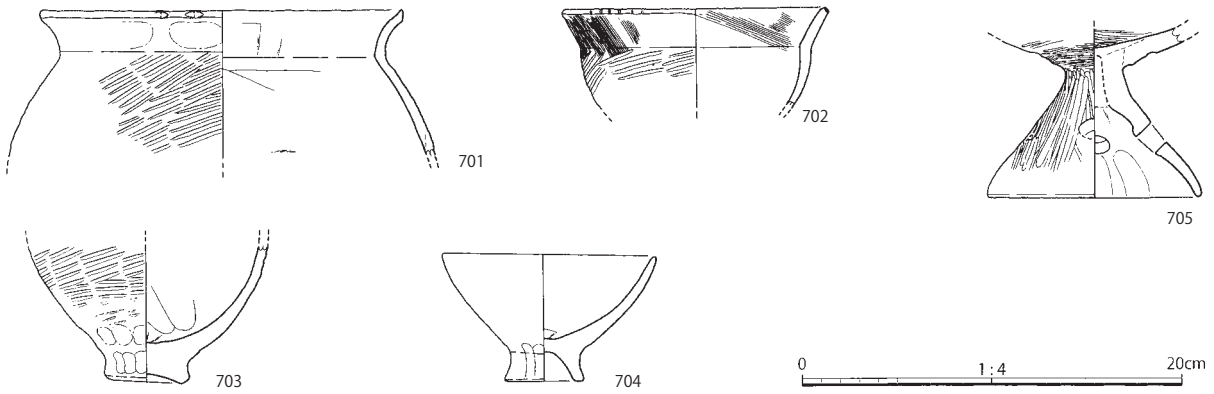


図 137 遺構 1942 出土遺物

東部も調査区外に延びているため全容については判然としないが、一辺 3.2 mほどの隅丸方形を呈する竪穴建物になるものと考えている。後世にかなり削平を受けたもようで、遺存状況は悪く、深さ 15cm ほどであった。壁溝は最も残りのよい部分で幅 15cm、深さ 15cm 前後を測る。壁溝を２条検出していることから最低１回は造り替えがなされていたものと判断される。主柱穴は北東部を除く３箇所で検出した遺構 802・808・813 が該当するものと考えられる。個々の大きさは径 30cm、深さ 50cm 前後を測る。炉跡については、検出できなかった。なお、この竪穴建物については、床面直上で焼土や炭がかなりの範囲で堆積していたことから焼失住居の可能性が高い。

出土遺物がまったくなく、時期を決定する材料を欠いているが、平面プランの形状から弥生時代後期以降のもので、古墳時代に入る可能性もあろう。

遺構 1942（竪穴建物）（図 136・137）

調査区の南側で検出した遺構である。この付近（小区画の 11cd・12cd）は中近世の遺構が密集する箇所であるが、これらの時期の遺物に混じって弥生時代後期と思われる土器片が多く出土する傾向があった。このため再三に渡って遺構精査を試みた結果、わずかに竪穴住居と思われる遺構のラインを検出した。これを基に提示したのが図 136 の遺構図である。円形住居として推定復元しているが、後述する遺物の時期から隅丸方形の可能性も否定しがたい。それらを断った上で、以下詳述する。

径 4.8 mほどの円形状を呈するもので、後世にかなり削平を受けており深さは 15cm ほどと浅い。床面で 1948・1968 としている土坑や径 10cm ～ 30cm を測るピットを検出しているが、壁溝や炉跡については検出できなかった。

出土遺物には甕や鉢、高坏などがある。(701 ～ 704) の４点はいずれも床面からの出土である。このうち甕 (701) は口縁部が「く」の字状に外反し、体部には斜め横方向の粗いタタキが施されている。(702) の鉢は口を大きく外側に開くもので、底部を欠いているがおそらく高台状の平らな底部が付くものと思われる。口縁部は縦方向の細かなハケ調整の後ナデを施し、体部は斜め方向の粗いタタキを施す。小型の鉢のうち (703) は体部上半に粗いタタキ目、体部下半から高台部にかけてナデ及び指オサエが顕著である。(704) の鉢は全体にいずれも丁寧なナデ調整が施されている。いずれも色調は淡い赤褐色を呈するもので、器形も含めて紀ノ川流域で出土するものと違和感がない。

一方 (705) の高坏の脚部は、かすかに丸い膨らみを持つもので、東海の影響を受けたものと思われる。脚部は縦方向の細かなミガキ調整が施され、平滑に仕上げられている。また、脚部中位に径 1.5cm の円形の透かし孔が均等に４箇所穿たれている。この高坏については、建物内の遺構 1968 とした土坑からの出土品である。

以上の土器の年代については、いずれも弥生時代後期末ないし庄内の古段階にかけての時期のものと判断している。

なお、この時期の竪穴建物が確認されている遺跡としては、当遺跡から東へ 800 mほどの所に所在する阿須賀神社遺跡が知られている。古く昭和 52 年に発掘調査されたものであるが、隅丸方形に近い円形の竪穴建物に伴ってこの手の甕や鉢などの出土が知られている。

その他遺構の出土遺物１（図 138 ～ 140）

第２遺構面で検出されたその他の土坑、溝状遺構からも相当量の遺物が出土している。個々の個別遺構図については割愛せざるを得なかったが、第２遺構面　遺構平面図（図 28）にはその番号を付して位置等の情報を掲載している。遺物については参考資料として以下に掲載する。

概ね 12 世紀後半～ 16 世紀前半の中世の土器が主体であるが、これらに混じって弥生土器などの古い時期のものや一部近世初めの土器も出土している。個々の詳細な内容については観察表を参考にされたい。

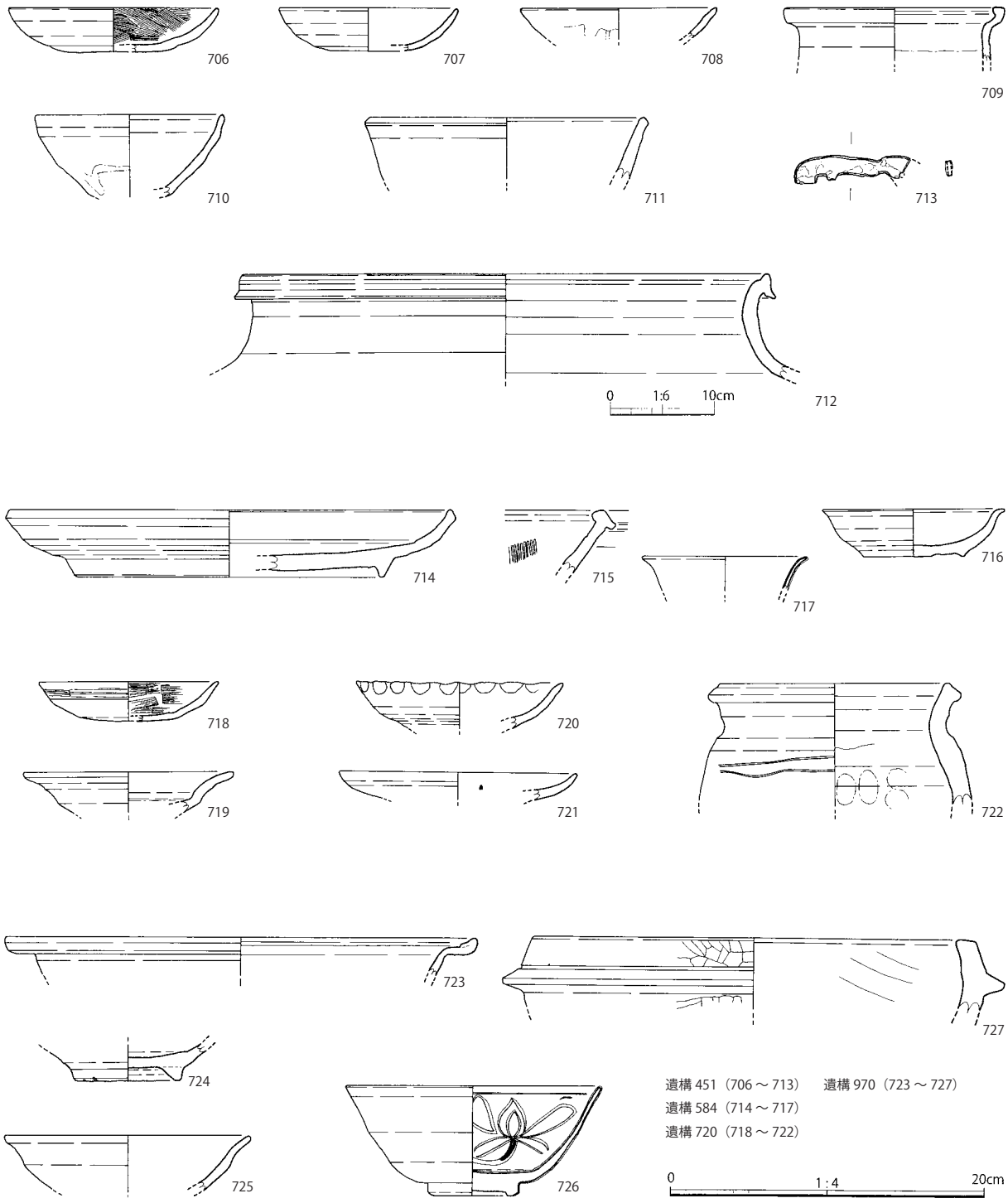


図 138　その他遺構の出土遺物１（１）

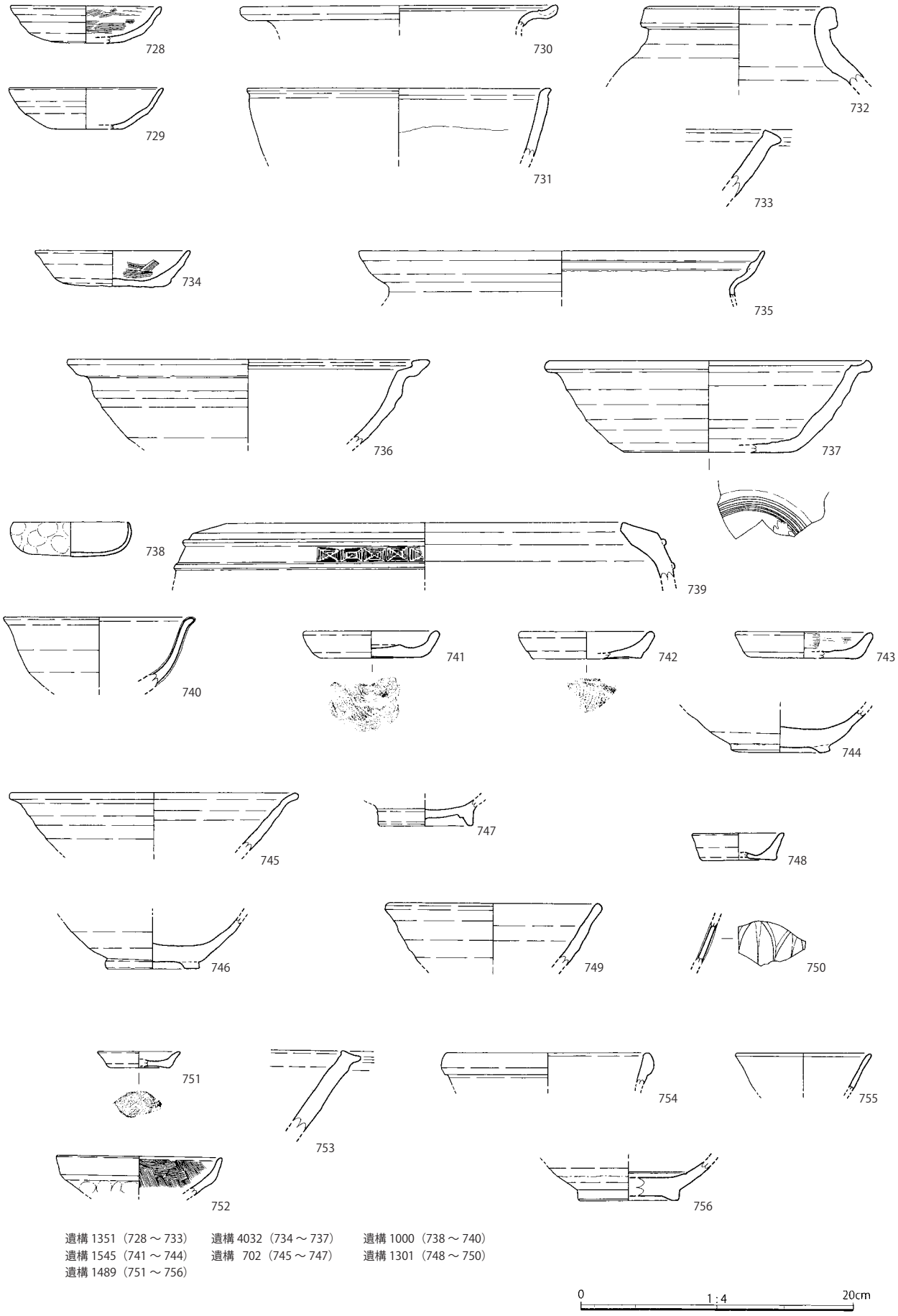


図 139　その他遺構の出土遺物１（２）

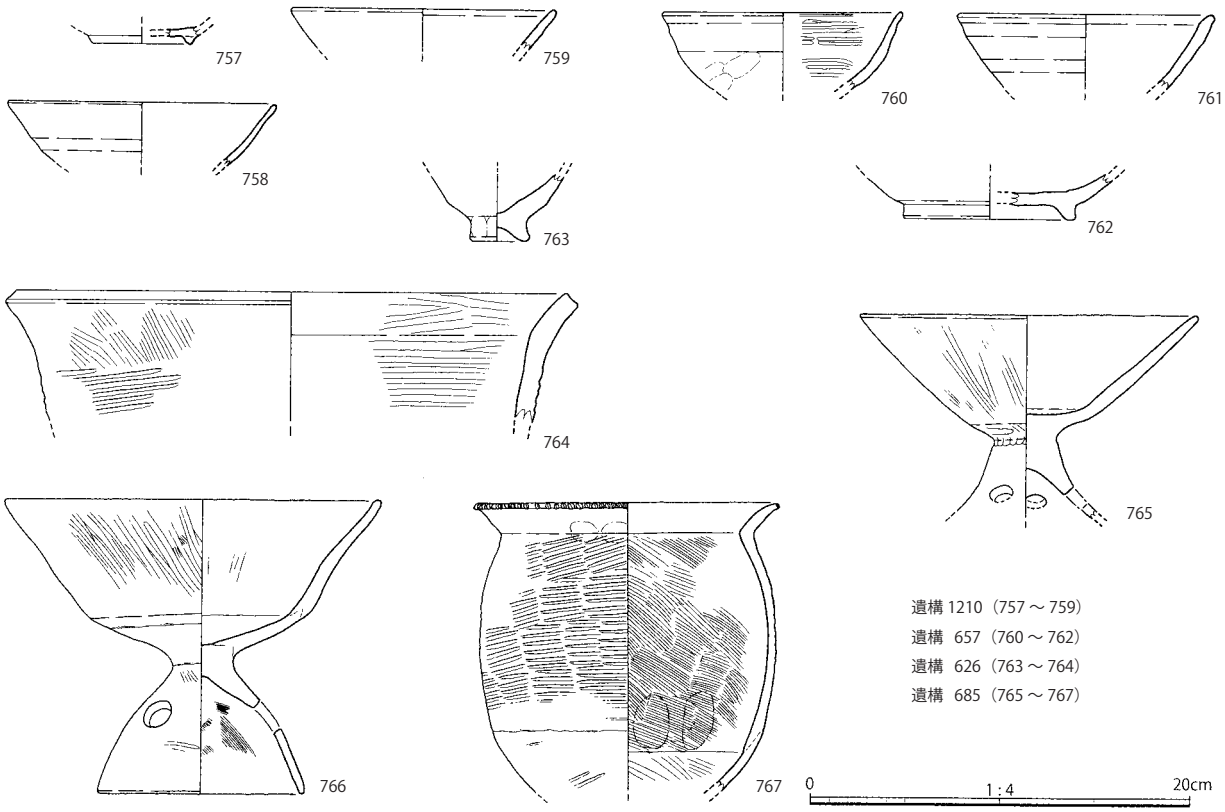


図 140　その他遺構の出土遺物１（３）

その他遺構の出土遺物２（図 141 ～ 143）

第２遺構面で検出された群集する柱穴等からも相当量の遺物が出土している。紙面の関係で第

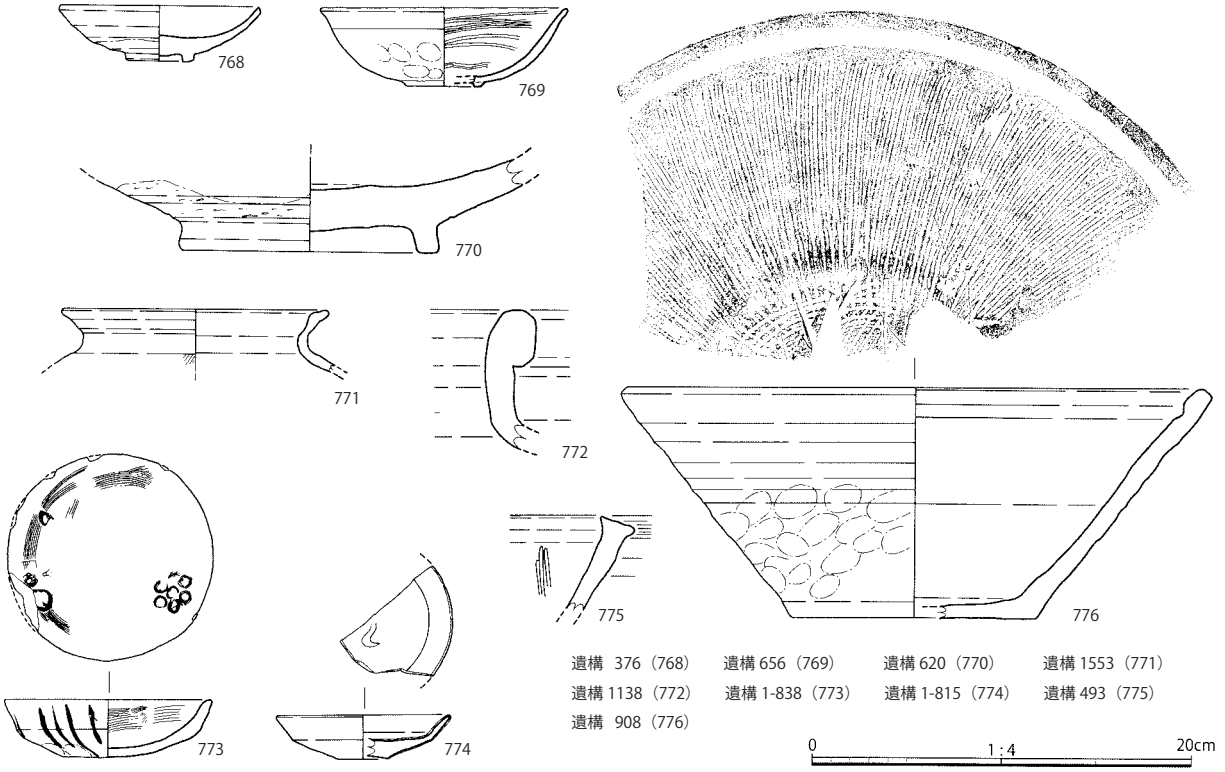
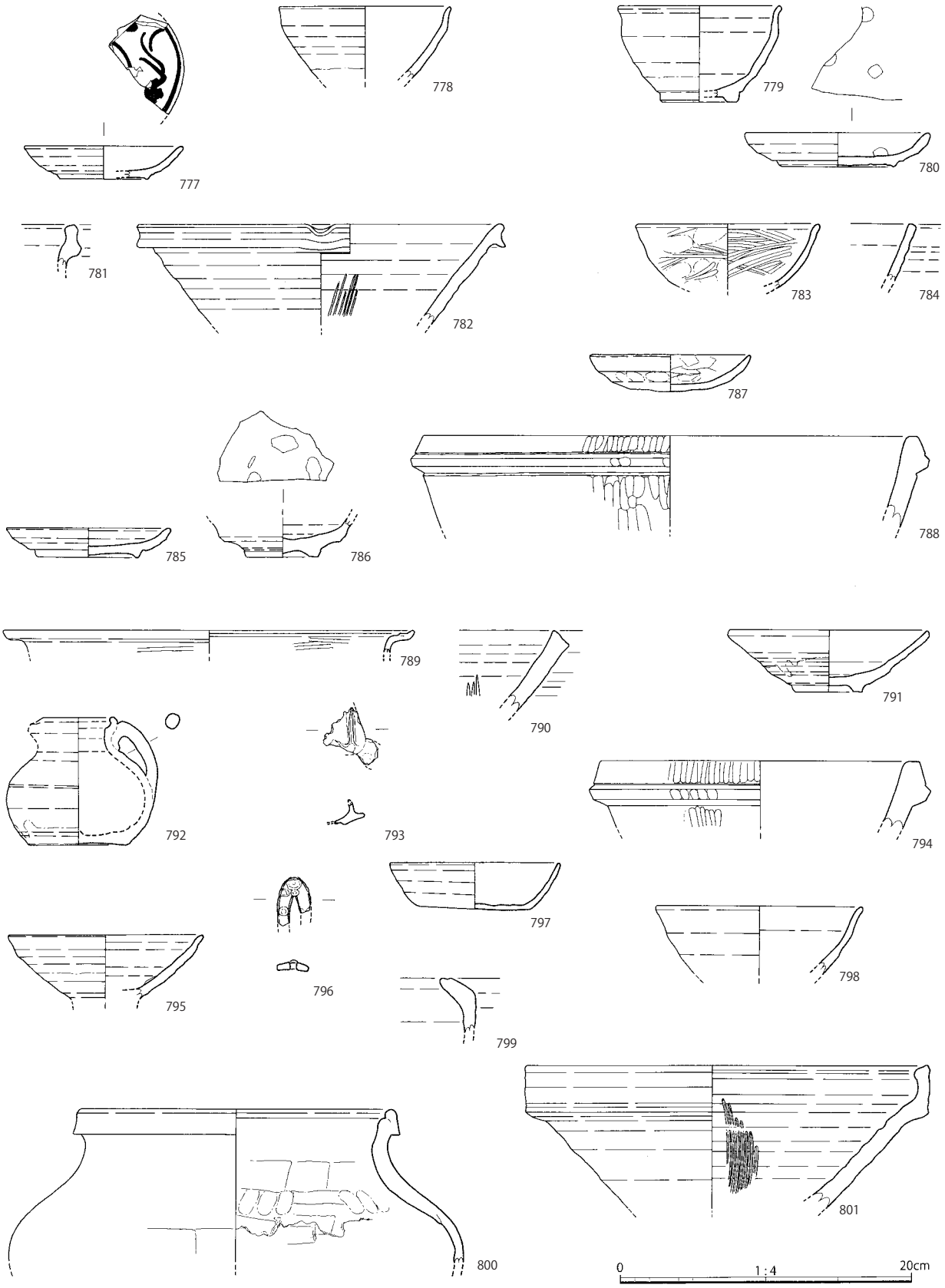


図 141　その他遺構の出土遺物２（１）



遺構 393（777・778）　遺構 1493（779・780）　遺構 781（781・782）　遺構 361（783・784）　遺構 1494（785・786）
遺構 1682（787・788）　遺構 4033（789・790）　遺構 509（791）　遺構 1492（792）　遺構 914（793）
遺構 1790（794）　遺構 383（795）　遺構 1562（796）　遺構 1302（797）　遺構 602（798）
遺構 463（799）　遺構 663（800）　遺構 823（801）

図 142　その他遺構の出土遺物２（２）

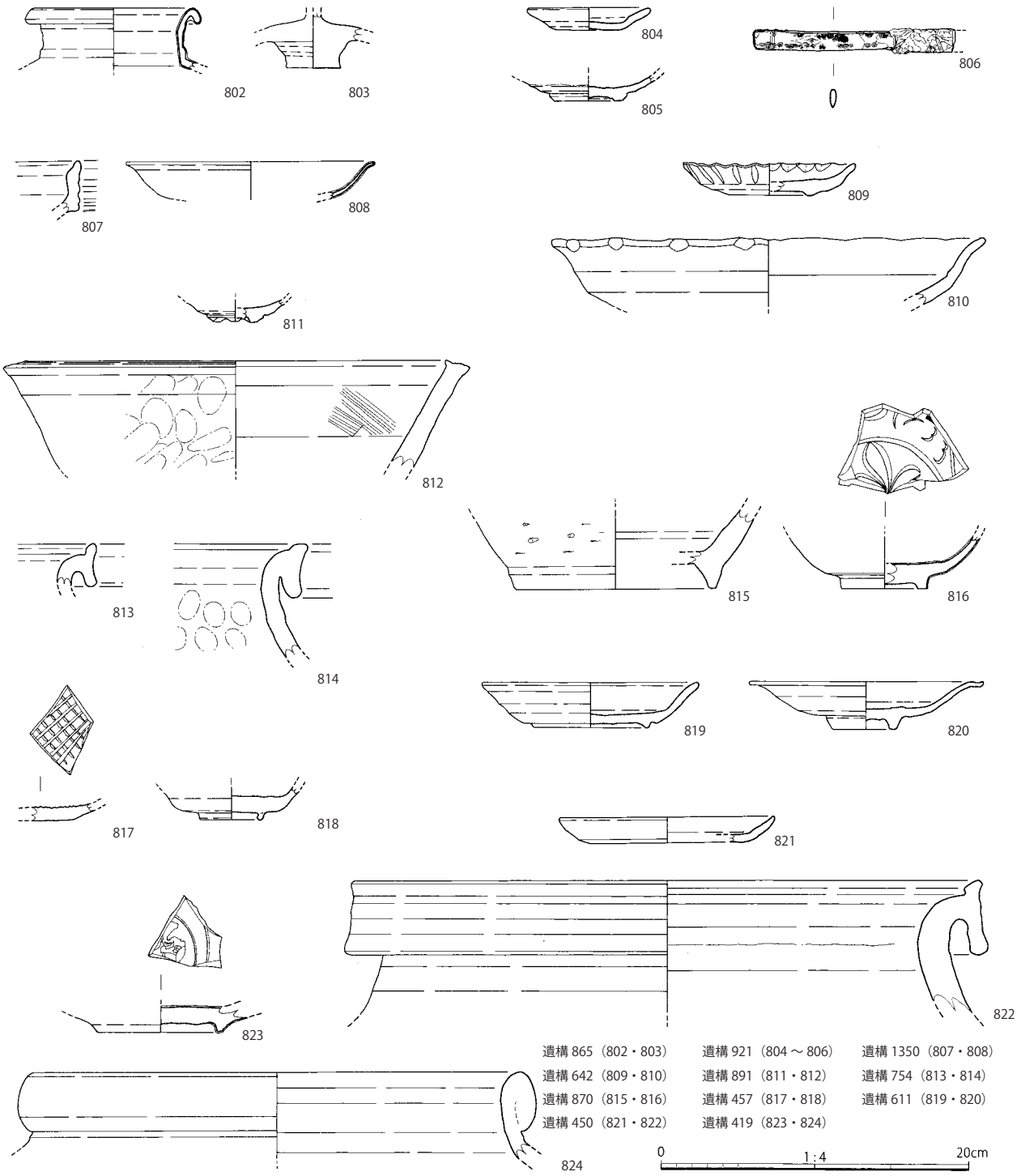


図 143　その他遺構の出土遺物２（３）

２遺構面　遺構平面図には遺構番号を付していないが、現地で作成した記録図面とは照合可能である。以下、これらの遺物についても参考資料として掲載する。

第４節　第３遺構面の遺構と遺物

第１次調査の段階で中世を主体とする第２遺構面の下に縄文土器を含む包含層と縄文時代の遺構面が一部確認されていた。このため第２次調査においてもこの想定を基に、第２遺構面の調査が終わった段階でさらに掘り下げ、遺構の精査を行った。結果的には、第３遺構面と認識できる面は調査区の東端付近でわずかに確認できたのみで、調査区全域に広がるものではないことが判明した。

遺構の検出状況や、包含層からの縄文土器の出土状況などを勘案すれば、この時期の遺跡は調査区の東側のごく一部にかけて展開していた可能性が高いものと判断されよう。出土する遺物の量や範囲から、集落ではなくキャンプサイト的な可能性も考えられよう。

遺構を検出することができたのは、下図にも示したように１次調査区の北西部、X=−251,725 m、Y=−990 mを中心とする付近である。住居など具体的な生活を裏付ける遺構は検出していないが、楕円形状の土坑などを検出することができた。

また、この付近を中心として包含層から縄文時代中期中葉〜後期中葉と思われる遺物が出土している。以下、これらの遺構及び遺物について詳述しておく。

図144　第３遺構面　遺構平面図

包含層出土の遺物(図 145　図版 41-1)

包含層からは縄文時代中期から後期にかけての土器が出土している。このうち (825) の土器は口径 30cm ほどのやや器高の低い深鉢となるものと思われる。体部上半は沈線が施されているが、頸部下にわずかに縄文が認められることから元住吉Ⅰないし一乗寺Kなどと並行する後期中葉の土器と思われる。また、この土器の胎土には微量ながら長石が含まれることや焼成が堅密で赤褐色を呈するなど他の土器と異なっており、搬入品の可能性が高い。なお縄文の撚りは RL である。(826) は深鉢の口縁部で、肥厚させた口縁部に Lr の縄文を施している。後期初め頃のものであろう。(827) の土器は、大きな波状口縁となる深鉢で、口縁部を内側に折り曲げ、その部分に文様を施している。磨り消し縄文が認められるもので、後期前葉に帰属する時期のものと考えられよう。(828) も深鉢の口縁部に該当する。口縁部下に平行する二条の沈線や斜め方向の沈線を施すもので、一部刺突文が施されている。これについても後期前葉に位置づけられる土器である。(829) の土器は口縁部が波状文となる深鉢であり、粘土の貼り付けによる突帯が付くもので、小破片のため詳細は不明だが中期後葉の可能性が考えられる。(829) の土器は沈線で囲まれた中に円形の刺突文が施されたもので、後期前葉のものである。以上の包含層出土土器を概括すれば、時期的には縄文時代中期中葉～後期前葉とかなりの時期幅が看取される。また (825) の土器を除けば、取り立てて他地域の影響を顕著に認める状況にはないものと思われる。

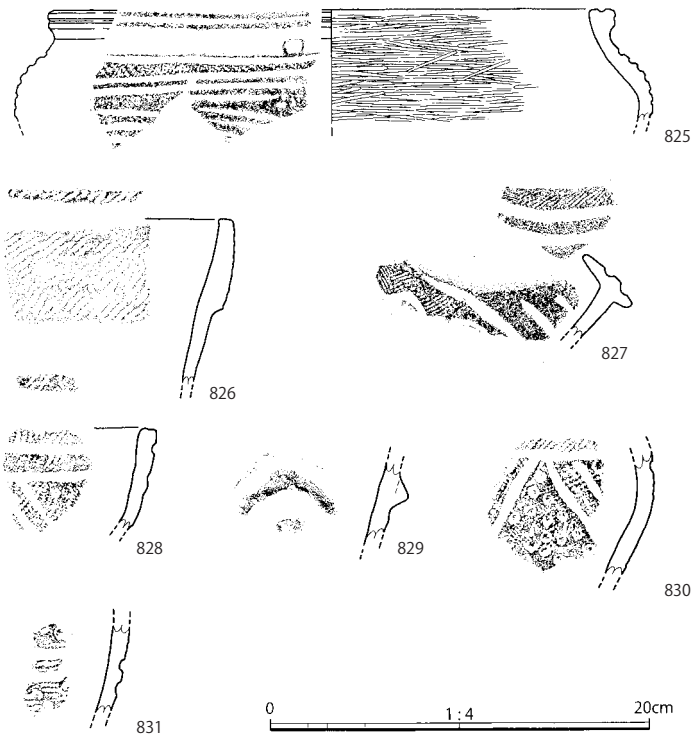
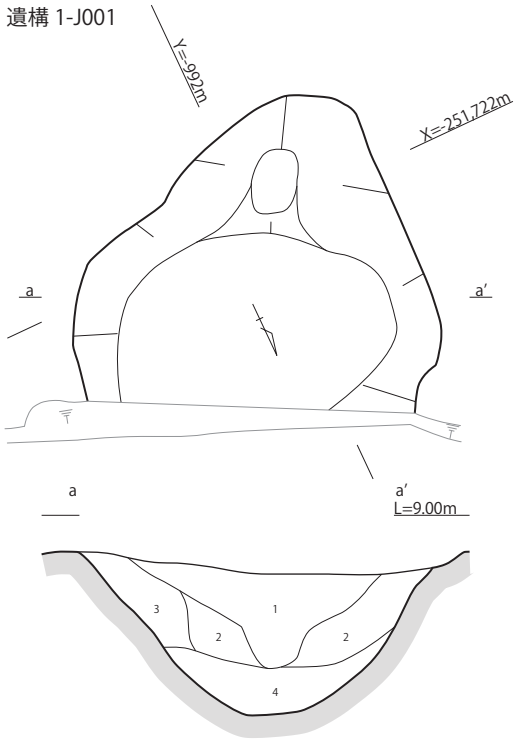


図 145　縄文時代包含層出土遺物

遺構 1-J-001（図 146・149　図版 41-2）

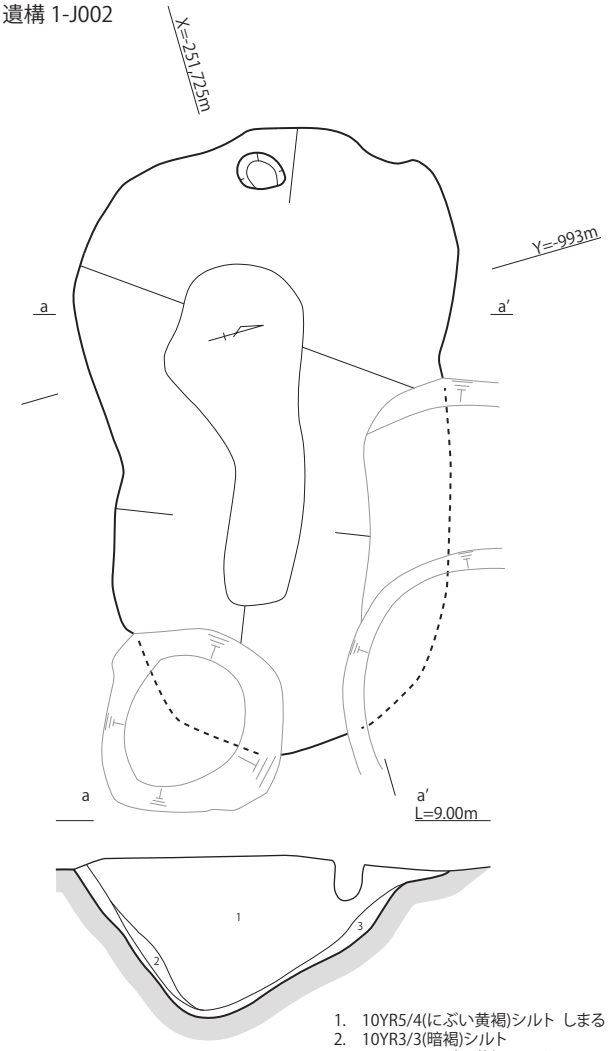
北側が撹乱を受けているため、全体の形状については不明であるが短径 1.9 m、長径 2.0 m以上の不正形な楕円形状を呈するものと思われる。深さは、最深部で 0.7 mほどを測る。埋土は、上層は良く締まったにぶい黄褐色のシルトで、下層には黒褐色シルトの堆積が見られた。遺物は下層からの出土である。(832) の土器は、前述した (827) と同様に大きな波状口縁となる深鉢で、口縁部を内側に折り曲げ、その部分に文様を施している。後期でも前葉から中葉にかけての時期のものであろう。一方、深鉢の口縁部である (833) の土器は中期中葉～後葉に位置づけられるものと思われ、同じ遺構出土であるにもかかわらずかなりの時期差が認められる。

遺構 1-J001



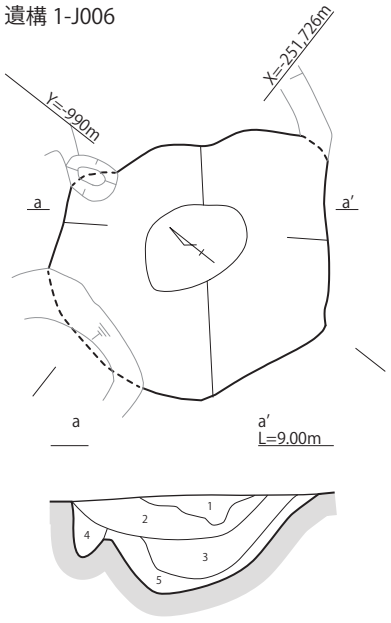
1. 10YR5/3(にぶい黄褐)シルト しまる
2. 10YR5/4(にぶい黄褐)シルト しまる
3. 10YR4/2(灰黄褐)細砂混シルト
4. 10YR3/2(黒褐)シルト

遺構 1-J002



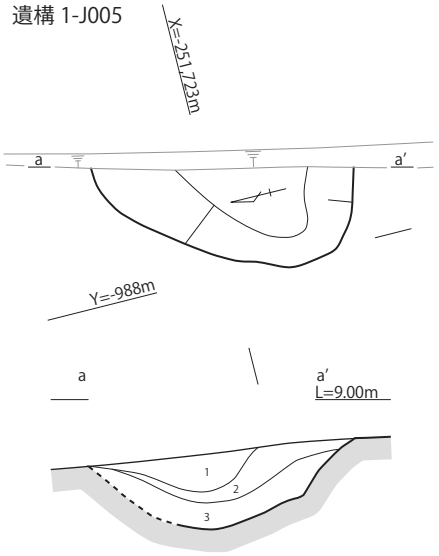
1. 10YR5/4(にぶい黄褐)シルト しまる
2. 10YR3/3(暗褐)シルト
3. 10YR4/3(にぶい黄褐)シルト

遺構 1-J006



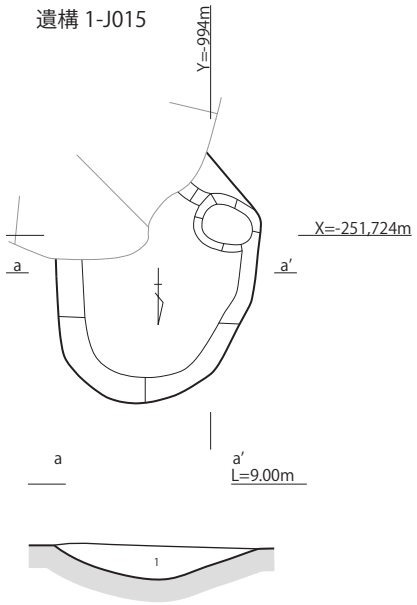
1. 10YR5/3(にぶい黄褐)シルト しまり大
2. 10YR4/4(褐)シルト
3. 10YR3/3(暗褐)シルト 土器多い
4. 10YR4/2(にぶい黄褐)細砂混シルト
5. 10YR4/3(にぶい黄褐)細砂混シルト

遺構 1-J005



1. 10YR4/3(にぶい黄褐)シルト
2. 10YR4/2(灰黄褐)シルト
3. 10YR3/2(黒褐)中砂細砂混シルト

遺構 1-J015



1. 10YR4/4(褐)細砂混シルト

図146　遺構1-J001・1-J002・1-J006・1-J005・1-J015

0　1:40　1m

遺構 1-J-002（図 146・149）

東側の大半が撹乱を受けているが、推定復元で短径 1.7 m、長径 3.2 mを測る楕円形状の土坑である。深さは最深部で 0.9 mを測る。埋土は大部分が良く締まったにぶい黄褐色のシルトであった。遺物は 1 点で中期後葉段階と思われる深鉢の破片（834）が出土している。

遺構 1-J-003（図 149）

径 0.5 m足らずの円形状の土坑である。この遺構からは 3 点の土器が出土している。このうち

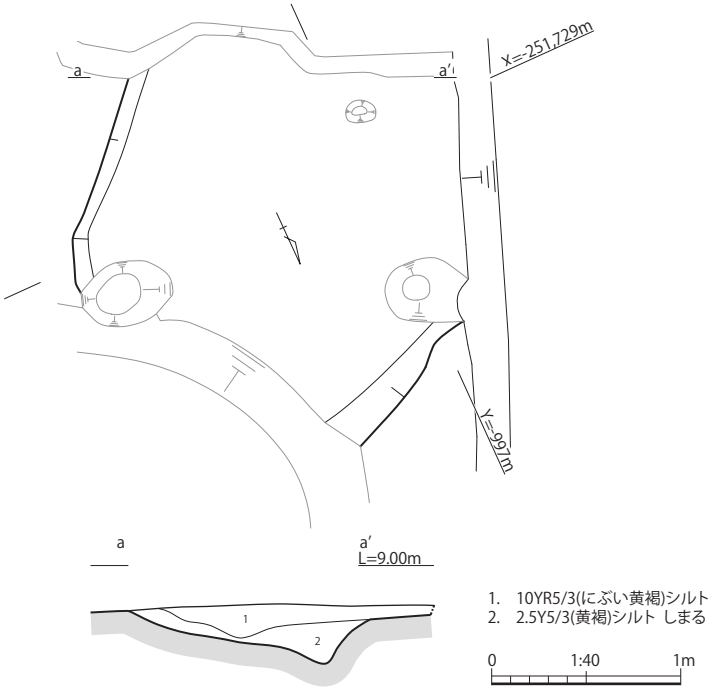


図147　遺構1-J009

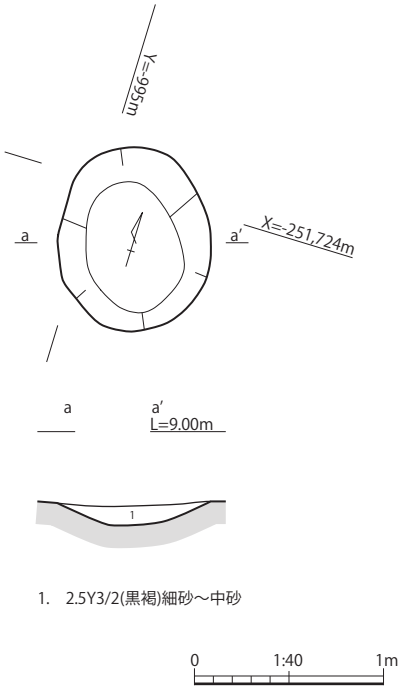


図148　遺構1-J018

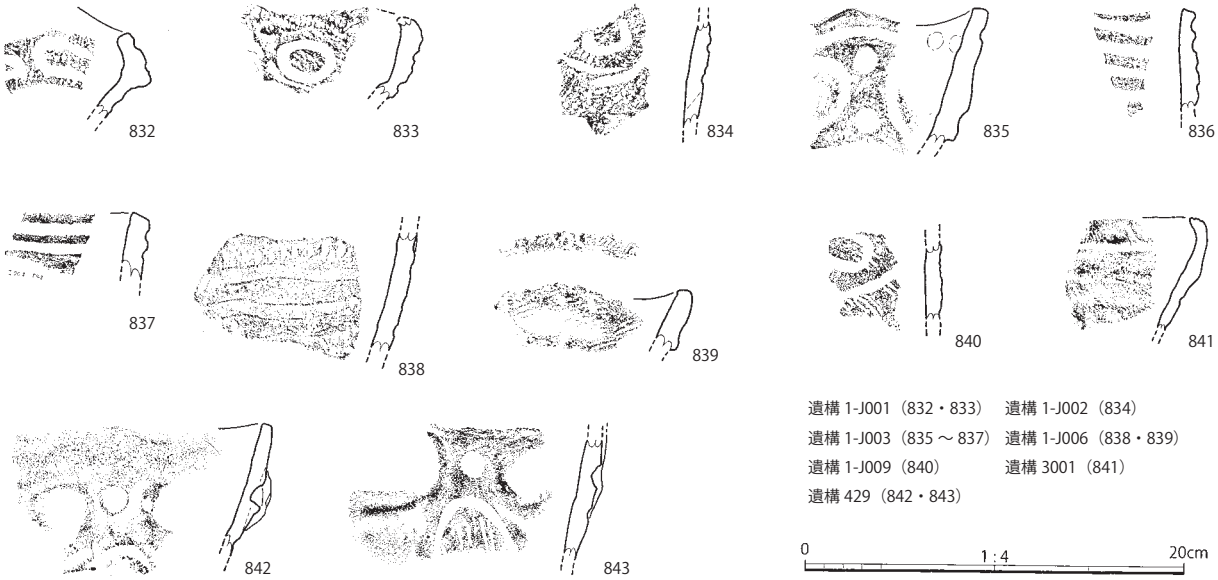


図 149　遺構 1-J001・1-J002・1-J003・1-J006・1-J009・3001・429 出土遺物

(835) は中期後葉段階と思われる深鉢の波状口縁部である。中心飾りと思われる箇所にやや大きな刺突文が施されている。(836) 及び (837) の土器はいずれも深鉢の口縁部に該当する破片で、太い沈線が口縁部と平行に施されている。中期末段階まで下る可能性があろう。

遺構 1-J-005（図 146）

全体の形状は不明であるが、径 1.4 m以上の不正形な土坑と思われる。深さは最深部で 0.4 m を測る。埋土は下層に黒褐色の砂混じりのシルトが堆積しており、この中から縄文土器と思われる微細な破片が出土しているが、時期については不明である。

遺構 1-J-006（図 146・149　図版 41-3）

径 1.2 mほどを測る円形状の土坑である。深さは最深部で 0.5 mを測る。埋土はやや複雑な堆積を成しているが、断面土層図の３層とした暗褐色シルトから縄文土器片が出土した。このうち (838) は深鉢の口縁部近くの破片と思われるもので、やや太目の粗い二条の沈線の上にＤ形の爪形文が施されており、中期末ぐらいの土器と考えられる。 (839) は小さく波打つ波状口縁の深鉢で、中期後葉段階のものである。

遺構 1-J-009（図 147・149）

北西部及び南側が撹乱を受けていることから全体の形状は不明であるが、深さは 0.3 mほどと浅いものの長径２m 以上の大きな土坑と思われる。縄文土器 (840) が出土しており、この土器については前述の (833) や (839) と同じタイプの施文であることから中期後葉段階の土器と考えられよう。

遺構 1-J-015（図 146）

南東部が撹乱により削平されているが、短径１m、長径 1.5 mほどの楕円形を呈する土坑になるものと思われる。深さは 20cm 足らずと浅い。縄文土器と思われる微細片が出土しているが時期は不明である。

遺構 1-J-018（図 148）

短径 0.8 m、長径 0.95 mを測る楕円形の土坑である。深さは 10cm ほどときわめて浅い。縄文土器は出土していないが、第 3 遺構面で検出したものであることから、この時期の遺構と認識した。

その他遺構の出土遺物（図 149）

なお、(841 ～ 843) として掲示した縄文土器は、それぞれ第 2 遺構面で検出した中世の遺構 3001 と遺構 429 から出土したものである。あきらかに混入品ではあるが、大振りの破片であり第３面の時期を知りえる資料として掲載した。

(841) は口縁部をやや肥厚させ、その下に沈線を施したもので、その間に縄文を施している。後期初め頃のものと思われる。(842) の突帯は粘土紐の貼り付けによる。また (843) は中心飾りの沈線で囲まれた中を縦の沈線で埋めている。いずれも中期後葉段階の深鉢の口縁部である。

第６章　ま　と　め

前章において調査の成果を書き述べてきたが、本章においてはこれらをまとめて考察としたい。当該遺跡については、すでに述べてきたように遺跡名として「新宮城下町遺跡」と冠されているように近世の城下町遺跡であることは自明のことである。

ただ、今回の発掘調査においては、それらに先行する縄文時代や中世の遺構・遺物が確認され、当地域の重層的な歴史を知る貴重な資料を得ることができた。とりわけ中世（鎌倉～室町時代）の遺構・遺物が圧倒的に多く、この時期の遺跡の性格としては川湊であったことが想定される状況である。こうした事実を基にすれば、遺跡としての重要性、一義的な意味合いは中世にあると言っても過言ではない。こうした前提を踏まえて、本稿では他の時代に触れつつも、中世を中心として考察しておきたい。なお、ここでは先行して実施された１次発掘調査の成果も援用する。

第１節　遺跡全体としての消長

新宮城下町遺跡の遺跡としての黎明期は縄文時代中期まで遡る。今回の調査においては、縄文時代中期中葉から後葉にかけての土器を中心に後期中葉に及ぶ土器片が出土している。遺構としては、いくつかの不正形な土坑を検出しただけであるが、これまで遺物の確認のみであった新宮市内においては大きな成果と言えよう。ただ、縄文土器の出土する範囲は調査区内でも限られており、集落が展開していたような様相を呈するものではない。立地は自然堤防上の川に近い場所に相当しており、キャンプサイト的な可能性も考えられよう。

その後、弥生時代前期及び中期は遺物をまったく欠いており、空白期を想定せざるを得ない状況であった。次に人々の営みを確認できるのは弥生時代後期以降、それも後期末に近い段階から古墳時代中頃にかけてである。この時期の遺物は、縄文時代に比べると量的には多いが、大きな集落や施設を想定できる状況ではない。実際に検出した住居跡も数棟にとどまっている。

古墳時代後期から飛鳥・奈良、さらには平安時代の前・中期の遺物がまったく出土しておらず、この間の 500 年ほどもやはり空白期と考えられる。

遺跡が活況を呈し始めるのは平安時代の後期に入ってからである。とりわけ平安時代末から鎌

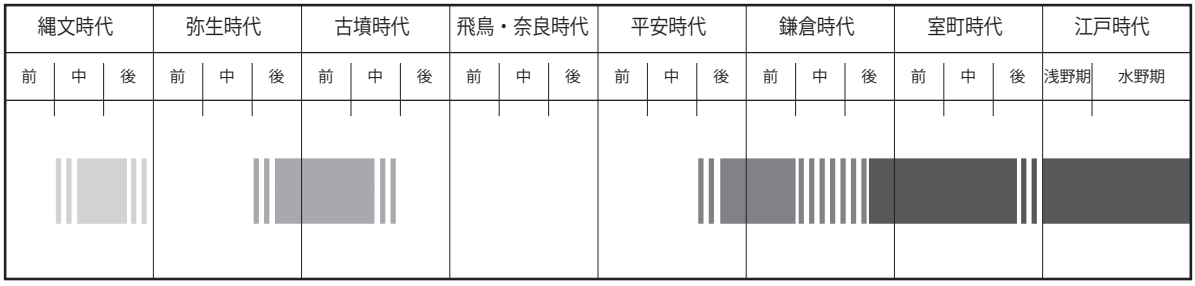


表２　新宮城下町遺跡消長概念表

倉時代はじめにかけて遺物の出土量が増えており、この時期にひとつのピークが想定される状況であった。遺物としては、渥美・常滑の壺・甕類のほか渥美・尾張の第５形式を主体とする山茶碗などが該当する。

その後鎌倉時代中期から後期にかけて、出土遺物量は漸次減少化が認められる。空白時期ではないものの、遺跡としての活況はさほど認められない時期と言えようか。

再び遺跡として活況を呈し始めるのは、鎌倉時代末から室町時代にかけてのことである。この時期から出土遺物は増加傾向をみせ、室町時代中頃（15 世紀前半～ 16 世紀初め）にかけて第二のピークを迎える。この時期の遺物としては、常滑の壷や甕、備前の擂鉢、古瀬戸後Ⅲ期前後を主体とする瀬戸の碗・皿類などが該当する。

16 世紀に入ると遺物量は再び減り始めるが、常滑の甕のほか備前の壷・甕や中国製の染付製品などが一定量みられることから、遺跡内での活動は続けられていたものと考えられる。

17 世紀初頭が当遺跡における大きな変革期である。具体的には関ヶ原の戦い後、紀州藩主となった浅野幸長の重臣である浅野忠吉が慶長六年（1601）に新宮城を築きはじめる。いわば城下町としての起点である。その後元和五年、浅野氏が広島に転封になるに伴い、新宮には紀州藩主であった徳川頼宣の付家老・水野重仲が入る。したがって城下町としては、初期の 20 年足らずの浅野家時代とその後幕末までつづく水野家の時代があることになる。

前者の時期の遺物としては志野や織部、さらには初期の唐津などが該当し、これらは一定量出土しており、城下町として機能しはじめていたことが窺える。後者の期間は長く、伊万里の染付製品を筆頭に日常雑器が大量に出土しており、城下町としての殷賑を窺うには十分な状況であった。

ただ、昭和 21 年の震災による被害やその後の開発等もあって、近世の遺構の遺存状況は悪く、武家屋敷地内の構造や変遷を辿るには至っていない。そうした中でも屋敷地を区画する大規模な石垣や絵図に描かれた道を検出するなど当時の城下町の一端を窺える資料を得るなど一定の成果を得ている。

以上、大雑把に遺跡の消長を述べてきたが、これらを概念図として提示したのが表２である。今一度確認しておけば、大きな空白期としては弥生時代前・中期と古墳時代後期～平安時代後期にかけての２時期が想定される。逆に活況を呈するのは古代末を含む中世全般と城下町として機能していた近世の２時期である。

第２節　新宮城下町遺跡における中世の時期区分

中世全般についても遺物の出土量や遺構のあり方などから遺跡としての細かな消長が看取できる。ここでは新宮城下町遺跡の中世の時期区分を提示し、その時期の特徴及び関連する事象、時代背景を述べておく。

【Ⅰ期】12 世紀後半～ 13 世紀後半

12 世紀の後半から遺物の量が増えはじめる。この期の遺構としては大型土坑である遺構 12 及

び遺構 3075 を指標とする遺物群で、渥美や常滑の壷・甕のほか渥美及び尾張の山茶碗、中国製の白磁などがある。土師器皿は底部糸切り技法のものも見られ、紀ノ川流域のものと違和感がない。遺構としては 1 次発掘調査で検出された大型の掘立柱建物のほか大型土坑と仮称した深い井戸状の土坑が多い。

この時期は鳥羽上皇をはじめとする熊野詣での隆盛期にあたっており、熊野三山を知行する熊野別当の全盛期である。新宮では、その熊野別当家や鳥居禅尼が活躍した時期に相当する。鳥居禅尼は、源為義の娘で、新宮十郎（源行家）は、同母弟。源頼朝は甥にあたる。夫であった熊野別当行範の死後、その息子であった行快・範命とともに力を振るったとされる。

なお、この時期のうち 13 世紀中頃以降は遺物量が少なくなる。その背景には、承久の乱（1221）時に熊野勢は上皇方についたため、勢力を失墜し、幕府との関係が薄れたことも想定されよう。

【Ⅱ期】13 世紀末～ 14 世後半

13 世紀末から再び遺物量は増え始める。この時期の指標としては、地下式倉庫である遺構 760 及び遺構 1200 がある。出土遺物では、渥美の製品が消え、常滑が圧倒的に多い。備前は擂鉢がわずかに確認できる程度である。古瀬戸の碗や皿などの日常雑器は本格的に入ってきていない段階と言えよう。

竪穴建物の検出例が増えはじめるのもこの時期である。これらは地下式の貯蔵施設と考えられるものであり、川に近いことから水運による物資を貯蔵するためのものと判断した。

時代背景としては、鎌倉幕府の滅亡から室町幕府の成立期にあたっている。この動乱期の中で熊野別当家は廃絶し、以後は有力社家（上綱など）が支配する体制へと変わっていったとされる。

【Ⅲ期】14 世紀末～ 16 世紀前半

遺物量が増大する時期であり、その量からも遺跡としてもっとも活況を呈していたと考えられる。遺構の展開する範囲から 15 世紀中頃を境に前・後 2 期に細分される。前期の遺構としては遺構 415 及び遺構 416 などが挙げられる。これらは総じて自然堤防上の高い場所に位置している。これに比べ後期に帰属するものとしては遺構 4003 及び遺構 4004 など川に近い一段下がった場所に位置している。遺物について言えば、土師器の皿や鍋では南伊勢の製品が目立つ。また、この時期から古瀬戸の碗や皿、鉢などが普遍的に入ってくる。さらに備前についてもこの時期から増加傾向を見せる。

時代背景としては、この時期新宮では、七上綱と言われる有力者による合議制が行われていたとされる。その中のひとりであった宮崎氏が丹鶴山に館を構えていたとも伝えられている。

【Ⅳ期】16 世中頃～ 16 世紀後半

16 世紀中頃以降は、出土する遺物の量が少なくなる。このことから湊として機能が低下していたか廃絶していた可能性も考えられる。ただ、このことは個別的な事象ではなく、全国的にみても湊遺跡は 15 世紀中頃から 16 世紀にかけて廃絶している例が多く、全国的な流通ネットワークの再編に絡む事象として捉えるべきことかもしれない。

またこの時期、新宮地域では堀内氏が台頭する。堀内氏は速玉大社南側の山裾付近に居を構えたと言われており、これに伴って当該地の重要度が相対的に低下していったものと考えられる。

第３節　遺跡内における中世遺物の時期別分布状況

ここでは、中世の中で時期による遺物の分布状況の違いを追って見たい。より広範囲を対象とする必要があることから、該当資料としては、第１次発掘調査の成果も援用している。大きくは中世の前期（12・13 世紀）と後期（15・16 世紀）に分ける。対象とする遺物としては、前期に帰属するものとして口禿や口縁端部が玉縁状をなす白磁の碗・皿と瓦器碗を、後期のものとしては、青磁の線描の蓮弁文碗や稜花の皿、白磁では六角の坏や割り高台となる軟質の皿を用いている。方法としては、遺物の取り上げ単位である４ｍの方眼区画から、それらの遺物の出土点数を換算して濃淡で表示した。

下に掲示した図 150～図 153 がその結果であるが、顕著な片寄りは見られないものの以下のような傾向が窺われる。

前期についていえば、調査地の南側でかつ東側に多い。とりわけ瓦器の分布はこのことを顕著に示す。白磁については、２次調査の北側、川に近い箇所でも認められるが、このことは製品の希少性が高く、伝世された結果の可能性がある。一方後期についてみれば、青磁・白磁とも調査地の北側、川に近い側での分布密度が高くなっている。

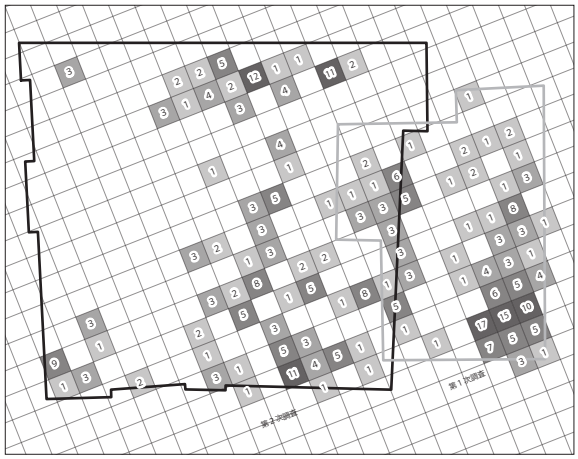


図150　12･13世紀の白磁分布状況

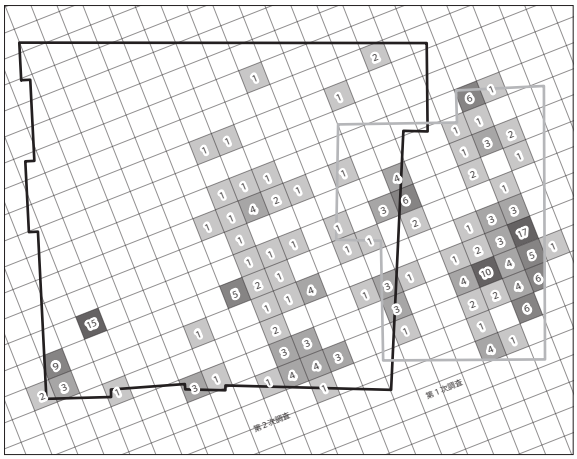


図151　13世紀の瓦器分布状況

図152　14･15世紀の青磁分布状況

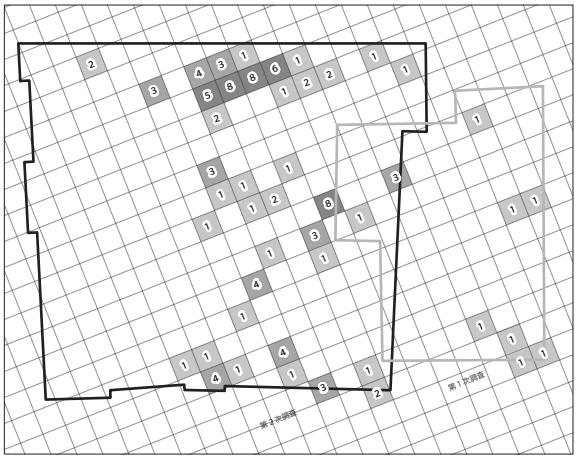


図153　15世紀の白磁分布状況

以上のことを要約すれば、前期の段階では調査地の東側に遺跡の中心が認められ、川側には展開していない。後期の段階では、調査地全体に広がるとともに川側の一段低い場所にも展開していた様が窺えると言えよう。

第４節　主要遺構の時期及び特性

前章の調査成果の中で、中世の主要遺構については個々に取り上げたが、ここではそのうちの大型土坑及び竪穴建物（地下式倉庫）について、その時期や特性についてまとめておきたい。

ａ．大型土坑

２次発掘調査においては、18 基の大型土坑を検出している。当初、この種の土坑から出土する遺物は山茶碗を主体とする 13 世紀前半までの遺物が多いことから、中世でも前期に帰属する遺構との認識をもった。しかしながら出土遺物の整理段階で詳細な検討を行った結果、中世後期のものも少なからずあることが判明した。

それらのものを一覧表として掲示したのが表３である。時期別に見ると圧倒的にⅠ期に帰属するものが 11 基と多く、全体の 60％を越えるが、Ⅲ期のものが５期、Ⅱ期のものも２基を数える。したがって、ある一定の時期に限られる遺構ではなく、中世を通して何がしかの機能を担った遺構と言えるであろう。

ただし、この遺構については、具体的な用途はわかっていない。当初、井戸の可能性を考えたが、井戸枠の痕跡がまったく認められない。砂地である当該地において素掘りの井戸は考えがたく、実際、同時期の隣町・那智勝浦町に所在する川関遺跡では中世前期は木枠、中世後期になると石積みの井戸枠が普遍的に存在していることが知られている。

番号	遺構番号	規模 ()は推定（単位：m）			廃絶時期	時期区分
		長軸(長径)	幅(短径)	深さ		
1	1300	2.00	2.00	1.30	13c前半	Ⅰ
2	1487	2.50	2.30	1.70	13c前半	Ⅰ
3	1329	1.30	1.90	1.9	13c中頃	Ⅰ
4	730	1.30	1.10	2.1	13ｃ前半	Ⅰ
5	994	1.05	1.05	1.70	13ｃ初め～前半	Ⅰ
6	1729	1.05	1.00	1.25	15c前半	Ⅲ
7	899	1.30	1.30	2.25	14c前半	Ⅱ
8	900	1.15	1.15	1.90	16c前半	Ⅲ
9	715	1.30	1.35	1.70 以上	14c後半～15c初め	Ⅲ
10	1768	(0.90)	(0.90)	1.25	13c後半	Ⅱ
11	427	1.90	(不明)	1.70	14c後半～15c初め	Ⅲ
12	661	2.50	1.65	1.35	13ｃ前半～中頃	Ⅰ
13	654	1.90	1.60	2.50	15c代	Ⅲ
14	863	1.15	1.00	1.50	13ｃ前半～中頃	Ⅰ
15	867	1.10	(1.00)	1.20	12ｃ後半～末	Ⅰ
16	688	1.80	(0.60)	1.60	12ｃ前後	Ⅰ
17	570	1.40	1.25	1.40	13ｃ前半～中頃	Ⅰ
18	12	1.45	1.25	1.80	12ｃ後半～13初め	Ⅰ

Ⅰ期：12c後半～13c後半　Ⅱ期：13c末 ～ 14c後半　Ⅲ期：14c末 ～ 16c前半

時期	該当数
Ⅰ 期	11
Ⅱ 期	2
Ⅲ 期	5

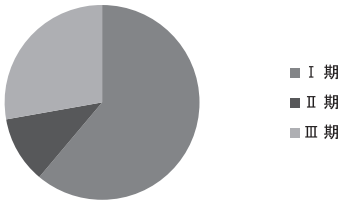


表３　大型土坑一覧表

遺物をみても壷・甕などの貯蔵具・碗・皿などの供膳具が渾然と出土しており、祭祀具などはもとより偏向する傾向は認められない状況であった。また、配置についても第１次調査で検出されたときは、ほぼ一列に並ぶ傾向が窺われ、大規模な柱列の可能性まで考えたが、第２次調査においては全体に分散しており、規則性は認められなかった。こうしたことから深さはあるものの一般的な灰塵処理土坑、いわゆるゴミ穴として機能していた可能性もあろう。現段階ではその用途を特定できない状況であり、ここでは今後の課題としておきたい。

ｂ．竪穴建物（地下式倉庫）

竪穴建物については、基本的には地面を掘り窪めた上屋建物を伴う施設である。用途としては貯蔵施設であったと考えられる。第２次調査では 24 基を確認している。その本体の構造から大きくは３つのタイプに分けられる。Ａタイプとしたものは石組のもので、Ｂタイプは木材により床を含めた土台を作っているもの、Ｃタイプは土台のないものである。

これら 24 基について一覧表として掲示したものが次ページの表６である。また時期区分別の個数、タイプ別の個数を表４及び表５して掲示した。

時期区分からみれば、Ⅰ期に帰属するものはまったく認められなかった。Ⅱ期は３基、Ⅲ期は 18 基で最も多く、全体の 80％近くを占める。続くⅣ期も少なく３基である。

こうしたことから少なくとも 13 世紀代にはまったく見られない施設で、14 世紀中頃になって出現する。15 世紀代に頻出し、16 世紀後半段階では急激にその数を減じることが判明した。

タイプ別では、土台がないものが最も多く全体の半数近く 11 基、木材による土台（床）が認められるものは４基、石組みのものは８基を数えた。またこの本体構造とは別に昇降口と考えられる施設が取り付くものとそうでないものがあり、前者は６基と全体の 1/4 に相当する。この昇降口を伴うものは、Ⅲ基に限られることから後出する要素である可能性が高い。

タイプ別の消長を概念表として掲示したが、Ｃタイプは Ⅱ～Ⅳ期を通して認められる。Ｂタイプは Ⅱ期から現れるがⅢ期で終わりⅣ期に続いていかない。これに対してＡタイプの石組みのものは、Ⅲ期になって現れはじめる新しい要素で、Ⅳ期の初めまでは続くようである。

これらの竪穴建物は貯

時期	該当数	割合
Ⅰ 期	0	0%
Ⅱ 期	2	8%
Ⅲ 期	19	79%
Ⅳ期	3	13%

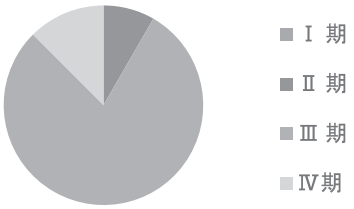


表４　時期別該当数

タイプ	該当数	割合
Ａタイプ	8	33%
Ｂタイプ	5	21%
Ｃタイプ	11	46%

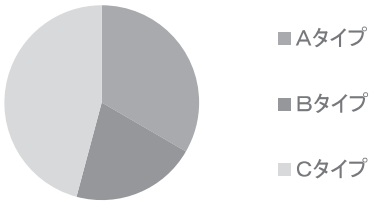


表５　タイプ別該当数

番号	遺構	Aタイプ(石組)	Bタイプ(床あり)	Cタイプ(床なし)	昇降口の有無	時期	時期区分	備考
1	300	○			○	15c末～16cf初め	Ⅲ	・2室が重複。北側1/5ほどが撹乱より破壊 ・C室床下から地鎮の銭貨出土
2	414	○				15c代中頃か	Ⅲ	
3	415			○		15c前半～中頃	Ⅲ	・近現代の撹乱により破損大
4	416		○			15c前半～中頃	Ⅲ	・床の根太は約1/2底部の石のこる。 ・根太の下部の柱穴まで調査済み。
5	592			○		16c後半以降	Ⅳ	・近世の撹乱により遺物混入の可能性高い
6	600			○		16c後半以降	Ⅳ	・主柱穴2本検出。 ・南側1/5が調査区外のため未調査。
7	690			○		15c前半～中頃	Ⅲ	・1・2次調査にまたがる。
8	760		○			14c中頃	Ⅱ	・床材が焼けた状態で出土。 ・四隅の柱のうち3本が炭化状態で遺存。
9	1200			○		14c中頃	Ⅱ	・No1324によって切られている(古い)。
10	1324			○		14c後半	Ⅱ	・No1200を切っている(新しい)。 ・南1/2が調査区外。
11	1620			○		15c中頃	Ⅲ	
12	1621			○		15c後半～16cに入るか	Ⅲ	・柱穴確認できず。 ・遺物混在している。
13	1700	○				16c末か	Ⅳ	・近世の撹乱激しい。 ・遺物混入の可能性あり。
14	4001		○		○	15c後半	Ⅲ	・3部屋重複(2回の造り替え) ・昇降部を伴う
15	4003			○	○	15c後半～16cに入るか	Ⅲ	・2部屋重複(1回の造り替え) ・さらにもう1部屋ある可能性。
16	4004			○	○	15c後半	Ⅲ	・本体部は調査区より北側にある可能性あり。 ・構造物により床下の調査はできていない。
17	4009			○		15c前半～中頃	Ⅲ	・2室重複 ・西側1/2、北側もわずかに調査区外。
18	4005	○				15c代中頃か	Ⅲ	・削平著しく、昇降口の有無確認できず。
19	4031		○			15c代中頃か	Ⅲ	・焼失。 ・規模2m×2m。
20	4027	○			○	15c代中頃か	Ⅲ	・本体部の東面の石積み欠損。 ・昇降部あり。
21	4028	○			○	15c後半～末	Ⅲ	・本体部に区画壁を構成する底石列あり。
22	4019	○				15c中頃～後半	Ⅲ	・昇降部のみ。 ・本体部は調査区外の北側か。
23	4035	○				15c中頃～後半	Ⅲ	・石積みであった可能性が高い。 ・造り替えている可能性も大。
24	3100		○			15c後半	Ⅲ	・撹乱著しい。 ・出土遺物少ない。

(Ⅰ期:12c後半～13c後半　Ⅱ期:13c後半～14c後半　Ⅲ期:14c後半～16c初め　Ⅳ期:16c後半以降)

表6　竪穴建物(地下式倉庫)一覧表

蔵施設としての機能を担ったものと考えており、その意味合いも含めて地下式倉庫と称している。県内では中世の寺院跡として知られる「根来寺遺跡」でこの手の地下式倉庫が多く見られる。[註1] 主に16世紀代のもので、埋甕と呼ばれる備前の大甕を複数個埋設している例が多いなど新宮城下町遺跡とは異なりを見せている。

他府県の例としては鎌倉の若宮大路周辺遺跡群で確認された倉庫群がある。[註2] 床も含めた木組の構造を持つものや本体部の四周に柱穴が多く見られるものなど、構造的な類似性が強く認められる。ただし時期的には、鎌倉の場合13世紀後半から14世紀前半にかけてが多く、15世紀に入るとその数を大きく減じている。

今回新宮城下町遺跡で確認された地下式倉庫については、個々の倉庫に時期差があり、もちろんすべてが同時に機能していたものではないが、15世紀代においてはかなりの数が同時に存在していた可能性が高く、倉庫群として認識されるものと思っている。この倉庫群については、川に近いことから湊の一部として物流の機能を担ったものと考えるのが妥当であろう。

具体的な貯蔵物については、森林資源の豊富な熊野の地であることを前提とすれば、燃料としての薪炭や檜皮等の可能性が考えられるが、調査時においても残滓さえまったく確認できておらず不明と言わざるを得ない。

なおこの種の倉庫は近代でも確認されている。このことからたまたま近世にはこの地が武家屋敷地であったため確認されていないが、市内の商業地、町屋などにおいては脈々としてこの技術が受け継がれ、地下式倉庫が造られていたものと考えられよう。

第５節　遺構からみた中世全体の変遷

ここでは先に述べた大型土坑や地下式倉庫のほか第１次調査で確認された大型の掘立柱建物、さらには確認調査で検出した鍛冶遺構なども含めて、主要遺構を中心に当該地における中世全体の変遷を眺めておきたい。図 154 として、これらの遺構を色分けにより時期別に明示した。以下、これに沿って述べる。

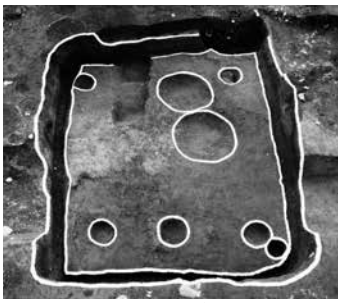
Ⅰ期の遺構としては、大型の建物がある。いずれも総柱で、桁行６間×梁行４間の規模の大きなものも含めて４棟が確認されている。いずれもほぼ同じ位置であり、何度か建て替えがなされたことが窺える。また、この建物の東側で大型土坑がほぼ一列に並ぶような形で検出されている。この期の遺構について言えば、川から少し離れた南側、かつ東側に展開していた可能性が高い。建物の大きさや、出土遺物に白磁の四耳壷や青白磁の梅瓶などが含まれており、一般の建物や敷地ではなく、有力者の屋敷地ないしは寺院などの宗教施設であった可能性が高い。

Ⅱ期に帰属する遺構は少ない。空白期ではないが、遺跡としては沈滞期にあったと考えられる。検出された遺構の位置関係から、南側に展開している様相が看取される。この時期に地下式倉庫が現れる。

Ⅲ期の遺構は多い。地下式倉庫の数が急激に増える時期である。大きな画期が想定できる。先述したように詳細に見ると、遺構の展開場所により大きくは前後２時期に分けることが出来る。前期の段階では、自然堤防上の高い部分を中心に、北側のやや低い場所まで展開する。その北側を画していたのが、東西方向に一直線に築かれていた石垣である。これを切って半地下式倉庫が造られている。これらの半地下式倉庫の遺物をみると、同じⅢ期の範疇ながら 15 世紀中頃以降

Aタイプ（遺構300）

Bタイプ（遺構760）


Ｃタイプ（遺構690）

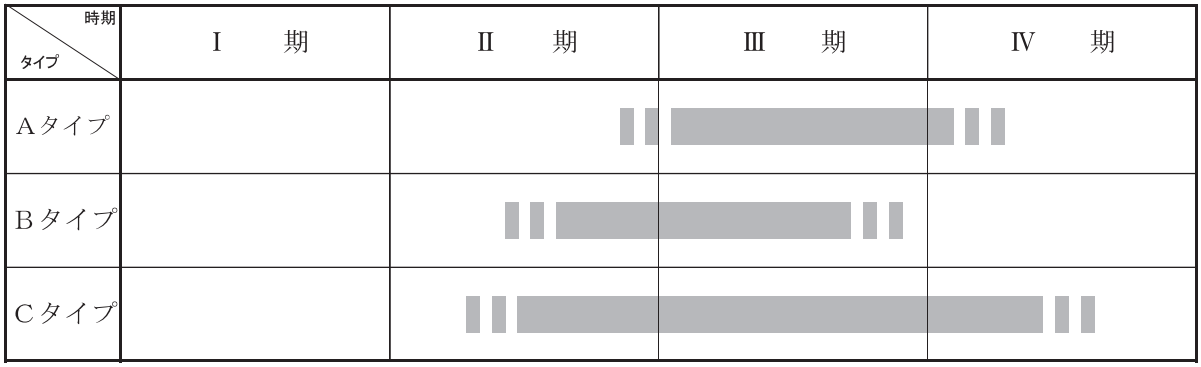


表７　竪穴建物 (地下式倉庫) タイプ別消長概念図

の可能性が高い。このことから石垣を越え、大きく川側にせり出していくのが15世紀中頃であり、これを後期と考えている。これに伴って、階段状の通路も造られている。また確認調査でもこの時期の一段低い川側へと降りていく階段を検出している。さらに確認調査で検出された鍛冶遺構もこの時期のものであり、この付近からは船釘も複数本確認されている。こうした状況から川湊として機能していた最盛期がこの時期であったものと思われる。範囲的には第２次調査区の西側にも拡がって行くことを確認しており、川沿いに倉庫が建ち並んでいた様が想定できよう。また、これらの倉庫を区画、ないし囲繞するような溝などの施設がまったく見つかっていないことから、ブロックごとに所有者があるというよりは、湊に係る共同の一体施設であった可能性が高い。なお、このⅢ期に画期を認める要因は、単に湊としての活況が認められるだけではなく、この時期に建物の軸が変わることが挙げられる。

Ⅰ・Ⅱ期は軸線を共有しているが、このⅢ期はやや西側に偏する方向を取る。その原因についてはわからないが、近辺を通る道などの改変か、逆により川に近い箇所で何らかの施設が構築され、それによる影響が及んだ可能性もあろう。[註3]

Ⅳ期に係る遺構は数少ない。検出した遺構として地下式倉庫は依然として存在するものの川から離れた南側に位置しており、その数も急減している。このような状況から、湊としての機能はこの段階には終息していたものと判断している。

土師器		瓦器	須恵質土器	瓦質土器	山茶碗	備前	常滑	瀬戸	渥美	不明	輸入陶磁器				
皿	鍋・釜										白磁	青花	青磁	青白磁	施釉陶器
17,020	3,843	98	18	119	2,748	409	5,211	2,358	8	95	607	138	885	50	17

（点数は破片数）

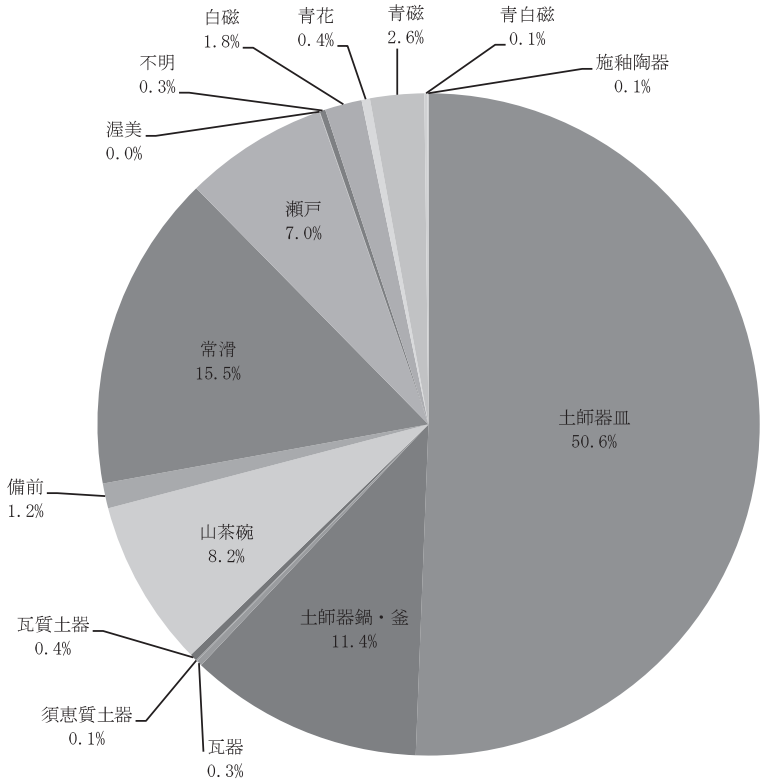


表８　中世遺物組成表

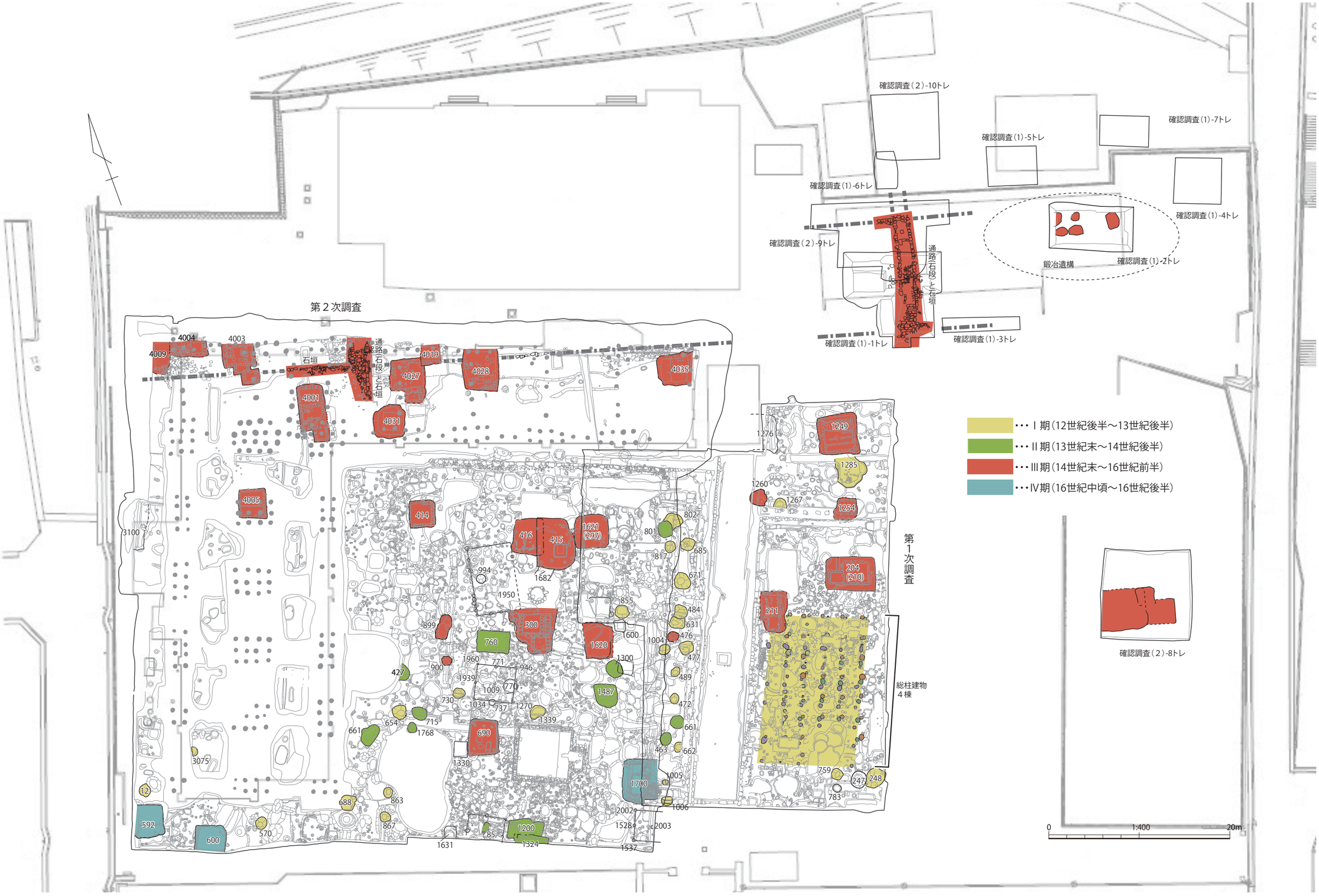


図154　時期別主要遺構配置図

第６節　中世遺物の全体的傾向

ここでは、出土した中世の遺物の全体的な傾向について触れておきたい。中世の遺物としては破片数で 33 万点余を数える。中世を通して出土する遺物として土師器の皿、常滑や瀬戸、さらには輸入陶磁器などがある反面、渥美や山茶碗、さらに瓦器などは前半期を持ってほぼ生産を終了するものであり、こうしたものを一律に俎上にあげて論じることの無理は承知であるが、あくまで大まかな傾向として捉えておく。

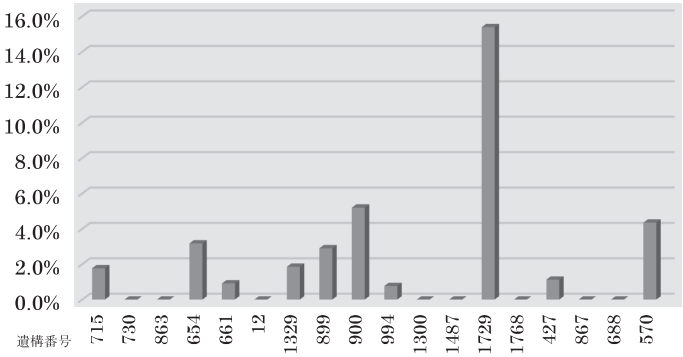


表９　大型土坑における瀬戸の比率

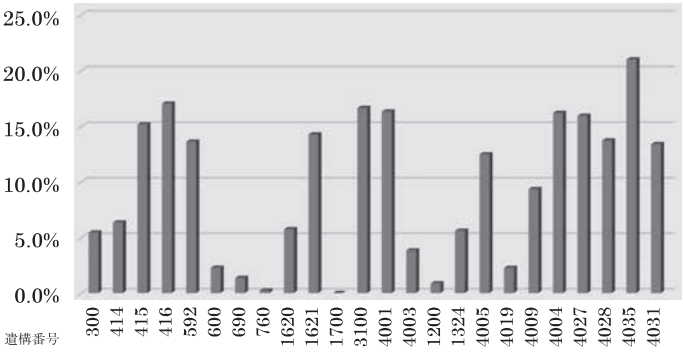


表 10　地下式倉庫における瀬戸の比率

全体の半数を土師器の皿が占め、鍋・釜類を含めれば土師器が約 62％と 2/3 近くを占めている。この比率は日常生活のなかで使用し消耗する器種であることを考えれば妥当なものであろう。逆に当時にあっては貴重品と考えられる青磁・白磁などの輸入陶磁器の比率は全体で５％を占める。一般の集落よりは高いものの寺院や館跡などに比べるとほぼ同じかやや低い傾向が認められよう。なかでも個別に見れば、青花（染付）が 0.4％と少ない。これは青花の出土数が多くなる 16 世紀代に遺跡として衰退期に当たっていることを如実に示す結果とも言える。

壷や甕などの貯蔵具では圧倒的に常滑が多く、この傾向は中世を通して変わらない。その常滑をはじめ中世前期の山茶碗、中世後期の瀬戸など東海の焼き物が全体の 30％強を占めており、備前や東播系の須恵質の鉢など西日本の製品も一定量出土しているものの基層的には東海地方との結びつきが強いことを示している。

第７節　中世遺物の時期的傾向

先に述べた中世の主要遺構である大型土坑（18 基）と地下式倉庫（24 基）について、個々の出土遺物の組成を数値化し分析を試みた。結果的には分母となる出土点数の多寡もあり、明瞭な傾向を窺うことはできなかった。ただし大きな傾向としては、当該遺跡の中世の遺構を考える場合、「古瀬戸」がひとつの鍵となることが明らかになった。

平安末期ないし鎌倉初頭にはじまるとされる古瀬戸の生産は、瓶子などの特別な器種を除けば

前期段階では広域の流通圏をもたず、鎌倉などの一部の地域に限られている。古瀬戸中期以降、後期にかけてその生産量を増し、西日本域においてもその出土量の増大が知られている。[註4] 本遺跡においても中期段階のものはきわめて少なく、14 世紀後半段階の後Ⅰ期から出土しはじめ、15 世紀前後の後Ⅱ期、さらに 15 世紀中頃の後Ⅲ期にピークをなしている。

したがって、各遺構における古瀬戸の出土比率が、ある程度遺構の時期を推定する手がかりになり得る。

これらを表わしたのが表 9 及び表 10 である。中世前期に多いとされる大型土坑においては、その比率はきわめて少なく、当該遺跡のⅠ期としているものでは、皆無に近い状況を示している。逆に大型土坑でもⅢ期に帰属する遺構 1729 や遺構 900 では一定量認められる。

地下式倉庫は中世でも後半に帰属する遺構であることから、古瀬戸の比率は大きい。逆にここでは比率の少ない遺構 760 や遺構 1200 などが古い時期のものであることを示すものと言えよう。

次に個々の遺構の分析ではなく、すべての遺構について出土遺物を時期別に合算してその傾向を試みたのが表 11 である。煩雑さを避けるため土師器などは省き、常滑・備前・瀬戸の主要な中世陶器と輸入陶磁器を対象としている。

一見して看取されるように常滑の比率が極めて高く、すべての時期を通して過半を占めている。とりわけⅠ・Ⅱ期については 80％と高い。Ⅲ期に至ってややその占有率を減じているのは、増大した瀬戸の影響によるものである。備前はⅠ期段階では搬入されている気配はない。Ⅱ期に至ってようやく現れはじめるが、それも備前Ⅲ期の後半、14 世紀後半段階のものであり、その器種も擂鉢が多い傾向が認められた。Ⅲ期になると壷・甕類の出土も増加している。ただし、この時期は瀬戸の製品が増大しており、全体の中での占有率はⅡ期と変わらず 2 ％にとどまっている。

瀬戸に着目すれば、Ⅰ期段階ではきわめて少ない。Ⅱ期から出土しはじめ、Ⅲ期には爆発的に増大し、全体の 1/3 近くを占める状況である。器種としては、折縁深皿や縁釉小皿、卸皿などが多く、合子や燭台のほか香炉などの製品も一定量認められる。

青磁・白磁などの輸入陶磁につ

	常　滑	備　前	瀬　戸	輸入陶磁器	総破片数
Ⅰ期	446	0	6	107	559
Ⅱ期	231	5	7	46	289
Ⅲ～Ⅳ期	919	25	455	156	1555

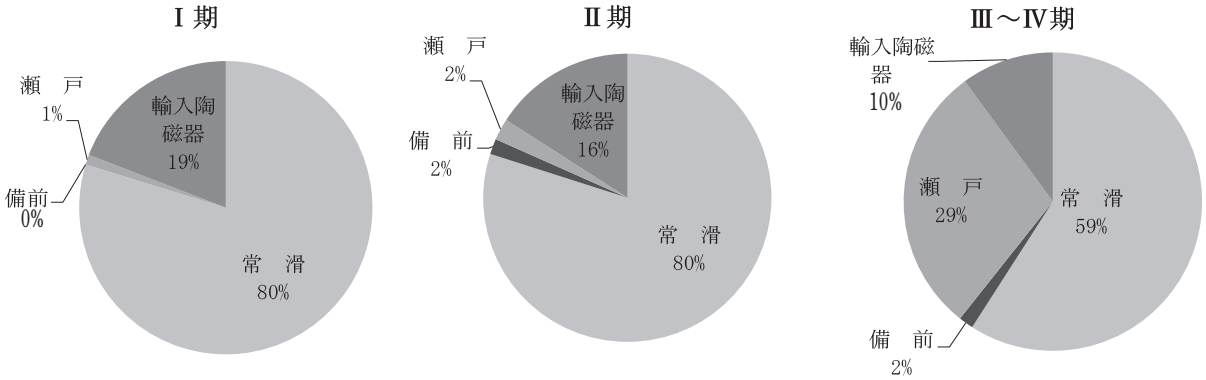


表 11　主要陶器及び輸入陶磁器の時期別比率

いては、すべての期間を通して一定量の出土が認められる。Ⅰ期では、白磁の四耳壺や青白磁の梅瓶などの特殊なものが目立つ。Ⅱ期の段階では、鎬蓮弁の碗など龍泉窯系の青磁が主体である。Ⅲ期になると依然として線描の蓮弁文碗や稜花の皿などの青磁も残るが、白磁の軟質で割高台の皿や六角形を呈する小型の坏などが多い。

以上述べきた本遺跡から出土している遺物について、その総括として編年表形式で図 155 として掲示した。一部重複するが、説明を加えておく。

出土遺物からみると、当遺跡の中世としてのはじまりは 12 世紀後半段階である。遺構 12 及び遺構 3075 を指標とする。壺・甕類では常滑を主とするが、わずかに渥美の製品が散見される。山茶碗の出土も多い。時期的には第 5 型式のものが主体で、その前後のものもわずかに認める。産地別では渥美が大半であり、これに尾張のものが少量混じる状況である。なお山茶碗については第 7 型式以降のものは出土しておらず、13 世紀中頃には搬入が途絶えていたものと判断した。土師器の皿は大小関係が明瞭で大皿は 5 寸、小皿は 3 寸の規格が維持されている。底部糸切りのものが多く、少量だがロクロ成形のものも確認している。これらの土師器皿については、産地が不明であるが、胎土から見て紀北域で見られるものと違和感はなく、彼の地からの搬入品である可能性も考えられる。なお土師器の鍋では、紀北域のものは確認できず、南伊勢のものと思われるものが出土している[註5]。また、この時期畿内では主流となっている瓦器碗について言えば、13 世紀前半まで数は少ないものの出土を確認している。ただしその量から推して、商品として流入していたものとは考え難く、新宮域が山茶碗の生活圏であったことを改めて認識させられる状況であった。

輸入陶磁器のうち、白磁ではⅧ類に分類される高台が高く、口縁端部が水平となるタイプの碗やⅣ類の口縁部が扁平な玉縁状をなす碗などが見られる。青磁では同安窯系のものが多い。続く 13 世紀前半のものとしては、前述した常滑や山茶碗などのほかに東播磨地方でつくられた須恵質のこね鉢、滑石製の石鍋が出土する。なお、東播系のこね鉢も石鍋も量的には少ないが、14 世後半まで断続的に確認される。

当該遺跡でⅡ期とした時期、13 世紀末～ 14 世紀後半は出土遺物が激減する時期に相当する。遺跡としては沈滞期の様相が窺えるが、まったくの空白時期ではなく、この時期に備前の擂鉢が確認されるし、常滑の壷・甕についても出土を確認している。

14 世紀末にはいると遺跡は活況を呈しはじめていたようで、出土遺物が急激に増えはじめる。なかでも古瀬戸の製品、折縁深皿、平碗、卸皿、縁釉小皿などが大量に出土する。このピークは古瀬戸後Ⅲないし後Ⅳ期、15 世紀前半から中頃過ぎにあるものと思われる。またこの時期、南伊勢の土師器の製品が多く認められる。土師器皿は器壁が薄いことが大きな特徴である。また鍋や釜についても南伊勢の製品が主流となっている。ただし播磨の鍋も一定量入ってきており、同じ土坑から両者が共伴して出土する状況も多く確認しており、共存状態であったことが判明している。

16 世紀前半を過ぎると、再び遺物量は減少する。この時期以降常滑の製品は少なくなり、代

わって備前の製品が目立ってくる。数値化するに至ってはいないが、16 世紀中頃にはおそらく備前が常滑を凌駕していたものと思われる。瀬戸の製品については、大窯期に相当する時期であり、端反皿や丸皿が出土しているし、やや時代は下るが大窯４期にはじまる志野の皿も少量ながら出土している。この時期の輸入陶磁器としては、端反りの白磁皿のほか碁笥底の染付皿が認められるがその量は少ない状況であった。

第８節　近隣の中世遺跡との比較

中世の湊として知られる遺跡としては、紀伊半島の東側、伊勢湾に面する安濃津（三重県津市）がある。福岡県の博多津、鹿児島県の坊津とともに「日本三津」のひとつとして中国にも知られた著名な湊である。平成８年度に大規模な発掘調査が実施され、報告書が刊行されている。[註6] それによれば、遺跡名としては「安濃津遺跡群」であり、古墳時代前期の遺構や近世後期の遺構も確認されているが、遺跡の主体としては中世であり、湊として機能したことが知られている。

文献的には平安時代まで遡る湊であるが、発掘調査においてはこの古代の状況は判然としない。中世全般を通して遺物が確認されているが、13 世紀と 15 世紀に盛時があること。湊としての機能は 15 世紀末に発生した明応の大地震（明和７・1498）による壊滅的な打撃を契機として終焉を向かえたとされている。13 世紀と 15 世紀に盛時が認められ、その間の 14 世紀が判然としないこと、さらに湊としての機能が 15 世紀をもって終わることなど、当遺跡ときわめて似た状況が認められることは注目に値しよう。

いまひとつ近隣における中世遺跡として新宮市の西隣り、那智勝浦町に所在する「川関遺跡」を取り上げたい。この遺跡は、熊野三山のひとつである那智山の入口部、那智川に面して所在している。那智側の河口部からは 500 mほどと近く、湊と呼ぶか否かは別として、那智山への物資の集散地であった可能性は高い。

平成 10 年度から 12 年度にかけて大規模な発掘調査が実施され、平成 15 年度に報告書が刊行されている。[註7] なお、この川関遺跡については、西側に隣接する戦国時代末期に築かれた藤倉城と併せて発掘調査が実施されており、この成果についても報告書に掲載されている。以下この報告書に拠って、遺跡の概要を紹介しつつ本遺跡との類似点や相違点などについて触れておきたい。

川関遺跡についても縄文時代後期、弥生時代中～後期、さらに古墳時代後期の土器が出土しているが、集落が本格的に営まれはじめるのは、平安時代の後期である。出土遺物を見ると、百台寺式併行期の灰釉陶器や山茶碗でも輪花を施したものなど第３型式段階の製品が認められることから 12 世紀前後にははじまっていたと思われる。新宮城下町遺跡については、第４型式以降と考えており、50 年ほどのタイムラグがある。つづく平安時代末期から鎌倉時代初めにかけてが集落の最盛期で、この時期の掘立柱建物や木枠井戸、溝などの遺構とともに出土遺物も多い。その後、鎌倉時代後期以降は遺構・遺物ともに希薄な状態を呈している。

集落が再び活気をとり戻すのは室町時代後期で、出土遺物をみると瀬戸美濃の灰釉陶器が多く、とりわけ大窯１・２期に帰属する製品が多いことから、その最盛期は 15 世紀末期から 16 世紀初めであったと考えられている。またこの時期は、溝で区画された屋敷地が成立しており、これま

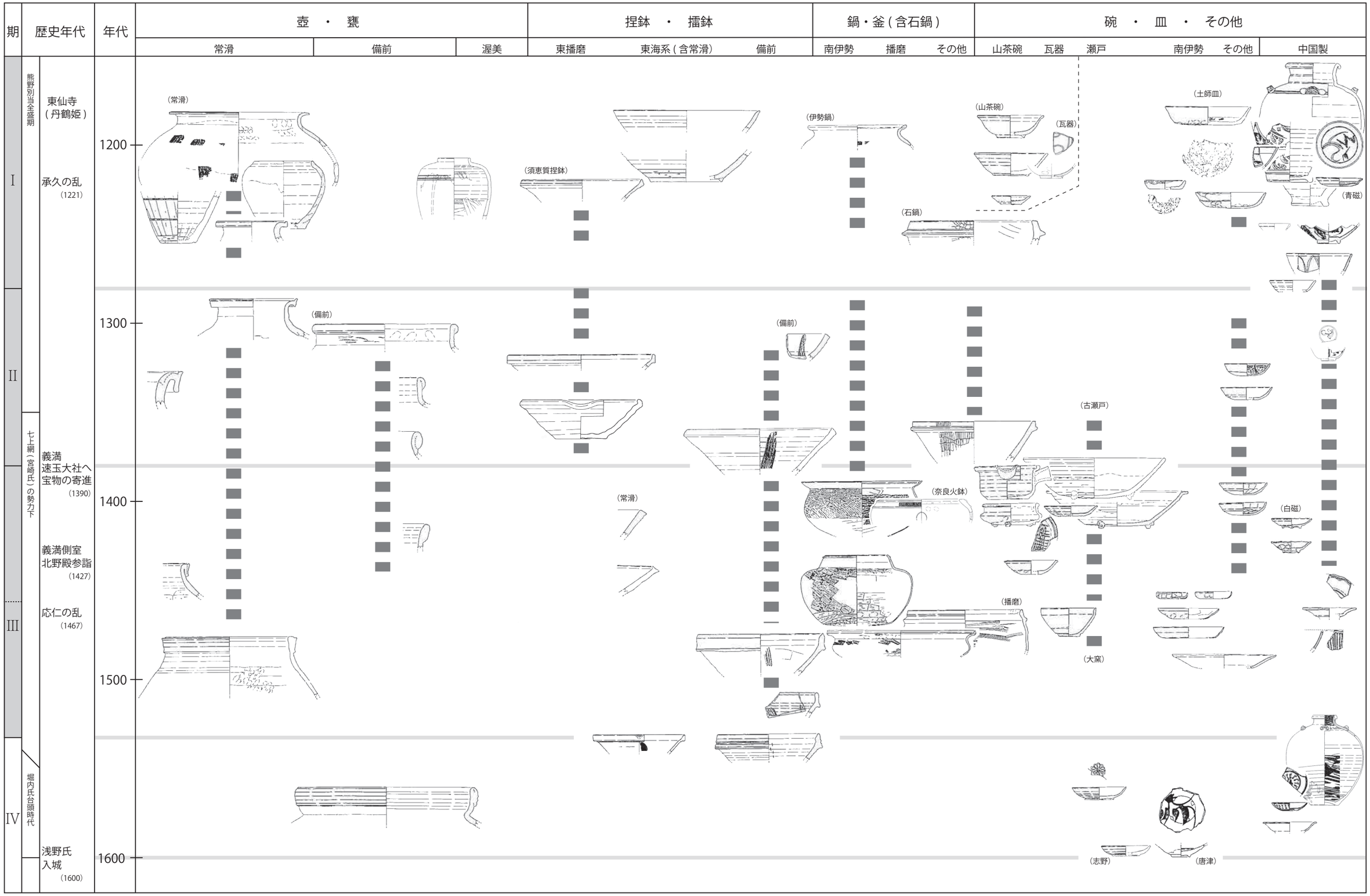


表 12　新宮城下町遺跡出土遺物編年表

で掘立柱建物が集住する共同の集落であったものが、個人が一定の土地を区画して所有する屋敷地へと変貌している。なお、この屋敷地については、文献資料及び調査地周辺に残る字名から「中村屋敷」である可能性が高く、この時期の造営主体者が那智山に係る有力社家である実方院であったことが推定されている。

以上の状況をみると、平安時代末から鎌倉時代初めに盛時を迎えていること、鎌倉時代後期以降衰退していた状況などに類似点が認められる。一方、室町時代後期の盛時については、15 世紀末から 16 世紀初めとしているが、新宮城下町遺跡では、この時期は衰退に向かい始めた時期であり、おそらく実年代で言えば 50 年ほどのタイムラグが認められると言えよう。また大きな違いは、敷地の利用方法である。川関遺跡が、この時期個人所有の屋敷地であったのに対し、新宮城下町遺跡については、概述してきたように、この時期は敷地内には倉庫が展開し、区画する溝などは認められず共同の一体の場であったものと考えられる。

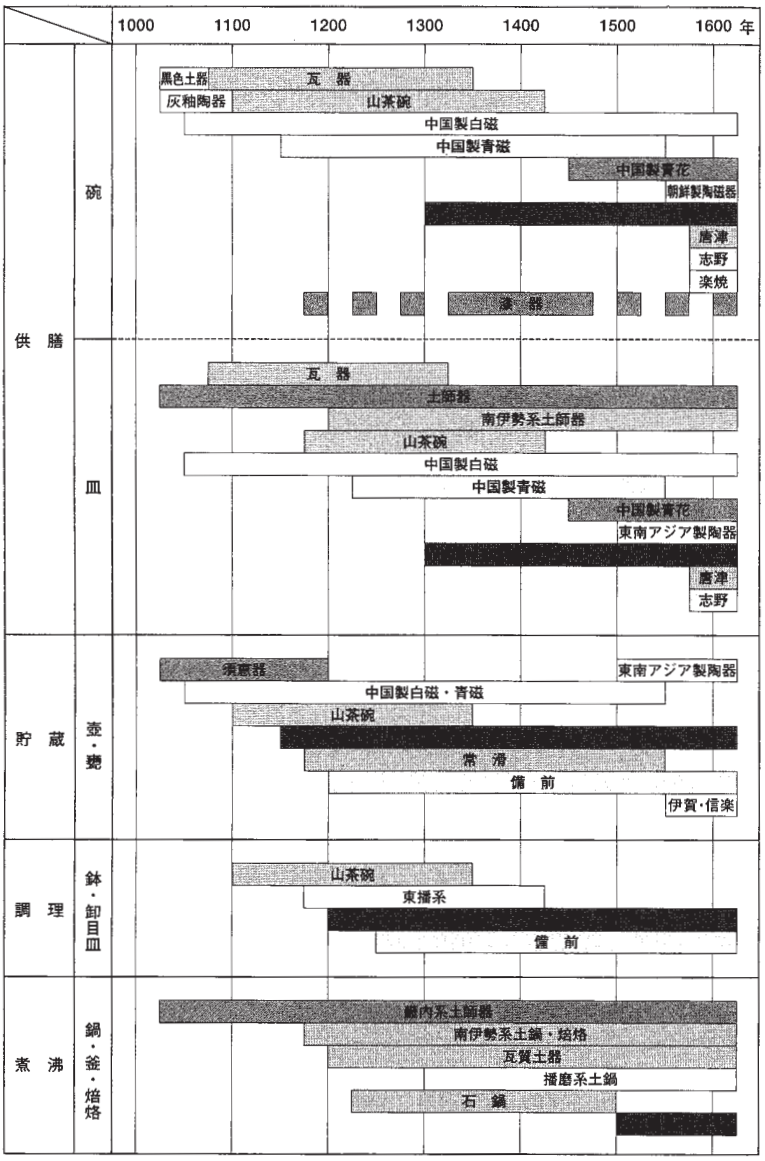


表 13　藤倉城跡・川関遺跡日常雑器変遷表

次に出土している遺物の傾向について比較しておきたい。表 13 は、藤倉城跡も含む川関遺跡の報告書に掲載された日常雑器の変遷表である。以下、これに則してその同異を記す。

川関遺跡では、黒色土器や灰釉陶器が見られるが、新宮城下町遺跡ではまったく見当たらない。これは先に述べたように川関遺跡の方が早く始まっていることを思えば当然のことであろう。瓦器については、古くから 14 世紀中頃までの出土としているが、新宮城下町遺跡の場合 12 世紀末ないし 13 世紀代に限られる。また山茶碗についてはその出はじめと終わりは異なっており、さらにそのピーク時は川関遺跡の場合第４・５型式とされるが、当遺跡の場合第５から第６型式にかけてと微妙なずれが認められる。ただし産地としては渥美が多く、次いで尾張であることに変わりはない。

土師器の皿については、川関遺跡の場合平安末から鎌倉時代初めについては、紀北地域の影響が指摘され、さらに15世紀代に入ると南伊勢の土師器皿が多くみられるとしているが、この点なども同様である。同じく土師器の鍋釜類などについては、当初から南伊勢の製品が流入しており、15世紀代には播磨の鍋が見られるなども共通項として挙げられよう。なお、こうした土師器について川関遺跡の整理担当者も述べているが、新宮域においても在地での生産はまったく行っていないものと思われる。

備前については、表では早くも13世紀はじめには入ってきている状況を示している。遺物観察表でわずかに1点、この時期のものとするものを検証したが、実測図で見る限り備前Ⅲ期（14世紀）まで下る可能性が高いように思われた。こうしたことからその可能性は排除しないが、備前については、14世紀に入ってからであり、普遍的に見られるようになるのは15世紀代と思われる。このことは新宮城下町遺跡についても同じ傾向を示している。

輸入陶磁器については、中世前半では両遺跡ともほぼ同じ傾向を示しているが、中世後半期の盛時に多少のずれが生じていることから微妙な差異が認められる。その一点は朝鮮製陶磁器や東南アジア製の陶器の出土量である。川関遺跡においては相当数が確認されているが、新宮城下町遺跡においてはきわめて少量である。二点目は、中国製の染付（青花）の出土量である。川関遺跡では景徳鎮窯や漳洲窯産の染付が一定量見られるが、新宮城下町遺跡ではその数が限られる。このことは盛況時の時期のずれとともに藤倉城跡の遺物が含まれる影響も考えられよう。

以上、川関遺跡について新宮城下町遺跡との比較の観点で見てきたが、遺跡としての消長や出土する遺物など大略としてはかなり似通った傾向が認められるものの、敷地の利用の仕方など異なる点も見出される。細部についてはさらなる検討が必要だが、ここではこのことのみ確認しておきたい。

第9節　新宮城下町遺跡と新宮域の歴史的事象

ここまで新宮城下町遺跡の中世について検出された遺構及び遺物の分析、また関連する他の遺跡との比較などを行ってきた。最後にそれらを前提として、新宮域における歴史的事象、さらには汎日本的な動きと絡めてまとめておきたい。

当該遺跡でのⅠ期のはじまりは、12世紀後半としている。歴史的に見ればこの時期は、貴族政治の終焉と武家政治のはじまり、平安時代から鎌倉時代への過渡期に当っている。宗教的に見れば乱世の世を背景とした浄土信仰がつづいており、現世利益や極楽往生を願って熊野・新宮域でも経塚がさかんに造られていた時期である。また、この時期は後白河上皇や後鳥羽上皇による熊野御幸が頻繁に行われた時期にも当っており、新宮を含めた熊野の地が都の貴紳に強く意識された時期と言っていいであろう。

この時期､新宮においては鳥居禅尼なる女性がいたことはすでに述べた。再度確認しておけば、源頼朝の叔母に当る人物であり、熊野速玉大社の社僧や神官を束ね、後に19代熊野別当となる行範の妻であった。鳥居禅尼は治承・寿永の乱後、乱中の功績により頼朝からいくつかの荘園の

地頭職に任じられたことが知られている[註8]。いわば鎌倉幕府と直結した関係を持ち、新宮においてかなりの勢力を保持していた人物である。

江戸時代後期に編集された『紀伊続風土記』のなかで、この鳥居禅尼が丹鶴山のすぐ西側、調査地東に隣接する八幡山に東仙寺というお寺を建て居住していたことが伝えられている。もとより二次資料であり、この伝承に誘引されるわけではないが、出土遺物には中国製の白磁四耳壺などがあり、一般的な集落と考え難い状況が看取される。また、敷地を区画する溝等が検出されていないことで、逆に敷地自体が大きかったことが想定される。さらに第1次発掘調査で検出されている大型の掘立柱建物の存在等を勘案すれば、この時期、当該地にはかなりの権威者の居館なり宗教施設が営まれていた可能性が考えられよう。こうしたことから、Ⅰ期初めの遺構については、現段階では東仙寺に係るものと判断するのが、もっとも妥当と考えている。

その後の情勢をみると、13世紀中頃から出土する遺物の量は減少し、遺跡としては衰退している状況が看取される。この衰退の背景のひとつとしては、1221年に起こる承久の乱が考えられよう。後鳥羽上皇が鎌倉幕府執権の北条義時に対して起こした兵乱であり、一言で言えば振興の武家政権に対し、古代より続く朝廷の復権を目的とした争いであろうが、その趨勢は鎌倉幕府側に帰す。この乱に際し、田辺の別当家をはじめ熊野別当一族の大半は、上皇方に与した。敗戦の痛手は大きく、新宮における別当家の相対的勢力、地位の低下を招いたことは想像に難くない。また、頻繁に行われていた上皇による熊野御幸も、その後は建長年間（1250年前後）の嵯峨上皇による2回と、弘安4年（1281）の亀山上皇によるもので終焉を向かえている。遺跡の衰退をこうした歴史的な事象を透過して理解することも可能であろう。

Ⅱ期、13紀末になると遺跡は再び活況を呈しはじめる。竪穴建物（地下式倉庫）も確認されはじめる時期であり、遺跡としてはこれまでと違った様相を呈するもので、湊として機能しはじめたものと考えている。この時期熊野三山は全国に荘園をもっており、こうした各荘園からは熊野に年貢米などが輸送されている。熊野本宮大社文書の熊野山日供米配分注文には熊野本宮大社の荘園であった上総国畔蒜荘からの年貢米輸送についての記事がみられる。これが永仁3年（1296）のことであり、そのなかに「新宮津」の文字が確認される。この新宮津の場所が、具体的にどこを指しているのかは不明であるが、当該遺跡を含めた河口部に近い熊野川に面した場所であったことは確実であろう。文献による「新宮津」が確認されるのは、唯一この一例であるが、Ⅱ期に該当する14世紀代には新宮からの材木や檜皮などの森林資源が各地に運ばれた記載が遺っている。ひとつは文保元年（1317）のもので、武蔵野国金沢称名寺金堂の修繕用として熊野檜皮が送られている（金沢貞顕書状）。また、貞和2年（1346）に京都法勝寺の塔造営に際して新宮問丸の鵜殿庄司が大柱3本を淀津に運んでいる（三重県田中家文書）。文書として遺っているのは限られるが、その背後には膨大な物資が動いていたものと思われ、こうした交易を通して、熊野の廻船、水運が発達し、熊野三山の経済基盤が整えられていったものと考えられよう。

Ⅲ期は、こうした湊としての機能がより強化され発展していった時期である。すでに述べたように貯蔵施設である倉庫の数が増えるとともに、川側に近い場所に拡がっている。また、鍛冶遺

構や船釘の出土などから港湾に付随する施設もつくられていた様が窺える。具体的な船着場などは見つかっていないが、川へと下っていく階段も確認していることから、調査区のさらに北側にはそうした施設が想定されよう。

またこの時期は、出土遺物から湊を介して紀伊半島を中心とした東西方向からの交易の様相が確認できる。東側からは常滑をはじめ瀬戸の製品が大量にもたらされている。南伊勢からの土師器製品も多い。西側からは前代にも増して備前の製品が多く搬入されており、播磨型の鍋も多く確認されている。いわば東西の結節点として新宮湊が機能していたことが判明している。

一方、地下式倉庫が多いものの具体的な貯蔵物については判然しておらず、主たる交易品の特定に至っていない。さらに大きな問題として、この湊の造営主体者、担い手がよくわからない。この時期新宮においては、先の熊野別当家が衰退し、熊野速玉大社の上位の神官である上綱達の合議による支配が行われていたとされる[註9]。中でも上綱のひとりであった宮崎氏は15世紀代に先に述べた東仙寺の修繕にかかわったことが知られている。こうしたことから湊の運営に関しては、大きくは速玉大社を含む熊野三山、具体的には宮崎氏の関与が想定されるが、もちろん考古学的にそれらを証すべき資料はない。

なお、この時期は室町幕府との安定的な関係が構築されていた時期である。南北朝の動乱期の中で、遷宮さえままならず、経済的困窮あった速玉大社に遷宮の援助を行い、現在「古神宝類」として国宝に指定されている神宝類の奉納が明徳元年（1390）に足利義満によりなされている。さらに15世紀代に入ると幕府や守護による荘園の寄進や安堵が度々行われたことが知られている。こうした安定期であったからこそ、湊としての機能が十全に発揮されたことは想像に難くない。

以上、最後に新宮をとりまく歴史的事象と絡めて、当該遺跡の変遷をまとめた。平安時代末から鎌倉時代初めにかけて有力者の屋敷地ないし宗教施設の一画であったものが、鎌倉時代の終わり頃には湊としての役割を担うようになり、続く室町時代中頃に湊としてのピークを向かえたというのが大まかなアウトラインである。

線描でしかありえず、その中身については判然としない部分の方が多い。しかしながら紀伊半島の先端近く、東西の海洋航路の結節点、交通の要衝に位置することを思えば、新宮城下町遺跡の眼目、本質的重要性は中世の湊としてあるものと思われる。その「湊」をはからずも発掘調査により確認しえたことはなによりも大きな成果であった。残る諸問題については、今後の課題としておきたい。

註

註１　「根来寺坊院跡」（和歌山県教育委員会・昭和56年度）ほか根来関係の発掘調査報告書。なお、少数ではあるが古いタイプのものには常滑の大甕が用いられているものもある。

註２　「鎌倉の埋蔵文化財11」（鎌倉市教育委員会・平成20年３月）

註３　近世になると再び軸線が変わり、Ⅰ・Ⅱ期と同じ軸線に戻ることが確認されている。

註４　愛知学院大学教授・藤澤良祐氏のご教示による。

註５　南伊勢の土師器全般については、三重県教育委員会･伊藤裕偉氏に実見していただき、ご教示を得た。

註６　「安濃津」（三重県埋蔵文化財センター・1997 年３月）

註７　「藤倉城跡・川関遺跡」（財団法人 和歌山県文化財センター・2004 年３月）

註８　地頭職を得た荘園としては、紀伊国佐野庄及び紀伊国湯橋庄、但馬国多々良岐庄などがある。禅尼亡き後、これらの地頭職は養子に譲補された。（「吾妻鏡」）

註９　弘安７年（1284）第 31 代別当正湛の還俗以後、代わって熊野一体を支配したとされる。新宮・芝・宮崎・滝本・矢倉（鵜殿）・中曾・（中脇）・箕島の七氏であったとされる。

参考文献

・鈴木弘太 2013『中世鎌倉の都市構造と竪穴建物』同成社

・阪本敏行 2005『熊野三山と熊野別当』清文堂

・伊藤裕偉 2011『聖地熊野の舞台裏 -- 地域を支えた中世の人々 --』高志書院

・綿貫友子 2001「紀伊国における中世海運 --- 中世海運における紀伊半島の位置付けを探るために ---」『歴史科学』165 号

観　　察　　表

遺物観察表（土器類）

法量の ( ) 内は復元した大きさ　色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
1	図 12	土師質土器焙烙	K18b1	第 1 面包含層	(24.2)	2.8	(23.4)	5%以下	口縁部ナデ、底部に煤付着	内・外・断) 橙	密　1mm以下の白色粒・褐色粒、金雲母含む	反転復元
2	図 12	伊万里皿	K18f12·13	第 1 面包含層	-	(2.3)	(7.8)	底部20%	畳付は露胎	内・外) 灰白・青黒 断) 灰白	密	反転復元
3	図 12	伊万里碗	K18e10·11	第 1 面包含層	(9.5)		3.4	60%	口縁部内面に 2 条の圏線、見込に 1 条圏線内にコンニャク印判 ?、畳付は露胎	内・外) 明緑灰・暗青 断) 白	密	一部反転復元
4	図 12	唐津皿	K18e10·11	第 1 面包含層	-	(1.6)	4.3	底部60%	蛇の目	内) 褐灰・灰白 ～ オリーブ灰 外・断) 灰白	密　1.5mm以下の赤褐色・褐色粒少量含む	一部反転復元
5	図 12 図版 42	唐津皿	J18y13	第 1 面包含層	(11.9)	3.5	(4.8)	50%	蛇の目	内) 黄灰 釉) 灰オリーブ・暗青灰 外) にぶい褐・灰黄 釉) 灰オリーブ 断) 灰白	密　0.5mm以下の黒色粒を微量含む	反転復元
6	図 12 図版 42	瀬戸水鉢	K18e10·11	第 1 面包含層	-	(5.6)	-	口縁部5%	体部にヘラ描き文　細かい貫入	内) 浅黄 外) 淡黄・黒褐・オリーブ灰 断) 灰白	粗　0.5mm以下の黒色粒を微量含む	断面のみ
7	図 12	堺擂鉢	K18a·b3 K18a4	石垣北側埋土	(35.6)	(10.5)	-	30%	体部外面にヘラケズリ、ナデ 内面にスリ目	内・外) 暗赤褐 断) 赤・暗赤	粗　7mm大のチャート微量、2.5mm以下のチャート・白色粒多量含む	反転復元
8	図 12	堺擂鉢	K18a·b3 K18a4	石垣北側埋土	(33.5)	(12.4)	-	20%	体部外面にヘラケズリ、ナデ 内面にスリ目	内・外) にぶい赤褐 断) 赤褐	粗　4mm大以下の石英・チャート微量、2mm以下のチャート・石英・白色粒多量含む	反転復元
9	図 12	丹波徳利	K18a·b3 K18a4	石垣北側埋土	3.4	24.9	9.8	90%	体部外面中位に細かいカキ目 底部外面一部に離れ砂付着	内・断) 灰 外) 黒褐・黒	粗　3mm以下の長石・灰色粒多量含む	
10	図 13	京焼系碗	4トレ K17h12	199	(10.0)	(4.3)	-	5%	色絵文様、緑色の笹文	釉) 灰黄 断) 灰白		反転復元
11	図 13	唐津碗	4トレ K17h12	199	-	(3.0)	5.2	45%	底部外面に煤付着	釉) 淡黄 露胎・断) 浅黄橙		一部反転復元
12	図 13	伊万里碗	4トレ K17h12	199	-	(2.6)	高台(4.2)	25%	網目文	釉・露胎・断) 灰白	緻密	反転復元
13	図 13	備前擂鉢	4トレ K17h12	199	(30.0)	(6.1)	-	8%	口縁部 ～ 体部ナデ　内面体部はスリ目	内・外・断) 赤褐	密　長石多く含む	反転復元
14	図 13	染付皿	K18b3	201	-	(1.0)	高台(5.6)	10%	内面見込青花	釉) 明緑灰 露胎・断) 灰白 呉須) 青	緻密	一部反転復元 漳州窯
15	図 13 図版 42	志野皿	J18x4	201	-	(1.5)	高台4.1	30%	高台部底面に円形に沈線	釉・露胎・断) 灰白	緻密	一部反転復元 京焼系 ?
16	図 13 図版 42	瀬戸天目茶碗	J18x4	201	(12.0)	6.0	高台4.0	30%	外面回転ヘラケズリ　高台部底面ヘラ切り	釉) 黒 露胎) 浅黄橙 断) 灰白	緻密	一部反転復元
20	図 24	染付皿	K18m10	5	13.6	3.5	7.2	90%	内面見込に 2 条圏線内に宝珠文、高台は蛇の目状	内) 明青灰・暗青灰・褐 外) 明青灰・灰白 断) 白	密	肥前系
21	図 24 図版 42	瀬戸広東碗	K18m10	5	9.0	5.6	4.5	70%	高台が高く体部が斜め上方に開く　体部と高台部の境に 1 条の圏線を巡らす　体部外面に簡略化した笹状文様施す	内・外) 灰白・暗青灰 断) 灰白	密	一部反転復元
22	図 24	瀬戸水鉢	K18m10	5	(28.4)	7.0	-	5%	体部にヘラ描き文　外面鉄釉	内) 明オリーブ灰 外) 明オリーブ灰・黒 断) 灰白	密　1.5mm以下の灰色粒微量含む	反転復元 19C 前後
23	図 24 図版 42	瀬戸皿	K18m10	5	-	(4.1)	11.1	60%	内面に渦巻き状の文様 (馬の目)	内) 灰黄・黒 外) 灰白 断) 灰黄	粗　1mm以下のチャート・白色粒少量含む	一部反転復元 19C 前後
24	図 24 図版 42	唐津皿	K18a14	50	(11.2)	3.2	(4.8)	40%	高台 ～ 底部は露胎	内・外) にぶい黄・橙 断) 浅黄橙	やや粗　0.5mm以下の褐色粒少量含む	反転復元 17C 前後
25	図 24 図版 42	唐津皿	K18a14	50	10.6	3.0	4.9	80%	高台 ～ 底部は露胎	内) 灰白 外) 灰白 ～ 灰オリーブ・にぶい赤褐 断) 橙	やや粗　1mm大の灰色粒微量含む	17C 初め
26	図 24	唐津皿	K18e7	76	11.7	3.8	4.2	50%	体部は丸く立ち上がった後、やや外反気味に開く	内) 灰オリーブ 外) 暗灰黄・灰白・にぶい赤褐 断) にぶい橙	密　0.5mm以下の白色・黒色粒微量含む	17C 初め
27	図 24	唐津皿	K18e7	76	-	(1.6)	5.7	底部80%	底部に墨書痕、底部内面 4 ヶ所に胎土目痕	内) 灰・黒 外・断) 浅黄 釉) 黒褐・灰	粗　1.5mm以下の白色粒多量含む	一部反転復元 17C 初め
28	図 24	染付碗	K18b14	35	(12.6)	(4.2)	-	20%	体部は丸く内湾気味に立ち上がる沓形、果実の様な文様を施す、体部内面に鉄絵の簡略された文様	内) 灰白・暗青灰 外) 灰白・青黒 断) 灰	密	反転復元 漳州窯 16C 末 ～17C
29	図 24 図版 42	唐津皿	K18b14	35	(15.6)	5.4	5.0	75%	内面に簡略化された図案を配置	内・断) 灰・黒褐 外) 灰・にぶい褐	密　1mm以下の黒色粒少量含む	一部反転復元
30	図 24 図版 43	伊万里蓋	K18c11	40	9.2	3.1	つまみ径3.5	90%	体部外面に圏線を巡らし、その間に粗略した松葉文様	内) 明緑灰 外) 明緑灰・暗青灰 断) 灰白	密	柴垣 ?
31	図 24 図版 43	伊万里碗	K18c11	40	11.1	5.8	4.9	50%	内面見込に 1 条、高台部に 2 条、圏線内に文字　外面は草花文	内・外) 明緑灰・暗青灰 断) 灰白	密	
32	図 24 図版 43	瀬戸皿	K18c11	40	-	(2.2)	4.2	底部80%	銅線釉を蛇の目状はぎ	内・外・断) 灰白 釉) 暗オリーブ	密	一部反転復元
33	図 24	土師器皿	K18a10	197 下層	12.4	2.2	6.5	90%	口縁部ナデ　底体部外面ユビオサエ	内・外・断) 浅黄橙	密　1mm以下の黒色粒含む	
34	図 24	志野皿	K18d10	47	(10.4)	2.1	(5.1)	20%	内外面畳付まで釉薬	内・外・断) 灰白	粗　1.5mm以下の白色粒微量含む	反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
35	図 24	志野皿	K18d10	47	(11.2)	2.4	(6.5)	25%	やや粗い貫入	内・外・断) 灰白	粗　1mm以下の白色粒少量含む	反転復元
36	図 24	灰釉陶器蓋	K18f12	21	13.7	3.5	つまみ径 3.3	55%	内外面細かい貫入　行平鍋	内) オリーブ灰・灰白 外) オリーブ灰 断) 灰	密	
37	図 24	瀬戸皿	K18f12	21	-	1.8	(4.4)	底部 50%	内外面細かい貫入　内面胎土目 3 ヶ所	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の黒褐色粒少量含む	反転復元
38	図 24	青磁小杯	K18y8	98	(7.6)	2.7	(4.9)	45%	粗い貫入	内) オリーブ灰 外) 緑灰 断) 灰	密　0.5mm以下の黒色粒微量含む	反転復元 中国製
39	図 24	土師器焙烙	K18e6	89	-	(4.8)	-	5% 以下	外面に煤付着	内・断) 橙 外) 黒	密　1mm以下の赤色酸化粒少量含む	断面のみ
40	図 24	瀬戸鉢	K18e6	89	(25.7)	5.9	(16.9)	40%	体部内面に波状文　見込に菊文とその周りに波状文、底部内面に 4 ヶ所胎土目	内・外) 灰白 ～ 灰オリーブ・明褐灰 胎土目) にぶい褐 断) 淡黄	粗　2mm以下の灰色粒少量含む	反転復元
41	図 24	土師器皿	J18y7	120	(9.9)	1.8	(6.3)	15%		内・外・断) 灰白	密　1mm以下の赤色酸化粒微量含む	反転復元
42	図 24	染付皿	J18y7	120	(9.0)	2.2	(4.4)	40%	内外面の圏線内に文様、底部は碁笥底	内・外) 明緑灰、暗青灰 露・断) 灰白	密	反転復元 16C 後半
44	図 24	染付皿	J18y4	155	(6.6)	2.9	(2.9)	50%	高台に二重圏線	内・外) 明青灰・暗青灰 断) 灰白	密	反転復元
45	図 24 図版 43	染付碗	J18y4	155	(9.9)	5.9	(3.6)	45%	外面草花文	内・断) 灰白 外) 明青灰・暗青灰	密	反転復元
46	図 24	染付碗	J18y4	155	10.0	5.2	4.2	75%	外面竹梅文	内・外) 明緑灰・青黒 断) 灰白	密	反転復元
47	図 24	土師器焙烙	J18y4	155	(25.2)	(5.3)	-	20%	内外面ヨコナデ、ナデ　口縁部外面に煤付着	内) にぶい褐 ～ 灰黄褐 外) にぶい橙・黒褐 断) にぶい赤褐	やや粗　3.5mm大のチャート・石英微量、0.5mm以下の白色粒・金雲母多量含む	反転復元
48	図 24 図版 43	瓦質土器甕	K18m10	8	(50.0)	(7.4)	-	口縁部 5%	口縁上端部は水平で外側に肥厚	内・外) 灰 断) 灰白	粗　2.5mm以下の石英・チャートを多量含む	断面のみ
51	図 25 図版 44	唐津皿	J17x9	1-86	-	2.5	4.6	50%	底部内面に 4 ヶ所胎土目	内) 黒褐・灰黄褐 外) 褐灰 断) にぶい赤褐	密　0.5mm以下の白色粒微量含む	一部反転復元
52	図 25 図版 44	志野碗	J17x9	1-57	(11.5)	5.6	-	15%	内外面に草花文？	内・外) 灰白・暗青灰・黒褐 断) 灰白	やや粗　0.5mm以下の黒色粒微量含む	反転復元
53	図 25	近世陶器鉢	J17y12	1-470	(12.3)	(3.6)	-	15%	口縁端部は外面に折り曲がる	内) オリーブ灰 外) 暗オリーブ・灰白 断) 灰	密	反転復元
54	図 25	染付碗	J17y12	1-97	9.4	5.4	4.1	60%	外面は梅文　高台部見込に文字？　畳付に離れ砂付着	呉須) 青灰 釉) 灰白	密	一部反転復元
55	図 25	染付碗	J17x8	1-62	9.5	5.0	3.6	60%	外面は網目文　離れ砂付着	釉) 明オリーブ灰	密	
57	図 29	須恵器蓋	J18y8	第 2 面包含層	(13.8)	(3.9)	-	10%	天上部はやや丸みを帯びる　II 型式後半段階	内・外) 灰 断) 灰赤	密　1~2mmの石英少量含む	反転復元
58	図 29	志野鉄釉皿	K18a14	第 2 面包含層	(11.8)	2.7	高台 (6.7)	30%	内面に文様	釉・断) 淡黄 絵) にぶい黄褐 ～ 黒褐	密　3mm大のチャート (?) 極少量含む	反転復元
59	図 29	志野皿	K18j11	第 2 面包含層	(11.0)	2.3	高台 (6.0)	25%		釉・断) 灰白	密　細かい石英少量含む	反転復元
60	図 29 図版 44	志野皿	K18f･g12,f13	第 2 面包含層	(11.8)	2.7	高台 7.0	40%	内面見込に印花スタンプ	釉・断) 灰白 露胎) にぶい黄橙	密	反転復元
61	図 29	唐津皿	K18f･g12,f13	第 2 面包含層	-	(4.6)	高台 (12.0)	5% 以下	外面回転ヘラケズリ　内面ナデ	露胎) 橙 断) にぶい赤褐	精良　1mm以下の白色粒少量含む	反転復元
62	図 29 図版 44	唐津皿	K18f･g12,f13	第 2 面包含層	10.6	3.4	高台 4.1	85%	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内外面藁灰釉、内面胎土目 4 ヶ所	釉・断) 灰白 露胎) にぶい黄橙	精良	
63	図 29	唐津皿	K18a14	第 2 面包含層	(12.0)	2.9	高台 (4.8)	30%	見込に胎土目、高台底部にちりめんじわ	釉) にぶい黄褐 断) 明赤褐	密　細かい白色粒少量含む	反転復元
64	図 29 図版 44	唐津碗	K18f･g12,f13	第 2 面包含層	-	(4.7)	4.5	45%	藁灰釉	釉) 灰白 露胎) にぶい橙 断) にぶい黄橙	密　1mmの白色粒・黒色粒少量含む	一部反転復元
65	図 29	土師器皿	K17g23	第 2 面包含層	(8.4)	2.5	(6.8)	25%	器壁が薄く、口縁部は直立気味に内湾して立ち上がる	内) 浅黄橙 外・断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒、1mmの石英・雲母含む	反転復元
66	図 29	土師器皿	K17c25	第 2 面包含層	(10.0)	3.5	(7.0)	35%	口縁部はヨコナデ　体部内面工具によるナデ	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒含む	反転復元
67	図 29	山茶碗皿	K18g10	第 2 面包含層	(9.7)	2.7	高台 (4.4)	25%	底部回転糸切り　貼付高台　尾張第 4 型式	内自然釉) 灰オリーブ 外・断) 灰白	密	反転復元
68	図 29	山茶碗皿	K18a5	第 2 面包含層	-	(0.7)	4.2	底部 100%	高台は退化　底部外面に墨書渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密	一部反転復元 13C 前後
69	図 29	播磨土鍋	K18g･h12	第 2 面包含層	(21.0)	6.7	(19.3)	30%	体部外面に格子タタキ　底部に煤付着	内・断) にぶい赤褐 外) 灰	密　細かい白色砂粒多量含む	反転復元
70	図 29 図版 44	土師器鍋	K18j11	第 2 面包含層	(17.7)	(6.4)	-	5%	内側に屈曲した口縁部の下に突帯巡る　南伊勢羽釜形？	内・外) 灰黄褐 ～ 褐灰 断) 黄灰 ～ 黒	密　1mm位の石英・チャート多量、細かい雲母少量含む	反転復元 16C
71	図 29 図版 44	土師器鍋	K17f24	第 2 面包含層	(25.6)	(6.9)	-	5%	器壁厚く、口縁部は受け口状に開く	内) 赤黒 外) 極暗赤褐 断) 赤褐	密　1mm以下の白色粒含む	反転復元 讃岐 or 備後
72	図 29	土師器鍋	J18w2	第 2 面包含層	(28.6)	(3.3)	-	10%	口縁部は「く」の字状に大きく外反　端部上方に摘み上げる	内・断) にぶい橙 外) 極暗赤褐	密　1mm以下の白色粒少量含む	反転復元 南伊勢
73	図 29	土師器鍋	K17c25	第 2 面包含層	(30.6)	(2.6)	-	5%	口縁部は「く」の字状に大きく外反　端部上方に摘み上げる	内・外・断) にぶい橙	密　1mm以下の白色粒少量含む	反転復元 南伊勢

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
74	図 29	瓦質土器 羽釜	K18d8	第 2 面 包含層	(17.4)	(6.0)	-	口縁部 10%	内傾した口縁部の下に突帯巡る 内面ハケ調整　体部外面ヘラケズリ	内) 灰 外) 暗灰 ～ 黒褐 断) にぶい黄橙	密　1㎜以下 ～3㎜の石英中量、1～5㎜のチャート少量、1～2㎜の赤色酸化粒少量含む	反転復元
75	図 29 図版 44	瓦質土器 香炉？	K18a6	第 2 面 包含層	(11.4)	4.3	(9.0)	25%	体部中央に円形浮文を貼り巡る 上下にスタンプによる文様	内) 灰 外) 暗灰 断) 灰白	密　細かい白色砂粒少量含む	反転復元
76	図 29 図版 44	瓦質土器 風炉	J18w2	第 2 面 包含層	(28.2)	(7.1)	-	口縁部 10%	口縁部 2 条の貼付突帯の間にスタンプによる文様 体部に透し孔	内) 橙 外) 暗灰 ～ にぶい黄橙 断) 橙 ～ 暗灰黄 ～ にぶい黄橙	密　細かい雲母中量、1㎜位の石英少量含む	反転復元
77	図 29	東播系須 恵質鉢	K18a1	第 2 面 包含層	(21.6)	(2.6)	-	5% 以下	口縁部ナデ 体部外面回転ヘラケズリ	内・断) 灰 外) 灰・暗灰	密　1㎜の白色粒含む	反転復元
78	図 29	東播系須 恵器 こね鉢	K18a1	第 2 面 包含層	(20.3)	(5.4)	-	口縁部 20%	内外面回転ナデ 斜め上方に伸びる口縁部で端部を内側に折り込む	内・外・断) 灰	密　1㎜以下の石英中量含む	反転復元
79	図 29	瀬戸 縁釉小皿	K18c1	第 2 面 包含層	(12.0)	2.8	高台 (6.4)	45%	内面見込に印花 高台低い 大窯 2 の古	釉) オリーブ黄 断) 灰白	緻密　やや粗い	反転復元
80	図 29 図版 45	瀬戸 縁釉小皿	J18y2	第 2 面 包含層	9.5	2.5	4.8	99%	古瀬戸後Ⅲ期	釉) 灰オリーブ 露胎) 灰	密　13㎜小石含む	
81	図 29 図版 45	瀬戸 皿	J18w2	第 2 面 包含層	(11.4)	2.4	(5.2)	45%	口縁部灰釉 重ね焼痕 古瀬戸後Ⅱ期	釉) 灰オリーブ 露胎) 灰黄 断) 灰白	密　1㎜の黒色粒含む	反転復元
82	図 29	瀬戸 丸皿	K18h12	第 2 面 包含層	(10.0)	2.3	高台 (5.5)	20%	高台低い 高台底部に重ね焼痕 大窯 3 の前兆	釉) オリーブ灰 断) 灰白 ～ 橙	密	反転復元
83	図 29	瀬戸 縁釉小皿	K17h23	第 2 面 包含層	10.2	2.8	5.5	50%	平らな底面 ～ やや外反気味に立ち上がる 外面露胎 古瀬戸後Ⅲ期	釉) オリーブ黄 露胎・断) 灰白	密　2㎜の白色粒少量含む	
84	図 29	瀬戸 縁釉小皿	K17g23	第 2 面 包含層	(11.8)	2.5	4.2	50%	平らな底面 ～ やや外反気味に立ち上がる 古瀬戸後Ⅲ期	釉) 灰オリーブ 露胎) 灰黄 断) 灰白	緻密　1㎜以下の黒色粒含む	一部反転復元
85	図 29	瀬戸 縁釉小皿	K18c5	第 2 遺構面	(9.2)	(3.1)	(5.0)	25%	底部は回転糸切り 鉄釉 古瀬戸後Ⅲ期	釉) 黒褐 ～ 褐 断) 灰黄	密	反転復元
86	図 29 図版 45	瀬戸 輪花小鉢	K17b25	第 2 面 包含層	(9.0)	3.9	(5.2)	50%	体部下半まで鉄釉を施す 輪花 6 弁 底部 ～ 高台露胎 古瀬戸後Ⅱ ～ Ⅲ期	釉) 黒褐	密　1㎜以下の白色粒・黒色粒含む	一部反転復元 14C 前半
87	図 30 図版 45	瀬戸 卸皿	K17e24	第 2 面 包含層	16.0	3.3	8.0	80%	片口 底部内面に格子状のスリ目 古瀬戸後Ⅰ期	釉) オリーブ黄 断) 灰黄	密　1㎜以下の黒色粒、10㎜の白色粒含む	
88	図 30	瀬戸 平碗	J18w2	第 2 面 包含層	(17.4)	(4.8)	-	5%	口縁部は斜め上方に伸びる 古瀬戸後Ⅱ期	釉) 浅黄 露胎) にぶい黄橙 断) 灰白	緻密　1㎜の黒色粒少量含む	反転復元
89	図 30 図版 45	瀬戸 天目茶碗	K18c1	第 2 面 包含層	-	(5.6)	高台 4.1	40%	底部 ～ 高台部は露胎 古瀬戸後Ⅱ期 c 類	釉) 黒 ～ 暗赤灰 露胎) 暗赤灰 ～ にぶい赤褐 ～ 灰白	密	一部反転復元
90	図 30	瀬戸 天目茶碗	K18c7	第 2 面 包含層	(12.0)	(4.8)	-	10%	古瀬戸後Ⅳ期新	釉) 黒 ～ 褐 断) 浅黄橙	密	反転復元
91	図 30	瀬戸 直縁大皿	J18y2	第 2 面 包含層	-	(6.5)	-	5% 以下	古瀬戸後Ⅱ期	釉) オリーブ黄 断) 灰黄	密　1㎜以下の白色粒少量含む	断面のみ
92	図 30	瀬戸 折縁深皿	K17f24	第 2 面 包含層	(29.6)	(5.8)	-	5% 以下	古瀬戸後Ⅰ期	釉) 灰白 断) 浅黄	密　1㎜の白色粒少量含む	反転復元
93	図 30	瀬戸 擂鉢	K18h12	第 2 面 包含層	(27.0)	(5.1)	-	5% 以下	体部内面に細かいスリ目 大窯 2	内・外) 暗赤灰 断) にぶい黄橙 ～ 灰白	密　1～2㎜の石英微量含む	反転復元
94	図 30	瓦質土器 擂鉢	J18v2	第 2 面 包含層	(32.2)	(8.2)	-	5%	口縁上端部はナデ 内面 1 単位 2 ㎝強の細かく浅いスリ目	内・外・断) 灰	密　2㎜程の白色粒少量含む	反転復元
95	図 30	常滑 広口壺	J18w2	第 2 面 包含層	(16.0)	(6.7)	-	5% 以下	口縁は「N」字状にひしゃげてくっつく 内外面ヨコナデ、ナデ	内) にぶい赤褐 外) 暗赤褐 断) 灰褐	密　1㎜の白色粒含む	反転復元
96	図 30	常滑 甕	J18w2	第 2 面 包含層	-	(8.2)	-	5% 以下	口縁は「N」字状にひしゃげてくっつく 内外面ヨコナデ、ナデ	内) 暗赤褐 外) 灰オリーブ 断) 灰	密　1～2㎜の白色粒・黒色粒含む	断面のみ
97	図 30 図版 45	常滑 甕	K18g10	第 2 面 包含層	-	(7.3)	-	5% 以下	口縁部は下部に垂下し、端部は内側に折り曲げる	内) 褐灰 ～ にぶい赤褐 外) 褐灰 断) にぶい橙 ～ 褐灰	密　1～1㎜以下の石英中量含む	断面のみ
98	図 30 図版 45	常滑 壺	K18g10	第 2 面 包含層	(15.6)	(4.2)	-	口縁部 10%	外反した口縁端部が上方に立ち上がり「L」字状になる　内面自然釉	内) 褐灰 ～ 灰褐 自然釉) 灰白 外) 灰褐 断) 灰	密　細かい白色砂粒中量含む	反転復元 13C 中頃
99	図 30	常滑 甕	K18a1	第 2 面 包含層	(23.0)	(8.8)	-	5% 以下	口縁部は外側に垂下し、端部は上方に摘む　頸部外面及び肩部内面にユビオサエ	内) 黒 外) 灰白 断) 黄灰	密　1㎜以下の白色粒含む	反転復元
100	図 30	常滑 甕	K17i23	第 2 面 包含層	(49.4)	(11.0)	-	5% 以下	大型　口縁部は外側に垂下し、端部は上方に摘む	内) 黒 外) オリーブ灰 断) 黄灰	密　1～2㎜の白色粒、5㎜の細砂粒含む	反転復元
101	図 30 図版 45	渥美 三筋壺	K18g10	第 2 面 包含層	-	(10.8)	8.1	30%	体部下半に 2 条の沈線	内) 灰褐 外) 灰黄褐 断) 灰黄褐 ～ 褐灰	密　1～2㎜の石英中量含む	一部反転復元 渥美 13C 初め
102	図 30 図版 45	備前 擂鉢	K18a1	第 2 面 包含層	(25.6)	(5.2)	-	口縁部 10%	口縁部は上方に立ち上がる	内) 赤灰 ～ 赤褐 外) 赤灰 ～ 赤橙 断) 暗赤灰 ～ 灰	密	反転復元
103	図 30	備前 擂鉢	K18j11	第 2 面 包含層	(22.2)	(5.8)	-	5% 以下	口縁部に凹線	内) 灰赤 外) 暗赤灰 ～ 灰赤 断) 灰白	密　1㎜以下の石英 (?) 中量含む	反転復元 16C
104	図 30	備前 擂鉢	K18a1	第 2 面 包含層	(29.0)	(7.9)	-	5% 以下	内面に煤付着	内) 褐灰 ～ 灰 外) 褐灰 断) 暗赤灰	密　1～3㎜の石英中量含む	反転復元
105	図 30	備前 擂鉢	K17c25	第 2 面 包含層	(25.0)	(7.2)	-	10%	内外面ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ	内・外・断) 暗赤褐	精良　1㎜の白色粒、2~3㎜の細砂粒含む	反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
106	図 30	備前擂鉢	K17c25	第 2 面包含層	(34.4)	(6.5)	-	5%	口縁部に凹線は入らず　備前Ⅳ期後半	内) 褐灰 外) 灰褐・褐灰 断) にぶい赤褐	密　1mm以下の白色粒、4mmの細砂粒少量含む	反転復元 15C 初め
107	図 31 図版 46	備前擂鉢	K18d3	第 2 面包含層	-	(6.2)	-	5%以下	片口	内・断) 褐灰 外) 褐灰 ～ 暗赤褐	密　1~3mmの石英少量含む	断面のみ
108	図 31 図版 46	備前壺	K18a1	第 2 面包含層	(30.6)	(5.8)	-	5%	端部は宝珠形に近い丸みを持つ備前Ⅲ期	内) 黒褐 外) 暗赤褐 断) 灰褐	密　1mm以下の白色粒、1~2mmの細砂粒含む	反転復元 14C
109	図 31 図版 46	備前甕	K18c1	第 2 面包含層	-	(5.6)	-	2%	凹線は入らず扁平　備前Ⅳ期	内・外・断) 暗赤褐	密　1~2mmの白色粒、5mmの細砂粒含む	断面のみ 15C
110	図 31 図版 46	備前甕	J18v2	第 2 面包含層	-	(6.5)	-	5%以下	口縁部は上方に伸び、端部は外面に折り曲がる	内) 灰赤 外) 暗赤褐 断) 灰	密　1~3mmの石英中量含む	断面のみ
111	図 31	備前小型甕	K18j11	第 2 面包含層	(17.2)	(5.7)	-	5%以下	口縁端部内面が受け口状　内外面回転ナデ	内) 灰赤 外) 赤灰 断) 灰白	密　1~2mmの黒色粒少量含む	反転復元
112	図 31	青磁碗	J18y7	第 2 面包含層	(14.3)	(4.1)	-	口縁部10%	無紋　口縁部は斜め上方に伸び、端部はやや外反する　外面に 2 次焼成痕	釉) オリーブ灰 ～ 灰白 断) 灰白	密	反転復元
113	図 31	青磁碗	J18y2	第 2 面包含層	-	(3.0)	高台5.5	30%	高台内面に「十」の墨書	釉) 明オリーブ灰 露胎) 褐灰 断) 灰白	緻密	一部反転復元
114	図 31	白磁皿	K18c1	第 2 面包含層	(11.8)	(2.2)	-	10%	口縁端部は外反	内・外・断) 灰白	密	反転復元 16C 中頃 ～ 後半
115	図 31	白磁皿	K17f25	第 2 面包含層	(11.0)	(1.8)	-	15%	体部 ～ 口縁部は緩やかに内湾気味に立ち上がる	釉・断) 灰白	緻密	反転復元 15C
116	図 31	白磁皿	K18a1	第 2 面包含層	(9.4)	2.4	高台3.3	30%	体部 ～ 口縁部は緩やかに内湾気味に立ち上がる　底部外面に朱漆の丸い点	釉・断) 灰白	密	一部反転復元
117	図 31	白磁皿	K17c25	第 2 面包含層	-	(1.2)	高台(4.0)	20%	割り高台　体部下半 ～ 高台にかけて露胎　高台内面に「十」の墨書	釉・断) 灰白 露胎) 浅黄	緻密	一部反転復元 15C
118	図 31	染付碗	K18c7	第 2 面包含層	-	(1.3)	高台4.3	高台部60%	内底部の釉を重ね焼のため輪状に削り取る　全体的に粗雑	釉) 灰白 呉須) 青灰 断) にぶい橙	やや粗　1mmの石英・黒色粒微量含む	一部反転復元 漳州窯か
122	図 35	土師器灯明皿	K18b8	300-A 室南面裏	8.8	2.5	6.3	85%	器壁極めて薄い　体部 ～ 口縁部は緩やかに内湾気味に立ち上がる　外面に煤付着	内) 淡橙 外) にぶい橙 断) 淡橙	密　1mm以下の黒色粒少量含む	15C 後半
123	図 35	青磁皿	K18a8	300-A 室ｾｸｼｮﾝ	-	1.5	4.9	高台100%	畳付部のみ露胎　底部外面に朱漆による三角形状の記号	内) オリーブ灰 外) 緑灰　底部朱) 暗赤褐 断) 灰	密	一部反転復元
124	図 35	施釉陶器天目茶碗	K18a9	300-C 室	(11.7)	(3.2)	-	20%	体部 ～ 口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は外反する	内・外) にぶい橙・黒褐 断) 灰	密	反転復元 中国製
125	図 35	青磁碗	K18a8	300-A 室東西石除去時	(14.5)	(4.1)	-	12%	体部に片切彫のやや雑な蓮弁	内・外) オリーブ灰 断) 灰白	密　0.5mm以下の褐色粒少量含む	反転復元 14C
126	図 35	青磁皿	K18a8	300-A 室東西石除去時	-	(2.0)	(12.2)	12%	比較的大きな皿	内・外) オリーブ灰 断) 灰白	密	反転復元 14C
127	図 35	白磁皿	K18a8	300-E 室床面下	(9.0)	(1.5)	-	12%	体部下半は露胎	内・外) 白・灰白 断) 灰白	密	反転復元 15C
128	図 35	常滑甕	K18a8	300-E 室床面下	(35.8)	(10.5)	-	5%	口縁部は「N」字状にひしゃげる	内) 灰赤 外) 赤黒 断) 褐灰	やや粗　1.5mm以下の白色粒多量、4 × 7mm大の灰色石 1 ヶ含む	反転復元 15~16C
139	図 38	土師器鍋	K18c5	414	(30.5)	(4.1)	-	12%	口縁部は「く」の字状に屈曲し端部を上方に摘み上げる　外面口縁部下半に細かいハケ調整	内) 灰白 外) にぶい黄橙 断) 灰白 ～ 暗灰	密　1mm以下の黒色粒微量含む	反転復元 南伊勢 15C 中頃 ～ 後半
140	図 38 図版 47	青磁皿	K18c5	414	(12.4)	2.7	(5.8)	50%	体部下半 ～ 高台部は露胎、内底面は蛇の目状に削り取る	内・外) オリーブ灰・灰白 断) 灰白	密	反転復元
141	図 38 図版 47	青磁碗	K18c5	414 1･2 層	-	(3.0)	(5.2)	40%	線描による幅広の蓮弁か	内・外) オリーブ灰・にぶい黄橙 断) 灰白	やや密　1mm以下の褐色粒多量含む	反転復元 14C 後半
142	図 38	施釉陶器皿	K18c5	414	-	(1.3)	(4.4)	30%	割り高台、底部内面に胎土目	内・外・断) 灰白	密　0.5mm以下の黒色粒少量含む	反転復元
143	図 38	備前甕	K18c4	414	(38.0)	(5.5)	-	5%	口縁部は丸みを保ちながらやや扁平	内・外) 暗赤褐 断) 灰白	やや粗　1mm大の白色・黒色粒少量含む	断面のみ 14C 後半
144	図 38	常滑甕	K18c4	414	(46.4)	(5.2)	-	5%	口縁部は「N」字状、中野 10 型式	内・外) 極暗赤褐 断) 灰	やや粗　1.5mm以下の白色粒多量含む	反転復元 15C 前半
145	図 38	瀬戸卸目付大皿	K18d4	414 裏込め	(30.9)	(7.2)	-	10%	三足の付くタイプ　細かい貫入 古瀬戸後Ⅱ期	内) 灰オリーブ 外) 灰オリーブ・灰黄 断) 灰黄	やや粗　1mm以下の黒色・白色粒少量含む	反転復元 14C 末 ～ 15C 前半
146	図 38	土師器皿	J18x7	415	(9.5)	2.2	(8.7)	口縁部20%	器壁が薄く、直立気味に内湾して立ち上がる	内・外) 褐灰 断) 灰黄褐	密　細かい白色砂粒少量含む	反転復元 南伊勢 15C 前後
147	図 38	土師器皿	J18y6	415	(10.0)	2.3	(4.8)	15%	口縁部が斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収める　底部がやや厚い	内・外・断) 浅黄橙 ～ 灰白	密　1mmの石英微量含む	反転復元
148	図 38 図版 47	土師器皿	J18y6	415 床面	(10.8)	2.7	(6.8)	25%	口縁部が斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収める　底部がやや厚い	内・断) 浅黄橙 外) 浅黄橙 ～ 灰白	密	反転復元
149	図 38	土師器皿	J18y6	415	(12.0)	3.0	(7.0)	20%	口縁部が斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収める　底部がやや厚い	内・断) 灰白 外) 浅黄橙	密　1mm以下の褐色粒を少量含む	反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
150	図 38	瀬戸端反皿	J18y6	415	(12.8)	2.8	高台(7.0)	30%	腰折れ状に立ち上がった後、口縁部は外反　断面三角形の低い高台　美濃登窯第４段階	釉) 灰白	密	反転復元
151	図 38 図版 47	瀬戸縁釉小皿	J18y6	415	(11.7)	2.3	(5.9)	45%	底部がやや厚く口縁部が斜め上方に立ち上がる　古瀬戸後Ⅰ期	釉) オリーブ灰 露胎・断) 灰白	密	反転復元 15C 中頃
152	図 38 図版 47	瀬戸柄付片口鉢	J18y7	415	(13.5)	7.5	9.1	60%	貼付の把手　底部は回転糸切り古瀬戸後Ⅱ期	釉) 明オリーブ灰 露胎) 灰黄・橙 断) 灰白 ～ にぶい黄橙	密	反転復元
153	図 38	瀬戸天目茶碗	J18y6	415	(12.0)	(5.1)	-	5% 以下	口縁部で「く」の字状に折れ曲がる	釉) 灰褐 ～ 黒 露胎) 褐灰 断) 灰白	密	反転復元
154	図 38	瀬戸折縁深皿	J18x7	415	-	(9.1)	-	5% 以下	三足の付くタイプ　古瀬戸後Ⅱ期	釉) にぶい黄 露胎) 灰白・灰黄褐 断) にぶい黄橙	密	断面のみ
155	図 38	瀬戸折縁深皿	J18y6	415	-	(7.0)	-	5%	三足の付くタイプ　古瀬戸後Ⅱ期	内・断) 灰白 外) 灰	密	断面のみ
156	図 38	常滑甕	J18y6	415	-	(7.5)	-	5% 以下	口縁部は「N」字状をもつ　外面体部ハケ後ナデ	内) 赤灰 ～ にぶい赤褐 外) 灰赤 断) 暗赤灰	密　1~3㎜の石英多量含む	断面のみ 14C 末 ～15C
157	図 38 図版 47	備前擂鉢	J18y6	415	(32.0)	(9.7)	-	10%	口縁部は斜め水平で上下にわずかに拡張する　９本 / 単位のスリ目　重ね焼き痕	内) 灰褐 外) 灰褐 ～ にぶい赤褐 断) 黄灰	密　1~2㎜の石英・チャート少量含む	反転復元 14C 後半
158	図 38	白磁碗	J18y6	415	(9.8)	(1.9)	-	5% 以下	口禿げ	釉・断) 灰白	緻密	反転復元 13C
159	図 38	備前擂鉢	J18y6	415	(34.0)	(6.1)	-	5% 以下	体部外面に縦方向の削り痕	内) 褐灰 ～ にぶい赤褐 外) にぶい赤褐 ～ 褐灰 断) 赤灰	密　細かい白色砂粒中量含む	反転復元 14C 後半
160	図 38	土師器皿	J18y7	1994	(10.0)	1.9	-	25%	口縁部ヨコナデ　体部 ～ 口縁部は緩やかに立ち上がる	内・外・断) 灰白	密	反転復元 15C 遺構 415 内
161	図 41	土師器皿	K18a6	416	(12.0)	3.0	-	30%	体部 ～ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がり、体部内面のハケ調整が顕著	内・外・断) 灰白	密　1~2㎜のチャート微量含む	反転復元
162	図 41 図版 47	磁器天目茶碗	K18a6	416	(10.8)	(4.0)	-	口縁部 25%	口縁端部は外反し、口縁部がとがっている　体部下半は露胎　釉の２度がけ	釉) 黒 ～ 暗褐 露胎) 浅黄 断) 灰白	密	反転復元 中国製 15C 前後
163	図 41	瀬戸折縁深皿	K18a6	416	-	(4.4)	-	5% 以下	古瀬戸後Ⅰ期	釉) 灰オリーブ 露胎) 浅黄 断) 灰白	密	断面のみ 14C 中頃 ～ 後半
164	図 41 図版 47	瀬戸合子蓋	K18a6	416	4.4	1.3	裾径 1.8	95%	外面のみ施釉、頂部に摘みなし古瀬戸後	釉) 褐 ～ にぶい黄橙 断) 浅黄橙	密	15C 前後
165	図 41	青磁皿	K18a6	416	(11.3)	3.1	高台 6.4	70%	口縁端部は丸みを持ち外反　底部は露胎　やや腰の張ったプロポーション	釉) オリーブ灰 露胎) にぶい黄橙 断) 灰白	密　細かい白色砂粒を中量含む	一部反転復元 14C 後半 ～ 15C 初
166	図 41	常滑片口鉢	K18a6	416	-	(6.2)	-	5% 以下	口縁端部が上下に拡張	内) 褐灰 ～ 灰褐 外) 褐灰 断) 黒褐	密　1~6㎜位の石英中量含む	断面のみ 15C 中頃 ～ 後半
167	図 41	備前擂鉢	K18a6	416	-	(6.5)	-	5% 以下	口縁端部はやや上下に拡張する、斜め上方に立ち上がる	内・外) 黒褐 断) 灰赤	密　1~3㎜の石英少量含む	断面のみ 14C 後半
168	図 41	備前甕	K18a6	416	-	(7.0)	-	5% 以下	口縁部は丸みを帯びる	内) にぶい赤褐 外) にぶ赤褐 ～ 灰褐 断・釉) 灰白	密　細かい石英少量含む	断面のみ 14C 末 ～ 15C 前半
169	図 41 図版 47	青白磁瓶	K18a6	416	-	(12.5)	(9.5)	底部 50%	体部全面に櫛描きによる渦花文	釉) 明緑灰 露胎) にぶい黄橙 ～ 灰黄 ～ 黄褐 断) 灰白	密	反転復元 13C 後半
170	図 41	土師器皿	K18m10	592	(14.0)	2.4	-	10%	口縁部は斜め上方に伸び、端部は丸みをもつ　口縁部ヨコナデ	内・外・断) 灰白	密　細かい赤色酸化粒微量含む	反転復元
171	図 41	志野皿	K18m10	592	(10.9)	3.0	高台 (5.2)	20%	回転ナデ、回転ヘラケズリ、登窯第１段階	釉) 灰黄 断) 黄灰 ～ 淡黄	密	反転復元 17C 初め
172	図 41	志野皿	K18m10	592	15.2	4.0	高台 5.5	97%	底部から腰折れ状に立ち上がり、口縁は外反する　貼付高台大窯４	内・外) 灰黄 断) にぶい黄橙	やや粗	16C 末 ～ 17C 初め
173	図 41	常滑鉢	K18m10	592 5 層	-	(6.0)	-	5% 以下	口縁部は斜め上方に伸び、端部はやや上下に拡張	内・外) 灰赤 断) 灰褐 ～ にぶい赤褐	密　1~2㎜の石英中量含む	断面のみ
174	図 41	白磁碗	K18m10	592 2-4 層	-	(3.3)	-	5% 以下	口縁部は斜め上方に伸び、端部内面に沈線	釉・断) 灰白	密	断面のみ 中国製
175	図 41	備前鉢	K18m10	592	(27.5)	5.0	(24.3)	5% 以下	口縁部は上方に内湾して立ち上がる	内) 灰赤 ～ 暗赤灰 外) 暗赤灰 ～ 灰褐 断) 褐灰	密　細かい石英中量含む	反転復元
176	図 41	山茶碗碗	K18ℓ11	600 上層	-	(1.9)	高台 5.4	底部 90%	断面三角形の高台が雑に付く　尾張第４型式か	内・外・断) 灰白	密　細かい石英少量含む	一部反転復元 12C 後半
177	図 41	黄瀬戸？器種不明	K18ℓ11	600	-	(3.3)	高台 7.1	高台部 60%	断面三角形を呈した高台が丁寧に付く	釉) 明黄褐 露胎) にぶい橙 断) 灰白	やや粗　最大 2㎜のチャート微量含む	一部反転復元 16C 後半？
178	図 41 図版 47	土師器皿	K18d11	690	11.0	3.0	-	98%	体部 ～ 口縁部は丸く立ち上がる　内面は丁寧なナデ　体部下半 ～ 底部は粗いオサエ	内・外・断) 浅黄橙	密　1~2㎜の石英少量含む	反転復元
179	図 41	土師器土鍋	K18d11	690	(24.7)	(1.7)	-	5% 以下	口縁端部を内側に折り曲げるように押え込む　外面に煤付着	内・断) にぶい橙 外) 灰褐 ～ 黒	密　1~4㎜の石英微量含む	反転復元 南伊勢 15C 前半
180	図 45 図版 48	土師器小皿	K18c8	760 1 層	(8.2)	1.9	(6.0)	30%	体部 ～ 口縁部にかけて斜め上方に立ち上がる　口径小さい　底部が比較的平ら	内・外・断) 灰白	密　1~2㎜の石英微量含む	反転復元 13C
181	図 45 図版 48	土師器皿	K18c8	760 1 層	(10.0)	2.7	(6.5)	50%	体部 ～ 口縁部にかけて斜め上方に立ち上がる　口径小さい　底部が比較的平ら	内・外・断) 灰白	やや密　1㎜以下の灰色・褐色粒少量、4㎜大の白色石１ヶ含む	反転復元 13C

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
182	図 45	土師器皿	K18c8	760	10.8	2.8	5.6	90%	体部～口縁部は内湾気味に丸く立ち上がる	内・外・断) 灰白	密　1.5㎜以下の白色粒微量含む	反転復元
183	図 45 図版 48	土師器皿	K18c8	760	10.9	3.0	-	98%	体部～口縁部は内湾気味に丸く立ち上がる　内面はハケ調整	内) 灰黄褐 外) 褐灰 断) にぶい黄橙	密	反転復元 14C
184	図 45 図版 48	土師器皿	K18c8	760	10.0	2.8	-	95%	体部～口縁部は内湾気味に丸く立ち上がる　内面はハケ調整	内・外) にぶい黄橙 断) 灰白	密　1㎜以下の灰色粒微量含む	反転復元 14C
185	図 45	土師器小皿	K18c8	760 1 層	(11.4)	2.8	(5.2)	15%	口径は大きい　口縁部は強いヨコナデにより外反	内) にぶい橙 外・断) 浅黄橙	密　1㎜以下の黒色粒、2㎜の砂粒少量含む	反転復元 14C
186	図 45	土師器小皿	K18c9	760 焼土層	(10.4)	2.6	(6.0)	60%	体部～口縁部は内湾気味に丸く立ち上がる　内面はハケ調整	内) 黒褐 外) にぶい黄橙 断) 灰白	密　3㎜の白色粒少量、1㎜以下の白色粒・黒色粒少量含む	反転復元
187	図 45	土師器皿	K18b8	760 1 層	(12.4)	4.8	5.0	25%	体部～口縁部は内湾気味に丸く立ち上がる　内面はハケ調整	内・外・断) 灰白	密　1～2㎜大の石英微量含む	反転復元
188	図 45	土師器小皿	K18c8	760 1 層	(11.2)	2.4	(3.0)	20%	口径は大きい　口縁部は強いヨコナデにより外反	内・断・外) 灰白	密　1㎜の黒色粒含む	反転復元 14C
189	図 45	弥生土器甕	K18c8	760	(13.2)	(4.4)	-	15%	口縁部は「く」の字状に外反、端部を摘み上げる、端面は平滑に仕上げる　頸部下方にタタキ痕	内・断) にぶい橙 外) にぶい赤褐	やや密　1.5㎜以下の褐色・灰色粒少量含む	反転復元
190	図 45	山茶碗碗	K18c8	760 1 層	(14.4)	(3.4)	-	15%	少量のタール付着、渥美第 5 型式併行	内・断・外) 褐灰	密　1㎜以下の黒色粒・白色粒含む	反転復元 13C 前後
191	図 45	常滑鉢	K18c8	760 1 層	(30.2)	(3.4)	-	5%	口縁上端部に凹線状に窪みが廻る、尾張第 7 型式中	内・外・断) 灰黄	密　1㎜以下の白色粒、1～2㎜の黒色粒・砂粒、5㎜の白色粒少量含む	反転復元 13C
192	図 45	東播系須恵質こね鉢	K18c8	760 1 層	(32.2)	(3.0)	-	5% 以下	口縁部は上方に立ち上がり、端部は上下に垂下	内・外) 灰 断) 黄灰	密　1㎜以下の白色粒含む	反転復元
193	図 45	常滑甕	K18b8	760 1 層	(31.4)	(5.3)	-	5%	口縁部は外側に折り曲げ垂下	内) 灰・暗赤褐 外) 暗赤灰 断) 黒	やや粗　1～3㎜大の白色粒多量、6㎜大の灰色石 1 ヶ含む	断面のみ
194	図 45	常滑甕	K18c8	760 1 層	-	(6.6)	-	5% 以下	口縁部は外側に折り曲げ垂下	内) 灰赤 外) 暗赤褐 断) 褐灰	密　1㎜の白色粒、2～3㎜の白色粒、5㎜細砂粒含む	断面のみ
195	図 45	常滑甕	K18c8	760	(39.2)	(7.2)	-	5%	口縁部は外側に折り曲げ、端部は肥厚	内・外) 黒褐 断) 黒	粗　0.5～4㎜大の石英、暗褐色粒多量含む	断面のみ
196	図 45	常滑甕	K18c8	760 1 層	-	(9.6)	-	8%	口縁部は「N」字状を呈し、頸部に接する	内) 灰黄褐 外) 暗赤褐 断) 灰	密　1～2㎜の白色粒・長石 5㎜の石英含む	断面のみ 14C 前半
197	図 45	常滑壺	K18c8	760	(19.3)	(8.4)	-	12%	口縁部は逆「L」字状に立ち上がり、端部が垂下	内) 暗灰 外) 黒褐・オリーブ灰 断) 灰	粗　0.5～5㎜大の黒色・白色粒多量含む	反転復元
198	図 45	常滑壺	K18c8	760	-	(4.0)	-	5%	口縁部は外側に折り曲げ垂下、端部は肥厚	内・外) 黒褐 断) 暗褐	密　1～2㎜の白色粒・砂粒含む	断面のみ
199	図 45	常滑こね鉢	K18b8	760	(30.9)	(5.6)	-	5%	口縁部は斜め上方に伸び、端部を丸く収める　高台の付く片口鉢Ⅰ類か	内) 灰～暗灰 外) にぶい赤褐～暗灰 断) にぶい黄橙～灰	やや粗　1.5㎜以下の白色・灰色粒少量、5㎜大の石英 1 ヶ含む	反転復元
200	図 45 図版 48	磁器壺	K18c8	760 1 層	(8.6)	(5.3)	-	20%	口縁端部は水平ないしやや下方に拡張　釉は削り取る　二次焼成の痕跡	内) 黒 外) 黒・灰 断) 灰	密　0.5㎜以下の白色粒微量含む	反転復元 中国製
201	図 45	磁器壺	K18b8	760 1 層	(9.0)	(2.6)	-	5%	口縁端部は水平ないしやや下方に拡張　釉は削り取る　二次焼成の痕跡	内・外) 黒 断) 灰	緻密	反転復元 中国製 № 200 と同一個体か
214	図 48	土師器皿	K18c13	1200	(11.5)	2.6	(5.0)	45%	体部～口縁部は内湾気味に立ち上がる　体部内面のハケ調整が顕著に残る　体部外面下半にユビオサエ	内・外・断) 灰白	密	反転復元
215	図 48	土師器皿	K18d13	1200	11.4	3.3	6.0	80%	口径に対し器高がやや高い　体部～口縁部は外反気味に立ち上がる	内・外・断) 浅黄橙	密	
216	図 48	土師器皿	K18c13	1200	10.8	2.8	3.4	95%	体部～口縁部は内湾気味に立ち上がる　体部内面のハケ調整が顕著に残る　体部外面下半にユビオサエ	内・外・断) 灰白	密	
217	図 48	土師器皿	K18c13	1200	(11.1)	2.65	4.5	60%	体部～口縁部は内湾気味に立ち上がる　体部内面のハケ調整が顕著に残る　体部外面下半にユビオサエ	内・外・断) 灰白	密	一部反転復元
218	図 48	土師器皿	K18c13	1200	11.0	3.2	3.8	98%	体部～口縁部は内湾気味に立ち上がる　体部内面のハケ調整が顕著に残る　体部外面下半にユビオサエ	内) 浅黄橙 外・断) 灰白	密	
219	図 48	山茶碗小皿	K18d13	1200	(8.8)	2.0	(4.0)	35%	口縁部は斜め上方に伸び、端部は丸い　渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白 釉) オリーブ黄	やや粗	反転復元 13C 前後
220	図 48	山茶碗碗	K18c13	1200	-	(2.8)	7.3	底部 100%	三角形の貼付高台に籾殻圧痕尾張第 5 型式	内・外・断) 灰白	やや粗　黒色粒少量含む	一部反転復元 13C 前後
221	図 48	山茶碗碗	K18d13	1200	(15.9)	(5.6)	-	口縁部 5% 以下	口縁部は斜め上方に立ち上がる尾張第 5 型式	内・外・断) 灰白	やや粗	反転復元 13C 前後
222	図 48	土師器鍋	K18c13	1200	(19.4)	(3.8)	-	10% 以下	口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を内側に折り曲げ扁平	内・外・断) 黒褐	やや粗　1～3㎜の石英少量含む	反転復元 南伊勢 14C 後半
223	図 48 図版 48	瓦質土器こね鉢	K18c13	1200	(31.9)	(10.6)	-	口縁部 25%	体部～口縁部は斜め上方に伸び、端部は平坦	内・外) 灰 断) 灰白	やや粗	反転復元 14C 後半
224	図 48	白磁皿	K18d13	1200	-	(1.9)	(7.0)	底部 20%	厚みのある底部から内湾気味に体部が伸びる	内・外・断) 灰白	密	反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
225	図 48	白磁碗	K18d13	1200	-	(3.7)	(6.0)	底部 25%	ヘラケズリ出し高台で、斜め上方に体部が伸びる	釉・露胎) 灰白	密	反転復元
226	図 48 図版 48	瀬戸燭台	K18c13･14	1324	-	(27.0)	-	50%	古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期	釉) 灰オリーブ 断) 灰白	密	14C 後半～15C 初め
227	図 48	瀬戸丸皿	K18c14	1324 床面	(9.0)	1.9	(5.3)	20%	底体部外面露胎　底部回転糸切り　古瀬戸後Ⅰ期	釉・断) 灰白	密	反転復元 14C 後半
228	図 48	瀬戸天目茶碗	K18c14	1324 床面	(11.1)	(4.9)	-	口縁部 20%	体部下半は露胎　古瀬戸後Ⅱ期	釉) 暗赤褐 断) 灰白	密	反転復元 15C 前後
229	図 48 図版 48	白磁壺	J18y9	1620	(9.0)	(4.4)	-	20%	四耳壺	内・外・断) 灰白	密　0.5㎜以下の黒色粒少量含む	反転復元 中国製
230	図 48	白磁皿	J18y9	1620	-	(1.5)	3.7	30%	体部下半～内底部にかけて露胎細かい貫入	内・外・断) 灰白	密　0.5㎜以下の黒色粒微量含む	反転復元 中国製 15C 前半
231	図 48	常滑甕	J18y9	1620	(45.0)	(19.5)	-	5%	口縁部は「N」字状に扁平　中野 10 型式	内・外) にぶい赤褐 断) 灰褐	密　1㎜以下の白色粒、1～3㎜の白色粒・黒色粒・細砂粒含む	反転復元 15C 中頃
238	図 50 図版 49	常滑壺	J17x6･7	1621	(19.4)	(4.0)	-	口縁部 10%	口縁部は垂下し、端部上部に摘み上げる　外面板状工具によるナデ	内) 暗褐 釉) オリーブ灰 外) 暗赤褐 断) 灰	やや粗　1.5㎜以下の白色・褐色粒少量含む	反転復元
239	図 50 図版 49	瓦質土器こね鉢	J17x6･7	1621	(32.8)	(5.8)	-	口縁部 5%	内面はヨコ方向のハケ調整	内) 黄灰 外) 灰 断) 灰黄	密　1㎜以下の白色・黒色粒微量含む	反転復元
240	図 53	山茶碗碗	J18y13	1700 (205 の裏込め含む)	-	(2.6)	7.5	60%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	やや密　1㎜以下の白色粒少量含む	一部反転復元 13C 前後
241	図 53	染付皿	J18y13	1700 (205 の裏込め含む)	-	(2.2)	(5.3)	底部 25%	内底部の釉薬を蛇の目状に削り取る	内・外) 明緑灰・暗青灰 断) 灰白	密　0.5㎜以下の黒色粒微量含む	反転復元 中国製
242	図 53	染付碗	J18y14	1700 (205 の裏込め含む)	(12.2)	(3.1)	-	5%	口縁端部内面に 2 条の圏線	内) 明緑灰・青灰 外) 明緑灰 断) にぶい赤褐	密	反転復元 中国製
243	図 53 図版 49	染付皿	J18y13	1700 (205 の裏込め含む)	(26.8)	(3.3)	-	5%	口縁部は体部の中位で屈曲して上方に伸びる　内面は青海波	内・外) 明オリーブ灰・暗青灰 断) 灰白～にぶい橙	密	断面のみ 中国製
244	図 53	唐津鉄釉皿	J18y13	1700 (205 の裏込め含む)	(9.8)	3.0	3.5	70%	内底部に胎土目痕	内) にぶい黄褐～黒 外) 灰褐 断) 明赤褐	密　0.5㎜以下の灰色粒微量含む	一部反転復元 16C 末
245	図 56	土師器鍋	K17e25	4001-A 室	(36.4)	(3.8)	-	5%	口縁部ヨコナデ　外面に煤付着	内) にぶい黄橙 外) 灰黄褐 断) 灰白・灰	やや粗　1.5㎜以下の白色粒少量、5㎜大の白色石 2 ヶ含む	断面のみ 南伊勢 15C 前後
246	図 56	瀬戸卸目付大皿	K17e25	4001	(22.7)	5.2	-	5%	古瀬戸後Ⅳ期	内・外) オリーブ黄・にぶい橙 断) にぶい橙・灰白	やや密　1.5㎜以下の褐色粒を少量含む	断面のみ 15C 中頃
247	図 56 図版 49	青磁香炉	K17e25	4001	(5.0)	4.8	(3.9)	28%	内面の体部下半～底部は露胎平高台、装飾として小さな三足を付す	内) 明緑灰 外) 緑灰 断) 灰白・にぶい橙	密	反転復元 中国製
250	図 56	瀬戸縁釉小皿	K18e1	4001-B 室	(9.9)	2.4	(5.4)	25%	古瀬戸後Ⅲ期	内・外) オリーブ灰・灰白 断) 淡黄	やや粗　1㎜以下の褐色粒を少量含む	反転復元 15C 前半
251	図 56	瀬戸卸皿	K18e1	4001-B 室	(13.0)	(2.0)	-	12%	古瀬戸後Ⅱ期	内・外) 灰オリーブ 断) 灰白	密　1.5㎜以下の白色・黒色粒微量含む	反転復元 15C 前後
252	図 56	備前擂鉢	K18e1	4000-B 室	-	(5.1)	-	2%	口縁端部は上下に大きく拡張、凹線は入らず	内・外) 暗赤褐 断) 赤褐	密　1～2㎜の白色粒・褐色粒含む	断面のみ 15C 中頃
253	図 56 図版 49	常滑片口鉢	K18e1	4000-B 室	(21.4)	(5.5)	-	5% 以下	中野 10 型式	内・断) 黒褐 外) 褐灰	密　1㎜の白色粒・黒色粒含む	反転復元 14C 後半
254	図 56	常滑片口鉢	K18e1	4001-B 室石積検出直上	(35.6)	(8.5)	-	口縁部 10%	口縁端部は拡張　体部内面にスリ目	内) 黄灰 外) にぶい赤褐～褐灰 断) にぶい赤褐	やや粗　1～6㎜位の石英中量含む	反転復元 15C 中頃
255	図 56	白磁皿	K18e1	4001-B 室	-	(1.4)	3.2	5%	畳付～底部は露胎	内・断) 灰白 外) 明緑灰・灰白	密	一部反転復元 中国製 15C
256	図 56 図版 49	白磁皿	K18e1	4001-B 室	(9.9)	2.6	(3.9)	28%	体部下半は露胎	内・外・断) 灰白	密	反転復元 中国製 15C
257	図 56	土師器大皿	K18e1	4001-D 室	(19.8)	(2.7)	-	口縁部 10%	器壁は薄く、内面は丁寧なナデ	内) 灰白～褐灰 外) 灰黄褐 断) 褐灰	密　1㎜位の石英微量含む	反転復元
258	図 56	土師器皿	K18e1	4001-B 室・E 室最終床面下	(10.9)	1.8	-	15%	器壁は薄く、口縁部は丸く立ち上がる	内・外・断) にぶい黄橙	密	反転復元 南伊勢 15C
259	図 56	常滑擂鉢	K18e1	4001-B 室・E 室最終床面下	(25.7)	(12.4)	(14.9)	25%	口縁は体部から斜め上方に伸び、端部は上方に肥厚　底部は薄い	内) 暗赤褐 外) 黒褐～暗赤褐 断) 暗灰	粗　7㎜以下の白色粒多量含む	反転復元 14C 末～15C 前半
260	図 56 図版 49	青磁碗	K18e1	4001-B 室・E 室最終床面下	(13.8)	7.1	(5.8)	30%	高台内面のみ釉を削り取る	内) オリーブ灰 外) 緑灰・赤 断) 明オリーブ灰・橙	密　1㎜以下の黒色粒微量含む	反転復元 中国製
261	図 62	土師器皿	J17g23	4003	(10.8)	(2.3)	-	20%	口縁部はヨコナデによる外反体部は丸く立ち上がる	内・外) 淡黄橙～浅黄橙 断) 灰	密　細かい赤色酸化粒微量含む	反転復元
262	図 62 図版 50	土師器鍋	J17g23	4003	(25.2)	(9.3)	-	口縁部 25%	口縁部は内傾し体部中位～底部にかけて粗いタタキ	内・断) にぶい橙 外) 灰褐	密　1㎜大の赤色酸化粒微量含む	反転復元 播磨
263	図 62 図版 50	土師器鍋	J17g23	4003	(33.0)	(5.5)	-	口縁部 20%	口縁端部は「く」の字状に外反、上方に摘み上げる	内) 灰褐 外) 黒 断) 灰白	密　1㎜以下の暗褐色粒微量含む	反転復元 南伊勢
264	図 62	備前？壺	J17g23	4003	(13.0)	(5.4)	-	5% 以下	ほぼ直立に伸びる口縁部、端部は扁平	内・外) 灰 断) 褐灰	密　1～2㎜の石英 (?) 少量含む	反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
265	図 62	備前擂鉢	J17g23	4003	-	(3.3)	-	5%以下	口縁端部は上下に肥厚せず	内・断) 灰褐 外) 灰褐 ～ 黄灰	密　細かい白色砂粒少量含む	断面のみ 14or15C 初め
266	図 62	青磁碗	J17g23	4003	-	(2.7)	高台(5.6)	底部30%	内底部 ～ 体部にかけて片切彫りによる草花文	釉) オリーブ灰 露胎) にぶい橙 断) 灰	密	反転復元 龍泉窯系 中国製 14C
267	図 62	土師器皿	K17g23	4003-A 室	(11.0)	1.5	-	5%以下	器壁は薄い、体部 ～ 口縁部にかけて丸く立ち上がる	内) にぶい黄橙 外・断) 灰白	密	反転復元 南伊勢
268	図 62	土師器鍋	K17g23	4003-A 室	(31.2)	(2.5)	-	5%	口縁部は「く」の字状に外反、内面にカエリ	内) 褐灰 ～ 浅黄橙 外) 褐灰 断) 明褐灰	やや密　0.5㎜大の黒色・白色粒少量含む	断面のみ 南伊勢
269	図 62	土師器羽釜	K17g23	4003-A 室	(23.4)	(5.5)	-	10%	口縁部はやや内傾	内) にぶい赤褐 外) 極暗赤褐 断) にぶい橙	密　1㎜以下の黒色粒、1～2㎜の褐色粒、5㎜の細砂粒、雲母含む	反転復元 播磨
270	図 62	瀬戸擂鉢	K17g23	4003-A 室	-	(7.0)	-	5%	古瀬戸後Ⅳ期新 ～ 大窯 1	内) 黒褐 外) 灰褐 断) 浅黄橙	緻密	反転復元
271	図 62	青磁碗	K17g23	4003-A 室	-	(1.3)	(5.5)	底部50%	高台内面のみ釉を削り取る	内・外) 緑灰 断) 灰	密	反転復元
272	図 62	白磁碗	K17f24	4003-D 室	-	(1.4)	高台(3.7)	底部50%	非常に堅密な焼成	釉) 灰白 断) 淡黄	密	反転復元 中国製 15C
273	図 62	土師器鍋	K17g･h23	4004	(24.4)	(3.5)	-	5%以下	口縁端部は上方に摘み上げる	内・外・断) 灰白	密	反転復元 南伊勢 15C 後半
274	図 62	土師器鍋	K17g23	4004-A 室 東石列 裏込め	(25.8)	(5.1)	-	口縁部10%	器壁は厚い　口縁部は受け口状に開く　体部外面上位に横方向のヘラケズリ痕	内) 灰黄褐 外) 褐灰 ～ 黒褐 断) にぶい褐	密　細かい石英・チャート少量含む	反転復元 播磨 or 讃岐
275	図 62	瀬戸端反皿	K17g･h23	4004	-	(2.8)	高台(7.1)	高台部25%	高台は削り出しによる断面三角形　登窯第 4 段階	釉・断) 灰白	密	反転復元 17C 後半
276	図 62 図版 50	土師器皿	K17i22･23	4009-A 室 第 2 床面下	(9.6)	2.4	(7.3)	20%	器壁は薄い　体部 ～ 口縁部にかけて内湾気味に丸く立ち上がる	内・外・断) 淡黄	密	反転復元 南伊勢 14C 後半
277	図 62	土師器皿	K17i22･23	4009-A 室 第 2 床面下	(9.7)	2.3	(6.1)	25%	口縁部は斜め上方に伸びる	内・外・断) にぶい橙	密	反転復元
278	図 62 図版 50	土師器鍋	K17g22･23	4009-A 室	(24.8)	(5.1)	-	口縁部20%	口縁部は「く」の字状で、端部は内側に折り曲げる	内・外・断) にぶい黄橙 煤部分) 黒	密	反転復元 南伊勢 14C
279	図 62 図版 50	瀬戸小皿	K17g22･23	4009-A 室	10.3	2.6	4.6	85%	口縁部付近のみ施釉　古瀬戸後Ⅲ期	釉) 緑灰 露胎) 灰黄	やや粗	15C 前半
280	図 62 図版 50	瀬戸卸皿	K17g22･23	4009-A 室	(13.6)	(3.4)	-	口縁部10%	口縁部 ～ 体部外面中位まで施釉 古瀬戸後Ⅲ期	内) 褐灰 釉) 灰白 外・断) 明褐灰	やや粗　1～3㎜の石英 (?) 少量含む	反転復元 15C 前半
281	図 62 図版 50	瀬戸直縁大皿	K17g･h23	4004-A 室	-	(3.1)	-	5%以下	古瀬戸後Ⅱ期	釉) オリーブ黄 断) 灰白	密	断面のみ 15C 前後
282	図 62 図版 50	瀬戸香炉	K17i22･23	4009-A 室 第 2 床面下	(11.4)	5.2	-	70%	袴腰形　口径に比して器高が低くやや扁平　古瀬戸後Ⅲ期	釉) 灰オリーブ 露胎) 灰白	密	一部反転復元 15C 前半
283	図 62	土師器鍋	K17i23	4009-B 室	(24.9)	(8.7)	-	口縁部35%	口縁端部を摘み上げない	内) にぶい黄橙 外・断) 褐灰	密	反転復元 南伊勢 14C
284	図 62	土師器鍋	K17i23	4009-B 室	(24.8)	(6.1)	-	口縁部25%	口縁端部を摘み上げない	内・外・断) にぶい黄橙	やや粗	反転復元 南伊勢 14C
285	図 62	瀬戸折縁深皿	K17i23	4009-B 室	(20.0)	(3.1)	-	口縁部10%	中野 1 型式	釉・断) 灰白	密	反転復元
286	図 62	瀬戸折縁深皿	K17i23	4009-B 室	(29.4)	(2.8)	-	口縁部8%	口縁部はほぼ水平に引き出し、凹線状に窪む　古瀬戸後Ⅱ期	釉) 灰オリーブ 断) 灰	密　4㎜のチャート含む	反転復元 15C 前後
287	図 62 図版 50	常滑甕	K17i23	4009-B 室	(35.3)	(8.7)	-	口縁部20%	口縁部は「N」字状で体部に密着せず	内) 褐灰 外) 黒 断) 灰	やや粗　1～3㎜の石英・チャート中量含む	反転復元 14C 中頃
288	図 62	青磁碗	K18h3	4005	-	(2.2)	高台(5.0)	底部50%	高台畳付部と内底面は露胎	釉) オリーブ灰 露胎) 明黄褐 断) 灰白 ～ にぶい橙	密	反転復元 龍泉窯系 15C
289	図 64 図版 50	土師器鍋	K18c･d1	4031 上層	(33.5)	(16.9)	-	25%	器壁は薄い　口縁端部は上方に摘み上げず水平に収める　体部上位 ～ 底部付近まで粗いハケ調整　底部横方向の粗いヘラケズリ痕が明瞭に残る	内) にぶい黄橙 ～ 黒 外) 浅黄橙 ～ 黒 ～ 灰白 断) にぶい黄橙	密　細かいチャート少量含む	反転復元 南伊勢 14C
290	図 64	備前壺	K18c･d1	4031 上層	(15.0)	(8.1)	-	口縁部20%	口縁端部は丸みを帯びる、頸部はほぼ直立	内) 褐灰 外) 黒褐 断) 灰 自然釉) 灰白	密　細かい白色砂粒少量含む	反転復元
291	図 64	信楽？擂鉢	K18c･d1	4031 上層	-	(3.9)	(16.4)	5%	全体に赤味を帯びた色調　胎土に長石を含む	内) 赤褐 外) にぶい赤褐 断) 明赤褐	密　1㎜以下の白色粒・細砂粒・長石粒含む	反転復元
292	図 64	瀬戸大皿	K18c･d1 (c1･2)	4031 上層 ～ 中層	(29.4)	(7.5)	-	20%	卸目　古瀬戸後Ⅱ期	釉) オリーブ黄 露胎) 浅黄 断) 浅黄 ～ 灰白	密　1～2㎜の石英微量含む	反転復元 15C 前後
293	図 64 図版 50	土師器皿	K18c1･2	4031 中層	(13.6)	2.4	(7.7)	30%	器壁は極めて薄い	内) にぶい黄橙 外・断) 浅黄橙	密　1～2㎜の石英・チャート少量含む	反転復元 南伊勢
294	図 64	土師器皿	K18c1･2	4031 中層	(15.8)	2.5	(9.0)	5%	器壁は極めて薄い	内) 浅黄橙 外) 灰白 断) 黒褐	密　1㎜以下の黒色粒、2㎜の石英含む	反転復元 南伊勢 15C 中頃
295	図 64 図版 50	土師器大皿	K18c1･2	4031 中層	(23.0)	(3.1)	(13.0)	20%	体部 ～ 口縁部にかけて外反　丁寧なナデ調整	内・断) 灰白 外) 浅黄橙	密　1㎜以下の黒色粒、3㎜の石英少量含む	反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
296	図 64	土師器鍋	K18c･d1	4031 中層	(19.2)	(10.4)	-	25%	口縁部下～体部中位付近までハケ調整　体部下半～底部は横方向のヘラケズリ	内) にぶい橙～褐灰 外) 灰褐～黒 断) 暗灰	密　細かい石英微量含む	反転復元
297	図 64	土師器鍋	K18c･d1	4031 中層	(25.6)	(8.4)	-	口縁部 20%	口縁端部は上方に摘み上げる	内) にぶい黄橙 外・断) 褐灰	密　1～2mmのチャート・石英少量含む	反転復元 15C
298	図 64	土師器鍋	K18c･d1	4031 上層～中層	(26.8)	(12.1)	-	40%	口縁端部は内側に折り曲げ、扁平に仕上げる	内) にぶい橙 外) にぶい黄橙～黒褐 断) 灰白	密	反転復元 14C 後半
299	図 64	土師器鍋	K18c･d1	4031 上層～中層	23.9	(10.5)	-	50%	口縁端部は内側に折り曲げ、扁平に仕上げる	内) 浅黄橙～にぶい橙 外) 浅黄橙～黒褐 断) 浅黄橙	密　1～2mmの石英少量含む	反転復元 14C 後半
300	図 64 図版 51	土師器釜	K18c･d1	4031 上層～中層	(13.9)	(15.9)	(15.1)	60%	頸部はやや内傾し、口縁部直下に幅狭の凸帯を巡らす　張り出し気味の肩部から丸みを帯びつつ底部に至り、体部下半はハケ調整　底部は平底に近い形状、横方向のヘラケズリ	内) にぶい黄橙 外・断) 浅黄橙	密　1～2mmの石英少量含む	反転復元 15C 中～後期
301	図 64	瓦質土器風炉	K18c･d1	4031 中層	-	-	(32.6)	10%	底部付近に 1 条の凸帯を巡らし、粗略な三足が付くものか	内・外) 黒 断) 灰白	密　1～3mmの黒色粒、1mmの白色粒、1mm以下の黒色粒・白色粒含む	反転復元 15C
302	図 64 図版 51	瀬戸折縁深皿	K18c･d1	4031 中層	(31.5)	8.4	(14.3)	25%	底部に粗略な三足が付くものか、古瀬戸後Ⅱ期	釉) オリーブ黄～浅黄 断) 淡黄	密	反転復元 15C 前後
303	図 64	瀬戸折縁深皿	K18c1･2	4031 中層 (焼土層)	(32.7)	(10.0)	(14.0)	10%	古瀬戸後Ⅱ期	釉) にぶい黄 断) 灰白	密　1～2mmの石英微量含む	反転復元 15C 前後
304	図 65 図版 51	瀬戸直縁大皿	K18c1･2	4031 中層	(35.5)	9.3	(14.0)	25%	内外面ともに体部中位まで淡い黄緑色の釉　古瀬戸後Ⅱ期	釉) 浅黄 露胎) 灰黄 断) 灰黄～灰白	密	反転復元 15C 前後
305	図 65 図版 51	瀬戸平碗	K18c1･2	4031 中層	15.3	5.5	高台 4.4	75%	体部外面下半は露胎　削り出し高台は低く粗略　古瀬戸後Ⅲ期	釉) オリーブ灰～灰白 にぶい黄橙 断) 浅黄橙	密　1～4mmの石英少量含む	一部反転復元 15C 前半
306	図 65	常滑壺	K18c･d1	4031 中層	(17.5)	(5.7)	-	5% 以下	口縁端部は上下に拡張する　中野 6a 型式	内・外) にぶい赤褐 断) 暗灰	密　1～2mmの石英・チャート少量含む	反転復元 13C 中頃～後半
307	図 65	青磁碗	K18c･d1	4031 中層	-	(2.5)	高台 5.1	底部 75%	草緑色を施釉　畳付及び高台内は露胎　見込に吉祥文の簡略化した「吉」を刻印	釉) 暗オリーブ灰 露胎) 灰黄 断) 灰白	密　細かい白色砂粒少量含む	一部反転復元 15C
308	図 65	瀬戸直縁大皿	K18c1･2	4031 中層	(27.5)	7.6	11.6	40%	古瀬戸後Ⅲ期	釉) オリーブ灰～灰白 露胎) にぶい橙 断) にぶい橙～灰白	密　1～2mmの石英微量含む	反転復元 15C 前半
309	図 65 図版 51	白磁小坏	K18c1･2	4031 焼土層	(7.4)	3.6	高台 3.0	45%	八角形を呈す　体部外面下半～底部は露胎　焼成甘く軟質	釉・露胎・断) 灰白	緻密	一部反転復元 15C 前半～中頃
310	図 65	青磁盤	K18c1･2	4031 焼土層	(20.0)	(2.8)	-	5% 以下	体部内面に丸鑿状の工具による粗雑な蓮弁	釉) オリーブ灰 断) 灰黄	緻密	反転復元 14C 中頃～後半
311	図 65 図版 51	土師器鍋	K18c2	4031	24.3	12.3	21.6	90%	器壁は厚い　口縁部は受け口状に開く　体部下半～底部にかけ密は格子状のタタキ	内) にぶい橙～灰褐 外) にぶい橙～赤褐 断) 灰褐	密　1～2mmの石英少量含む	阿波 or 讃岐
312	図 65 図版 51	瀬戸天目茶碗	K18c2	4031	12.1	6.4	4.8	98%	斜め外方向に開いた体部～口縁部は直立気味に立ち上がる　古瀬戸後Ⅲ期	釉) 灰褐～黒 露胎) 浅黄 断) 灰白	密　1～4mmの石英少量含む	15C 前半
313	図 65 図版 51	瀬戸皿	K18c2	4031	9.8	2.2	4.5	100%	古瀬戸後Ⅲ期	釉) にぶい黄褐～黒褐 露胎) 灰白	密　1～2mmの石英微量含む	15C 前半
314	図 65 図版 51	瀬戸皿	K18c2	4031	9.2	2.1	4.5	90%	古瀬戸後Ⅲ期	釉) にぶい黄褐～黒褐 断) 灰白	密　1～2mmの石英少量含む	15C 前半
315	図 65 図版 51	瀬戸皿	K18c2	4031	10.5	2.5	5.0	95%	古瀬戸後Ⅲ期	釉) オリーブ黄 断) 灰白	密　1mmのチャート少量含む	15C 前半
316	図 65 図版 52	瀬戸小鉢	K18c2	4031	9.5	3.6	5.0	95%	古瀬戸後Ⅲ期	釉) オリーブ灰 露胎・断) 灰白	密	15C 前半
317	図 65 図版 52	瀬戸尊式花瓶	K18c1･2	4031 焼土層	-	(14.3)	-	70%	やや扁平な丸みを帯びた体部～口縁部は大きく外反するように立ち上がる　古瀬戸後Ⅲ期	釉) にぶい赤褐・黒褐 露胎) 灰黄 断) 灰白	緻密	一部反転復元 15C 前半
320	図 67 図版 52	瀬戸皿	K18b1	4027-A 室床面下	(9.9)	2.3	(4.2)	40%	体部下半はわずかに凹む　口縁部はかすかに外側に開く　古瀬戸後Ⅲ期	釉) オリーブ黄 断) 灰白	密	反転復元 15C 前半
321	図 67	瀬戸天目茶碗	K18b1	4027-A 室	(12.0)	(2.9)	-	口縁部 10%	口縁端部は直立気味に立ち上がる　古瀬戸後Ⅱ期	釉) 灰褐～黒 断) 灰白	密	反転復元 15C 前後
322	図 67	瀬戸鉢皿	K18b1	4027-A 室床面下	(16.8)	6.2	(6.4)	20%	口縁部のみ錆釉かかる　擂鉢型卸皿か　古瀬戸後Ⅱ期	釉) 灰褐 断) 浅黄橙	密	反転復元 擂鉢型
323	図 67	瀬戸折縁深皿	K18b1	4027-A 室	(19.0)	6.9	(9.8)	10%	全体に厚手　古瀬戸中Ⅰ期	釉) 灰白～灰オリーブ 露胎) 灰黄褐 断) にぶい黄橙	密	反転復元 14C 前後
324	図 67	瀬戸折縁深皿	K18c1	4027-A 室	(32.3)	(6.1)	-	5% 以下	三足の付くものか　古瀬戸後Ⅰ期	釉) 灰白～灰黄 断) 浅黄	密	反転復元 14C 後半
325	図 67	常滑片口鉢	K18c1	4027-A 室	(31.1)	(7.0)	-	口縁部 20%	口縁端部はあまり肥厚せず　中野 8 型式	内・外) にぶい赤褐～明赤褐 断) にぶい赤褐	密　1～3mmの石英・チャート少量含む	反転復元 14C 後半～15C 初め
326	図 67 図版 52	青磁碗	K18b1	4027-A 室	-	(1.7)	高台 (6.6)	底部 30%	高台内面の釉削り取り、やや粗雑	釉) オリーブ灰 露胎) 赤褐 断) 灰	密	反転復元 中国製
327	図 67 図版 52	土師器皿	K17b･c25	4027-B 室 1 層	(7.4)	1.9	(6.0)	20%	底部は厚い　体部は直立気味に立ち上がる	内・外・断) 灰白	密	反転復元
328	図 67 図版 52	土師器皿	K18b1	4027-B 室床面下	(6.7)	1.5	(5.8)	10%	器壁は非常に薄く、内湾気味に丸く立ち上がる	内) にぶい橙 外・断) にぶい黄橙	密	反転復元 南伊勢

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
329	図 67	土師器皿	K18b･c1	4027-B 室 2 層	(8.0)	1.6	(6.0)	口縁部 20%	器壁は非常に薄く、内湾気味に丸く立ち上がる	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙 ～ 灰白 断) 褐灰	密	反転復元 南伊勢
330	図 67	土師器皿	K17b25	4027-B 室	(9.9)	1.7	(7.0)	口縁部 10%	器壁は非常に薄く、内湾気味に丸く立ち上がる	内・外・断) 浅黄橙	密	反転復元 南伊勢
331	図 67	土師器皿	K18b･c1	4027-B 室 2 層	(11.8)	2.6	(6.6)	30%	内面にハケ調整が顕著に残る	内・外) 浅黄橙 断) にぶい黄橙	密	反転復元
332	図 67	土師器皿	K17b25	4027-B 室	(12.0)	(2.1)	-	口縁部 20%	内面にハケ調整が顕著に残る	内・外・断) 灰白	密	反転復元
333	図 67	土師器皿	K17c25	4027-B 室	(12.0)	(2.7)	-	20%	内面にハケ調整が顕著に残る	内・外・断) 灰白	密	反転復元
334	図 67	土師器皿	K17c25	4027-B 室	(12.0)	(2.4)	-	口縁部 20%	内面にハケ調整が顕著に残る	内・外) 浅黄橙 ～ 明褐灰 断) 灰 ～ 浅黄橙	密　細かい赤色酸化粒微量含む	反転復元
335	図 67	土師器皿	K17b25	4027-B 室	(11.8)	(3.4)	-	15%	内面にハケ調整が顕著に残る	内・外・断) 灰白	密	反転復元
336	図 67	土師器鍋	K17b･c25	4027-B 室 1 層	-	(3.1)	-	5% 以下	内面にハケ調整	内・外) にぶい黄橙 断) 灰	密	断面のみ
337	図 67	土師器鍋	K18b･c1	4027-B 室 2 層	(23.8)	(1.5)	-	5% 以下	口縁端部は上方に摘み上げる	内・断) にぶい黄橙 外) 黒褐	密	反転復元 南伊勢 15C
338	図 67	瀬戸碗	K17b25	4027-B 室	(15.0)	(4.9)	-	口縁部 20%	古瀬戸後Ⅰ期	釉) 灰オリーブ 断) 灰黄	密	反転復元 14C 後半
339	図 67 図版 52	瀬戸擂鉢	K17b･c25	4027-B 室 1 層	-	(3.5)	-	5% 以下	古瀬戸後Ⅳ期新	釉) 赤灰 断) 灰白	密	断面のみ 15C 中頃 ～ 後半
340	図 67	瀬戸直縁大皿	K17b･c25	4027-B 室 1 層	(31.0)	(4.6)	-	5% 以下	ハケ調整残る　古瀬戸後Ⅱ期	釉) 灰オリーブ ～ 灰白 断) にぶい黄橙	密　細かい石英微量含む	反転復元 15C 前後
341	図 67	瀬戸折縁中皿	K18b･c1	4027-B 室 2 層	(19.1)	(4.7)	-	口縁部 5%	古瀬戸中Ⅰ期	釉) 灰白 断) 灰黄	密	反転復元 14C 後半
342	図 67 図版 52	瀬戸燭台	K17b25	4027-B 室	-	(4.0)	脚裾 (14.0)	脚裾部 15%	燭台か　古瀬戸後Ⅰ期 ～ Ⅱ期	釉) オリーブ灰 露胎) 灰白 断) 灰白 ～ 灰	密　細かい石英 (?) 微量含む	反転復元 14C 後半 ～ 15C 初め
343	図 67 図版 52	焼締陶器鉢	K17b25	4027-B 室	(20.2)	(7.9)	-	5% 以下	口縁端部はほぼ水平に同心円状のスリ目を横方向に施す	内・外) にぶい赤褐 断) にぶい橙	密　1～2㎜の石英 (?) 少量含む	反転復元
344	図 67 図版 52	焼締陶器鉢	K17b25	4027-B 室	-	(3.9)	(13.0)	底部 25%	底部に同心円状のスリ目を横方向に施す	内) 灰褐 外) にぶい赤褐 ～ 灰赤 断) 灰	密　細かい石英少量含む	反転復元
345	図 67 図版 52	常滑甕	K17c25	4027-B 室	-	(9.4)	-	5% 以下	口縁部は「N」字状で頸部にくっつきひしゃげる	内) 褐灰 外) 黒褐 断) 褐灰 ～ 灰褐	密　1～2㎜の石英中量含む	断面のみ 15C 中頃
346	図 67 図版 52	常滑甕	K17b25	4027-B 室	-	(4.9)	-	5% 以下	口縁部は「N」字状で頸部にくっつきひしゃげる	内) 灰赤 外) 暗赤褐 断) 灰	密　1㎜の石英少量含む	断面のみ 15C 中頃
347	図 67	白磁皿	K18b･c1	4027-B 室 2 層	(9.8)	(1.8)	-	10%	底部は露胎	釉・断) 灰白 露胎) にぶい黄橙	密	反転復元 中国製 15C 前半
348	図 69	土師器皿	J18y1	4028	(8.6)	2.0	(3.5)	25%	底部 ～ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる　体部外面はユビオサエが顕著	内・外・断) 浅黄橙	密	反転復元
349	図 69	土師器灯明皿	J18y1	4028	(9.8)	(1.7)	(4.6)	25%	底部 ～ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる　体部外面はユビオサエが顕著　内面全体に煤付着	内・外・断) 明褐灰 煤部分) 暗灰	密	反転復元
350	図 69	土師器鍋	J18y1	4028	(21.8)	(2.5)	-	5% 以下	屈曲した口縁端部を上方に摘み上げる	内・外・断) にぶい橙 煤部分) 黒	緻密	反転復元 南伊勢 15C
351	図 69	土師器鍋	K18a1 J18y1	4028	(21.8)	(3.1)	-	5% 以下	屈曲した口縁端部を上方に摘み上げる	内・外) 灰褐 断) にぶい橙 煤部分) 黒	密	反転復元 南伊勢 15C
352	図 69 図版 53	土師器鍋	J18y1	4028	(21.9)	(3.2)	-	口縁部 10%	口縁部下に長さ 1㎝ほどの鍔が付く　焼成は堅密で瓦質に近い	内・外・断) 灰白 煤部分) 黒	密	反転復元 阿波？ 15C
353	図 69 図版 53	瀬戸皿	K18a1 J18y1	4028	8.8	2.9	4.5	50%	体部 ～ 口縁部は丸く立ち上がる 古瀬戸後Ⅳ期新	釉) 灰オリーブ 露胎) 灰白 断) 灰黄橙	密　8㎜の石英、黒色粒少量含む	15C 中頃 ～ 後半
354	図 69	瀬戸皿	J18y1	4028	(4.2)	(2.8)	-	25%	体部 ～ 口縁部は丸く立ち上がる 古瀬戸後Ⅳ期新	釉) オリーブ灰 露胎) にぶい黄橙 断) 橙	やや粗	反転復元 15C 中頃 ～ 後半
355	図 69	瀬戸折縁深皿	K18a1 J18y1	4028	(25.6)	(6.0)	-	口縁部 13%	古瀬戸後Ⅰ期	釉) オリーブ灰 断) にぶい黄橙	やや粗	反転復元 14C 後半
356	図 69 図版 53	瀬戸卸皿	J18y1	4028	(10.6)	3.2	(4.4)	25%	古瀬戸後Ⅰ期	内) にぶい黄橙 外) 褐灰 断) にぶい黄橙 釉) 浅黄	密	反転復元 14C 後半
357	図 69 図版 53	瀬戸擂鉢	K18a1	4028 中層	(26.7)	(4.4)	-	口縁部 13%	錆釉　古瀬戸後Ⅳ期新	内・外) 暗赤褐・赤黒 断) にぶい黄橙	密	反転復元 15C 中頃 ～ 後半
358	図 69 図版 53	陶器壺	K18a1 J18y1	4028	(11.2)	(4.4)	-	口縁部 13%	全体に灰色を呈し、肩部に暗緑色の自然釉	内・外・断) 灰 自然釉) 黒	やや粗　2㎜前後の黒色粒少量含む	反転復元
359	図 69 図版 53	備前擂鉢	K18a1	4028 中層	(27.8)	(8.8)	-	口縁部 20%	口縁端部は上下にやや拡張	内) 灰 外) 灰赤・褐灰 断) 暗赤灰	密　1～3㎜の石英・チャート？中量含む	反転復元 15C 後半 ～ 末
360	図 69 図版 53	備前甕	J18y1	4028	-	(5.2)	-	5% 以下	端部は丸みを帯びる	内・外) にぶい赤褐 断) 暗灰	やや粗　1～4㎜の石英・チャート多量含む	断面のみ 15C 中頃

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
361	図 69	常滑片口鉢	J18y1	4028	-	(5.2)	-	5%以下	口縁端部は上下に拡張し始める	内) にぶい赤褐 外・断) 明赤褐	やや粗　1~2mmの石英・チャート含む	断面のみ 15C 中頃 ~ 後半
362	図 69 図版 53	青磁稜花皿	K18a1	4028 中層	(11.6)	(2.2)	-	20%	稜花	釉) 灰オリーブ 断) 黒褐	密	反転復元 中国産 15C 後半
363	図 69	青磁皿	K18a1 J18y1	4028	(10.4)	(2.6)	-	口縁部15%	口縁部は斜め上方に伸び、端部は丸みを帯びる	釉) 灰オリーブ 断) 灰白・にぶい橙	密	反転復元 中国産 14C
364	図 69	青磁皿	J18y1	4028	(10.7)	(2.7)	-	10%	口縁部は斜め上方に伸び、端部は丸みを帯びる	釉) 緑灰 断) 灰白	密	反転復元 中国産 14C
365	図 69 図版 53	青磁碗	J18y1	4028	-	(4.1)	-	5%以下	口縁部外面に形骸化した粗略な雷文帯	釉) オリーブ灰 断) 灰白	緻密	断面のみ 中国製 14C 後半~15C
366	図 69	白磁皿	J18y1	4028	(8.8)	2.9	(3.2)	30%	割り高台でやや濁りを帯びた白色　軟質である	釉・断) 灰白	密	反転復元 15C 前半 ~ 中頃
367	図 69	白磁皿	K18a1	4028 中層	(9.1)	2.2	(4.2)	45%	割り高台でやや濁りを帯びた白色　軟質である	内・外) 灰白 断) 浅黄	密	反転復元 15C 前半 ~ 中頃
368	図 69 図版 53	白磁皿	J18y1	4028	(8.8)	(2.6)	(3.9)	20%	割り高台でやや濁りを帯びた白色　軟質である　六花	釉) 灰白 露胎) 淡黄	密	反転復元 15C 前半 ~ 中頃
370	図 71	土師器小皿	K17a･b25	4019	(6.3)	1.7	5.0	20%	底面が平ら、体部は斜め上方に立ち上がる　丁寧なナデ	内・外・断) 灰白	密	反転復元
371	図 71 図版 54	土師器小皿	K17a･b25	4019	(7.3)	2.0	(5.1)	20%	底面が平ら、体部は斜め上方に立ち上がる　丁寧なナデ	内・外・断) 灰黄 ~ 黄灰	密	反転復元
372	図 71	土師器皿	K17a･b25	4019	(11.0)	(3.0)	-	25%	体部 ~ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる	内) 浅黄橙 外・断) 灰白	やや粗　1mm前後のチャート？少量含む	反転復元
373	図 71 図版 54	土師器皿	K17a･b25	4019	(11.9)	2.8	(5.9)	40%	体部 ~ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる	内・外・断) 灰白	密	反転復元
374	図 71	土師器皿	K17b25	4019	(11.9)	3.3	(6.7)	25%	体部 ~ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる	内・外・断) 灰白	密　細かい赤色酸化粒少量含む	反転復元
375	図 71	土師器皿	K17b25	4019	(12.4)	2.5	(5.9)	25%	体部 ~ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる	内・外・断) 灰白	密	反転復元
376	図 71	山茶碗片口鉢	K17a･b25	4019 最下層	-	(5.5)	-	5%以下	中野 6a 型式	内・外・断) 黄灰	粗	断面のみ 尾張産 13C 後半
377	図 71	瀬戸折縁深皿	K17a･b25	4019	-	(1.6)	-	5%以下	古瀬戸中Ⅳ期	釉) 灰オリーブ 断) にぶい黄橙	やや粗	断面のみ 14C 中頃
378	図 71	瀬戸小鉢	K17a･b25	4019	(9.3)	3.1	(5.1)	40%	体部外面下半 ~ 高台部は露胎 古瀬戸後Ⅲ期	釉) 灰オリーブ 露胎) にぶい赤褐 断) 灰褐	密	反転復元 15C 前半
379	図 71 図版 54	焼締陶器擂鉢	K17a･b25	4019 最下層	(21.8)	10.9	13.9	20%	擂鉢状　体部内面に横方向のスリ目状の凹線を 3 条巡らす	内・外) 赤褐 断) 灰白・橙	密　細かい白色砂粒少量含む	反転復元
380	図 71 図版 54	常滑甕	K17b25	4019	(26.9)	(11.6)	-	口縁部20%	中野 10 型式	内) 赤灰 ~ 暗赤褐 外) 暗赤褐 ~ 黒褐 断) 黒褐	密　1~4mmの石英多量含む	反転復元 15C 後半
381	図 71	常滑甕	K17a･b25	4019	-	(3.9)	-	5%以下		内・外) にぶい赤褐 断) 褐灰	やや粗　1~3mmの石英中量含む	断面のみ
382	図 71 図版 54	備前壺	K17b25	4019	(10.6)	(6.0)	-	口縁部10%	口縁端部は丸みを帯びる	内・外) 黒褐 断) 褐灰	密　細かい石英 (?) 中量含む	反転復元
383	図 71	白磁口禿げ皿	K17a･b25	4019 最下層	(10.9)	(2.1)	-	口縁部20%	口縁部の釉薬は削り取られる	釉・断) 灰白	密	反転復元
384	図 71 図版 54	白磁合子 蓋	K17b25	4019	3.3	1.2	1.5	90%	合子もしくは小壺の蓋	釉) 明緑灰 露胎・断) 灰白	密	中国製
385	図 71	土師器小皿	J18t3	4035	(9.6)	1.9	(3.0)	25%	体部は斜め上方に立ち上がる	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の灰色粒・白色粒を少量含む	反転復元
386	図 71 図版 54	土師器小皿	J18t2･3	4035	(11.2)	1.8	(7.0)	35%	内外面一部にタール付着　体部 ~ 口縁部は内湾気味に丸く立ち上がる	内・断) 灰白 外) 浅黄橙	緻密　1mm以下の黒色粒・白色粒少量含む	反転復元 南伊勢
387	図 71 図版 54	瀬戸小鉢	J18t2･3	4035	(7.5)	(2.3)	-	口縁部50%	口縁部はわずかに外反する　古瀬戸後Ⅲ期	釉) 灰黄褐 ~ 黒 断) 灰白	密	反転復元
388	図 71	瀬戸折縁深皿	J18t3	4035	-	(3.1)	-	5%	古瀬戸後Ⅰ期	内・外) オリーブ黄 断) 灰黄	密　1mm白色粒を少量含む	断面のみ 14C 中頃
389	図 71 図版 54	瀬戸直縁大皿	J18t2･3	4035	(31.3)	(9.2)	(15.6)	20%	古瀬戸後Ⅲ期	釉) オリーブ 露胎) 灰黄 断) 灰黄 ~ 黄灰	密　1~4mmの石英少量含む	反転復元 15C 前半
390	図 71	瀬戸折縁大皿	J18t2･3	4035	(25.5)	(4.0)	-	口縁部5%	擂鉢型　古瀬戸中Ⅰ期	釉) オリーブ黄 断) 灰黄	密　1~2mmの石英微量含む	反転復元 14C 後半
391	図 71	常滑片口鉢	J18t3	4035 旧床面	-	(5.5)	-	5%	口縁端部は外方向に引き出される	内) にぶい赤褐 外) 橙 断) にぶい橙	密　2mmの黒色粒・白色粒少量、1mm以下の白色粒含む	断面のみ 15C 中頃
392	図 71 図版 54	青磁盤	J18t2･3	4035	-	(2.7)	高台(7.2)	底部30%	体部内外面に丸鑿状工具による蓮弁文　折縁か	釉) オリーブ灰 露胎) にぶい黄褐 断) 灰白	密	反転復元 中国製 14C
393	図 71	青磁碗	J18t2･3	4035	(13.8)	(3.9)	-	口縁部10%	口縁部は斜め上方に伸びる	釉・断) 灰白	密	反転復元 中国製 15C
394	図 71	青磁碗	J18t3	4035	(14.0)	(3.0)	-	口縁部10%	口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸い	釉・断) 灰白	密	反転復元 中国製 15C
395	図 71	青磁碗	J18t2･3	4035	-	(1.7)	4.9	底部98%	底部内面にスタンプ文	内・外) オリーブ灰 断) 灰	緻密	中国製 15C

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
396	図 76	土師器皿	J17v7	1-801	(9.8)	3.3	-	30%	体部は碗形に丸く立ち上がる 内面はハケ調整が顕著	内) 淡黄 外・断) 灰白	密	反転復元
397	図 76 図版 55	土師器鍋	J17v7	1-801 上層	(12.2)	(5.5)	-	口縁部 5%	1cm程の鍔のつく羽釜形	内) にぶい黄橙 ～ 黒褐 外) にぶい黄橙 ～ 黒 断) 灰	密　細かいチャート中量含む	反転復元 南伊勢 14C 後半
398	図 76	土師器鍋	J17v7	1-801 上層	(25.0)	(3.5)	-	口縁部 15%	口縁端部は内側に折り曲げる	内) 褐灰 ～ 灰黄褐 外) 灰黄褐 ～ 黒 断) にぶい黄橙	密　最大 3mmの石英・細かいチャート (?) 中量含む	反転復元 南伊勢
399	図 76 図版 55	山茶碗片口鉢	J17v7	1-801	-	5.2	(7.0)	30%	渥美第 5 型式	内・断) 灰白 外) 灰	粗　1mm以下灰色・白色粒微量含む	反転復元 13C 前後
400	図 76	山茶碗鉢	J17v7	1-801 上層	-	(3.2)	高台 (9.3)	底部 20%	渥美第 5 型式	内・断) 黄灰 外) 灰白	密	反転復元 13C 前後
401	図 76	山茶碗皿	J17v7	1-801	-	(1.3)	高台 (4.2)	底部 50%	尾張第 4 型式	内・断) 褐灰 外) 灰白	密	反転復元 13C 前半
402	図 76	山茶碗碗	J17v7	1-801	-	(3.7)	-	5% 以下	尾張第 5 型式	内・外・断) 灰白	密	断面のみ 13C 前後
403	図 76 図版 55	山茶碗鉢	J17v7	1-801	-	(5.6)	(13.8)	底部 20%	渥美第 5 型式	内) 灰黄 外) 灰白 断) 黄灰	密　1～2mmの石英少量含む	反転復元 13C 前後
404	図 76 図版 55	渥美壺	J17v7	1-801	(10.9)	(4.2)	-	口縁部 20%	口縁端部は外側に曲げるように丸く収める	内) 灰オリーブ (釉) 外) 黄灰 断) 灰白	密	反転復元 12C
405	図 76 図版 55	常滑片口鉢	J17v7	1-801 上層	-	(2.4)	-	5% 以下	口縁端部上面は沈線状の凹みを巡らす　尾張第 7 型式	内・外・断) 黄灰	密　細かい石英少量含む	断面のみ
406	図 76 図版 55	常滑甕	J17v7	1-801 上層	(30.3)	(8.7)	-	5%	口縁端部は上下に拡張　中野 6b 型式	内) 褐灰 外) 暗赤褐 断) 灰・にぶい橙	やや密　2mm以下の石英少量含む	反転復元 13C 後半 ～ 14C 初め
407	図 76 図版 55	白磁壺	J17v7	1-801 上層	12.8	(2.5)	-	10% 以下	四耳壺	釉) 灰 断) 灰白	密	反転復元 中国製
408	図 76	土師器皿	J17v7	1-801 中層	(9.0)	2.8	(5.0)	10%	体部は丁寧なナデ、斜め上方に立ち上がる　底部は平坦	内・外・断) 淡橙	密	反転復元
409	図 76	土師器皿	J17v7	1-801 中層	(10.0)	(2.0)	-	10%	体部 ～ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる	内・外・断) 灰白	密	反転復元
410	図 76	土師器皿	J17v7	1-801 下層	(10.8)	2.5	-	25%	口縁部は強いヨコナデ　内面はハケ調整	内・外・断) 浅黄橙	密	反転復元
411	図 76	山茶碗片口鉢	J17v7	1-801 下層	-	(2.0)	高台 (7.7)	底部 10%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　細かい赤色酸化粒中量含む	反転復元 13C 前後
412	図 76	山茶碗碗	J17v7	1-801 下層	-	(1.9)	高台 (6.5)	底部 25%	東濃型第 5 型式か	内・外・断) 灰黄	密　細かい赤色酸化粒中量含む	反転復元 12C 後半 ～ 13C 前半
413	図 77	土師器皿	J17v7	1-802	(12.9)	2.7	-	15%	体部 ～ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる	内・断) 灰白 外) 灰白 ～ 浅黄橙	密　細かい赤色酸化粒多量含む	反転復元
414	図 77	土師器鍋	J17v7	1-802 上層	(11.2)	(3.7)	-	10%	体部 ～ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる	内・外・断) 灰白	密　黒粒極少量含む	反転復元
415	図 77	土師器皿	J17v7	1-802 上層	(11.8)	(2.7)	-	20%	口縁部はやや強いヨコナデ　体部 ～ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる	内・外・断) 灰白	密　細かい赤色酸化粒中量含む	反転復元
416	図 77	土師器皿	J17v7	1-802 下層	-	1.6	-	5% 以下	口縁部はやや強いヨコナデ　体部 ～ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる	内・断) 灰白 外) にぶい黄橙	密　細かい赤色酸化粒中量含む	断面のみ
417	図 77	土師器皿	J17v7	1-802 下層	-	(1.9)	-	5% 以下	口縁部はやや強いヨコナデ　体部 ～ 口縁部は丸みを帯びて立ち上がる	内・外) にぶい黄橙 断) 灰白	密　細かい赤色酸化粒少量含む	断面のみ
418	図 77	土師器鍋	J17v7	1-802 上層	-	(3.2)	-	5% 以下	口縁端部は内面に折り曲げる	内) 灰黄褐 ～ 褐灰 外・断) 黒褐	密　細かい赤色酸化粒少量含む	断面のみ
419	図 77	土師器鍋	J17v7	1-802 上層	-	(1.3)	-	5% 以下	口縁端部は内面に折り曲げ、三角形を呈す	内) 褐灰 外) 黒 断) にぶい橙	密	断面のみ
420	図 77	山茶碗鉢	J17v7	1-802	-	(2.5)	高台 (7.9)	底部 25%	渥美第 5 型式	内) 黄灰 ～ 灰白 外) 灰白 断) 黄灰	密　1～2mmの石英 (?) 微量含む	反転復元 13C 前後
421	図 77 図版 55	東播系須恵質こね鉢	J17v7	1-802 下層	-	(2.9)	-	5% 以下		内・外・断) 灰	密　1mm位のチャート微量含む	断面のみ 13C
422	図 77 図版 55	常滑甕	J17v7	1-802 上層	-	(5.2)	-	5% 以下		内) 灰黄褐 外) 灰褐 断) 黄灰	密　細かい長石少量含む	断面のみ 12C 後半
423	図 77	常滑甕	J17v7	1-802 上層	-	(3.7)	-	5% 以下	中野 6a 型式	内・断) 褐灰 外) 灰オリーブ (釉)	密　最大 3mm位の石英少量含む	断面のみ 13C 中頃 ～ 後半
424	図 77 図版 55	常滑片口鉢	J17v7	1-802 上層	-	(5.9)	-	5% 以下		内) 赤灰 外) 灰赤 ～ にぶい赤褐 断) にぶい赤褐・褐灰	密　細かい石英少量含む	断面のみ 14C 後半 ～ 15C 初め
425	図 77	常滑片口鉢	J17v7	1-802 上層	-	(4.4)	-	5% 以下		内・断) 褐灰 外) 灰黄褐	密　1～2mmの石英中量含む	断面のみ 14C 後半 ～ 15C 初め
426	図 77	瀬戸皿	J17v7	1-802 上層	-	(2.5)	-	5% 以下	口縁部は斜め上方に伸びる	釉) 灰黄 ～ 浅黄 断) 灰黄	密	断面のみ
427	図 77	瀬戸直縁大皿	J17v7	1-802 上層	-	(3.4)	(22.0?)	5% 以下	古瀬戸後Ⅱ期	釉・断) 灰白	密　1～2mmの石英少量含む	断面のみ 15C 前後
428	図 77	青磁碗	J17v7	1-802 上層	-	(2.0)	(6.5)	底部 25%		釉・断) 灰白	密	反転復元
429	図 81	土師器皿	J17v7	1-817	(11.9)	3.0	-	20%	体部 ～ 口縁部は内湾気味に立ち上がる	内・断) 灰白 外) 浅黄橙	密	反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
430	図 81	土師器鍋	J17v7	1-817	-	(3.7)	-	5%以下	口縁端部は内側に直角に折れ曲がる　外面口縁部下に鍔が付くタイプ	内) にぶい褐 ～ 暗灰 外) にぶい赤褐 ～ にぶい黄橙 ～ 暗灰 断) 灰黄褐	密　細かい石英・チャート中量含む	断面のみ 西摂津 or 讃岐
431	図 81	山茶碗碗	J17v7	1-817	-	(1.8)	高台 7.0	底部 75%	高台はやや低くしっかりと張り出す　畳付部に籾殻痕　渥美第 5 型式	内・外) 黄灰 断) 灰白	密　1mm位のチャート微量含む	一部反転復元 13C 前後
432	図 81	土師器小皿	J17w10	1-1004	(8.3)	(1.8)	-	口縁部 10%	体部 ～ 口縁部は内湾気味に立ち上がる	内・外・断) 灰白	密　0.5mm以下の白色粒微量含む	反転復元 13C 後半 ～ 14C
433	図 81	山茶碗碗	J17w10	1-1004	-	(2.4)	(8.6)	底部 25%	しっかりとした高台の付くタイプ　渥美第 4 型式	内・外・断) 灰白	やや粗　1mm以下の白色粒微量含む	反転復元 13C 前半
434	図 81	常滑甕	J17	1-855 上層	-	(5.0)	-	5%以下	口縁端部は上下に拡張する　中野 6a 型式	内) 灰褐 ～ 灰オリーブ (自然釉) 外) にぶい褐 ～ 浅黄 (自然釉) 断) 黄灰	密　細かい石英 (?) 少量含む	断面のみ 13C 中頃 ～ 後半
435	図 81 図版 56	土師器皿	J17	1-855 下層	(14.2)	3.7	(9.2)	40%	器壁は厚い　底部は糸切り	内・外・断) 浅黄橙	密　1～2mmの赤色酸化粒少量含む	反転復元 12C 後半～ 13C 前半
436	図 81 図版 56	山茶碗碗	J17x9	1-855 下層	-	(1.3)	4.3	底部 90%	比較的しっかりした高台　渥美第 5 型式	内・外) 灰白 断) 灰	密　1～2mmの石英少量含む	一部反転復元 13C 前後
437	図 81	山茶碗片口鉢	J17x9	1-855 下層	-	(3.2)	高台 (9.5)	5%以下	比較的しっかりした高台　尾張第 6 型式	内・外・断) 灰	密　1～2mmの石英少量含む	反転復元 13C 前半
438	図 81 図版 56	山茶碗碗	J17x9	1-855 下層	-	(2.7)	高台 (5.6)	底部 30%	比較的しっかりした高台　渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　1～2mmの石英少量含む	反転復元 13C 前後
439	図 86 図版 56	土師器皿	J18y10	1300	(10.5)	(2.5)	-	口縁部 17%	体部 ～ 口縁部は内湾気味に立ち上がる	内・外・断) 灰白	密　1～2mmの白色粒極少量含む	反転復元
440	図 86 図版 56	土師器皿	J18y10	1300	(13.0)	(3.2)	(7.2)	25%	内面はハケ調整	内・外・断) 灰白	密　1mmのチャート？極少量含む	反転復元 13C 前半
441	図 86	山茶碗碗	J18y10	1300 中層	-	(1.5)	7.8～ 8.0	底部 90%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	やや粗　1mm前後の白色粒少量含む	反転復元 13C 前後
442	図 86	山茶碗碗	J18y10	1300 上層	-	(1.4)	(8.5)	底部 25%	渥美第 5 型式	内・断) 黄灰 外) 黄灰・灰	やや粗　1mm前後の白色砂粒少量含む	反転復元 13C 前後
443	図 86	山茶碗碗	J18y10	1300 中層	-	(2.8)	-	5%以下	口縁部一体部はわずかに外反尾張第 3or 第 4 型式	内・外・断) 灰白	密	断面のみ 12C 前半 ～ 中頃
444	図 86 図版 56	山茶碗皿	J18y10	1300	(8.1)	2.1	3.8	40%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　1～2mmの白色砂粒少量、4mmの石英？極少量含む	一部反転復元 13C 前後
445	図 86	白磁碗	J18y10	1300 上層	-	(2.9)	-	5%以下	口縁端部は水平に外側に張り出す　比較的高い高台をもつ	釉) 断) 灰白	密	断面のみ 12C 中頃 ～ 後半
446	図 86 図版 56	青磁香炉	J18y10	1300 上層	(11.0)	(1.4)	-	口縁部 13%	体部外面は片切彫りの蓮弁	釉) オリーブ灰 断) 灰白	緻密	反転復元 13C 初め
447	図 86 図版 56	土師器皿	J18y11	1487	11.3	3.0	4.5	100%	口縁部はヨコナデ	内・外・断) 灰白	密	13C 前半
448	図 86 図版 56	土師器皿	J18y11	1487	11.8	3.0	5.2	95%	口縁部はヨコナデ	内・断) 灰白 外) 灰白・浅黄橙	密　1～2mmの白色砂粒極少量含む	13C 前半
449	図 86	山茶碗碗	J18y11	1487	-	(2.2)	高台 (5.2)	底部 20%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密	反転復元 13C 前後
450	図 86	青磁皿	J18y11	1487	-	(1.1)	(5.0)	底部 20%	内底面は櫛描き状の文様	釉) オリーブ灰 露胎) 灰 断) 灰白	密	反転復元 中国製 同安窯
451	図 86 図版 56	瓦器碗	K18b10	1339 下層	(15.0)	3.9	高台 5.9	40%	全体に外側に開く形状　体部内面は線状の暗文　内底面は粗雑な輪花状の暗文　高台はやや退化した断面三角形	内・外・断) 灰	密	一部反転復元 13C 前半
452	図 86	山茶碗碗	K18b10	1339 上層	(14.0)	(3.1)	-	口縁部 20%	渥美第 6 型式	内・外・断) 灰白	密　3mm大の石英 (?) 極少量含む	反転復元 13C 前半
453	図 86	山茶碗碗	K18b10	1339 上層	(13.4)	(3.5)	-	口縁部 15%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密	反転復元 13C 前後
454	図 86	山茶碗碗	K18b10	1339 上層	-	(2.6)	高台 5.9	底部 100%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰 自然釉) 灰白・灰オリーブ	密　細かい石英少量含む	一部反転復元 13C 前後
455	図 86	山茶碗碗	K18b10	1339	-	(2.0)	(7.6)	20%	渥美第 6 型式	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の白色粒、2～3mmの長石・石英含む	反転復元 13C 中頃
456	図 86 図版 56	白磁皿	K18b10	1339 上層	13.4	3.3	高台 4.1	60%	口縁端部は外側に折り曲がり、上端部は凹線状のくぼみが巡る　底部 ～ 口縁部にかけて開き気味に立ち上がる　やや幅広の高台	釉・断) 灰白	やや粗	朝鮮製
457	図 86	土師器皿	K18d9	730	(11.1)	3.5	-	25%	口縁部はヨコナデによりわずかに外反する　全体に碗状に丸く立ち上がる	内・断) 灰白 外) 浅黄橙	やや粗　細かい赤色酸化粒微量含む	反転復元
458	図 86 図版 56	瓦器碗	K18d9	730	-	(2.6)	高台 (5.0)	底部 20%	体部内面は線状の暗文　内底部に輪花状の暗文	内・外) 暗灰 断) 灰白	密	反転復元 13C 前半
459	図 86	山茶碗碗	K18d9	730	(12.9)	(2.9)	-	口縁部 10%	渥美第 5 型式	内・外・断) 黄灰	密	反転復元 13C 前後
460	図 86	山茶碗碗	K18d9	730	-	(1.3)	高台 6.3	底部 90%	底部に籾殻痕　やや退化した高台　渥美第 6 型式	内) 灰 外・断) 灰白	密　6mmの石英 1 ヶ、1～2mmの石英少量含む	一部反転復元 13C 前半
461	図 86 図版 56	青磁碗	K18d9	730	-	(2.3)	-	5%以下	体部外面は蓮弁文様	釉・断) 灰	密	断面のみ 龍泉窯
462	図 90	土師器皿	K18b6	994	(14.6)	3.2	(9.0)	20%	内面はハケ調整	内・外) 灰白 断) 灰	密　1mmの石英微量含む	反転復元 13C 前半
463	図 90 図版 57	山茶碗碗	K18b6	994	(15.2)	(5.9)	高台 5.8	40%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　細かい白色砂粒中量含む、1～2mmの石英少量、1mmの赤色酸化粒中量含む	反転復元 13C 前後

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
464	図 90	山茶碗 碗	K18b6	994	-	(2.6)	高台 6.5	底部 100%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　1mmの石英微量含む	一部反転復元 13C 前後
465	図 90	山茶碗 碗	K18b6	994	-	(2.2)	高台 6.3	底部 50%	底部は籾殻痕　渥美第 5 型式	内・断) 灰白 外) 黄灰	密　1~2mmの石英・ チャート少量含む	反転復元 13C 前後
466	図 90 図版 57	山茶碗 皿	K18b6	994	(8.0)	1.9	(4.5)	30%	渥美第 5 型式	内・断) 灰白 外) 灰白・灰	密　1mmの赤色酸化粒中量含む	反転復元 13C 前後
467	図 90 図版 57	山茶碗 皿	K18b6	994	(8.0)	1.6	(3.6)	30%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　細かい白色砂粒少量含む	反転復元 13C 前後
468	図 90 図版 57	青磁 皿	K18b6	994	10.4	1.9	5.0	98%		釉) オリーブ黄 露胎) 灰白	密	同安窯 中国製 13C 初め
469	図 90 図版 57	青磁 碗	K18b6	994	-	(2.0)	高台 (5.8)	底部 30%		釉) 灰オリーブ 露胎) 灰 断) 灰白	密	反転復元
470	図 90 図版 57	青磁 碗	K18b6	994	-	(1.8)	高台 5.4	底部 95%		釉) オリーブ灰 露胎) 暗灰黄 断) 灰白	密	一部反転復元 底墨書あり
471	図 90	白磁 碗	K18b6	994	(12.8)	(2.0)	-	口縁部 5%	口縁端部は水平に外側に拡張	釉・断) 灰白	密	反転復元 12C 後半 ~ 13C 初め
472	図 90	白磁 碗	K18b6	994	-	(4.5)	-	5% 以下	口縁端部は水平に外側に拡張	釉・断) 灰白	密	断面のみ 12C 後半 ~ 13C 初め
473	図 90	土師器 皿	K18d7	899 2 層	(9.8)	2.3	-	25%	体部 ~ 口縁部は内湾気味に立ち上がる	内) にぶい黄橙 ~ 灰黄褐 外) 灰黄褐 断) 灰白	密　細かい石英微量含む	反転復元
474	図 90 図版 57	土師器 皿	K18d7	899 2 層	10.5	2.9	-	90%	体部 ~ 口縁部は内湾気味に立ち上がる	内・断・外) 灰白	密　1~2mmの石英微量含む	14C
475	図 90 図版 57	土師器 皿	K18d7	899 2 層	(10.6)	2.7	-	70%	体部 ~ 口縁部は内湾気味に立ち上がる	内・外・断) 灰白	密　細かい石英微量含む	14C
476	図 90	土師器 皿	K18d7	899	(12.7)	(3.3)	-	20%	体部 ~ 口縁部は内湾気味に立ち上がる	内・外・断) 灰白	密　1mmのチャート微量含む	反転復元
477	図 90 図版 57	常滑 甕	K18d7	899 1 層	(43.6)	(19.5)	-	口縁部 10%	中野 8 型式	内・外) にぶい橙 ~ 灰褐 断) 灰	密　1~2mmの石英中量含む	反転復元 13C 後半 ~ 14C 初め
478	図 90 図版 57	青磁 碗	K18d7	899 1 層	-	(4.3)	-	5% 以下	体部外面は粗雑な縞蓮弁	釉) オリーブ灰 断) 灰白	密	断面のみ 15C
479	図 94	土師器 鍋	K18d8	900	(19.5)	(3.6)	-	口縁部 8%	器壁が厚い　口縁端部は「く」の字状の屈曲し内側に折り曲げる	内) 灰白 外) 灰黄褐・浅黄褐 断) 褐灰・浅黄褐	やや粗　1~2mmの石英・ チャート中量含む	反転復元 伊勢 12C
480	図 94	土師器 鍋 or 鉢	K18d8	900	(23.9)	(3.0)	-	口縁部 8%	焼成甘い　内外面に煤付着	内) 暗灰 外) 黒褐・にぶい橙 断) 暗灰・にぶい橙	密　1~2mmの石英・ チャート少量含む	反転復元
481	図 94 図版 58	土師器 鍋	K18d8	900 1 層	(29.4)	(6.0)	-	口縁部 20%	口縁端部は上方への引き上げが顕著で全体に扁平な形状	内・外) 灰褐・にぶい橙 断) にぶい橙 煤部分) 黒	密	反転復元 南伊勢 16C 前半
482	図 94	山茶碗 碗	K18d8	900	-	(2.8)	-	5% 以下	器壁は薄く、わずかに外反　渥美第 4 型式	内・外・断) 灰白	密　1mmの石英微量含む	断面のみ 12C 中頃
483	図 94	土師器 皿	K18e9	715	(7.6)	1.4	5.2	50%	底部 ~ 口縁部は丁寧なヨコナデ、斜め方向に開き気味に立ち上がる　底部は平坦でユビオサエ	内・外・断) 浅黄橙	密　1~2mmの石英少量含む	反転復元 15C 前後
484	図 94	土師器 小型鉢	K18e9	715	(10.1)	(4.1)	-	10%	口縁部の立ち上がりは短い	内・外) 灰白 断) 褐灰 ~ 浅黄橙	密　細かい赤色酸化粒少量含む	反転復元 南伊勢
485	図 94 図版 58	土師器 鍋	K18e9	715	(13.1)	(5.1)	-	口縁部 20%	羽釜形　体部外面は横方向のやや粗いハケ調整	内・外) 浅黄橙 ~ 褐灰 断) 褐灰	密　1~2mmの石英微量、細かい赤色酸化粒少量含む	反転復元 南伊勢
486	図 94 図版 58	土師器 鍋	K18e9	715	(20.0)	(10.1)	-	20%	口縁端部は内側に折り曲げる 体部外面上位はハケ調整　体部下半 ~ 底部はヘラケズリ	内・外) 浅黄橙 断) 灰	密　金色微粒少量、細かい石英・チャート微量含む	反転復元 南伊勢
487	図 94 図版 58	常滑 片口鉢	K18e9	715	(19.0)	(4.0)	-	5% 以下	焼成は極めて堅密　中野 7 型式 片口 b Ⅱ類	内・外) 灰褐 ~ 黒褐 断) 灰	密　細かい白色砂粒少量含む	反転復元 14C 前半
488	図 94 図版 58	山茶碗 片口鉢	K18e9	715	(32.7)	(7.4)	-	口縁部 10%	口縁端部上端に沈線を巡らす 尾張第 7 型式	内) 灰白 外・断) 灰	密　1~5mmの石英少量含む	反転復元 13C 後半
489	図 94	土師器 皿	K18e10	1768	(12.8)	(3.1)	(6.4)	25%	体部内面はハケ調整	内・外・断) 灰白	密　1~2mmの白色砂粒極少量含む	反転復元 13C 後半
490	図 98 図版 58	土師器 皿	K18e8	427	-	(1.7)	高台 (6.2)	底部 30%	高台付　胎土に赤色酸化粒含む	内・外・断) 浅黄橙	密　1mm位の赤色酸化粒微量含む	反転復元 紀ノ川流域産
491	図 98 図版 58	土師器 皿	K18e8	427	11.3	3.0	-	90%	全体に丸みを帯びて立ち上がる 口縁部は強いヨコナデ　体部下半 ~ 底部は粗いユビオサエ	内) 浅黄橙 外・断) 灰白	密　1~5mmの石英微量含む	14C 後半 ~ 15C
492	図 98	土師器 皿	K18e8	427	10.7	2.9	-	80%	全体に丸みを帯びて立ち上がる 口縁部は強いヨコナデ　体部下半 ~ 底部は粗いユビオサエ	内・外・断) 灰白	やや粗　2mm大の石英極少量含む	14C 後半 ~ 15C
493	図 98	土師器 皿	K18e8	427	(12.0)	3.4	-	90%	全体に丸みを帯びて立ち上がる 口縁部は強いヨコナデ　体部下半 ~ 底部は粗いユビオサエ	内・外・断) 灰黄	密	反転復元 14C 後半 ~ 15C
494	図 98	土師器 鍋	K18e8	427	-	(3.4)	-	5% 以下	内傾する口縁部下に鍔が付く	内) にぶい黄橙 ~ 灰黄褐 外) にぶい黄橙 ~ 黒 断) にぶい橙	密　細かい石英 (?) 中量含む	断面のみ 南伊勢 14C 後半
495	図 98	土師器 鍋	K18e8	427	(19.9)	(2.7)	-	5% 以下	「く」の字状に屈曲した口縁端部を内側に折り曲げる	内) 灰白 外) にぶい黄橙 断) 黒	密　細かい石英 (?) 少量含む	反転復元 南伊勢 14C 後半
496	図 98 図版 58	土師器 鍋	K18e8	427	(25.8)	(12.2)	-	10%	「く」の字状に屈曲した口縁端部を内側に折り曲げる	内・外) にぶい橙 断) にぶい橙 ~ 灰	密　1mmの石英少量含む	反転復元 南伊勢 14C 後半

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
497	図 98	山茶碗 碗	K18e8	427	(16.0)	(3.5)	-	口縁部 20%	器壁は薄い　口縁部はやや外反する　渥美第５型式	内・外・断) 灰白	密　細かい白色砂粒中量含む	反転復元 13C 前後
498	図 98 図版 58	常滑 甕	K18e8	427 下層	(49.6)	(19.7)	-	口縁部 10%	中野８型式	内) 灰褐 ～ にぶい赤褐 外) にぶい赤褐 断) 灰白 ～ 灰	密　1～3mmの石英・チャート多量含む	反転復元 14C 後半
499	図 98 図版 58	青磁 盤	K18e8	427 下層	(11.5)	(1.8)	-	口縁部 10%		釉) 明緑灰 断) 灰白	密	反転復元 龍泉窯 14C
500	図 98 図版 58	青磁 碗	K18e8	427 下層	(14.6)	(3.8)	-	口縁部 10%		釉) 明緑灰 断) 灰白	密	反転復元 龍泉窯 14C
501	図 98	土師器 皿	K18g10	661	(8.7)	1.1	(6.0)	20%	器高 1cmで扁平	内) 黄灰 外・断) 灰白	密　1mmの赤色酸化粒微量含む	反転復元 13C
502	図 98	土師器 皿	K18g10	661	12.8	3.5	5.4	70%	体部 ～ 口縁部は内湾気味に立ち上がる	内) 浅黄橙 外・断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒微量 1～2mmの砂粒少量含む	反転復元 13C
503	図 98	山茶碗 鉢	K18g10	661	-	(2.5)	高台 (8.0)	底部 50%	底部に墨書　渥美第５型式	内・外・断) 灰白	密	反転復元 13C 前後
504	図 98	山茶碗 皿	K18g10	661	(7.8)	2.2	(4.4)	25%	渥美第５型式	内) 灰 外・断) 灰白	密	反転復元 13C 前後
505	図 98	山茶碗 碗	K18g10	661	-	(3.3)	高台 (5.7)	底部 40%	高台は退化　尾張第５型式	内・外・断) 灰白	密　1mmの石英少量含む	反転復元 13C 前半 ～ 中頃
506	図 98	瓦質土器 火舎	K18g10	661	-	(5.4)	-	5% 以下		内) 黄灰 外) 黄灰 ～ にぶい褐 断) 灰褐 ～ にぶい橙	密　1～2mmの石英・赤色酸化粒中量、銀色微粒中量含む	断面のみ 京都系？ 13C
507	図 98	土師器 皿	K18f9	654	13.9	3.1	9.6	70%	底部は平らで体部は内湾気味に斜め上方に立ち上がる	内) 浅黄 外・断) 灰白	密　1～2mmの石英微量含む	13C 前半
508	図 98	山茶碗 碗	K18f9	654	-	(2.3)	高台 (7.4)	底部 25%	しっかりした高台　渥美第５型式	内・外・断) 灰白	密　1～2mmの石英微量含む	反転復元 13C 前後
509	図 98	瀬戸 平碗	K18f9	654	-	(3.2)	高台 (6.0)	5% 以下	古瀬戸後Ⅱ期	釉・断) 浅黄	密　最大 2mmの赤色酸化粒微量含む	反転復元 15C 前後
510	図 98	白磁 口禿げ皿	K18f9	654	(10.0)	(1.4)	-	5% 以下		釉・断) 灰白	密	反転復元
511	図 103	土師器 皿	K18g11	863	(8.8)	1.3	(5.8)	25%	口縁部はヨコナデ　底部は平らで器高が高い　底部は未調整	内・外・断) 灰白	密	反転復元 13C 前半 ～ 中頃
512	図 103	土師器 皿	K18g11	863	(14.0)	1.9	(10.3)	20%	口縁部はヨコナデ　底部は平らで器高が高い　底部は未調整	内・外・断) 灰白	密　1～2mmの赤色酸化粒少量含む	反転復元 13C 前半 ～ 中頃
513	図 103	山茶碗 碗	K18g11	863	-	(2.1)	高台 (6.3)	底部 25%	底部に籾殻痕　渥美第５型式	内・外・断) 黄灰	密　1～2mmの石英微量含む	反転復元 13C 前後
514	図 103	山茶碗 碗	K18g11	863	-	(2.1)	高台 (7.7)	底部 25%	底部に籾殻痕　渥美第６型式	内・外・断) 灰白	密　細かい石英少量含む	反転復元 13C 前後
515	図 103 図版 59	土師器 皿	K18g12	867	14.6	3.5	9.1	70%	ロクロ成形による引き上げ痕 底部は糸切り後板状圧痕	内・断・外) 灰白	密　5mm大のチャート、5mm大の灰色石極微量含む	12C 後半
516	図 103	土師器 皿	K18g12	867	-	(2.1)	高台 (8.2)	底部 25%	高台は高く「ハ」の字状にしっかり付く	内・外・断) 灰白	密　細かいチャート微量含む	反転復元
517	図 103	山茶碗 碗	K18g12	867	(14.0)	(5.0)	-	5% 以下	渥美第５型式	内・外) 灰 断) 灰白	密　細かい石英微量含む	反転復元 13C 前後
518	図 103	山茶碗 碗	K18g12	867	(14.0)	(4.5)	-	10%	渥美第５型式	内・外・断) 灰白	密　1mmの石英微量含む	反転復元 13C 前後
519	図 103 図版 59	山茶碗 皿	K18g12	867	9.0	2.1	5.1	80%	渥美第５型式	内・外・断) 灰白 ～ 灰黄	密	13C 前後
520	図 103	山茶碗 碗	K18g12	867	-	(2.7)	高台 6.8	底部 100%	渥美第５型式	内・外・断) 灰白	密　4mmのチャート微量、1～2mmの石英微量含む	一部反転復元 13C 前後
521	図 103 図版 59	瓦質土器 ﾐﾆﾁｭｱ 羽釜	K18g12	867	5.0	5.5	-	95%	口縁部に狭い３条の沈線を巡らす　脚の剥離痕より三足が付く 全体に丁寧なナデ	内・外) にぶい黄橙 ～ 黒 断) 灰白	密　1mmのチャート？微量含む	13C
522	図 103	信楽？ 壺	K18h11	688	-	(4.0)	(11.0)	5% 以下	平坦な底部から斜め上方に体部が伸びる	内) にぶい赤褐 外) 灰赤 断) 褐灰 釉) オリーブ灰	密　1～2mmの石英微量含む	反転復元
523	図 103	山茶碗 碗	K18h11	688	-	(4.1)	高台 (6.9)	5% 以下	体部と高台は別の土を用いる 尾張	内・断) 灰白 自然釉) 灰オリーブ 外) 灰白 ～ 灰	密　1mmのチャート微量含む	反転復元 12C 前後
524	図 103	山茶碗 片口鉢	K18h11	688	-	(4.9)	高台 (10.9)	5% 以下	内面は磨滅　渥美第４型式	内・外・断) 灰白 ～ 灰	やや粗　1～2mmの石英少量含む	反転復元 12C 後半
525	図 103	土師器 皿	K18j11	570	8.0	1.1	4.9	70%	底部は糸切り	内・外・断) 灰白	密　細かいチャート微量含む	13C 前半
526	図 103	土師器 皿	K18j11	570	(12.0)	2.3	(6.7)	20%	体部 ～ 口縁部は内湾気味に立ち上がる	内・外・断) 灰白	密　1mmの石英・赤色酸化粒少量含む	反転復元 13C 前半
527	図 103 図版 59	山茶碗 碗	K18j11	570	-	(2.1)	高台 7.7	底部 40%	底部に「備前」の墨書　渥美第４型式	内・外・断) 灰白	密　1mmの石英少量含む	反転復元 12C 後半
528	図 103	常滑 鉢	K18j11	570	(26.0)	(4.6)	-	5% 以下	焼成は堅密　中野５型式	内) 褐 外) 灰褐 ～ 黒褐 断) にぶい橙 ～ 灰	密　細かい白色砂粒少量含む	反転復元 13C 前後
529	図 103	青磁 碗	K18j11	570	-	(2.6)	高台 5.3	底部 50%	高台畳付まで施釉	釉) 灰オリーブ 露胎) にぶい黄褐 断) 灰	密	反転復元 中国製 龍泉窯系 13C
530	図 105	土師器 皿	K18m9	12	(13.7)	(4.2)	(9.4)	40%	底部は糸切り　底部 ～ 口縁部は上方に立ち上がる	内・外) 浅黄橙 断) にぶい橙	緻密　赤色酸化粒中量含む	反転復元 紀ノ川流域 12～13C 前半

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
531	図 105	土師器皿	K18m9	12 下層	(19.0)	4.0	(14.3)	40%	底部は糸切り	内・外) 浅黄橙 断) 灰白	緻密	反転復元 紀ノ川流域 12~13C 前半
532	図 105	土師器皿	K18m9	12 下層	(15.2)	3.6	-	25%	口縁部のヨコナデが顕著　底部～口縁部はやや内湾気味に立ち上がる	内・外・断) 灰白	緻密	反転復元
533	図 105 図版 59	土師器皿	K18m9	12 下層	15.4	3.6	7.5	75%	口縁部のヨコナデが顕著　底部～口縁部はやや内湾気味に立ち上がる	内・外・断) 灰白 黒斑) 灰	密	
534	図 105 図版 59	土師器皿	K18m9	12 下層	15.4	3.55	8.7	100%	口縁部のヨコナデが顕著　底部～口縁部はやや内湾気味に立ち上がる	内) 灰白・黒褐 外) 灰白	緻密　2~5mmチャート？含む	
535	図 105	土師器灯明皿	K18m9	12	(8.5)	2.0	(6.6)	30%	底部は糸切り	内・外・断) 橙 煤部分) 褐灰	密	反転復元 紀ノ川流域 12~13C 前半
536	図 105	土師器灯明皿	K18m9	12 下層	(8.0)	1.65	6.0	40%	底部は糸切り	内・外・断) 灰黄褐 煤部分) 暗灰	密	反転復元 紀ノ川流域 12~13C 前半
537	図 105 図版 59	土師器灯明皿	K18m9	12 下層	(8.9)	2.0	(7.3)	45%	底部は糸切り	内・外・断) 橙 煤部分) 褐灰	密　1~2mmの石英・チャート？少量含む	反転復元 紀ノ川流域 12~13C 前半
538	図 105 図版 59	土師器小皿	K18m9	12 下層	8.9	2.2	7.1	90%	口縁部のヨコナデが顕著　底部～口縁部はやや内湾気味に立ち上がる	内・外・断) 浅黄橙	緻密　赤色酸化粒少量含む	
539	図 105	土師器鍋	K18m9	12	(21.0)	(4.8)	-	口縁部 17%	「く」の字状に屈曲した口縁端部を内側に折り曲げる	内) 淡黄 外) 淡黄・淡赤橙 断) 褐灰	やや粗　1~3mm石英中量含む	反転復元 南伊勢
540	図 105 図版 59	山茶碗碗	K18m9	12 下層	(14.3)	5.0	高台 (6.2)	20%	口縁部はやや薄い、端部は外反尾張第 4 型式	内) 黄灰 外) 灰 断) 灰白	密　細かい石英中量含む	反転復元
541	図 105	山茶碗碗	K18m9	12 下層	(15.3)	5.1	高台 6.4	25%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白 ～ 黄灰	密　1~3mm位のチャート微量含む	反転復元 13C 前後
542	図 105	山茶碗片口鉢	K18m9	12 下層	-	(1.7)	高台 (11.6)	底部 10%	尾張第 4 型式	内・外・断) 灰白	密　1~5mm位の石英少量含む	反転復元 12C 後半
543	図 105 図版 59	山茶碗碗	K18m9	12 下層	(16.0)	5.1	高台 7.7	60%	底部に籾殻痕　尾張第 5 型式	内) 灰白 ～ 灰黄 外・断) 灰白	密	一部反転復元 12C 後半
544	図 105 図版 59	山茶碗皿	K18m9	12 下層	(8.5)	2.0	(4.6)	30%	渥美第 5 型式	内・断・外) 灰白	密	反転復元 13C 前後
545	図 105 図版 59	山茶碗皿	K18m9	12 下層	(8.0)	2.0	(4.9)	60%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密	反転復元 13C 前後
546	図 105 図版 59	山茶碗皿	K18m9	12 下層	7.5	2.4	4.0	98%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白 自然釉) 灰オリーブ	密	13C 前後
547	図 105 図版 60	山茶碗片口鉢	K18m9	12 下層	-	(6.5)	高台 (16.0)	底部 20%	渥美第 5 型式	内) 灰白 外) 灰 断) 褐灰	密　1~4mmの石英少量含む	反転復元 13C 前後
548	図 105 図版 60	山茶碗片口鉢	K18m9	12 下層	(33.0)	(4.3)	-	5% 以下	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰	密　3~4mm大のチャート微量含む	反転復元 13C 前後
549	図 105 図版 60	渥美短頸壺	K18m9	12 下層	(13.0)	15.0	(9.5)	40%	器高に比して胴部径が大きい	内) 黄灰 外・断) 灰 自然釉) オリーブ灰	密	反転復元 渥美産 13C 前後
550	図 105	渥美甕	K18m9	12 下層	-	(10.5)	-	5% 以下	口縁部は大きく外反し、端部を丸く収める　端部上面に沈線状のかすかな凹線を巡らす	内・外) 灰 断) 黄灰	密　1~5mmの石英・チャート少量含む、細かい白色砂粒少量含む	断面のみ 渥美産 12C 後半 ～ 13C 初め
551	図 105 図版 60	渥美甕	K18m9	12 下層	(36.3)	(10.8)	-	5% 以下	口縁部は大きく外反し、端部を丸く収める	内) 黄灰 ～ 灰 外・断) 黄灰	密　1~5mmの石英・チャート少量含む	反転復元 渥美産 12C 後半 ～ 13C 初め
552	図 105 図版 60	常滑甕	K18m9	12 下層	(45.5)	(23.5)	-	口縁部 20%	口縁部は大きく外反し、端部を丸く収める　端部上面に沈線状のかすかな凹線を巡らす　中野 3 型式	内) 褐灰 外) 灰褐 釉) オリーブ灰 断) 灰	密　1~6mmの石英多量含む	反転復元 12C 後半
553	図 105 図版 60	青磁碗	K18m9	12 下層	-	(4.0)	高台 4.8	40%	内外面に細い櫛描状の文様	釉) 灰オリーブ 露胎・断) 灰白	密	反転復元 同安窯系 12C 中頃 ～ 後半
554	図 105 図版 60	白磁四耳壺	K18m9･10	12 下層	10.6	(32.0)	(8.0)	-	口縁端部は丸く折り曲げる　なだらかな卵形の胴部　太い角高台が付く、高台端部外面は幅の狭い削りによる面取り	内・外) 灰オリーブ 断) 灰白	緻密	反転復元 12C
555	図 106 図版 61	常滑広口壺	K17a25	4034	(15.0)	(4.8)	-	5% 以下	口縁端部は上下に拡張する　中野 6b 型式	内・外) 暗赤褐 断) 褐灰	密　1mmの白色粒、3~5mmの細砂粒含む	反転復元 13C 後半
556	図 106	白磁皿	K17a25	4034	-	(1.5)	高台 4.3	15%	体部下半 ～ 高台は露胎　割り高台　底部内面に墨書	釉) 断) 灰白 露胎) 浅黄橙	緻密	中国製 15C 前半
558	図 106 図版 61	瀬戸合子蓋	K17e25	4002 直上	5.0	1.6	1.9	90%	つまみの付くもの　古瀬戸中Ⅰ or Ⅱ期	釉) 黒褐 ～ にぶい黄褐 断) にぶい黄橙	緻密	一部反転復元 14C 前半 ～ 中頃
559	図 106	常滑甕	K17d24	4002 石段北面	-	(6.7)	-	5% 以下	中野 6b 型式	内・外) 灰褐 断) 黒褐	密　1~3mmの白色粒・灰色粒含む	断面のみ 14C 前半
560	図 106 図版 61	備前擂鉢	K17d24	4002	(28.2)	(6.4)	-	口縁部 10%	備前Ⅲ期	内) 灰黄褐 外) 灰褐 断) 灰 ～ 灰褐	密　1cm大の灰色の小石極少量、最大 5mmの石英 (?) 中量含む	反転復元 14C
561	図 106	常滑片口鉢	K17e25	4002 直上	(28.8)	9.8	(11.6)	15%	体部上半は斜め上方のヘラケズリ　体部下半 ～ 底部はユビオサエ　中野 10 型式	内・断) 暗赤灰 外) 暗赤褐	密　1~2mmの長石粒、4mmの細砂粒含む	反転復元 15C 後半

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
562	図 106	土師器皿	K17d25	4002	(10.4)	2.8	(4.2)	20%	口縁部はヨコナデ　体部は内湾気味に丸く立ち上がる　底部は未調整	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の白色粒・黒色粒含む	反転復元
563	図 106	瀬戸平碗	K17d25	4002	(14.0)	(3.5)	-	5%	口縁部はわずかに外反　古瀬戸後Ⅱ期	内・断) 灰白 外) 灰オリーブ	緻密	反転復元 15C 前半
564	図 106	土師器鍋	K17d25	4002	(37.0)	(3.0)	-	10%	「く」の字状に屈曲した口縁端部を内側に折り曲げる	内・外・断) 灰白	密　1mmの黒色粒・石英含む	反転復元 南伊勢 15C 前後
565	図 106 図版 61	土師器皿	J18v2	4030	(8.2)	1.9	(5.0)	30%	器壁は薄い　口縁部は大きく内湾して立ち上がる	内・外) 橙 断) にぶい橙	密　1mm以下の白色粒・褐色粒含む	反転復元 南伊勢 15C 中頃
566	図 106 図版 61	瀬戸折縁小皿	K18u･v2	4030	8.6	2.1	4.8	90%	古瀬戸後Ⅲ期	釉) 灰白 断) にぶい黄橙	密　5mmの灰色粒含む	15C 前半
567	図 106	瀬戸縁釉小皿	J18v2	4030	(10.2)	1.9	(4.0)	30%	古瀬戸後Ⅲ期	釉) 褐 断) 浅黄橙	緻密	反転復元 15C 前半
568	図 106	瀬戸擂鉢	J18v2	4030	(24.0)	(2.5)	-	5% 以下	鏑釉　大窯 1	釉) 黒 断) 浅黄橙	密　1mmの白色粒少量含む	反転復元 15C 末
569	図 106	土師器鍋	J18w2	4030	(26.4)	(1.7)	-	5% 以下	口縁端部を内側に折り曲げる	内・外) にぶい橙 断) 黒・明褐灰	密　1mmの白色粒・黒色粒少量含む	反転復元
570	図 106	土師器鍋	J18v2	4030	(21.6)	(5.0)	-	5%	鍔の付く羽釜形　口縁部及び鍔の部分に丁寧なヨコナデ　体部は横方向の粗いハケ調整	内・断) 明褐灰 外) 灰白	密　1mm以下の白色粒、金雲母含む	反転復元 南伊勢 15C 前後
571	図 106 図版 61	備前壺	K18u･v2	4030	(11.4)	(6.2)	-	5% 以下	口縁端部はやや丸みを帯びる、備前Ⅳ期	内・外) にぶい赤褐 断) 灰赤	密　1mmの白色粒・褐色粒、5mmの細砂粒含む	反転復元 14C
572	図 106 図版 61	備前鉢	J18v2	4030	(16.0)	5.6	(10.0)	50%	体部外面に窯印か　「キ」の刻印備前Ⅴ期	内) 灰褐 外) 暗赤褐・赤 断) 灰	密　1mmの白色粒、1~2mmの細砂粒含む	反転復元 16C
573	図 106	常滑甕	J18w2	4030	(37.0)	(19.1)	-	5%	中野 10 型式	内) 赤褐 外) オリーブ黄・暗赤褐 断) 暗赤灰	密　1mm以下の白色粒・黒色粒含む	反転復元 15C 後半
574	図 106	常滑甕	K18u･v2	4030	-	(8.1)	-	5% 以下	中野 8 型式	内) 暗赤褐 外) 黒褐 断) 褐灰	密　2mmの長石粒・黒色粒含む	断面のみ 14C 後半
575	図 106	常滑鉢	K18u･v2	4030	(22.6)	(5.5)	-	5% 以下	体部はユビオサエ　中野 9 型式	内) 灰赤 外) 暗赤褐 断) 褐灰	密　1mmの白色粒、2~3mmの黒色粒・褐色粒少量含む	反転復元 15C 前半
577	図 106 図版 61	青磁碗	J18w2	4030	-	(2.0)	高台 (5.5)	30%	内底部は細い線描の花文様を印刻	釉) オリーブ灰 露胎) 灰褐 断) 灰	緻密	龍泉窯系 中国製
578	図 108	土師器鍋	K17c24	4000 階段直上	(24.4)	(3.0)	-	5% 以下	器壁は極薄い　端部を上方に摘み上げる　頸部は「く」の字状に折り曲げる	内) にぶい黄橙 外) にぶい橙 断) 浅黄橙	密　3mmの灰色粒、1mm以下の黒色粒少量含む	反転復元 南伊勢
579	図 108	瀬戸直縁大皿	K17c24	4000 階段直上	(30.0)	(6.5)	-	5%	口縁部は丸く収める　古瀬戸後Ⅲ期	内) オリーブ 外) 灰オリーブ 断) 灰白	密　2mmの長石粒、1mmの黒色粒少量含む	反転復元 15C 前半
580	図 108	備前擂鉢	K17c25	4000 ｽﾃｯﾌﾟ直上 1 層	-	(9.0)	-	5%	口縁部は上下に拡張する　重ね焼き痕　備前Ⅳ期	内) 暗赤褐 外) にぶい赤褐 断) 橙	密　1mmの白色粒、3~5mmの細砂粒含む	断面のみ 15C 中頃 ~ 後半
581	図 108	土師器皿	K17c25	4000 階段石下	(11.2)	(2.5)	-	5%	口縁部は斜め上方に立ち上がる	内・外・断) にぶい橙	密　1mm以下の黒色粒、雲母少量含む	反転復元
582	図 108	土師器皿	K17c25	4000 階段石下	(11.8)	2.0	(8.0)	15%	器壁は薄い　体部は丸く内湾して立ち上がる	内・外) 浅黄橙 断) 灰白	密　1mm以下の白色粒少量含む	反転復元 南伊勢 15C 前後
583	図 108	瀬戸折縁深皿	K17c25	4000 階段石下	(27.2)	(3.5)	-	5% 以下	古瀬戸後Ⅱ期	内・外) 浅黄 断) 灰黄	密　少量の 1mm以下の黒色粒含む	反転復元 15C 前後
584	図 108	瀬戸直縁大皿	K17c25	4000 階段石下	(29.6)	(6.7)	-	5% 以下	古瀬戸後Ⅰ期	釉) 灰白 露胎) 浅黄橙 断) にぶい黄橙	密　1~2mmの黒色粒・褐色粒含む	反転復元 14C 後半
585	図 112	土師器皿	K18ℓ10	609 (建物 1)	-	(1.8)	-	5% 以下	体部 ~ 口縁部は内湾気味に立ち上がる　口縁部はやや強いヨコナデ	内・外・断) 灰白	密　細かい赤色酸化粒微量含む	断面のみ
586	図 112	山茶碗鉢	K18c7	1716 (建物 1)	-	(1.7)	高台 (9.1)	高台部 10%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　細かい白色砂粒少量含む	反転復元 13C 前後
587	図 112	土師器鍋	K18ℓ10	609 (建物 1)	(17.8)	(3.9)	-	口縁部 10%	口縁端部は丸く収める　頸部は「く」の字状に折り曲げる	内・外) にぶい黄橙 断) 灰	密　1~2mmの石英中量含む	反転復元 断面のみ
588	図 112	常滑壺	K18b9	946 (建物 2)	-	(5.6)	-	5% 以下	中野 6a 型式	内・外) 暗赤褐 釉) オリーブ黒 断) 灰白 ~ 灰褐	密　細かい石英中量含む	断面のみ 13C 後半
589	図 115	土師器皿	K18c6	675	(7.8)	2.2	(4.6)	15%	口縁部は斜め方向に伸びる	内・断) 橙 外) 浅黄橙	密　1mm以下の黒色粒含む	反転復元
590	図 115	土師器皿	K18c6	675	(13.2)	(2.7)	-	5%	口縁部は斜め上方に伸びる　強いヨコナデ	内・外・断) 浅黄橙	密　1mm以下の黒色粒、5mmの褐色粒含む	反転復元
591	図 115	土師器鍋	K18c6	675	(22.6)	(4.9)	-	5%	口縁端部を内側に折り曲げる　頸部は「く」の字状に曲がる	内・外) にぶい橙 断) 黒褐	密　1mm以下の白色粒、1mmの細砂粒含む	反転復元 伊勢
592	図 115	山茶碗碗	K18c6	675	-	(3.2)	高台 7.3	30%	渥美第 6 型式	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の白色粒含む	一部反転復元
593	図 115	山茶碗碗	K18c6	675	(13.2)	(3.5)	-	10%	渥美第 5 型式	内・外・断) にぶい黄橙	密　1mm以下の白色粒・黒色粒含む	反転復元 13C 前後
595	図 115	瀬戸天目茶碗	K18e10	438	(12.4)	(4.0)	-	5% 以下	大窯 1	釉) 黒・灰褐 断) にぶい橙	密　1mmの褐色粒含む	反転復元 15C 後半
596	図 115	瀬戸天目茶碗	K18e10	438	(10.8)	(5.4)	-	5%	大窯 4 後半	釉) にぶい赤褐 露胎) 浅黄橙 断) 灰白	密　1mm以下の褐色粒含む	反転復元 16C 末

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
597	図 115	備前小壺	K18e10	438	-	(7.2)	4.1	80%	底部は糸切り	内) 灰赤 外) 極暗赤褐 ～ 灰赤 断) 褐灰	密	
598	図 115	白磁皿	K18e10	438	(11.8)	(2.6)	-	5%以下		釉・断) 灰白	緻密	反転復元 16C 中頃 ～ 後半
599	図 121	瀬戸皿	J17	1-54	10.4	2.4	4.8	100%	古瀬戸後Ⅲ or Ⅳ期	釉) 灰白 露) 淡黄	密　石英少量含む	15C 中頃
600	図 121 図版 62	青磁碗	J18x9	1600	-	(3.8)	高台 5.3	30%	見込に陰刻花文	釉) オリーブ灰 露胎) にぶい赤褐 断) 灰白	密	一部反転復元
601	図 121	土師器皿	K18a15	34	(9.6)	(2.3)	-	口縁部 12%	内面はヘラナデ　外面はヨコナデ	内・外・断) 浅黄橙	密　0.5㎜大の褐色粒微量含む	反転復元
602	図 121	土師器皿	K18a15	34	(11.6)	(2.1)	-	口縁部～体部 10%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ、ナデ	内・外・断) 灰白	やや粗　0.5㎜以下の白色粒微量含む	反転復元
603	図 121	山茶碗碗	K18a15	34	-	(2.9)	(9.0)	高台部 40%	内面は自然釉　貼付高台　底部は回転糸切り	内・外・断) 灰白	密　0.5㎜以下の黒色粒少量含む	反転復元
604	図 121	白磁鉢	K18a15	34	(17.2)	(3.3)	-	5%	口縁部はやや外側に反る	内・外・断) 灰白	密	反転復元
605	図 121	土師器灯明皿	K18a13	1460 礫層	(12.6)	2.0	(6.0)	15%	口縁部にタール付着	内・外・断) 灰白	密　1㎜以下の白色粒含む	反転復元
606	図 121	土師器皿	K18a13	1460	(9.6)	(2.3)	-	5%	口縁部は外反	内) にぶい黄橙 外) 灰白・にぶい黄橙 断) 灰白	緻密　少量の 1㎜以下の黒色粒を含む	反転復元
607	図 121	土師器鍋	K18a13	1460	(33.0)	(1.5)	-	5%以下	内外面に煤付着	内・外) にぶい橙 断) 灰白	密　1㎜以下の白色粒少量含む	反転復元 伊勢
608	図 121	絵唐津皿	K18a13	1460 礫層	-	(1.5)	4.7	30%	見込に鉄絵 (植物文)　トキン高台	釉) 黄灰 断) にぶい橙	緻密	
609	図 121	唐津杏形碗	K18a13	1460	(12.0)	8.1	6.0	40%	口縁部は折り返し　藁灰釉	釉) 赤灰 露胎) 赤褐 断) 明赤褐	緻密　1㎜以下の白色粒少量含む	一部反転復元
610	図 121	瀬戸折縁皿	K18a13	1460	(10.6)	(2.1)	(6.4)	30%	大窯 3~4	内) オリーブ黄 外) 灰白 断) 浅黄橙	密　1㎜以下の黒色粒少量含む	反転復元 16C 後半
611	図 121	唐津碗	K18a13	1460 礫層	(12.0)	5.9	(4.4)	20%	削り出し高台　灰釉	釉) 灰オリーブ 露胎) にぶい橙 断) 灰白	緻密	反転復元
612	図 121	陶器大皿	K18a13	1460 礫層	-	(5.8)	-	5%	口縁部はヘラケズリ後ナデ	内) にぶい赤褐 外) 暗赤褐 断) 褐灰	密　1㎜以下の白色粒、1～2㎜の細砂粒含む	断面のみ
613	図 121	常滑甕	K18a13	1460	-	(5.6)	-	5%以下	口縁部は折り返し	内) にぶい褐 外) にぶい赤褐 断) にぶい橙	密　1㎜の白色粒含む	断面のみ
614	図 121	備前擂鉢	K18a13	1460	-	(3.5)	-	5%以下	口縁部はヨコナデ	内・断) 橙 外) にぶい赤褐	密　1㎜以下、1～2㎜の白色粒、4㎜の細砂粒含む	断面のみ
615	図 121 図版 62	染付皿	K18a13	1460	-	(1.3)	(7.4)	30%	見込は二重圏線　玉取獅子	釉) 白 露胎) 灰白 断) 白 呉須) 青	緻密	一部反転復元 景徳鎮
616	図 124	土師器皿	K18b14	1455	11.3	3.0	5.0	98%	口縁部はヨコナデ　体部はナデ	内・外・断) 灰白	密　1~3㎜位の石英含む	
617	図 124	土師器皿	K18b14	1455	11.1	3.3	5.4	75%	内面は板状工具によるナデ	内・外・断) 灰白	密　1㎜以下の黒色粒、2~3㎜の石英含む	
618	図 124	土師器皿	K18b14	1455	(11.2)	3.0	6.0	70%	内面は板状工具によるナデ	内・外・断) 灰白	密　1㎜以下の黒色粒、石英少量含む	一部反転復元
619	図 124	土師器皿	K18b14	1455	(11.0)	3.1	(4.0)	40%	内面は板状工具によるナデ	内・外・断) 灰白	密　1㎜以下の黒色粒、2㎜の石英含む	反転復元
620	図 124	土師器皿	K18b14	1455	(12.0)	3.0	(6.6)	35%	内面はハケ状工具によるナデ	内・外・断) 灰白	密　1㎜以下の黒色粒、1㎜の細砂粒含む	反転復元
621	図 124	土師器皿	K18b14	1455	(11.2)	2.9	3.5	55%	内面中心部は円形の押印文か	内・外・断) 灰白	密　1㎜以下の黒色粒、1㎜の細砂粒含む	一部反転復元
622	図 124	土師器鍋	K18b14	1455	(25.6)	(2.3)	-	5%以下	口縁部は折り返し、ヨコナデ	内・断) 灰白 外) 浅黄橙	密　1㎜の石英、1㎜以下の黒色粒、雲母少量含む	反転復元 伊勢
623	図 124	瓦質土器擂鉢	K18b14	1455	(32.2)	(11.5)	-	20%	内面は細かいスリ目　外面はユビオサエ	内・外・断) 黒	密　1㎜の白色粒、1~5㎜の細砂粒含む	反転復元
624	図 124	瓦質土器擂鉢	K18b14	1455	(38.6)	(11.5)	-	15%	内面は細かいスリ目　外面はユビオサエ	内・外・断) 黒	密　3~5㎜の石英、1㎜以下の白色粒含む	反転復元
625	図 124	東播系須恵質こね鉢	K18b14	1455	-	(3.2)	-	5%以下	口縁部はヨコナデ	内・断) 灰 外) 灰・暗灰	緻密　1㎜以下の白色粒含む	断面のみ
626	図 124 図版 62	青磁稜花皿	K18b14	1455	(13.6)	(2.7)	-	15%	内面は葉文	釉) 明緑灰 断) 灰白	緻密	反転復元
627	図 124	土師器皿	K18a5	465	(8.6)	1.9	6.8	10%	口縁部の一部に煤付着	内) 灰白 外) 明褐灰 断) 浅黄橙	密　1㎜以下の黒色粒含む	反転復元 伊勢
628	図 124	土師器鍋	K18a5	465	(27.8)	(14.0)	-	30%	体部外面上部はハケナデ　下部はヘラケズリ　煤付着	内・外) にぶい橙 断) 灰白	密　1㎜以下の黒色粒・細砂粒、細かい長石粒・雲母含む	反転復元 伊勢
629	図 124	山茶碗碗	K18a5	465	-	(2.0)	高台 (6.6)	底部 15%	渥美第 5 型式	内・断) 灰白 外) 褐灰	密	反転復元 13C 前後
630	図 124	山茶碗碗	K18a5	465	-	(2.2)	高台 8.6	底部 15%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　1㎜以下の黒色粒・白色粒含む	反転復元 13C 前後

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
631	図 124	白磁口禿げ碗	K18a5	465	(12.0)	(2.9)	-	5%以下	口縁部先端は釉ハギ	釉・断) 灰白 露胎) 灰黄	緻密	反転復元
632	図 124 図版 62	白磁碗	K18a5	465	(14.2)	(2.9)	-	5%	口縁部は丸く収まる	釉・断) 灰白	緻密	反転復元 中国製 12C 前後
633	図 126 図版 62	土師器皿	K18d13	85	12.2	2.2	6.5	99%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外・断) 浅黄橙	密　5mmの細砂粒、1mm以下の黒色粒・白色粒含む	
634	図 126 図版 62	土師器皿	K18d13	85	12.2	2.1	6.5	60%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・断・外) 浅黄橙	密　1mm以下の黒色粒含む	
635	図 126 図版 62	土師器皿	K18d13	85	12.1	2.2	6.5	85%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外) 浅黄橙 断) 灰白	密　1~3mmの細砂粒、1mm以下の黒色粒含む	
636	図 126 図版 62	土師器皿	K18d13	85	12.5	2.1	7.0	99%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外) 浅黄橙 断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒含む	
637	図 126 図版 62	土師器皿	K18d13	85	12.3	2.1	6.0	96%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外・断) 浅黄橙	密　5mmの細砂粒、1mm以下の黒色粒・褐色粒含む	
638	図 126 図版 62	土師器皿	K18d13	85	12.1	2.1	6.0	99%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外) 浅黄橙 断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒・褐色粒、2mm細砂粒含む	
639	図 126 図版 62	土師器皿	K18d13	85	12.5	2.1	6.5	95%	伊勢の影響？	内・外) 浅黄橙 断) 灰白	密　5mmの細砂粒少量、1mm以下の黒色粒・褐色粒含む	15c 後半？
640	図 126 図版 62	土師器皿	K18d13	85	12.1	2.0	7.6	99%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外・断) 浅黄橙	密　3mmの細砂粒、1mm以下の黒色粒・褐色粒含む	
641	図 126	土師器皿	K18d13	85	12.2	2.0	6.5	75%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外) 浅黄橙 断) 灰白	密　3mmの細砂粒少量、1mm以下の黒色粒・褐色粒含む	
642	図 126 図版 62	土師器皿	K18d13	85	(12.2)	2.0	(7.4)	30%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外・断) 浅黄橙	密　5mmの細砂粒、1mm以下の黒色粒含む	反転復元
643	図 126 図版 62	土師器皿	K18d13	85	(12.2)	2.3	(6.0)	25%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外) 浅黄橙 断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒・褐色粒含む	反転復元
644	図 128	土師器皿	K18d11	1330	11.7	2.1	6.8	60%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内) 浅黄橙 外・断) 灰白	密　1mm以下の褐色粒少量含む	一部反転復元
645	図 128	土師器鍋	K18d11	1330	-	(2.2)	-	5%以下	口縁部はヨコナデ　煤付着	内) 灰黄褐 外) 黒褐 断) 灰黄褐・褐灰	密　1mm以下の白色粒少量含む	断面のみ
646	図 128	常滑甕	K18d11	1330	-	(7.0)	-	5%以下	中野 10 型式	内・外) 暗赤褐 断) 褐灰	密　1mm以下の白色粒含む	断面のみ 15C 後半
647	図 128	常滑壺	K18d11	1330	-	(10.0)	-	5%以下	中野 10 型式	内) 極暗赤褐 外) 黄灰 断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒含む	断面のみ 15C 後半
648	図 128	青磁碗	K18d11	1330	(15.8)	(4.0)	-	5%以下	口縁部は外反	釉) オリーブ灰 断) 灰白	緻密	反転復元
649	図 128	青磁碗	K18d11	1330	-	(3.1)	5.2	40%	外面は蓮弁文か　見込は印花	釉) オリーブ灰 露胎・断) 灰白	緻密	一部反転復元
651	図 128	播磨鍋	K18g12	691	(29.0)	(9.0)	-	10%	外面体部はタタキ、煤付着	内・断) 橙 外) にぶい赤褐	密　1mm以下の白色粒、5~6mm細砂粒少量含む	反転復元 15C
652	図 128	山茶碗碗	K18g12	691	(16.0)	(3.5)	-	15%	渥美第 5 型式	内・外) 褐灰 断) 灰白	密　1mm以下の白色粒含む	反転復元 13C 前後
653	図 128 図版 62	山茶碗碗	K18g12	691	-	(3.0)	高台 7.1	50%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の白色粒・黒色粒含む	反転復元 13C 前後
654	図 128 図版 62	山茶碗小皿	K18g12	691	8.6	2.0	4.7	98%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　3~5mmの白色粒・黒色粒含む	13C 前後
655	図 128	瀬戸折縁中皿	K18g12	691	(17.0)	(3.5)	-	7%	古瀬戸後Ⅲ期	釉) オリーブ灰 断) 灰白	緻密	反転復元 15C 前半
656	図 128	白磁皿	K18g12	691	-	(2.3)	高台 (6.8)	5%	見込は陽刻	釉) 明緑灰 露胎・断) 灰白	緻密	反転復元
657	図 129	土師器釜	K18b･c4	172	(12.8)	(3.3)	-	口縁部 25%	内面は板ナデ　外面はハケ	内) 浅黄橙 外) にぶい橙 断) 黒	密　細かい赤色酸化粒少量含む	反転復元
658	図 129	土師器鍋	K18c3	172	(27.0)	(2.1)	-	5%以下	口縁部はヨコナデ	内・断) 浅黄橙 外) にぶい橙	密　1mm以下の黒色粒・白色粒少量、雲母少量含む	反転復元
659	図 129	土師器鍋	K18b･c4	172	(30.0)	(3.9)	-	口縁部 5%	内面は細かいハケ　外面はハケ 煤付着	内) にぶい橙 外) 灰褐 断) 明褐灰 ~ 灰	密　1mmの石英微量含む	反転復元
660	図 129	土師器焙烙	K18b･c4	172	(24.0)	(9.1)	(26.0)	70%	内面は板ナデ　体部外面は格子タタキ	内・断) 橙 外) 褐灰 ~ 明赤褐	密　細かい石英中量含む	反転復元
661	図 129	瀬戸稜花皿	K18c3	172	(10.0)	(1.6)	-	5%以下	大窯 2	釉) 褐 断) 灰白	密	反転復元 16C 前半 ~ 中頃
662	図 129	瀬戸丸皿	K18b･c4	172	(10.0)	2.2	高台 (5.8)	30%	大窯 2	釉) オリーブ灰・灰 断) 灰白	密	反転復元 16C 前半 ~ 中頃
663	図 129	備前擂鉢	K18b･c4	172	-	(4.7)	-	5%以下	備前Ⅳ期	内・断) 橙 外) 褐灰 ~ 橙	密　細かいチャート (?) 中量含む	断面のみ 15C
664	図 129	青磁碗	K18b･c4	172	(14.0)	(5.1)	-	20%	口縁部は外反	釉) オリーブ灰 断) 灰白	密	反転復元
665	図 129	青磁碗	K18b･c4	172	-	(3.0)	-	5%以下	内面に文様	釉) 灰オリーブ 断) 灰白	密	断面のみ
666	図 129	染付皿	K18b･c4	172	-	(1.8)	(3.0)	5%以下	内面に二重圏線　草花文か	釉) 明緑灰 露胎) にぶい黄橙 断) 灰白	密	反転復元
667	図 129	常滑甕	K18e7	87	-	5.4	-	5%以下	中野 6b 型式	内・外) 暗赤褐 断) 灰	やや粗　1.5mm以下の白色・灰色粒多量含む	断面のみ 13C 後半 ~ 末

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm)			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径	高さ	底径					
668	図 129	白磁 碗	K18e7	87	(9.0)	(4.6)	-	20%	口縁部は外反	内・外・断) 灰白	密	反転復元
669	図 133	土師器 焙烙	K18m9	10	(20.7)	(5.7)	-	口縁部 10%	外面はまっ黒な煤付着	内) 灰褐 外) 黒 断) にぶい橙	やや粗　1mm 以下の赤色酸化粒・白色粒少量含む	反転復元
670	図 133	土師器 鍋	K18m9	10	(33.0)	(1.4)	-	口縁部 5%	外面はまっ黒な煤付着	内・断) にぶい橙 外) 黒	密	反転復元 伊勢
671	図 133	土師器 鍋	K18e9	659	(27.4)	(10.3)	-	15%	体部内面上部は板ナデ　体部外面上部はハケ　外面全体に煤付着　内外面下部はヘラケズリ	内) にぶい黄橙 ～ 灰黄褐 外) 灰褐 ～ 褐灰 断) にぶい黄橙	密	反転復元
672	図 133 図版 63	土師器 鍋	K18e9	659	30.0	(15.4)	-	70%	体部内外面上部はハケ 内外面下部はヘラケズリ 外面煤付着	内) 褐灰 ～ 明褐灰 外) 褐灰 ～ にぶい橙 断) 灰白	密　銀雲母少量含む	一部反転復元
673	図 133 図版 63	土師器 鍋	K18e9	659	(29.5)	(9.8)	-	30%	体部内面は板ナデ　体部外面は斜め方向のハケ後縦方向のハケ下部はヘラケズリ	内・断) にぶい黄橙 外) にぶい橙 ～ にぶい赤褐	密	反転復元
674	図 134 図版 63	土師器 皿	K18k8	3075	9.0	1.9	7.0	90%	底部は板状圧痕か	内・外・断) 浅黄橙	密	12C 後半 ～ 13C 初め
675	図 134 図版 63	土師器 皿	K18k8	3075	9.7	2.1	6.0	90%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ、ナデ	内) 浅黄橙 外・断) 灰白	密　1mmの石英微量含む	12C 後半 ～ 13C 初め
676	図 134	土師器 皿	K18k8	3075	(9.6)	1.6	7.5	60%	口縁部はヨコナデ　内面は工具によるナデ	内) 浅黄橙 外・断) 灰白	密　細かい石英微量含む	一部反転復元 12C 後半 ～ 13C 初め
677	図 134	土師器 皿	K18k8	3075	(8.5)	1.5	(7.6)	25%	回転糸切り	内・外・断) にぶい橙	密　1mmの黒色粒少量含む	反転復元 12C 後半 ～ 13C 初め
678	図 134	土師器 皿	K18k8	3075	(15.3)	4.1	8.5	50%	回転糸切り	内) 淡橙 外・断) 浅黄橙 ～ 淡橙	粗　1mmの石英微量含む	一部反転復元 12C 後半 ～ 13C 初め
679	図 134	土師器 皿	K18k8	3075	(15.0)	5.0	6.7	60%	回転糸切り	内・外・断) 灰白	密	一部反転復元 12C 後半 ～ 13C 初め
680	図 134 図版 63	土師器 皿	K18k8	3075	(14.6)	3.4	9.2	90%	回転糸切り　板状工具による圧痕	内・外・断) 灰白	密　1~2mmのチャート微量含む	反転復元 12C 後半 ～ 13C 初め
681	図 134 図版 63	土師器 皿	K18k8	3075	15.6	3.8	10.7	80%	歪み　回転糸切り　板状工具による圧痕	内・断) 浅黄橙 外) 灰白	密　最大 6mm大の石英微量含む	12C 後半 ～ 13C 初め
682	図 134	土師器 皿	K18k8	3075	(15.9)	3.0	(11.1)	5%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ、ナデ　内面はハケか	内・外・断) 灰白	密	反転復元 12C 後半 ～ 13C 初め
683	図 134	土師器 皿	K18k8	3075	(12.4)	3.4	-	25%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ、ナデ　内面は工具によるナデ	内) 浅黄橙 外) 灰白 断) 灰白 ～ 黄灰	密　細かい石英 (?) 微量含む	反転復元 12C 後半 ～ 13C 初め
684	図 134	土師器 皿	K18k8	3075	(15.0)	3.6	-	60%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ、ナデ	内・外) 灰白 断) 灰白・灰	密	一部反転復元 12C 後半 ～ 13C 初め
685	図 134	土師器 皿	K18k8	3075	(14.7)	3.2	-	30%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ、ナデ　内面は工具によるナデ	内) 灰白 外) 灰白 ～ 灰 断) 暗灰 ～ 灰白	密　細かい石英微量含む	反転復元 12C 後半 ～ 13C 初め
686	図 134	土師器 皿	K18k8	3075	(14.1)	4.2	(8.7)	5% 以下	回転ナデ	内・断) にぶい橙 外) にぶい橙 ～ 浅黄橙	密　1~5mmの赤色酸化粒中量含む	反転復元 12C 後半 ～ 13C 初め
687	図 134 図版 63	瓦器 碗	K18k8	3075	(14.1)	4.4	高台 (4.1)	25%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ、ナデ　内面はヘラミガキ	内・外) 灰 断) 灰白	密	反転復元
688	図 134	山茶碗 碗	K18k8	3075	-	(2.2)	高台 (6.1)	底部 25%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	やや粗　細かい石英・チャート少量含む	反転復元 13C 前後
689	図 134 図版 63	山茶碗 碗	K18k8	3075	-	(3.0)	高台 5.8	底部 95%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	やや粗　細かい白色粒微量含む	一部反転復元 13C 前後
690	図 134	山茶碗 碗	K18k8	3075	-	(2.1)	高台 (7.4)	底部 20%	渥美第 5 型式	内) 灰白 ～ 灰 外) 灰白 断) 灰	密　1~2mmの石英少量含む	反転復元 13C 前後
691	図 134	山茶碗 碗	K18k8	3075	-	(2.1)	高台 6.6	底部 80%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	やや粗　1~2mmの白色・黒色砂粒少量含む	反転復元 13C 前後
692	図 134	山茶碗 碗	K18k8	3075	-	(2.8)	高台 (7.3)	底部 20%	渥美第 4 型式	内・外・断) 灰白	密　細かい白色粒少量含む	反転復元 12C 後半
693	図 134	山茶碗 碗	K18k8	3075	(12.4)	(3.5)	-	口縁部 20%	尾張第 5 型式	内・外・断) 灰白	密	反転復元
694	図 134 図版 63	山茶碗 碗	K18k8	3075	(15.7)	5.4	高台 6.2	60%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	やや粗　1~2mmの石英・チャート少量含む	一部反転復元 13C 前後
695	図 134	山茶碗 片口鉢	K18k8	3075	-	(3.2)	高台 (13.5)	底部 50%	尾張第 4 型式	内・断) 灰白 外) 灰	密　1~2mmの石英少量含む	反転復元 12C 後半
696	図 134 図版 63	渥美 甕	K18k8	3075	(39.6)	(5.0)	-	5% 以下	口縁内部は自然釉付着	内・外・断) 灰	密　最大 5mmの石英微量含む	反転復元 12C 後半
697	図 134	常滑 甕 or 広口壺	K18k8	3075	-	(0.8)	-	5% 以下	口縁内部は自然釉付着	釉) 灰白～オリーブ灰 外) 灰赤 断) 灰白 ～ 褐灰	密	断面のみ 12C 後半
698	図 134	青磁 碗	K18k8	3075	(12.6)	(1.8)	-	5% 以下	口縁部は外反	釉) オリーブ灰 断) 灰白	密	反転復元
699	図 134	青磁 碗	K18k8	3075	(15.9)	(3.7)	-	5% 以下	内面は文様	釉) 黄褐 断) 灰黄	密	反転復元
700	図 134 図版 63	白磁 碗	K18k8	3075	(14.2)	(2.3)	-	5% 以下	口縁部は丸く収まる	釉・断) 灰白	密	反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
701	図 137 図版 64	弥生土器 甕	K18d11	1942	(18.7)	(8.2)	-	口縁部 10%	口縁部にキザミ目　体部外面はタタキ　内面は工具によるナデ	内) にぶい黄橙 外・断) にぶい橙	密　1~3mmの石英多量含む	反転復元
702	図 137 図版 64	弥生土器 鉢	K18d11	1942	(13.8)	(5.3)	-	口縁部 25%	口縁端部にキザミ目か　口縁部はハケ　体部外面はタタキ	内・外) にぶい橙 断) 橙	密　1~4mmの石英多量、1~2mmの赤色酸化粒少量含む	反転復元
703	図 137 図版 64	弥生土器 鉢？	K18d11	1942	-	(7.2)	3.7	40%	体部外面はタタキ	内・断) 橙 外) にぶい橙 断) 橙	密　1~4mmのチャート中量、1~2mmの黒色粒少量含む	一部反転復元
704	図 137 図版 64	弥生土器 鉢	K18d12	1942 床面	11.1	6.7	脚裾 4.0	80%	内面は工具によるナデか	内) 橙 外・断) 浅黄橙	密　1mm位の石英少量含む	
705	図 137 図版 64	弥生土器 高坏	K18d11	1968	-	(8.9)	脚裾 (11.0)	脚部 40%	内外面はヘラミガキ　脚部に 4 ヶ所の穿孔	内・外) にぶい橙 断) 橙	密　1~2mmの石英・チャート・赤色酸化粒少量含む	一部反転復元 遺構 1942 内
706	図 138	土師器 皿	K18a6	451	(13.2)	2.8	(8.0)	30%	外面はナデ　内面は工具によるナデ	内・断) 淡橙 外) 橙	密　1mm以下の白色粒・褐色粒、雲母少量含む	反転復元
707	図 138	土師器 皿	J18y6	451 下層	(11.4)	2.7	(4.6)	15%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外) 淡橙 断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒少量含む	反転復元
708	図 138	瀬戸 皿	J18y6	451 下層	(12.4)	(1.9)	-	5% 以下	体部外面下部は露胎　ヘラケズリ	釉・断) 灰白 露胎) にぶい黄橙	密	反転復元
709	図 138	瀬戸 柄付片口	J18y6	451 下層	(14.0)	(3.3)	-	5%	古瀬戸後Ⅰ or Ⅱ期	釉) オリーブ黄 露胎・断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒少量含む	反転復元 14C 後半
710	図 138	中国製 天目茶碗	K18a6	451	(11.6)	(5.2)	-	5% 以下	鉄釉	釉) 黒・褐 露胎) にぶい黄橙 断) 灰白	密	反転復元
711	図 138	常滑 鉢	K18a6	451	(17.4)	(4.0)	-	5% 以下	外面は自然釉付着	内) 灰 外・断) 灰白	密　1mm以下の白色粒含む	反転復元
712	図 138	常滑 甕	K18a6	451	(50.0)	(9.9)	-	5%	外面は自然釉付着	釉) 赤黒 露胎) 暗赤褐 断) 明褐灰	堅緻　1mmの白色粒、3mmの白色粒含む	反転復元
714	図 138	瀬戸 皿	K18j11	584	(28.0)	4.3	高台 (19.4)	10%	登窯第 3or 第 4 段階	内) 黒褐 外・断) 灰白	密　4~7mmの白色粒含む	反転復元 17C 中頃 ~ 後半
715	図 138	瀬戸 擂鉢	K18j11	584	-	(4.0)	-	5% 以下	鉄釉	内・外・断) 黒褐	密　3~7mmの白色粒含む	断面のみ
716	図 138	瀬戸 皿	K18j11	584	(11.4)	3.0	高台 (6.4)	35%	灰釉　底部は目跡	内・外) 浅黄 断) 灰黄	やや粗	反転復元
717	図 138	白磁 皿	K18j11	584	(10.4)	(2.2)	-	5%	口縁部は外反	内・外・断) 灰白	緻密	反転復元
718	図 138	土師器 皿	K18g11	720	(11.4)	2.5	(6.0)	25%	外面は工具ナデ、ユビオサエ 内面は工具ナデ	内・外) 浅黄橙 断) 灰白	密　1mm以下の褐色粒・黒色粒含む	反転復元
719	図 138	瀬戸 皿	K18g11	720	(13.4)	(2.8)	-	5% 以下	灰釉　口縁部は外反	釉・断) 灰白 露胎) にぶい黄橙	緻密	反転復元
720	図 138	唐津 輪花皿	K18g11	720	(13.0)	(3.0)	-	15%	施釉	釉) 黄灰 露胎) にぶい黄褐 断) 灰褐	緻密	反転復元 肥前
721	図 138	唐津 皿	K18g11	720	(15.2)	(1.7)	-	5% 以下	灰釉　口縁端部は鉄釉　内面は鉄絵	釉) 灰白 断) 灰黄	緻密	反転復元
722	図 138 図版 64	備前 広口壺	K18g11	720	(14.4)	(8.0)	-	5% 以下	体部外面は 2 条の沈線	内・外・断) 暗赤褐	密　1mmの白色粒、3mm位の細砂粒含む	反転復元
723	図 138	土師器 鍋	K18c7	970	(31.0)	(2.4)	-	5% 以下	内外面は煤付着	内) にぶい赤褐 外) にぶい橙 断) 褐灰	密　1mmの白色粒少量、3mm位の石英・長石含む	反転復元 伊勢
724	図 138	山茶碗 碗	K18c7	970	-	(2.3)	高台 6.6	40%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒、1mm位の白色粒少量含む	一部反転復元 13C 前後
725	図 138	山茶碗 碗	K18c7	970	(15.4)	(3.5)	-	10%	渥美第 5 型式	内) 褐灰 外・断) にぶい黄橙	密　1mm以下の白色粒・黒色粒含む	反転復元 13C 前後
726	図 138 図版 64	青磁 碗	K18c7	970	(16.2)	7.0	高台 5.2	60%	内面は蓮花文	釉) オリーブ灰 露胎) にぶい黄橙	緻密	一部反転復元
728	図 139	土師器 皿	K18c14	1351	(11.0)	2.7	(5.0)	25%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ　内面は工具ナデ	内・外・断) 灰白	密　1mmの褐色粒含む	反転復元
729	図 139	土師器 皿	K18c14	1351	(11.2)	3.0	(5.2)	5%	回転ナデ　外面に煤付着	内) 橙 外) にぶい橙 断) 淡橙	密　1mm以下の白色粒、1mmの細砂粒含む	反転復元
730	図 139	土師器 鍋	K18c14	1351	(23.0)	(1.5)	-	5% 以下	口縁部はヨコナデ	内・外) 浅黄橙 断) 灰白	密　1mm以下の白色粒・褐色粒含む	反転復元
731	図 139	常滑 鉢	K18c14	1351	(22.2)	(5.0)	-	5%	渥美第 5 型式	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒・白色粒、2mmの黒色粒・白色粒含む	反転復元 13C 前後
732	図 139	常滑 壺	K18c14	1351	(13.4)	(6.0)	-	10%	中野 10 型式	内) 灰褐 外) にぶい赤褐 断) 褐灰	密　1~3mmの長石粒、3mmの細砂粒含む	反転復元 15C 後半
733	図 139	備前 擂鉢	K18c14	1351	-	(5.0)	-	5% 以下	回転ナデ	内・外) にぶい赤褐 断) 赤褐	密　1~3mmの白色粒・石英含む	断面のみ
734	図 139	土師器 皿	K17c25	4032 上層	(11.4)	2.6	7.5	75%	口縁部はヨコナデ　体部内面は工具ナデ	内・断) 浅黄橙 外) 灰白・浅黄橙	密　1mm以下の黒色粒、3mmの細砂粒含む	一部反転復元
735	図 139	土師器 鍋	K17c25	4032 上層	(29.8)	(3.5)	-	5% 以下	外面は煤付着	内) にぶい黄橙 外) 黒褐 断) 灰白	密　1mm以下の褐色粒含む	反転復元 伊勢
736	図 139	瀬戸 折縁深皿	K17c25	4032 上層	(26.2)	(6.0)	-	20%	灰釉　内外面下部は化粧がけ	釉) 灰オリーブ 露胎) にぶい赤褐 断) 灰白	緻密	反転復元
737	図 139	瀬戸 折縁深皿	K17c25	4032 上層	(23.4)	6.7	(11.9)	15%	古瀬戸中Ⅰ期	釉・断) 灰白 露胎) にぶい黄橙	密　1mmの黒色粒含む	反転復元 14C 前後

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
738	図 139	土師器皿	K18c10	1000	8.4	2.5	6.3	80%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ	内・外・断) 浅黄橙	密　1mm以下の灰色粒含む	伊勢
739	図 139	瓦質土器風炉	K18c10	1000	(29.0)	(4.1)	-	5%以下	口縁部はヘラケズリ　外面上部は突帯２条　突帯間に押印文	内) 黒 外) 暗灰 断) 灰白	密　1mm以下の白色粒・黒色粒含む	反転復元
740	図 139	青磁碗	K18c10	1000	(14.0)	(5.2)	-	5%以下	口縁部は外反	釉) 灰オリーブ 断) 灰白	緻密	反転復元
741	図 139	土師器皿	K18d13	1545	(9.6)	2.0	(7.3)	25%	回転糸切り	内・外・断) にぶい橙	密　1~6mm大の赤色酸化粒中量含む	反転復元
742	図 139	土師器皿	K18d13	1545	(9.6)	2.0	(8.0)	20%	回転糸切り	内・外・断) にぶい橙	密　1~3mmの赤色酸化粒中量含む	反転復元
743	図 139	土師器皿	K18d13	1545	(9.9)	2.0	(8.4)	25%	口縁部はヨコナデ　内面はハケ	内・外・断) にぶい橙	密　1~9mm大の赤色酸化粒多量含む	反転復元
744	図 139	山茶碗碗	K18d13	1545北半	-	(3.1)	高台5.8	底部100%	貼付高台　回転糸切り	内・外・断) 黄灰	やや粗　細かい石英少量含む	一部反転復元
745	図 139	山茶碗鉢	K18g12	702	(20.8)	(4.5)	-	5%以下	渥美第５型式	内・断) 黄灰 外) 灰白	密　1mm以下の白色粒・黒色粒含む	反転復元 13C 前後
746	図 139	山茶碗碗	K18g12	702	-	(4.0)	高台6.7	40%	渥美第５型式	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒・白色粒含む	一部反転復元 尾張産 13C 前後
747	図 139	白磁碗	K18g12	702	-	(2.0)	6.8	30%	見込は蛇の目釉ハギ	釉) 白 露胎) 灰黄 断) 灰白	緻密	反転復元
748	図 139	土師器皿	K18c13	1301	6.6	2.0	5.4	50%	静止糸切り	内・外・断) 浅黄橙	密　1mm以下の褐色粒含む	
749	図 139	山茶碗碗	K18c13	1301	(15.2)	(4.5)	-	5%	尾張第６型式	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の白色粒・石英・黒色粒含む	反転復元 13C 前半
750	図 139	青磁碗	K18c13	1301	-	(3.2)	-	5%以下	外面は蓮弁文	釉) 明緑灰 断) 灰白	緻密	断面のみ
751	図 139	土師器皿	J18y11	1489	(6.0)	1.2	(4.4)	45%	静止糸切り	内) 浅黄橙 外) 灰白 断) 褐灰	密　1mmの黒色粒含む	反転復元
752	図 139	土師器皿	J18y11	1489	(12.0)	(2.7)	-	15%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ　内面は工具によるナデ	内) 浅黄橙 外・断) 灰白	密　1~2mmの細砂粒含む	反転復元
753	図 139	常滑片口鉢	J18y11	1489	-	(6.0)	-	5%	口縁端部は自然釉	内・外) 暗赤褐 断) 黒褐	密　1mmの白色粒、3~5mmの細砂粒含む	断面のみ
754	図 139	白磁碗	J18y11	1489	(15.0)	(2.4)	-	5%以下	口縁部は丸く納まる	釉・断) 灰白	緻密	反転復元
755	図 139	白磁口禿げ碗	J18y11	1489	(10.0)	(2.8)	-	5%以下	口縁部は外反	釉・断) 灰白 露胎) 灰黄	緻密	反転復元
756	図 139	白磁碗	J18y11	1489	-	(3.0)	(7.2)	20%	見込に沈線	釉・露胎・断) 灰白	緻密	反転復元
757	図 140	瓦器碗	K18c13	1210	-	(0.9)	(5.2)	5%以下	貼付高台	内・外) オリーブ黒 断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒・白色粒含む	反転復元
758	図 140	山茶碗碗	K18c13	1210	(14.0)	(3.2)	-	口縁部10%	東濃第８型式	内・断) 褐灰 外) 灰白	密	反転復元 14C 前後
759	図 140	瀬戸碗	K18c13	1210	(13.6)	(2.1)	-	5%以下	灰釉	釉) オリーブ灰 断) 灰白	密	反転復元
760	図 140	瓦器碗	K18e9	657	(12.6)	(4.1)	-	5%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ　内面はヘラミガキ	内) オリーブ黒 外) 暗灰 断) 灰	密　1mm以下の白色粒少量、雲母少量含む	反転復元
761	図 140	山茶碗碗	K18e9	657	(13.2)	(3.9)	-	8%	回転ナデ	内・断) 灰白 外) 褐灰	密　1mm以下の白色粒・黒色粒含む	反転復元
762	図 140	山茶碗碗	K18e9	657	-	(2.3)	高台(8.0)	8%	回転ナデ	内・外・断) 灰白	密　1mmの白色粒・黒色粒少量含む	反転復元
763	図 140	土師器製塩土器？	K18j10	626	-	(3.5)	2.9	15%	内外面はナデ　高台部ユビオサエ	内・外・断) 浅黄橙	密　1~2mmの長石・石英少量含む	一部反転復元
764	図 140	弥生土器鉢	K18j10	626	(29.0)	(6.9)	-	5%	口縁部はハケ　体部はタタキ　内面はハケ　外面に煤及びタール付着	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙 断) 灰白	密　1~2mmの長石・石英、3mmの黒色粒、5~8mmの砂粒含む	反転復元 弥生後期
765	図 140	弥生土器高坏	K18h12	685	17.7	(10.6)	-	坏部70%	外面はヘラミガキ　４ヶ所に穿孔	内) 橙 ~ 浅黄橙 外) 浅黄橙 断) 灰白	密　1~2mmの石英、1mmの赤色酸化粒少量含む	一部反転復元
766	図 140 図版 64	弥生土器高坏	K18h12	685	(19.6)	15.5	脚裾(10.6)	70%	外面はハケ後ヘラミガキ　脚部内面はハケ　３ヶ所に穿孔	内・断) 橙 外) 橙 ~ にぶい黄橙	密　細かい石英少量含む	一部反転復元
767	図 140 図版 64	弥生土器甕	K18h12	685	(15.7)	(15.3)	-	30%	口縁端部にキザミ目　外面はタタキ　内面はハケ	内・外) 灰黄 ~ 灰黄褐 断) 灰白	密　1~3mmの灰色粒・赤色酸化粒中量、最大 5mmの石英 (?) 少量含む	反転復元
768	図 141 図版 65	白磁皿	K18d4	376	(10.4)	2.9	高台3.6	55%	見込　饅頭心	釉・断) 灰白	緻密	一部反転復元
769	図 141	瓦器碗	K18d10	656	(13.0)	4.1	高台(4.0)	20%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ、ナデ　内面はヘラミガキ	内・外) 灰 断) 灰白	密	反転復元
770	図 141	瀬戸？鉢？	K18m9	620	-	(5.0)	高台(13.4)	底部50%	見込に粘土片多く付着	釉) 灰白 露胎) にぶい褐 ~ にぶい黄橙 断) 灰白	密　細かい白色砂粒多量、最大 3mmの石英 (?) 少量含む	反転復元
771	図 141	土師器甕	K18c12	1553	(13.8)	(3.3)	-	口縁部30%	口縁部はヨコナデ　体部はハケ　外面に煤付着	内) にぶい橙 外) にぶい黄橙 ~ 黒 断) 灰黄褐・暗灰	密　1~2mmの石英中量、4mm大の石英微量含む	反転復元
772	図 141	備前甕	K18e13	1138	-	(7.3)	-	5%以下	口縁部にナデ	内・外) 暗赤褐 断) 灰白	密　1mm以下の白色粒含む	断面のみ

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量(cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
773	図 141	土師器皿	J18t7	1-838	10.7	3.1	-	95%	墨書	内) 浅黄橙 外・断) 灰白	密　1mm以下の白色・淡褐色粒微量含む	
774	図 141 図版 65	青磁小皿	J18w7	1-815	(9.1)	1.9	(2.7)	20%	見込に文様	内・外) 明オリーブ 断) 灰白	密	反転復元
775	図 141	備前擂鉢	K18c3	493	-	(5.0)	-	5%	口縁端部は自然釉付着	内) 黄灰 外) 黒褐 断) 灰褐	密　1mm以下の白色粒含む	断面のみ
776	図 141	陶器擂鉢	K18d7	908	(30.4)	12.1	(13.0)	60%	口縁端部はヘラ調整　内面は重ね焼痕	内) 灰褐 外) 暗赤褐 断) 褐灰	密　1mmの白色粒、2~5mmの白色・灰色の細砂粒含む	反転復元
777	図 142	鉄絵皿	K18d5	393	(11.0)	2.2	(6.2)	20%	登窯第 1 段階	釉・断) 淡黄	密　1mm以下の褐色粒含む	反転復元 17C 前半
778	図 142	瀬戸天目茶碗	K18d5	393	(11.6)	(5.1)	-	15%	登窯第 1 段階	釉) 暗赤褐・黒 露胎) 浅黄橙 断) 灰白	密　1mm以下の褐色粒含む	反転復元 17C 前半
779	図 142 図版 65	美濃天目茶碗	J18y12	1493	(11.0)	6.6	高台(5.0)	20%	登窯第 3 段階	釉) 暗赤褐 露胎・断) 灰白	緻密　1~2mm位の黒色粒少量含む	反転復元 17C 後半
780	図 142	志野皿	J18y12	1493	(12.6)	2.3	(7.6)	25%	登窯第 1 段階	釉・露胎) 灰白 断) 淡黄	密　1mm以下の褐色粒・長石粒を含む、やや粗い	反転復元 17C 前半
781	図 142	土師器羽釜	K18d6	781	-	(3.0)	-	5%以下	口縁部はヨコナデ　外面は煤付着	内) にぶい橙 外・断) 橙	密　1mm以下の白色粒・褐色粒含む	断面のみ
782	図 142 図版 65	産地不明片口擂鉢	K18d6	781	(25.0)	(7.0)	-	10%	口縁部は強いヨコナデ　片口部分内面に雲母付着	内) 灰黄褐 外) 黄灰 断) 灰	密　1mm以下の白色粒・黒色粒含む	反転復元
783	図 142	瓦器碗	K18d5	361	(12.4)	(4.4)	-	5%以下	口縁部はヨコナデ　内外面はヘラミガキ	内) 黒 外) 黒 ~ オリーブ黒 断) 灰白	密　1mmの白色粒・黒色粒少量含む	反転復元
784	図 142	瀬戸直縁大皿	K18d5	361	-	(4.0)	-	5%以下	古瀬戸後Ⅱ期	釉・断) 灰白	密　1mm以下の白色粒・褐色粒含む	断面のみ 15C 前後
785	図 142 図版 65	鼠志野皿	J18y12	1494	11.2	2.0	高台7.0	60%	表面に 5mm位の細砂粒が見られる（窯内焼成時のもの） 登窯第 4 段階	釉) 黄灰 露胎) 灰黄 断) 灰黄褐	粗	17C 後半
786	図 142	唐津皿	J18y12	1494	-	(2.8)	(5.0)	20%	見込は胎土目 3 ヶ所	釉) 灰オリーブ 露胎) 灰黄褐 断) 黄灰	緻密	反転復元 肥前
787	図 142	土師器皿	K18a7	1682	(10.9)	2.5	-	45%	口縁部はヨコナデ　体部はユビオサエ、ナデ　内面は工具ナデ	内・外・断) 灰白	密　細かい石英微量含む	反転復元
789	図 142	土師器鍋	K17c25	4033上層	(28.2)	(1.6)	-	5%以下	口縁部はヨコナデ　内外面は工具ナデ	内・外) 灰白 断) 黒	密　1mm以下の黒色粒、2mmの石英少量含む	反転復元 伊勢
790	図 142	備前擂鉢	K17c25	4033上層	-	(5.6)	-	5%以下	回転ナデ	内) 褐灰 外) 灰 断) にぶい赤褐	密　1mm以下の白色粒含む	断面のみ
791	図 142	唐津皿	K18e5	509	(13.6)	4.3	高台4.6	40%	施釉	内) 灰 外) 灰白 断) 橙	やや粗	一部反転復元
792	図 142 図版 65	瀬戸取手付小瓶	K18a11	1493?	5.0	8.7	6.6	95%	片口	釉) 灰オリーブ 露胎) 浅黄橙	密　1mm以下の黒色粒少量含む	一部復元
795	図 142	瀬戸平碗	K18d3	383	(13.2)	(4.5)	-	20%	古瀬戸後Ⅰ期	釉) 浅黄 露胎) 淡黄 断) 灰白	密	反転復元 14C 中頃
797	図 142 図版 65	土師器皿	K18c13	1302	11.6	3.2	7.6	99%	回転ナデ　底部はヘラ調整	内・外・断) 灰白	密　褐色粒・石英・長石少量含む	
798	図 142 図版 65	常滑碗	K18n10	602	(14.2)	(4.8)	-	10%	口縁部は外反	内・断) 灰褐 外) 褐灰	密　1~2mmの白色粒少量含む	反転復元
799	図 142 図版 65	備前鉢	K18a5	463	-	(3.8)	-	5%	口縁部は内側に湾曲	内) にぶい赤褐 外) 灰褐 断) 褐灰	密	断面のみ
800	図 142	常滑甕	K18g10	663	(21.4)	(10.5)	-	口縁部20%	口縁端部及び肩部に自然釉	内) 灰 外) 黒褐 断) 灰白	密　1~2mmの石英・長石(?) 中量含む	反転復元
801	図 142 図版 65	備前擂鉢	K18c7	823	(27.6)	(10.0)	-	15%	口縁部内面は強いヨコナデ　口縁部外面 ~ 体部は回転工具ナデ	内・断・外) 明赤褐	密　1mm以下の白色粒、3~6mmの砂粒、13mmの小石含む	反転復元
802	図 143 図版 66	白磁壺	K18g10	865	(10.4)	(4.0)	-	5%以下	口縁部は折り返し	釉・断) 灰白	緻密	反転復元
803	図 143 図版 66	瀬戸蓋	K18g10	865	-	(3.5)	3.5	70%	古瀬戸中Ⅰ期	釉) 黒 露胎) にぶい褐 断) 灰白	緻密	一部反転復元 14C 前後
804	図 143	土師器灯明皿	K18a9	921	(7.8)	1.4	(4.0)	55%	体部はユビオサエ、ナデ　見込は煤付着	内・外) にぶい橙 断) 浅黄橙	密　1mm以下の褐色粒、4mm位の細砂粒含む	反転復元
805	図 143	唐津皿	K18a9	921	-	(1.6)	高台(4.4)	10%	藁灰釉	釉) 灰白 断) にぶい橙	密　1mm以下の白色粒少量含む	反転復元
807	図 143	備前擂鉢	K18b13	1350	-	(3.4)	-	5%以下	口縁部は凹線 2 条	内) 灰褐 外) 褐灰 断) 灰	密　1mm以下の白色粒含む	断面のみ
808	図 143	白磁皿	K18b13	1350	(16.2)	(2.5)	-	5%	口縁部は外反	釉) 白色 断) 灰白	緻密	反転復元 中国製
809	図 143 図版 66	瀬戸輪花皿	K18i12	642	(11.2)	2.1	(5.4)	50%	施釉 (鉄釉)　模様として黒釉流し　型打ち成形	釉・露胎) 橙 断) 浅黄橙	緻密	反転復元
810	図 143	唐津輪花大皿	K18i12	642	(28.2)	(4.5)	-	5%以下	灰釉	内・外) 黄灰 断) にぶい黄橙	緻密	反転復元 肥前
811	図 143	白磁小坏	K18a6	891	-	(1.5)	高台(2.8)	10%	見込は重ね焼痕	釉・断) 灰白	緻密	反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 口径	高さ	底径	残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
812	図 143	常滑鉢	K18a6	891	(30.2)	(7.0)	-	5%	中野９型式	内) 褐灰 外) 暗赤褐 断) 黒褐	密　1mm以下の白色粒、1~3mmの長石含む	反転復元 15C 前半
813	図 143	常滑甕	K18d9	754	-	(2.7)	-	5%以下	口縁部はヨコナデ	内・外) 黒褐 断) 灰赤	密　1~2mmの白色粒、5mmの細砂粒含む	断面のみ
814	図 143	常滑甕	K18d9	754	(37.4)	(7.5)	-	5%以下	中野 7or8 型式	内) にぶい赤褐 外自然釉) オリーブ黒 断) 褐灰	密　1mm以下の白色粒、1~4mm の白色・灰色の細砂粒含む	断面のみ 14C 中頃 ~ 後半
815	図 143	常滑鉢	K18b6	870	-	(5.0)	高台(13.0)	10%	尾張第６型式	内・外・断) にぶい黄橙	密　1mm以下、1~4mmの白色粒・長石・石英・細砂粒含む	反転復元 13C 前半
816	図 143 図版 66	青磁碗	K18b6	870	-	(3.5)	高台(5.6)	20%	古瀬戸後Ⅰ ~ Ⅱ期	釉) オリーブ灰 露胎) 灰 断) 灰白	緻密	反転復元 13C 後半
817	図 143	瀬戸卸皿	K18b3	457	-	(1.1)	-	5%以下	灰釉　見込は卸目	内・外・断) 灰白	緻密	断面のみ
818	図 143	瀬戸折縁皿	K18b3	457	-	(2.0)	高台4.0	30%	古瀬戸中Ⅳ期	釉) オリーブ黄 断) 灰白	緻密	一部反転復元 14C 中頃
819	図 143 図版 66	瀬戸端反皿	K18j11	611	(14.0)	2.9	7.4	50%	登窯第４段階	内・外) 灰オリーブ 断) 灰白	密　5mmの砂粒少量、1mmの長石粒少量含む	反転復元 17C 中頃
820	図 143 図版 66	唐津折縁皿	K18j11	611	15.3	3.1	4.2	60%	灰釉　見込は胎土目３ヶ所	内・外) 明オリーブ灰 断) 灰白	緻密	肥前
821	図 143	土師器皿	K18c3	450	(14.0)	1.6	(8.0)	15%	口縁部はヨコナデ　外面に煤付着	内・外・断) 灰白	密　1mm以下の黒色粒、雲母含む	反転復元
822	図 143 図版 66	常滑甕	K18c3	450	(40.8)	(8.7)	-	5%	中野８型式	内) 黒褐 外) にぶい赤褐 断) 褐灰	堅緻　1~2mmの白色粒・黒色粒、5mmの白色細砂粒含む	反転復元 13C 後半
823	図 143	青磁盤	K18c3	419	-	(1.8)	(8.0)	5%	見込に印花スタンプ	釉) オリーブ灰 露胎) にぶい赤褐 断) 灰白	緻密	反転復元
824	図 143	陶器甕	K18c3	419	(31.8)	(5.7)	-	5%	口縁部は折り返し　体部一部に自然釉付着	内) 明赤褐 外) にぶい赤褐 断) 灰白	密　1mm以下の白色粒・黒色粒含む	反転復元
825	図 145 図版 66	縄文土器深鉢	K18b10	第３面包含層	(29.0)	(6.0)	-	5%以下	体部上部は沈線　頸部下わずかに縄文	内) 明赤褐 ~ にぶい橙 外) 橙 ~ にぶい赤褐 断) にぶい橙	密　1~2mm位の黒色粒 (鉱物 ?) 少量、1mm位の赤色酸化粒少量含む、長石微量含む	反転復元
826	図 145 図版 66	縄文土器深鉢？	K18c8	第３面包含層	-	(8.6)	-	5%以下	肥厚させた口縁部に Lr の縄文	内) にぶい橙 外) にぶい橙 ~ 灰褐 断) 褐灰	密　1~3mmのチャート多量、1~2mmの石英少量含む	断面のみ
827	図 145 図版 66	縄文土器深鉢	K18b10	第３面包含層	-	(4.4)	-	5%以下	波状口縁　口縁部を内側に折り曲げ、その部分に文様	内) 褐灰 外) にぶい黄橙 断) 黒褐	密　1~2mm位の石英多量含む	断面のみ
828	図 145 図版 66	縄文土器深鉢？	J18y5	第３面包含層	-	(5.4)	-	5%以下	口縁部下に平行の２条の沈線斜め方向の沈線　一部刺突文	内・断) にぶい黄橙 ~ 黒褐 外) 灰黄褐	密　1~5mmの石英多量含む	断面のみ
829	図 145 図版 66	縄文土器深鉢？	J18y5	第３面包含層	-	(4.5)	-	5%以下	波状口縁　粘土の貼付による突帯	内) にぶい褐 ~ 灰褐 外) 褐灰 断) にぶい褐	密　1~3mmのチャート多量含む	断面のみ
830	図 145 図版 66	縄文土器深鉢？	J18y5	第３面包含層	-	(6.6)	-	5%以下	沈線で囲まれた中に円形の刺突文	内) にぶい褐 ~ 灰褐 外) 褐灰 ~ にぶい橙 断) にぶい黄橙	密　1~5mmの石英・チャート多量含む	断面のみ
831	図 145 図版 66	縄文土器深鉢？	J18y5	第３面包含層	-	(4.7)	-	5%以下	２条の沈線　円形の刺突文	内) にぶい褐 ~ 褐灰 外) 褐灰 断) 黒褐 ~ にぶい褐	密　1~3mmの石英多量含む	断面のみ
832	図 149 図版 66	縄文土器深鉢	J17w7	1-J001	-	(4.7)	-	5%以下	波状口縁　口縁部を内側に折り曲げ、その部分に文様	内) 褐・黒 外・断) にぶい赤褐・黒褐	粗　2.5mm以下の黒褐色・白色粒少量含む	断面のみ
833	図 149 図版 66	縄文土器深鉢	J17w7	1-J001	-	(4.4)	-	5%以下	外面は沈線縄文　内面は貝がら状痕	内) にぶい橙 外) 橙 断) にぶい赤褐	粗　1.5mm以下のチャート、雲母少量含む	断面のみ
834	図 149 図版 66	縄文土器深鉢	J17w7	1-J002	-	(5.6)	-	5%以下	外面は沈線縄文　内面は貝がら状痕	内) 黒 外) にぶい赤褐 断) 暗赤褐	やや粗　1.5mm以下のチャート少量含む	断面のみ
835	図 149 図版 66	縄文土器深鉢	J17w6	1-J003	-	(7.1)	-	5%以下	波状口縁　中心飾りに大きな刺突文	内) 褐 外) 黒褐 断) にぶい褐	粗　1.5mm以下のチャート・白色粒・金雲母多量含む	断面のみ
836	図 149	縄文土器器種不明	J17w6	1-J003	-	(5.6)	-	10%	口縁部と平行に太い沈線	内・断) にぶい褐 外) 褐	密　1mm大の石粒少量含む	断面のみ
837	図 149	縄文土器深鉢	J17w6	1-J003	-	(3.6)	-	5%以下	口縁部と平行に太い沈線	内・断・外) にぶい赤褐	粗　1.5mm以下のチャート・金雲母多量含む	断面のみ
838	図 149 図版 66	縄文土器深鉢	J17x7	1-J006	-	(6.6)	-	5%以下	太目の粗い２条の沈線の上に爪形文	内・外) にぶい赤褐 断) にぶい橙	粗　2mm以下の石英・白色粒多量、0.5mm大の金雲母少量含む	断面のみ
839	図 149	縄文土器深鉢	J17w7	1-J006	-	(3.2)	-	5%以下	波状口縁	内) 明黄褐 外) 橙 断) 浅黄橙	粗　5mm大のチャート２個、1.5mm以下のチャート多量含む	断面のみ
840	図 149 図版 66	縄文土器器種不明	J17x7	1-J009	-	(4.8)	-	10%	外面は沈線縄文	内) 明赤褐 外) 暗褐	密　1~2mm大の灰黒粒含む	断面のみ
841	図 149 図版 66	縄文土器深鉢？	K18f6	3001	-	(6.0)	-	5%以下	口縁部をやや肥厚させ、その下に沈線縄文	内) にぶい橙 外) にぶい橙 ~ にぶい赤褐 断) 黒褐	密　1~5mmの石英中量、銀色微粒少量含む	断面のみ
842	図 149 図版 66	縄文土器深鉢？	K18e8	429	(32.6)	(7.0)	-	5%以下	粘土紐貼付による突帯	内・断) 浅黄橙 外) 黒褐	密　1~2mmの褐色粒・白色粒、4mmの褐色粒含む	断面のみ № 843 と同一個体
843	図 149 図版 66	縄文土器深鉢	K18e8	429	-	(6.6)	-	5%以下	中心飾りの沈線で囲まれた中を縦の沈線で埋める	内・断) 浅黄橙 外) 黒褐	密　1~2mmの褐色粒・白色粒、4mmの褐色粒含む	断面のみ № 842 と同一個体

遺物観察表（瓦）

色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書番号	図・図版番号	種類	地区	遺構層位	法量 (cm)			技法	色調	胎土	備考
					長さ	幅	厚				
17	図 13	平瓦	J18w5	202	(21.4)	(12.0)	1.6 ～ 1.8	凹凸面はヘラ調整	内・外）灰 断）灰白	密　砂粒含む、全体的に磨滅著しい	
18	図 13	平瓦	J18w5	202	(20.6)	(11.0)	1.6 ～ 1.9	凹凸面はナデ	内・外）灰 断）灰白	堅緻　黒色粒多く含む	
19	図 13	平瓦	J18w5	202	(18.2)	(14.6)	1.4 ～ 1.9	凹凸面はナデ	内）黄灰 外）黒 断）灰白	堅緻　黒色粒含み、気泡が少量見られる	
557	図 106 図版 61	平瓦	K17a25	4034	(8.0)	高さ (9.5)	2.3	凸面に格子叩き目	内・断）にぶい橙 外）にぶい黄褐	堅緻　1 ～ 2mmの褐色粒・黒色粒含む	
576	図 106	平瓦	J18v2	4030	(17.6)	(11.9)	2.5	凹面はナデて平滑にされ、かすかに布目痕	内・外）灰白 断）黄灰	密　1 ～ 3mmの白色粒・黒色粒・細砂粒含む	

遺物観察表（石製品）

法量は最大値、（　）内は復元した大きさ

報告書番号	図・図版番号	器種	地区	遺構層位	法量 (cm)			残存率	石材	形態・特徴	備考
					長さ	幅	厚さ				
119	図 31 図版 46	石鍋	K17f25	第 2 面上包含層	(27.4)	(8.6)	-	10%	滑石	口縁端部は水平で口縁部下に断面台形状の突帯巡る　体部に縦方向の細かい削り痕	反転復元
202	図 45 図版 48	硯	K18c8	760 1 層	8.5	6.7	2.1	80%	不明		
249	図 56 図版 49	石臼	K17e25	4001	(φ 28.0)	-	(5.2)	-	砂岩		
318	図 65	石臼	K18c1	4031	(φ 29.8)	-	11.6	50%	砂岩	摺面は 8 分割	
319	図 65	石臼	K18c1	4031	(φ 30.6)	-	11.4	40%?	砂岩	摺面は 8 分割	
594	図 115 図版 62	石鍋	K18c6	675	(25.0)	高さ (5.3)	-	-	滑石		反転復元
650	図 128	砥石	K18e11	1330 床面	17.9	5.7	4.0	80%	不明		
727	図 138 図版 64	石鍋	K18c7	970	(28.0)	(4.5)	-	5%	滑石	内外面はケズリ	反転復元
788	図 142 図版 65	石鍋	K18a7	1682	(34.0)	高さ (6.4)	-	5% 以下	滑石	外面は細かいケズリ　内面は滑らかなケズリ	反転復元
794	図 142	石鍋	K18f10	1790	(22.0)	高さ (4.7)	-	5% 以下	滑石	外面は細かいケズリ　内面は滑らかなケズリ	反転復元

遺物観察表（金属製品・銭貨）　法量の（ ）内は復元及び推定した大きさ

報告書番号	図・図版番号	種類器種	地区	遺構層位	法量 (cm) 長さ	幅	厚さ	重さ g	備考
43	図 24 図版 43	銅製品 鏡	J18y7	120	(7.0)	(4.2)	高さ 1.1	(64.20)	装飾金具か
49	図 24 図版 43	銅製品 蓋	J18y9	179	口径 5.7	-	高さ 1.6	41.76	内面にカエリのある蓋、表面に青錆付着
50	図 24 図版 43	銅製品 小柄か	J18y12	25	(10.8)	1.4	0.5	(23.89)	
56	図 25	鉄製品 釘	J17w7	1-287 桶内	(9.1)	(0.6)	(0.4)	(13.35)	
120	図 31 図版 46	鉄製品 小刀	K18c1	第 2 面 包含層	28.0	1.8 ～ 3.6	0.8 ～ 0.9	(384.30)	両刀か
121	図 31 図版 46	銅製品 飾り金具	J18y2	第 2 面 包含層	4.2	6.7	0.5	(16.75)	
129	図 35 図版 46	銅製品 銭貨	K18a9	3140	2.4 × 2.4	-	—	2.82	「永樂通寶」
130	図 35 図版 46	銅製品 銭貨	K18a9	3140	2.3 × 2.3	-	—	2.86	「洪武通寶」
131	図 35 図版 46	銅製品 銭貨	K18a9	3140	2.2 × 2.2	-	—	2.50	「洪武通寶」
132	図 35 図版 46	銅製品 銭貨	K18a9	3140	2.3 × 2.3	-	—	2.60	「開元通寶」
133	図 35 図版 46	銅製品 銭貨	K18a9	3140	2.4 × 2.4	-	—	2.03	「開元通寶」
134	図 35 図版 46	銅製品 銭貨	K18a9	3140	2.4 × 2.4	-	—	1.40	「宣和通寶」
135	図 35 図版 46	銅製品 銭貨	K18a9	3140	2.4 × 2.5	-	—	(2.00)	
136	図 35	銅製品 銭貨	K18a9	3140	2.3 × 2.3	-	—	(1.97)	「○○通寶」？
137	図 35 図版 46	銅製品 銭貨	K18a9	3140	(2.2 × 2.4)	-	径 (2.4)	(2.39)	「元豊通寶」
138	図 35	銅製品 銭貨	K18a9	3140	(1.7 × 2.4)	-	径 (2.5)	(1.30)	「皇○○寶」？
203	図 45 図版 48	鉄製品 釘	K18c8	760 焼土層	(14.0)	(1.0 × 1.5)		(91.28)	
204	図 45	鉄製品 釘	K18b8	760	(5.1)	-	(0.25 ～ 0.55)	(6.20)	
205	図 45	鉄製品 釘	K18b8	760	(5.8)	-	(0.3 × 0.5)	(7.54)	
206	図 45	鉄製品 釘	K18b8	760	(6.8)	(0.2 × 0.5)		(5.77)	
207	図 45	鉄製品 釘	K18c8	760	(6.7)	(0.3 × 0.6)		(7.20)	
208	図 45	鉄製品 釘	K18c8	760 焼土層	8.1	(0.4 × 0.6)		9.71	
209	図 45	鉄製品 釘	K18b8	760	(6.1)	-	(0.4 × 0.5)	(7.28)	
210	図 45	鉄製品 釘	K18c8	760	8.3	(0.3 × 0.5)		6.31	
211	図 45	鉄製品 釘	K18c8	760 焼土層	(9.0)	0.5 × 0.7		(10.65)	
212	図 45	鉄製品 釘	K18c9	760 焼土層	(10.8)	(0.4 × 0.6)		(15.21)	
213	図 45	鉄製品 釘	K18c9	760 焼土層	(7.5)	-	(0.3 × 0.6)	(7.49)	
232	図 50	銅製品 飾り金具か	J17x8	1-62	高さ 2.6	11.5	0.1	15.88	湾曲した形状で 0.3㎜の 5 ヶ所に穿孔　表面に金鍍金
233	図 50	銅製品 飾り金具か	J17x8	1-62	高さ (2.1)	(11.2)	0.1	(9.13)	5 ヶ所に穿孔
234	図 50	銅製品 飾り金具か	J17y8 他	1-62	2.7	(6.8)	0.1	(9.66)	湾曲した形状
235	図 50	銅製品 飾り金具か	J17x8	1-62	(8.2)	3.2	0.1	49.55	
236	図 50	銅製品 不明	J17x8	1-62	高さ 0.7	3.3	0.2	5.61	
237	図 50	銅製品 不明	J17y8 他	1-62	(3.9)	(3.4)	(0.05)	(5.89)	
248	図 56 図版 49	銅製品 斧	J17e25	4001	12.0	1.1	0.15	12.62	
369	図 69	銅製品 不明	J18a1	4028	径 4.0	-	0.1	(8.26)	中央に 4㎜の孔有、飾り金具か
713	図 138	鉄製品 不明	J18y6	451 下層	(7.3)	(1.9)	0.25	(8.58)	
793	図 142	銅製品 飾り金具か	K18d6	914	(3.9)	(3.7)	0.3 ～ 0.5	(22.30)	
796	図 142 図版 65	銅製品 不明	K18c10	1562	(3.3)	2.2	0.45	(6.56)	
806	図 143 図版 66	銅製品 刀装具	K18a9	921	(13.1)	1.2	0.5	(22.87)	表面に同心円文状の文様

付　章

第１節　新宮城下町遺跡出土炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定

金原美奈子・金原裕美子
（一般社団法人 文化財科学研究センター）

Ⅰ．樹種同定

１．原理

本報告では、遺跡より出土した炭化材に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。

２．試料と方法

試料は、地下式倉庫 760、4031 の床面より出土した炭化材２点である。なお、試料は焼失した倉庫群の建築部材の一部と考えられている。試料は結果表に記す。

方法は、試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の断面を作製し、落射顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって 50 ～ 1000 倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

３．結果

表１に結果を示し、同定された分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

１）スギ　*Cryptomeria　japonica*　D.Don　スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～ 14 細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ 40m、径２m に達する。

２）コウヤマキ　*Sciadopitys　verticillata*　Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～ 15 細胞高であるが多くは 10 細胞高以下である。

以上の特徴からコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 30m、径 80cm に達する。

４．所見

同定の結果、新宮城下町遺跡第４次の炭化材は、スギ１点、コウヤマキ１点であった。

スギは軽軟であるが強靭で加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。建築部材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。なお、耐朽・保存性は心材において中庸、辺材において低い材である。コウヤマキは木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽･保存性も高く、特に耐湿性に優れた材で、また針葉樹の中では最も加工が容易な材である。いずれの樹種も、船舶材にも用いられる材であり、そのため本遺構である地下式倉庫が属する港の倉庫群の建築部材

としては適材であった。

スギは古代より人口増加や寺院建築、水田開発などによって多く利用されてきたため、中世には一部地域では造林が行われるほどであった。なお和歌山では古くからスギよりもヒノキの方が多用されていたようである。そのため、本試料のスギは流通によってもたらされた可能性がある。また、コウヤマキは弥生時代から古墳時代にかけて近畿地方中央部で木棺などに用いられ、律令期に建築部材に利用されたが、中世からは大きな材が取れなくなったのか類例は少ないものの、日用具や器具に多様に用いられるようになる。しかし和歌山では高野山などコウヤマキの分布域があり、建築部材に用いられるような大径木の供給があったと考えられる。

いずれの樹種も温帯に分布する樹木である。スギは特に温帯中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。コウヤマキは適潤性であるが乾燥した環境にも耐え、尾根、急峻地または岩盤上にも生育する。本遺跡で同定された樹木は当時遺跡周辺からか、または流通によってもたらされたと推定される。また、耐朽・保存・耐湿性に優れた材が選定され用いられたと考えられる。

Ⅱ．放射性炭素年代測定

１．原理

放射性炭素年代測定は物質に含まれる炭素同位体のひとつである 14C を利用して測定する方法である。動植物は生きていく上で 14C を取り込み続けており、生命が終えると 14C の取り込みが終了し、その時点から 14C は放出されていくようになる。そのため遺跡から出土した遺存体に残存する 14C を測定することによって、その生物の死後の経過時間が判明する。放射性炭素年代測定は木材、炭化材、種実、骨、土壌堆積物中の炭化物などの炭素を含むあらゆる遺存体に適応される。

２．試料

試料は、地下式倉庫 760、4031 の床面より出土した炭化材２点である。なお、試料は焼失した倉庫群の建築部材の一部と考えられている。試料は樹種同定と同じ試料である。

３．方法

（１）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

２）酸－アルカリ－酸（AAA:Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l(1M) の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表に記載する。

３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（２）測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、14C の計数、13C 濃度（13C/12C）、

14C 濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸(HOx Ⅱ)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（３）算出方法

１）δ 13C は、試料炭素の 13C 濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表２）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

２）14C 年代（Libby Age:yrBP）は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期(5568 年)を使用する（Stuiver and Polach 1977)。14C 年代はδ 13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表２に、補正していない値を参考値として表３に示した。14C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差（±１σ）は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい（14C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（14C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ 13C によって補正する必要があるため、補正した値を表２に、補正していない値を参考値として表３に示した。

４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1 σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2 σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が 14C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ 13C 補正を行い、下１桁を丸めない 14C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.3 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表３に示した。暦年較正年代は、14C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

４．測定結果

新宮城下町第４次の炭化材の放射性炭素年代の測定結果を表２、表３に示す。地下式倉庫 760 では１σ 1220calAD-1256calAD、２σ 1189calAD-1270calAD の年代値で、12 世紀から 13 世紀の年代が測定された。地下式倉庫 4031 では１σ 991calAD-1020calAD、２σ 974calAD-1028calAD の年代値で、10 世紀から 11 世紀の年代が測定された。

本遺跡は 14 世紀中頃から 15 世紀中頃が想定されているが、それから 200 年から 400 年ほど古い年代が算出されている。樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で成長をとめた年代を示す試料の最外年輪から得られる。その内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す古木効果によって古い年代が測定されることがある。今回測定された試料は樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できなかったことから測定された年代値は試料の原木が成長をとめた年代よりも古い可能性がある。

また、試料が建築部材であった場合、用いられる木材は大径木であることが多いため、樹木の芯に近い心材は、最外年輪がある辺材に比べると堅く防腐成分が多く水湿にも良く耐えることから、辺材部を切り落として利用することがある。本遺跡が海に近いことから辺材部を落とした加工材を建築部材に用いたことから木材の伐採時期を反映していない可能性がある。そして炭化材がその建築部材の一部であった事からより芯に近い部分が試料となった可能性もあり、先述した古木効果に拍車がかかる。また､建物の補修や古材の転用などがあればさらに状況は複雑になり、古い時期が測定された可能性も考えられる。

【参考文献】
伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織，地球社，p.176.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242.
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), p.337-360.
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), p. 1869-1887.
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), p.355-363.

表１　新宮城下町遺跡第４次における樹種同定結果

仮番号	種別	調査区	遺構	層位	結果（学名／和名）	
1	地下式倉庫 760	1 区 K19b8	760	床面	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
2	地下式倉庫 4031	2 区 K19c1	4031	床面	*Sciadopitys verticillata Sieb.* et Zucc.	コウヤマキ

表２　放射性炭素年代測定結果（δ 13C 補正値）

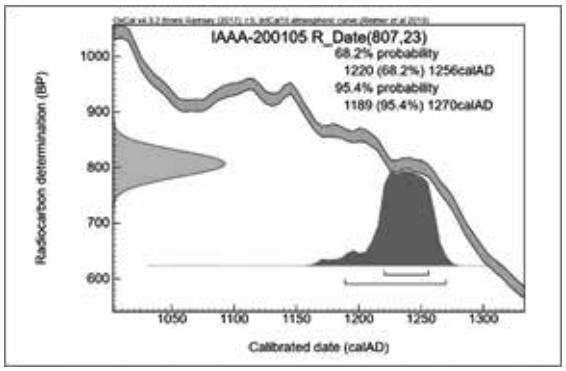
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 13C（‰）(AMS)	δ 13C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-200105	522-1	1 区 K19b8　地下式倉庫 760　床面	木炭	AAA	-23.87 ± 0.21	810 ± 20	90.44 ± 0.26
IAAA-200106	522-2	2 区 K19c1　地下式倉庫 4031　床面	木炭	AAA	-24.11 ± 0.18	1,040 ± 20	87.89 ± 0.25

［IAA 登録番号：#A146］

表３　放射性炭素年代測定結果（δ 13C 未補正値、暦年較正用 14C 年代、較正年代）

測定番号	δ 13C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age　(yrBP)	pMC　(%)			
IAAA-200105	790 ± 20	90.65 ± 0.26	807 ± 23	1220calAD - 1256calAD (68.2%)	1189calAD - 1270calAD (95.4%)
IAAA-200106	1,020 ± 20	88.05 ± 0.25	1,036 ± 23	991calAD - 1020calAD (68.2%)	974calAD - 1028calAD (95.4%)

［参考値］



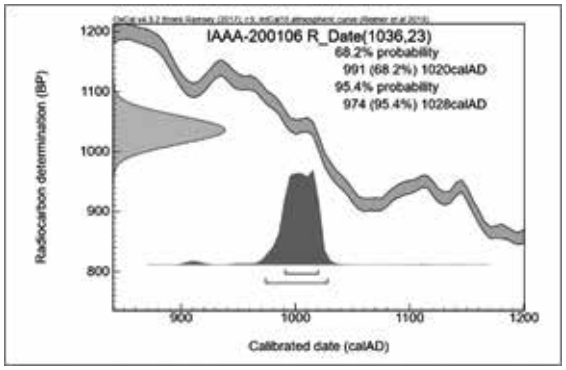
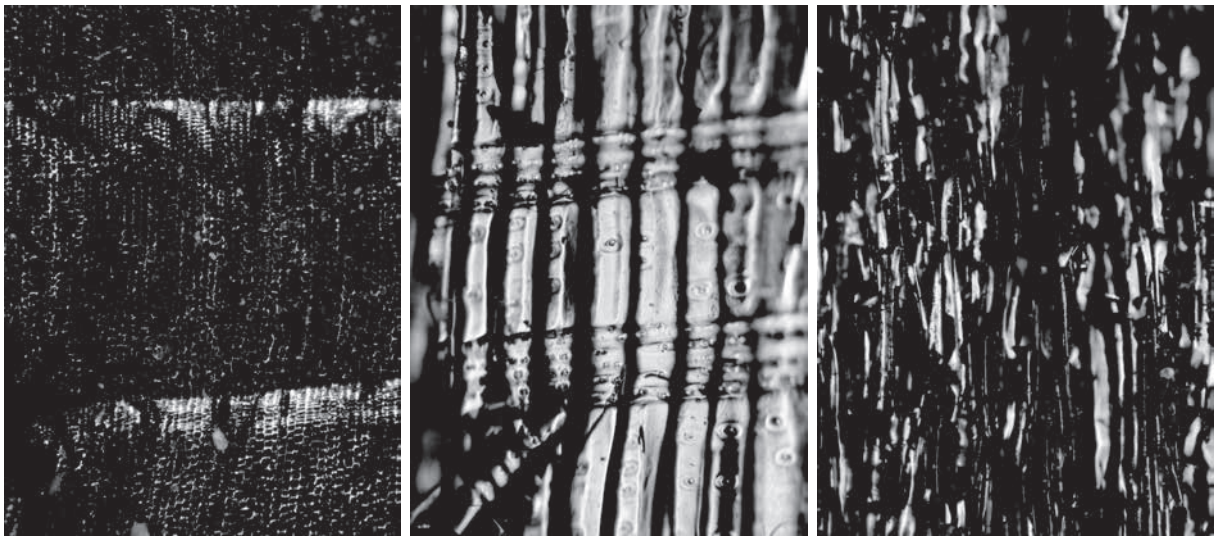


図１　暦年較正年代グラフ（参考）

新宮城下町遺跡第４次の木材



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

１．スギ　地下式倉庫760　1区K19b8　床面

横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

２．コウヤマキ　地下式倉庫4031　2区K19c1　床面

写真１新宮城下町遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

第２節　和歌山県新宮城下町遺跡出土金属製品成分分析調査

株式会社　吉田生物研究所

１．はじめに

和歌山県に所在する新宮城下町遺跡から出土した金属製品 19 点について、材質を明らかにする為に以下の通り成分分析を行った。その結果を報告する。

２．資料

調査した資料は表１に示す金属製品 19 点である。

３．方法

資料 19 点をクリーニング後に、遺物を直接用いて蛍光 X 線分析を行い、金属元素を同定した。装置は AMETEK 製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 SPECTRO MIDEX MID04 を用いた。

４．分析結果

成分分析結果のスペクトルを付す（図１～21）。表２に分析結果一覧を示すが、その数値はあくまで参考にすぎない。結果は以下の通りである。

試料 No.1 の飾り金具？は、地金の計測 No.1, から主成分として銅（Cu）、金彩の計測 No.2 から主成分として銅（Cu）と金（Au）が検出された。金彩部分から水銀（Hg）の検出が確認できないことから試料 No.1 は金箔貼銅製品と考えられる。

試料 No.2 の小柄？は、計測 No.3 から主成分として銅（Cu）が検出されていることから銅製品と考えられる。

試料 No.3 の飾り金具？は、計測 No.4 から主成分として銅（Cu）、錫（Sn）、鉛（Pb）が検出されていることから青銅製品と考えられる。

試料 No.4 の蓋は、計測 No.5 から主成分として銅（Cu）、鉛（Pb）が検出されている。それに加えて微量ながら錫（Sn）が検出されていることから青銅製品の可能性が考えられる。

試料 No.17 は、計測 No.6 から主成分として銅（Cu）、錫（Sn）、鉛（Pb）が検出されていることから青銅製品と考えられる。

試料 No.18 の不明は、計測 No.7 から主成分として銅（Cu）が検出されていることから銅製品と考えられる。

試料 No.19 の棒状製品の緑青が付着している装飾が施されている部分は、計測 No.8,9 から主成分として銅（Cu）が、その他に鉄（Fe）が検出されていることから鉄錆に覆われた銅板と考えられる。

試料 No.20 の笄は、計測 No.10 から主成分として銅（Cu）が検出されていることから銅製品と考えられる。

試料 No.21 の鏡は、計測 No.11 から主成分として銅（Cu）が、それに加えて金（Au）も検出されていることから金で装飾された銅製品と考えられる。

試料 No.22 ～ 31 の銭貨は、計測 No.12 ～ 21 から主成分として銅（Cu）、錫（Sn）、鉛（Pb）が検出されていることから青銅製品である。

表１　資料表

計測 No.	試料 No.	登録番号	資料名	概要
1	1	2530	飾り金具？（地金）	全体的に砂少量付着。一部に金残存
2			飾り金具？（金彩）	
3	2	153	小柄？	一部砂付着。緑青に覆われている
4	3	299	飾り金具？	緑青に覆われている
5	4	326	蓋	完形。経筒の蓋か。緑青に覆われている
6	17	1218	飾り金具？	緑青に覆われている
7	18	1533	不明	小刀の切羽か。緑青に覆われている
8	19	1206	棒状製品（鉄錆）	一部に緑青残存
9			棒状製品（緑青）	
10	20	2424	笄	緑青に覆われている
11	21	2794	鏡	一部欠損。砂付着。緑青に覆われている
12	22	2732	銭貨	一部欠損。砂付着
13	23	2733	銭貨	砂付着
14	24	2738	銭貨	残存率 1/2。砂付着
15	25	2735	銭貨	砂付着
16	26	2731	銭貨	周囲大部分欠損。砂付着
17	27	2729	銭貨	砂付着
18	28	2734	銭貨	砂付着
19	29	2730	銭貨	砂付着
20	30	2736	銭貨	砂付着
21	31	2737	銭貨	砂付着

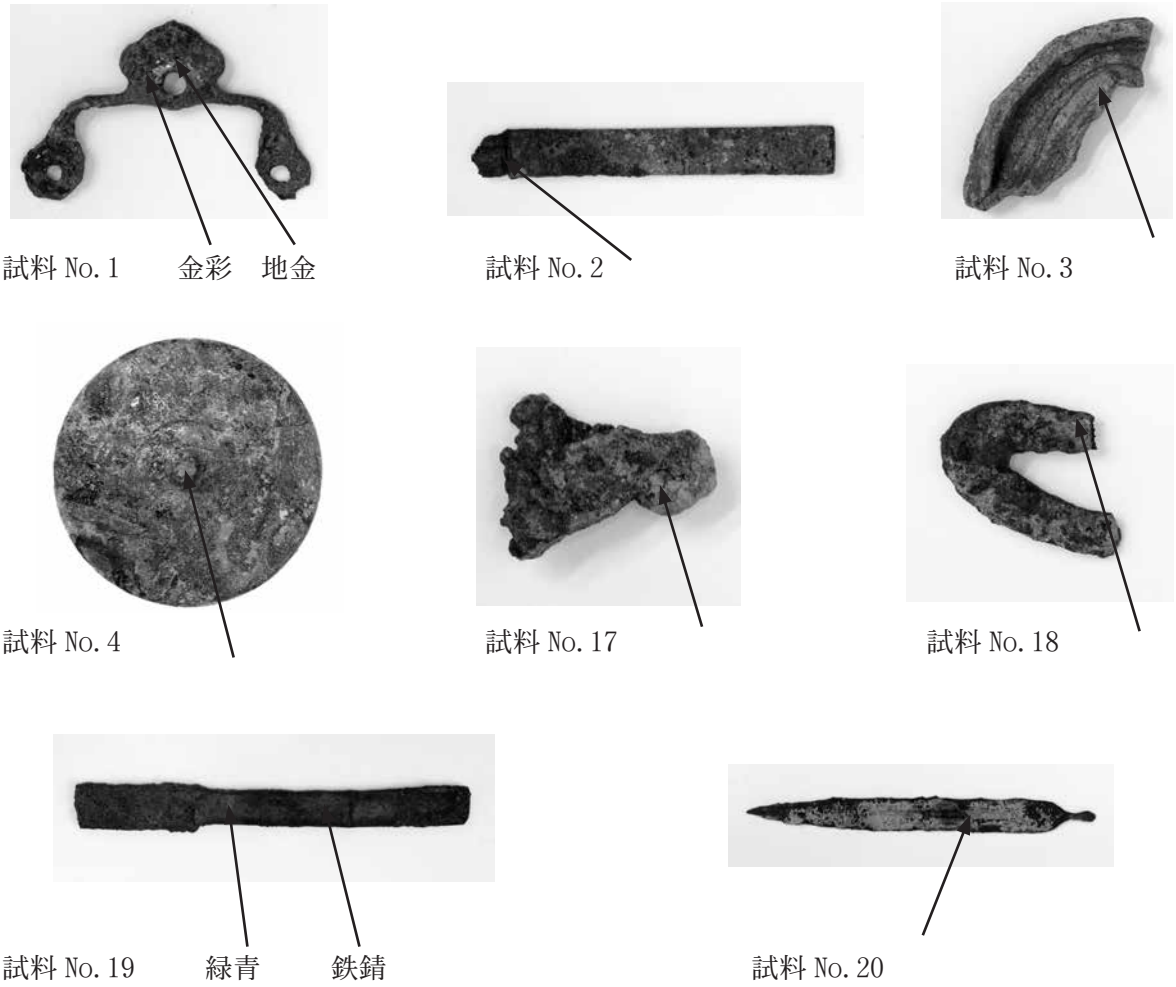
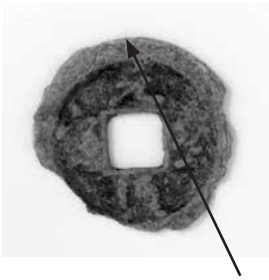


写真１　成分分析対象金属製品（１）

No. 21

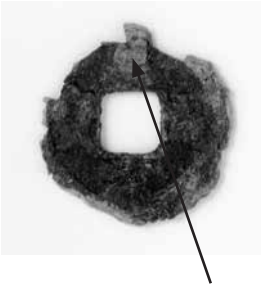


試料 No. 22

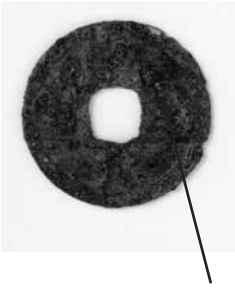
試料 No. 23

試料 No. 24

試料 No. 25

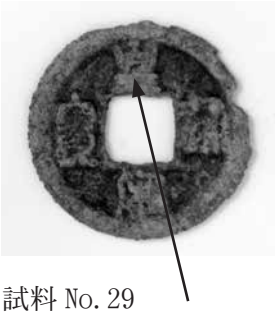


試料 No. 26

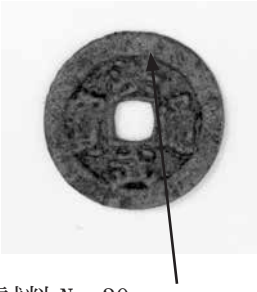


試料 No. 27

試料 No. 28



試料 No. 29



試料 No. 30

試料 No. 31

（→：計測部位）

写真２　成分分析対象金属製品（２）

表２　成分分析結果

元素	No. 1(wt%)	No. 2(wt%)	No. 3(wt%)	No. 4(wt%)	No. 5(wt%)	No. 6(wt%)	No. 7(wt%)	No. 8(wt%)	No. 9(wt%)	No. 10(wt%)	No. 11(wt%)
Fe	7.59	0.65	0.60	0.43	3.25	0.56	1.25	11.57	18.07	0.18	0.47
Cu	76.81	80.32	95.40	16.25	70.73	44.48	94.81	83.26	77.52	83.06	91.04
As	−	−	−	0.39	0.27	0.82	1.00	−	0.12	0.69	1.16
Ag	0.12	0.29	−	−	−	−	0.83	0.29	0.54	0.49	0.30
Sn	−	−		22.55	0.98	19.01	−	−	−	−	0.10
Sb	−	−	−	−	0.13	0.22	0.10	−	−	−	0.19
Au	−	3.44	−	−	−	−	−	−	−	−	3.19
Pb	0.33	0.23	1.03	58.95	23.36	34.10	1.03	0.46	1.39	0.34	1.10

元素	No. 12(wt%)	No. 13(wt%)	No. 14(wt%)	No. 15(wt%)	No. 16(wt%)	No. 17(wt%)	No. 18(wt%)	No. 19(wt%)	No. 20(wt%)	No. 21(wt%)
Fe	0.74	0.82	0.74	2.11	0.68	6.04	1.93	0.69	0.76	10.80
Cu	7.48	30.90	11.36	13.23	51.96	30.36	68.75	28.64	13.75	16.84
As	−	0.79	0.16	0.82	0.12	0.62	0.35	−	0.44	2.21
Ag	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Sn	23.03	10.99	13.06	14.25	14.00	10.74	5.80	13.89	12.82	4.71
Sb	−	−	0.18	0.60	−	−	−	−	−	0.17
Au	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Pb	67.84	55.79	73.52	68.00	32.81	50.85	21.96	56.28	71.11	63.89

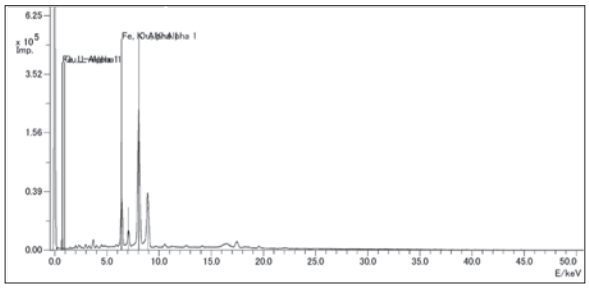


図 1　計測 No.1

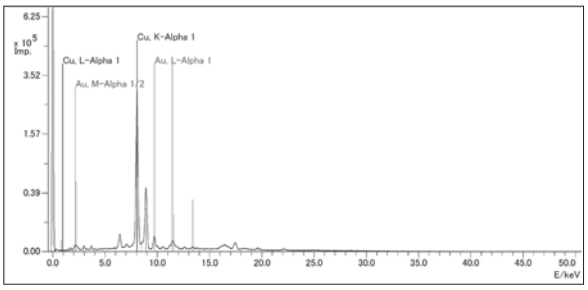


図 2　計測 No.2

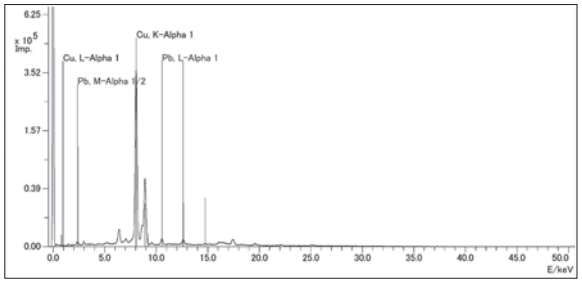


図 3　計測 No.3

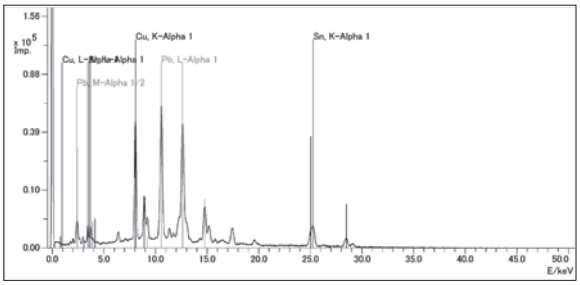


図 4　計測 No.4

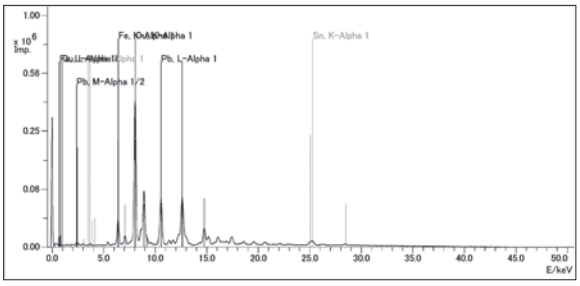


図 5　計測 No.5

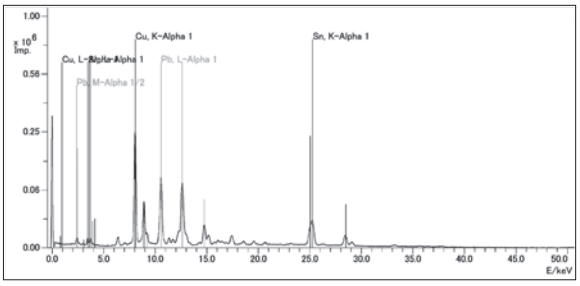


図 6　計測 No.6

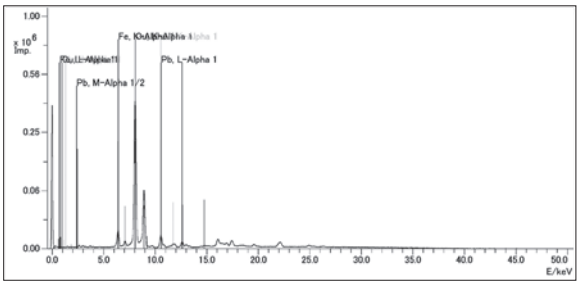


図 7　計測 No.7

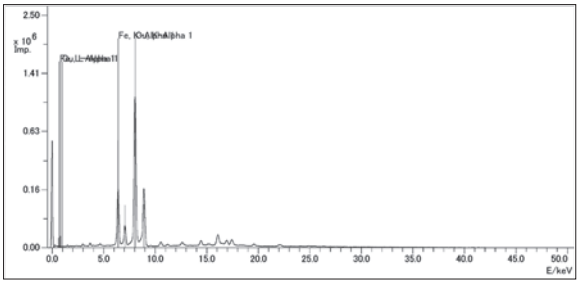


図 8　計測 No.8

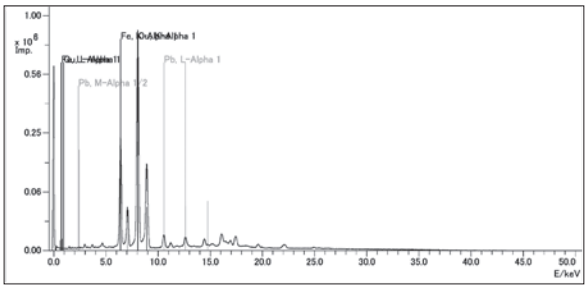


図 9　計測 No.9

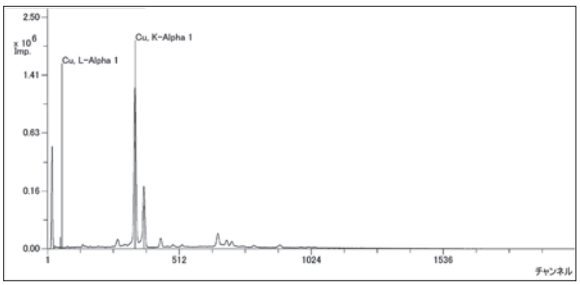


図 10　計測 No.10

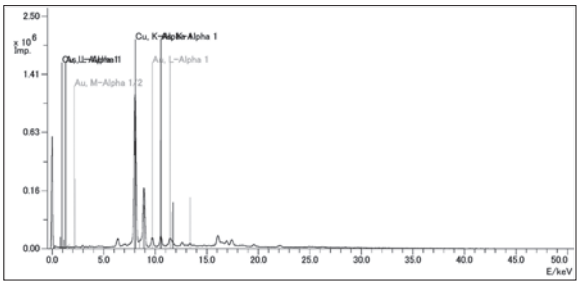


図 11　計測 No.11

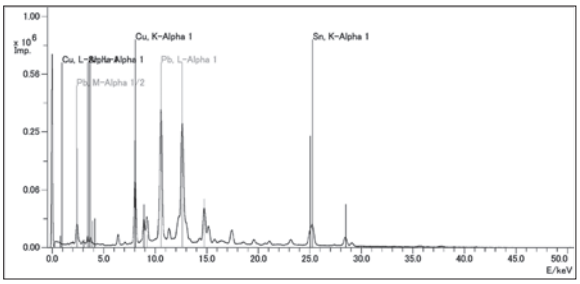


図 12　計測 No.12

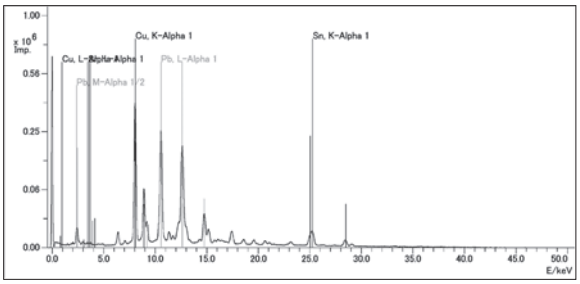


図 13　計測 No.13

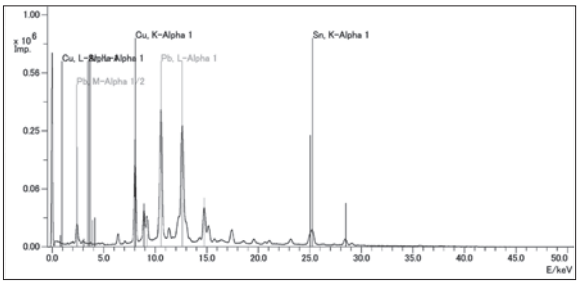


図 14　計測 No.14

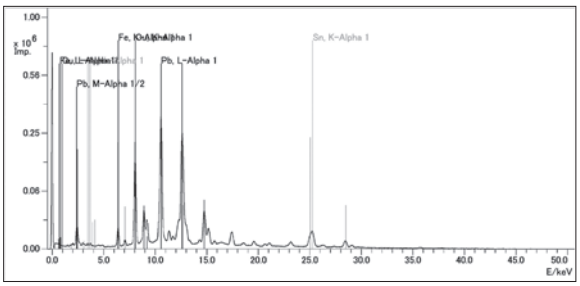


図 15　計測 No.15

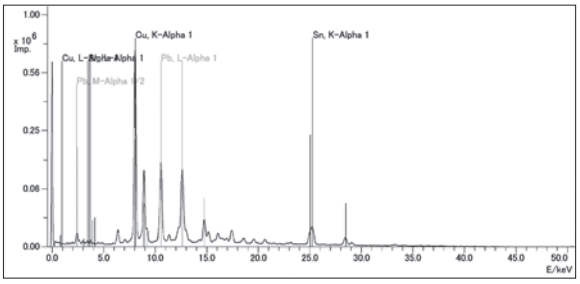


図 16　計測 No.16

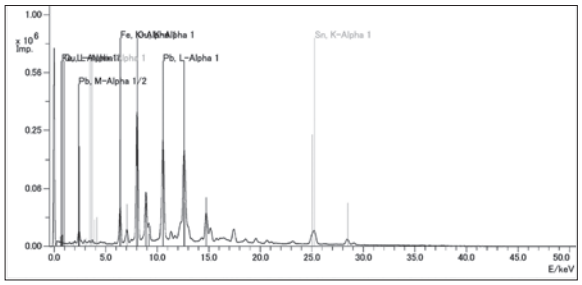


図 17　計測 No.17

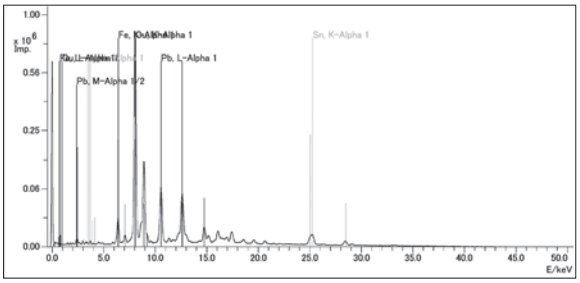


図１８　計測 No.18

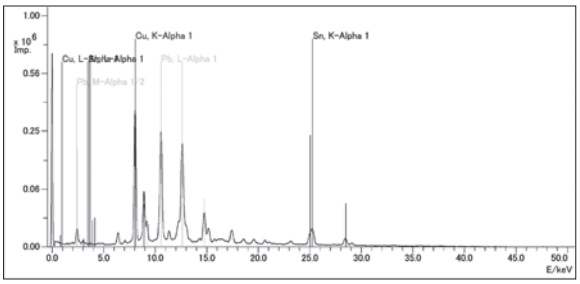


図 19　計測 No.19

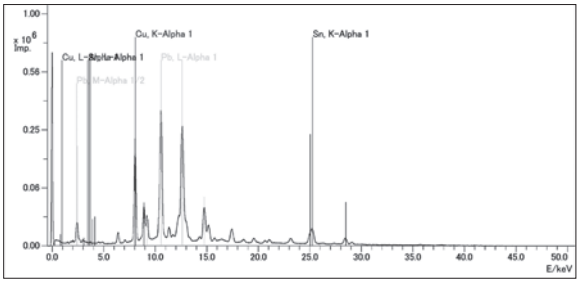


図 20　計測 No.20

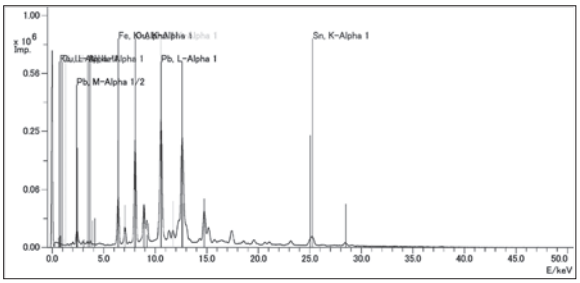
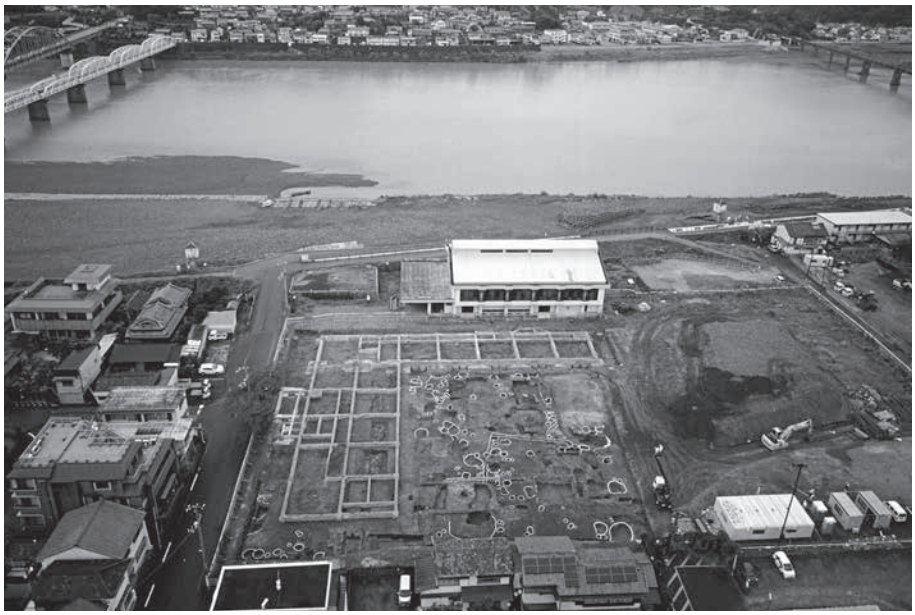


図 21　計測 No.21

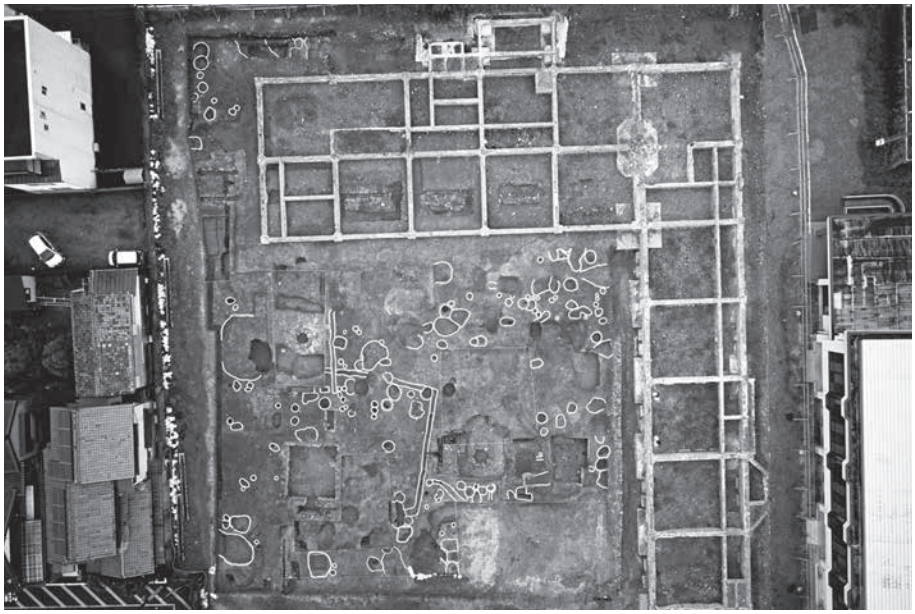
写　真　図　版

図版1

1．調査区遠景（東から）



2．調査区遠景（南から）



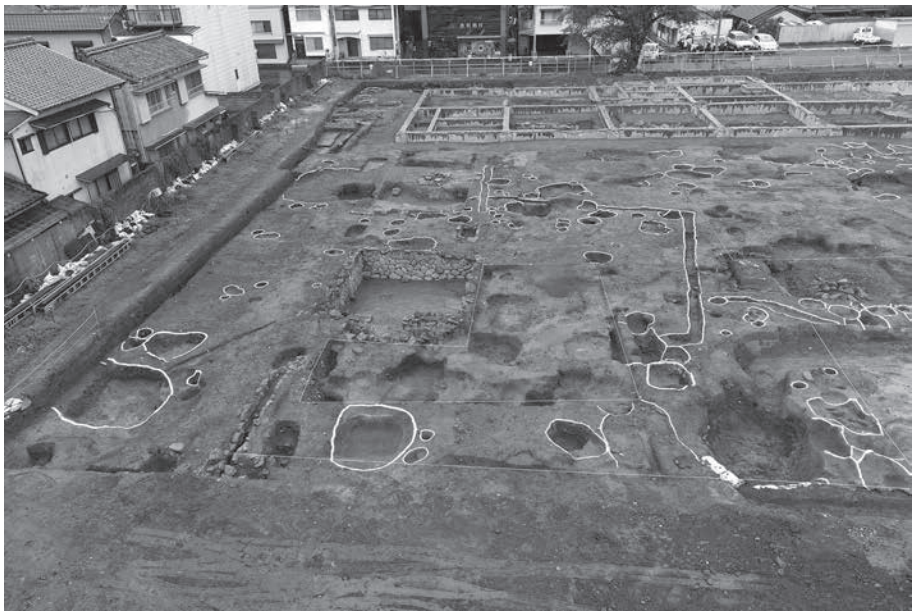
3．第１遺構面全景
（上空から）

図版2

1．第１遺構面全景
（東から）

2．第１遺構面全景
（南東から）

3．第１遺構面全景
（北東から）

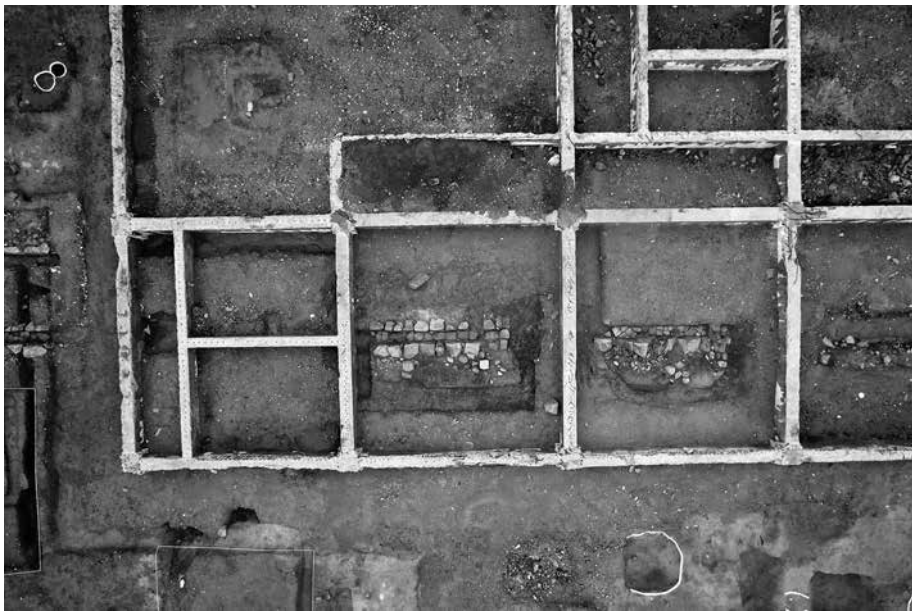


1．第１遺構面南側全景
（東から）

2．第１遺構面調査区北西部
（南東から）

3．第１遺構面北西部
（東から）

図版4



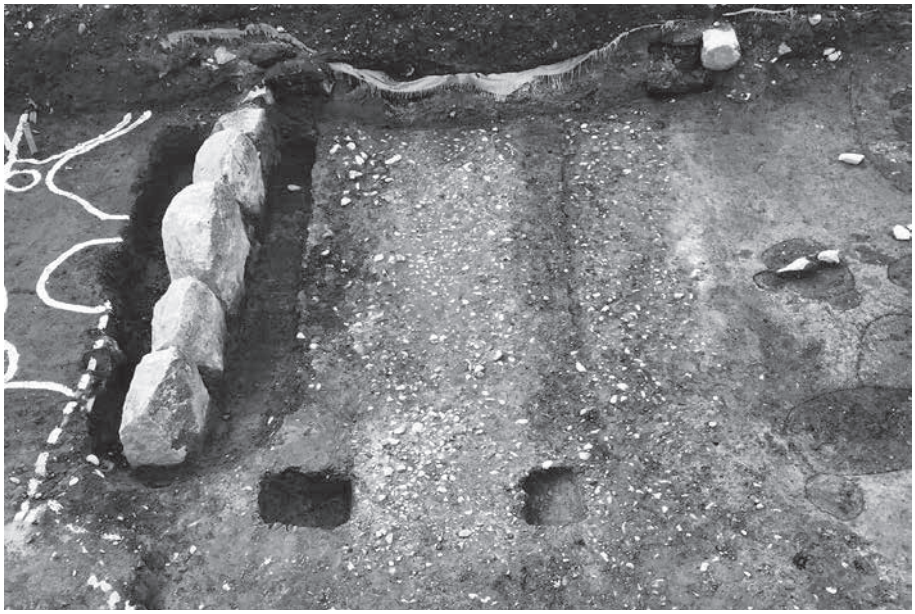
1．遺構 199（竹矢町通）
北側検出状況（上空から）

2．遺構 199（竹矢町通）
南側検出状況（南から）

3．遺構 199（竹矢町通）
南側検出状況（東から）

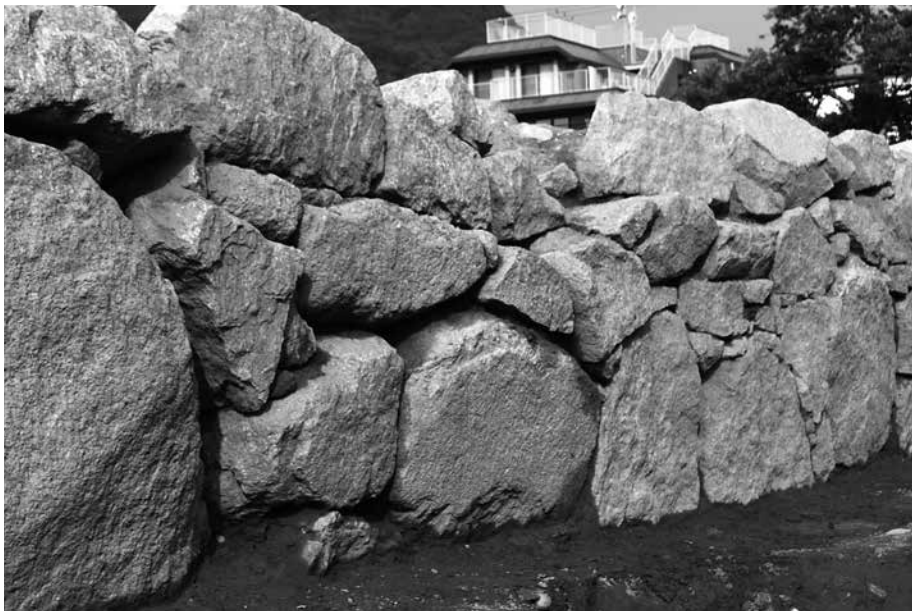
1．遺構199（竹矢町通）
横断面（南から）

2．遺構199（竹矢町通）
と石垣（南から）

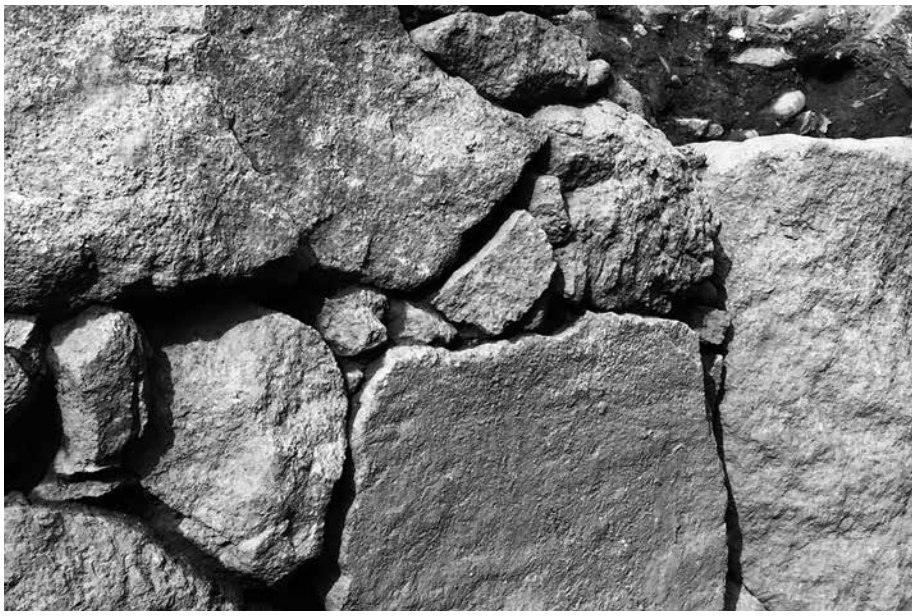


3．遺構199（竹矢町通）
初期路面（北から）

図版6



1．遺構 201（屋敷境の石垣）
全景（北東から）



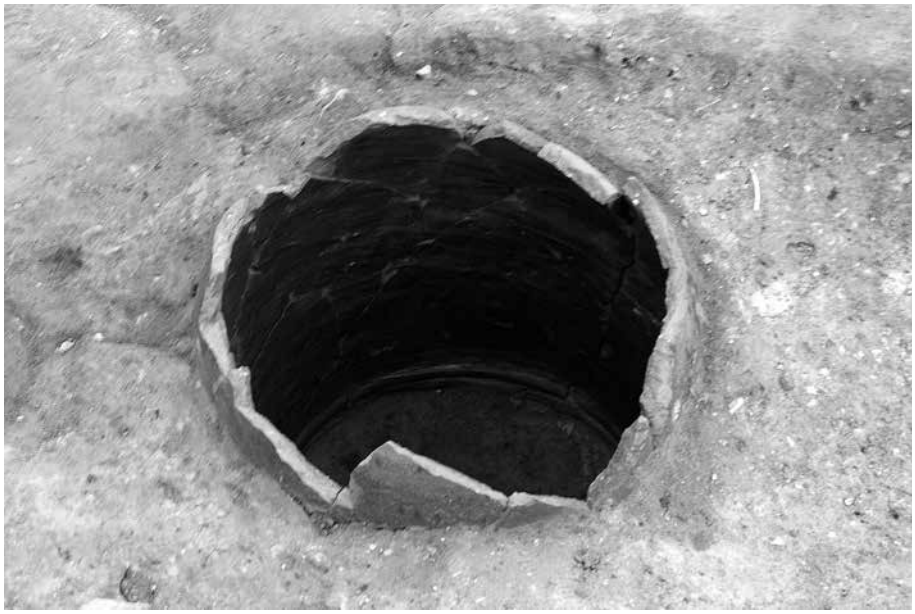
2．遺構 201（屋敷境の石垣）
細部（北東から）

3．遺構 201 断割部①
（北東から）左

4．遺構 201 断割部②
（北西から）右

1．遺構 202 瓦列検出状況
（北から）

2．遺構 39 完掘状況
（西から）

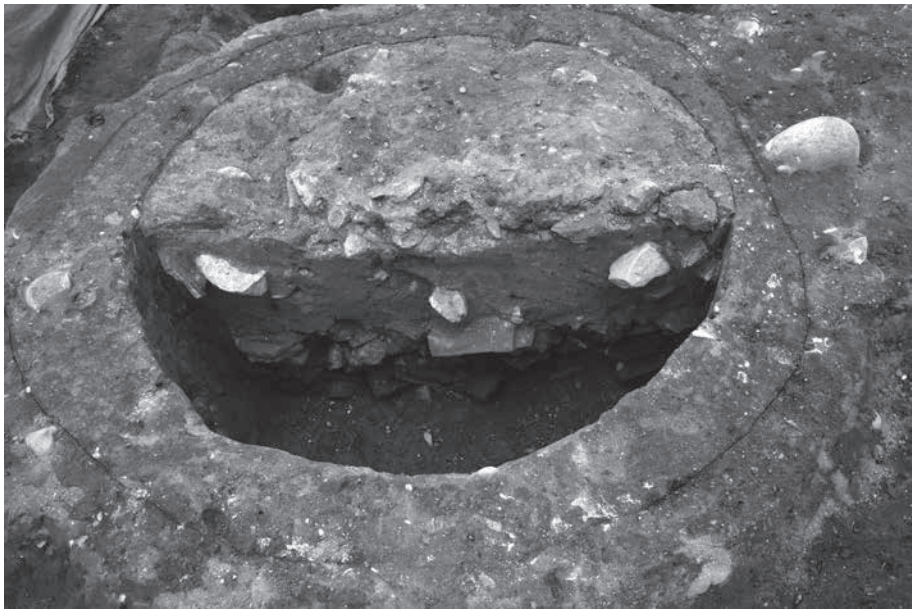


3．遺構 27 完掘状況
（東から）

図版8

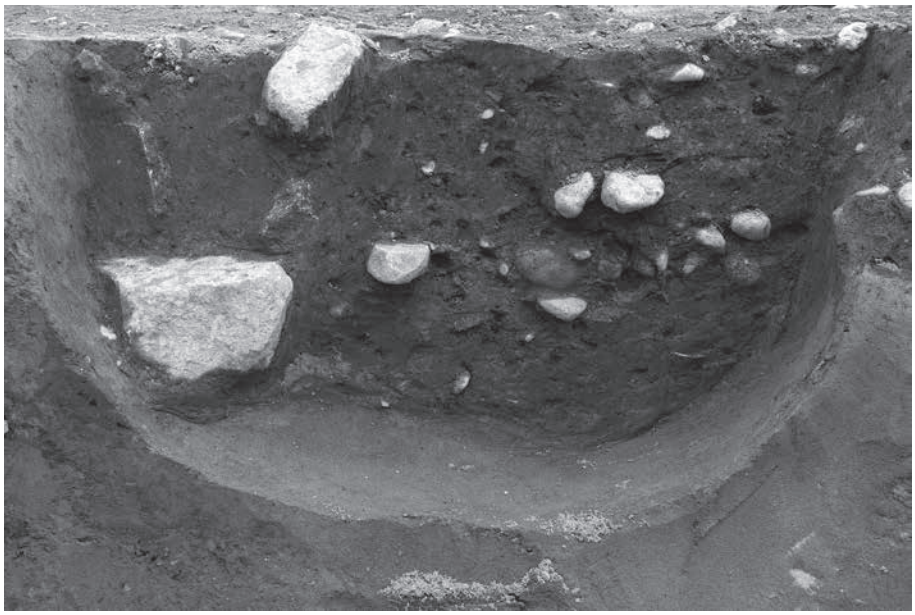
1．遺構 166 完掘状況
（東から）

2．遺構 41 断面
（西から）



3．遺構 5 断面
（東から）

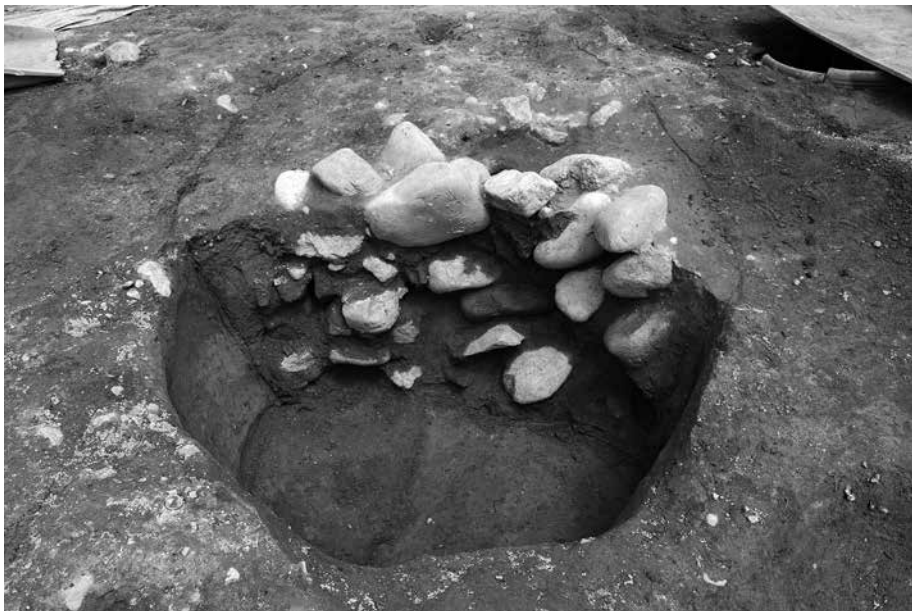
1．遺構 134 断面
（西から）



2．遺構 183 断面
（南から）

3．遺構 176 検出状況
（西から）

図版10



1．遺構 82 断面
（西から）

2．遺構 42 断面
（北西から）

3．遺構 52 全景
（上空から）

1．遺構 5000 全景
（南から）

2．遺構 5000 昇降部
（南から）

3．遺構 5000 レンガ敷き状況
（北西から）

図版12

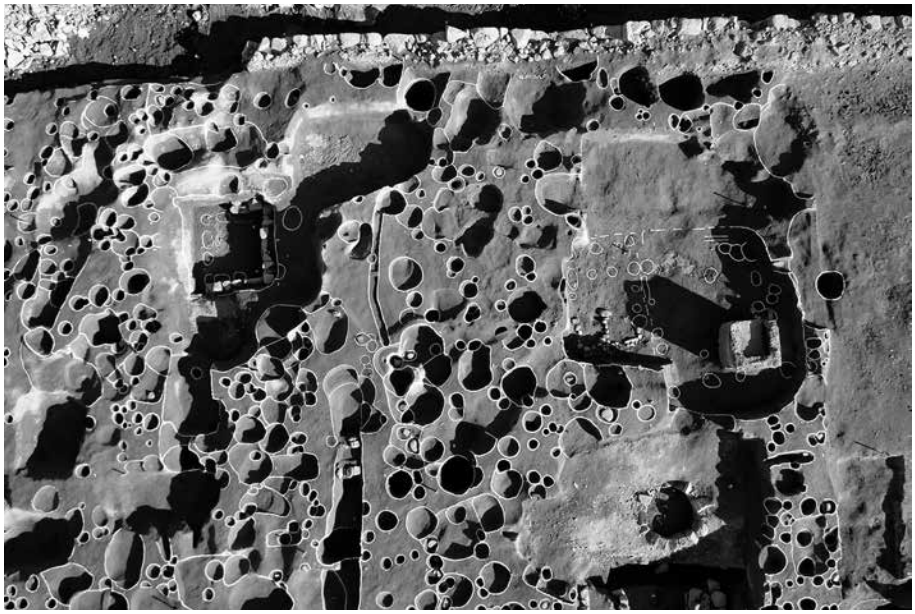
1．遺構 205 全景
（東から）

2．遺構 205 全景
（北から）

3．遺構 205 断割状況
（西から）

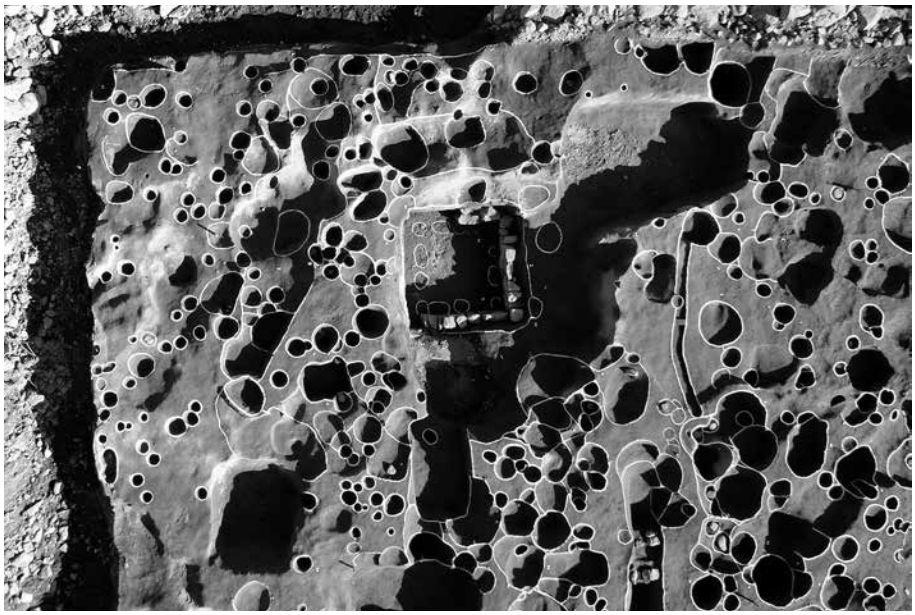
1．①区第２遺構面全景
（上空から）

2．①区第２遺構面中央部
（上空から）

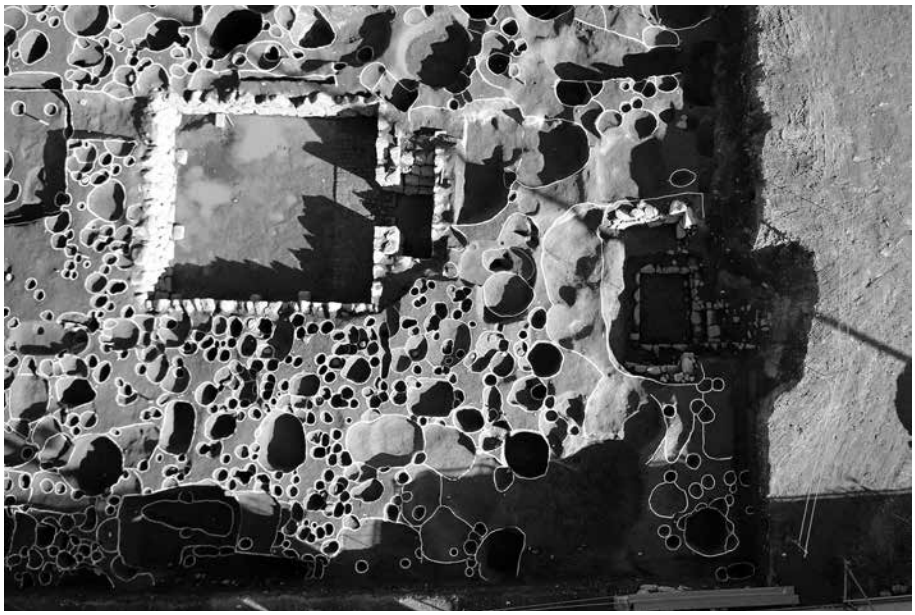


3．①区第２遺構面北東部
（上空から）

図版14



1．①区第２遺構面北西部
（上空から）



2．①区第２遺構面南東部
（上空から）

3．①区第２遺構面南西部
（上空から）

1．②区第２遺構面全景
（西から）

2．②区第２遺構面西半部
（東から）

図版16

1．遺構 300 A・B・C室
全景（南から）

2．遺構 300 A室貼壁・
貼床状況（南から）

3．遺構 300 A室西壁
（東から）

1．遺構 300 A室東壁
（西から）

2．遺構 300 C室完堀状況
（南から）

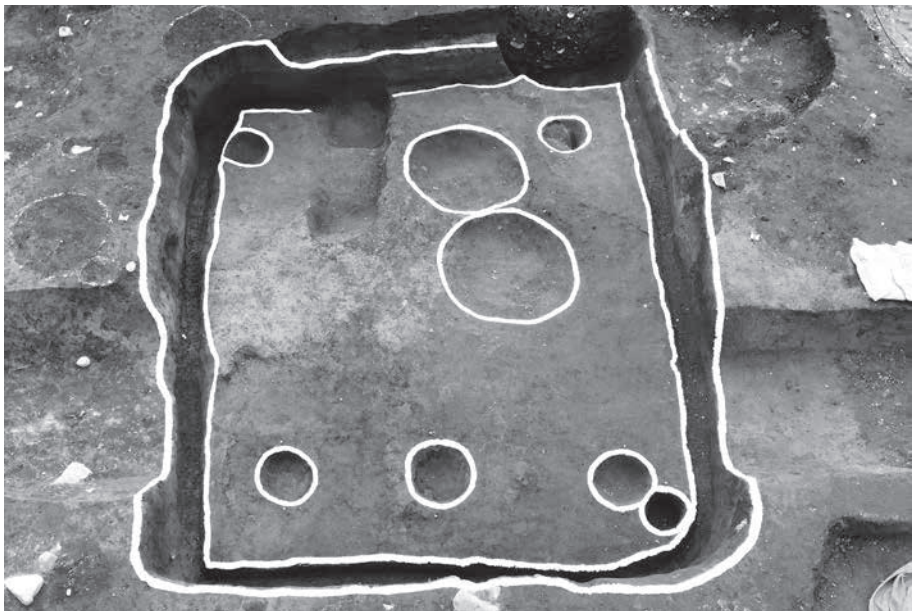
3．遺構 300 C室内
遺構 3140 銭出土状況
（南から）

図版18

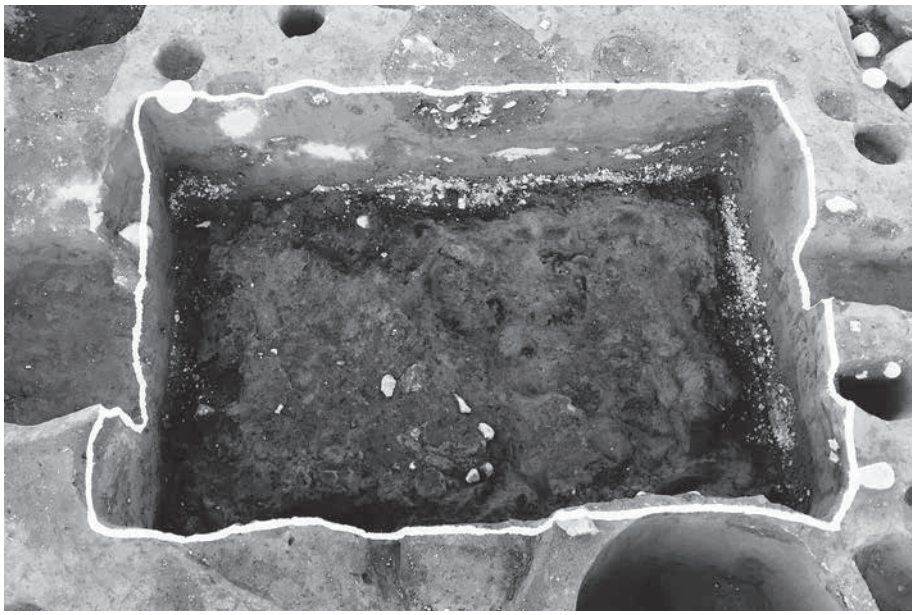
1．遺構 414 全景
（北西から）

2．遺構 414 石積状況
（北東から）

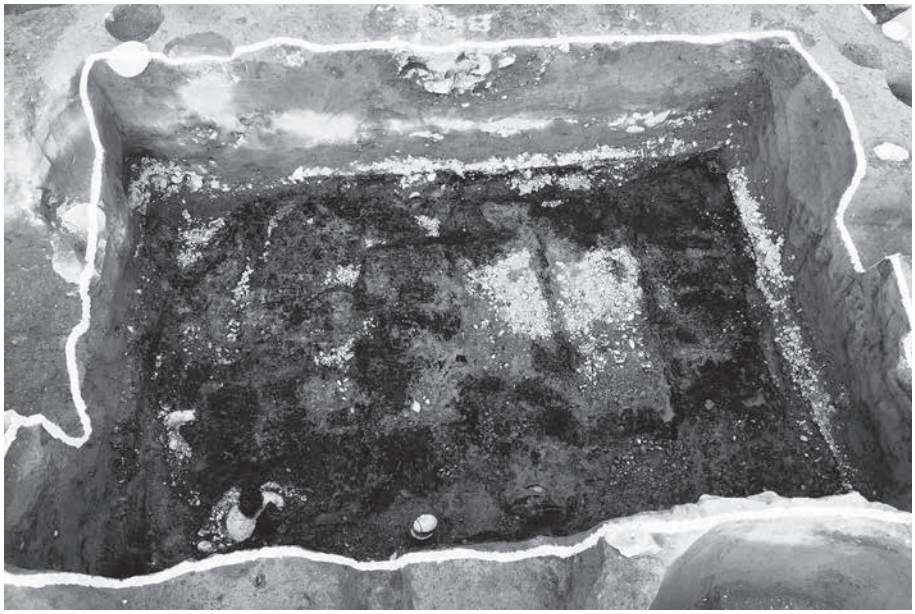
3．遺構 416 石列状況
（南から）



1．遺構 690 全景
（南から）



2．遺構 760 焼土面検出状況
（北から）



3．遺構 760 炭化材検出状況
（北から）

図版20

1．遺構 600 全景
（東から）

2．遺構 1200・1324 全景
（南西から）

3．遺構 1620 全景
（北から）

1．遺構 1-62 全景
（南東から）

2．遺構 1700 全景
（南西から）

3．遺構 1700 北側石積状況
（南から）

図版22

1．遺構 4001 全景
（西から）

2．遺構 4001 A・B室
（南から）

3．遺構 4001 西壁石積状況
（東から）

1．遺構 4001 A室
北壁石積状況（南から）

2．遺構 4001 A・B室全景
（南から）

3．遺構 4001 A・B室全景
（北から）

図版24

1．遺構 4003 全景
（西から）

2．遺構 4003 全景
（南西から）

3．遺構 4003 A室
南側石積状況（北から）

1．遺構 4003 A室
北・東壁石積状況（西から）

2．遺構 4004 A室全景
（南東から）

3．遺構 4004 A室
東壁石積状況（西から）

1．遺構 4009 A・B室全景
（北から）

2．遺構 4009 A室床面検出
状況（南から）

3．遺構 4005 A室全景
（南から）

1．遺構 4005 床面検出状況（南から）

2．遺構 4031 炭化材検出状況（南から）

3．遺構 4031 土器出土状況（南から）

1．遺構 4031 完掘状況
（南から）

2．遺構 4027 全景
（北から）

3．遺構 4027 B室石積状況
（北から）

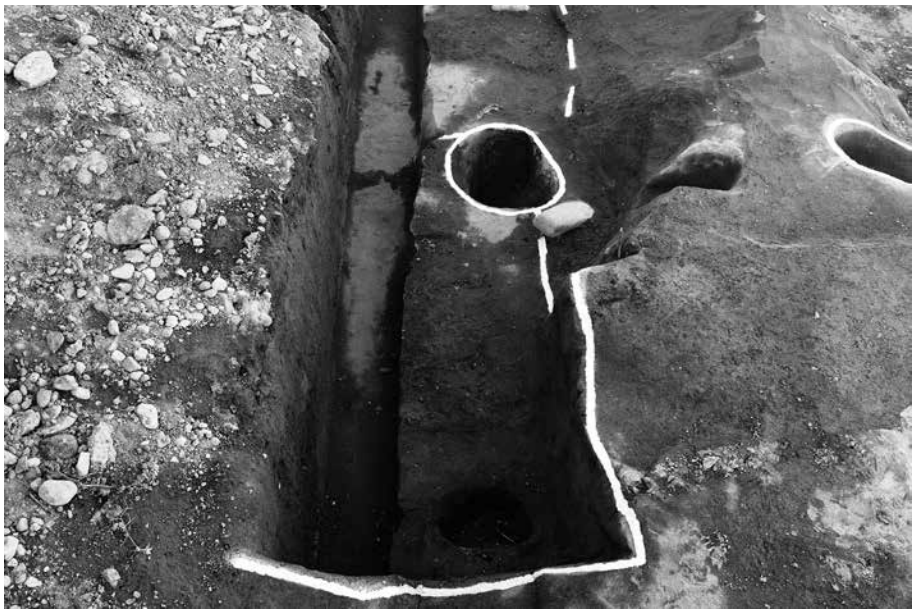
1．遺構 4028 全景
（北から）

2．遺構 4028 昇降部
石積状況（北から）

3．遺構 4019 全景
（南から）

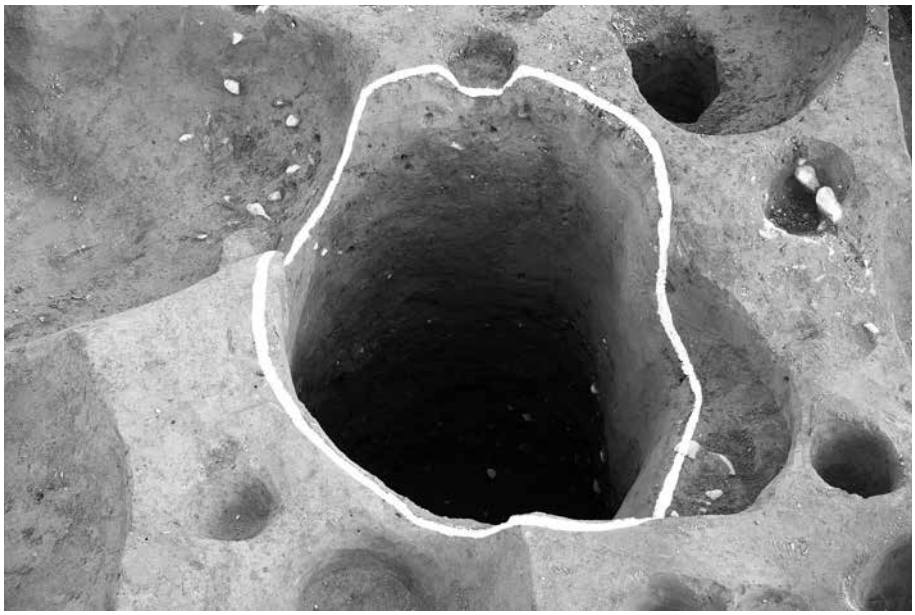
図版30

1．遺構 4035 全景
（西から）



2．遺構 3100 全景
（南から）

3．遺構 3100 断面全景
（北西から）



1．遺構 1339
（北から）

2．遺構 994 断面
（北から）

3．遺構 1729 断面
（北から）

図版32

1．遺構 900 断面
（北から）

2．遺構 715 断面
（南から）

3．遺構 1768 断面
（南から）

1．遺構 427 断面
（東から）

2．遺構 661 断面
（北から）

3．遺構 654 断面
（東から）

図版34

1．遺構 863 断面
（北から）

2．遺構 867 断面
（西から）

3．遺構 570 断面
（東から）

1．遺構 4034
（北西から）

2．遺構 4002
（北から）

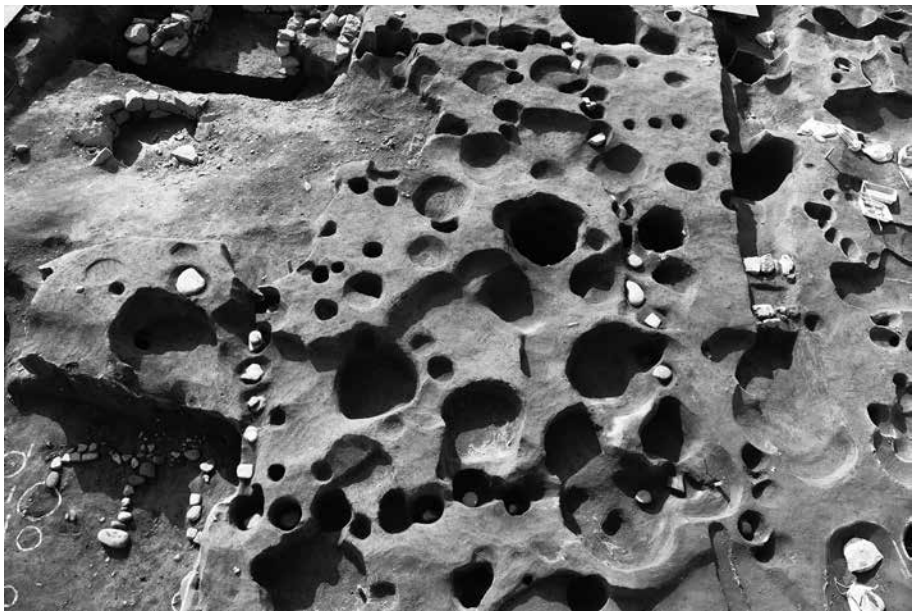
3．遺構 4030
（北から）

図版36

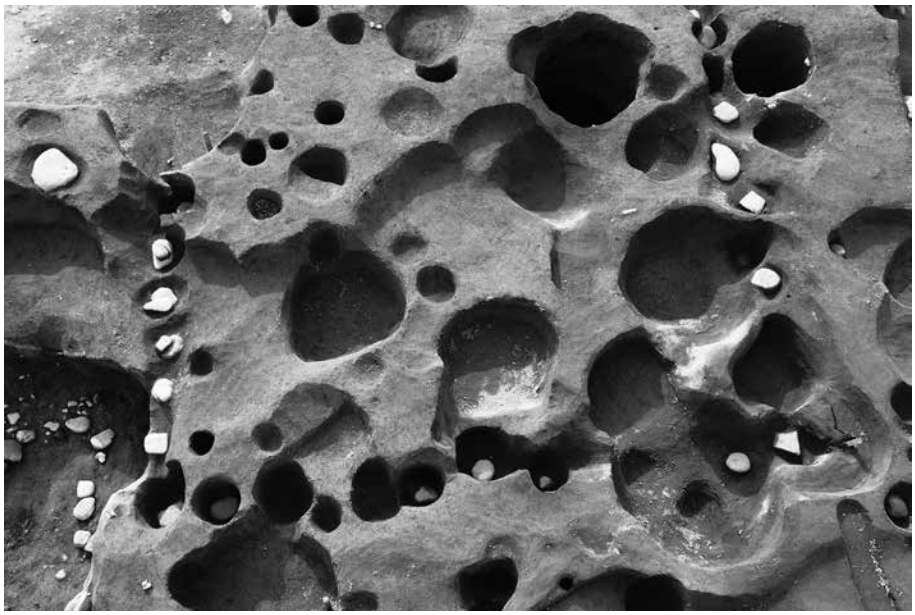
1．遺構 4000
（北西から）

2．遺構 4000
（北から）

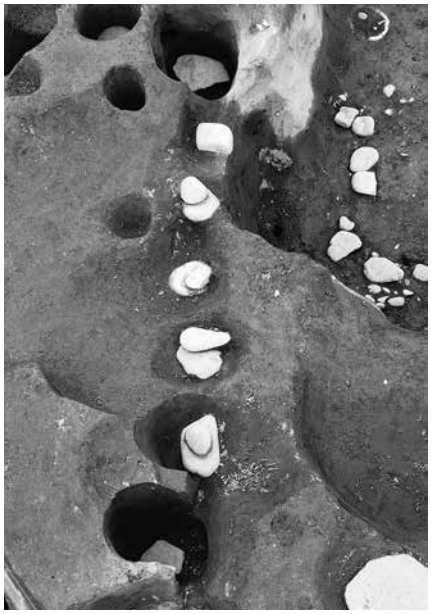
3．遺構 4000
（南から）



1．掘立柱建物１
（北から）

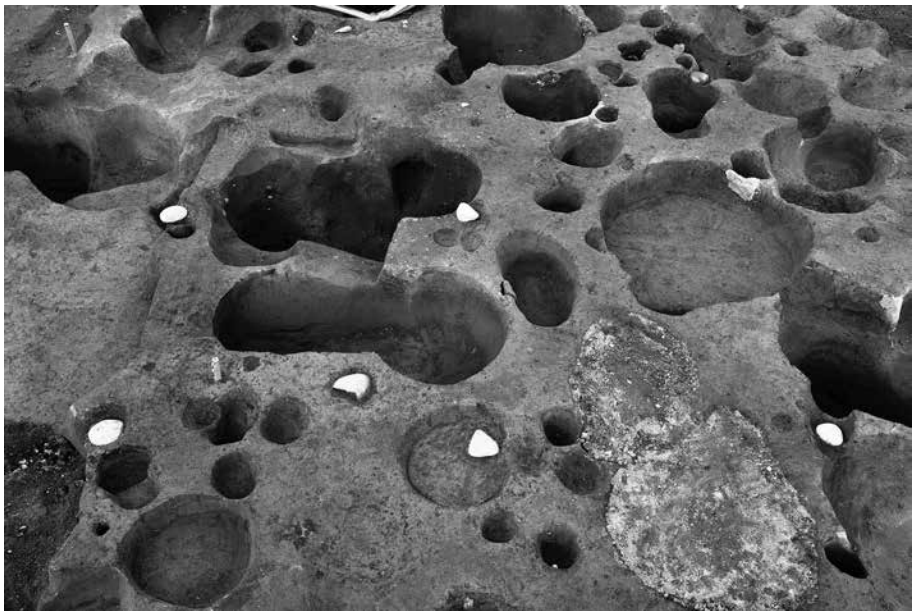


2．掘立柱建物１北辺部
（北から）

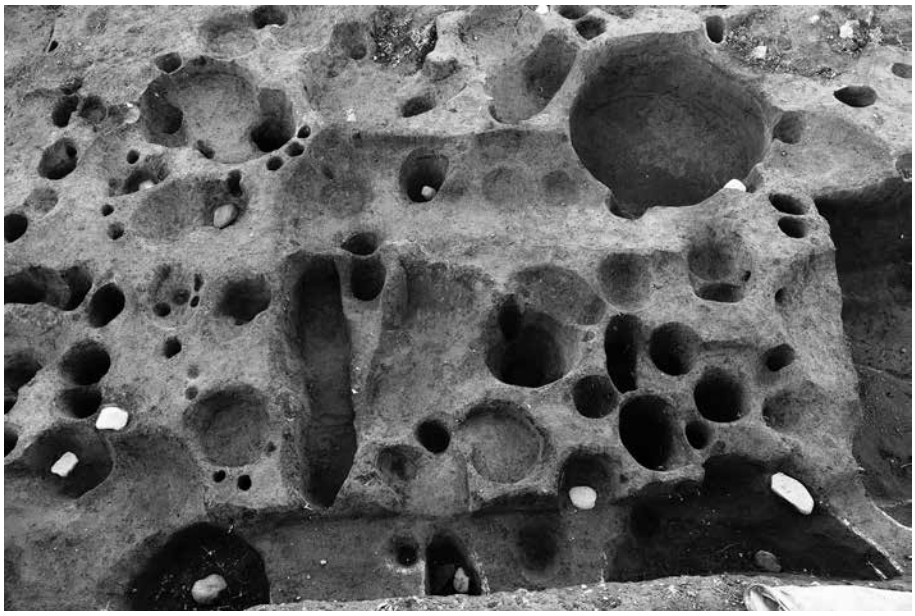


3．掘立柱建物１東側柱穴
（北から）左

4．掘立柱建物１西側柱穴
（北から）右



1．掘立柱建物２
（南から）



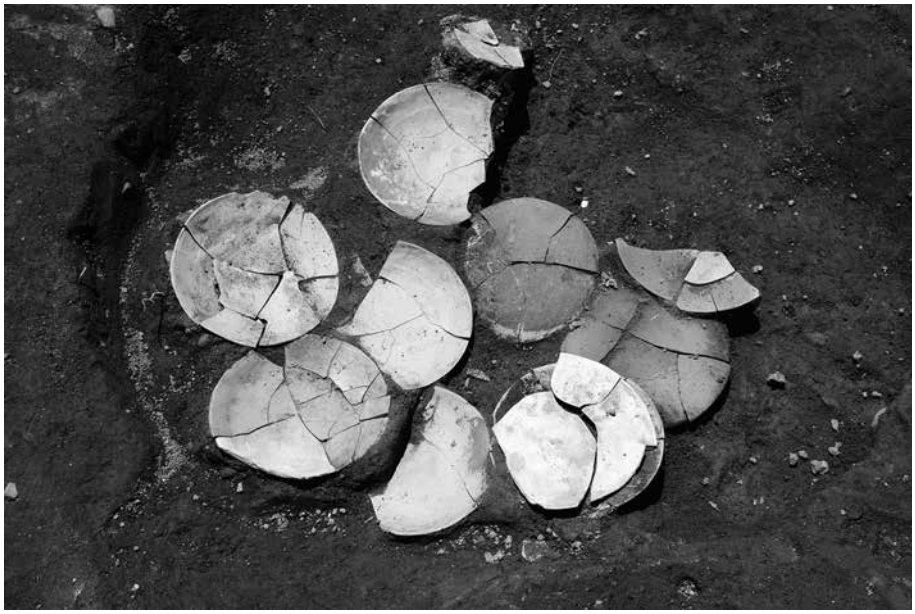
2．掘立柱建物３
（北から）

3．遺構 1034（掘立柱建物３内）
礎石検出状況（北から）左

4．遺構 1777（掘立柱建物３内）
礎石検出状況（南から）右

1．遺構 438 セクション
断面（西から）

2．遺構 1-54
（南東から）

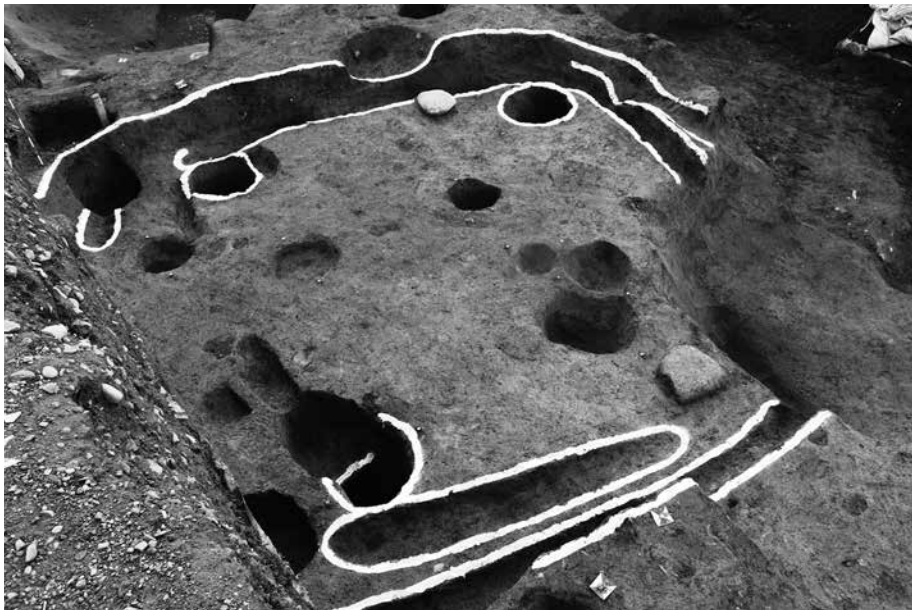


3．遺構 85 土器出土状況
（北から）

図版40

1．遺構 3075 土器出土状況
（東から）

2．遺構 634 焼土・炭検出
状況（南東から）



3．遺構 634 全景
（南東から）

1．第３遺構面縄文遺構
全景（南から）

2．遺構 1-J001
（北から）

3．遺構 1-J006
（南西から）

図版42

5

6

15

21

16

23

24

25

29

図版43

30

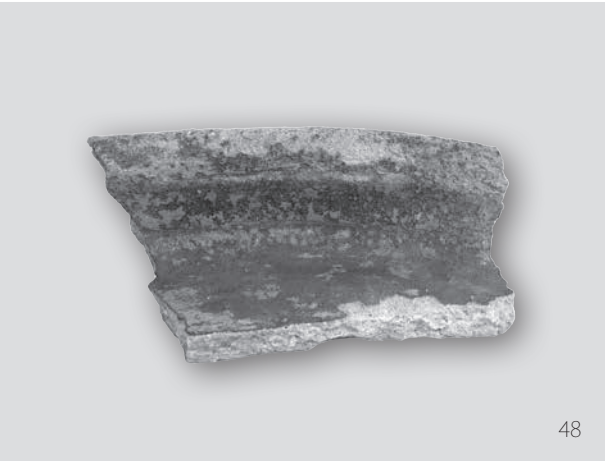
31

32

43

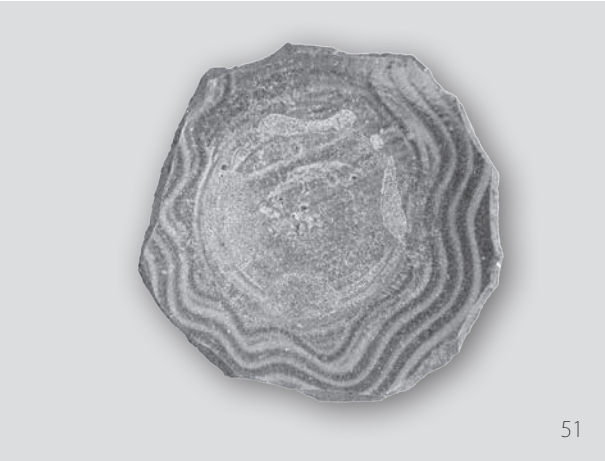
45

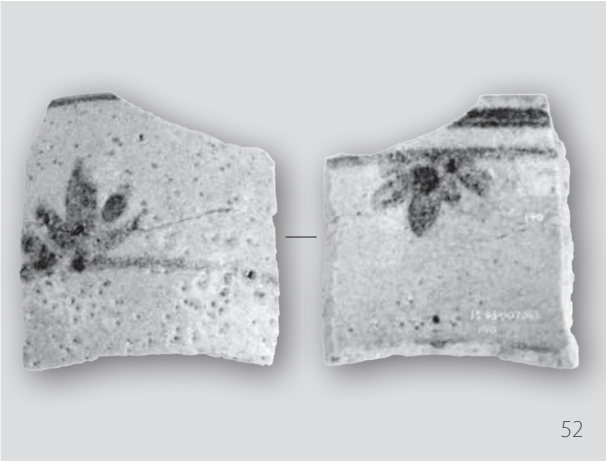
49

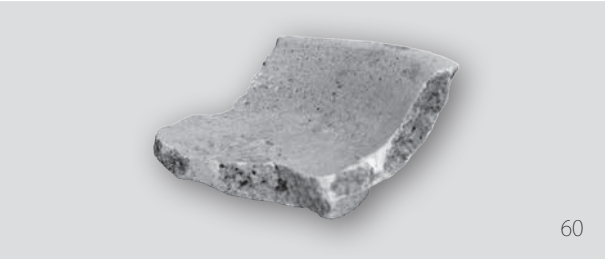

48

50

図版44


51

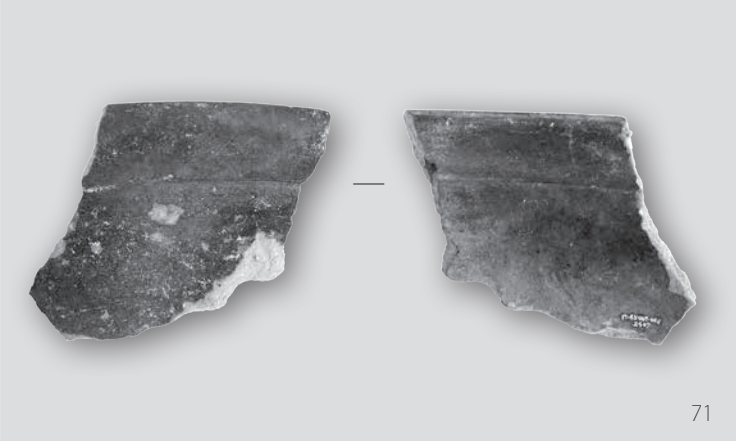

52


60

62

64

70


71

75

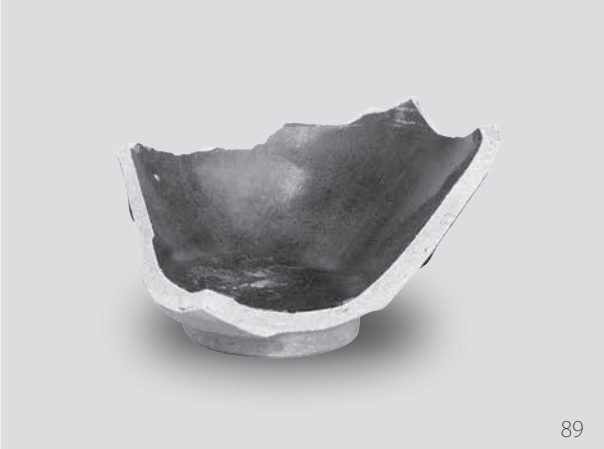
76

80

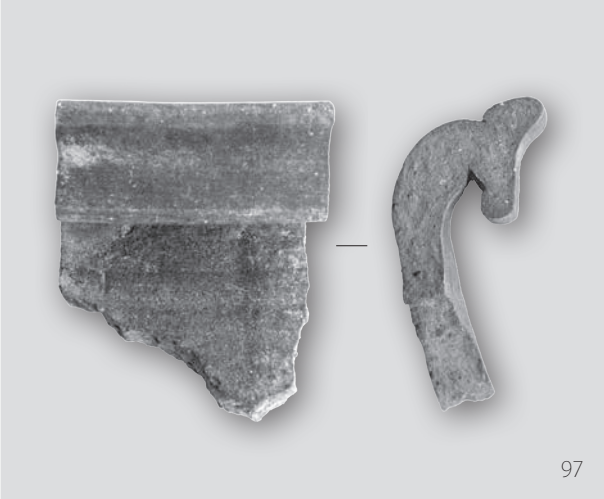
81

86

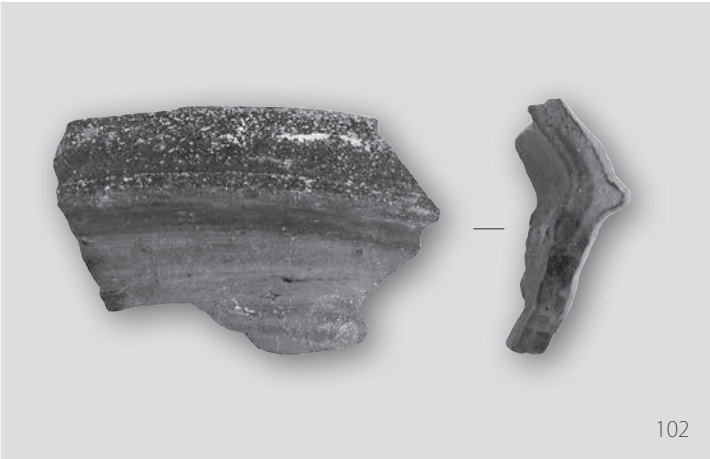
87


89

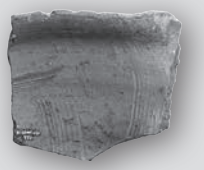
98

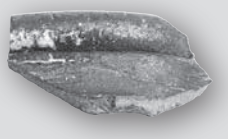

97

101


102

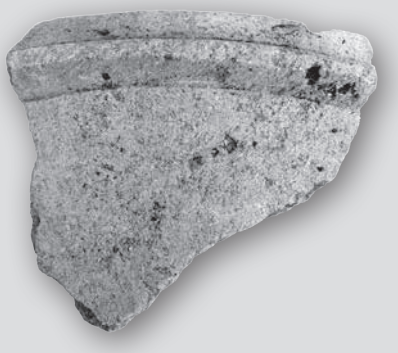
図版46

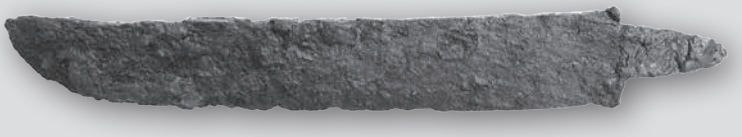

107

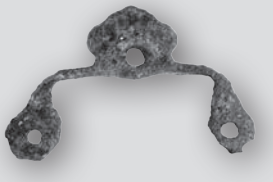

108

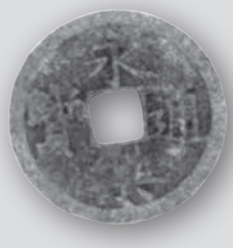
109

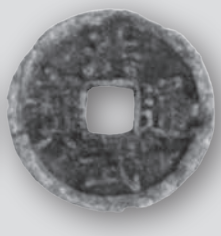
110

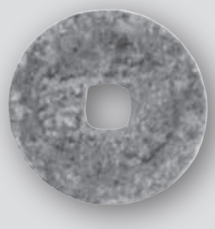

119

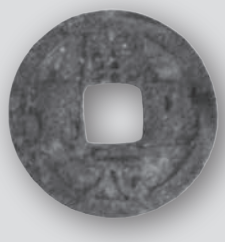

120

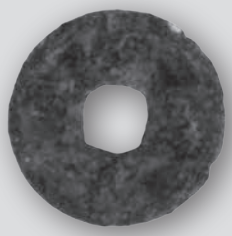

121

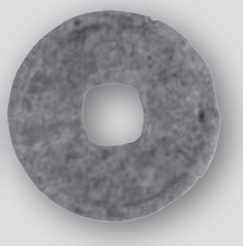

129

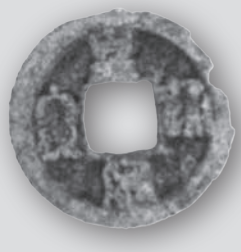

130

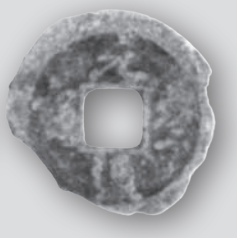

131

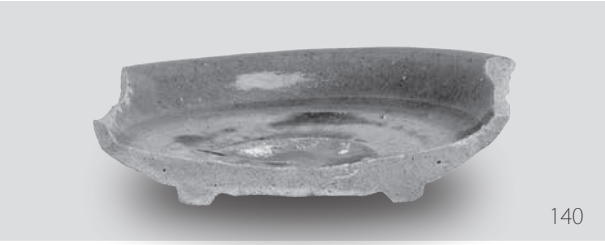

132

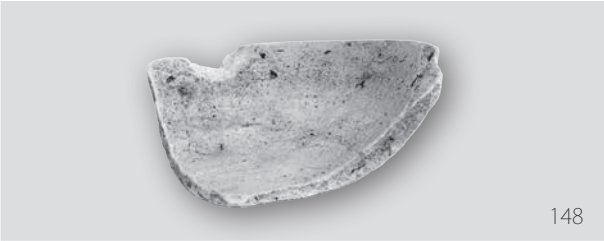

133

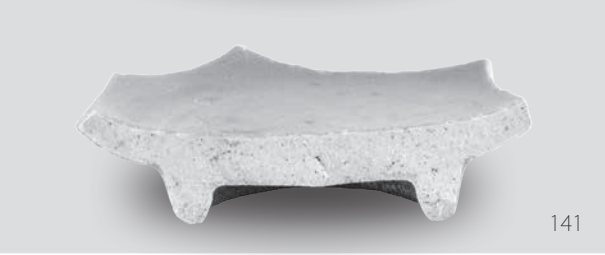

134


135


137

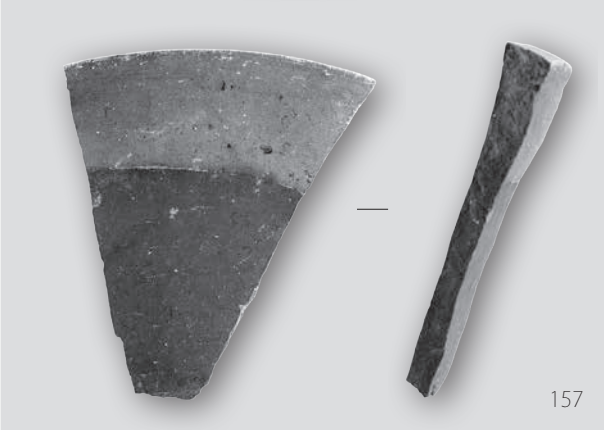

140

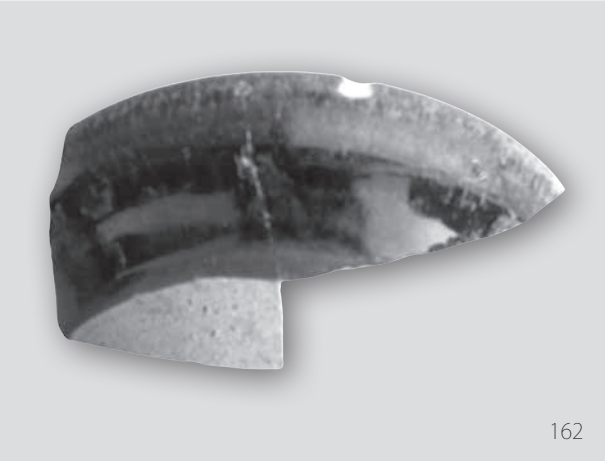

148


141

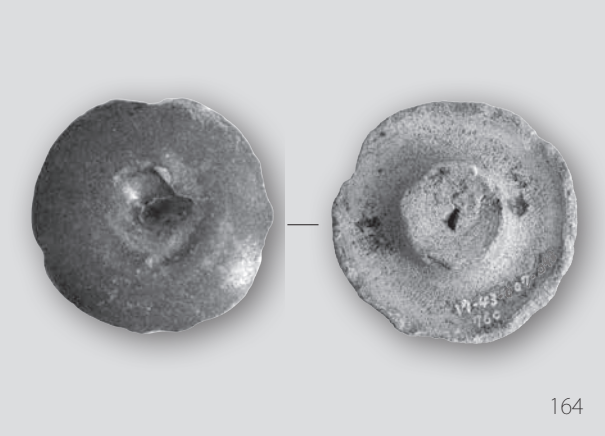
151

152


157

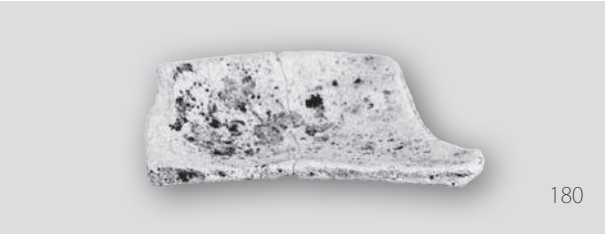

162

169

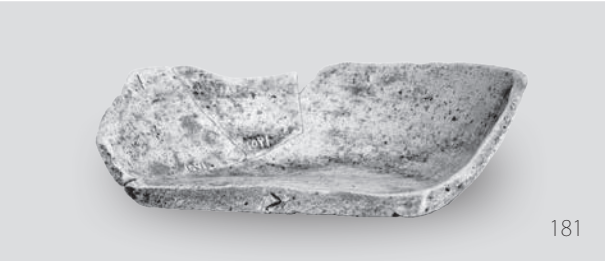

164

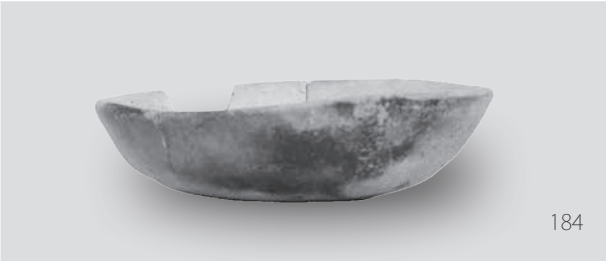
178

図版48

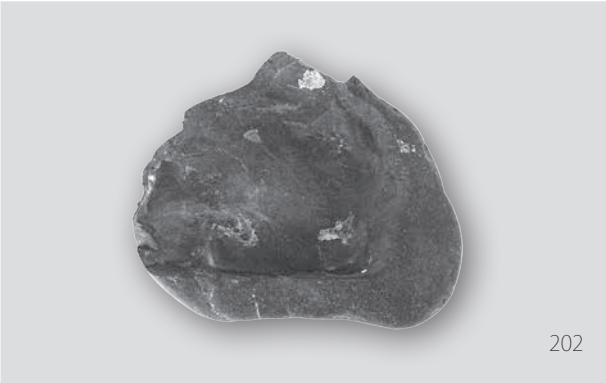

180

183


181


184

200


202

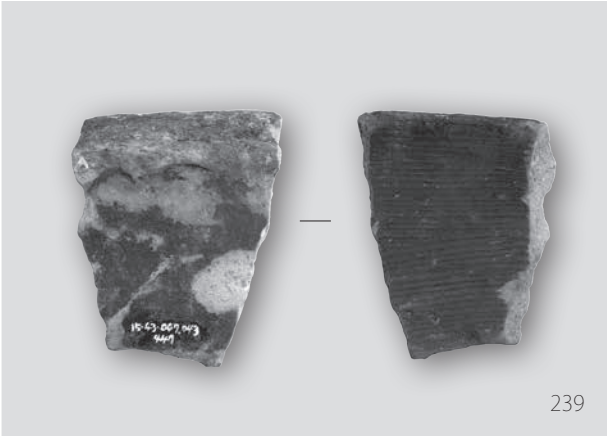
203

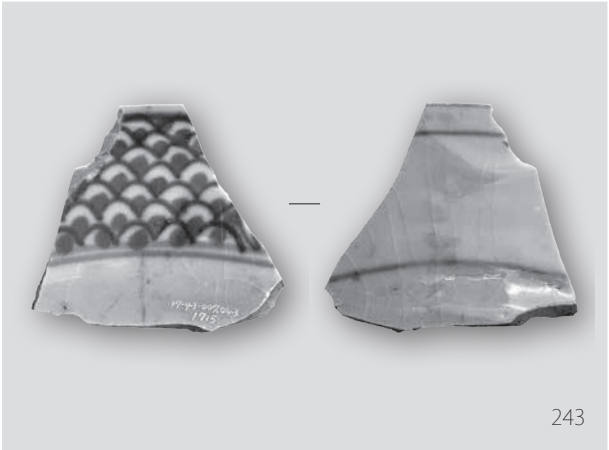
226

223

229

238


239


243

247

248

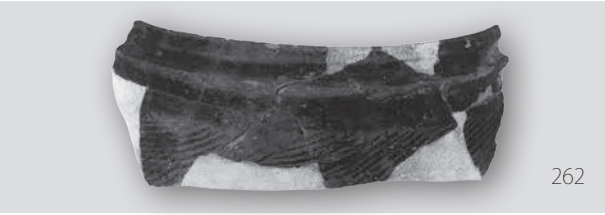
249

256

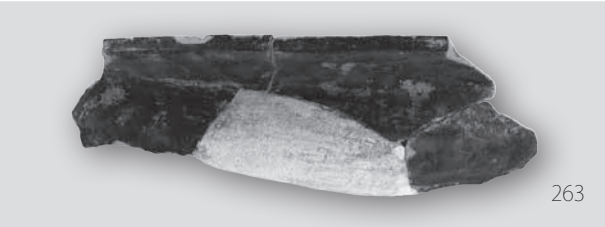
253

260

図版50


262

276

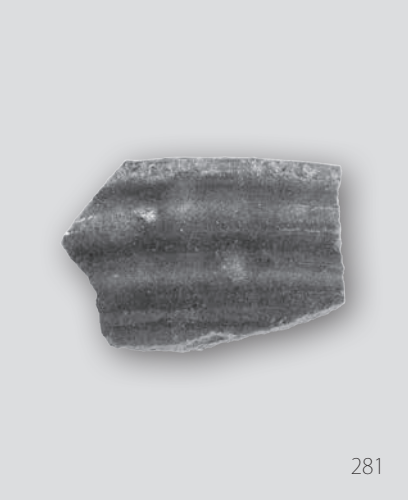

263

279

280

278

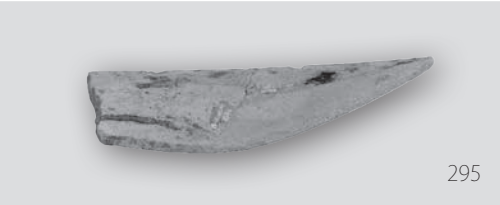
282

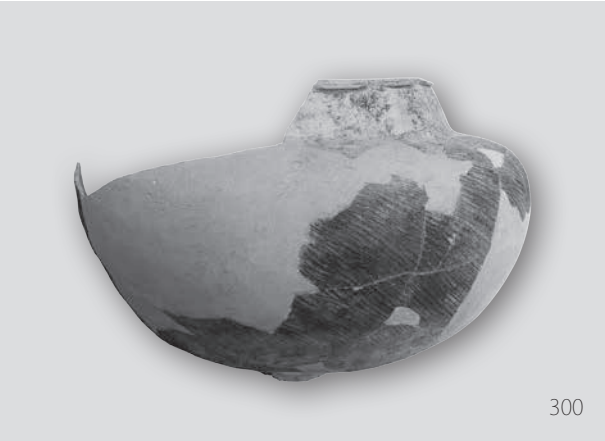

281

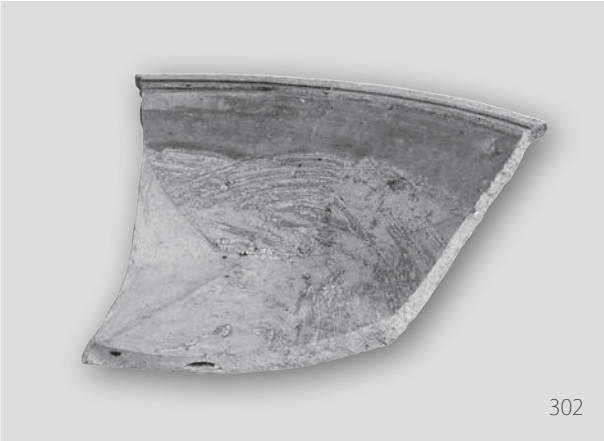
287

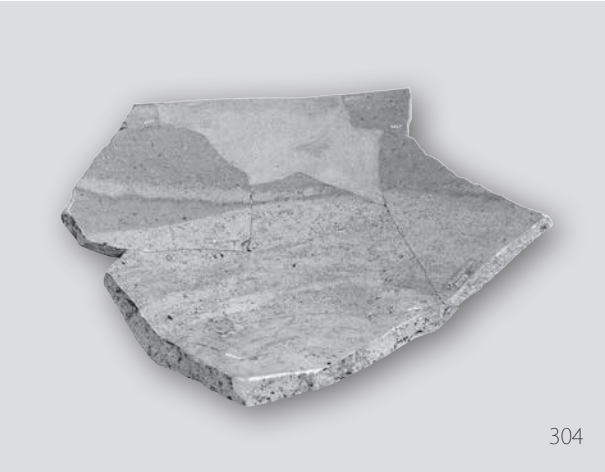
289

293


295


300


302

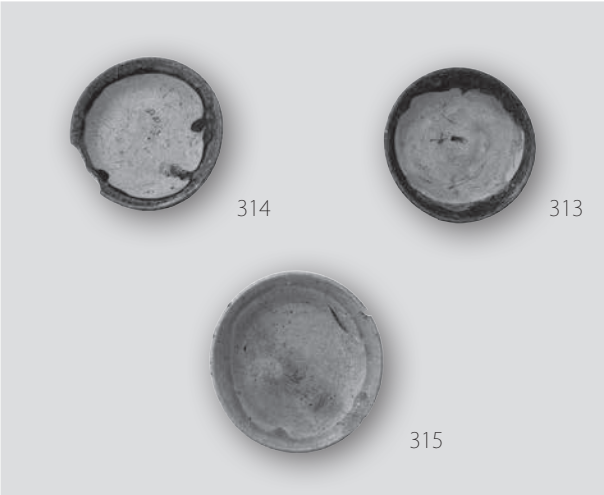

304

305

309

311

312

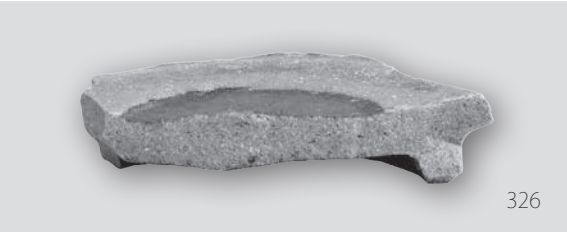

314 313 315

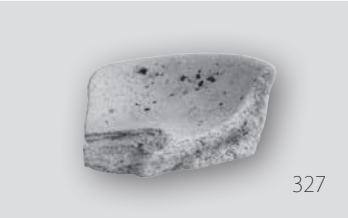
図版52

316

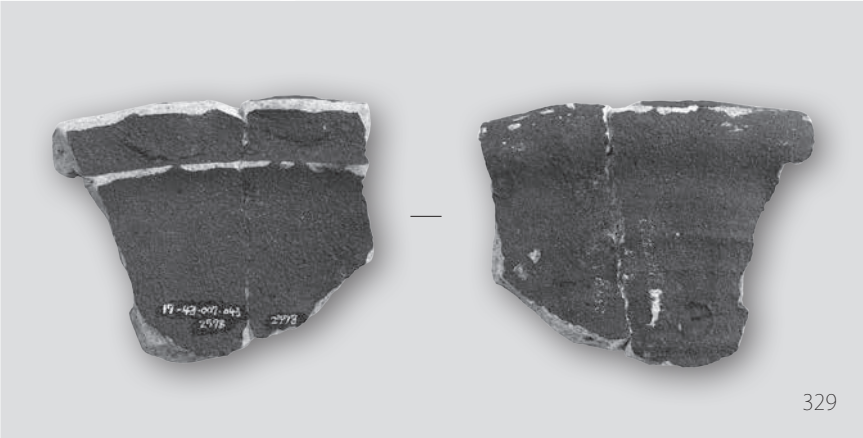
317

320

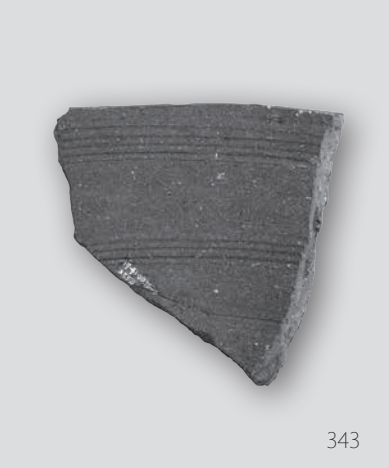

326

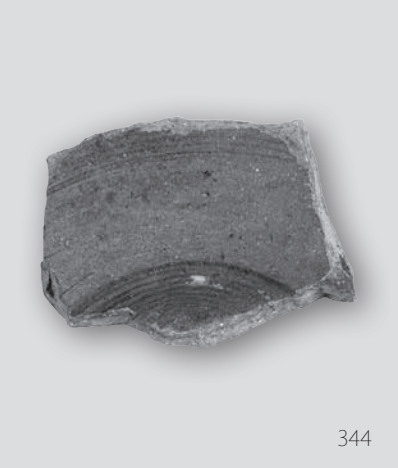

327

328


329

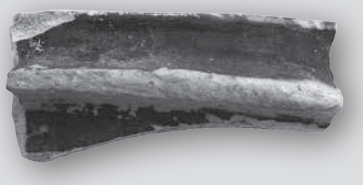
342


343

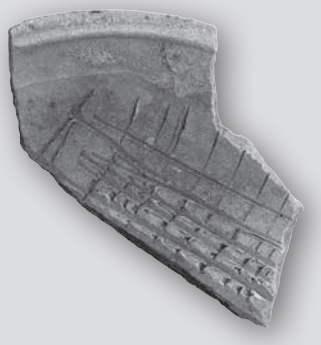

344

345

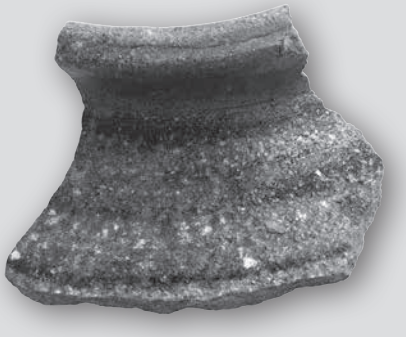
346


352

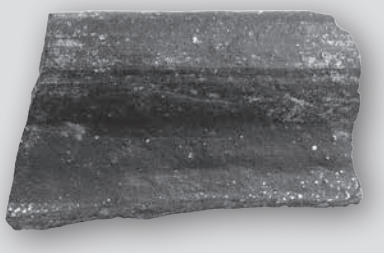
353

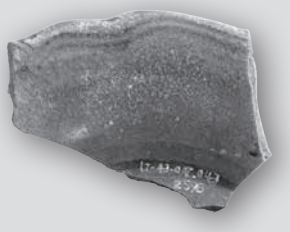

356

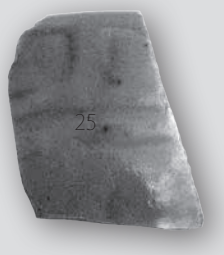
357


358

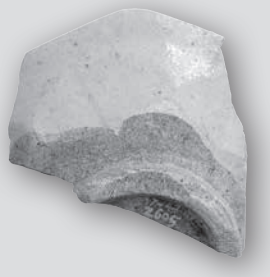
359


360

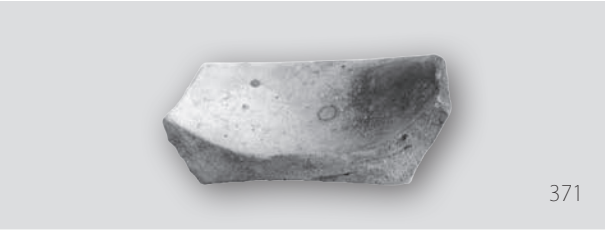

362



365


368

図版54


371

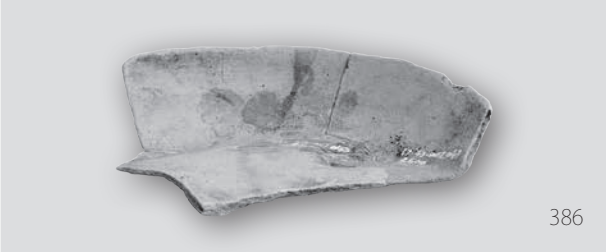
373

379

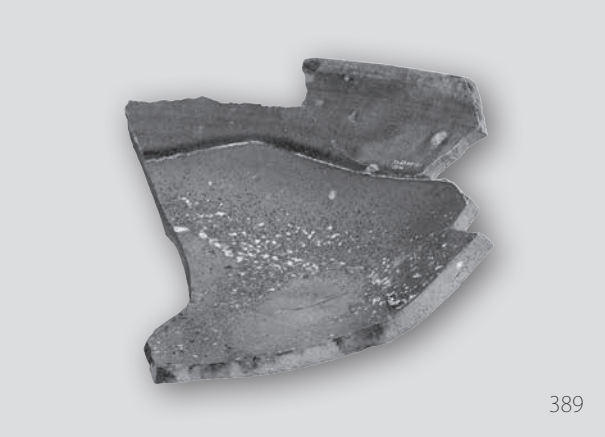
380

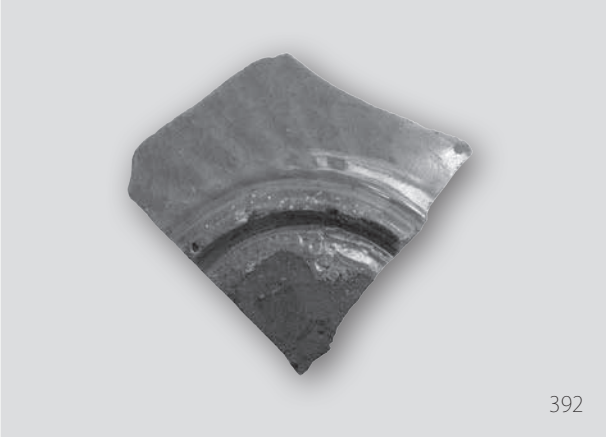
382

384


386

387


389

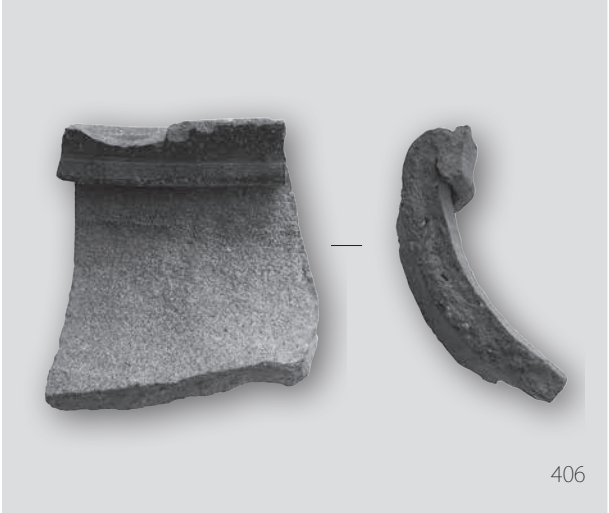

392

397

399

403

404


406

405

407

421

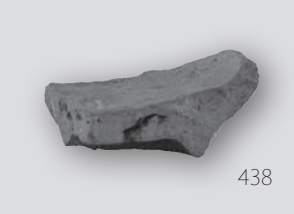
422

424

図版56

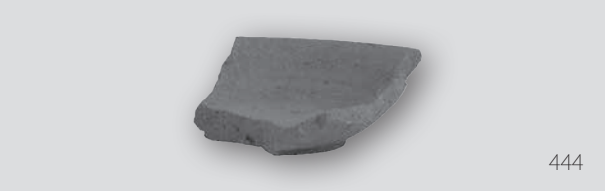
435

436


438

439

440


444

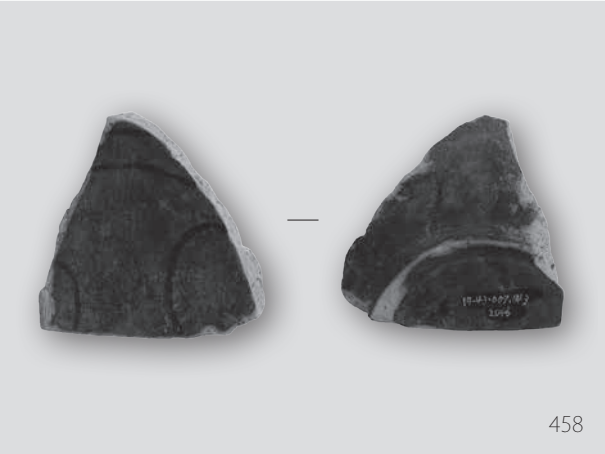
447

446

448

451

456


458

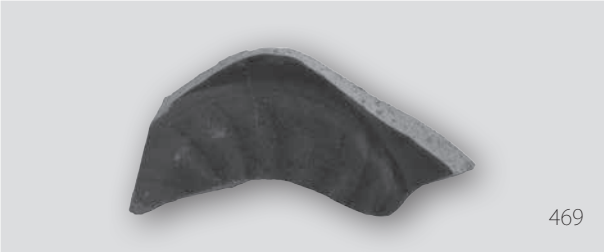
461

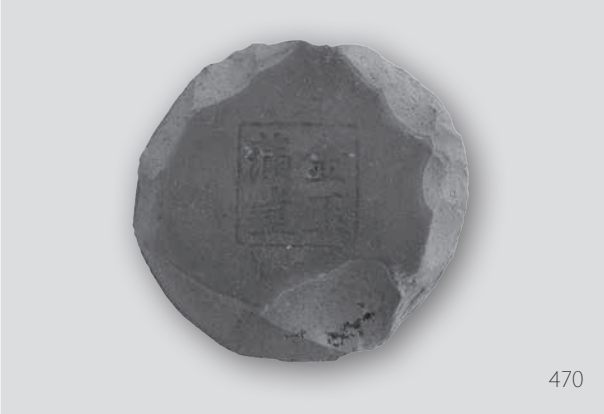
463

466

467

468


469


470

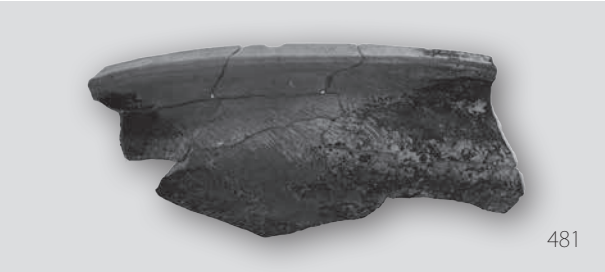
474

475

478

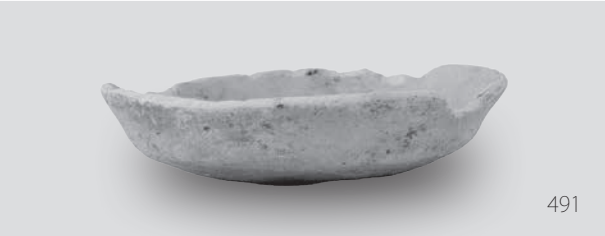
477

図版58


481

486

488


491

498

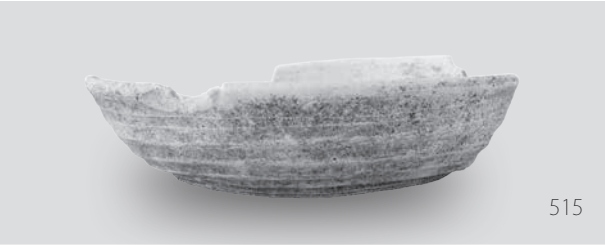
485

487

496

499

500


515

519

521

527

533

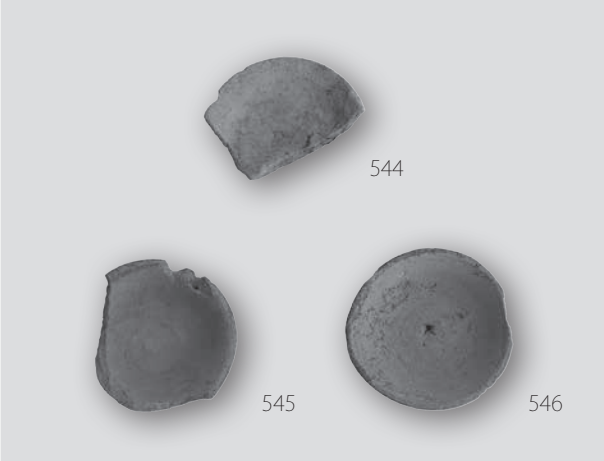
534

537

538

540

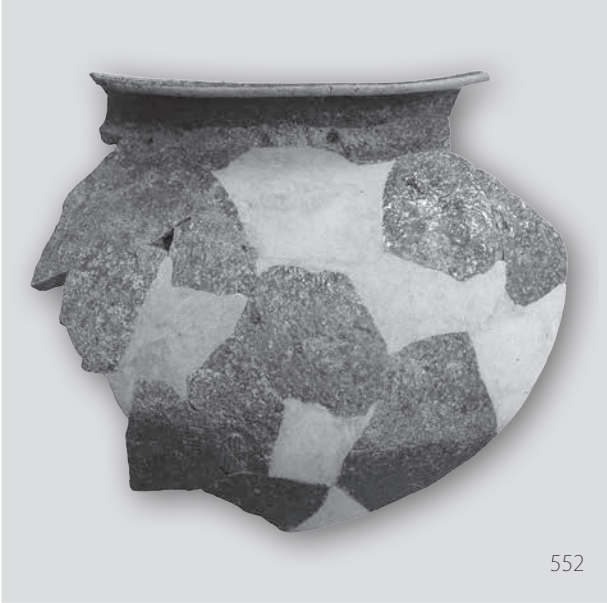
543


544
545
546

547

551

548


552

549

553

554

555

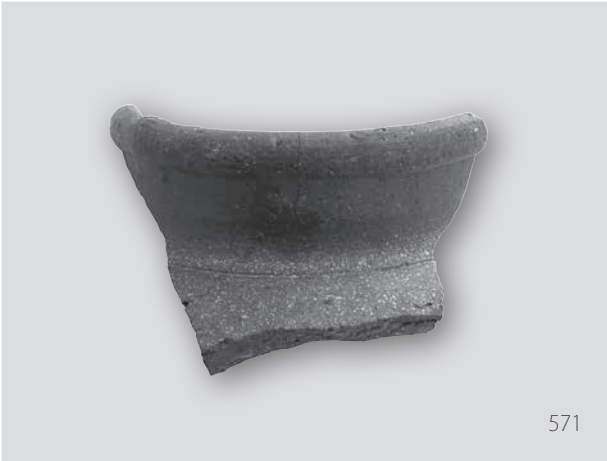
557

558

565

566

560

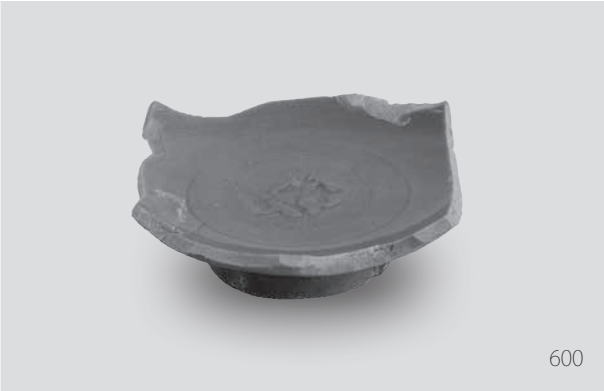

571

572

577

図版62

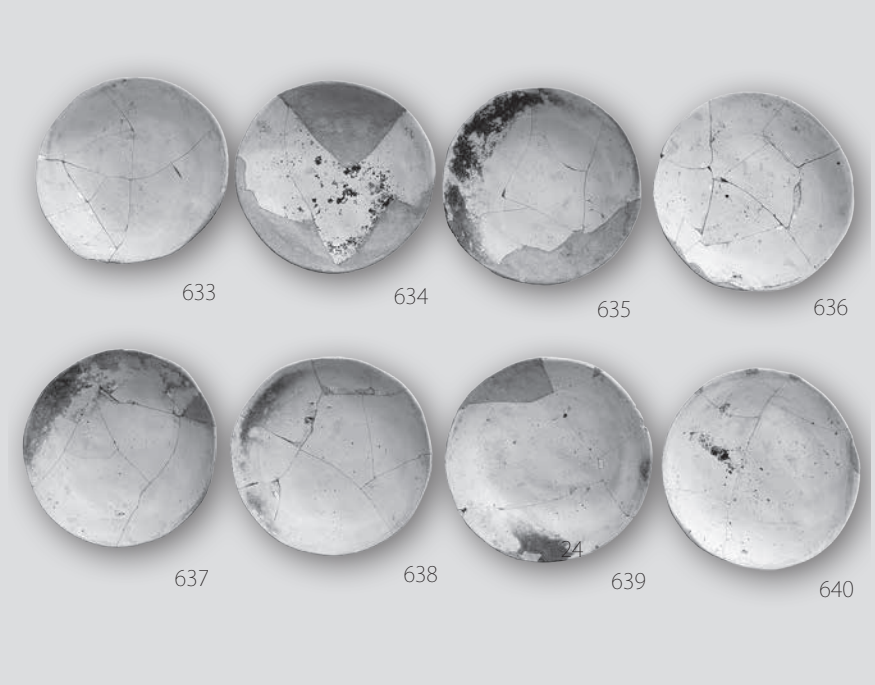
594


600

615

626

632


633 634 635 636 637 638 639 640

642

643

653

654

672

673

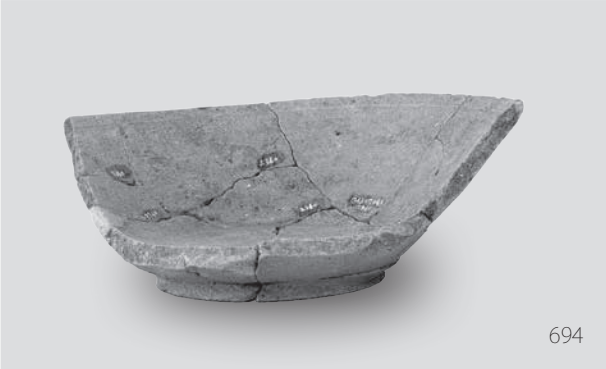
674

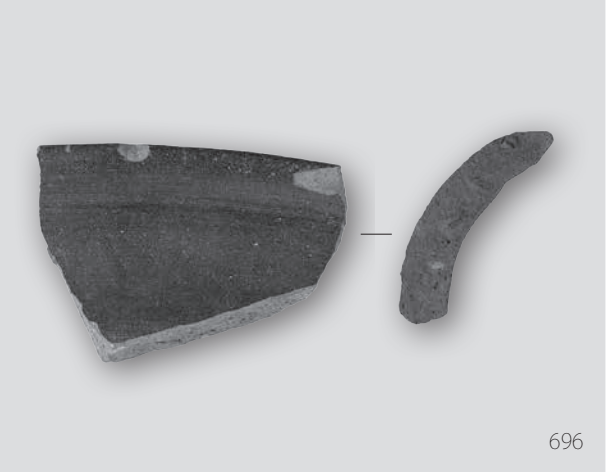
680

675

681

687

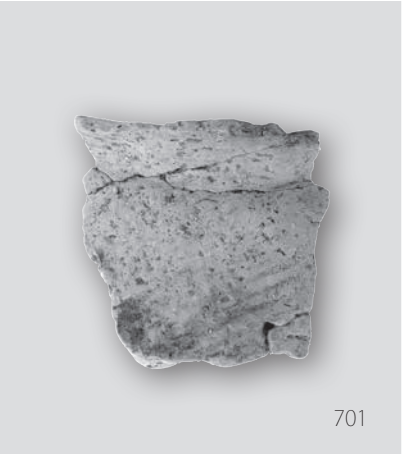

694


696

689

700

図版64


701

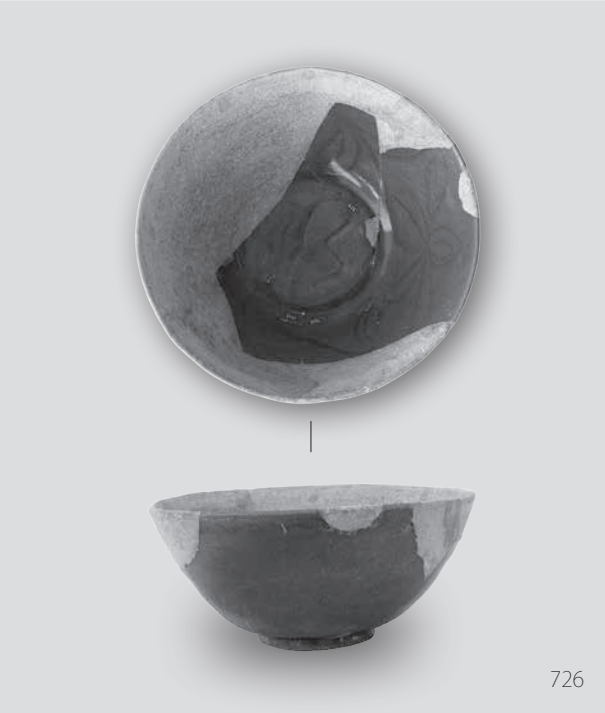
702

705

703

704

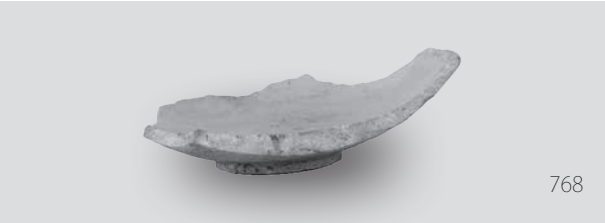
722

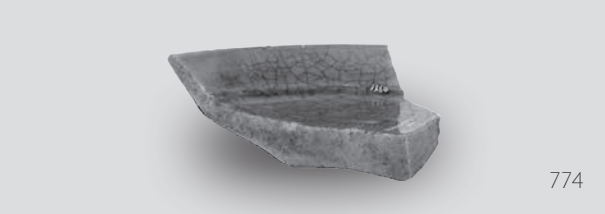

726

766

727

767

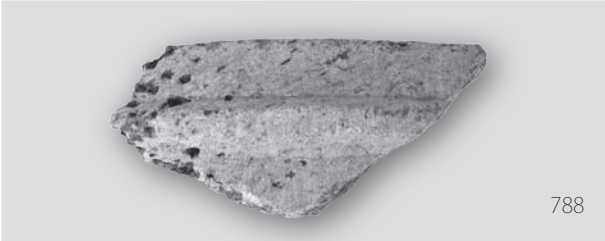

768


774

782

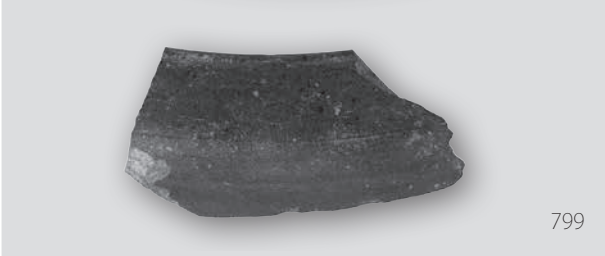
779

785


788

792

797


799

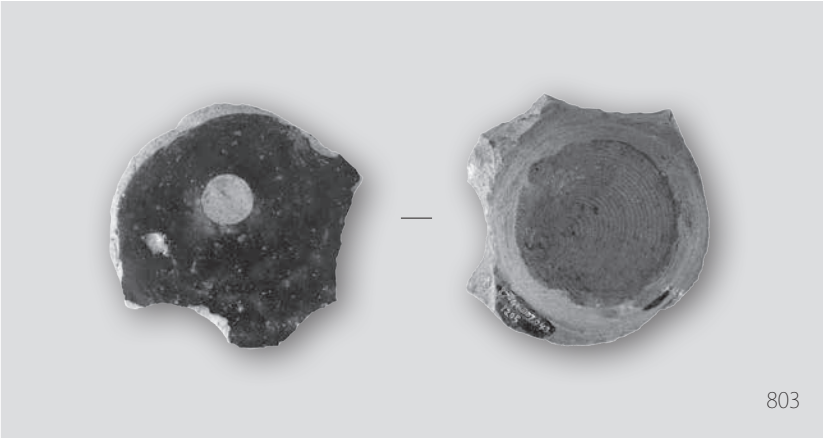
796

798

801

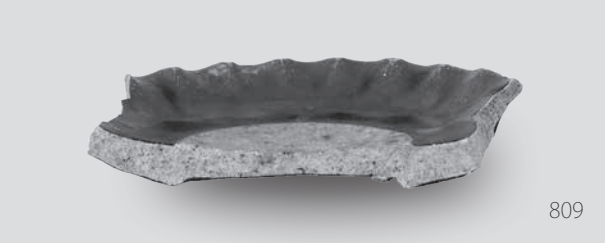
図版66

802

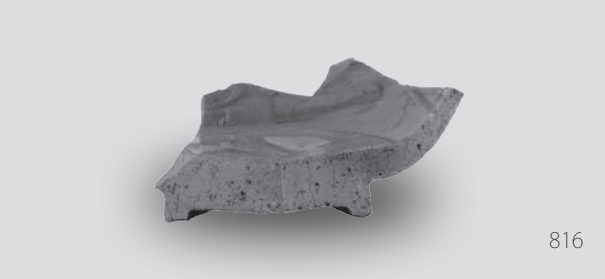

803

806

819


809

820


816

822

報告書抄録

ふりがな	しんぐうじょうかまちいせき
書名	新宮城下町遺跡
副書名	新宮市文化複合施設建設に伴う発掘調査報告書
巻次	―――
シリーズ名	―――
シリーズ番号	―――
編著者名	村田　弘
編集機関	公益財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640-8301　和歌山市岩橋1263番地の1　　TEL　073－472－3710
発行年月日	西暦2021年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しんぐうじょうかまちいせき 新宮城下町遺跡	わかやまけん 和歌山県 しんぐうし 新宮市 しもほんまち 下本町	30207	43	33° 43′ 51″	135° 59′ 21″	20180425 ～ 20190328	3,461㎡	文化複合施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新宮城下町遺跡	散布地	縄文時代	土坑	縄文土器	
		弥生時代末 ～ 古墳時代初め	竪穴建物・土坑	弥生土器	
		室町・鎌倉時代	地下式倉庫・大型土坑・掘立柱建物	山茶碗・土師器・国産陶器・輸入陶器・青磁・白磁・金属製品	中世の湊にかかる倉庫群を検出した。
		江戸時代 ～ 近代	石垣・石組階段・道・土坑・溝	国産陶器・輸入陶磁器・土師器・瓦質土器・石製品・瓦・金属製品	武家屋敷地を画する高さ1m、延長31mの石垣を検出した。

要約

近世の遺構としては、武家屋敷地を画する延長31mに及ぶ石垣を検出した。この石垣については、一部造り替えが認められるものの近世初頭の造作と考えられるものである。また近世の絵図に描かれた竹矢町通りを検出し、その道幅や側溝の有無など、当時の城下町の構造の一端を知る資料を得ることができた。

中世前期の遺構としては、径1m、深さ1.5mを越える土坑を数多く検出した。この具体的な用途について判然とし得なかったが、この遺構からは平安時代末～鎌倉時代にかけての渥美・常滑の壺、甕のほか渥美を主体とする山茶碗が多く出土している。

中世後期の遺構としては、貯蔵施設と考えられる地下式の倉庫を数多く検出した。これらは、湊に係る施設であったものと考えられる。この時期の出土遺物は多く、瀬戸を中心として常滑のほか備前の陶器、南伊勢の土師器の鍋や皿のほか、中国製の磁器についても一定量の出土が認められる。

なお、遺跡全体の消長としては、縄文時代中期から後期、弥生時代後期から古墳時代中期と続くものの、その後平安時代後期頃まで空白期が認められ、盛時は中世後半15世紀であったことなども判明した。

新宮城下町遺跡

－新宮市文化複合施設に伴う発掘調査報告書－

発行年月日：2021 年 3 月 31 日
編　集　：公益財団法人和歌山県文化財センター
発　行　：新宮市教育委員会
和歌山県新宮市春日 1 番 1 号
公益財団法人和歌山県文化財センター
和歌山県和歌山市岩橋 1263 番地の 1
印刷・製本：白光印刷株式会社
和歌山県和歌山市雑賀崎 2021-3